ドラえもん のび太の宇宙大決戦！！

はならむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラえもん　のび太の宇宙大決戦！！

【Ｎコード】
Ｎ５０６０Ｒ

【作者名】
はならむ

【あらすじ】
ある日、のび太はスネ夫達の宇宙旅行の仲間にいれてもらえず、勢いから無謀すぎる宇宙旅行の実行を宣言してしまう。そしてひょんなことからのび太としずかはどこでもドアの強引ないじりすぎにより空間の歪みが発生し、二人はどこかへ飛ばされてしまう。
二人が飛ばされた場所は。なんと数々の銀河をまたにかけて悪事の限りを尽くす極悪宇宙人組織『アマリーリス』の宇宙船だった！

その頃、のび太達がその場所にいることを知ったドラえもん達はのび太を救出すべく、偶然裏山で知り合った宇宙の平和と秩序を守る正義の組織、『銀河連邦』の女性士官と共に、のび太達の救出及び、アマリーリス壊滅に協力することとなる。

◇解説1（前書き）

前に書いた小説があまりにも収集つかなくなったので再構成し、大長編風に仕立てました。
なので前と同じ設定や名称を引き継いでいるものや大幅変更されたものもあります。

これはこの小説の基礎知識です。
後々、他設定は書いていきたいと思います。

ちなみに漫画家、石川賢先生のような要素をふんだんに取り入れたいと思っています。さらにマイナーゲームに登場した名前や名称も出てくるので多少理解し難いかもしれませんがご了承下さい。

◇解説1

●設定●

・アマリーリス

数々の銀河をまたにかけて悪事の限りを尽くす極悪の宇宙人組織。巨大宇宙船エクセレクターを母艦とし、総司令官ラクリーマのもと、幾多の惑星を壊滅に追い込み、略奪、虐殺を行ってきた。組織員全員が極悪の荒くれ者同士であるが、仲間意識が非常に高い。これもアマリーリスの掟のおかげである

・銀河連邦

宇宙の秩序と平和を守る強大な連邦組織。様々な異星人が多数所属し、様々な部隊に分かれている。アマリーリスを第一級指名手配している。ドラえもん側の味方であるエミリアとミルフィは地球を含む、銀河系周辺の保護を担当する部隊に所属する。

●登場人物紹介●

ドラえもん達はイメージ的に大山のぶ代さん達旧声優陣版よりも、水田わさびさん達新声優陣版寄りである。

・ドラえもん

言わずと知れた22世紀の猫型ロボット。四次元ポケットと秘密道具は健在だが、一部の道具は修理、点検に出している。今回はのび太とは別行動でエミリア達と行動する。

・野比(のび)のび太

主人公。今回も彼が主役と言っても過言ではない。今回はアマリーリス側に移動するためドラえもんたちとは別行動である。ラクリーマとの絡みが最大のポイント。

・源静香（みなもとしずか）
ヒロイン。今回はのび太と同じく主役である。のび太と共に行動する。ユノンとの女性同士の絡みもポイント

・剛田武（ごうだたけし）
いつもはのび太をいじめるガキ大将で通称、ジャイアン。今回は大長編補正でいい奴である。ドラえもんと行動し、のび太達を助けるために奮闘する。

・骨川（ほねかわ）スネ夫
ヘタレ…いやいや仲間一の頭脳プレイヤーでラジコン操縦の天才。ジャイアンと同じくドラえもんと共にのび太を助けるために奮闘する。

※今回はドラえもんの妹ロボット、ドラミはドラえもんの道具の点検に出しに行っているため、登場しない。

■ゲストキャラクター■
■アマリーリス勢
・ラクリーマ・ベイバルグ

今回の悪役兼のび太と共に主役を張る人物。アマリーリスの若き総司令官でリーダー、組織内最強の存在。
惑星トラシュ出身で頭部に幾つかの角らしき物が生え、瞳が炎のような深紅色である以外は地球人となんら大差ない外見である。
年齢は地球人年齢で換算すると２０歳前半ぐらいの若者で端正の顔立ちである。
性格は熱血漢で大胆不敵。裏切り者や敵に対しては例え弱者であろ

うと容赦しないが、部下や自分が認めた相手には義理人情を大切にする男気溢れる人物。

しかし、仕事や作戦には非情に徹するため、仕事のためなら悪事、特に人を殺すことに何のためらいも持たない。本人いわく『いたぶるのは嫌いだから早く殺してやったほうが親切』らしい。
悪事や戦いを好み、相手がどんなに強大であろうと臆するどころか逆に興奮してしまう、いわゆる戦闘狂である。
しかし『死』ということに独特の概念を持っており、仕事や作戦のために殺した人々、特に子供を自らが葬ってやることがある。また、組織や仲間、部下を守れるのなら喜んで自分が犠牲になる等、献身的な一面を持つ。（この一面がこの物語において重要なキーポイントとなる。）

このように自分の保身よりも部下の命を優先し、面倒見が良いため部下からの信頼は非常に厚く、中には尊敬する者も。
副司令官のユノンとの連携も抜群であるが、普段はユノンの前ではタジタジである。

非常にくだらないイタズラが大好きで、それが元で部下達を呆れさせたりユノンから制裁を受けることもしばしば。
とてつもないスケベであり、性欲をいつも持て余している。（しかし、まだ戦闘員だった時に比べたら落ち着いた方である）。

左手は超高性能義手型自律兵器『ブラティストーム』を装着したサイボーグであり、さらに着用している黒タイツの下には多数の小型ミサイルを内蔵したフルアーマーを装着する、まさに『生ける攻撃要塞』である。

またドラえもん作品の悪役にしては珍しく肉弾戦を得意し、白兵戦でも凄まじいほどの戦闘力を発揮する。

さらに強化ユニット『ログハート』を右手に装着すると、銀河連邦の戦闘ユニット部隊にも生身で渡り合える等、もはや化け物じみた強さを誇る。

戦闘の際は自ら先陣を切り込む。種族の特徴か、宇宙空間中でも生身で維持することができ、宇宙空間戦闘も難なくこなすことが可能。しかし身体的特徴は地球人並であるため、普通に怪我をしたり出血もする。なので攻撃が被弾するとあまり耐えられないのが欠点である。

ちなみに地球人と同じく『弁慶の泣き所』が存在し、脛を強打するとその場でのたれうち回る。

過去に恋人を亡くしており、彼女から託された遺言を叶えたいという夢がある。

モデルイメージは漫画家、故・石川賢氏の作品『５０００光年の虎』に登場する主人公『ウルガ虎』。

身長＝１８５ｃｍ
体重＝８０ｋｇ

・ユノン
アマリーリスの副司令官でラクリーマの秘書。第１のゲストヒロイン。

女性でエメラルドグリーンのロングヘアーが印象的なお姉さん系美人。年齢はラクリーマと同年齢。服装は上は青色の着物に帯、下は

スカートスーツみたいなものにロングブーツと風変わりな格好をしている。

犬を祖先とした異星人『ドグリス人』であり、外見は普通の地球人と同じようだが、犬のような耳と尾があり、聴覚、嗅覚が優れる。

普段は冷静沈着で非常にクール。ぶっきらぼうで冷たい印象だが融通が利くタイプ。
あまり人とは関わりたくないらしく、仕事以外は一人でいることが多い。非番時は自室に引きこもることが多い。
良いも悪いも一匹狼タイプである。

しかし言いたいことはずばずばといい、感情的になることもしばしば多く、何かとラクリーマにキツい言葉を吐くが、裏を返せばそれはラクリーマの心配からでる言葉である。

酒が大好きで、自室には多種の酒が貯蔵してある（好きな理由は『嫌なことを忘れさせてくれるから』）。しかし性格上、宴会の参加を嫌い、自室で一人酒を好む。酔っぱらうと性格が普段と変わる（けして酒乱ではない）。

戦闘力は皆無だが、組織内一の頭脳と知識、そして冷静さを持ち合わせる才女であり部下達を的確な指示で全面サポートする。ゆえ彼女もまた部下から非常に信頼されている。
しかし、ひとたびキレるとラクリーマさえも凌駕するほどの恐るべき戦闘力を発揮（彼本人のみに対してだが）する。

モデルイメージはいじめを題材にした少女漫画『ライフ』に登場するキャラクター『羽鳥未来（はとりみき）』

身長＝１７０ｃｍ
体重＝４５ｋｇ

●銀河連邦勢
・エミリア・シュナイダー
銀河連邦所属の女性士官で階級は大尉。第２のゲストヒロイン。
ひょんなことからドラえもん達と出会い、のび太達がアマリーリスにいることを知って救出及び、
アマリーリス撲滅に協力、行動することとなる。
淡いブルーのミディアムヘアーが印象的な美人。年齢はラクリーマやユノンより五歳年上である。
普段は冷静で優しい心の持ち主だが時に気性が激しくなる一面もあり、表裏のある性格。
実はのび太に匹敵するくらいの不器用で彼女の新兵時代は相当酷かったようである。
モグラを祖先とした異星人『モーリアン』であるため光に弱く、常にサングラスを着用している。武装は対人レーザーハンドガン二挺『テレサ』、『ユンク』であり、射撃の腕前はのび太とほぼ同等である。普段はミルフィと共に地球及び、銀河系周辺の保護、監察にあたっている。
個人的にアマリーリス、とりわけラクリーマとは過去に因縁があり、

非常に憎んでいる。

身長＝１５５ｃｍ

体重＝４０ｋｇ

・ミルフィ

銀河連邦所属のオペレーターでエミリアのパートナー。階級は中尉。今回のマスコットキャラクターであり語尾に「～だヨ」とつける。性別はメス。年齢は不明。

ふかふかとした毛に真ん丸な体で愛くるしく姿をしているが非常に知識が豊富でかつ的確な指示ができる。

実はエミリアの過去を知る人物の一人であり、本人はエミリアに対して非常に気を使っている。

彼氏がいなく、カップルを見て嫉妬することもしばしば。モデルイメージは『のび太の宇宙開拓史』に登場したキャラクター、チャミー。

身長＝８５ｃｍ

体重＝??

◆登場メカニック◆

・エクセレクター

アマリーリスの母艦である巨大な宇宙船。全長は少なくとも日本列島を覆う程はある。非常に頑強なバリアで保護されており、星の爆発に巻き込まれてもびくともしない。さらに前方部に搭載されている高出力エネルギー主砲、『リバエス砲』の火力も桁外れであり、その威力は地球ほどの惑星なら一撃で半壊させるほどである。他武装は光子ミサイル６０門、対艦レーザー砲１０門がある。内部は非常に広く、移動は常にテレポーターを利用する。ワープにより何十万光年も移動可能である。

モデルイメージはＰＳ用ゲームソフト『スーパーロボットシューティング』に登場した戦艦『プロメテウス』。

◇解説1（後書き）

プロローグです。

◇ＰＡＲＴ．１　プロローグ（前書き）

文章はあまり上手くないですがよろしくお願いします。

◇PART．1　プロローグ

“キャアアアアッ！！”

銀河系外宇宙。そいつらはとある銀河の中にある有人惑星の全てを奪っていた。

「生きてる奴は1人たりとも逃がさず皆殺しだ！！」

大勢の男達がそこに住む種族を襲っていた。ある者は略奪、ある者は破壊に殺害、ある者は捕らえた女性を自分の性欲を満たす道具として使っていた。

「じじいっ、早く往生せんかい！！」

足の悪く、逃げ遅れた老人の頭を掴む否や地面に何度も、何度も叩きつける男。痙攣したかと思えばすぐにその老人はもはや動いていなく、それを確認するとまるでゴミのように投げ捨てた。

「けっ、やっぱ年寄りは殺しがいがないな。すぐに死んじまう」

……中には、

「ひいいっ！！」

「おっとアマ、いい身体してんじゃねえか～～♪ぐふふっ……」

青色の皮膚が全身に染め、身体の全筋肉を浮き立たせた大男が逃げ回る一人の女性の髪の毛を乱暴に掴み、引っ張り、すぐ近くの家の中へ入っていき……。

《ヤアァァーーっ！！》

中から聞こえてくる『ハッ、ハッ、ハッ』と興奮しているような断続的に息を吐く男の声、悲鳴から次第に淫らな喘ぎ声と泣き叫ぶ声の混じった女性の声……中では男が想像もしたくないコトに及ぶ光景が目に浮かぶ。

……途中から、『グキャッ』という首の骨へし折るような鈍い不快音が聞こえると同時にその女性の声が全く途絶えてしまった……。

その数分間、家から男だけが出て、疲れと満足感が混じったかのように大きく息を吐いた。

「いい女だ。『しまり』がよかったぜ。これでしばらくは持ちそうだな」

……他にも、ある男は小さな子供を燃え盛る火災が起こる家に無理矢理放り込んで丸焼きにしたり、ある男は舌を刃物で切り取って、血と吹き出しながらのたうち回る住人をいたぶり殺したりと……明らかに『人間性』が微塵も感じられない暴虐の限りを尽くしていた。

そんな中、一人の男が先頭に立ち、並みいる荒くれ者を束ねて指示していた。

「よおし、お前らもうすぐでこの星も制圧だ！
終わったらうめえ酒でも飲もうぜっ！！」

男は高らかに声を張り上げると大勢が歓喜した。

“おおっ！！リーダー！！
”

リーダーと呼ばれた男は黒いタイツみたいな服に身を包み、その顔からは幾多の闘いを経験したかのような猛々しい表情をし、その真っ赤な瞳はまるで燃える野獣の瞳だった。
“ユノン、まだ制圧してない所はどこだ？”

男は耳に装着している通信機と思われる小型機械に手をあてて喋りだした。

“ＮＰスキャンによると１２０ギャロの０７５方位にまだ破壊されていない街があります。しかしそこの住民と思わしき反応は街の中心部から１２０メルト程の地下に密集しています。
……どうやら避難をしているようですね”

通信機から透き通るようでありながら、どこか冷たい雰囲気を漂わす女性の声が流れ出る。
その声を聞いた男はニィっと不敵な笑みを浮かべた。

「お前ら、今からまだ制圧していない街へ向かう、俺についてこい！！」
男達はその男の言葉に従い、近くに停滞していた各飛行ユニットに乗り込み一斉に飛び始めた。

…そこから１２０キロの東南に位置する街、オーラル。その街の地下避難所では住民と思わしき人々が臆しながら身を隠していた。

「お母さん、こわいよぉ～」
「もうしばらくの辛抱よ。ここにいればなんともないわ」

ある母子の会話から恐怖というものがじわじわと伝わってくる。

「はあ……なんでこんなことに……」
「こんな辺境の惑星にまで奴等の手が……」

一人の男性がぼそっと口にした奴等とはあの男達のことだ。そう…奴等は有人惑星に突然押し入り、強奪等の悪事の限りを尽くす悪の組織なのである。

《ドワオオオンッ！！》

突然の爆発と共に、地下避難所の天井が一気に崩れ始めた。

“うわあああっ！！奴等がきたぁぁっ！！”
“キャアアアッ！！”

大勢が生き埋めになる中、ついに奴等は地下避難所にまで攻め入ってきた。

「ここにいたか。すまねえが全員くたばってもらうぜっ、おめぇら一人残らず皆殺しにしろ！！」

黒タイツの男はかろうじて生き埋めにならなかった住民達に指を指すと、男達は一斉に襲いかかる。

“助けてぇぇっ！！”

“ぐわぁぁっ！！”

住民の断末魔が辺りに響き渡る。しかし、男達の蛮行は止まることはない。

「いたぶるんじゃねえぞ、すぐ殺してやるのがせめてものなさけだ！」

《ガシャン！！》

男は左手を突きだすと、手首から計４門の銃口がついたギミックが飛び出した。

「ククククッ……逃げろ逃げろ……でねえと変なとこに当たって苦しむぜ」

逃げ回っている住民に狙いを定めそして、

《ピイッ！！》

その銃口から放射された青白い光の筋が高速で住民の頭を貫通し、力なく倒れる。頭部にはピンポン玉ほどの穴が発生し、白い煙とともに生き物の肉の焼けた嫌な臭いが立ちこめた。

「いっちょあがりだな」

すると

「ぎゃあああっ！ぎゃあああっ！」

男の部下と思われる一人の男がさっきの子供を掴み持ってきた。子供は恐怖のあまり泣き喚いていた。

「リーダー、この子供はどうするんで？」
すると男は平然とした態度でこう言い放った。
「わかってるじゃねえか？殺れ」
「でっですけど、こんな小さなガキでっせ？」
部下は躊躇し出すが、男は部下の肩に手をおいた。
「周りを見ろ。こいつ以外は全員死んでっぞ？
考えてみな、親が目の前で死なれたままで生かせてみろよ、これほどかわいそうな話があるか？
こいつの親を殺ったのも俺らだし、なら親子共あの世に送ってやるのがケジメってもんじゃねえか？」
「まっまあ……っ」
この発言に部下は納得しつつも妙に複雑な気分となっていた。
「あとなぁ、こいつを生かしておいたら将来、俺を憎み、敵討ちに人生をつかっちまうぞ。
そんなん俺も嫌だし、こいつも惨めじゃねえか。ならいっそのこと今のうちに楽に殺してやったほうが幸せなんだよ」
「そうですかね……」
すると男は部下から子供を取り上げた。子供はさらに泣きわめく。

「無理なら俺にまかせとけって。心配すんな、一撃で仕留めてやるよ」

《ガシューっ！》

男は左手を握り込むと、その鋼鉄の手甲の先から爪のような鋭く伸びる金属の針が四本飛び出した。

男は子供に向かってその爪を向けて構えだした。

「悪いな小僧。恨むなら好きなだけあの世から恨んでくれ」

そして、

《スパァーン！》

男の瞬速の一閃が子供の首を横切った時、同時に首から上が胴体から離れ、それは数メートル離れた場所に『ドチャ……』という生々しい音と共に落ち、一メートル程先まで転がった。

そして、はねた瞬間、この子の血液と思わしき濃い色をした液体が首のあった場所から噴水のように吹き上がり、男の顔に浴びせたのであった。

「……」

男は首がなくなった子供の胴体を離さなかった。その血液がポタポタ下へ滴り落ちて……男の足元に溜まりを作った。

「リーダー、どうするんで……」すると男は子供の首が落ちた場所に移動し、胴体を首の横に添えた。
その子の顔の表情を見ると、涙を枯らして疲れはてて何も言わない、動かない、そう感じさせた。
男はそれを見て不敵な笑みを浮かべた。

「そのままゴミみてぇに捨てていくのも後味ワリぃし俺がやったことだ、俺自ら小僧を葬ってやらぁ」

男は左手を子供の死体に向かって突きだすと、さきほどの銃口のついたギミックを出して、狙いを定める。
《ピィっ！ピュッっ！》
銃口から飛び出した例の光の一直線が死体に直撃した。

《ボボッ！》

瞬く間に子供の胴体と首は青白い炎に包まれる。そう、それは地球における火葬を思わせる弔い行為だった。
男はみるみる内に燃えていく子供を見て何を思ったのだろう。無言でただそれを見つめていた。
男はそれに背を向け、部下の方に戻った。

「この星の制圧は完了した。戦利品を集めてエクセレクターに戻ろうぜっ！
今日は宴会だ、酔いつぶれんなよ！」

男は満面な笑顔で部下に伝えた。その笑顔で部下達は幾分救われたことか。

部下達はそのノリに乗って大声で歓喜の声を上げた。

“おおっ！！リーダー！！”

馬鹿でかい声が辺りにこだまする。しばらくの間は男たちの声に埋め尽くされていた。

……

太陽系、第３惑星地球。

多くの命が共存する惑星が今日も新たな１が始まろうとしていた。

――日本、東京都練馬区すすきが原の一角にある空き地で４人の子供達が何やら話をしていた。

「おおっ、これが宇宙旅行に行けるチケットかぁ！？スネ夫、これほんとか？」

スネ夫と呼ばれる少年は何やらチケットをペラペラはためかしている。

「まあね。うちのパパがＮＡＳＡの所長と知り合いでさぁ。分けてくれたんだよなぁこれがっ」

一般人には滅多に手に入らない物を見せびらかして、自慢するのがこの少年の悪い癖だ。

「へえっ～、いいなぁ～。」

「ほんとっ！」

そのチケットを見て、非常に羨ましがる三人。

「よかったらみんなにも分けてあげるよ。余ってるからね。まずは、はいジャイアン！」

「サンキュー！スネ夫。」

スネ夫はジャイアンと言う大柄な少年に一枚のチケットを渡す。

「はい、しずかちゃん！」

「うふっ、ありがとうスネ夫さん！」

もう一枚をとても清純で可愛らしい少女、しずかにチケットを渡す。

「今度は僕の番だ～っ」

メガネをかけた少年は手をコネコネしながら待ちわびている。が、

「はい、終わりっ！」

スネ夫は早々と切り上げ、少年は信じられない表情をしていた。

「すっスネ夫、僕のは…？」

少年の問いにスネ夫はまるで受け流すかのように軽く笑った。

「悪いなのび太、このチケット三枚しかないんだ。だからあと一枚は僕のだよ」

「はぁ……」

のび太と言う少年はそれを聞いてガクンと肩を落とす。
こういったことは一度ではないため、わかっていたことなのだが少し期待してしまうためやはり悔しい。

「ちぇっ、やっぱり僕一人だけダメなのかよ……。いいよいいよ、僕なんかそんな宇宙旅行のチケットより今すぐにでも宇宙旅行にいってやるっ!!」

それを聞いたジャイアンとスネ夫はゲラゲラと笑い出した。

「わはははっ、どうせドラえもんに頼る気だろ?」

「いくらドラえもんでもそれは無理さ!!わはははっ!!」
しずか以外はのび太をバカにしている。ここまで言われると黙ってられないのがのび太の特徴だ。
「今に見てろっ!!僕は宇宙旅行中に沢山の写真をとってきてやるからな!!
銀河系外の惑星をわんさか撮影してきてやる!!」

そう言い残すとのび太は三人から去っていった。
「あんなこといって、絶対無理に決まってらぁ!さすがに銀河系外まではあまりにも遠すぎるからな」

そう言うスネ夫にジャイアンがこんなことをきいてきた。

「スネ夫、ところでこれいつ出発なんだよ?」

「えっとね、今から30年後かな?」

「「はぁっ!?」」

二人は耳を疑った。３０年という気の長い年月まで待たないとダメなのかと。
ジャイアンはスネ夫の胸ぐらを掴む。

「おいスネ夫、３０年後ってどーゆーことだよ!?今すぐじゃねーのか!?」

「いっ……今すぐとは言ってないじゃんっ!!しかも今の最先端科学技術でも宇宙旅行は無理なんだよぉ!」
「なんだとぉ!?オマエ、俺らを騙しやがったな!!」

……またいつもの喧嘩が始まった。全く二人は懲りてないのだろうか……。

「のび太さん……」

しずかただ一人が去っていったのび太を心配していた。

…その頃、のび太は家に向かって走っていた。
そして寄りすがるような気持ちを込めてこう叫んだ。
「ド～ラ～え～も～～ん!!」

……物語はここから始まる……。

◇PART．1　プロローグ（後書き）

ここからオープニングが流れると思いますw（曲は『夢をかなえてドラえもん』）

◇ＰＡＲＴ．２　謎の二人組（前書き）

ＰＡＲＴ．２です。
しかし、地震で被災にあった方々、本当にお悔やみ申し上げます。

◇ＰＡＲＴ．２　謎の二人組

「えぇ～っ？銀河系外へ宇宙旅行だってぇ！？」
のび太は家で、共に暮らしている２２世紀の未来からやってきた猫型ロボット、ドラえもんに先ほどの件について頼み込んでいた。

「頼むよ～っ！ドラえもんだけが頼りなんだっ！！みんなに写真を撮ってくるって言っちゃったんだよ～！」

その馬鹿馬鹿しいのび太の理由にドラえもんは目を押さえて呆れ返っていた。

「出来るか出来ないかっ、よく考えてから言ってくれよっ！」
「ほんとぉにお願いっ！！」

のび太は土下座までして頼み込む。非常に情けない。

「全く君は……っ。のび太君、銀河系の外に出るのに一体どれだけ時間がかかると思ってんだっ！？
こんな暑い時にこれ以上暑くさせないでくれ！！」

今は８月の真っ盛り、今日も非常に暑い日である。
無論、のび太達小学生は夏休みである。

「ああっ！そうだ、どこでもドアで一気に銀河系外に出れば…？」

のび太は閃いたかのようにポンっと手を叩き、聞いてみたがドラえもんはさらに呆れ返る。

「あのねっ、どこでもドアは１０光年の範囲内しか行けないのっ！！
あとこんなところで宇宙とつないじゃったらどうなると思うっ！？
ものすごい吸引力でここにあるもの全てが宇宙に投げ出されるんだ
よっ！」

「じゃあ前に使ったことがある宇宙救命ボートは？」

「あれはドラミに点検に出してもらってるよぉ！
しかもあれは元々非常事態に使うものだから普段は使いたくないん
だっ！」

「はぁ……これだけ聞いてもだめかぁ……」
自分の思いつきを否定的に返答されて、溜め息をつくのび太。

「諦めるんだねっ。お～暑い暑いっ！下で冷たい麦茶でも飲んでこ
よ～っ」

そうゆうとドラえもんは部屋から去っていった。

「……」

のび太はやるせなさと暑さも相まって、もうどうでもよくなってき
たようだ。

「もういいやっ！どうせ僕は誰からも旅行に招待されない不幸な少
年さ！」

のび太はその場に寝転んだ。次第に無気力となり段々まぶたが重く
なってしまい、しまいにはいびきをかき、寝てしまっていた。

……

その頃、太陽系の木星付近の軌道上には地球の戦闘機をさらに洗練したようなデザインを有した謎の宇宙船らしきメカニックが地球に向けて進んでいた。

その宇宙船の中で、操縦幹を握る、サングラスのような眼鏡をつけた女性らしき人物と不可思議な形をした生物が何やら会話をしていた。

「ミルフィ、数時間後には地球に到達するわ」

「あ～あっ、これで地球を監査するのも何百回目ヨっ？いいかげん飽きてきたわ」

その生物の発言に対し、女性は叱咤する。

「馬鹿なこと言わないの。これも大切な仕事なんだからっ。あたし達はこの銀河系と太陽系周辺に異星人が侵略していないかどうか、確かめる偵察任務を任されてるのよ！」

「はいはい、エミリア『大尉』は本当にマジメですね～っ。だいたい宇宙の中でもこんな辺境銀河系の、さらに中にある有人惑星になんか誰も侵略する気にならないヨっ」

「ミルフィっ！！」

「わっ……分かったヨっ」

二人は一呼吸置いて、今度はこんな会話をし出した。

「ねぇエミリア？地球人が銀河連邦に加入する日はいつだと思う？」

「……まだ太陽系どころか火星にすら有人で行くのは無理そうだから少なくとも銀河系外を出るまでに技術が進歩していなきゃね。そう考えると数百年後から数千年後ぐらいじゃない？」

「ひえっ～っ！それまでに地球人は存在しているのかねぇ……っ」

「ふふっ、まあ銀河連邦もそこまで存在しているかどうかね。さあっ、話はそれまでにして地球軌道上の偵察にも専念するわよ。ミルフィ、ソナーを」

「アイアイサーっ！」

この二人は一体何者であろうか……？
ただ会話から察する辺り、地球人に敵対する者ではなさそうだ。

……

夕方。のび太は未だにのんきに寝ている。するとドラえもんが夕食の知らせを伝えに部屋に戻った。

「のび太君、ごはんだよっ。起きてっ」

「……う…んっ、ドラえもん……？」

のび太を揺さぶると少しずつ目を開けてきた。

「のび太君、もう夕方だよ。それにしてもよく寝るねぇ」

「夕方……もうこんな時間か。」

「ごはんの支度ができたからママが君を呼んでこいってっ！」

「そっかぁ。じゃあいこっか」

二人は立ち上がると夕食を食べに、一階へ降りていった。

……その夜、のび太の父親も帰宅し一家団欒で今のテレビを見ていた。するとこんなニュースが。

“次のニュースです。今日の〇〇時〇〇分に××県××市××街の路上で男性が血まみれで倒れていると通報がありました。この男性は、すぐ近くの病院に搬送されましたがまもなく死亡が確認されました。

この男性は刃物で腹部を刺されたと思われる外傷があり、警察はこれを殺人事件として調査を進める方針です。

この男性の身元確認を……”

その不吉なニュースに全員、寒気を感じた。

「いやぁねっ。こんな真夏に……」

のび太の母を頬に手を当てて心配そうな表情をとった。

するとのび太は父親に顔を向けてこう言った。

「パパ、なんでこんなことが起きるのかなっ？　人を殺すなんてっ……」

「さあねぇ……。余程の恨みか衝動的なのかわからないけど殺人は絶対にしてはいけないことだよっ。

どんな理由があってもね」

「……」
雰囲気が何となく重くなり、ドラえもんはのび太にこう言った。
「のび太君、そろそろ上に行こうっ」
「うんっ。」
のび太は頷くと二人は二階に戻っていった。
……
同時刻、先ほどの宇宙船が地球間近まで接近していた。
が、何やら宇宙船の動きがおかしい。どうゆうことか……？
《ヴィーーッ!!ヴィーーッ!!》
船内では大音量のサイレンが鳴り響き、二人に衝撃が走っていた。
「ひゃあああっっ!!後部搭載スラスター部損壊ッ!!
制御が効かないヨっ!!」
「ミルフィっ!!あんたがよそ見しているせいでこうなったのよ!?」
「うるさぁいっ!!エミリアだってあのときちょっぴりうたた寝してたじゃないかっ!!」
……何が起こったのか説明すると、
5分前、宇宙船は順調に推進していたのだが会話であった通り、二

人のふとした不注意が災いし、ちょうど宇宙船の重なる位置に進んでいた隕石が後部の推進スラスターの一つに衝突、破損したのだった。

「喧嘩してるヒマはないわっ！
この推進軌道だと地球圏に突入するわ！？ミルフィっ、覚悟してっ！！」

「うえぇんっ！！死ぬんだったら最期に恋人を探すんだったヨォぉ！！」

二人が焦りに焦っている内に二人を乗せた宇宙船はそのまま引力作用により大気圏に入っていった。
「「うわあああああっ……っ！！」」

宇宙船がまるでロケット花火のように火吹を上げて地球に落ちていった。
しかも地球のどこに落ちたかというと……。

……

夜中１２時過ぎ、のび太達はぐっすり熟睡していた。のび太が寝返りをうったその時、

《ズドォォーンっ！！》

小学校の近くにある裏山の頂上付近で何か巨大なものが衝突したような大音量の騒音がした。
「う……んっ……？」

のび太がその音に目が覚める。しかし、かなり眠たそうな顔をしていて半分意識があるかどうかわからなかった。

「のび太君っ……一体なんの音っ……？」

ドラえもんもふすまを開ける。がのび太と同じなのか眠たそうな顔をしている。

「さあっ……。ふぁぁっ……あう……。」

二人は何事もなかったかのように自分の布団に戻っていった。

◇ＰＡＲＴ．２　謎の二人組（後書き）

次回では物語の中心となる悪の組織が登場します。

◇ＰＡＲＴ．３　５人分断（前書き）

すいません。ＰＡＲＴ．２のあとがきで悪の組織が登場すると書き込みましたけど、今回はまだ登場しません。
ＰＡＲＴ．４で登場します。

◇ＰＡＲＴ．３　５人分断

翌日の午前中、のび太は空き地に向かっていた。それはジャイアンとスネ夫に呼ばれたからだった。

「……はあっ…どうせ写真撮ってきたかどうか聞かれるんだろーなぁ…っ」

そうぶつぶつ言いながら歩いていると、道端の電柱の真下にふと目を通した。

「んっ？こんなところに花が……」

よく見ると、大部分がアスファルトに覆われている地面のそこに、一輪の花が咲いていた。

しかし連日に続く猛暑の影響で、しかもあまり人には目立たない場所に生えているためかろくに水分をとっていないのだろう、その花は萎え、今にも枯れてしまいそうだった。

「……」

のび太はその花を少し眺めた後、何を思いたったのか二人がいる所とは反対の方向へ走っていった。

……数分後、のび太はまた同じ所に戻っていた。

すると右手に持っていた小さなスコップを使って、運よくアスファルトに侵されてなく素の土が剥き出しているあの花がある地面を掘り出した。

のび太は花を傷付けないように慎重に地面を削っていき、ついには

無傷な状態で花を取り出した。

それをすぐさま自分の家の庭の片隅に持っていき、それを植えた。

水を上げると、花の葉から雫が一滴、二滴、地面から落ちる。

それを見たのび太はニコっと笑った。

「……早く元気になるといいね」

純粋なのかお人好しなのか、この一連の行動は彼の良い部分の性格を表したとも言えるだろう。

すると、

「おーいっ、のび太ぁ～！！」

塀の外からジャイアンの声が聞こえる。

「そっそういえば二人に呼ばれてたんだっ！急がなきゃ！」

すぐに玄関に向かうとそこにスネ夫とジャイアン、しずかが待っていた。

「あれっ？しずかちゃんまでどうしたの？」

するとスネ夫が腰を低くした状態でのび太に近寄った。

「あのう……のび太っ、昨日は僕が悪かった、謝るよ。実は折入って頼みがあるんだ……」

「……？」

……

「ええっ？どこでもドアで宇宙へ連れてけってっ！？」

ドラえもんは昨日ののび太が言ったのと同じ頼みごとをされて、すっかり呆れかえっていた。

「昨日のび太君に話した通り、どこでもドアは１０光年の範囲でしか使えないのっ！！」

「じゃあ、その１０光年先に連れていってよ。それならいいでしょ？どっかの惑星に降り立ってみたいし。」

彼らの頼みこみにドラえもんはため息をついた。

「……１０光年範囲にはそんな珍しい星なんかないけど……いいの？」

その言葉にコクッと頷くのび太達。ドラえもんはやれやれと言わんばかりにのっそり立ち上がった。

「……たくぅ」

……そう言うと全員は裏山へ向かった。

ドラえもん達は人口的に作られたと思われる森の広場に移動し、四次元ポケットから『どこでもドア』を取り出した。

そこはとりあえず何が起こっても大丈夫とは言えないが家で開けるよりは幾分安全だったからだ。

「いいっ？すぐ戻ってくるんだよ。何が起こるか分からないからね。その前に…」

ドラえもんは四次元ポケットを探り、あるものを取り出した。
それはピストルのような形状をした秘密道具だった。

「『テキオー灯』、これをかけておかないと向こうは地球とはワケが違うからね」
ドラえもんはのび太達にテキオー灯の光を照らす。
この光によってどんな環境、状況下においても影響を一切受け付けないのが凄みである。その効能は２４時間有効である。

「じゃあいこうかっ」

のび太は興奮しているのか、震える手でどこでもドアのドアノブを握り、グッと開いた。

「「「「「……」」」」」

ドアの向こうは地球とは違う異様な景色だった。空は暗く、地面は鉄のような金属質に覆われ果てしなく広がる世界だった。

のび太達はドアの向こうに赴いてみる。
何もない。それだけの世界が地平線の如く拡がっているのみであった。

「こんなとこじゃ寂し過ぎて面白くなぁ～い！」

地球に戻り、ドアを閉める。

「のび太じゃダメだ！俺にやらせろっ！！」

今度はジャイアンがのび太をはねのけて、ドアノブを握って開いた。

「「「「「！？」」」」」

そこはさっきよりはかなり明るくなったが、ドアの向こうから不気味な色をしたガスが充満し、こちらに流れこんでくる。

《バァン！！》

ジャイアンはすぐにドアを閉める。そのガスに有害性があると察知したからだ。テキオー灯を浴びた身体なら影響はないが、そんな所にいっていたら頭が狂いそうだ。

「ほらね？１０光年内の惑星には何の面白みもないだろっ？」

結果が見えていたドラえもんが諦めさせようと促すが、それが逆効果だった。

「僕にもやらせてよぉ！！」

「いいやっ！！僕だよ！」

「お前らには役不足だっ！！もう一度俺に！」

のび太ら男三人がドアの主導権について取り合いしていた。それを見たドラえもんはいっそう情けなく感じたことか、深くため息をついた。

「もう三人ともっ！！やめましょうよっ！」

見かねたしずかは三人に叱咤した。が、いっこうに治まる気配はなかった。

三人はドアノブをガチャガチャ回し、開けては閉め、開けては閉めを頻繁に繰り返した。

すると、ドアの枠から『バチバチっ！』という音と共にスパークのようなものがほどばしり始める。

「んああっ！！それ以上やるとドアが壊れる！！

三人ともやめろぉ！！」

ドラえもんは慌てて三人の所に駆け寄り止めようとするが三人はさらにヒートアップし、その拍子にドアを強引に引き開けた。

次の瞬間、

《ゴオオオオっ！！！』

ドアの中からまるで掃除機のような、いやブラックホールのような超重量による引力が発生し、辺り一面の物を強力な吸引力でドアの

中へ飲み込もうとする。

「「「「「うわあああああっ！！！（きゃあああああっ！！！）」」」」」

5人は吸い込まれそうになり、地面に這いつくばるがあまりにも吸引力が強すぎて少しずつ、少しずつドアに近づいていく。

「ううっ……早くドアを閉めないと全員飲み込まれてしまう……っ」

ドラえもんはやっとの思いでドアに近づいて締めようとするが、力が入らずなかなか閉めることができない。
ここで力を緩めればたちまち吸い込まれてしまう。そうなればどこに飛ばされるかわかったものではない。

しかし、ついに……、

「きゃあああああっ！！」

しずかは力つきてしまい、手を離してしまった。
宙を舞い、強力な吸引力になすすべもなくドアに向かって吸い込まれた。

「しずかちゃんっ！！」

のび太はしずかを助けようとして自分も手を離して共にドアへ吸い込まれる。

「のび太君っ！！しずかちゃんっ！！」

「のび太！！」

「しずかちゃんっ！！」

三人が叫ぶが時すでに遅し、虚しくのび太としずかはドアの向こうへ吸い込まれてしまった。

《バタァンッ！！》

ドラえもんが必死で頑張ったかいもあり、やっとドアが大きな音を立ててが閉まり、瞬間に吸引が停止した。

が、ドアから何やら焦げ臭い匂いがし、よく見るとプスプスと煙があちこちに立ち上っていた。

「ヤバいっ、爆発するぞっ！！離れろぉっ！！」

「「！？」」

三人は急いでドアから離れよう走り出した。次の瞬間、

《ドワァッ！！》

強烈な閃光が辺りを包み、同時に衝撃と爆炎が周囲を襲った。幸い誰もいなく、周囲にはあまり物がなかったお陰で地面が少し焦土と

化しただけだった。

一方、三人はというと……。

「ううっ……ドラえもんの道具はホントに役に立たねえなぁ…っ」

爆心地から少し離れた場所にいたジャイアンが顔を上げ、辺りを見回した。すると左の方向に丸いシッポが突き出ていて、もぞもぞ動いていた。

「ドラえもんっ！」

ジャイアンはソレに近づいた。どうやらドラえもんらしきモノの首が地面に埋まっているようだ。

“抜いて…早く抜いてっ…”

その声を聞いたジャイアンはすぐに体をしっかり掴み、力任せで上に引っ張った。

すると、ボコッという音と共に真ん丸なドラえもんの顔が飛び出した。

「ぺぺぺっ、ふう……」

ドラえもんは起きあがりジャイアンを見ると、ぐっと睨み付けた。

「たくうっ、乱暴にいじっちゃって！！

いいかい、僕の道具はデリケートなんだ!!
強引に使用したら壊れるに決まってるじゃんっ!!
どうしてくれるの!?もうどこでもドアが使えないじゃないかっ!?」

それを言われてさすがにシュンと縮こまるジャイアン。

「ドラえもん、なんであんなことになっちまったんだ?」

ドラえもんは腕組みをして頭を傾げた。

「う〜ん、多分強引にいじりすぎたせいで空間と空間を繋ぐ装置が狂って暴走したかあるいは……」

すると、

「ドラえも〜んっ!!ジャイア〜ンっ!!
こっちにきて〜っ!!」

山の頂上付近から二人を呼ぶスネ夫の声が聞こえる。
二人は急いでスネ夫の所まで駆けつけた。

そこには、

《《!!?》》

三人は驚愕した。裏山を象徴する『千年杉』と呼ばれる大きな木の付近はに多くの木が薙ぎ倒されて、のび太の家の二階ほどある巨大な金属物体が地面に突き刺さっていた。
しかもこの金属は地球では見たことのない材質だ。

しかし形状はいくつかの相違点があるにせよ、地球における軍戦闘機に酷似していた。

「「「なっ…なんだこれは……っ」」」

三人とも、開いた口が塞がらずその場で硬直していた。

一体これは何なのか、いつにどこからやって来たのか？

三人の考えは共通していた。

◇ＰＡＲＴ．３　５人分断（後書き）

やっと次で悪の組織が出てきます。

◇ＰＡＲＴ．４　悪の宇宙人組織『アマリーリス』（前書き）

第４話です。基本的、文が下手なのでありのままで書いてます。

◇ＰＡＲＴ．４　悪の宇宙人組織『アマリーリス』

……

【エクセレクター】

極悪宇宙人組織アマリーリスの巨大宇宙船。
まるで女性の顔をした前船部で非常に美しいフォルムをしているが、その実態は非常に強力な兵器を搭載し、強力なエネルギーバリアで保護されている、云わば宇宙戦艦である。
全長は日本列島を覆う程で内部は一体どうなっているのか不思議と言いたくなる。

……

「ううん……」

……

のび太はこの船内のとある区域の部屋に倒れていた。
目が覚めて起きあがると辺りを見回す。辺りは真っ暗で何も見えない。

「ここは……どこっ……？」

のび太は寝ぼけているのか全く状況を把握していない。
とりあえず立ち上がり、右も左も分からない暗闇の中で少しずつ前に足を出す。

突然、

「わっ！」

足に何かが突っかかり、転んでしまった。

「なんだいったい……」
さわさわと触ると何やら生暖かく柔らかい……？よく触ると布のような感触がする。
「何っ……これっ？」
しかし次の瞬間、
《バチィン！》
「がはっ！」
のび太は頬に平手打ちをかまされたような痛みと衝撃をくらい、顔が酷く歪んだ。
「もうっ！！エッチっ！！」
そこから声がする。それはのび太には見覚えがあるどころか、毎日聞いている女の子の声だった。
「その声は……しずかちゃんっ！？」
「えっ！？のび太さんっ！？」
声の主はしずかだった。どうやら二人共、運よく同じ場所に飛ばされたらしい。
二人は無事を祝ってエッチなのび太と手を繋いだ。
「ああっ…よかったっ！！
けどここは何処なんだ…？」

「そっそういえばドラちゃん、タケシさんにスネ夫さんは！？
あたしたち…どうなったのかしら…？」

二人はさっぱりワケが分からない。あの時、なぜあんなことが起こったのか、今何時でここは一体何処なのか？
二人は立ち上がり、のび太は手を前に出しながら歩き始めた。しずかはのび太に寄り添っている。数メートル歩いた地点で突然、

《ガシューーっ！！》

前が急に輝きだし、扉と思われるシャッターが上に上がった。どうやらここが出入口のようだ。

「なんだここは……っ！？」

「……」

そこから出た二人は驚愕した。どうやら通路のようだが今まで見たことのない形は金属質で形成された壁に覆われ、たったひとつのライトで広範囲を照らせるほどの非常に明るく過ぎる照明。
通路を見ると左右に別れていて、どちらも奥が見えない。
見る限り、何十メートル、数百メートル、いや何キロ程の果てしない距離がありそうだった。

「……とりあえず歩いてみようか……」

「えええっ」

二人は右側の通路を選び、恐る恐る歩いていった。

……

一方、ドラえもん達3人は例の金属物体を調べていた。

「これはスゴいっ……地球の科学技術では到底造れない、言わば『オーバーテクノロジー』だっ！」

ドラえもんは驚きを隠せない声を張り上げる。これが一体どこからきたのかわからないが、分かったことは『地球の物ではない』ことだった。

「ドラえもんっ、こっちに来てっ！！」

スネ夫の声にドラえもんとジャイアンは彼の元に向かった。

「これって扉じゃないかな!?」

スネ夫が指す先には謎の金属が立ちはだかる……装甲らしきフォルムの側面部に四角のラインがあり、そこだけ出っ張っていた。「……よし、開けてみよう！」

ドラえもんはそこに近づき、立ってみた。

……動かない。壊れているのか、そもそも扉ではないのか……？

「こうなったら……っ、『通り抜けフープ』」

ドラえもんはポケットからフラフープのような物を取り出し、装甲

に張り付ける。
すると装甲を通り抜けフープの中だけ金属がなくなり、大穴が出来上がった。

「僕が中に入るっ、二人は外で待っててっ！」

ドラえもんは穴の中に入っていった。

「……」

内部は非常に広い。しかも地球では到底造れなさそうな装置や見たことのない金属で出来たオブジェがあちこちに配置されていた。

「んっ？奥に何かあるぞ」
地面に突き刺さっているため、内部の位置が上下になっているハズなのだがどんな技術でこうなっているのか内部は平面になってるような感覚だ。
ドラえもんは奥にあるドアらしきモノの前に立ち止まった。。
するとガシュッと音を立てて、それが上に向かって開いた。

「んああっ！？」

その奥には沢山の精密機械と装置、操縦幹が設置されており、操縦室と思われる。
しかし、その床で淡いクリアブルー色のミディアムヘアーの女性らしき人物と体毛がピンク色のもこもこした不思議な生物がぐったりと倒れていた。
……どうやら気絶しているらしい。

「たっ大変だっ！！早く救出しなきゃっ！！」

……

その頃、のび太達は果てしなく長い通路をひたすら歩いていた。
しかし歩き疲れて二人は体力の限界に来ていた。

「いっ……いったいどこまで続いてるんだろうっ……」
「ちょっと休みましょ……」

二人はその場で立ち止まり座り込む。同時にため息をつき、額の汗を手で拭った。

「一体どこなんだろう?」

「そもそもここは地球なのかしら?見たかぎりどこかの基地か何かの中にいると思うんだけど……」

二人は正直、不安だらけだった。無理もない。
歩いても歩いても先が見えない通路、全くといっていいほど人のいる雰囲気が全くなく、ここは誰もいないのかと疑いたくなる。
しかしさっきのドアにしても照明にしても、明らかに無人とは思えず、もし人がいたとしてもそれが地球人なのか……いや、そもそも味方なのか敵なのか全く予想がつかなかった。

それでも人がいれば話せば分かってもらえるかもしれない。二人はそう考えていた。

「そろそろいこうか」

二人は立ち上がり、再び果てしない通路を歩き始める。

……数分後……

「んっ？」

先が見えない奥から何か緑色に光る物体が高速で近づいてくる。

二人は急に安心感を覚え、顔を向き合い頷いた。すぐにその光に向かって走りだすのび太達。

それと同時に光る物体も高速でのび太の方へ近づいていく。しかしそれが全ての始まりだった。

「何者だキサマらっ！！」

《！　！　？》

のび太達は目を疑った。宙に浮く円盤のような乗り物の上に立ち、まるで奇妙ともいえるペイントを施した赤色の全身タイツに身を包み、顔はまるでトカゲとも言える爬虫類のような鱗に覆われる顔をした男だった。しかし、言葉を流暢に扱う様を見ると非常に知性は高い。

そう……地球人ではなく、異星人だったのだ。

「ひいっ！！僕たちは決して怪しいものではぁ！」

「あわわわっ……」

のび太達は酷く動揺し慌てふためいている。

しかしこの行動がさらにこの男を逆撫でることとなる。

「侵入者だっ！覚悟しろっ！！」

男はぐっと睨み付けて所持していた拳銃らしきものをのび太達に向けた。

「ヤバいっ！しずかちゃん逃げよう！」

のび太達は即座に振り向いて走り出した。

《ドシュっ！ドシュっ！》

男はトリガーを引くと銃口から赤色の光弾が発射し、のび太がいた場所の床に命中する。

火花が辺りに飛び散るとすぐに消えた。

《ヴィーン！！ヴィーン！！》

内部に大音量がサイレンが鳴り響く。その中でのび太達は必死で逃げていた。

「うわあああっ！！ドラえも～ん！！」

のび太は走りながらドラえもんの名を呼ぶが来てくれるワケもなく、サイレンの音にもみ消された。

エクセレクター内部にある司令室では。

“ラクリーマさん、艦内の第２５格納庫通路付近で侵入者を発見しました。相手はヒューマノイドの子供二人、一人は男、一人は女です！！”

司令室の中央に設置してある３Ｄスクリーンに映る部下を見て、一

人の男が不敵な笑みを浮かべた。

「そいつらを捕らえて中央オペレーションセンターに連れてこい。どうやって入ったかは知らねえがヒューマノイドの子供二人がエクセレクターに侵入したとは大した奴らだ。そいつらの顔を拝ませてもらうぜ！！」

男は立ち上がり、横にいた一人の女性を見つめた。エメラルドグリーン色のロングヘアーで頭部には犬の耳のような突起物がある非常に美人の女性だった。しかしその女性の瞳から放たれる光は非常に冷たい氷のようだった。

「ユノン、行くぜっ！」

「……」

女性は何も喋らず、男についていく。二人はそのまま司令室に出ていった。

一方、のび太達は走っていたが体力が持つはずもなくへとへとになっていた。特にのび太は……。

「もっ……もうらめっ……走れない……」

のび太はついにその場でへたりこんでしまう。しかししずかは疲れているが顔に出さず諦めまいとのび太を起こそうとする。

「のび太さん！！早くしないと私たち何されるかわからないわよっ！！」

「へえええっ……」

しかし、そこまでが運のツキだった。

「お前らをリーダーの元へ連行する。連れてけっ」

ついに追い付かれてのび太達。沢山の男達が集まり二人を囲む。男達を見ると種族が違うのか様々なタイプの顔と皮膚をした男達。しかし共通して言えるのが、全員いかつい顔をした悪人顔そのものだった。

「いやあっ！離してぇ！」

「……」

二人は円盤に乗せられて連行される。

こいつらは一体何者なのか、二人の恐怖と不安は高まるばかりだった。

◇ＰＡＲＴ．４　悪の宇宙人組織『アマリーリス』（後書き）

次は第５話です。

◇ＰＡＲＴ．５　ラクリーマ・ベイバルグ（前編）（前書き）

今回はいつもより長いです。（しずかちゃんが酷い目に遇うので注意してください）

◇ＰＡＲＴ．５　ラクリーマ・ベイバルグ（前編）

見知らぬ所に飛ばされ、見知らぬ男達に捕縛され、どこかも分からぬ所に連行されようとしているのび太達二人。

「あっ……あたし達どうなるのかしら……？」

「さっ……さあっ……？」

二人が不安と恐怖の声を漏らしていると、

「私語は慎めぇっ！！」

「「ひいっ！！」」

男のドスの利いた脅し口調の怒鳴り声が二人を萎縮させる。

円盤に乗りまるで迷宮のような複雑な構造をしている内部を移動していると、とある行き止まりにたどり着いた。

周りを見ると非常に広く３つの円盤型の装置が置かれている。それは数十人くらいなら容易に乗れそうな大きさだ。

二人と男達はその内の一番上にある装置に乗る。すると上空から、

“行き先を呼応してくだい。現在エリア１０からエリア２５は都合の為、移動することは出来ません。そちらへ移動する場合は……”

音声が入り、男の一人が大きな声をあげる。

「エリア5に移動する。急いでいるので迅速に頼む！」

“了解。ワープに移行するため、この範囲中から出ないで下さい”

すると、装置内に凄まじい光が全員を包み、飲み込まれる。そして、

《バシューーッ！！》

目にも見えぬ速さで全員がその場から消え去った。

……

「「……」」

二人は驚きのあまり唖然とした。数秒間の出来事でさっきとは異なる場所に移動していた。

「ここ……宇宙船か何かじゃないかしら……」

「どうしてわかるの？」

「だってあたし達が乗ってるお皿みたいな乗り物にしてもさっきの装置にしても……地球の科学力じゃ到底造れないくらいの進んだ科学力よ……。

あたしの勘だけど……ここ全体が移動してる感じがする……」

「えっ？」

そう二人が話していると、横にいた男が持っていた拳銃をのび太の

方へ向ける。

「喋るなと言わなかったか？これ以上喋るなら今ここで死んでみっか？」

「「ひいっっっ！？」」

二人はさらに萎縮する。男達を怒らせると本当に発砲しかねなかったからだ。

そんな状態がしばらく続き、移動していると不意に円盤が停止した。

そこは……。「「うわあああっっ……」」

まるで快晴の日中のような明るさで非常に広い。広いってもんじゃない、小さな村一つは入りそうな空間で周りには膨大な数の精密機械が至る所に配備されてある。中央には巨大な司令搭が置かれている。

天井には巨大なウインドウが多数張り巡され、そとからは様々な惑星が写る宇宙が非常によく見える。

まさに壮大、圧巻としかいいようがない。そして、しずかが言ったことが的中した。ここは宇宙船内部である。

「リーダー、連れてきましたぜっ！」

《ドンっ！！》

「「うわっ！（キャッ！）」」

二人は男達によって乗り物から突き落とされて地面に倒れ込んだ。
二人は上を見上げると、その高くそびえ立つ司令搭から先ほどの男と女性が二人を見下ろしていた。
すると男はそこから飛び降り華麗に地面に着地、二人の元へ歩いてくる。

「「……」」

二人は男を見て顔が恐怖でひきつっていた。黒いタイツで全身を纏い、ぼさついた銀髪で顔の至るところに無数の傷が目立つがそれさえなければ非常に端正な顔立ちで、まるで自分たち地球人のような顔である。

しかし、その瞳はまるで紅蓮のような赤い瞳で狂ったかのような螺旋状である。
そして男からは身体中が震え出すほどの威圧感と殺気を帯びるオーラを放っている。
男はのび太達の元へつくと不敵な笑みを浮かべて見つめてくる。

「あなたは……一体誰？」
しずかの問いに応えると思いきや、男は左手をしずかに向かって突きだした。左手をよく見ると人間の皮膚ではなく、金属で精巧に作られた手…義手であった。

「えっ……？」

それだけでも充分驚きだがのび太達は突然何をするのか不思議がっていると、

《ガシャンっ！》

男の手首から４つの銃口のついたギミックが四方、しずかに向けて突きだした。

「なっ……なに？」

何をし出すか分からない男に対し、しずかは恐怖のあまり尻餅をついたまま後退りはじめた。しかしそれを逃がすような男ではなかった。

《ピイッ！》

「キャアアアッ！！」「しっしずかちゃんっ！！？」

その銃口の一つから飛び出した青白い光線がしずかの右太ももを貫通し、鉛筆の幅ぐらいの穴と動脈を突き破ったのか、おびただしい量の出血し出す。

「しずかちゃんっ！！しずかちゃん！！」

「いっ……いつ……」

のび太はなりふり構わずしずかを必死でゆするが、しずかは全身に大量の汗をかいて足を押さえてうずくまっている。このままでは大量出血でしずかの命が危ない。

「なんてことをするんだっ！？女の子だぞっ！？」

のび太は男にぐっと睨み付けるが男はそれを見もせず今度はしずかに近づき、

《ガシッ！！》

「いやあああっ！！」
なんと男はしずかの貫通した傷口を足でぐいぐい踏みにじる。彼女はあまりの激痛に大粒の涙を流してしまった。

「やめろぉぉぉぉっ！！」

のび太は踏んでいる男の足を抱き抱えて止めようとするが、当然男の力のほうが遥かに強かった。

《バキっ！！》

男が即座にのび太の頬に裏拳をかます。のび太は吹っ飛ばされて床に倒れ込む。
すると今まで黙っていた男がついに口を開く。

「おめえ誰にモノ言ってやがる？」

のび太は悶絶しながら頬を押さえる。そして男の方へ見ると男はのび太に向かった狂気じみた笑みを浮かべていた。

「お前たちはここをアマリーリスの母艦、エクセレクターだと知って侵入したのか？本来なら、見つかった時点で殺されても文句は言えんのだぞっ！！」

それを聞いたのび太は不思議そうな顔をして立ち上がる。

「あっ……アマリ……リス……？エクセレ……クタ……？」

聞いたことのない名前である。男もあどけない彼の顔を見てきょとんとなった。

「なんだ、お前オレらの事知らねえのか？よほど辺境の宇宙から来たんだろうな……。
お前らどこの惑星からやって来たんだ？」

その問いにのび太は間を空けた後、震える声でこう言った。

「ちっ……地球からっ……」

それを聞いた男は驚いたような表情を取った。

「地球だと？ならお前らは地球人かぁ！？」のび太はコクッと頷いた。すると男は周りにはいた大勢の部下の方へ向いて高笑いしだした。

「わははは っ、お前ら聞いたか！！地球人だとよっ！！」

それと同時に部下達も笑いはじめる。

「ギャハハハッ、こりゃあ奇遇だなぁ！！」

「なんて奇跡だよっ！？イヒハハハッ！！」

周りのざわめきを全く理解できないのび太。辺りを見てキョロキョロし出す。
すると男は笑い涙を浮かべて、のび太にこう言った。

「実はな、次の目標惑星が終わった次の侵略予定の惑星は地球だっ

たんだよっ！！」

《！　？》

のび太は耳を疑った。【侵略】……ということはこいつらは悪の組織なのか。しかも、のび太達の地球がこいつら狙われているという事実を知ってしまったのであった。

のび太は絶望する。侵略されたら自分たちどころか、両親、友達、いや地球人全員が殺されかねない。
それだけじゃない、そうなったら未来世界も改変され、残酷で劣悪な未来となりうるかもしれない。そう気づいたのであった。

「まあ運がなかったとしか言いようがねえなっ。安心しな、てめえらはこの場で死んでもらうし親やダチは後で地獄で逢えるだろうぜっ！！わははははっ！！」

男は豪快に笑いまくる。それを見たのび太は絶望もあるが怒りも膨れ上がる。

……しかし、自分の力では何もできないのが現状であった。この男、見る限りただ者ではない感じがして、周りにも自分達より能力にしても装備にしても絶対的多数である。
しずかも大怪我でその場から動けない、それらがのび太にあまりにも無力だということがイヤというほど思い知らされるのだった。

……

その頃、ドラえもん達はすぐに謎の二人組を金属体から外に出し、その場で看病をしていた。

「どっドラえもん……この人達……どこから来たんだろ？」
「さあっ……けど多分……宇宙人だと思う」
「けっけどさ……この女の人、かなり美人だよなっ……」

女性の方はロングコートと言うべきものか丈の長い、白、青、黄色などの色をバランスよく使い、ビシッとした軍服らしき服装であった。
顔は非常に地球人の顔に酷似しており、しかも誰もが見とれてしまうほどの美人であった。

一方、不思議な生物はモコモコしたピンク色の毛が印象的で、ウサギのような耳と手と足がある。シッポは……なさそうだ。
三人は静かに眠る二人を見て、頭をかしげていた。……すると、

「うっ……うん……」

女性が意識を取り戻したようだ。それを見て喜ぶ三人。

女性は少しずつは目を開いていく。しかし、

「きゃあっ！！」
突然、女性は目を手で押さえてうずくまり始めた。

「「「だっ大丈夫ですかっ！？」」」

すると女性は震える声でこう言った。

「サン……グラスは……どこっ……？」

それを聞いたドラえもんは何か気づいたのか、手をポンと叩いた。

「もしかしてこれですかっ!?あの中に落ちてました」

四次元ポケットから地球とは異なる形のサングラスを取りだし、女性に渡した。

女性はサングラスをつけると起き上がる。

「ふぅ……助かったわ。ありがとう」

すると女性は何か思い出したか、辺りをキョロキョロ見る。そして地面で寝ている生物に気づくととっさに生物をグラグラ揺らした。

「ミルフィっ!!起きてっ!!」

するとそれに応えるかのように生物の目を開き出した。

「えっ……エミリア……?」

その生物も起き上がる。寝ぼけているかボーッとしている。が、すぐにそんな状態が終わる時がきた。

「ああっ!?エミリア、ここはっ!?」

この生物の能力なのか、風船のように宙にふわふわ浮かんでくるくる回っている。

「ここは地球よ。どうやらあたし達はここに不時着したようなの……」

「なんだってっ!?」

三人をほっといて話を続ける二人。

「あのぅ……話の途中に割り込んで悪いですけどいいでしょうか……？」

ドラえもんが恐る恐る声をかけてみると、二人はハッと気付き振り向いた。

「あっ……ごめんなさいっ!焦ってたもので……」

「エミリア、この人達は？」

「この子達が私達を助けてくれたのよ」

「へえっ、いい子達なのね～っ。ありがとうございました～♪」

二人はドラえもん達に対して深くお辞儀をする。それに対し三人は急に照れくさくなった。

「いやいやっとんでもないっ！
ところであなたたちは……？」

すると二人はドラえもん達の方へ行き、手を差し出した。どうやら握手のようだ。

「あたしはエミリア・シュナイダー、銀河連邦所属のこの銀河系及び、太陽系周辺の偵察と保護を担当する部隊の士官よ。

エミリアと呼んでくれたらいいわ」

「あたしはミルフィ。エミリアのパートナーで銀河連邦所属のオペレーター担当ヨっ！
よろしくね♪」

二人は自己紹介するが三人は初めて聞く言葉にポカーンとなっていた。

「「「ぎっ……銀河……連邦……？」」」

三人とも頭を傾げる姿を見たエミリアは苦笑いをした。

「わっ…わかったわっ、分かりやすいように教えるわ……」

……

【銀河連邦】

宇宙の平和と秩序を守る正義の連邦組織のことで、いわば宇宙規模を誇る警察である。
多数の様々な先進種族が集まり、様々な部隊に分かれていて、エミリア達は話であった通り、ここの銀河系周辺と太陽系内の保護、偵察を担当する部隊に所属する。

……

「すっ……すっげぇっ！！カッコいいじゃん！！」
「ぼっ僕も入りたいなぁ！！」
歳相応の男の子らしくスネ夫とジャイアンは凄く関心を持っていた。

「ここでのび太もいたらさぞかし羨ましがるだろうな？」

「そうそう、のび太が……？」

ドラえもん達は約三秒くらい沈黙したあと、

《あ〝あ〝あ〝あ〝っ！！思い出したあぁぁ！！》

三人は突然、大声を上げて慌てふためきだした。それを見てびっくりする二人。

「忘れてたっ！！のび太としずかちゃんはどこに消えたんだ！？」

「ドラえもん、何とか探し出せないの！？」

「ちょっと待ってて、えっとあれでもないこれでもない！！」

ドラえもんは慌ててポケットから物を出すがワケの分からないものがたくさん出てくる。

「こんな時に焦んなっつうの！？」

ジャイアンとスネ夫は情けなくなりひどく呆れている。

「あったぁっ、『タイムテレビ』っ！！」

手応えを掴んだドラえもんはポケットから多数のボタンがついた液

晶テレビみたいな道具を取り出した。

「とりあえずどこでもドアよりは遥か先まで見渡せるけど……上手く映ってくれるかな？」

ドラえもんはタイムテレビを出して操作をする尻目にエミリア達はとても不思議がっていた。

「ねえっ、これはなに？」

スネ夫がエミリアに顔を向けてかっこつけるかのようにこう言った。

「これはどの時代、どの場所でも入力した所を映し出してくれるドラえもんの秘密道具だよっ！」

「どの時代って……あなた何者？」

「ドラえもんは２２世紀、つまり今から１００年後の未来からやって来たネコ型ロボットなのさっ」

それを聞いた二人は驚きの表情を隠せなかった。

「１００年後の……未来からですって……？」

「ひゃあ～っ、君はスゴいんだねっ！」

その間にドラえもんは必死で操作していると少しずつだが何かが映りこんできた。

「んっ？なんだ？」

「よく見せろよっ！！んっ？」

画面の砂嵐から徐々に視界が良くなってくる。しかし、その後にみた全員が目を疑うこととなる。

「なっ何なんだこれは……っ？」

「しずかちゃんが……倒れている！？」

「あと、こいつらは一体何者なんだ？」

画面に映ったのは、とても広大な場所に無数の装置と機械が置かれた場所でのび太としずかは謎の男達に囲まれていた。
しずかは倒れてこみ全く動かず、すぐそこにもっこり黒タイツを着用した筋肉隆々の体躯の男が対峙しているのび太を追い込んでいた。

「こっこれは一体……？」

三人が驚くなか、突然エミリアがドラえもん達を割り込んで画面を覗いた。

「こっ……こいつは……まさかっ！？」

エミリアの身体はぶるぶる震えだし、顔もだんだん険しくなってくる。まるでこの黒タイツの男に対して憎悪を剥き出しにしているかの如く。
「エミリア、もしかしてこいつらはっ！？」

ミルフィも画面を見て、顔色が変わった。どうやらこの二人はこの男達の素性を知っているようだ。

「……アマリーリス……あいつは……ラクリーマ……ラクリーマ・ベイバルグっ！！」

エミリアは震えるような口調でそう言いはなった。しかしその声から憤怒の感情がこもっていた。

◇ＰＡＲＴ．５　ラクリーマ・ベイバルグ（前編）（後書き）

次回も同じような長くなるかもしれません。

◇ＰＡＲＴ．６　ラクリーマ・ベイバルグ（後編）（前書き）

今回はのび太は男になります……？

◇PART．6　ラクリーマ・ベイバルグ（後編）

……

【アマリーリス】

数々の銀河系をまたにかけて悪事の限りを尽くす極悪の宇宙人組織でリーダー兼総司令官ラクリーマ・ベイバルグの元、様々な種族の極悪人達で構成されている。
その侵略、略奪された惑星、犠牲になった人々の数は数知れず、銀河連邦から第一級指名手配に指定された非常に危険な組織なのである。

……

「そろそろトドメを刺すかな？まずはこのガキからだっ！」

男は怪我を負い、倒れているしずかの頭部に狙いを定める。
彼女は激痛により、意識が朦朧としていて、ハッハッハッ…っと、短い間隔で弱々しく吐息している。

「一撃で仕留める。すぐ楽になるから安心しろっ。
まあっ……聞こえてんのかわかんねえがな」

《シュウウウ……っ》

銃口に青白い光が収束していく。それに伴い男の左腕全体から『ゴウンゴウンっ』と機械が作動している音が聞こえてくる。

「死ねっ！」

男が不敵な笑みを浮かべた。しかし、

《ガシッ！！》

「！？」

なんとのび太は勇気を振り絞って男の左腕を体当たりでずらした。
その瞬間より太くなった光線が発射され、しずかのすぐ横の床に直撃した。
煙を上げ、貫通してピンポン玉ほどの穴が開いている。

「てってめえッ！？」

男が驚きの声をあげる。のび太はそのまま男の前に立ちはだかると両腕を左右いっぱいに広げた。

「……こっこれでも男だっ……僕はっ……僕はしずかちゃんを守るっ！！」

のび太にしては勇敢な台詞を言うも、それとは裏腹にのび太は恐怖から身体がガタガタ震えている。男はそんな彼を見て、クスクス笑い出す。

「おめえっ、マジで震えてんじゃねえか？そんなんで守るって言っても説得力ねえぞ」

「そっ……そんなの……しかたないじゃないかっ……！！」

のび太は男に反論する。確かにその通りだ。
小学生がこんな窮地に立たされるのは滅多にないことだ。しかも相

手は殺すことに何のためらいも持たない男、恐怖するのは仕方がないことだった。彼は自分なりに友達で好意を持つ少女、しずかを守ろうとしているのだから。

「……」

男は無表情になる。そのまま十数秒間のび太を見つめる。

一方、それを見ていた男の部下達は男と同じくクスクス笑っていた。

「あいつガタガタ震えてやがるぜっ？クックック」

「まあ相手が俺らのリーダーだからな。仕方ねえけどっ」

そんな言葉が飛び交う中、男は突然、ニイッと歯を出して笑い、のび太にこう言った。

「小僧、俺が憎いかっ？」

「えっ？」

突然の質問にのび太は動揺する。すると男は周りを見渡し大声を張り上げた。

「おめぇら実弾タイプの銃持ってねえか？もしあったら俺に貸してくれっ！」

その言葉を聞いて部下達は初めは“なぜなんだろう”と困惑するが、すぐに自分の銃を探し出す。すると一人の部下が自分の銃を掲げた。

「ありましたぜっ！リーダー！！」

部下が銃を男に投げ渡し、男が銃を右手で受けとると、何故かそれをのび太に差し出す。

「えっっ!?」

のび太は銃を持てと言わんばかりの男の手にある銃を見て焦り始める。

「使い方はわかるか?この安全装置を外してこうしてこうやって……」

「えっっ!?えっっ!?」

男は銃の説明をし終わると無理矢理のび太の手に銃を置いた。ズシンと重い本物の銃がのび太の触感を刺激する。男はのび太から１０メートルほど離れ、のび太の方へ向いた。
そしてこんなことを言い出した。

「今からお前と俺、どっちが早撃ちできるか勝負だ。もし俺を殺れたら地球まで送ってやるよっ!」

「うえええっっ!?」

なんと男はのび太に速打ちによる決闘を申し込んだのだった。それは誰もが予測していないことだった。

「りっリーダーっ!!何考えてるんスかっ!?」

「そんなガキ、もう殺りましょうよぉ！」

部下達から反感を買われる男。なぜなら今までこんなことはなかったからだ。

「いいじゃねえか。たまにはこんな余興も必要だ」

男は気軽にそんなことを言う。

「もっもし万が一、リーダーの身に何かあったらどうするんで？」

男への心配から飛び出した発言に男は質問した部下にニイッと笑って受け答えた。

「俺が死ぬわきゃねえだろ？まあっ……もし俺がくたばっちまったら……ユノン！！」

男は司令搭で見下ろしていた例の女性、ユノンに向かって声をかけた。

「その時は……お前が俺の後を引き継ぐんだ。

なあに、お前の頭脳と知識なら充分やってけるさっ！」

「……」

ユノンは何も言わず、ただ男を見つめているだけだった。部下たちも悲しげに男の言葉を聞いていた。

「リーダーっ……」

男は再度のび太の方へ向くと、また笑みを浮かべた。

「というワケだ。約束は絶対に守る、思う存分自力を出しきってくれ！
お前らも、もし俺がやられたらこいつらを地球に送り届けてやれっ！！いいなっ！！」

それを聞いてここにいる者全員が静まりかえる。間違いない、この男は本気で自分の命をかけてきている。その気迫と自信が十分に感じられた。

「あわわわわっ……」

のび太の身体中ぶるぶる震えている。もう生き残るか死ぬかの二つしか選択肢がないように思えたからだ。
生死をかけた決闘に彼の顔には嫌な汗がだらだら流れてきている。

それを見た男はのび太を奮い立たせたいのか、こう言い放った。

「小僧、この女を守りてえんだろ？勝ったらこいつの傷を治してやる。
お前も男なら命をかけて女を守ってみろってんだ」

「……けっけど僕は小学生の子供だよっ！！こんないきなりの決闘なんてっ！！」

「けっ！なら二人ともここで死ぬか？
まあ俺はマジでてめぇを殺しにかかるけどな」

のび太の顔が青ざめる。それに反して男はさらに追い打ちをかける。

「子供だろうがなんだろうが、ここはそんな肝っ玉のちいせえ男は生きる資格がねえんだ。てめえみたいになよなよしてるヤツはこの俺が自ら地獄へ送ってやるよっ！
さあどうする？やるかやらねえのか……どっちだっ！！」

その言葉からはしてもう逃げ場などなかった。例え命乞いをしても逆に男に怒りを買い、殺されてしまう。ということは……。
「……ならほっホントに勝ったらしずかちゃんを治して、地球へ送ってくれるんだね……っ？」

ついに覚悟を決めたのび太。それを聞いて男は嬉しいのか、満面な笑顔をとった。

「ああっ、しかも地球にはもう関わらねぇよ。
命の賭け合いをするんだ、そのくらいの条件はつけねえとな」
それを聞いたのび太は男に向かって数秒後、コクッとうなづいた。
すると男はある部下の方へ向いてこう言った。その男はのび太達を最初に発見した、身体中に鱗を持つあの男だった。

「レクシー、お前の手叩きの合図で勝負する。タイミングはお前に任せる」
それを聞いたレクシーと言う男はコクッとうなづいた。するとレクシーは震えるような声で男にこう言った。

「リーダーっ……信じてますぜっ！！」

それを見た男はコクッとうなづいた。一方、のび太は倒れているしずかをもの悲しげに見ていた。

「しずかちゃん……負けたら僕たち死んじゃうけど……その時はご

めんねっ……」

言ったことを後悔し始めるのび太。なぜこんなことになったのか……。もし負けたら自分達はは、ドラえもん達は、地球は……。

しかし、のび太にあることがよぎった。

“なっ……何考えてるんだ僕は!?僕には……僕には射撃という誰にも負けない特技があるじゃないか!?”

普段は何をやってもダメな小学生、のび太。しかし彼にも非凡な才能を持っている。居眠り、あやとり……その中でも際立っているのがそう『射撃』である。

彼はかつて様々な悪や敵と戦った。崩壊寸前のコーヤコーヤ星で対峙したガルタイト鉱業の用心棒で宇宙の殺し屋ギラーミン、その圧倒的戦力で地球人を奴隷にしようと企んだメカトピア星の鉄人兵団……ｅｔｃ。

そんな戦いを助けてくれたのはこの才能のおかげと言っても過言ではなかった。

そう……のび太は自分の才能に全てを賭けようとしていたのだ。そんなのび太を見て、男はニイッと軽く笑う。

「お前、ただのガキじゃねえな……？銃の持ち方と今の雰囲気からして戦い慣れしてんじゃねえか……おもしれぇ!!」

辺りに緊迫した空気が辺りを包む。両者とも互いに睨み合う。勝負は一瞬、どちらかの発砲で全てが決まる。

《パンっ！！》

《ガシャッ！！カシャッ！》

レクシーの合図が聞こえた瞬間、両者とも己の武器を同時に上げ、そして！！

《ーーーーーー》

甲高い発砲音がこのエリア内に鳴り響いた。全員がまるで時の止まったように静止している。

もちろん、二人も静止していた。しかし次の瞬間、

“つぅ……っ”

男の頬の部分に切り傷が出来、そこから男の血液と思われる赤い液体が一筋流れ出ていた。

「はあっ……はあっ……」

のび太は息が酷く荒れて、銃を地面に落としそのまま膝をつく。

一方、男は頬に指を当てると濡れた感触がして、見てみると自分の血がついている。

先に撃ったのは実はのび太だった。しかし、男を殺せなかったのはのび太の優しい性格が無意識に男の致命所を外したのかもしれない。

「ククククッ……わはははははっ！！」

急に男は馬鹿みたいに大声で笑いだす。それをその場にいた全員が

ポカーンと見ている。
男はしずかをお姫様みたいに抱き抱えると、周りに聞こえるようにこう言った。

「てめえら、こいつをメディカルルームに連れていって治してやれっ！！今ならまだ間に合う！！」
その言葉は全員を驚愕させる一言だった。部下全員がざわめき出した。

「ちょっとまってくだせえっ！しょ……勝負はっ！？」
部下の問いに男はのび太に向かって指を指した。

「勝負はあいつの勝ちだ。だから条件通りにこいつらを地球に送り帰すし、地球も侵略しねえよっ！」

部下は一層ざわめきだした。なぜならどっちも死んでいない、つまり勝負は決まっていないのに男はのび太に勝利を宣告したのだから。
それを男は部下に説明する。

「見ろよ、この俺の傷を。この俺より先に撃ったんだぜ、それだけでもすげえとは思わねえか？
しかも、殺す殺す言ってた俺さえもこいつは俺を殺さなかった。アマちゃんだと思うやつはいるかもしんねえけど俺からしたら大したガキだよっ」

それを聞いた部下達は全員呆れ返る。しかし、レクシーただ一人はニヤニヤした顔で拍手をし出した。

「リーダーの言った通りだ。こいつの勇姿を見せてもらったぜ。地

球人てのは案外やるかもなっ、ハハハハハッ！」

レクシーの言葉と笑い声に賛同したのか他の部下たちも、

《んだなっ！！ギャハハハハッ！！》

なんということだろう。今までの重い空気と違って今はうるさすぎるほどの笑い声の合唱に周りは急に明るくなったのだ。

その中、男は膝をついて放心状態ののび太の方へ足を運び、前に立つと手を差し伸べた。

「お前の勝ちだ。よかったなっ！」

のび太は顔を上げるとそこには満面な笑みを浮かべた男が手を出している。

「えっ？僕……勝ったの？」

「ああっ、その通りだ。
今からこいつをメディカルルームで治療する。この傷なら治すのに時間はかからん。
付き添うか？」

するとのび太は急に安心感を得たのか、大きなため息をついて力が抜けたのかヘロヘロになった。それを見てクスッと笑う男。

「俺はアマリーリスのリーダーでこの宇宙船エクセレクターの艦長、ラクリーマ……ラクリーマ・ベイバルグだ。

お前は？」

のび太は恥ずかしいのか頭をかいてこう言った。

「ぼっ僕は野比……のび太」

「のび太か……変わった名前だなっ。よろしくなっ！」

ラクリーマと名乗る男はのび太に右手を出した。どうやら握手のつもりだった。

「あはっ！」

のび太も笑いがこぼれてラクリーマと握手を交わす。のび太はあの決闘で勝利を勝ち取ったのだ。

……

「うっ……うん……」

しずかは意識を取り戻したようだ。視界がぼやいていたがすぐに見えるようになった。

「しずかちゃん！」

「のっのび太さん……？」

しずかはベッドから起き上がると辺りを見回した。さっきの広い所とは違い、水色に光る証明にアクアマリン色をした謎の装置が至る所に置かれている奇妙な場所だった。

「ここはっ……それよりあのあとどうなったの！？」

不思議がるしずかにのび太は笑顔でこう答えた。

「ここは治療室。あのあとここの人達は僕たちを受け入れてくれたみたい」

「ええっ!?どうやって!?」

「そっそれは……」

二人が会話していると、足音が聞こえて段々近づいてくる。

「よおっ!足の具合はどうだ?」

「ひいっ!」

現れたのはラクリーマだった。彼を見たしずかは急に怯えだし、のび太の背中に隠れる。

しずかの怪我はこの男によるものだったからだ。

「悪かったって、そんなに怯えなくてもいいだろっ」

ラクリーマは苦笑いした表情でしずかをなだめようとする。

「あはっ、ラクリーマが僕たちを地球に送っていってくれるって!」

「ほっホントに!?」

驚くしずかに深く頷くラクリーマ。

「部下達と話をした結果、お前らを優先にして地球に送ることにした。

それまでは客人扱いだ、ここからだとちいと日にちがかかるが旅だと思ってゆっくりしていってくれ。
お前たちの部屋も手配するし、あとで部下に頼んでエクセレクター艦内を案内させる」

それを聞いたしずかは何か気の毒そうな顔をした。

「いいんですか……？そこまでしてもらって……」

「礼ならのび太に言ってくれ。元々お前らはあの場でくたばるハズだったがこいつの行動がお前らを救ったのだ。俺はただ約束を果たすまでだ」

それを聞いたしずかはのび太を見つめる。

「のび太さん……何があったの……」

「そっそれは……まあ男同士の約束かなっ？ハハハ……」

「？」

ワケがわからず頭を傾げるしずか。すると男は二人にこう言った。

「数時間後に食堂で宴会やるからお前らも参加しろ。
それまではお前らはここで待機しているといい。部下がお前らを案内する。
まあ……お前らの歓迎会みてえなモノだなっ
なら俺は仕事があるから戻る。体を休めとけよ、じゃあなっ」
そういうと手を振りメディカルルームから出るラクリーマ。
そのまま司令室へ向かおう右へ向くとそこにはあの女性、ユノンが

待ち構えていた。

「……どうゆうつもりなの、ラクリーマ……？
あんな子供たち受け入れた挙げ句、せっかくの地球侵略を棒に振るなんて……何を考えているの……？」

ユノンの口から出た言葉は非常に冷たくキツい言葉だった。
ラクリーマにそれを笑顔で返した。

「いいじゃねえかユノン、地球よりもいい星があんだろうがぁ？」

二人は並んでコツコツと通路を歩きだした。

「のび太さあ、ビビって震えてたが俺に立ち向かってきやがったろ？
今までの奴らは俺の前では命乞いをしたり、ただビクビクした小物だらけだった。そんな奴らにはうんざりしていたところだ。
だがあいつただ一人がしずかを守るために体を張って俺に反抗した……。
で、俺はこう思ったんだ。『ただ殺すには惜しい』ってな！」

それを聞いたユノンは単純な理由に呆れ返った。

「……あんたのその馬鹿な考えについていってらんないわ……」

その言葉に対しラクリーマは不敵な笑みを浮かべてユノンを見つめた。

「へっ、俺はそんな馬鹿な考えを思い付くのが大好きだがな。
まっ、気にすんな。他の星の侵略作戦の立て直しといこうかね！」
するとユノンはラクリーマにこう問いかけた。

「あんた……もし自分が死んだらあたしに引き継げっていってたけどあれ本気だったの……？」

「……俺は嘘はつかねえよっ」

「……」

二人はそんな会話をしながら、果てしない通路を歩いていった。

◇ＰＡＲＴ．６　ラクリーマ・ベイバルグ（後編）（後書き）

決闘は胸熱展開ですよね。次回はドラえもん達から始まります。

◇ＰＡＲＴ．７　宇宙へ（前書き）

今回からは地球にいるドラえもん達がついに宇宙に旅立ちます。

◇PART．7　宇宙へ

……時と場所は遡り、数時間前の地球では。

「あっアマリーリスだって……？」

「のっのび太達はそんなヤバい連中の所にいるのか！？」

「……っ」

エミリアとミルフィから全てを聞いた。アマリーリスのことも、そのラクリーマのことも。
ドラえもん達は驚きと恐怖で開いた口が塞がらない。

エミリアは眉間にシワを寄せて、震えるような声でこう言った。

「あなた達の友達がアマリーリスにいるなんて本当に危険すぎるわ……。もしかしたら殺されるかもしれない……」

《ええっっ！？》

それを聞いた三人はびっくりして飛び上がる。

「ドラえもんっ、お前のせいだぞぉ！！のび太達に何かあったらどうすんだよ！？」

「ジャイアン達こそ、どこでもドアをあんな乱暴に扱うからだっ！！どうしてくれんのぉ！！」

ジャイアンはドラえもんの首輪に掴み、二人は激しくもめあう。

「二人ともやめなよっ！それよりどうしたら二人を助けられるか考えなきゃっ！！」

「「元はと言えばスネ夫のせいだろっ！！」」

「ひいっ！？」

仲介するつもりが逆に責められてしまうスネ夫。

一方、エミリアは自分の宇宙船の方へ向き、ミルフィにこう言った。

「ミルフィ、ヴァルミリオンに戻るわよっ！！奴らを発見したと報告しなきゃっ！」

するとミルフィは困った顔をして顔を横に振った。

「ちょっ……ちょっと待ってヨ、よく考えたらあたしたち『アレ』にひっかかってないかしらっ？

帰還してもしバレたりでもしたら……っ」

「……今はそれどころじゃないっ！さっきのタイムテレビってモノを見た限りアマリーリスは近くにいるっ！これほどチャンスの時はないわ！」

「それに偵察機があんな姿になってちゃんと起動するの？直せるの？でないとあたしら帰還できないよ！？」

「……」

それを聞いて、やるせなくなりその場でへたりこむエミリア。

「ああっ……せめて地球に専用ドッグ、いやメカニックマンがいればなぁ……救難信号を出せば必ず来てくれるけど……完全に違犯で裁判かけられるなぁ……そうなったらあたしたち……っ」

絶望に明け暮れるエミリアとミルフィ。それを見かねたのか、ついさっき揉め事から立ち直ったドラえもん達はエミリアの傍に向かう。そしてドラえもんはあの偵察機を見て、何か決意したのコクッと頷いた。

「よし、あの宇宙船を直そう！！」

それを聞いたエミリア達は顔を上げ、ドラえもんに注目した。

「えっ……？直せるの……っ？」

「いっいくらなんでもムリだヨ！！」

二人は諦めじみた発言をするがドラえもんはニコッて笑ってポケットに手を入れた。

「まあまあっ、見ててくださいっ。まずは……あの宇宙船を引き揚げなきゃ……『かるがる手袋』！」

ドラえもんはポケットから青い手袋を計3双取り出すとそれをスネ夫とジャイアンに渡した。

「二人とも手伝って。まずはあれを地中から引き揚げるんだ！」

二人はコクッと頷く。さらにドラえもんから『タケコプター』を渡

されると下からドラえもん、ジャイアン、スネ夫の順で宇宙船の胴体に配置した。

「いくよっ！僕の合図で一気に上げるんだ、せ～のっ！」

ドラえもんの掛け声と共に三人は一気に力を入れた。すると、

《グクッっ！！ズズズっ！！》

すると土が盛り上がり、地中に隠していた残りの胴体が現れてくる。スネ夫達はその手袋の凄さに驚き、興奮していた。

「こりゃあスゴいや～っ！！」

「こんなデカイ物がまるで空の段ボールみたいに軽いぜっ！」

一方、その作業を見ていたエミリアとミルフィも『驚愕』という表情を隠せなかった。

「な……なんてことっ……あんな巨大なモノがいとも簡単に……」

「みっ未来の道具はスゴいなぁ……あたしも何か欲しいカモっ……」

流石に宇宙規模を誇る銀河連邦もこんな摩訶不思議の道具は本隊にないどころか見たこともなかったからだ。エミリア達が驚くのも無理がなかった。

「ストップストップ、今度は胴体をまっすぐ横にして地面に着陸させるよ！」

やっとコックピットのある前部が現れた。泥まみれになっている以外はへこみなど、気になる傷はない。

少しずつ、少しずつ下へおろし、ついに宇宙船と思われるモノの全体が姿を見せた。

「すっすげえっ！こんなデザイン見たことないぜ！」

「ぼっ……僕にも操縦できるかなぁ……っ」

二人が初めて見る宇宙船に眼を輝かせてはしゃぎ回っている中、ドラえもんはエミリアの方へ向かう。

「エミリアさんっ、故障した部位はどこですか？」

「ミルフィ、案内してあげて」

「アイアイサー、あたしがそこに案内するわ、ついてきて♪」

エミリアの指示を受け、ミルフィがウサギのようにピョンピョン跳ねながらドラえもんを損傷部位に誘導する。

全長、幅は主翼、尾翼含め、のび太の家の坪にぴったり納まるような大きさだ。こんなものがここに不時着して、よく爆発を起こさなかったものだ。

ドラえもんはそう思いながらミルフィについていくて、彼女は後部にある推進スラスターの場所に止まった。

「あちゃあっ……これはひどいわぁ……っ」

二人はその変わり果てた姿に唖然とした。左右ある内の片方はちゃんとした形を保っていたが、もう片方はそれは何か巨大な物体にぶつかったのか金属が深くへこみ、引きちぎられてボロボロに朽ち果てていて、スラスターとは全く言えない醜い物と化していた。

「……隕石の衝突でスラスターがやられて、ついでにエンジンにも支障があったから、アナタ達でも流石に直せるかどうか……」

「……」

しかしドラえもんはまるで直せると確信しているのか、笑顔でまたポケットに手を探り当てた。

「『復原光線』、ミルフィちゃん、見ててよぉ」

「？」

なにやら懐中電灯に模した物を取り出し、その壊れた部位に向ける。

《ピカッっっ！！》

ボタンを押すとレンズから蒼白の淡い光が損傷部を被いはじめる。

すると、

「ひゃあああっ！！スゴいスゴいヨぉ！！」

なんということだろう。あのボロボロになっていたスラスターが段々、削れてなくなったミクロ単位の金属部分が増殖し始め、そして連結、へこみも汚れもなくなり間もなく隕石に衝突する前の……いわゆる壊れる前の状態に戻ったのだった。

「うひゃあああっ！！エミリア、見てみて！！」

ミルフィは馬鹿にはしゃぎながらエミリアの元へ去っていった。その声にエミリアも駆けつけて、その直った姿を見に行くと。

「すっスゴい……スゴすぎるっ……」

エミリアももはや、いい意味で呆れかえっていた。二人はすぐに入り口に移動する。エミリアは扉に手を当てると、まるで金属がまるで流れる滝になったのようにサラッと液体と化し、下へ流れて内部の道が開かれた。

「入り口がこうなってたんだ、スゴいやぁ！」

「ドラえもん、やっぱりあれは宇宙船なのか？」

「うん。しかもとんでもなく進んだ文明の産物だよ」

いかに未来からきたドラえもんにしてもその技術の前に驚かざるおえなかった。

一方、エミリア達はコックピットでボタンやレバーを押して動かしていた。

反応はしているが、全く起動をしようとしない。モニターで損傷部位を見ると後部の中央付近に赤い光が点滅している。

「やっぱり、エンジンがイカれてる……」

「ドラちゃんに直してもらおうヨ！」

いいタイミングで三人もコックピットに入ってきた。

「マンガで見たのと同じだぁ……」

「地球には見たことのない機械でいっぱい……」

「エミリアさんどうしたんですか？」

二人は何か頼みごとをしたそうな顔でドラえもんを見つめている。それを強烈に感じ、苦笑いする。

「ドラえもんさん、お願いがあります。あなたの不思議な道具でエンジンを直してほしいのっ！」

「どうか……お願いできないでしょうか？」

ドラえもんは顔を赤くして丸い頭を撫でた。

「わっ……わかりました、そこに案内してください。スネ夫くん達はここで待ってて！」

そうゆうとドラえもんとエミリア達はそのエンジンルームへ向かった。

細い通路、装置がたくさん詰まった部屋の奥に設置してあるエンジンに明かり一つも見当たらない。傷は見たところなさそうだ。

「多分、中の動力炉が破損したんだと思うわ」

それを聞いたドラえもんは何かひらめいたかのように手を叩いた。

「待てよ、前に確かこんな出来事あったような……確かこれは……『タイムふろしき』！！」

「なっなにこれ？」

ドラえもんはポケットから時計の絵が描かれたふろしきを取り出し、エンジンにかぶせた。

「これをかけたモノは時間を遡ることができるんです。だから壊れる前の時間に遡れば……」

ドラえもんが分かりやすく二人に説明する。すると描かれた時計の針がグルグル回り始め、そして、

《ギュオオオっ！》

ついにエンジンが動き出し、周りの証明とランプがライトアップ。

それを見た二人は満面な笑顔になった。

「やったわっ！これでこの子を動かせるわ！」

「よかった、よかったヨっ！！」

……

二人は三人に深くお辞儀をして感謝を述べた。

「どうも本当にありがとうございました。これであたし達は帰ることができます」

「アナタ達、地球人は本当に素晴らしいヨ。なんとお礼を言ったらよいか……」

その言葉に三人はデレデレして頭をかいている。特にエミリアみたいな美しい女性にお礼を言われて嬉しくないワケがなかった。

「いやぁ～それほどでも！」

「てっ照れるなぁ！！」

するとエミリアは何か思いついたように手を叩いた。

「そうだっ！あなた達に何かお礼をしなくちゃっ！」

「そうだヨね、命の恩人だものっ！！」

それを聞いたドラえもん達は三人で顔を見合ってコクっと頷いた。

そう、三人の考えは一致していた。

三人はゆっくり深呼吸して声を合わせてこう言った。

「「「エミリアさん達と共にのび太達を助けに行きたいですっ！！」」」

「「！？」」

笑顔だったエミリア達の表情は一転して顔がいっそう険しくなった。

「……ダメよ。アマリーリスに挑むつもり？危険すぎるわっ！」

「……」

それを聞いた三人、とりわけスネ夫とジャイアンは納得できるハズがなかった。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！？さっきお礼をするって言ってたじゃないかよ！」

「そうだそうだ！！」

しかしエミリアはそれを否定するかのように二人にけしかけた。

「ふざけないでっ！あなた達にアマリーリスは何なのか教えなかったかしら……？
奴らは……人を殺す、強奪などの暴虐に何のためらいも持たない極悪人の集団なのよっ！！
あたし達、銀河連邦でも手こずってる相手なのにあなた達に何ができるっていうの！？」

それ聞いたドラえもんも負けじと反論する。

「僕たちはのび太君としずかちゃんを助けたいんだ。僕の持ってる秘密道具は使えるものを全部持っていくっ！！
絶対あなた達の役にたつはずだっ！！」

エミリアは黙り込む。確かにこの偵察機をいとも簡単に直したドラえもんの道具は目に見張るものがある。これらを上手く活用すれば

もしかしたらアマリーリスを……。
しかしエミリア達は軍人、ドラえもん達、特にジャイアンとスネ夫の二人は地球という保護区域惑星の一般人で子供。
そんなワケで一般人を巻き込むのは銀河連邦にとってはもってのほかであった。

「気持ちは非常にありがたいケド……あなた達地球人はあたし達銀河連邦に保護される立場なの。
しかも、あなた達に助けてもらったからにはあなた達をなおさら危険な目に遭わせたくない……」

するとジャイアンが前に出て、エミリア達の目の前で頭を深く下げた。

「お願いだっ！二人は……二人は友達なんだっ！！友達が危険な目に遭ってるってのに自分達は何もできないなんて俺は嫌だっ！！」

さすがジャイアン、友達のこととなると今までの乱暴者と違って友情を大切にする頼もしい少年だ。
それに感化されて二人もその場で深く頭を下げる。

「お願いします！！どうかっ、僕たちもお供させて下さい！！」

「のび太君達を助けるためならあなた達の役に立てるように必死に頑張ります。どうかっ！！」

明らかに半端な気持ちで言っていない、その気迫に圧倒されるエミリア達。

「えっ……エミリア……どうするっ？」

エミリアは腕を組んで目を瞑る。数十秒間悩んだ末、エミリアは三人の前に立って手を差し伸べた。

「……あなた達がそこまで友達を助けたいならわかったわっ！ついてきなさいっ！」

「エミリア……っ！！」

それを聞いた三人は顔を上げて満面な笑みをして飛び上がった。

「「「やったあああっ！！」」」

するとエミリアはまた腕組みをして三人に対して真剣な表情をした。

「しっかり聞いてね、これは遊びじゃない。生死をかけた救出だってことを忘れないでね？
しかもあなた達のその友達は最悪の場合、もう殺されているかもしれないわ。その時は覚悟なさい？」

真面目な話に三人の顔は真剣な表情と化し、コクっと頷いた。

「母ちゃんのところに行ってちょっと旅行に行くって言ってくる！」

「あっ僕も！！」

「そうだね。エミリアさん、僕たちはちょっと自分の両親に数日離れるって言ってきます。待ってて下さい」

そう言うと三人は山から降りて行った。それをただ無言で見つめるエミリアとミルフィ。

「エミリアっ……いいの？」

「ふふっ……あの子達、その友達はよほど大事なのね。大丈夫、全責任はあたしがとるわ」

「エミリア……」

……

そして、裏山の頂上に集結する三人。様々な思いを込めて、エミリアの宇宙船に乗り込む。

「ちゃんとベルトで固定して。一気に宇宙に飛び出すわよ！！ミルフィ、エネルギーゲージ、各機能を確認！！」

「アイアイサーっ、エネルギー収束完了、各機能異常なしっ！いつでもいけるヨ！！」

《ガシューーッ！ウィィィッ！》

エミリアが操縦幹をぐっと引くと同時に宇宙船も瞬間に飛翔。向きは大空に向かって進路をとった。

「最大出力でいくわよっ！歯をくいしばっててね！」

ペダルを踏み、左出前のレバーを一気に前に押し込んだ。

《ドンッッ！！》

「「「ムギィィァっっ！！」」」
急発進と共に超高速のスピードでぐんぐん上昇する。しかしコックピット内では、エミリアとミルフィの二人を除いた三人の顔は酷く歪んでいた。
それを見て、ミルフィはため息をついた。
「アナタ達には少々キツかったかしらっ……」
「……ちょっとやり過ぎたわね……っ、少しスピードを落としましょっ」
少しスピードを緩める頃には、もう地上がかなり小さくなり、日本列島全体が見えていた。
「うわぁあっ……もう地球の丸い部分が見えてるぜっ！」
「ある意味最高の旅行かも♪」
「まったく……緊張感ないんだからもう……」
成層圏を飛び出し、エミリアは全員にこう言った。
「今からワープで一気に銀河系の外まで出るわよ！！
数十分間ワープホール空間の中を超高速で通るから酔うかもしれないけど何とか頑張ってね！」
「「「はいっ！！」」」
三人は身を引き締めベルトを握り締めた。

「ミルフィ、ＮＰエネルギーを前方に収束してワープホールを発生させて！！」

「いくわヨ～っ♪」

ミルフィは前にある端末機を高速で打ち始める。可愛らしい姿とは裏腹に恐ろしい速打ちだ。
さすがは銀河連邦所属といったところか。

《ズオオオっ！！》

宇宙船の前方にまるで渦巻きのような空間の穴、ワープホールが発生した。

「行くわよ！！」

エミリアの掛け声と共に宇宙船はワープホールへと突入していった。
その瞬間、ワープホールはすぐに消えてなくなった。

……今頃、のび太達は酷い目にあっていると思い込んでいる三人。
真相を知らずに果たしてドラえもん達はのび太達と合流することができるのだろうか……？

◇ＰＡＲＴ．７　宇宙へ（後書き）

この展開は元々、クレしんで考えてたんですよね……。

◇ＰＡＲＴ．８　歓迎（前書き）

キワドい部分があるので注意！

◇ＰＡＲＴ．８　歓迎

同時刻、アマリーリスの母艦『エクセレクター』内の大食堂では……。

“お前ら、今日から数日間、共に暮らす地球人ののび太としずかだ。こいつらはエクセレクター内のことはわからねえことばかりだから優しく教えてやれ。
あと仲良くしてやってくれっ！！
こいつらを痛みつけた奴は俺がぶっ殺すからなっ！！覚えておきやがれっ！”

“了解しました大将っ！！”

ラクリーマは馬鹿でかい声で横の席で着席しているのび太達を説明し、その部下たちもラクリーマに負けないくらいの大声で応える。

“よっしゃあっ！！なら酒を飲めっ！！飯を食えっ！！今日は無礼講じゃあっ！！”

“飲みまくれぇっ！！食いまくれっ！！”

大歓声の中、ついに来る宴会が始まった。普段は荒くれ者の極悪人の大群が恐い素振りを見せず、満面な笑顔で酒を飲み、大食いし、仲間同士で喋りあったりして周囲は非常に熱い熱気がこもっていた。

「すっ……すごいや……ははっ……」

「えっえええっ……」

さすがにのび太達も、その物凄いノリについていけるか心配していた。その証拠に二人とも表情が苦笑いである。

「お前らも飲め、ほら！」

ラクリーマはのび太達に酒と思われる綺麗な赤色の飲み物が入ったコップを押しつける。が、流石の二人は未成年なので飲めるハズがなかった。

「ぼっ僕らお酒飲めないのっ！！子供だしっ！」

「……ええっ、悪いですけどちょっと他の飲み物に替えてもらっても大丈夫ですかっ……？」

二人は無理という意味で手を横に振る。ラクリーマはポカーンとした顔をした。

「酒飲めねぇのか？俺は子供の時とかガンガン飲んでたけどな。まあいい、ならあそこのマシンに行けば何かお前らでも飲めるモンがでてくっから行ってこいよ！」

壺のようなヘンテコな形をした機械がある所に指を指し示した。二人は立ち上がり、そこに向かう。

「レクシー、ちょっとこいよっ！」

ラクリーマが大声で呼ぶと仲間と楽しく話をしていた彼はすぐにラクリーマの元を向かった。

「何か御用で？」

「明日、あいつらに艦内の案内を頼む。大丈夫か？」

直々の指命にレクシーはニイッと笑ってコクッと頷いた。

「承知しました。リーダーのご命令とあらば！」

「そんな堅苦しい言い方はやめようぜ！
まあお前は真面目なのがよい所なんだがな、気合い入りすぎてあいつらを置いてきぼりにすんなよ？」

「へへっ、すんません……っ」
レクシーは顔を赤くして頭をポリポリかいでいた。
するとラクリーマはのび太達の方へ向いて、大声でこう言った。

「二人共、ちょっとこいよ！」
その言葉に彼の元に向かう二人。するとレクシーがのび太達を見つめていた。

「紹介してなかったな。こいつはレクシー、並みいる組織員の中でも全員から信頼の高い奴だ。明日こいつに艦内を案内させるから挨拶しとけ」

のび太達はちょっと引き気味だった。なぜなら、のび太達を最初に発見し、自分達に本気で発砲してきた男だったからだ。
ビクビクしている二人を見て、レクシーは満面な笑みをして二人の肩をバンバン叩いた。

「おいおいっ、シャキッとしろよ！！明日は俺が艦内を案内するか

らよろしくなっ！ワハハハハッ！！」

あまりにもあの時のノリと違い、苦笑いするのび太達。

「よっ……よろしくお願いします……レクシーさんっ」

「ははっ……」

するとレクシーは親指を突き立ててのび太の腹に手を押し当てた。

「分からないことがあったら俺に聞くといいっ！リーダーがお前らを地球に送るといったからにはたとえこのエクセレクターが大破しようと絶対お前らを生きて帰してやるよっ！」

《バキィッ！！》

「いってぇぇぇっ！！」

ラクリーマはレクシーの頭を右手の拳でかち殴った。彼は頭を押さえてうずくまった。

「レクシーっ！縁起のワリィこといってんじゃねえっ！！ホントにエクセレクターが大破したらどうすんだぁ！？たくう……おめえはいつも先走りすぎなんだよっ！少しは落ち着けってのっ！！

……とまあ、こいつのいう通りだ。約束は絶対守る、だから安心してここを楽しんでくれ」

それを聞いた二人は安心感と二人のコントみたいなノリの良さに表情が緩み、笑いだした。

「ぷぷっ……ハハハッ！！」
「うふっ、ふふふふっ！」

それを見たラクリーマとレクシーもつられて笑いだす。

「そうだっ！笑え笑えっ！！」
「いいぞいいぞ！ワハハハハッ！」

すると笑い声につられて周りの部下達ものび太達の元へやってきた。

「なあっ！地球のことを教えてくれよっ！」
「俺も俺も！！」

全員がのび太達に期待を寄せて造り笑顔ではなくごく自然の笑顔で寄ってくる。それを見た二人は嬉しくも恥ずかしくなり、顔を赤くして顔を下へ向いた。

「あっ……いやぁ……ははは っ」
「……」

それを見たラクリーマはニコっと笑い、一人とことこ食堂から出ていった。

彼は長い通路の先にあるワープ装置『テレポーター』を使い、自分の部屋である司令室へ戻る。

“カタッカタッ……”

真っ暗な司令室内の奥をみると、青い光を出して何やらコンピューターのキーを高速で叩く音が聞こえる。
ラクリーマは光の場所に行くと、ユノンがただ一人仕事用のコンピューターを無言で動かしていた。

それを見たラクリーマはフッと笑ってユノンの隣へ移動した。
「さすがだなユノン。俺たち野郎組は宴会で楽しんでる時に一人で仕事とは……っ」

しかしユノンはラクリーマを見もせず、ただ黙々と画面に集中している。

「……邪魔をしないで、仕事中よ」

いつも通りで素っ気ない返事を返すユノン。ラクリーマもいつも通りのことなので、軽く笑い隣のイスに座った。するとラクリーマはユノンにこんなことを聞いた。

「お前、のび太達をどう思ってる？」

ユノンは少し間を空けて静かに口を開いた。

「……別になんとも。あんたの決めたことだから口出しはしないわ」

「ふっ、そうかっ」
二人の間に沈黙の雰囲気が漂う。ユノンは非常に無口なため、話が続かないのは当たり前である。しかし加入時のユノンと比較すればこれでも喋るようになったほどである。
これはアマリーリスの全員が承知していることであるので特に問題

ではなかった。

「……」

ユノンは立ち上がるとラクリーマに背を向けた。

「どこへ行くんだ？」

ラクリーマの問いに彼女は立ち止まり長い髪を掻き寄せる。頭上に生えている犬の耳がピクピクと動いている。

「休憩よ」

「……」

突然ラクリーマは立ち上がるとユノンの所へ向かい、彼女を掴むとすぐそこにあったベッドへ押し倒した。

初めはびっくりしていたが、徐々に『ナニを』したいのか分かると彼女はため息をついた。

「あんた……まさかシたいの？」

ラクリーマはユノンに顔を近づけて優しい笑顔を見せた。

「ああっ……最近ムラムラしてたからなっ。久々にヤらねえか？」

ユノンは珍しく軽くだが笑い顔を見せた。

「あらっ、今日はきっぱりと言うのね？
いつもは口説き文句を使いまくるのに……」

「お前に口説いても意味がないことがわかったからよ。いいじゃねえか、今は誰も近くにいねえしよ？」

彼女の膨らんだ胸へ彼の右手の人差し指が伝って来ている。左の義手で彼女の顔を優しく触り、まるでホストが女性客を口説いて高い酒をオーダーさせる時のように自分なりに甘い笑顔で彼女を見つめる。

祖先が犬の異星人であるため、その特徴を少なからず受け継いでいるユノンだが、全く関係にないほど非常に美しい女性である。冷めた部分も彼女の美しさをいっそう際立たせている。

「ふふっ、いいわっ……けど優しくしてね……？」

彼女は静かに瞳を閉じる。ラクリーマもついにその気になったと感じ、自分も目を閉じて唇を彼女の唇に近付ける。

二人の熱い吐息が互いに当たる。二人の唇が重なる距離はもう数センチほどであった。

しかし、ユノンはゆっくりと瞳を上げて、

《ドゴッ！！》

「@∇O&★◆■▽※っ！！」

彼の急所……もとい男なら誰でもわかる泣き所、『局部』に彼女は強烈な膝蹴りをおみまいしたのだった。

ラクリーマはあまりの激痛にベッドから転げ落ち、のたれうち回っている。

一方、ユノンは何事もなかったかのようにそうそうと立ち上がると彼に背を向けてこう言いはなった。

「うふっ、気が変わっちゃったの……。また今度ねっ……」

「ちくしょ……その気にさせといてあんまりすぎんぞ……」

「あら、さっきの一撃であなたの大事な『アレ』、萎えたでしょ？じゃあね……」

そう言うとユノンは司令室から去っていった。ラクリーマはやっとの思いで立ち上がるとベッドにドサッと座った。その顔は痛みもあるがその『生物ならこその欲求』を成し遂げられなかったことに対する不機嫌な表情が浮かび上がっていた。

「あのアマ……っ、覚えておきやがれ……っ」

……

数時間後、宴会が終わりのび太達はレクシーに各部屋へ案内された。

「うわぁぁっ……」

「……」

広い。あまりにも広い。例えるならホテルのツインルーム、いやそれ以上ある。ベッドはともかく、地球におけるトイレや風呂と言える概念の設備も完備していた。

あと個人用のデスクやパソコンのような不思議な装置までも配置されている。

のび太達はその充実感あふれる部屋に圧倒されていた。

「これが各個人の部屋だ。んっ、どうした？」

レクシーは頭を傾げる。目が点となっているのび太達を不思議と思ったのだろう。

「こっこれが……一人一人の部屋なんですか……っ？」

「ああっ。何を不思議がってるんだ？」

それを聞いたのび太達は徐々に笑顔になっていき……、

「いいっっやっほぉぉっ！！」

「サイっコーーっ！！」

歓喜を上げながら二人で部屋内を駆け回る。

レクシーはそんな二人を見てフッと笑い、頬を掻いた。

「で、ここは誰の部屋にするんだ？」

レクシーがそう聞くと二人は顔を見つめあった。

「しずかちゃん、どうぞ」

「の……のび太さんこそどうぞ」

「いやいやしずかちゃんが」

「いえのび太さんに！」

引こうとしない譲り合いにレクシーがついに痺れを切らした。

「おめえら、この部屋だけじゃねえんだっ！！変な小競り合いしてんじゃねえっ！」

「「はっ！？」」

二人は苦笑いして、レクシーを見つめた。彼も呆れてため息をつく。

二人に部屋の案内が終わり、

「そうだっ、二人ともついてきなっ。近くにいいとこがあんだ、連れていってやるよ。」

「「……？」」

のび太達は突然手招きされ、彼についていく。また長い通路をコツコツと歩いていく。

「レクシーさん……どこへ行くんですか？」

彼はのび太の問いに、ニイッと笑って二人の方へ振り向いた。

「お前ら、絶対に驚くぜっ！！」

「「……？」」

そして数分後、彼らの着いた場所は……。

「「うわあああっ、すっ……すっごぉ～～いっ！！」」

それは３６０度全体、辺り一面外の宇宙が見えるように張り巡らさ

れたウインドウ。広さはざっと自分達が通う小学校のグランドの二倍、いや三倍の面積を誇る広大な広場、のび太達はその圧巻な風景に目を疑った。

「ここは休憩広場だ。俺達はもちろんリーダーやユノンさん達の近くにいる者はよく来るぜっ」

三人はその中に足を踏み入れる。外は、惑星や銀河が見える宇宙空間ではなく、淡く静かに辺りを照らす蒼く不思議な粒子が流れる神秘的な空間だった。それを不思議に思ったしずかがレクシーにこう聞いた。

「レクシーさん……この外は……宇宙なんですか？」

「いや、今はワープホール空間の中だ。地球までの道のりは遠い、だからワープホールを使って一気に空間をすっ飛ばして進むんだ。この調子だとあと数日で地球のある銀河系まで辿り着けるだろう」

「「……ワープホール？」」

頭を傾げるのび太にレクシーはため息をつく。

「ワープホールも知らねえとはどんな文明の遅れた惑星だよ、地球は……？」

するとしずかが何かを閃いたのか、手を叩いてこう言った。

「あたしもよくわかんないけど……どこでもドアみたいな原理じゃないかしら？」

その発言にのび太は納得したのか手を叩いた。

「何だそういうことかっ！それを早くいってよぉ！」

「ははっ……」

「……」

一人で盛り上がるのび太に対して、苦笑いする二人。

三人は中央部に行くとソファーがあったのでそこに座った。しかし、レクシーは座らず二人にこう言った。

「今から俺はちょっと用事があんだ。ここにいるならいていいぞ。あとはお前らで帰れるな？」

それを聞いて二人はコクッと頷いた。

「明日は早いぞ。俺がお前らを迎えに行くからな、ちゃんと起きてろよ！」

そう言うとレクシーは二人から去ろうとする。すると、

「レクシーさん！！」

「ん？」

のび太がレクシーを呼び止め、笑顔でこう言った。

「今日はありがとうございます。明日はよろしくお願いしますっ！

！」

「あっ……レクシーさん、本当に今日はありがとうございましたっ」

しずかもつられて二人はレクシーに深くお辞儀をした。するとレクシーは軽く笑って二人に対し、こう言い返した。

「ウレシいねぇっ……、けど礼ならリーダーに言いなっ。俺はあの人の命令に従っただけだ」

「「えっ？」」

するとレクシーは最後にこう言った。

「リーダーはマジで尊敬に値する人だ。あの人に気に入られて損はないぜ。それじゃあなっ！」

そう言うとレクシーは二人から去って言った。

「どっどうゆうことだろ……？」

「……さあ……っ？」

二人はその言葉の意味も理解出来るハズもなく、悩んでいた。すると、

「なんだお前ら、いたのかっ」

二人は横を振り向くとラクリーマが二人を見ながら立っていた。

「あっ……」

「ラクリーマさん……」

ラクリーマは二人の横に座り込むと屈託のない笑みを浮かべて二人を見つめた。

「宴会は楽しかったか？あとここはすげえだろ？」

「うん」

「ええっ」

二人をそう返事をするとラクリーマは上の天井を見上げる。

「それはよかったなっ」

その後、三人はしばらく沈黙する。しかし、のび太が何か思ったのかラクリーマの方へ向いてこう言った。

「ラクリーマ……？」

「なんだのび太？」

のび太は少し暗い表情をしてこう聞いた。

「……あの時、地球を侵略するとか言っていたけど……今まで侵略とかしてたの……？」

「えっ……地球……侵略……？」

しずかはその事を初めて聞いたのか、耳を疑った。ラクリーマはそれに対して笑みを絶やさずこう言い返した。

「ああっそうだ。侵略をした、そこに生存している種族全員を殺した、略奪もした」

《!?》

信じられないことだった。自分達を地球に送ってくれる人達はとんでもない悪の組織だったのだ。徐々に恐怖と悲哀、そして怒りをこめた表情と化していく二人。

しかしラクリーマの表情からして全く反省の色を示していないようだ。

「幻滅したか?まあそう言うことだ」

すると、震えるのび太は立ち上がりラクリーマにこう叫んだ。

「ひっ酷いよ!!あんた達は……あんた達は命をなんだと思ってるんだぁ!?」

「そっそうだわっ!!あなた達はそれを悪いことだと思ってるの!?」

確かにそうだ。平和と共存を愛する地球人の二人がそれを黙っているわけがなかった。しかしラクリーマは笑みを全く消さなかった。

「ふっ、俺らにとっちゃそれが仕事でも生活でもあるからな。お前らがなんと言おうと何にも感じちゃいねえよ」

「「なっ!?」」

すると彼は立ち上がり、二人を見下ろしてこう言った。

「俺はともかくあいつらはこの道しか生きていく他はねえんだよ。たとえ心までお前らの言う悪で心身染めようと、相手の物を奪ってでも、殺して血まみれになろうと、生きるためならなんだってするようになる！！それが俺達『アマリーリス』なんだよっ！！」

「「……」」

二人は青ざめた表情で黙り込む。何か説得力がありそうで、それに自分たちの思いがかき消されてしまいそうで複雑な気分になる。そんなのび太達を見てラクリーマはしゃがんで二人を見つめて優しい笑顔でこう言った。

「別にのび太達が悪いって訳じゃねえ。お前らにはお前らの信念があってこそじゃねえか。
俺らは俺らの信念ってモンがあるんだしな」

それを聞いた二人を顔を上げて、彼を見つめた。すると目を瞑り、フッと軽く笑って静かに口を開いた。

「お前らと俺らは根本的に考えが違う。そんな俺らがこうして出会ったんだ。これほど面白いことがあるかよ？」

「お……面白い？」

「……？」

二人は『面白い』という言葉を理解出来ず、頭を傾げる。それを見たラクリーマはニヤッと笑うと二人に背を向けた。

「わかんねえならそれでいいさ。なら俺は戻るぜ、じゃあなっ」

そう言い残し、彼は二人から去っていった。

「どっ……どういう意味だろう……？」

「けど……ラクリーマさんて何か不思議な感じがする……」

二人はそれぞれ複雑な考えと共に、段々彼が遠くなっていく姿をただただ見つめていた。

◇ＰＡＲＴ．８　歓迎（後書き）

ちょっとのび太側の話が続きます。

◇ＰＡＲＴ．９　エクセレクター艦内〔前編〕

……

「ドラえも～ん！」

「のび太君どこにいってたんだい、心配したんだよ！！」

二人はあの裏山で再開を果たす。抱き合った後、互いの手を掴み、ぐるぐる回り始めた。

「それがさあっ！！僕、すんごい宇宙旅行をしてきたんだよっ！」

「ええっ！？どっどうやってっ！？」

ドラえもんは驚いたような口振りをする。のび太は後ろへ振り向いて、指を指した。

「僕ね、ラクリーマっていう……あれっ？」

のび太の後ろには誰もいない。

「あれっ、おかしいな……？確か着いてきたハズなのに……」しかし、次の瞬間！！

《ドワオオオンっ！》

のび太の住む町の方から何かが大爆発したかのような大音響が鳴り響き、驚いた彼はすぐに町の方へ振り向いた。すると……、

「はあっ……ああっ……」

なんと町は紅蓮の炎に包まれて、見るも無惨な姿に成り果てていた。
家は倒れ、ビルは崩れ落ち、人々が悲鳴を上げながら逃げ回っている光景を目にした。
「どっ……どうしてぇ……あれっ、ドラえもん？ドラえもん！は？」
さっきまでいたハズのドラえもんがまるで神隠しにあったかののようにいなくなっていた。

「ドラえも～ん！！」

ドラえもんを呼ぶ声が辺りにこだまする。が、本人の返事はすることがなかった。
しかし、

「よお、のび太ぁ！」

「！？」

どこかで聞き覚えのある声に、彼はすぐにその方向へ振り向いた。
それは……、

「らっ……ラクリーマ……レクシーさんっ……」

そこにいたのはラクリーマとレクシー、その他一同のアマリーリスの組織員がのび太に殺気を込めた視線を注いでいた。

「のび太、ワリィなっ！！地球侵略はしねえっつったけどありゃあウソだっ！！」

「なっ……なんだってっ……！？」

のび太は耳を疑った。それはあまりにも衝撃が走り、それと同時に恐怖や怒り、それ以上の悲しみが込み上げてくる。

「ラクリーマひどいよぉっ!!よくも僕の町をっ!!」

その訴えに反し、ラクリーマはニイッと笑ってこう言いはなった。

「けっ、あんな約束を守る奴がどこにいるか?俺らはこれでも幾多の惑星を侵略したアマリーリスだぜ?騙される方がワリィんだよ!」

のび太の瞳から涙が込み上げてくる。周りではのび太を憐れんでいるのかニヤニヤと笑っている連中がほとんどだった。

「どっドラえもんはっ!?」

「なんだそいつは?ああっ、この青タヌキのロボットか?」

するとラクリーマはある部下を呼び、のび太の前に立たせた。しかし、その手に持っていたのは……、

「どっ……ドラえもんっ!!?」

なんとドラえもんの顔以外は全て無くなっていて、いわゆる生首のような無情の様と化していた。

のび太は家族であり親友のドラえもんがあのような姿になったことに絶望、それにしか頭になく、涙すら出てこなくなった。

「どっ……ドラえもん……っこんな……」

のび太は膝をつき、顔を下げて無気力と化した。そんなのび太を見て、ラクリーマ達は牙を剥き出しにする。

「心配すんな、しずかやおめえの仲間も同じ道を辿ったしてめぇもこいつらと再開できるぜ。地獄でなっ！ギャハハハハッ！！」

ラクリーマ達の狂喜の笑みが加速し、辺りには暴虐の晩餐と化していた……。

……

《のび太ぁぁっっ！！》

「うわあああああっっ！！……あれっ？」

のび太は気がつくと、部屋のベッドに寝転がっていた。目の前にはレクシーが歯ぎしりを立てて彼を睨み付けていた。

「れっ……レクシー……さんっ？」

「たくっ、いつまで寝てンだ！？何回叫んでも起きなかったじゃねえか！！」

のび太はすぐにベッドから起き上がる。さっきのは夢だったのか、体が汗でびっしょりで肌寒かった。

しかし、夢だと考えたら安心感になりつつも何か複雑な心境だった。多分、昨日のラクリーマの話を聞いたせいなのかもしれない。

「案内するから早く着替えろ。しずかが待ちくたびれてるぜ？」

「はっはいっ！」

のび太はパンツとシャツだけだったのですぐに服に着替え、廊下に出た。
そこにしずかがクスッと笑って待っていた。

「ホントのび太さんはねぼすけさんねっ！」

「いっ……いやあっ……」

のび太は顔を赤くして頭を撫でる。
するとレクシーが二人の前に立ち、手を腰につけて胸を張った。

「っしゃっ、なら行くか？間違ってもはぐれんなよ。艦内は非常に広いから探すのに骨がいる」

二人はうなずき、長い廊下を歩き出す。
するとのび太がこう質問した。

「レクシーさん、あの円盤みたいな乗り物には乗らないんですか？そのほうが速く進めるんじゃあっ」

「あれは艦内の巡察とか緊急時用なんだ。俺たちは身体能力が資本だから、あんなもんに頼ってちゃあ体が鈍る。だから全艦内エリアを仕事で回る時以外は使用禁止だ」

「そうですかぁ……っ」

のび太はがっかりして肩を落とす。レクシーはそんなのび太に励ますように促す。

「まあ、この艦内にはそのためにテレポーター行きとか各エリアへの最短ルートが沢山あるし1日で色んな場所に行けるから安心しろ」

それを聞いて彼は安心したのか大きな息を吐いた。

「まあのび太さんたらっ、ふふっ」

しすかも彼を見てクスッと笑った。

「なら最初は中央部、エリア5へ行くか。お前らとリーダーが初めてあった場所、中央オペレーションセンターがあるところさっ」

レクシーは右腕をぐるぐる回し、張り切りながら陽気に二人を率いて行った。

……

エリア5。

エクセレクター内の中央部でいわば、ここでほとんどの管理、運営がされている場所ある。

またのび太がラクリーマと決闘した場所、オペレーションセンターがあるエリアである。

のび太達はそのエリアの通路を歩いていると誰かが向こうから近づいてくる。どうやら見たことのある女性に見えるが。

「ユノンさんだ、お疲れさまですっ！！」

それはユノンであった。彼女は右手にパネル機器のようなデバイスを持ち、こちらを見ている。レクシーは足を揃えてお辞儀をした。

「……ラクリーマの隣にいた人だっ……キレイな人だなぁ……」

「ほ……ほんとに美しい人だわぁ……」

のび太どころか同じ性別であるしずかでさえ、見とれてしまうほどの美しさだった。しかしその瞳は寒気がするほどの蒼い瞳をしていた。

「……」

ユノンは何も言わず、レクシーに軽くうなづくと三人とは反対方向へすれ違っていった。

「あの女の人、なんか気難しそうな雰囲気だったけど」

「ええっ」

するとレクシーは不思議そうに会話をする二人に、フッと笑いかけ、こう説明した。

「あの人はアマリーリスの副司令官でリーダーの秘書を務めるユノンさんだ」

「ええ～っ？あの人が副司令官っ！？」

「あんな美しい人が……っ？」

あまりのギャップに二人は驚きの声をあげる。彼の説明はさらに続く。

「ククククッ、確かにな。あんな美人さんが俺らより立場が上だなんて信じられないだろ？

けどな、あの人もホントに出来る人だからな、リーダーや俺ら野郎組もあの人を非常に信頼してるぜ」

三人はまた歩き出し、彼はユノンについて話はじめる。

「あの人は俺らの仕事である侵略作戦をリーダーと作成するのが主な仕事だ。

戦闘、侵略時はエクセレクターの代理艦長を務め、艦内の指示や戦線にいる戦闘員に指示をする役目も兼任してる。

リーダーは自ら目標地で先陣に立って俺らに直接指示するからサポートしきれないところや、不明な点を調べ、俺たちに指示してくれる。

それ以外の仕事は雑務や艦内で調査、各エリアの巡察などの色々な仕事をしている。まあ……非常に忙しい人だなっ」

言葉を失うのび太達。話の聞くかぎり多大な役割を任されていると知ったが、小学生ゆえか、全く想像がつかない。

しかし、どうしても二人に『侵略』という言葉が頭の中で引っ掛かる。やはり昨日の会話が問題であった。

するとレクシーは腰を低くして、二人の耳元でこう呟いた。

（気をつけろよ、あの人は非常に無口で冷めてるけど、キレると下手したらリーダーより怖いからな……）

（（ええっ……ホントですかぁっ……？））

（ああっ、リーダーが正座させられてユノンさんに説教されてるのは、もはや日常茶飯事だからなっ。仕事上はともかく……まあ……たわいないことをしてだなぁ）

（あっあのラクリーマが……たわいなことって……？）

するとレクシーは珍しく落ち込んだ表情をして、ため息をついた。

（……覗きだっ……ユノンさんのな……リーダーは何回やって、バレて説教されても懲りねんだよっ。あと、ユノンさんの部屋に忍びこんだりしてイタズラしたり、セクハラしたりな……）

（（……））

二人はラクリーマのことに対して、非常に呆れ果てて、何と喋ったらいいのかわからなかった。

「そろそろオペレーションセンターだ。昨日見たしそんなに説明することはねえから、大まかなことを教えて次のエリアに行くか」

三人は数分後、目的地に着いた。

周囲には沢山の組織員が各モニターや装置を扱っていた。どうやらここではこの艦の操作も担当しているらしい。レクシーは二人にそう教えた。

「よおレクシー、地球人のおもりか？わははは！」

「うるせえっ、案内だっ！」

彼は仲間達の所へ行き、笑い声を上げなら話をしている。そんなレクシーを見て、微笑ましく思うしずか。

「レクシーさん、楽しそうよね。ねえ、のび太さん……？」

しかしのび太は妙に落ち込んでいるような表情だった。顔はにっこりとしているも何か腑に落ちないかのようだった。

「のび太さんどうしたの？考え事？」

「うん。ドラえもん達、今なにしてるかなって……っ」

「あっ、そうだわ。けど地球に帰れるんだし、あんまり心配しなくてもいいんじゃないかしら？」

「そうかな……？」

二人でしんみりとした話をしている矢先、レクシーがのび太の元へ帰ってくる。

「わりいわりいっ！！ついあいつらと話が長くなってなっ……んっ、どうしたんだお前ら？」

妙に暗い雰囲気ののび太達を感じて、レクシーが声をかけるも、二人はすぐに首を横に振る。

「なっなんでもないです！！」

レクシーは首を傾げてきょとんとした表情をした。しかし、すぐに手招きをして歩き出した。

「次は訓練エリアだ。俺ら戦闘員にとってこの艦内の仕事場と言えるエリアだ。多少、汗臭いかもしれないがまあ……いいだろ」

「はあ……っ」

「汗……臭い……っ」

妙に乗り気ではないのび太達。まあ……男の汗の匂いなんかわざわざ嗅ぎに行く気にもならないだろう。

しかし、案内してもらっている立場で行きたくないと発言するのも気が引けるのだった。

そう思いながら、二人はレクシーと共にオペレーションセンターをあとにした。

◇ＰＡＲＴ．９　エクセレクター艦内〔前編〕（後書き）

書いてる自分が言うのも何ですがラクリーマ〔笑〕

◇ＰＡＲＴ．１０　エクセレクター艦内〔後編〕（前書き）

後編です。

◇ＰＡＲＴ．１０　エクセレクター艦内〔後編〕

……エリア１０、訓練エリア。

ここでは各戦闘員が侵略や戦闘に備えて体力や戦闘技術などを向上させ、生き残るために日々鍛練している。

様々な訓練ルームがあり、射撃場、座学施設、トレーニング場などがある。

「よお、レクシー！！」

その中の一つ、トレーニング場へ足を踏み入れる三人。中で必死にトレーニングしている者が活動を停止して声をかける。

「うわぁ……」

「スゴい熱気……」

辺りは男達が密集してトレーニングしているものだから、汗臭いわ暑いわで、体験のない二人にとって暑苦しくむせる。

「――あんたら二人は見たとこ、こんな風景は初めてそうだからある意味いい体験だろ？」

「えっええ……」

二人は苦笑いする。

すると突然、

《ガシッ！！》

「いいっっっっ！！！？」

のび太の真天井から何者かが落下、瞬間にのび太に首を掴みナイフを彼の顔にチラチラかざす。

「おめえらが例の地球人だなぁ。許可があればてめえらをこのオレが八つ裂きできたのによ～～」

その男はまるで昆虫のような複眼の持ち主で、全体の皮膚は緑色の体は痩せ型。雰囲気には巨大な蟷螂のようだ。

「キャアアアッ！！」

しずかはとっさに悲鳴をあげる。当ののび太も何がなんだか分からず身体がぶるぶる震えている。
あと刃物を顔にちらつかせているのも恐怖意外の何事でもなかった。

「ユーダぁ、お前リーダーの言葉を忘れたのか！？こいつらに手を出したら反逆罪で即死刑だぞ！」

その言葉にユーダと言う男はのび太を放し、不気味な笑みを浮かべてこう言った。

「冗談だよ冗談っ。けどリーダーが何でこいつらを生かしているのか疑問だったんでな。いつもなら侵入者は即排除だろ」

「それはリーダーにも考えがあったからだ。ともかくのび太達には手を出すなよ？」

「へいへいっ、わぁったよ！」

そう捨て台詞を吐くと、ユーダは三人から去っていった。そんな彼をもの悲しい目で見るレクシー。

「あわわわわわっ……」

「のび太さんっ大丈夫っ！？」

力が抜けてへたりこむのび太に声をかけるしずか。すると、レクシーはのび太に手を差しのべた。

「驚かせて悪かったな。あいつはユーダってんだ」

のび太は彼の手を借りて立ち上がる。しかしレクシーはどこか悲しい雰囲気を漂わせていた。

「あいつは俺達、戦闘員の中でも一番の問題人物なんだ。殺しに対しての躊躇のなさはリーダーと匹敵するかそれ以上だ。けどあいつはすぐに仲間を裏切る癖があってな。今まで数々の侵略で仲間の窮地をどれだけ見捨てたことか……。リーダーにはまだバレてないんだけどいつかあいつはまじで消されるぜ……」

それを聞いた二人は複雑な気持ちになる。

「俺らアマリーリスは仲間意識が非常に高い。だからどうしようも得ない時は除いて仲間を見捨てる、裏切る行為は反逆罪で冒せばリーダー自らが罪人を殺すんだ。

オレはその場面を一度だけ見たことがある」

「「……」」

二人の暗い表情をして沈黙はさらに続く。しかしレクシーはそんな二人を再び笑顔になり、こう励ました。

「お前らは何気にすることがあんだ？
これは俺達のことだ。お前らはただ無事に地球に帰ることだけを考えればいいのさ！！」

彼の表情を見て、少しずつ笑顔に戻っていく。
レクシーは二人に背を向き、明るい声でこう言った。

「次は射撃場だ。どうだのび太、俺と射撃で競わないか？リーダーに勝った腕前を見たいんでな！」

それを聞いたのび太は得意分野である射撃がやれるのが嬉しいのか、心が奮え上がってくる。

「うっうんっ！！」

笑顔で返すのび太にレクシーも満面の笑みを浮かべる。そんな二人をまるで兄弟に見えたのか、しずかもニコッと笑った。

――そして三人は射撃場に足を踏み入れる。ここでは実弾銃用射撃場とレーザーガンなどのエネルギー銃用射撃場の二つあるが、片付けや破壊した的の回収がある実弾銃用射撃場は面倒な為か、あま

り使われない。
のび太達は当然、エネルギー銃用射撃場に移動する。

「ええっと、のび太は子供で試し打ちだから威力が弱いタイプにしないとな……っ」
レクシーはエネルギー銃射場の中心に設置してあるパネルのようなデバイスをカタカタ動かす。すると、

《シュイイン！！》

次の瞬間、この場の全照明がライトアップし一気に明るくなった。

「まっ的が全く見えないよぉっ」

「ホントぉ」

一直線に続く的への射程距離は３００、いや５００メートルはゆうにありそうだ。
するとレクシーは二つの小型銃を持ち、その一つをのび太に投げ渡した。

「ほれ、お前の銃だ。
目の前にレールがあるだろ？あそこに立って射撃するんだ」

二人は各射場に立って的のある方向に目を向ける。しかし、あまりにも遠いのか全く見えない。

「レクシーさん？的が遠すぎて全く分からないんだけど……」
しかしレクシーは何を言っているんだ？と言わんばかりに不思議そうな表情でのび太にこう告げた。

「はあっ？的はまだ出てないぜ」

「えっ？じゃあもうすぐ出てくるの？」

するとレクシーは遥か向こうの左右の壁に指を指してのび太に説明した。

「あそこの発射口から的が飛び交うからそれに狙いをつけて撃ち落とすだけだ。簡単だろ？」

それを聞いて安心するのび太。上を見上げると何やら時間表情された機器が０に向けて数字が動いていた。

「あれが０になったら、開始アラームと共に、的が飛び出す仕組みだ。

時間は１分間だ、終わりもアラームで知らせてくれる。そろそろ始まるから準備しろ」

そう言うと二人をレールを前に立ち、神経を集中する。あの時と同じ雰囲気が辺りに漂い始め、その中でしずかが後ろで手を合わせて二人の安全に願いを込めている。そして……、

《ビーーーーッ！》

甲高いアラームが鳴り響くと同時に二人は一気に所持している銃を構えた。が、

「！　？」

アラームが鳴ったにも関わらず的が全く見えない。

「えっ!?えっ!?」
のび太はわけが分からず、ただあたふたしているだけだ。一方、レクシーの方は、

《ドシュっ!!ドシュっ!!》

なんと彼は全く見えないにも関わらず平然と発砲している。発射された何発もの光弾が瞬く速度で遥か先の的場へ飛んでいく。もしかして的はもう発射されているのか……?

《ビーーーーッ!》

終了アラームが鳴り響き、二人は手を下げる。しかしのび太はきょとんとしていた。一体なんだったのか全く理解出来ていないためだった。

「ハハハッ、全く見えてなかったか?あれでも戦闘員の標準レベルだ。まあのび太ぐらいの年代はちとキツかったかな……んっ?」
レクシーは先ほどのデバイスを見て、何かに気づいたのかすぐに駆け寄った。すると彼は徐々に汗が流れはじめ、身体が震えている。
すると彼は二人の方へ向くと、自分の頭を撫でて、苦笑いしながら二人にこう言った。

「わっ……わりぃっ。どうやらこれ自体が故障してて的が発射されてなかったわ……」

「「あららっ……」」

二人はたちまち脱力して肩を落とした。

「誰だ壊したのはっ……、直しとけってんだっ！！」

機器に愚痴をつけて、二人をホイホイ射場から押し出すレクシー。

「まっまあ……次のエリアに行こうぜ！！はははっ……」

「「……」」

しずかはともかく、のび太は不機嫌そうにムスッとしている。

「次のエリアは……そうだっ！しずかのような女が喜ぶところへ連れていってやるよ」

その言葉にしずかは非常に興味津々となる。

「えっ、あたしが喜びそうな所っ？なんか素敵ぃ！」

「ちぇっ……僕は楽しめなかったのに……っ」

三人はそう絡みながら訓練エリアから去っていった。

……

エリア８、多目的エリア。

様々な施設があるが、のび太達が向かった先は。

「ここは……なんですか？」

二人はある施設のドアの前にの立たされ、のび太が何なのか質問する。

「とりあえず入ってみな。今にわかるぜ」

そう言うとレクシーは二人の背中をどんと押した。二人は前によろめいた瞬間、ドアのセンサーが反応して開放された。二人がみた施設内は……。

「えっ～～っ！？」

「ああ……っ」

見渡し限り植物や花の、緑や鮮やかな色が拡がる自然。さっきまでの無機質の雰囲気とはまるで別世界に入ったかのような違和感というか、衝撃が二人を襲った。

「ここはプラントルームだ。この艦内で唯一、有機物でありふれてるトコだ。
ほれ、奥に行こうぜ」

のび太達は促され、その施設の奥へ入っていく。地球で見たことがある植物類は勿論、見たことのない奇妙な形の植物、花が見渡す限り咲いている。
そしてここの特記する点は、非常に空気が澄んでいることだ。さっきの訓練エリアと比べたら雲泥の差である。

「すごい……けど誰がこれを……」

「のび太さん、あそこに誰かいるわっ」

どんどん奥に進んでいくと広場になっている場所で、一人の男が植物に向かって何かをしている。しかし、近づき姿が明確になるに連れてどこかで見た覚えのあるような身体つきをしている。その人物とは……。

「あの人ってもしかして……っ」

「ラクリーマさんっ!?」

しずかの声に反応し、男が三人に向かって振り向いた。

――ラクリーマであった。二人はすぐに彼の元に駆けつける。

「よぉ、今レクシーに艦内を案内されてんのかい?」

相変わらずの笑みを浮かべてこちらを見てくる。両手にはそれぞれ袋とホースを持っていた。

「ラクリーマ、今何してるの?」

「なにって……水やりだが?」

それを聞いた二人は強烈な違和感を感じたのか、口が開いたまま塞がず、呆然とした表情だった。

「あんたが……これの水やり……もしかして全部……?」

ラクリーマはのび太の発言に理解出来ず、不思議そうな表情をとる。

「だからどうした？」

しばらくするとのび太は腹に手をで押さえ、うつむく。体が微妙に震えはじめ……。

「くっくっく……あはははははっ！！」

突然、のび太は大声で笑い出した。辺りに大音量の笑い声がこだましている。

「あっ、あんたみたい人が花の世話っ……くははははっ！」

「のっのび太さん……失礼よっ……ぷっ……」

注意するしずかもなんだかんだで笑いかけている。そんな二人を見たラクリーマは腕組みをして不機嫌そうな顔をしてこう言った。

「……何がそんなにおかしいんだ？」

するとレクシーもやっと彼らの場所に辿り着く。

「リーダー、どうしたんですかい？」

「こいつら、俺が水やりしてるって言ったら急に笑い出したんだが」

レクシーも少し間を置いたのち、その意味に気づいたのかクスクス

笑い出した。

「……かもしんねえっ、くっくっく…」

三人がクスクス笑い出し、痺れを切らしたラクリーマはついに左手を彼らへ向けて突きだした。

「……今ここで全員くたばってみるか？どうする？」

「「「あっ……」」」

さすがにやりすぎたのか、三人は一気に冷めてその場で固まった。

……

エリア2、住居エリア。

三人は最初のエリアに戻り、休憩広場で食事をとっていた。

「うわぁ、こんなもの始めて食べたけどおいしいな～」

「ホントよねぇ！」

二人がココの食べ物を美味しそうに食べる姿を見て、レクシーは軽く笑った。

「ウレシいねぇ、気に入ってもらえて」

――ウィンドウから見える景色はワープホール空間から抜け出し、広大な宇宙空間が垣間見れる。沢山の惑星、沢山の小惑星が無限大にちりばめられ、まさに地球人が夢見た世界とも言える。

ここの休憩広場には大勢の人々が行き交う。仲のいい者同士でゲラゲラ笑ったり、外を眺めながら歩く者、デバイスを片手に持ち、仕事をしているのか、はたまた勉強をしているかのような仕草を見せる者、みなそれぞれであり、まるで学校の休み時間における廊下での風景を再現しているかのようであった。

そんな中、のび太はレクシーにあることを聞いた。

「あの植物や花は全部、ラクリーマが育てたんですか？」

しかしレクシーは顔を横に振る。

「あれはな、元々リーダーの恋人が育ててたものなんだよ」

「「えっ？」」

二人は顔を赤くした。彼に恋仲がいたなんて知ってしまうと、思わず恥ずかしくなってしまうのだった。

レクシーは腕組みをして、空を見上げながらこう言った。

「その人はランって名前でな。ユノンさんがココに加入する前の副司令官みたいな役柄で、あの人とは反対にとぉにかく気が強くてじゃじゃ馬でリーダーも手を焼いてたなぁ……」

「あのラクリーマさんが？」

レクシーはうなずくとさらに話を続ける。

「けどあの人は超がつくほど花や植物が大好きでな。侵略した惑星で気に入った花や植物を持ち帰って嬉しそうに育ててたよ。

それにあの人らはなんだかんだで相思相愛だった。お前らが座っている場所とかで口づけしてるのを何度も見たぜ！」

「ええっ！？」

「まあっ！！」

二人はさらに顔を赤くし、その場所から少しずつ座りながら離れようとしていた。それを見てレクシーはクスッと笑う。

「その人は今どこにいるんですか？」

その質問にレクシーは手を組み、表情は笑っているもののどこかもの悲しそうな瞳をしていた。

「ランさんは……もうこの世にいないんだ」

この世にいない。死んでいるという意味を持つその言葉に耳を疑い、そして言葉を失うのび太　達。すこし沈黙したあと、レクシーは静かに口を開いた。

「俺たちはこんな仕事をしている以上、命を狙われる立場でもある。だから他の先進種族と抗戦することだって度々あるんだ。

数年前だったかな……確か……」

レクシーはのび太達に分かるように思い出を語り出した。

……

数年前、メデューサ宇宙第3惑星エデン。

そこに滞在する先進種族の軍事国家が、偶然その惑星に攻め入ろう

としていたアマリーリスの存在を感知し、衝突。
あまりの激戦にさすがのアマリーリスも相手の圧倒的戦力差を前に窮地に追い込まれ、もはや逃げ出す他はなかった。

しかしあちらもこちらの逃亡を許す訳にいかず、追跡を行ってきたのだった。

その時、ラクリーマは自らこちらが所持する戦闘ユニットに爆弾を大量に積み込んで相手の母艦に特攻すると言い出した。

部下達はそれを止めようとしたが、彼は『エクセレクターをここで墜とさせるわけにいかない』と言い張り、振り切った。

しかしそこからが運命だったのか、彼が格納庫に到着した頃にはもう爆弾の積んだユニットはカタパルトから射出されてもうなかった。

ラクリーマは誰があのユニットに乗っているのか突き止めたところ、それは彼の恋人であるランであった。
そう……彼女は自分の命と引き換えにアマリーリスを守ろうとしたのだ。

そして彼女の乗ったユニットは敵の弾幕が降り注ぐ中、大破されながらも敵母艦の正面デッキに突撃し……。

……

「あの時、彼女があのような行動を取らなければ俺たちは全員死んでいたな」

「「……」」

なんと言葉をかければいいのだろう。二人はそれしか考えられなかった。

「実はあのあと、リーダーのところへ駆けつけたらな……窓を見ながら何をしていたか分かるか？」

二人は首を横に振る。するとレクシーから信じられない言葉を聞いた。

「あの人はいつも通りに笑っていたのさ。『見事だった、ラン』ってな」

《！　！　？》

二人は信じられないような表情をとった。大切な恋人が死んだのに笑っていられるなんて……正気の沙汰ではないのかと。

「なっ……なんで好きな人が死んだのに笑っていられるんだよっ！！おかしいじゃんっ！僕だったら絶対悲しくて泣いちゃうね！」

のび太は立ち上がり、レクシーに訴えた。無理もない、のび太の言うことは一番マトモな答えなのだから。するとレクシーは、

「まあさすがの俺もどうかとは思ったよ。あれでリーダーを軽蔑しそうになったけどその時リーダーの右手を見た瞬間、そんな考えも一瞬で消し飛んだよっ！」

「みっ右手？」

「……？」

レクシーはあの時のことを再現するかのように右手をのび太達の目の前に突きだし、ぎゅっと握りしめた。

「リーダーの右手から……血がポタポタ流れて落ちてたよ。そして止まることなく手が震え続けていたのさ」

「ちっ血が……？」

レクシーはコクっとうなずく。

「ー力いっぱい握りしめて爪が手のひらに食い込んだんだろう。あの人も実際は悲しくて泣きたい気持ちでいっぱいだったんだろうけど、悲しむ姿を見せたら俺らの士気が下がると思ったんだろうな。それで少しでも陽気に振舞おうとしたんだと思う。……まああくまで俺の予想だが、あれを見た瞬間『この人に一生ついていこう、この人のためなら命を捨てる覚悟はある』って決意したね」

「「……」」

「俺たちは今までにどれだけの仲間やたくさんの人間を犠牲にしたのかもわからんが、そのたびにリーダーは『生物いつか死ぬ。それが早いか遅いか、運が良いか悪いか』と言っていたな。その意味の捉え方は人それぞれだが、俺らからしたら最高の励ましかもな」

二人は心温かいことを聞き、自然と笑顔になっていく。どうやら自分達は彼に対して疑い過ぎてたと思うて何だか恥ずかしくなってくる。

「お前ら何かしんみりしてんだ？」

噂をするとラクリーマが三人の元をやってくる。

「ラクリーマ……っ」

何か縮こまっている二人を見て彼はニヤッと笑う。

「てめえら、何か俺に隠し事をしてるなっ？話しやがれっ！！」

すると、向こうから大声で、

「ラクリーマさんっちょっとこれ見てくださいよぉ！」

数人の部下から笑顔で呼ばれてその場へ走っていく。
ラクリーマは彼らに辿り着くと、満面な笑顔で楽しく話をしている。
三人はそんな彼に安心感で満たされて温かい目で見つめている。
するとレクシーは二人はこう聞いた。

「……なあ？二人はこう思わねえか？」

「えっ？何をですか？」

「あの人は実際俺らでも考えないくだらねえことや馬鹿なこと大好きだし、ああやって部下と絡んでるけどあれでも総司令官なんだぜ？全く威厳がないだろ？」

「まっ……まぁ……っ」

すると彼は立ち上がるとラクリーマを見つめてニコッと笑った。

「けどな、俺達はそんなリーダーが大好きなんだ。ああ見えてあの人は自分よりも他人のことを常に考える人だからーーー」
のび太はラクリーマを見ては再認識する。この人をやっぱり信用しようと。

「楽しそうだね、ラクリーマ」
「ええっ。なんかあの自然な笑顔を見るとあたしたちもいつのまにか笑いたくなるわっ」

そんな微笑ましい一時を送っていた瞬間、

「ラクリーマっ！！」

突然、馬鹿でかい大声が休憩広場に響き渡る。
その声の主はなんとあのユノンであった。しかし、いつもの冷たい印象とは打ってかわって非常に怒りに満ちた表情をしている。
しかも両手には巨大なライフルと思わしき物騒な兵器を抱え持っている。

それを見た全員がその場でドン引きし、さらにラクリーマもびっくりしてその場から全速力で逃亡した。

「やべぇっ！！そういやぁあいつから逃げてたんだっ！！」

逃げる彼を彼女も全速力で追いかける。

「あんたまたあたしの部屋に忍びこんで下着を漁ったでしょっ！！しかも数枚なくなっているけどどこにやったのよっ！！？」

その破廉恥な理由にのび太としずか以外の全員がまたかと呆れて果てている。のび太達も情けなさすぎて彼に対しての評価が著しく下がるのだった。

「絶対コロスっ！！」

するとユノンは膝撃ちの態勢を取り、まるで狙撃手のようにライフルを瞬時に、ラクリーマに狙いを定める。

振り返ったラクリーマはそれを見て、さらに慌て出した。

「ユノン！！まじで悪かったからやめてくれぇっ！！」

しかしそんな謝罪で許すような彼女ではなかった。そして、

《ドンッ！！》

彼女はラクリーマに向けて発砲、野球ボールほどの大型弾頭がラクリーマめがけて駆け抜けていき、

《ドワッ！！》

「のわあああああっ！！」

弾頭がラクリーマに直撃し、大爆発。爆風と共に彼の断末魔が辺りに響き渡った。

「……」

ーーこのあとユノンは丸焦げとなってノビている彼をズリズリ引きずり、去っていった……。

自業自得と云うべきか、レクシーに言われた教訓をこの目で見たのび太達はユノンに恐怖を覚えたのだった。

……

エクセレクター艦内の案内が終わり、それぞれ部屋へ戻る。
のび太はベッドに寝転び、天井を見ていた。

歩き疲れて眠たいのは山々なのだが、どうしても気になっていることがあった。それは、

（ドラえもん、ジャイアン、スネ夫……僕達のことを心配してるのかなぁ……っ）

やはりドラえもん達のことが気になって眠れない。
今何をしているのか、心配してくれているのか、ただそれだけを彼は思い続けていた。

◇ＰＡＲＴ．１０　エクセレクター艦内〔後編〕（後書き）

次はドラえもん達側に移ります。

◇ＰＡＲＴ．１１　銀河連邦大型主力旗艦『ヴァルミリオン』（前書き）

この話は時系列でゆうとＰＡＲＴ．８の途中（ラクリーマがユノンに金的攻撃を食らった後）ですね。

◇ＰＡＲＴ．１１　銀河連邦大型主力旗艦『ヴァルミリオン』

銀河系外宇宙。地球人にとっては全くの未知なる宙域。まるで見たことのない星や小惑星郡、銀河が所々見えている。

《シュイイイッ……》

その宙域内で、なにやら別空間の穴が発生している。その穴から光線の飛び出した後……、

《ドンッ！！》

その穴から巨大な金属物体が超高速で飛び出した。それはドラえもん達を乗せたエミリア達の宇宙船であった。その内部では。

「うへえ～～っ。もうだめだぁ～～」
「気持ち悪すぎて、マジでヤバ……うっ！」

「……」

ドラえもん達は初めてのワープホール空間内で体験した異常な重圧、加速力、スピードに身体中がへなへなに崩れて今にも死にそうな様子だ。エミリア達は三人が気の毒すぎて口を開けたまま震えていた。

「やっぱりキツかったかしら……？」

「けどっ……アタシたちも始めはあんな感じだったし……まあ大丈夫じゃない……はは…」

宇宙船は徐々に安定した速度を保ち始める。それに伴って内部の重力も少しずつ安定してきていた。

「あと一回ワープするわよ。そしたらヴァルミリオンに到着するわ」

またワープすると聞いて、三人の顔は徐々に青ざめていく。

「もうやだやだやだ～～っ！」

「母ちゃ～ん！！俺はもういやだ～ぁ！」

喚くジャイアン達二人をよそにドラえもんはエミリアに質問した。

「エミリアさん、ヴァルミリオンって何ですか？」

エミリアはニコッと笑い、ドラえもんの方へ振り向いた。

「あたし達の母艦よ。まあ……見ればわかるわ」

「ふふっ、アナタ達地球人は初めて見るだろうから腰を抜かすかもね？」

腰を抜かす？その意味が分からずドラえもんの頭の中はクエスチョンマークでいっぱいだった。

「さあっ行くわよ。あと一回だから辛抱してね」

エミリアが左のレバーを力いっぱい押し込む。ミルフィの端末操作で前方にまたワープホール空間の入り口が発生した。

「ちょっ……まだ心の準備がぁ！！」

「もうどうにでもなれぇっ！！」

大声で叫びまくるスネ夫とジャイアンにドラえもんを含む、エミリア達はそろそろ呆れてきたのか沈黙し始める。
そして、宇宙船はまたワープホール空間へ入っていった。

……

一方、エクセレクター艦内のエリア１５区域。

ラクリーマは広大な兵器開発・メカニック部門の研究エリアへ訪れていた。

「サイサリスさんよっ、相変わらず精が出てるなぁ」

彼は奥の巨大なマシンが配置されているドッグで助手と話をしている一人の女性に声をかけた。
白衣を纏い、見たかぎりのび太達と同じ種族の綺麗な女性のようだが……。

「ん？ラクリーマじゃないか。こんなところにわざわざ足を運んで……暇なのか？」

この女性、サイサリスは女性のような口調ではなく、どちらかと言うと男性寄りだ。

「相変わらずこんな所に引きこもって研究してるねぇ。少しは休憩すればどうだ？」

彼女はラクリーマに向かって舌打ちをする。

「うるせえな。あたしゃ、研究に人生をかけてるんだよっ！」

ラクリーマはヘラヘラ笑い、彼女を馬鹿にするかのようにこう言った。

「へへっ、オマエの場合、『いかに大量の生き物を一撃でぶっ殺せるか』の研究じゃねえか？」

《ガァン！！》

「ギャオオオっ！！？」

サイサリスは彼のスネに向かってスパナを投げつけ直撃、彼をぐっと睨み付けた。

「キサマぁっ！わたしの研究にケチつけにきたのか！？あ゛！？」

地球人における『弁慶の泣き所』が彼にもあるらしく、激痛にスネを押さえ、尻餅をついてブルブル震えている。

「……こっ……この年増のオトコ女めっ……よりによって人の弱点をマジで狙いやがって……っキレイな名前と性格がまったく合ってねえじゃねえか……」

《ジャコッ！！》

彼は見上げると、彼女は巨大なライフルらしき兵器を構えて自分に向けている。

「つい最近開発した最新型の兵器の的になってみるか……？」

さすがのラクリーマも彼女のあまりの恐ろしさに手を上げた。

「いっいえっ……アナタ様の凄さに敵いませんですわ……ははっ」

「ふん……」

やっと痛みがなくなり、立ち上がると頭をポリポリ掻いて、彼女にこう聞いた。

「とっところで『アレ』の開発経過を見に来たんだけど、どうだ？」

「『アレ』か？ついてこいよ」

そう言われ彼女についていくと、隣の兵器開発エリアの中央には２つの何かおぞましい兵器が巨大なガラス管の中に入れられたくさんのチューブで連結されていた。

ひとつはまるで、熊のような巨大な特殊な金属の腕、手、爪、それを包みこむようなトゲトゲした装甲。

もうひとつは大の大人が二人連なってやっと一致する程の全長、ラクリーマ程の人の顔が１つ入ってもまだ隙間が出来そうな口径、それは人間には絶対に撃つどころか持つことさえもできなさそうな巨大な大砲だった。

「『ログハート』は完成に近いんだがな、『セルグラード』はまだ出力調整と反動吸収耐性ができてない試作段階だ。完成すれば銀河連邦相手でも真っ向から挑めるだろう」

「そうか、楽しみだなっ」

二人はその兵器をただ黙って見つめる。これは一体何なのか、一体誰がこんな代物を扱うのか？

するとサイサリスは手で口を押さえてクスクス笑い始めた。

「ククククっ……早くお前に使ってもらいたくて毎日、身体中がもう興奮してんだよ。どれほどの威力を発揮するか……。あっそうだ、これが完成したらあんた、この子達で破壊した、殺した相手のマシンや生き物の死体を収集してあたしの所へ持ってきてくれ、サンプルにしたいから！！」

非常に逸脱した発言にラクリーマは苦笑いをする。

「あんまいい趣味してねえやな……」

「なんか言ったか？」

「いっいやっなんでもっ！」

ラクリーマはデスクに散らばっている試作兵器やマシン、デバイスを持っていじっている。こんなマッドサイエンティストが開発した代物だ、どんな性能を発揮するのか分からない。

すると、彼女はラクリーマの隣に移動し、こう呟いた。

「何でも侵入した地球人を受け入れて送り帰すんだって？珍しいねぇ、お前は敵と判断した奴は見境なく殺しにかかるのにどんな風の吹き回しだ？」

「いいだろ別に。まあ、あの2つの完成を急がせてくれ。俺も早く

使いたいからよ？」

ラクリーマはそう言うと、彼女に背を向けて去ろうとする。するとサイサリスは大声で彼にこう告げた。

「ラクリーマ、『ブラティストーム』をたまには見せにこいよ。いくらアイツが造ったものでも使いすぎるといつ故障するかわからんからな」

「ああっ……」

そう言い去ろうとする彼に、また彼女が声をかけた。

「あとその命しらずをなんとかしろよな。エルネスの遺志を引き継ごうとしれんけど、身体こわしてみんなはもちろん、ユノンちゃんにまで心配かけるようなことはすんじゃねえぜ。みんなはあんたを頼りにしてんだからよ」

「けっ、そこはよけいなお世話だ」

まるでまじめに聞いてないかのように笑みを浮かべると、彼はそのエリアから去っていった。

彼女はそんな彼にまた舌打ちをし出す。

「ちっ、人がせっかく心配してんのに……」

……

「みんな着いたわ。これがヴァルミリオンよっ！」

「「「なっ……なんじゃこりゃあああああっ！！？」」」

三人は驚愕の声を上げまくる。その大きさは、エミリアの宇宙船からの視界から端から端まで見えない。それどころか、自分の正面に見える一部分の装甲の大きさは宇宙船の何百倍、いや何千倍の大きさがあるか全く予想つかない。むしろ、この一部分で大都市１つは入りそうだ。

宇宙船の目の前にある物体は、それは想像もできないほどの全長を誇る、エミリア達、銀河連邦の主力旗艦『ヴァルミリオン』であった。

「ヴァルミリオンはアナタたちの住んでる島国よりもデカいのヨ！」

「「「うええっ！！にっ日本よりぃぃっ！！？」」」

あまりにも衝撃的事実、日本より大きいなんて……。三人の空いた口が塞がらない。

「ふふっ、驚いた？じゃあ帰艦するわよ」

宇宙船はフルスピードでこの艦の後ろへ向かう。果てしない長さの胴体が横に写っている。その異様な光景で三人は沈黙している。

“偵察機型式ｌ０４７５６８５ＸＴＦｌエミリア大尉、ミルフィ中尉、帰艦しました”

エミリアがモニターに向かって帰艦報告をすると、

“型式認証しました。お疲れ様です、エミリア大尉、ミルフィ中尉”

モニター越しから声が聞こえ、同時に前方にある巨大な装甲がゆっくりと上に向かって開き始めた。

「アレが後部ハッチよ。中に入ると偵察機専用格納庫があるわ」

「ひぇ～～っ、なんて技術なんだ……」「これじゃあ地球が何十年たっても同じものが造れるか分かんないなぁ」

「いやぁ、僕の時代でもさすがにここまでは造れない代物だぁ……」

さすがは銀河連邦と言ったところか。何故なら先進種族の科学の粋を集めて造られた偉大な産物なのだから。

「なら入るわよ。全員、衝撃に備えてっ」

宇宙船はハッチにつくと、ゆっくりとした速度で入っていった。長く、辺りは赤くライトアップされた通路を通り抜けると、一大都市はすっぽり入るほどの広大な空間を持つ格納庫へと到着した。

「オーライ、オーライ！！」

下で作業員が宇宙船を元の位置まで誘導している。それに伴い、微調整移動をする。そして元の位置に配置し、完全に停止。エミリアは操縦幹を離し、立ち上がる。

「着いたわ。降りるわよ」

全員が立ち上がり、宇宙船の外へ移動する。すると、作業員が駆け寄りエミリアに向かってビシッとした態度で敬礼をした。

「エミリア大尉、ミルフィ中尉、偵察ご苦労様でした。んっ……この子達と青いタヌキみたいな……？」

「ぼっ僕はタヌキじゃな～～～いっ！！２２世紀のネコ型ロボットだ～あっ！！」

タヌキ呼ばわりされて大声で反論するドラえもん。その彼を必死で抑え込むスネ夫とジャイアン。

「まっ……まあちょっとしたことがあってねっ……それよりカーマイン艦長は……？」

「艦長なら今、中央デッキにいます。何か重大な事実があったそうなのですが？」

「重大な事実？」

作業員の発言が非常に気になるエミリアとミルフィ。二人はドラえもんの方へ振り向きこう言った。

「今からヴァルミリオン本艦長、カーマイン提督のいる所へ向かいます。少々かかるけどついてきなさい」

「「「はっはいっ！」」」

さっきまでとは違い、キビキビとしたエミリアの口調に三人同時にビシッと返事をする。

５人は近くに配置されていた円盤のような乗り物に乗り込む。
そのまま真っ直ぐの通路へ入り、速度約７０キロ程度で進んでいく。

体が露出しているのにそのスピードで進んでも風に煽られることは全くない。
これもこの乗り物で何か技術が働いているのか。

「エミリアさん、カーマイン提督ってどんな人なんですか？怖いですか？」

スネ夫がそう聞くとエミリアは優しい笑みを放ち、三人を見た。

「かなりの良心の持ち主よ。仕事には非常に厳しい人だけど心配しないで」

「アタシ達が誇る、本当に尊敬できる人ヨ」

二人の話を聞いて、安心感丸出しにする三人。

「よかったぁ……怖い人だとどうすればよかったかぁ……」

「なんだスネ夫、びびってんのかよ？」

「そっそうゆうワケじゃないけどさぁっ！」

スネ夫はそう否定するが、それをうかがわせるような表情は隠せてないのがよくわかる。

「さあ、艦内でもワープを繰り返して中央デッキへ向かうわよ！」

5人はテレポーターを使い、各エリアを渡っていく。そして十数分後……。
五人は中央デッキへたどり着いた。

「「「……」」」

三人はあまりの凄さに言葉を失った。周りはさっきの円盤の乗り物がさらに巨大化したような物が広大な空間にいくつも浮かんでいる。その円盤は左右上下移動をしながら乗っているたくさんの人達を運んでいる。
装置や機械は見たところなさそうだが、上空にはまるで３Ｄのような映像が空間上に浮き出ている。

地球人から見たら、一体どうなっているのかと言いたくなるほどであった。

５人は動く円盤に乗り移りながら更に奥に進んでいくと、赤色のビシッとした軍服を着用した男性が上空の映像を見ている。
「カーマイン提督っ！」

エミリアが叫ぶと、その男性がこちらへ振り向いた。
見たかぎり地球人の中年男性と全く大差ない姿をしている。が、その顔から威厳と正義感溢れるオーラがひしひしと伝わってくる。
どうやらこの人物が艦長、カーマイン提督のようだ。

エミリアとミルフィは彼の円盤に辿り着くとすぐに向かい、目の前に立ち、ビシッと敬礼をする。

「エミリア大尉、ミルフィ中尉、ただいま帰艦致しました！」
「おかえりエミリア、ミルフィ。ご苦労であった」

カーマイン提督は優しい笑顔を見せた。するとエミリアが間を入れず、彼にこう質問した。

「ところで作業員に聞いたのですが、重大な事とは？」

すると彼はさっきの笑顔とはうってかわって真剣な表情へ変えた。

「うむ。どうやらあのアマリーリスが太陽系のある銀河系へ向かってきているというのだ」

《！　？》

それを聞いた全員が驚愕する。エミリア達、ドラえもん達にとってはこれほど都合のいいことはなかった。

「そっそれは……もしかして地球を狙ってるということでしょうか？」

「間違いない。あの銀河系内で知的生物が生存しているのは地球ぐらいだからなっ……ん？」

彼はエミリア達の後ろにいるドラえもん達の存在に気づいた。

「エミリア、ミルフィ、あの子達は一体？」

エミリア達は急に焦りだし、顔を苦笑いしながら口を開いた。

「あっ……あの子達は地球人で……ワケがありまして……っ！！」

「そっそうですっ、ちょっと事情がっ……！！」

《パンっ！》

「！　？」

カーマイン提督は被っていた赤色の正帽を持つとエミリアの頭に軽く叩いた。

《馬鹿者っっ！！》

「ひいっ！！」

「うひぃっ！」

彼は並々ならぬ恐ろしい形相でエミリア達を大声で叱りつけた。その声と威圧感も尋常ではなく、彼女達はもちろん、後ろにいたドラえもん達、回りにいる部下達も一気に彼に注目した。

「お前とあろう者が、自ら『異星人文化干渉法』を違反してどうするんだ！？お前の部下達にどう示しをとるつもりだ？」

「……そっ……それは……っ」

エミリアは何も言えなかった。彼の言うことに間違いなどなかった。するとミルフィはエミリアを弁護するかのようにこう言った。

「ですが提督、あたしたちもあの子達もワケがありましてっ……けっしてエミリア大尉だけの責任ではっ！！」

「ミルフィは黙っとれっ！」

「ひいっ！」

ミルフィも彼には逆らえなかった。一方、後ろではドラえもん達も何やら嫌な予感を感じとっていた。

「……なんかヤバくないかな……？」

「う……うん……っ」

「エミリアさん……どうしたんだろうな……っ」

三人はいつの間にかひそひそ話をしていた。

すると彼は帽子を被り、エミリアに対してこう言った。

「理由はどうあれ、違反した者はどうなるかわかっておるな？処分が決まるまで自室謹慎だ。ミルフィもそれなりの覚悟をしておくように……以上だっ」

「……っ」

「……はいっ」

そう言われ、二人は静かに彼から去っていく。

「えっ…エミリアさん……」

「俺達……どうなるんですか……？」

ドラえもん達は彼女に心配そうに声をかけるもただ何も言わず、う

つむきながら三人から去っていく。
しかし、エミリアは両手をこれでもかと言うくらいに握りしめて、ぶるぶる震えている。
彼女から感じられるのは悔しさなのか失望なのか、それとも怒りなのか……。

「……エミ……リア……っ」

ミルフィはドラえもん達と共にトボトボ去っていくエミリアを悲しい目で見ていた。

一体何が起こったのだろうか？ただ、全員に感じたことは『唖然』と言う言葉、ただ一つだった。

◇ＰＡＲＴ．１１　銀河連邦大型主力旗艦『ヴァルミリオン』（後書き）

果たしてドラえもん達やエミリア達はどうなってしまうのでしょうか……？

◇ＰＡＲＴ．１２　事実と思惑（前書き）

今回は非常に重苦しい雰囲気だらけです。けどホントにドラえもんぽくないなぁ……。

◇ＰＡＲＴ．１２　事実と思惑

「おっ、俺達をここからだせぇっ！」

ここはヴァルミリオン艦の留置所エリア内の留置室。逮捕した罪人や捕虜、反乱分子達を本部隊へ送致するために一時的に閉じ込める場所である。
三人はあの後、カーマイン提督の命令により兵士に連れられていった場所がここであった。

「僕たちっ……どうなるのかなぁ？」

「……わからない。けどあの様子だとタダごとじゃあなさそうだ」

一人で空しく抵抗しているジャイアンをよそに、座ってショボくれている二人。
しかし三人共、共通していた思考は『何の説明も』ないまま、ここに入れられたと言うことに対する怒りと疑問だった。

「ドラえもんっ、このまま俺達は黙っててていいのかよっ？
ここから抜け出す道具を出してくれよ！」

「落ち着いてよジャイアン！
ここから抜け出してどうしようって言うんだよ！？」

「決まっているじゃんかよ。カーマイン提督に直接会って頼み込むんだよ、俺達も参加させてくれってなっ！」

ジャイアンのその発言にびっくりして飛び上がるドラえもんとスネ

夫。

「むっ、ムチャゆうなよぉ！
もし僕らが抜け出してここの人達に見つかっちゃったらどうするんだよっ！？」

「僕は絶対反対だからねっ！」
二人は断固拒否するが、それでは引き下がれないのが彼の性であった。

「なんだとぉ、俺達になにも教えてくれないでこんなとこに閉じ込めるあいつらが悪いんだぜ！」

「そっそれだよ、僕の言いたいことは！」

「「？？」」

理解できないスネ夫とジャイアンにドラえもんは二人にこう説いた。

「去っていく時のエミリアさんはいつもと何か違ってた。
しかもカーマイン提督の叱り方も尋常じゃなかった。
これには何か深いワケがあるんだよ。

それを何も知らない僕らが今何を言ったって聞いてくれないと思うんだ。

……せめて、あの時の状況を教えてくれる人がいてくれれば……っ」

「「……」」三人はその場で沈黙する。確かに今は完全に『井の中の蛙』状態で手も足もでなかった

せめて少しだけでも教えてくれる人がいてくれたら……。
三人はそう気がして仕方がなかった。

しばらくすると、

“……みんな、大丈夫……？”

突然、ドア越しから聞いたことのある声がしてくる。
三人はそれに気づいてすぐドアに向かい、耳を傾けた。

「みっミルフィちゃんなの！？」
「ここにいても大丈夫なのっ！？」

声の主はミルフィだった。しかしいつもの明るい声ではなく、非常に暗く悲しい声だった。

「うん、話をさせてって言って監視係を下がらせたの。みんな……ごめんねっ、こんなことになったのも全部アタシ達の責任だヨっ……」

「違うよ、ここに来たいと言い出した僕らが悪かったんだよっ！ミルフィちゃん達は悪くないっ！」
深く謝罪する彼女に対して、代表して彼女を励まそうとするドラえもん。

「なあ、教えてくれ。あの時二人に何があったのか？しかもどうして俺達に何の説明もないのにここに閉じ込めるのかっ！？」

「そうだよそうだよっ！あと僕らはこれから一体どうなるんだよ？」

「ちょっと落ち着いてよ二人ともぉ！ミルフィちゃんに失礼だよっ！」

彼女に質問責めを行うスネ夫達二人をたしなめようとするドラえもん。

すると、ミルフィのほうからしずかに口を開いた。

「……わかったヨ。この後アナタ達は今までの記憶が一切なくなるんだからこの際、話してあげるわ……っ」

「「「えっ？」」」

するとミルフィは三人にこう説明した。

「あたし達はね、黙ってたけど本来アナタ達地球人には逢ってはいけない立場なの。

『異星人文化干渉法』に基づいてねっ」

「異星人……文化……干渉法……？」

「なっなんなのそれっ？」

初めて耳にする用語に全く理解できない三人にミルフィは理解できるようにこう説明した。

……

【異星人文化干渉法】

銀河連邦の定めた法律の一つ。主に発展途上惑星や未開発惑星において、まだ発展希望のある種族が存在する場合、その種族の自力の

発展を尊重し、先進種族の科学技術等の文明、文化を持ち込まないと言う法律。
厳密にはその種族と接触により、独自の文化に影響を与えるものと考えられているため接触はおろか、目撃される、感知されるのも禁止である（例え、事故で対象惑星に不時着しようと例外ではない）。この法を破ると重刑に処せられる（地球もその法の対象内であるため、エミリア達の地球での行動や今までに至る行為は完全に違法となる）。
その対象となるかならないかの基準は全て本隊が取り決めている。
……
「何だって……っじゃあ……っ？」
「俺たちと話すどころか会っただけで？」
「そこでアウトってわけ？」
ミルフィは小さな声で返事を返す。
「うん。アタシたち偵察部隊の任務は地球とかの対象惑星に他の先進種族や知的生物が介入しないか確め、発見した場合はすぐに本艦に連絡し、捕まえて取り締まるのが本来の目的……。それをアタシ達自らが破ったこととなる……」
あまりにも厳すぎるその法に納得する三人ではなかった。特にジャイアンは……。
「こんな無茶苦茶なことあるかよぉ！大体エミリアさん達のはどうみても事故じゃねえか！！」
「落ち着いてジャイアンっ、あっちにはあっちの法律があるんだ。

僕らがどうこう言っても仕方がないよっ！！」

すると珍しくスネ夫はミルフィにこう聞いた。

「じゃっ……じゃあ、その法を破ったらどうなるの？エミリアさん達は……？」

その核心的な発言にミルフィはしばらく黙ったあと、こう言った。

「……エミリアとあたしはその法を違反したことで、一番重い罰を受けるのは当然責任者のエミリア……。多分…本隊で軍事裁判がかけられて、良くて階級降格、下手したら懲戒免職、または逮捕されて懲役になりかねない。

あたしもほとんどの行動が制限されるかも……っ」

《！　？》

三人はその凄まじさに唖然とした。なぜそこまで酷いのか理解出来なかった。

「おいミルフィ、俺らを出して提督に会わせてくれっ！

エミリアさんとミルフィを許してくれるように頼み込んでやる！

もしダメって言われたらこの俺がぶん殴ってやるっ！

ミルフィだって助かりたいだろ！？」

彼の大胆かつ乱暴な発言を聞いた全員はびっくりして飛び上がる。

「そっ、そんなことしたら、かえって立場が悪くなるじゃないかぁ！？」

「乱暴もいいとこだよぉ！」

二人が彼を静めようとする中、ミルフィは身体をぶるぶる震えてついに怒りを彼にぶちまけた。

《かってなこと言わないでヨぉ！！》

「「「！　？」」」

三人ともミルフィのキレた声を初めて聞いて、沈黙する。彼女の瞳から涙が浮かび上がっている。

「タケシ君、ここはアナタがいつもいる地球じゃなく、ここは銀河連邦、アナタ達の地球で言う……軍隊なのヨ。

もし提督にむかってそんなことをしたらどうなると思うっ？反逆者としてあなたは即死刑、一緒に行動したドラちゃん達にまで何らかの刑に処せられるのヨ！？

アナタの勝手な行動で全員を陥れるなんてドラちゃん達にとっても絶対もってのほか、そんなのあたしはもちろんエミリアも絶対望んでないし、彼女自身の顔に泥を塗ることになるのヨ、それでもいいの！？」

「……」

ついに何も言えなくなるジャイアン。今気づけば今までの発言は非常に自分勝手で回りを一切考えないことばかりだ。

さすがの彼もそれもわからないようなバカではない。

ミルフィも言い過ぎたのか、シュンとなり目を瞑る。

「……ゴメンナサイ、言いすぎたわ。
アナタ達の気持ちは非常にわかる。
私だって……たった一人のパートナーであるエミリアを裁判沙汰にしたくない。
……けど、これは銀河連邦が定めた法律なのヨ。
これを違反したエミリアはもちろん、その直々の上官でかつ艦長であるカーマイン提督、その艦に所属する兵士達全員にも恥をかかせたのと同じになるの。

アナタ達はまだ子供だから分からないかもしれないけど、軍隊では自分勝手な行動をする兵士が一人でもいるだけでその部隊は全滅してしまうだけでなく、隊全体に影響を及ぼす危険性は非常に高いの。
だからアタシ達の処遇は間違っていないの。そこだけはわかってちょうだいっ……」

「「「ミルフィ（（ちゃん））……」」」

ドラえもん達はそれに気づいてしまった。ここは地球と違い、自分たちの思い通りに行くところじゃない、銀河連邦という正真正銘の軍隊だということを。
わきまえた行動や発言をするべきだったと特にジャイアンは思うのだった。

するとドラえもんは思っていたことをミルフィにこう聞いてみた。
「ミルフィちゃん、一つ聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「何……？」

「エミリアさんのことなんだけど、そのアマリーリスって組織に何かあったの……？
今思い出したんだけど地球で僕がタイムテレビで見てた時の一緒に見たあの人の表情と言い方が非常に怖かった。
あんな表情、かなりの恨みや怒りを持っているとしか思えないし…
…もしよかったら僕達に教えてくれないかな？」

「……」

ミルフィはその質問に答えづらいのか、しばらく沈黙したが、コクっとうなづくと静かに口を開いた。

「……いいヨ。何があったか教えてあげる……」

……

その頃、エミリアは自室に待機していた。彼女はデスクに置いてあった写真をたたひたすらに見続けている。
その写真には、恐らく彼女の故郷と思われる所で二人の睦まじき恋人が仲良く抱きつき合い、笑顔で写っていた。
見るかぎり、その女性の方はエミリア本人のようだが……？

「……っ」

彼女のサングラスの下から一滴の雫が流れ出す。それは涙であった。
彼女も軍人とは言え、いち女性である。泣きたい時には泣いてしまうのは性ではあるが、彼女は仕事上、誇り（プライド）があるため普段は滅多に泣かなかった。
そんな彼女が泣いているのはなかなかないことだった。

《プシューーーッ》

突然、自室のドアが開くとそこに立っていたのはなんとあのヴァルミリオン艦長、カーマインだった。

「……提督？」

エミリアはとっさに涙を手で拭い。すぐに彼の元へ向かう。
彼はさっきの怖い表情とは異なり非常に優しそうな表情をしていた。

「エミリア、さっきはあんなに激怒して悪かった。だがわかってくれ、あれはーー」

「……わかっております。あれは私の独断で招いたことですから……。それでご用件は？」

「久々にお前と話したくなってな。お前の好きな飲み物を持ってきたし、落ちついてここは階級を忘れてお互い人間同士で話したいと思うのだが、大丈夫か？」

「……本当にありがとうございます。もちろんよろしいですわ、ではこちらへ」

彼を自室のソファーへ案内すると彼はスッと座り込み、持参した飲み物のボトルを前のデスクに置いた。
彼女も彼の前のソファーに座り込む。
しかし、彼女はもの悲しい表情で顔を下へうつむいている。
それを見て、カーマインは軽くため息をついた。

「……気にするのなら無理に話さなくてもよいが、良ければ地球の偵察中に何があったか教えてくれないか？いつもより遅く帰還し、

地球人の子供達をここに連れてきた理由も……」

「……わかりました」

……エミリアは地球であったことを全て彼に打ち明けた。地球に自分たちの偵察機が自分達の不注意で墜落したことも、彼らの不思議な道具のお陰で偵察機を修理できて無事、帰艦できたことを。そして、なにより重要なことはその彼らの友達が……ある理由でアマリーリスの本拠地に……。

「……そんなことがあったのか……。なんと悲惨なことであろうか……」

「……っ」

二人に静寂で重々しい雰囲気に包まれる。確かにそうゆう理由なら今までの出来事に全て辻褄が合う。彼はそう思った。

「なら彼らは私達と協力してアマリーリスにいる友達を助けたいというのだな？」

「……はいっ、しかしここで私がちょっとしたよからぬ思いでこんなことになったことに深く反省しております。やはりあの時は断固としてあの子達がついてくるのを止めさせるべきだったのです」

カーマインは腕組をして、深々とソファーに背もたれる。少し黙りこんだあと、彼女に対してこう言った。

「実は別部隊の連絡により、今アマリーリスがこちらに向かってきているということで作戦を作成しているのだが……今回の作戦では

お前を外そうと思っていた」

「えっ？」

それを聞いたエミリアは信じられないような表情をしている。その理由を彼は少し黙った後こう言った。

「ホントは言いたくはないがお前、まだ立ち直ってないだろう？あの惨劇からな……」

「…ううっ……」

その言葉で彼女はあの忌々しい記憶が蘇ろうとしている。思い出すだけで怒りと憎しみ、そして悲しみの三大負の感情が自動的に沸き上がり、もう何がなんだか分からなくなる。

そう……それはあの時、数年前に遡る。

……

◇ＰＡＲＴ．１２　事実と思惑（後書き）

次はエミリアの回想から始まります。

◇ＰＡＲＴ．１３　エミリアの過去（前編）（前書き）

過去編突入です。（……といっても二話で終りますが（笑））

◇ＰＡＲＴ．１３　エミリアの過去（前編）

……数年前、銀河系外宇宙、Ｘ２５４方位で停滞していたヴァルミリオン艦内では。

「お疲れ様です、大尉、少尉」

当時、大尉に昇任したばかりのエミリアとまだ少尉だったミルフィはいつも通りに偵察から帰艦し、カーマイン提督に結果報告へ向かう途中だった。
二人は円盤の乗り物に乗りながらイチャイチャ楽しく話をしていた。

「エミリア、あと２ヶ月後には結婚式かぁ。いいなぁアタシも彼氏が欲しいヨ～ぉ」

「うふっ、あなたも早く男、いやオスを捕まえて楽しい楽しい恋生活を送りなさい♪」

「もお、他人事だと思ってぇ！」

そんな話をしながら、中央デッキへ向かう二人。すると途中で彼女の部下に出くわした。

「おっエミリア大尉、偵察ご苦労様でした！」

「あなたもお疲れ様っ」

部下は元気な声ですぐに敬礼するとエミリアも笑顔で敬礼する。

「いやあ、大尉もついに結婚とはねぇ。ここだけの話ですけど実は俺、あなたを狙ってたんですけど先に捕られちゃったんですね……くやしいぃ！」

それを聞いてエミリアはクスッと笑う。

「あらっ？あなたも彼女がいるんじゃなかったかしら？」

「まあそれは随分前の話なんですけどね、今の彼女はちょっと……わがままなんですけど慣れればかわいいもんですよ」

「ふふっ、あなたもその彼女を甘やかしすぎて後悔しないようにね。女は怖いわよ♪」

「大尉なにいってんですか！？……けど、忠告ありがとうございます♪」

二人で恋話に盛り上がる中、ミルフィはため息をついて疎ましく感じていた。

「あ～あっ……恋人のいる人はいいこと……」

エミリアが結婚をすると言う話題は艦内でもすでに持ちきりのようだ。

彼女も美人なうえ性格も良いため、色んな男性隊員から狙われていたのだが、結婚すると聞かされどれだけの隊員が落ち込んだことか……。

ー一部下との話が終わり、二人はすぐさま中央デッキに向かう。
そして二人は提督の方に到着するといつも通りに偵察報告をした。

「ご苦労だった。特に何もなかったな？」

彼の問いに深くうなづく彼女達。

「はいっ！」

「特に異常は見られませんでしたぁ♪」

すると彼は優しい笑顔でエミリアにこう聞いた。

「……挙式はもうすぐだな。レイド君とは順調か？」

エミリアは恥ずかしいのか顔を赤くしつつも、笑顔で応える。

「ええっ……。今度休暇を頂いたら私の惑星に帰省して二人で結婚指輪を……」

それを聞いて彼はクスッと笑う。どうやら彼女の種族も地球人と同じく、結婚指輪をつける形式のようだ。

「そうか、なら私からもエミリアに何か結婚祝いで何か贈らないとな。何がいい？」

「とっ、とんでもないですっ。その気持ちだけで本当に嬉しいです！」

彼女は慌てて手を振りそう答える。

「今度、艦内の全員でお前の祝いパーティーを開こうと思っている。もし空いてる時間があったら教えてくれ」

「はいっ、本当にありがとうございます」

エミリアは彼に深々とお辞儀をする。ミルフィはそんな二人を見て、さらに羨ましく思うのだった（なぜなら彼も既婚者だからだ）。

……仕事が終わり、エミリアは部屋へ向かう途中に二人の兵士がすれ違う際、こういう不吉な話を耳にした。

「……セクターα宙域にある2号星『惑星ドグリス』が突然、壊滅状態だってさ……っ。生存者はほとんどゼロらしいーー」

「知ってるっ、どこかの悪徳異星人集団による侵略、虐殺って報告らしいね。なんて名前だったかなっ……確か『アマリーリス』だっけ。

幸いこっちの部隊にはそこが故郷の人はいなかったらしいけどさぁ……なんか故郷を狙われたらどうしよう……」

「大丈夫だって、我々銀河連邦を敵に回したらきっとその『アマリーリス』ってふざけた名前の組織なんかイチコロだよ！」

『アマリーリス』、全く聞かない組織の名前だ。

全宇宙には色んな種族の組織がいる。平和を愛する友好的組織はも

ちろん、逆に悪事を重ねる極悪組織も多数確認されてきた。
しかしそのような組織は銀河連邦相手には歯が絶たず、壊滅するか逮捕されて解散するかのどちらかだった。なのでその『アマリーリス』も銀河連邦によってその末路を辿ると誰もが思っていた。今の時点では……。

「……」

……

エミリアは部屋へ戻り、コンピューターをいじっている。
しかし内容は仕事関係ではなく……『新婚旅行の行き先』について調べていた。

「はあ……ここの惑星はリゾート地が結構あるんだけど一つ一つ高いしなぁ……。
ここの惑星は安くてなかなか……あっ、直射日光が強いって書いてある……これも却下」

地球とは雲泥の差である。先進種族にとって各宇宙、各惑星へ行くこと自体が地球人における、海外へ行くような感覚なのだろう。

「まあ焦ることはないけど早く決めることに越したことはないわね。

ーーいいとこないかしら？」

溜め息をつき、コンピューターから手を離す。
彼女はとなりにある写真立てを持つと、入れていた写真を見つめる。
それはエミリアと彼氏のレイドとのツーショットだった。
その時のエミリアの表情はあどけなさが残るが可憐な印象が残る、

屈託のない笑顔に満ち溢れていた。

それを見ながらクスッと笑う彼女は非常に幸せな気持ちだった。

しかしあの二人が言っていた例の組織の名前が頭に残っていた。

「……」

するとエミリアはまたコンピューターに手をつけ、そのアマリーリスについて調べてみた。

彼女の内にある正義感が働いたのか、気になって仕方がなかったのだ。

「あら、あったわ……？なになに……っ」

調べていく内に実はとんでもない組織であることがわかってくる。

「なっ……その組織の艦が……『ランクS級』のエネルギーを観測したですって……？

うっ、嘘でしょっ……ヴァルミリオン級と同じじゃない……っ」

ランクとは、簡単に言えば基地や宇宙船、艦から発するエネルギーの質量を上から『S』『A』『B』……と言った具合に格付けしたような用語である。

大概の組織から観測されたエネルギー質量は『B』級、高くて『A』級であるため、現時点で『S』級クラスのエネルギー質量を持つ組織はNP（ニュープラトン）エネルギーをほぼ独占している銀河連邦以外に考えられない。

なのでエミリアが驚愕するのは無理がないのである。

「この艦の攻撃を受けた惑星はただじゃあすまないわね……。さす

がの銀河連邦でも手こずるかも。
うちの惑星も大丈夫かしら……？」

そんな不安を持ちつつ、さらに調べまくるエミリア。

「首謀者……ラクリーマ……ベイバルグ……？
変わった名前ねぇ……」

彼女はその時はまだ、理解した程度しか感じなかった。
その内にこの組織も壊滅、逮捕されるだろうと思っていた。その時までは……。

……

1ヶ月後、エミリアは休暇を貰い、自分が所有している宇宙船で故郷惑星へ帰省しようと専用の格納庫にいた。

「エミリア、お土産よろしくね♪」

「大尉、気をつけてお帰りなさいませ」

ミルフィ含む、同性の彼女の同僚や部下達が見送りにきていた。

「あんた、帰って彼氏と毎日、夜励むんでしょ？力尽きないようにガンバってね♪」

「もうなにいってんのよっ！？」

冗談なのか、同僚の下心丸出しの発言を顔を赤くして強く否定する

エミリア。

「もう行くわ。また一週間後会いましょ！」

そう言うと彼女は宇宙船に乗り込み、カタパルトから射出されて飛び出していった。

一方、中央デッキでは彼女が旅立っていったことを同僚が提督に報告していた。

「そうか。もう行ったか」

「はい、しかしエミリアはもう結婚気分ですねっ。なんかもう毎日が楽しそうだから」

それを聞いて提督もニコっと笑う。

「……あの嬉しい表情を見てると昔の私を思い出すよ。確かに結婚が近づくと……」

「おっ、提督もそんな初々しい思い出があったんですか？このこのっ♪」

「……オホンっ！」

冗談まじりで提督に茶々を入れる同僚に、珍しく顔を赤くする提督。

……

3日後。セクターεの第4惑星モーリス。

ここは主にモグラを祖先とした温厚種族『モーリアン』が生存している惑星である。

大気成分、表面温度、重力等、地球にほぼ酷似している惑星であるが、太陽に相当する恒星から地球の位置より少し離れている場所にあるため、祖先と比べて視力は遥かに向上しているが未だ光に弱い彼らにとっては住み心地のよい環境である。

地球と違い、大陸同士が離れていない巨大大陸の平和国家で成り立ち、主に土に関与する機械や物など、独自の文明ではあるが、その科学技術は地球より遥かに越え、銀河連邦の加盟惑星でもある。

その惑星の大陸に東に位置する大都市『リアエント』。

その中でエミリアと彼氏のレイドは自分達のエンゲージリング……いわゆる結婚指輪を決めに専門店に来ていた。

「ねぇ、あたし達これが似合うんじゃないかしら♪」

「ならつけてみる？
すいません、つけてみてもいいですか？」

見るも恥ずかしく彼氏の右手を握り、はしゃぐエミリア。
仕事では真面目で冷静と定評のある彼女もプライベートではこんなものだ。

そんな彼女を優しい笑顔で見る彼は、元々エミリアとは幼なじみで

互いに想いあってたのだがなかなか進展がなかった。
が、最終的に彼から告白されてから付き合いはじめ、睦まじい交際の末、結婚まで辿り着いたのだった。

「あたしこれにしたい♪いいかな？」
「エミリアがこれでいいなら。これでお願いします」

この惑星でしか取れない貴重な天然石を使い、淡い赤色光を放つ金属の指輪が非常に目立っている。エミリアはその輝きに魅せられたのだろう。

エミリアは満面な笑顔で彼の手をブンブン降りまくる。

「レイドっ♪ありがとぉ！」

「ハハッ……」

彼女のはしゃぎぶりに彼も恥ずかしいのか自分の頭をスリスリ撫でる。

無理もない。ヴァルミリオンからこの宙域までかなり遠く、さらに彼女の仕事上、いつでも帰れるわけではなかった。

なので、もし結婚すれば彼女ほどの階級であれば近くの住める惑星に移住し、そこから通勤することも可能なのでそこに呼び寄せようと考えていた。

本当に二人は自他認める相思相愛の仲であった。
これがいつまでも続けばいいと彼女たちはそう思っていた。

……

その頃、ワープホール空間。
あのアマリーリスの母艦、エクセレクターがとある方向に空間跳躍していた。

内部のオペレーションセンターでは、

「リーダー、あと約７２０分後で惑星モーリスのあるセクターεに到着しますぜ！そのままモーリス軌道上へっ！」

当時ユノンはアマリーリスに加入してばかりであり、今よりやや幼い容姿で今よりも無表情、無口で非常に冷たい雰囲気を漂っていた。
その彼女の横にいたあの男、ラクリーマが不敵な笑みを浮かべて仁王立ちしていた。
「ユノン、お前の初仕事だ。緊張してねえか？」

「……」

彼女は無表情で何も言わないがコクッと頷き、それをチラ見した彼はニイッと歯を出して笑った。

「上等っ！。
各員、作戦内容を確認する！！
まずワープから抜け出たらすぐさま『リバエス砲』で惑星モーリスの表面大地に大穴を開ける。
その後、俺を先頭に戦闘員は惑星圏内へ突入する。その後はいつもの通りだ。

艦内オペレーター、その他の艦内の者はユノンの指示に従って行動、俺達を通信でサポートしてくれっ！
銀河連邦が駆けつける前に終わらすつもりで行くぞっ！」

“おおっっ！！”

ラクリーマの命令に全員が大声で呼応した。

「なおリバエス砲発射時、惑星直撃時には各員衝撃に備えよ。それまでは休憩、待機。作戦決行までに配置を完了せよっ！」
ラクリーマは部下に伝えると、ユノンの方へ向いてこう伝えた。

「いつでも主砲が放てるように今の内にエネルギーチャージしとけよ。あとは教えた通りにすればいい。
お前はこのエクセレクターのノウハウをたった一ヶ月で覚えた天才だっ、いけるな？」

「……」

ユノンはさっきと同じ、何も言わず無表情のままコクッと頷いた。

「期待してんぜ、新人副司令官さんよぉ！」

ラクリーマは彼女に向かってグッと親指を上に突き上げた。

……

数時間後、大陸の左端に位置する町『ヤゴ』。すっかり夜になり彼女達はレイドの実家にいた。彼女達は彼の親が用意してくれた部屋で仲良く一つのベッドで寝ながら話をしていた。

「ねえっ、結婚したら旅行どこいこぉか？」

「ん～っ、海かな？けど光が強いとこは嫌だけどエミリアは？」

「もう、それいっちゃあどこも同じじゃない！
あたしこれでも仕事の合間とか自由時間を使って探してるんだからっ！」

「そんなことばっかして、仕事に集中していないとかやめろよ？」

「へへんっ、あたしは『仕事は仕事、休みは休み』で割りきってるから安心ですぅ♪」

「たくぅ、敵わないや。エミリアには……」

そんな風に楽しく話している内に段々眠くなり……。

「もう寝よっかあ……。それは明日二人で考えよぉ」

「そうだね。じゃあお休みぃ」

こうして二人は就寝する。が、エミリアは何故か妙な胸騒ぎがして眠れなかった。
それが結婚するという実感に対しての興奮なのか嫌な予感なのかはわからないが……。

レイドはもう完全に睡眠しているのにエミリアは何回寝返りうっても眠れない。

（もう……何なのかしら……っ）

彼女は起き上がり、彼を起こさないようにそっと歩いて窓の外を見た。
地球とは違い、月に相当する衛星がないため本当に真っ暗闇な世界である。

しかし彼女達は暗い土の中で育つモグラから著しく進化した種族であり、それに伴い地上で生活し始めてから幾分生態や特徴が変わったがその名残として、たとえ暗くても感覚で自分の場所を把握できるのである。

「あたしもついに結婚かぁ……。今まで色んなことあったけど……これからもレイドと上手くやっていけるよねぇ……」

エミリアはクスッと笑い、ベッドに戻ろうと振り向いた。

その時っ、

《カッッッッ！！》

「！　？」

突然、辺りが眩いほどの金色の光に包まれ、段々それが強力となりそして、

《ズ　オ　ォ　オ　オ　オ　オ　ォ　ォ　っ　！　！》

「キャアアアアァッ！！」

エミリアは今まで味わったことのない超衝撃に襲われて、同時に中にある家具も一気にその衝撃波で吹き飛ばされる。

「エっエミリアァァ！！」

レイドもベッドごと吹き飛ばされ、それぞれ二人は離ればなれで吹き飛ばされた。

……外ではその衝撃波でほとんどの家が薙ぎ倒されている。生き埋めになる人、かろうじて外に出たが全身重症になって歩けない人、外に放り出される人……

しかし一番多かったのが何を隠そう……死体である。

……一体何が起こったのか、それはこの惑星に住む住民は気づく暇もなく、ただパニックに陥るだけであった……。

◇ＰＡＲＴ．１３　エミリアの過去（前編）（後書き）

ますますドラえもんっぽくなくなってますが割りきって下さいｍ（＿＿）ｍ

◇ＰＡＲＴ．１４　エミリアの過去（後編）（前書き）

お待たせしました。
続きです

◇ＰＡＲＴ．１４　エミリアの過去（後編）

数時間後、ヴァルミリオン艦内の中央デッキでは。

「てっ、提督っっ！！」

オペレーターが慌てて彼を呼び、すぐに駆けつける。

「どうしたっ！？」

「そっそれがっ！？」

オペレーターの顔を見ると非常に青ざめた表情で、ただならぬ状況であることを物語っていた。

「先ほど本隊から連絡がありまして数時間前、セクターεの第４惑星『モーリス』が突然、正体不明の異星人組織によって強襲を受けたということですっ！！」

《！　！　？》

その瞬間、その場にいた全員に衝撃と緊張が走った。

「な　ん　だ　と　ぉ　！　？」

あの冷静なカーマイン提督でさえ驚きと焦りを隠せなかった。

あのエミリアが今、故郷であるその惑星に帰省していたのだから……。

「それで被害状況は！？」

「はっはいっ！！今調べます……これはっ！？」

オペレーターが急いで３Ｄスクリーン状のコンピューターで状況を確認すると、恐るべき事実が発覚した。

「信じられませんっ！惑星モーリスの……全大陸の３分の１が消滅、惑星の中心に巨大な空洞が発生しているそうです！！

エネルギーランクは……『Ｓ』級のエネルギー質量を観測したっ！？」

「えっ……『Ｓ』だとっ！？

ということはＮＰエネルギーかっ！！」

「間違いありません。そんな破格な威力のエネルギーを生み出せるのはそれ以外考えられません！！」

「なっ……なんということだっ……エミリア……っ」

その事実を知ったカーマインは絶望し、頭を押さえる。

……

【ＮＰ（ニュープラトン）エネルギー】

主に銀河連邦が独占、利用している【ニュープラトン】という宇宙鉱物から抽出できる奇跡の新世代エネルギー。

かつては希少な鉱物と言われ、微量でほぼ無限大なエネルギーを発生させることができる、夢のような資源であった。しかし近年、とある宙域の惑星で鉱脈が発見以来、大量に採取されるようになり銀

河連邦等の先進組織は著しく科学技術を発展することが出来た。
核との相違点は放射能などの危険物質を一切放出せず、さらにこのエネルギー自体が自己増殖するためほぼ永久的に無尽蔵で使用できるという、まるで神のごときエネルギーである。
しかしこれを悪用されては全宇宙を破滅に導きかねない。
なので平和利用するという目的で銀河連邦が独占するようになったのであるが……。

……

「エミリアに連絡とれるのか！？」

「むっ無理です。ここからセクターεまで約１０５万光年離れています。大尉が常に所持している通信機の送受信範囲はせいぜい１０万光年が限度ですよ！」

「むうっ……っ！」

中央デッキ内はエミリアの安否についてざわめいていた。
ヴァルミリオン所属で提督直々の部下で尚且つ、優秀で期待されていたエミリアにもしものことがあったら……。
もうこのデッキ中は緊迫な空気と焦り、そして絶望で満たされた。

「各員落ち着け、起こったことは今さらどうにもならんっ！
それより今はモーリス内の生存者、及び彼女の安否の確認を優先しろっ！」

彼の一喝により、周りの兵士は正気を取り戻す。

さすがはこのヴァルミリオンの艦長だ。
「近くにいる救援部隊は？」

「はいっ！現在セクターεへ向かっているとのことです。ですが、もうその組織の反応はないと言うことです」

「……私もモーリスに向かう。宇宙挺の用意を早く！」

「はいっ、只今！！」

彼はもう彼女が生きていること、ただそれだけを願い、デッキから去っていった。

一方、その事件は当然艦内でも放送され、エミリアの同僚や後輩たちは……。

「うっ…うそでしょ……っ」
絶望と悲しみのあまり、頭が真っ白になり立ちつくす者や、

「いやぁぁぁっエミリアがぁぁぁっ！！エミリアぁぁぁ……っ！」

その場で泣き叫ぶ者までいたのだった。

「……っ！」

ましてやパートナーであるミルフィには知らせを聞いて、いてもた

ってもいられなかった。

「あたし、提督に会ってくるわっ！！」

「ミルフィっ！？」

ミルフィは皆の元から走り去って行った。

「エミリア……お願い……無事でいて……っ」

彼女も悲しみのあまり泣きたくてしょうがないがそれを押し殺し、今は彼女が生きていることだけを願って、カーマインの元へ向かっていた。

しばらくすると、

「提督っ！！」

「ミルフィ！？」

偶然二人は遭遇し、お互い駆け寄る。

「提督、エミリア大尉はっ！？」

「……私は今から惑星モーリスへ向かう。もし先の救援部隊が彼女を発見できなければ私ひとりでも探すつもりだ」

「提督、もしよければアタシも同行させてください。あたしも捜索

したいですっ！！」

しかし彼は苦渋の表情でミルフィを見つめる。

「ダメだ。S級クラスの質量のエネルギーが惑星に撃ち込まれたんだ、エミリアも巻き添えを食らって消し飛んだ可能性が高い。直撃圏内から離れていたとしても万が一、願ってない姿で発見された場合、彼女のパートナーであるお前には見せたくない。ここに残って自分の仕事を全うしてくれ」

彼なりに彼女への気遣いから出た発言だが、ミルフィはそこで黙っていられるわけではなかった。

「お願いしますっ！！私は……私はエミリア大尉のパートナーですっ！
彼女の生死がわからないのにただここでじっとしていられませんっ！
同行させてください！！」

ミルフィは彼に深く顔を下げる。ただならぬ思いを感じたのか彼はその小さい体を持ち上げて、彼女の顔を見つめた。

「……ミルフィがそこまでゆうなら……同行を許可する。ついてきなさい」

「提督……っ、ありがとうございますっ！！」

こうして二人はすぐに宇宙挺のある格納庫を向かい、すぐに乗挺。
カーマインは操縦席、ミルフィはとなりの助手席に座り込む。

「目標、セクターεの第４惑星モーリス、もしかしたらまる１日かかるかもしれん。私の不在中、本艦を頼むっ！！」

“了解！！提督、かならずエミリア大尉を見つけてください。これは本艦にいる全員の願いです”

「分かっている。だから皆に伝えて安心させるように言ってくれ！」

“ええっ。提督も無理はなさらないでください。ではカタパルト射出します”

《ドンッ！！》

宇宙挺は射出され、宇宙空間に出ると、進路を惑星モーリスの方向へ超高速で駆け抜ける。

「ミルフィ、ワープを繰り返し約数時間で惑星モーリスへ向かう。前方へＮＰエネルギーを収束開始」

「了解っ！！」

彼女はすぐさまコンピューター端末を使い、キー入力する。
すると前方にワープホール空間の入り口が発生した。

「中に突入する。衝撃に備えよっ！

……エミリア、どうか無事でいてくれよ……」

「……」

宙挺はワープ空間へ突入していった。

二人の考えは全く同じ、彼女の生存を信じて……。

……

その頃、惑星モーリスでは見るもおぞましい地獄絵図と化していた。

惑星自体がエクセレクターから放たれた主砲が残した巨大な痕が宇宙軌道上からよく確認出来る。

惑星内はさらに凄惨な状況だった。直接主砲の直撃下でなかった場所も超衝撃波と膨大な熱量で広範囲の殆どの町、大都市が壊滅的被害を受けていた。

しかし、一番気になるところが死体である。

主砲の直撃により消し飛んだ人はもちろん、直後で発生した衝撃波や熱量による外傷や全身火傷で命を落とした人はまだわかる。

しかし、中には鋭利な刃物で真っ二つにされたような遺体や首のない遺体、さらにドリルかなにかの突貫物で体全体を抉られたような遺体、身体中、銃で撃ち抜かれたような遺体、明らかに主砲によるものではない不自然な遺体があちこちに散乱している。

それは主砲直撃後、ラクリーマ率いるアマリーリス戦闘員による大虐殺が行なわれた証拠である。

そして、ヤゴの町では……。

「うっ……うん……っ」

真っ赤に燃えさかる町の中、レイドの実家はすでに破壊されており、倒壊ではないものの見るかげもない状態となっていた。
しかしその家の瓦礫が少し動きはじめて、カチャカチャと音を立てている。

《ガシャアアッ！！》

何と中から出てきたのはエミリアだった。そう、彼女は何とか無事であった。
吹き飛ばされた直後、周りの家具が彼女の周りに集まり、体はもちろん、奴らから守ってくれたのだろう。
しかも、その瓦礫もボロボロだったので、彼女一人でも容易に出てこられたのである。

「いっ……いつ……っ」

と言っても、彼女の左腕は激しい激痛を発し、全く動かない。どうやら骨折してしまったようだ。しかも、多少であるが火傷や打撲等のケガも負い、身体中に痛みが走る。

「……ひいっ……眩しいっ……サングラスは……っ？」

彼女の一番の困りどこはここだ。
光に弱い彼女は火炎が発する光があまりにも強く、もはや目を開けられない状態だった。
彼女は必死で手当たり次第サングラスを探す。しかしそんな小さい

物は瓦礫に埋もれてしまい見つかるハズがない。

「はあっ……はあっ……っ熱い……、何が何だか……っ」

痛みと周りの火災の熱が彼女の残り少ない体力を容赦なく奪う。このままではいつ意識がなくなってもおかしくはなかった。

……一体何が起こったのか、周りがどうなっているのかわからない。しかし、あたりになにかが燃えてむせるような匂いが立ち込めるのがわかったので火災が起きているのはわかった。

そして次第にこう考えるようになった。

“タダゴトではない”と。

「レイドぉ……助けてよぉ……熱いよぉ……どこにいるのよぉ……お願いだから返事してよお!!」

彼の名を泣きながら必死に叫ぶが返事が全く返ってこない。

「ううっ……だっ誰かいないの……誰かいるなら返事してぇぇ!!」

こんなに叫んでも人の声も聞こえない。聞こえるのは燃えさかる炎の音だけで、エミリアは段々と最悪な予感を感じた。

“誰も生きていないのでは”と。

しばらく手探りをしていると……。

「……？」

何やら不気味な柔らかい感触と共に、手が濡れたような触感を味わった。

生々しい音と共に粘着性のある感触に気持ち悪さを覚える。

目が使えないエミリアは手の臭いを嗅ぎ、それは何かを確かめてみた。

《！　？》

生臭く鉄のような生理的不快感を催す臭いがする。指をこねてみると次第に液体が凝固していく。

そう……それは人の血液であった。

「これ……これって……あたしの触ったモノって……もしかしてぇ……」

エミリアの触ったモノ……それは内臓どころか体の真ん中がミキサーでぐるぐる粉砕されたかのように見るも無残な姿に成り果てた死体だった。

それを想像しただけで彼女の顔は青ざめていき、挙げ句の果てには……。

「ああっ……あ……ぐっ……げぇぇっっ！」

エミリアはとっさに口を押さえたが時すでに遅し、その場で大量の

嘔吐物を撒き散らす。

「はぁ……はぁ……ぐうっ！！」

さらに嘔吐し続けるが、しばらくするともう何も口から出てこない。
胃にぐっと激痛が走る。

《ドサッ……っ》

そのまま倒れ込み、骨折した患部の激痛と気持ち悪くなる一方で意識が段々と朦朧としてくる。

“あたし……死ぬのかな……っ。レイド……どこにいる……の？
だれか……助けてっ……”

エミリアは涙を流し、そのまま意識を失ってしまった。

……

「……エミリア……エミリアっ！！」

「はっ！」

彼女は目を覚ますと一気に起き上がる。辺りを見渡すと記憶のある前の場所とは違い、とても空気の澄んだ、四角い空間の一室のベッドの上にいた。

「エミリアっ大丈夫！？」

「てっ提督……？ミルフィ……？」

エミリアはそこにカーマインとミルフィがエミリアの横に座っていた。

「……あたしは一体っ……つぅ……」

エミリアは左腕を見ると包帯と三角巾で固定されている。他の火傷や打撲等のケガはここの医療技術のおかげで治療がすでに完了していた。

「ここは救援部隊の所有している艦内のメディカルルームだ。崩壊したヤゴの一角の廃墟でお前が倒れているのをここの部隊が発見してな、私たちはモーリスにつくなり部隊にお前を保護、救助したことを聞いてここに来た。
よかった、お前は助かったんだ……」

「エミリア……前腕部骨折だけは治らなかったけど……無事でなによりだヨ……」

エミリアは全く理解出来なかった。廃墟？救援部隊？ヤゴの町が崩壊？一体何が起こったのか全くわからない。

「どっどうゆうことですか……？ヤゴが崩壊したとか……全く何がなんだか分かりません！！
教えて下さい！！」

「「……」」

ー二人はあの時、惑星モーリスに何が起こったか全てエミリアに話した。

“……信じられない”

それを聞いたエミリアは恐怖と悲しみのあまり、顔を青ざめ体をぶるぶる震わせていた。

しかし、さらに追い打ちをかけるようにカーマインは彼女にこう告げる。

「……本隊が調べた結果、惑星モーリスを強襲した組織は『アマリーリス』という名前だそうだ。

惑星内のほとんどが壊滅、生存者もお前を含めて数えるくらいしかいなかったらしい……」

アマリーリス……あの時調べた組織が今度は自分の故郷を襲ったなんて……。

信じられない……いや信じたくない、故郷のこともあるが、何より結婚を控えた自分たちの幸せな時間が一撃で崩壊するなんて……。

「……レイドは……っ？レイドはどこっ！？」

「「……」」

その質問に二人とも沈黙する。

何も喋ろうとしない彼らを見て、エミリアは何かを悟ったのか、さらに表情が深刻になっていく。

彼女は震える右手で彼の手を掴み、強く揺さぶり始めた。

「提督っ、レイドはどこですか！？生きているのですかっ！？教えて下さい！！」

しかし彼らは何も言わずにただ黙っている。しかしミルフィは瞳に涙を浮かべている。

これは……？

すると彼が静かに口を開くと震えるような声でこう言った。

「…エミリアが倒れていたすぐそこと近くに……三人の遺体が発見された……っ。しかしその遺体は……レーザーのようなで武器で撃ち抜かれたような痕跡と、何やらドリルのような回転物によってズタズタな状態だったらしい……っ。

身元不明だが……一人はエミリアと歳の近い青年だそうだ……っ」

《！？》

彼女は耳を疑った。三人の遺体……自分の触ったあの不気味なものは……まさか……。

「そんな……あたしが……触ったあれは……ああっ！！」

彼女は顔を酷く歪ませて頭をぐっと押さえ、そして。

「い　や　あ　ぁ　ぁ　っ　っ　！　！」

……彼女はついに悲鳴を挙げて錯乱する。

「落ち着けエミリアぁぁっ！！」

カーマインとミルフィは必死でエミリアを押さえようとする。が、彼女はまるで子供のように泣き叫び、わめく。

「あたしのレイド返してよぉぉっ！！なんでよぉぉっ！！」

故郷を滅ぼされ、最愛の恋人までも失った……信じがたい悲しい現実。

落ち着かせようとする二人の顔も悲しみに溢れて、ミルフィは涙を流していた。

「どうしましたかっ！？」

この叫び声を聞こえ、救護隊員がすぐに彼らの元へ駆けつけた。彼がその場で見たものはベッドの上で泣きわめくエミリアを必死で押さえ込むカーマイン提督とミルフィの姿だった。

「すいませんが医師の方に頼んで鎮静剤の用意をっ！！」

「はっはいっ！！」

隊員は急いで医師を呼びに去っていった。

一方、彼女の錯乱はさらに加速していく。

「あ〝あ〝あ〝ーーっ！！いやあああっ死んじゃいやぁぁぁっ！！」

「エミリアお願いだから落ち着いてヨぉぉっ！！」

必死に押さえているミルフィの願いも今の彼女には聞こえていなか

った。

「もう死にたいっ！！レイドがいないなんて生きてもしょうがない！！死なせてぇっ！！」

《バン！！》

「きゃあっ！」

カーマインは本気で彼女の頬に平手打ちをかます。その顔は非常に怒りに満ちている。

《馬鹿者ぉぉっっ！！》

「ひいっ……！？」

「ああっ……っ」

エミリアは彼の威圧に鎮まりかえる。ミルフィも驚き、その場で立ち止まった。

「……お前は助かっただけでも幸いなのに自分から死にたいだとぉ……？お前それでも私の部下かっ！？」

「……」

静寂とした雰囲気に包まれ、彼は彼女にさらに話を続ける。

「お前の気持ちは痛いほどわかる……だがこうやって泣き叫んでも彼は戻ってきやしない。

それに死にたいなど自暴自棄の言葉を吐くんじゃない。

彼氏が死んだから自分も死ぬ？ワガママもいいとこだ。
私はともかくお前の無事を願うものたち、ここにいるパートナーのミルフィにまで心配かけるな」
エミリアはミルフィの方を見ると、彼女は悲しみに暮れ、何も言わず涙をただ流している。

「ミルフィ……」

「……」

するとカーマインはエミリアの肩に手をおいてこう言った。

「エミリア、ヴァルミリオン艦長である私が今から発する命令に従うように」

「えっ……提督？」

「『生きろ』。お前には帰るところがある。彼の分まで生きて人生を全うしろ……。これが私の命令だ。」

「提督……っ」

エミリアの瞳から大粒の涙が溢れる出す。

彼はそんな彼女の右手をぎゅっと握り締めていつもの優しい笑顔で彼女を見つめ、こう言った。

「私やミルフィ、いやヴァルミリオン艦の全員がお前を絶対守る。だからそんな悲しい顔をするな」

彼女はうつむき、涙がポタポタ落ちる。彼の温かい優しさに触れたのか……彼女はまた泣いてしまった。

「……うっ、ううっ……あああああ……っ」

「エミリア……っ」

二人のやり取りを心配でたまらないような目で見つめるミルフィ。

「……アタシもあなたのココロの支えになるからもう悲しまないで……っ」

「ミルフィ……っ」

彼女なりの励ましにエミリアは彼女を持ち抱えるとぎゅっと抱きしめた。

「ごめんね……っ。あたし大尉になったばかりでしっかりしないといけないのに……恥ずかしいトコ見せちゃったわね……」

「エミリア……っ」

そんな中、やっと医師と助手数人が三人の元へ駆けつけてきた。急いで走ってきたのか息が切れている。

「はぁ…はぁ…おやっ、落ち着きなさいましたか？」

「ええっ、お騒がせして誠に申し訳ありませんでした」

「そうですか、それは本当によかった。
また何かあったらお呼びください。すぐに駆けつけますから」
「本当にありがとうございます」

医師達は安心すると笑顔で去っていった。
提督は安心したのち、立ち上がると彼女達に向けてこう言った。

「お前にはしばらく休暇を与える。その怪我と心身を癒してまた元気な姿で仕事に励んでくれ。いいな？
ミルフィはそれまで艦内オペレーターとして頑張ってもらう。数日ここで休んだら本艦に帰艦しよう。本艦にはそう伝えておくから安心しなさい」

「……はいっ」

「了解」

二人はやっと多少落ち着いた表情で返事をする。こうして悪夢のような1日にやっと終わりを告げたのだった。

――そして数日後、心身共に怪我を負ったエミリアはカーマイン、ミルフィと共に帰艦した。

幸い、歩けたので彼女は休養するよう言われ、自室に戻る途中、どれほどの隊員が彼女とすれ違うたびに憐れんだことだろう……。
エミリアは俯きながら顔すら上げず、何も言わず、その息が詰まりそうなくらいに重い雰囲気を纏い、決して彼女に声をかけられる状

態ではなかったと言う。
。

人が彼女の部屋を通ろうとすると、彼女のすすり泣く声が部屋から静かに聞こえるてきたと言う人も。

同僚や部下も彼女を元気にしようと、励まそうとお見舞いに行ったり、遊びに誘ったりもした。
しかし、それでも以前よりも明るさを失ったと言う。

しかしそうしている間、その組織『アマリーリス』は数々の銀河に押し入り、さまざまな惑星や宇宙船を襲撃していた。
しかし奴らとは全く出くわさない。
これが不思議でならない。いつ、どこに現れるもやもさっぱり不明で次第に銀河連邦にとっては頭の痛い存在となってきた。

「セクターγ宙域にある惑星ロパが謎の組織に襲撃を受けたとの本隊から知らせが……生存者は怪我人に含めて数百人。
こちらもまたS級の質量を観測したとのこと……」

「ええっ！！そんなぁ……」

中央デッキ内で何人かの隊員が声を上げた。

そうである、彼等はその惑星出身でだった。

「ああ……あっ……故郷に恋人が……っ」

「私の家族がぁ……ううっうああっ！！」

彼らは絶望し、その場で泣き叫ぶ。近くにいる者はすぐに慰めようと、落ち着かせようと必死であった。

直接ではないが彼らもエミリアと同じ苦痛や悲しみを味わされたのである。

「……」

カーマインは額に手を押さえて落胆した。

……次は誰の故郷、同種族に惨劇が起こるか分からない。明日になったら自分の故郷かも知れない状況……。

最早、誰にも予測不能で本当に全宇宙は危険にさらされようとしていた。

そして、銀河連邦本司令部は宇宙全域に駐屯している各部隊、加盟惑星に緊急発足。

『なんとしても各惑星に侵略している謎の組織アマリ―リスを徹底的に探索、感知し、発見した場合は直ちに本部に連絡、対処せよ！！』

そして各部隊はそれぞれ次の標的になりそうな惑星を予測して、その周辺を警戒を開始。

しかし、それが読まれているのか予想外な惑星に姿を表し、侵略。

駆けつけてみればすでにもぬけの殻だったりと。

さらに惑星全域を侵略したりすれば、逆に何区域だけを襲撃してだけで、そのまま逃亡と明らかにこちらを挑発しているようなやり方さえあった。

次第に加盟惑星から、まったく逮捕できない銀河連邦に対して『一体何をやってるんだ!?』などと批判の声も上がり、信用などの問題も出てきた。

……連邦はもはやどうすればいいのか分からない状況であった。

しかし、これだけは言える。

『必ず逮捕しなければならない。それは全宇宙の平和や秩序を守る者として、そしてその誇りにかけて、どんな手段を持ってしても奴らの暴虐を止めなければならない』。

……エミリアは部屋で一人静かにコンピュータを操作し、アマリーリスの情報を徹底的に調べていた。

それも眉間にしわを寄せて、恐ろしい形相をしながら……。

“許さない……絶対に許さない……。

こんな酷いことをする悪魔どもを私は死ぬまで一生恨んでやる。

目の前に現れたら、この手で……仇を討つ!!”

……

「そっ……そんなことがあったなんて……」

「エミリアさん……っ」ミルフィからエミリアの過去を聞かされ、言葉を失うドラえもん達。

凄惨な事実にエミリアが受けたであろう衝撃と悲しみ、アマリーリスに対しての怒りも混ざり、非常に気分が悪くなるのだった。

「あれから数年経ってエミリアも回復したし、故郷に訪れて亡くなった人達の弔いもしたわ。……だけどそれと同時にそのアマリーリスも以降ますます知名度を上げて、今や第一級指名手配にまでになったヨ。これは今までにないほどのクラスよ。奴らには頭のいい仲間がいるのか私達銀河連邦が駆けつけてくるまえにはもういなくなっているのヨ。

これは綿密な時間計算、戦略を考えないと不可能なことヨ」

「のび太達は……そんな奴らの本拠地の中にいるってのかよ……っ」

「大変なことになってきた……」

ことの重大さに気付き、段々恐怖に襲われる三人。

「……けど……アナタたちにはもう関係なくなるわ。
そろそろあたしも戻らないといけないし……サヨナラ……っ」

悲しい顔をしてそこから去ろうとするミルフィにドラえもんは最後にこう聞いた。

「ミルフィちゃんっ、僕たちはこれからどうなるの!?」

彼の問いに彼女は立ち止まると振り向いてこう告げた。

「心配ないわ。アナタたちは私達の勝手で連れてきたから、何の罰を受けることなく地球へ帰れるヨ。

……けど、『異星人文化干渉法』にある通り、アナタたちは知りすぎてしまった。

これからアナタたちには記憶操作で今までの記憶を全て消してもらうわ。

つまりあたし達とは始めから会わなかったことになるのヨ」

「何だって……それじゃあ……ここのコトやのび太達の居場所も……」

「全て消されるって……こと？」

そしてミルフィはまた振り返り、最後にこう告げて去っていった。

「……本当にごめんなさい……」

その言葉の前になすすべもなく三人はその場で固まる。

そして周りには重苦しい雰囲気に包まれたのだった。

◇ＰＡＲＴ．１４　エミリアの過去（後編）（後書き）

この手の展開を書くのにかなり苦労しました。不器用ですが許してください。

◇ＰＡＲＴ．１５　協力要請（前書き）

やっとドラえもん編終わりです。今回も非常に長いです。

◇ＰＡＲＴ．１５　協力要請

うす暗い留置所の中、ドラえもん、ジャイアン、そしてスネ夫の三人は悩んでいた。今の自分たちにとって、どうするべきなのかを。

「ドラえもん、やっぱりカーマイン提督にあって俺達も参加できるように頼んでみようぜ！
ミルフィの話を聞いて黙っていられるかっ！？」

ドラえもんは腕を組んで悩んでいる。

「う～ん……と言ってもねえ。さっきも言ったけど、抜け出して万が一見つかったりでもしたらそれこそ……」

「そうだよそうだよ！！無事に帰れるんならここで静かにしといたほうがいいんだよ！！
のび太達だってきっとここの人達が助けてくれるよぉ！」

ドラえもんに賛同するスネ夫。確かにその方が安全かつ正論で現実主義者の彼らしい発言だ。

「スネ夫、お前裏切るつもりか！
いつもなら嫌がるお前がついてきたのも俺達と同じ考えだったからだろ？

ここまで来たからには今さら後には引けないぜっ！」

するとジャイアンはその曇りなき眼で二人を見て、こう言った。

「……たとえ一人でも行ってくる。
のび太達のこともあるけどエミリアさんの助けになりたい。
俺は……そういう困っている人を見たら助けてやらないと気がすまないからな

ドラえもん、ここから抜け出す道具をだしてくれ！」

いつもは乱暴な少年だが、こういう事態になったら無謀だけど、直情的で人情味溢れる彼の良い性格面が顕れるのはたいしたものだ。

すると、

「……わかった。けどジャイアンだけじゃ危険だ、僕も行く！！」

「「ドラえもん！？」」

なんとさっきまで迷っていた彼自身がジャイアンに『協力する』と宣言した。

「実は僕もミルフィちゃんの話を聞いてのび太君二人はモチロン、エミリアさんの辛い思いから救ってあげたくなっちゃった。
それにこっちはひみつ道具があるんだし何かあったらこれを使おう！」

それを聞いたジャイアンは大喜びし、ドラえもんの手を握った。

「おお～っ心の友よ～！」

「えへへっ、それにもし捕まっても一人より二人の方が気は楽だろ？」

「そうだな。で、スネ夫は？」

二人はスネ夫の方を見つめる。彼はキョロキョロ目を動かし、迷い抜いた末、

「わっ、わかったよっ、いけばいいんでしょ！？」

一人になるのが怖かったのか、仕方なくもドラえもん達と行動することを決めたようだ。

「よっしゃあ、なら決まりだな！！」

ーーこうして三人は力を合わせてここから抜け出しカーマインに会って説得するための作戦を考えはじめる。

ドラえもんはポケットを探りはじめる。

「『モーテン星』とか『石ころ帽子』は今ドラミに預けてあるから使えないけどあれなら……っ」

ポケットの中から取り出したのは何と、如何にもな形をした巨大な潜水艦だった。

「『潜地艦』！！、これに乗り込んで下から進もう」

「せっ潜水艦じゃないの…？」

「『地中に潜る』から潜地艦なの。そんなことより早く乗り込んで

っ！」

……あまりパッとしないが、とりあえず艦の中に乗り込む三人。考えたらこの巨大な宇宙艦の中でまた小さな艦の中に入るのはおかしな話だ。

しかしそんなことを思っている暇などない、早く脱け出さないといつ監視兵がここに来るかはわからない。

「じゃあ、行くよ。ちなみにこれはゼンマイ式駆動だから５００ｍくらい進んだら地上に上がってまたネジを巻かないとダメだから二人とも、その時は協力をお願いね！」

「「はあっ？」」

二人は唖然する。いちいちそんな面倒臭いことをしないとダメなのかと思うのだった。

「もしネジを巻いてる時に見つかったらどうするだよ！？」

「動かさなければネジは切れないんだから有効に動かせばいいんだよ。この双眼鏡から見れば地上を見れるし……さぁカーマイン提督のいた場所まで戻ろう！」」

「……そんなんで上手くいくかなぁ……？」

不安に思う二人をよそに、ドラえもんはボタンを押すと、潜地艦はまるで海の中へ潜るかのように地面へ沈んでいき、そしてその場から姿を消した。

「よし出発だ。幸いここから中央デッキまであまり遠くなさそうだから、時間がかかるけど急ごう！」

床下の謎の空間内では潜地艦が動き出し、留置場から脱出した。果たしてこの三人は無事に彼の場所までたどりつけるであろうか……。

……

一方、エミリアはやはり過去のことを忘れられないのか、彼女は何も言わず、ただ涙を流し続けている。

そんなエミリアを黙ってみつめるカーマインはついに口を開いた。

「やはりまだ立ち直りきれてなかったんだな……」

「……」

彼はため息をつき、腕組みをする。

それはそうだ。結婚相手を亡くし、さらに故郷まで滅ぼされた記憶は彼女の心に深い傷として残るものだ。

しかも、それらが悪の組織『アマリーリス』の欲望の犠牲になったのだから奴らへの憎悪は計り知れない。

「……エミリア、なぜ私がお前を今作戦から外すと言ったか分かるか？」

「……」

彼女は顔を横に振ると、彼は持っていた護身用の拳銃を前のテーブ

ルにそっと置いた。

「仮にだ。私がそのアマリーリスの組織員だとしよう。目の前に仇がいる、お前の手の届く場所に銃が置いてある、お前ならどうする？」

「えっ……？」

「発砲はもってのほかだが持つのは自由だ。持ちたかったら持てばいい、銃口をこちらへ向けたければ向ければいい」

「あっ……あたしはっ……」

すると彼女は銃へ手を伸ばす。震える手で少しずつ近づいていく。ついに銃のグリップを掴み、そして彼女はさらにぶるぶる震えながらもカーマインの方へ銃口向け始めた。

「これだ、お前を作戦から外す理由は」

瞬時に彼女から銃を取り上げて元に場所に戻す。

「どうゆう……ことですか……？」

「お前は普段は冷静なのだが、時に私情に駆られて独断専行的行動が見られる。
あの子達をここに連れてきたのはまさにそれではないのか？」

「はっ……！」

確かに一度はあの三人の同行を拒否したものの、彼らの懸命な願い

に心が揺れて結局は連れてきてしまった。思い直せば、あの時はアマリーリスに彼らの友達がいることを知って、つい私情も絡んでしまったのかもしれなかった。

「兵士、ましてやお前のような士官が勝手に行動するとどうなる？部下はお前についてくると思うか？」

「いっ、いいえ……」

「しかもな、あの子達を巻き込んで何かあったらどうするつもりだったのだ？

その不思議な道具を持ち、協力しに来たと言われても保護対象の地球人でしかも、か弱い子供達とロボットだぞ」

色々指摘されて何も言い返せないエミリア。

さすがに言い過ぎたのか彼は口を出すを止め、立ち上がると彼女が座っているソファーの横に座る。

「……最後にこの質問だけ答えてほしい。お前はもし奴らに出くわしたら敵討ちをしたいと思うか？」

エミリアは彼の方を向いてコクッと頷く。

しかしこのあと彼から出た発言は思わぬ言葉だった。

「……そうか。なら本当にこの作戦に出させるわけにはいかなくなったな」

エミリアは理由も分かるはずもなく、彼の瞳を見つめる。

「エミリア、『復讐するは我にあり』って言葉を知っているか？」

「……？」

……復讐するは我にあり……

新約聖書に登場する言葉で『悪を報いるは神であり、人間自らの手で報いてはならない』という意味である。それを法律的に今の置かれた状況で説明すると『アマリーリスは銀河連邦の法律で裁きを受けるべきで、復讐と言う名でエミリア自身が直接手を下してはいけない』という意味になる。

「敵討ちなどと自ら手を汚すような個人的なことは間違っても考えてはいけない。

あくまで我々は軍人であり警察だ。

アマリーリスという組織を組んで侵略や虐殺などの悪の道へ突き進むのを止めて、彼らを正しい道へ導くのが銀河連邦の本来の在り方だと私はそう思う」

彼の考えは最もだと思う。が疑問を抱く彼女は口を開く。

「……奴らには更正するという考えがあるんでしょうか？

私はそう思えませんが？」

「なら時間をかける。時間をかけてかけて少しでも変われるようにこちらが努力すればいい。人間の可能性を信じることだ」

『罪を憎んで人を憎まず』を信念としている彼らしい考えだ。

「ですが……あたしの気持ちをどこにぶつけたら……っ」

彼女は忘れようとしていたアマリーリスのことを思い出してあの惨劇の記憶が完全に甦ってしまっている。
エミリアの一番の弱点はここだ。

元々彼女は感情の起伏が激しく感受性の強い、いわゆるセンチメンタルな性格である。
気になることがあると頭に残りやすく考え込んでしまい、それが元で熱が入りやすくなかなか冷めず、しかし落ち込むときは一気に落ち込むという不安定な精神の持ち主で、これは軍人という立場から見たら非常に危険な性質なのである。

しかも数年経ってるとはいえ、あの事件で心に深い傷を負った彼女にさらに拍車がかかり、アマリーリスへの憎しみは倍増していると思われる。
よって彼らを目にしたら、感情が高ぶり彼らの命を平然と奪いかねない。

そうなればもう彼女は銀河連邦としての誇りやモラルを捨てることとなり、最悪の場合『人殺し』のレッテルを貼られることとなる。
エミリアの事情を一番知る彼からしてみれば彼女にはそんなものを一生背負ってこれ以上惨めにさせたくない。

エミリアを作戦から外す本当の理由はそれである。

「気持ちは分かるが奴らがどんなに悪であろうと命は命だ、殺すことは私が許さん。
ただ奴らはこちらに向かってきているのは幸いだ。私達が必ず奴らを逮捕するから安心しなさい」

するとエミリアはうつむいた状態で彼にこう聞いた。

「あの子たちは？」

「記憶操作でここの事や私達のことなどの記憶を全て消して、無事に地球へ帰す。
彼らのその友達もまだ生きてるのであれば必ず保護して地球へ送り帰すつもりだ」

「……ありがとうございます。あたしが軽卒なばかりにこんなことになってしまって……誠に申し訳ありませんでした」

「……」

深々と謝礼する彼女の姿を哀しげ目に見つめる。
本当は彼女に言いたくないが、（規律）に違反した以上は上官直々として言わざるをえなかった。

《ビィ―っ！！ビィ―ィ！！》

「「！？」」

突然、艦内に警報が響きわたる。
カーマインはすぐに自分の持っていた通信デバイスを開くと、その場で部下の映像が浮かびあがった。

「何事か！？」

「提督！！留置場へ入れられていたはずの地球人の子供達とロボットが突然姿を消しました。脱走です！」

「何ぃっ！？全エリア区域内を検索、彼らの居場所を逆探知し、通路を封鎖しろ！」

彼はデバイスを閉じると、すぐにエミリアの自室から出ていこうとするが、

「てっ……提督……っ！！」

エミリアは彼を呼び止め、震えるような声でこう言った。

「……同行させてください。
こんなことになったのも全て私の責任です。なので私自ら出向いてあの子達を……」

彼女の必死な願いにも提督は『それを否定するかのように』首を横に振る。

「だめだ。お前も行って事を大きくするんじゃない。
それにお前は今は自室謹慎中の身だ。これ以上違反して罪を重くするんじゃない……ここに残りなさい」

「……」
そう言うと彼は部屋から出ていった。
しかし彼女はそれで治まるような人物ではなかった。
「やっぱりあたしが行かなきゃっ……」
彼女なりの罪滅ぼしと考えたのだろう、今のエミリアの頭の中には

それしかなかった。

そして彼女もまた自室から彼らを探しに出ていってしまった。

……

一方、ドラえもん達三人は床下から中央デッキに向けて進んでいた。

しかし双眼鏡でしか確認出来ないためか、上では何が起きているのか分からなかった。

しかも、周りを見渡しても誰もいないので不思議に感じていた。

「おかしい……急に人がいなくなったけど……」

「一回、地上へ上がってみようぜ！」

ドラえもんは正面の赤いボタンを押すと、艦は浮上し始める。

上がるとどうやら通路のようだ。

三人は外に出て周りを確認すると、前にはさっきまでなかったはずの分厚い金属壁が先の通路を塞いでいる。

後ろを見ても同じく金属壁で塞がれている。

「どうなってんのこりゃあ？」

「まるで閉じ込められたみたいだな」

『閉じ込められた』というジャイアンの言葉にドラえもんはあることに気づいた。

「まっ…まさか……ヤバいっ、早く乗り込め！」

彼は急いで中に入るように促し、二人をすぐに潜地艦へ乗り込んだ。

「ドラえもんどうしたんだ！？」

ドラえもんはすぐにすぐ横の青いボタンを押し、沈ませる。

「僕らの脱走がバレたんだ。だから通路を塞いで僕らを行き道をなくしたんだと思う」

「なにっ、もうバレたのか！？」

「これでもしさっきの僕達が浮上していた時に探知されてたら完全に僕らの負けだ！！」

「ええっ！？どうして！？」

スネ夫が聞くと彼の額から汗が流れ出た。

「探知されてたらあの人達が駆け付けてその周辺を監視されるかもしれない。

そうなったら浮き上がったところを発見されてしまう。しかも……」

「「しかも？」」

するとドラえもんは前の操作盤にあるメーターを指す。たぶん燃料に位置するネジの残量を表したものだろう。

それを見ると、もう針が『E』の部分に近づいていた。

「見ての通りもうネジがない。少し進んでもまたゼンマイを巻きに

上がらなければいけない。けどその時にもう待ち構えてかもしれないし、されてなくてもその間に探知される可能性は非常に高い！」

「「……」」

前方と後方には少ししか進めない状況でどっちに転んでも絶望的。もはや覚悟するしかないのか……。

一方、カーマインは中央デッキに戻り、オペレーターとモニタリングしていた。

「エリア５行き通路に謎の小型艦と地球人を確認、そのあとまた艦に乗り込んで床に沈んでいきました……。これは一体……」

やはり三人は探知されていた。

「各員に次ぐ、エリア５通路からその周辺に集合し待機、発見した場合すぐに捕獲せよ。
なお、エミリアの話によると彼らには何やら未来から来たロボットがその時代の道具を所持、使用している模様。
決して油断するな！」

艦内に命令を放送する。

「私もそこへ出向てあの子達には直接説教を……。オペレーターは引き続き捜索を続行し、情報を送るように」

「了解！」

そう言うと彼はまた中央デッキから去っていった。

その時、ドラえもん達は床下の艦内で話し合っていた。

「だから僕らはあの場所で静かにしとくべきだったんだよ。記憶を消されても助かるならそれでよかったんじゃないか！！」

「うるせぇ、もうここまできたんならしょうがないだろうが！！」

二人は言い争っているなか、ドラえもんは考えた末、こう練り出した。

「こうなったら最後の賭けだ。わざと発見されて捕獲されたら多分、提督と会うだろうから、その時に説得するしかもうチャンスはないと思う」

「……俺もドラえもんに賛成だぜ。スネ夫は？」

「……」

スネ夫は黙り込んでしまう。元々あまり乗り気じゃなかった彼だ。賛同しにくいのは無理もない。

するとジャイアンはスネ夫を見つめて右肩に手を置いてこう言った。

「考えたら俺が無理やりお前を誘ったんだからな、それは謝る。けどな、お前だってのび太達を助けるためやエミリアさんやミルフィの力になるために嫌々ながらもここまでついてきたんだろう？男なら潔く決めてくれ。俺だって怖い、お前一人だけじゃないんだか

らな」

「ジャイアン……」

やたらカッコいい台詞でスネ夫を説得する。

その言葉に感化されたのか、数秒間間を置いた後、スネ夫は何回も頷く。

「わかったよ。僕も協力するよ！！」

やっとスネ夫もその気になり、三人の心は一つになった。

「うっし！ドラえもん、上に上がろうぜ！！」

「うん！！」

ドラえもんは浮上ボタンを押し、艦は上に浮かび上がる。

しかしその瞬間、そこにはたくさんの兵士が手持ちの銃を構えて周りに待ち構えていた。

「抵抗しなければ何もしないからすぐに出てきなさい！」

兵士の警告を前に三人はのそのそ中から出てくる。

兵士はすぐに三人の体を調べあげる。

その間、やはりドラえもん達は恐怖で震えている。

あのジャイアンも子供なのだから怖いのは当たり前だ。

すると三人の前にカーマインが駆けつけてくる。しかし彼の表情は苦渋だった。

「お前たち……なぜ脱走ということを考えた？答えなさい……っ！」

彼は並みならぬ威圧を三人はかけてくるのであった。

するとジャイアンは突然、頭を下げて大きな声で彼にこう言った。

「おっお願いがあります。どうか俺たちをそのアマリーリスとか言う組織にいる友達を救うために協力させて下さい！！」

《！！？》

その場にいた兵士全員が耳を疑い、ざわめき始めた。

さらにあとに続いてスネ夫、ドラえもんも頭を下げる。

「お願いです！！絶対に貴方がたの役に立てるように必死に頑張りますから！！」

「お願いします！！」

しかしカーマインはそれを無表情で首を横に振った。

「……ダメだ。お前たちはなんとかなるだろうと思っているのか？遊びじゃない、生死に関わることだ。あまりにも危険すぎる」

しかし三人は引き下がろうとしない。なぜならもう三人の決意は固かったからだ。

「どうかお願いします！！友達を助けたいだけじゃなくてエミリアさんの辛い思いから救ってあげたくて脱走したんです！！」

「!?」
その言葉にカーマインは無表情から一転して焦りの表情へ変わった。
「お前たち……もしかして彼女の過去を知っているのか……?」
「……」
すると、
「ドラちゃん!!スネ夫くん!!タケシ君!!」
なんとミルフィもここに急いで駆けつけてきた。走ってきたのかなり息を切らしている。
「ミルフィちゃん!やっぱり僕ら、エミリアさんの助けになるよっ!」
「そうだぜっ!ミルフィが全て話してくれたおかげでこっちもやる気が出てきた、ありがとな!」
その発言を耳にしたカーマインはミルフィにグッと睨み付ける。
「ミルフィっ!お前まさかこの子達にエミリアの過去を!?」
カーマインはミルフィに訊ねるとシュンとなって顔を下げる。
「申し訳ありません……。どうせ記憶を消されると思ってつい……しかしまさか脱走するとは……!?」

「ついじゃない！！彼女の事情をどうしてあっさりと言ったんだ！？この馬鹿者っ！！」

「ぴいっ！！」

ひどくしかりつけ、完全にミルフィはビビってしまっている。
そして彼はドラえもん達の方を見て、こう言いはなった。

「知ってしまった以上はもうしょうがない。だかなエミリアはもうこの作戦に参加させないと決めたんだ。
第一彼女はもう……」

しかし突然、

「お待ちください提督！！」

「なっ！？」

全員が振り返るとそこにはあのエミリアがここに歩いてきていた。
その時の彼女は思い詰めた表情をしていた。

「エミリアっ！！自室謹慎と言ったハズだ！！
破ってさらに罪を重くするつもりか！？」

しかし彼女はその言葉を無視して彼にこう言った。

「……この子達と話をさせて下さい。あたし自ら言い聞かせます！」

「……っ！」

そのまま彼女は三人の方へ向かうと彼らを見つめた。しかし、徐々に眉間にシワを寄せ始める。

「えっ……エミリアさん……」

「ああっ……っ」

すると

《パン！パン！パン！》

「「「あてっ！」」」

なんと彼女は三人の頭を軽く叩いた。

「バカっ！！脱走なんかして何かあったらどうするのよっ！？場所と立場をわきまえなさい！！」

彼女は三人をひどく叱った。
しかしそれで反省するような彼らではなかった。

「俺たちはエミリアさんの助けになりたくて提督に頼み込んだんだ！なあ二人とも！！」

「「「うんっ！！」」」

その力強い声からは意志が強いことがはっきりわかる。

「あっあたしの……？」

驚く彼女にミルフィがこう伝える。

「実は……留置場でエミリアの過去を……」

「なっ……なんですって…っ！？じゃあ……っ」

すると今度はドラえもんが彼女にこう言う。

「うん。僕たちはミルフィちゃんから全てを聞いてあなたの助けになれたらなと思ってつい……。

僕たちそういう人を見かけたら助けずにいられないタチだから……」

「……」

彼女の瞳から一筋の雫が流れる。

……それは涙だ。

彼女は涙を拭くと、提督の向かってお辞儀をした。

「謹慎中でありながら、無断に出てきてまことに申し訳ありません。

ですがお願いがあります、彼らをここで許してもらえないでしょうか？

この通り悪気があって行ったのではありません。どうかお願いします」

「エミリアさん！？僕達が勝手に脱走したのにあなたが謝る必要ないよっ！」

「そうだよぉ！僕達はただ協力できればいいなと思って言いにきたのに！」

彼らはエミリアを弁護するが、彼女はニコッと笑って顔を横に振った。

「ありがとう。私のためにここまで考えてくれるなんて……その気持ちだけで充分嬉しいわ。
けど私はもう違反した以上、もうどうすることもできないのよ。本当にごめんなさい」

「エミリアさん……っ」

三人はもちろん、周りにいる全員が言葉を失った。
三人のその強い意志と優しさはここにいる兵士達に強く突き刺さっていた。
それはカーマインにさえ同じだ。
しかし違犯は違犯、それはどうあれ変えることはできない運命（さだめ）であったのだから。

するとカーマインはずれた帽子をちゃんと直すと彼女の肩に手を置いた。

「……落ち込んでる暇はない。お前には今作戦で頑張ってもらわないといけないからな！」

「えっ！？」

その言葉に全員が耳を疑った。すると彼は彼女に背を向けた後、こう言った。

「お前に特別任務を与える。その地球人の子供達と協力して今作戦時、アマリーリスにいると思われる彼らの友達を救出、保護する任務を附与する。もちろん、パートナーのミルフィもだ！」

それを聞いたエミリアとミルフィ、三人は顔を輝かせて彼にこう聞いた。

「そっ……それじゃあ……あたしは……！？」

カーマインはエミリアの方を向いて普段と同じ、優しい顔で返す。

「この子達はお前に全てを託す。君達もエミリア大尉の指示をちゃんと聞くんだぞ？わかったな！」

そう言うと彼はその場から去っていった。

それから少し沈黙した後……

《やったあああああっ！！》

《エミリアさんっよかったなぁ！！》

その場にいた兵士が一気に大歓声を上げた。

そしてエミリアとミルフィ、そしてドラえもん達三人はあまりの吉報に体を震わせていた。

「信じられない……まさか……こんな……」

ミルフィはすぐにエミリアへ飛び込んだ。

「エミリアっよかったヨぉ！！提督は許してくれたんだぁ！！」
ミルフィは嬉し涙を流して顔を擦り付ける。

「ミルフィ……」

彼女も涙を流して二人で喜びを分かち合う。

一方、三人は安心したのか一気に体が崩れその場に座り込んだ。
「よっよかったぁ……」

「ホントに一時はどうなるかと思ったよ……」

「けど俺たちが必死に頼みこんだおかげだな！！」

そう言っている三人に元にエミリアとミルフィが笑顔で手を差し伸べた。

「あなた達地球人は本当に不思議ね。本当に感謝してるわ。ありがとう！」

「私たちより地球人の方が数段たくましいんじゃないかしらぁ♪」

二人の感謝と誉め言葉にデレデレになるドラえもん達。

「いやぁ……」

「えへへっ……」
そしてエミリアは張り切って彼らにこう言う。

「提督から指示を受けた通り、作戦時、あなた達はあたしの指示に従って行動すること、決して自分勝手な行動はしないこと。わかったわね？」

「あとここではアタシはともかくここの人たちの言うことは絶対に従うことヨ。軍隊なんだからネ？」

凛々しい口調で言われ、ドラえもん達もビシッとする。

「「「はっ、はいっ！！」」」

それを見た彼女はクスッと笑った。

かくして三人の純粋で懸命な思いがここの雰囲気をグンと変えるという偉業を達成したのだった。

一方、中央デッキでは。

「ええっ！！エミリア大尉を！？」

異例の措置にデッキ内の部下達は驚きの声をあげる。

「ああっ。あの子達の行動や姿を見てると昔の私を思い出してな。あの頃はただひたすらに正義感溢れていたな……。今は立場上そんなことも忘れて法律だの規則だのを気にするようになっていたようだ」

彼の表情は非常に清々しかった。

「しかし違犯は……」

「実際あれは本隊に伝える気はないよ。
あの叱咤はエミリアを反省させる意味で言ったのだからな。実際に私もあの法には少し無茶苦茶な部分を感じるしな」

それを聞いた部下達は脱力しため息をついた。

「なんだ……心配しすぎて損した。あれは嘘だったのかぁ……」

「……ゴホン……」

少し皮肉の混じった小声が聞こえ、咳き込むカーマイン。しかしすぐに真面目な表情へ変える。

「問題はここからだ。あのアマリーリスがこちらに向かっているということに注目しなければならん……」

「そうですね。作戦会議はいつになさいますか？」

「……今から8時間後だ。
そうだ、数日間だけあの子達の部屋を手配してくれ。彼らはこれからエミリアと共に行動させる」

「了解」

……

あのあと三人は提督からここの規動や行動などを全て聞かされた後、各部屋へ案内された。

エミリアは作戦会議に出向いている間、彼らは疲れたのか部屋のベ

ッドで寝ていたのだった。

ジャイアンは完全に爆睡、スネ夫は地球にいる母親に思いを馳せ、ドラえもんは……。

「のび太君、しずかちゃん……大丈夫かなぁ……？」

やはりドラえもんは二人が心配で眠れなかった。ちゃんと生きてるのだろうか？生きているにしても酷い目に遭っていないだろうか？ただ不安が募るばかりであった。

◇ＰＡＲＴ．１５　協力要請（後書き）

次からはアマリーリス編へと移ります。

◇解説2（前書き）

解説その2です。今までに登場したキャラなどの設定や未登場設定も紹介してあります。

解説その3まだ少しあとになりそうです。

◇解説2

●登場人物●

●アマリーリス勢

・レクシー

アマリーリスの戦闘員で立場は多数の部下の中でも最上位である。祖先が（トカゲか分からないが）爬虫類の異星人『リザドラン』であり、身体中には鱗がついている。

アマリーリスへ飛ばされたのび太達を最初に発見した人物であり、のび太達を受け入れた後は二人の良き理解者として活躍する。

非常に明るく、生真面目な性格。率先して行動し、後輩に面倒見も良いため全員からの信頼も高いがやや熱くなりすぎて先走る傾向がある。

血の気や多く、さらに変人の多いアマリーリスにおいて、一番の常識人。

ラクリーマのことを尊敬する一人であり、彼の役に立てることを切実に願っている。ラクリーマ本人からの信頼も非常に高い。

組織内にジュネと言う恋人がいるが彼女の大胆な発言を前に顔を赤くするなど、純粋な面も。

身長＝１８２ｃｍ

体重＝７０ｋｇ

・ユーダ

アマリーリスの戦闘員の一人。立場はレクシーと同等。祖先は昆虫（蟷螂）の種族『マンティノス』で、複眼である。

アマリーリスの中でも問題人物で非常に残虐非道でかつ人を見下す傾向の持ち主。
アマリーリスの仕事は最高の遊びと認識し、楽しみながら進んで悪事を重ねる。
仕事上はそれでいいが、いざとなったら仲間を裏切ろうとするため、周りからの信頼性も薄く、且つラクリーマから目をつけられている。しかしレクシーとは唯一話せる仲で、彼から非常に心配されている。

身長＝１９０ｃｍ

体重＝６０ｋｇ

・サイサリス
エクセレクターの開発部門所属で技術者。アマリーリスの組織員の中でも数少ない女性の一人でアマリーリスの武装やマシン、ログハートやセルグラードを開発したのも彼女である。のび太達と同じくヒューマノイドで年増だが容姿端麗である。（地球人年齢では４０歳前後）。

非常に天才なのだが超がつくほどのマッドサイエンティストで、さすがのラクリーマも彼女の珍発言には苦笑いするほどである。男勝りであり男のような口調で喋る。

ラクリーマの亡き親友、エルネスとは同じ惑星出身で同類として親交があった。本人曰く『腐れ縁だった』とのこと。

身長＝１６５ｃｍ

体重＝４５ｋｇ

●銀河連邦勢

・カーマイン・エルゴンド

銀河連邦所属のヴァルミリオン艦長であり、ドラえもん側の今作戦司令官。階級は提督。エミリアとミルフィの上官である。普段は穏健で周りから非常に信頼されている名艦長であり、エミリアの過去もあり、何かと彼女に気をかけている。既婚者。

「罪を憎んで人を憎まず」を信念とし、例え悪党であろうと救えるように接し、行動する人徳者である。

ドラえもん達とは初めは『異星人文化干渉法』により、作戦に参加させることを拒んでいたが、認めた後は良き理解者として接する。

戦闘時には軍人らしい思考を持ち、自ら輪に入って参加する。

身長＝１７６ｃｍ

体重＝６４ｋｇ

●その他の人物

・ラン

レクシーの話に登場したラクリーマのかつての恋人。

金髪でポニーテールが印象的の美女。背中に白鳥のような翼が生えている。男勝りで気が非常に強く、ラクリーマを随分振り回したらしい。花が大好きと言う女の子らしい一面を持ち、ラクリーマを心底愛していた。彼女の故郷惑星は劣悪な環境となり住めなくなり（理由は地球環境の悪化と同じ）、彼女は星脱出の際、すでに絶滅したとされる古代の花『アノリウム』の種を持ち出す。ユノンが加入する前のアマリーリスに滞在し、その気の強さと大胆な決断力で部下達から『姐さん』と慕まれていた。が、交戦で彼女は帰らぬ人と

なってしまう。死ぬ間際、ラクリーマにある遺言を残す。

身長＝１４２ｃｍ
体重＝２５ｋｇ

・レイド・サバテクス
エミリアの回想に登場した彼女のかつての恋人で結婚相手。
エミリアと同じモーリアンで優しい心の持ち主。
二人は相思相愛の仲だったが……。

身長＝１７０ｃｍ
体重＝５５ｋｇ

●登場メカニック、武装●

●銀河連邦勢
・ヴァルミリオン
銀河連邦のランクＳ級主力宇宙旗艦でエミリア達はこの艦に所属する。ドラえもん達はこの宇宙艦を軸に行動することとなる。全長、全性能もエクセレクターと同等。主武装は前方搭載のＮＰエネルギー収束主砲『ユピテルス砲』、他は光子ミサイル３０門、エネルギー機関砲２０門がある。

●用語●
・異星人文化干渉法

銀河連邦の定めた法律の一つ。発展途上惑星や未開発惑星において、まだ発展希望のある種族が存在する場合、その種族の自力の発展を尊重し、先進種族の科学技術等の文明、文化を持ち込まないと言う法律。

厳密にはその種族と接触により、独自の文化に影響を与えるものと考えられているため接触はおろか、目撃される、感知されるのも禁止である（例え、事故で対象惑星に不時着しようと例外ではない）。この法を破ると重刑に処せられる（地球もその法の対象内であるため、エミリア達の地球での行動は完全に違法となる）。

・ＮＰエネルギー（ニュープラトン）

アマリーリスや銀河連邦などの先進宇宙組織が主に使用する新世代エネルギー。

かつては宇宙でも希少の宇宙鉱物『ニュープラトン』から抽出されるエネルギーで、微量で膨大なエネルギーに変換する夢のようなエネルギーだった。しかし近年、鉱脈が発見されてから大量に採取され、そのエネルギーの研究が進み、その先進種族は桁外れの科学の進歩を遂げることができた。

特にそのエネルギーを重点的に研究していたのが、ラクリーマの親友エルネスとアマリーリスの技術者サイサリスである。

これだけ見れば核エネルギーと同じ原理だが違うところは核と違い、放射能などの危険な物質を生み出さないことである。

さらに、一度このエネルギーを生み出すと自己無限増殖するため消費することなく永久的に使用できるなど有効性が非常に高い。ワープや光学兵器、エネルギー動力、ありとあらゆることに使用できるが実は放射能と混合すると誘発して惑星一つは消し飛ぶ程の爆発が起こるため、扱いには注意が必要である。

◇解説2（後書き）

次からは本編に戻ります。

◇ＰＡＲＴ．１６　それぞれの思い（前書き）

時系列は普通に戻りまして新キャラ登場します。

◇ＰＡＲＴ．１６　それぞれの思い

エクセレクターの司令室。ユノンがラクリーマに対して苦言を漏らしていた。

「……やはり……どう転んでも銀河連邦を避けるのは無理ね……」

「……」

ラクリーマは腕組みをして椅子にもたれかかる。ため息をつき、目を閉じる彼に彼女はさらに追いうちをかける。

「……調査した結果、あの銀河系周辺に『ランクＳ』級のエネルギー反応を確認したわ。
それほどの質量を持つ反応はＮＰエネルギーを使用する銀河連邦の主力艦以外には考えられないわ。

あっちも馬鹿ではないからこちらの行動をすでに逆探知しているハズよ」

「……ということは……連邦は応援を呼び寄せて俺達がワープホール空間を抜け出した瞬間、艦隊ではさみうちするってワケか、フフフッ……」

明らかにアマリーリスにとっては思わしくないことに何故かラクリーマは笑っている。

「……何をそんなに笑っているの？
ともかく……侵略するならまだしもリスクを負ってまで、ただあの

子達を地球まで送るなんてあたしは反対だわ。こちらにはなんのメリットもない……」

ユノンが否定するのも当たり前だ。『ランクS』級と言ったら自分たちの母艦、エクセレクターと同等のエネルギー質量を持っている。しかも、銀河連邦はさらに『ランクA』、『ランクB』級戦闘艦を多数所有している。

そんな銀河連邦艦隊に包囲されれば、圧倒的にこちらが不利なのはラクリーマ本人でもわかっていた。

「こっちも対策を考えてある。それが通じるか通じないかは……五分五分だがな。
だが通じれば両方とも後腐れがなく解決するだろう」

「……？」

彼はユノンにその対策方法について話す。

「……ねえ、もしそれが通じなければ？」

「……その時は強行突破だ」

《バンッ！！》

ユノンは机を力いっぱい手を叩きつけてラクリーマにギラッとした目で睨み付ける。

「……あんたふざけてんの？

そんな適当に考えて……もしエクセレクター……いいえアマリーリスに何かあったら責任とれるの？」

しかし全く気にしてもないのかラクリーマは自信げに満ちた笑みを通している。

「へっ、俺達は今日死ぬか明日死ぬかの毎日だろうが。今さら危険なことをおかすことに躊躇しねえよ。
あと、のび太達の約束を守るって言ってしまったしな、何回も言うが俺は嘘をつくのがキレェなんだよ」

ユノンはその言葉に頭を押さえてため息をつく。

「ハァ……あたしはあんたのそういう考えが嫌いよ。もう少し真面目に考えて……」

「ユノン、お前は肩に力入りすぎてんだよ。
一度は気を楽にして考えろよ。そんなんじゃあ気が滅入って体壊すぞ？」

《……ぶちっ！》

ラクリーマは彼女をなだめるようにいったが、それが彼女の神経を逆撫でした。
ユノンは彼の胸ぐらを掴んで馬鹿でかい声で激怒した。

《あんたねぇっっ！！他人事みたいに言ってぇっっ！！》

彼女は怒りのあまり、彼をぐっと持ち上げる。

「……大体ラクリーマ、あんたが総司令のくせにいつもいつも変なイタズラしたり、くだらないコトしか考えないから常にあたしが苦労してんでしょうが……。わかってるの？」

彼は怒らず無表情でこう答えた。

「ああっ、お前には何から何までいつも感謝してるよ。俺だっていつもヘンな事を考えてるわけじゃねえ、常にどうすれば最小限でかつ効率的に物事がうまくいくか考えてる」

「ひとつ言っておくが、俺は元々侵略や交戦の時は最前線に立って戦闘に参加しながら戦闘員に直接指揮する肉体労働的役目、お前は艦長として俺らをサポートしつつ、艦内の部下を指揮するいわば司令塔的役目。俺とお前は全く考えが別だし、作戦練ってもその通りに上手くいかねえんだから、そこはケース・バイ・ケースで今までもそうやってきたんだろうが。違うか？」

「……！！」

ラクリーマはまた笑みを浮かべて、彼女にこう言いきった。

「のび太達を絶対地球へ送る。それは部下達も承知しているんだ、今さら変更はしねえ。
なんならここにあいつら全員かき集めて多数決を取ってみるか？それならお前も納得すんだろ？」

ユノンはそれを聞いて静かに胸ぐらを掴んだ手をゆっくりと放す。
軽く息を吐き、いつもの冷静さを取り戻すと彼に背を向けた。

「……悪かったわ、ついカッとなって……。確かにあんたみたいに考えを柔軟にしないといけないのかもしれないわね。けどあたしはアマリーリスを壊滅させたくない気持ちでいっぱいなの。そのあたしの気持ちをわすれないでね……」

「ああっ、そこは同じ考えだ。俺だってあいつらが生き残る為に体張ってんだ。お前と俺でフォローしあえば充分いけるさ」

「……フフっ……」

彼女は軽く笑うと、司令室から去っていった。ラクリーマは天井を見上げて口笛を吹いている。

……数分後、彼は立ち上がり腕をブンブン振り回して歩き出した。

「さあて、今日は何人あいつらをしごいて泣かそうかなっ？ククク……っ」

ラクリーマは歯を剥き出しにして笑い、司令室を出ていく。『しごいて泣かす』……いったいどう言うことなのか？

……

アマリーリスはほぼ男性の数で割合を占めている。しかし、副司令官のユノンだけでなく開発部門のサイサリスなど、少なからず女性は在籍している。

それもあり組織員の中にはその女性員とカップルになることが度々あり、休憩時間や非番時にプライベートを過ごすのだ。

もちろん……この人も例外ではなかった。

「レクシーさんっ！」

艦内でぶらぶら散歩をしていたのび太としずかは休憩広場に立ち寄り、偶然そこにいたレクシーに話しかけた。

彼の横には一人の女性がレクシーと仲良く話をしている。

「よおお前ら。散歩か？」

「うん」

軽く挨拶をしたあと、のび太達は彼の横にいる女性に目が止まった。地球人にほとんど大差ない姿のユノンとは違い、その女性は猫をそのまま人間にしたような姿をしており、ドラえもんがこの場にいたら一瞬で惚れてしまいそうだ。

そんな彼女がのび太達を見つめている。

「へえっ、あんた達が例の地球人ニャ？
可愛い顔してんじゃないのぉ♪」

色気のある声を発し、彼女はのび太の方へに寄り添い顔を近づける。

「いいっ……」

「レクシーさん……この人は？」

レクシーは頭を押さえて、照れくさそうにこう答えた。

「こいつはジュネ。アマリーリスのオペレーター担当でその……」

「あたいの恋人だニャっ！」

「「ええっ！！」」

二人は大声を上げて驚く。

「ジュネっ！人前でそんなこと言いふらすんじゃねえっ！」

「なあに恥ずかしがってるんだい？
あんたと付き合っているなんてここの全員知ってるのに別にこの子達に教えてもいいじゃニャいか？」

顔を真っ赤にし、ため息をつくレクシー。
いつもは明るい彼だが恋愛に関しては奥手なようだ。

「レクシーさん……」

「ふふっ。」

そんな彼を見て和む二人。すると彼女はのび太としずかの肩に手を伸ばしてぐっと引き寄せた。

「ちなみにあんた達二人を互いにどう思っているのかい？聞いてみたいニャ～あっ？」

その言葉に二人は一瞬で顔をレクシー以上に真っ赤にし、あたふたし始める。

「いっいやっ僕たちはぁ！！」

「そそっ、そんな関係じゃありませんっ！」

動揺している二人を可愛く思えたのか、ニヤッと笑う。

「そうかい？
ちなみにあたい達くらいになるとプライベートタイムは激しいんだからぁ♪
あんなことやこんなこと……ふふっ…っねえレクシぃ～♪」

「ばっバカ！！子供にまだそんなこと言うなよ！！」

まだ無知な二人は彼女の言っていることが理解できていないのが幸いだった。

「激しいって……どうゆうことだろ？」

「さあ……っ」

すると彼女は両腕を使い二人の肩に置きグッと引き付けて自分の顔へ近づけさせた。

「……あんた達はまだ知らなさそうだから今度あたいの部屋にきなさいなぁ。
オトナの世界をたっぷり教えてアゲルからニャあ♪」
《チュっ♪》

「「いいっ（キャッ！！）」」
なんとジュネは二人を頬にキスをした。
なんと大胆というか……うらやましいというか……。

……ともかく、二人をアブナい世界へ誘惑しようとする彼女に対してレクシーは、

「いい加減にしろっ！！
こいつらはお前の趣味に合わん！」

ジュネはのび太達を離して立ち上がると、レクシーに向かって皮肉まじりの笑顔を見せる。

「冗談冗談。けどあんただってあたしと二人っきりになったらケモノになるクセに、そうやって人前になったら急に恥ずかしがってシュンとなる性格をなんとかしたらぁ？」

「……」

何も反論できなくなるレクシー。そんな彼女も彼を見て溜め息をついた。

「……ちょっと言い過ぎたニャ。けどわかってちょうだい。

あたいはそんなあんたのことを死ぬほど愛してるんニャからね♪」

「ジュ……ジュネ！！」

「「……！！」」

彼らの前で、レクシーへの愛を恥ずかしげもなく宣言する彼女は本当に大したものだ。

しかし彼もそこまでいってくれる彼女が好きで好きでたまらないのであった。

「よせやい……のび太達が聞いてるじゃないか……」

そんな二人を見てのび太達、特にしずかは憧れるかのように輝いた目で注目している。とても女の子らしい本能だ。

すると彼女は背を向け、ニコっと笑い、顔だけ彼らへ向いてこう言った。

「そろそろあたい、休憩終わるしオペレーションセンターに戻るねぇ。

それとあんた達、レクシーをあんまり困らせるんじゃないよ♪」

彼女はそう言うと彼らから去っていった。

「あいつ……本当にメンドくせえ女だぜ……」

そんなことを言ってるが彼自身はとても嬉しげな表情をしている。

のび太達も去っていく彼女を笑顔で見つめる。

「あの人……いい人みたいだね……っ」
「ええっ。かなり大胆すぎる人だけど」
そんな二人をレクシーが割り込み口を開いた。
「まあそんなとこだ。お前たちはこれからどうするんだ？今日は非番だしお前らに付き合うぜ？」
それを聞いた二人は大喜びする。
「本当ですかぁ！？」
「やったあ！」
レクシーはのび太達から気に入られてしまったようだ。
すると、
“連絡します。非番以外の戦闘員はすぐに訓練エリアの模擬戦場に集合。ラクリーマ総司令官がお待ちです”
突然の放送が流れ、その場にいた休憩中の戦闘員がその場で凍りついた。
「まさか……あの……」
「ひえええっ！！いやだぁ！」
全員が謎の嘆きの声をかけてすぐにそこから走り去っていく。

それを見ていたのび太達は全く理解できずただ呆然と見ていた。

「どうしたのかなぁ。やけに嫌そうな顔だったけど……」

「今から訓練エリアのそこで何か始まるんじゃない？」

そんな中、レクシーはニンマリした笑顔で、

「よっしゃあっ！！今日は非番だったから良かったぜヒャっハァァっ！！」

その場に子供みたいにはしゃぎ回る彼に全く訳の分からないのか目が点になっているのび太達。

「レクシーさん……どうしたんですか……？」

彼はヒイヒイ笑いながら二人にこう告げた。

「ワリイワリイ♪そうだ、今から訓練エリアで見物しにいくか？超おもしれえものが見れるぜ！？」

「面白いもの？」

「何をするんですか？」

彼は自分の拳と拳をガツンと叩き合わせた。

「今からそこでリーダーの超絶鬼指導の戦闘訓練が始まるぜ。これがマジで死にそうになるんだよなっ！」

「ええっ！？」

「せっ……戦闘訓練っ……！！」

二人はまるで軍隊の訓練をするのかと思うと言葉を失う。『死にそうになる』と想像しただけでただ事じゃなさそうだからだ。

「いくか？」

レクシーが聞くと考えこむ二人。ちょって見てみたい気もするが、その過酷そうに思える訓練を見てドン引きしそうな予感がしていた。

しかし、二人はこうも思いっていた。あのラクリーマが直々に指導している姿を見てみたいと。

なので二人は互いを見つめ、頷きあうとレクシーに伝える。

「みっ見たいです！」

「ラクリーマさんがここの人達に教えてる所を！」

それを聞いたレクシーは嬉しげに二人を手を掴んだ。

「なら行くぜ。訓練が始まる前に行くぞ！！」

そう言って三人は訓練エリアへ向かったのだった。

のび太は走りながらこう考えていた。

（ラクリーマって……いつも何してるんだろう……）

……訓練エリア内の施設の一つ、模擬戦場。対局地戦、対多人数戦など、『戦闘シミュレーター』と呼ばれる機械を用いてありとあらゆる様々な戦闘を想定して訓練する場所である。ここはどちらかと言うと生身を駆使した格闘、銃器を使用した訓練が行われる…

三人が到着した模擬戦場は、野球場程の広さの空間の中には準備室兼見学用の安全スペースがある以外は機械や機器が全く置いていない、本当の意味で広いと感じることができる場所である。

これは訓練中の障害及び、怪我の原因にならないようにしているためである。
その中心部でラクリーマが大勢の戦闘員に装甲のようなプロテクターを装着させて何かを指示している。
しかし戦闘員の方は非常に思い詰めた表情をしていた。

レクシーとのび太達はそこに移動するとそこに設置してあるイスに座る。

「あちらの内容はすべて前方に出てくる空間モニターで映るようになっているから遠く離れてもわかるようになっている」

「へえ、便利な機械だね」

「ちょっと、ラクリーマさんがこっちに来るわ？」
するとラクリーマはのび太達のいる所に走ってくる。すると三人に気づいたのか手を上げてニヤッと笑った。

「よお、お前らは見学か？」

「うん。ラクリーマこっちにきてどうしたの？」
「上着を脱ぎに来ただけだ。ここに置いとくぜ？」

すると彼はとっさにタイツの上着を脱ぐと上半身が裸になる。
しかしそれをみた二人は……。

「うわあっ！！」

「信じられない……っ」

驚愕の声を彼に浴びせる。その鍛えぬかれた筋肉ももちろんであるが、その身体からは幾多の闘いを潜り抜けたことを物語るおびただしい傷痕が至るところに刻まれていた。
そして二人が一思わず目を留めた所は左腕全体である。

タイツからだと左手しか義手だとしか分からなかったが、上半身裸になり左腕がさらけ出されると、なんと指先部分から肩、肩甲骨までが全て精密機械化された金属義手だった。
しかも左胸部には何やら巨大なレンズに組み合わせた丸い機器が埋め込まれている。
彼はいわゆるサイボーグだと今初めて二人は知ったのだった。

「おいおいそんなに人の身体をじろじろ見んなよ。ならいってくっぜ！」

そう言い、ラクリーマはすぐに戦闘員の元へ走っていった。

「まさか……左腕が……」

「ロボットみたい……」

唖然としている二人にレクシーは二人に説明する。

「驚いたか。無理もねえやな、俺も初めてみた時びっくりしたからな。

ちなみにあれは『ブラティストーム』ってな、あの人の強さの秘密だ」

『ぶっ……ブラ……っ？』

『ス……トーム……？』

聞き取れてなかったのか、上手く語呂を言えないのび太達に彼はゆっくり喋る。

「『ブラティストーム』だ。お前らも初めてリーダーと会った時にも使ったが、あの人の義手であり且つ強力な兵器でもあるんだ。まあっ……訓練始まったら今にわかるぜ」

「……」

二人は気になっていた。このアマリーリスの総司令官たる男、ラクリーマはどれほどの強さを持っているのか。
訓練が始まるのを静かに待っていた。

◇ＰＡＲＴ．１６　それぞれの思い（後書き）

次からは戦闘描写を入れていきますのでお楽しみに！

◇ＰＡＲＴ．１７　戦闘訓練（前編）（前書き）

ここから戦闘描写を増やしていきます。
しかし描写が下手くそなので上手く描けるように頑張りたいと思います。

◇ＰＡＲＴ．１７　戦闘訓練（前編）

「よっしゃあっ、なら画面を出すぞ！」

レクシーは椅子の肘掛けに設置してある四角いボタンを押した。

《シュイイン…》

三人の目の前に巨大な立体映像が現れる。それを見ると数十メートル離れた場所にいるラクリーマと戦闘員が何やら話している姿が映し出されている。
どうやらこれからの訓練内容を伝えているようだ。

「ククククッ……、あいつらマジで嫌々そうだな……」

レクシーは今から訓練を受ける戦闘員を見て笑っている。

「なんか……あの人達の顔色がおかしいよ」

「どうしたのかしら？」

のび太達二人もそれに気づいた。戦闘員全員がもうやる気がなさそうにへなへなしていた。

すると徐々にラクリーマ本人の声が大きく聞こえてくる。

「……というわけで、今からは対多人数戦闘訓練を開始する。２チームに分けてそれぞれ役割を決めてくれ。状況は言った通りだ！」

「……」

何故か部下達は黙り込んでいる。それを見た彼は徐々に苛立ちを募らせる。

「てめえら返事しねえかっ!!嫌なのかぁオラァ!?」

「「へっへいっ!!」」

彼の一喝に反応して戦闘員達はとっさに返事をする。

「ちっ、てめえらビクビクしやがって……。訓練が嫌な奴がいるなら今すぐ出ていっていいぞ。だがそんな奴は二度と俺にそのツラ見せんじゃねえぞっ!!」

しかし部下達は必死に首を横に振る。

「なら早くチームを作りやがれ!!早くしねえとチーム決める時間ねえぞ!」

そう言われ、彼らはすぐにチーム分けを始めた。

そんなやり取りを見てのび太達はラクリーマの過激さに唖然としていた。

「うわあ……キツいこと言うなぁ……ちょっと言い方がヒドくない？」

しかしレクシーは頭をポリポリかきながら二人にこう諭した。

「しゃあねえよ、遊びでやってるんじゃねえんだし。あの人も好きであんなこと言ってるわけじゃねえ、ここにいる戦闘員全員のために言ってるだからな。

……あっ、俺もそうだった……」

するとのび太はレクシーにこう訊ねた。

「ラクリーマって普段この中で何の仕事をしてるの？」

「リーダーは元々俺達と同じ戦闘員から成り上がった人だからな。そんなわけでほとんどはユノンさん任せだから主に俺ら戦闘員の戦闘指導や鍛練を担っている。あの人も仕事の時は戦闘指揮官になるから、自分の訓練がてら、自ら参加して部下を指導するんだ」

「へえっ、ラクリーマも……」

「確かにあの人達と混ざってもホントに違和感がないわねぇ」

二人は妙な納得感を得る。

そんな中、やっとチーム分けが終わり、全員がラクリーマに注目する。

「終わったか。各人プロテクターをちゃんと装着できているか、手持ちの武装に異常がないか最終確認しとけよ！」

全員が彼の指示に従って、全員が身の回りを確認し始める。しばらくすると全員が彼に向かって親指を突き上げる。それは確認

終了を意味する合図だ。

それを見たラクリーマはそのチームリーダーに目を合わせて向こうの広い場所へ指を指した。そのチームは一斉に指した方向へ移動する。

「お前らはここに待機、なお俺も途中で参戦する。だがどこのチームに加担するかはあえて教えねえっ、俺も全力で行くからそのつもりでな！」

するとラクリーマは一番端に移動し、耳に装着していた通信機に手を当てて、話し出した。

「準備完了した。戦闘訓練を開始する。戦闘シミュレーター起動、想定場所は市街地」

“了解。想定場所、市街地”

次の瞬間、

《ブゥゥゥンっ！！》

「「！　？」」

二人は目を疑った。今まで何もなかった広い模擬戦場が一瞬で家やビルなどの建物が出現、一気に尽くされ、本物さながらの街へと化した。

これは実体なのか、はたまた虚像なのか？

「うわああっ、これはスゴいっ！！」

「一体こんなのどうやって！？」

驚くばかりである。実際もうさっきまでいた２つのチームが完全に建物に隠れてしまい見えなくなっている。

そんな中ラクリーマは端でニヤリと笑い、通信機を通して全員にこう告げた。

「なら戦闘訓練を開始する、制限時間は３０分。スタート！！」

彼が訓練開始を告げた瞬間、

《うおおおっっ！！》

《おおおおっっ！！》

２チーム全員が一気に走りはじめる。総勢百人は裕に越えていよう２チームとも、二手、三手に別れて建物の間に溶け込んでいく。

そして各人がそれぞれの建物に配置し、各チームリーダーの指示で動き、そして！！

《ドシュっ！！バシュっ！！》

《バキッ！！シュッ！！》

「うぐうっ！！」

「きえっ！」

この中は完全に合戦状態と化した。建物や壁を利用した戦法を使う者や、直接敵陣に乗り込んで相手を攻撃する者、銃器などの遠距離戦法を使用する者、ナイフや格闘などの白兵戦法を駆使する者、さまざまな多種多様な戦法を使い、この訓練の幕が上がった。

男達は真剣で必死な思いを胸に大量の汗を流しながら、訓練ではあるけれど本当の戦闘さながらの迫力を醸し出している。

無論、そんな熱き男達の戦いぶりにのび太としずかは誰も死なないか心配しつつも心のそこから感心するのであった。

「かっ、かっこいいなぁ……」

「ええ…っ。スゴい熱気が私たちのところにも伝わってくるわ。けど……あの人達大丈夫かしら……？」

心配を口にするしずかに対し、レクシーは腕組みしながら口を開く。

「大丈夫だ。身体中にプロテクターつけてンだろ？あれは特殊合金を使用してるからあの程度の攻撃じゃあ一切通用しねえのさ。衝撃耐性もバッチリだから余計な心配すんな」

「よかったぁ……」

それを聞いて彼女は幾分安心感を得る。

「けど訓練ってようは練習でしょ。たかが練習なのにあそこまで本気でやるのかなぁ……」

のび太の疑問にレクシーはフッと鼻で笑い、こう説いた。

「あたりめえじゃねえか。これは惑星侵略時を想定してんだ。侵略される側だって黙ってやられるわけなく抵抗してくんだし、それにやられねえ為だよ」

「……」

やっぱり侵略って言葉に引っ掛かるのび太。まあしょうがないことだが……。

……戦闘が続き、半分経ったらくらいからラクリーマがついに首を回しはじめ、腕を振り回した。

「そろそろ俺も行くかなっ！」

そう言うとラクリーマは全速力で走り始め、狭い建物の中を通り抜けていき、そしてついに戦闘区域に到着する。

「よっしゃ、俺はこのチームに参戦だ。お前らは俺を中心にして左右に展開、ここの地形や建物を有効に生かして行動、戦闘せよ！！」

ラクリーマの指示と共、彼の加担したチーム全員は彼の指示通りに行動を開始する。

「やべぇ、今回はラクリーマさんが敵かよぉ……っ！」

「じょっ冗談じゃねえぞ！」

一方、もう1つのチームはラクリーマが参戦したことにより動揺し始めていた。

「来たぞ、リーダーだ！」

見学場所では三人はついに彼の参戦に注目し始めた。

そして相手チームの複数人が彼に向かってくる。どうやら接近戦に持ち込もうとしているようだ。
しかし彼はそれに臆することなく自分からも進んでいく。

「生き残るための戦闘教訓その一、『戦いは常に先手必勝』！
攻撃し続ければどんな奴でもいつかは、くたばるんだよぉ！」

《バキッ！ドゴっ！ドワォ！！》
「うぎゃあっ！」

「ぎえっ！」

彼はなんと拳と蹴りだけで向かってきた相手チーム達を速攻でいとも簡単に蹴散らしていく。これでもいつも鍛えている荒くれ者達であるにも関わらず反撃の隙も与えず、彼の恐るべき戦闘力を前に歯が立たなかった。

「てめえらそれでも毎日鍛えてんのかァ！？」
《ドゴォ！！ドワっ！！バキャっ！》

彼らは特殊合金製プロテクターをつけているにも関わらず、瞬時に『隙間』を見つけてピンポイントで攻撃している。なんと言う視野の広さを持っているのか……っ？

「……」

のび太達はその凶悪な強さに呆然としている。

しかしそんなものはまだ序の口、このあとさらに驚く光景を目にすることとなる。

《ガシャンっ！！》

例の左手義手『ブラティストーム』を前につき出すと、しずかに怪我を負わせた内蔵兵器の１つ、小型レーザー砲を突出させ、約４０m先にいる相手に狙いを定め、

《ピィっ！》

発射された光線が瞬く間に突き抜け、その相手に直撃した。

「ぐわっ！」

エネルギー出力を弱めていたのか貫通せずに後方へ吹っ飛んだだけであったがそれでもその威力だ。

さらにそこからブラティストームを天に向かって突き上げると、なんと４門の銃口が自動的に味方と戦闘している相手チームの複数人

に狙いを定めて、

《ピィっ！ピュッ！ピっ！ピーっ！》

彼らへ向かって４門一斉に光線を発射した。

「「「「がはっ！！」」」」

直撃した四人は一斉にその場に倒れる。これも出力を弱めていたので衝撃だけで済んだのだった。

そして、

「終了、ここまで！！」

ラクリーマの声と共に周りの建物は一瞬で消え去り元の広い空間に元通りとなった。

「はあっ……はあっ……」

「ぜえっ……」

死力を尽くしたのか、戦闘員達はかなり疲れはててぐったりしている。

しかし、そんな彼らを気にせずラクリーマはすぐに全員を集めて何かを話し出す。

……一方、見学サイドでは、

のび太達は驚きのあまり開いた口が開かなかった。
ラクリーマって……こんなに強かったのかとまさに驚愕だった。

「驚くのはまだ早いぜ。これはリーダーにとっちゃあ準備運動にもなってねえんだからよ」

「「えっ？」」

モニターを見ると、ラクリーマは何やら部下に指差して何かを言っている。聞こえているのだが二人は全く理解出来ていない。

「今何を言ってるんですか？」

「さっきの戦闘訓練の評価だ。各チームの良かった所、悪かった所を指摘してるんだよっ」

「へえっ」

評価が終わり、ラクリーマは戦闘員をまた集めてこう言い出す。

「なら引き続き戦闘訓練を実施する。内容は同じだが想定場所を変更するっ！」

《はっ……はい……っ》

休憩させる暇も与えず、また訓練続行を宣言する。

「すぐに前とは違うチーム分けと役割分担を開始しろ。出来るだけさっきと同じ奴と組まないようになぁ！」

急いでまたチーム分けを開始する。そんな光景に二人はある疑問点が思い浮かぶ。

「休憩はしないのかな？」

「あんなにぐったりしていてあの人達は大丈夫かしら」

その問いにレクシーはまた溜め息をついて話し出す。

「ここからだよ。本当の地獄は……」

「？」

そしてすぐにチームが決まり、１チームを向こうに移動させ、ラクリーマはまた端に移動する。

そして、

「訓練実施する。想定場所は草原地帯」

“了解、想定場所は草原地帯”

《ブゥゥンっ！》

今度は建物などの巨大な障害物は一切なく、あたり一面にのび太の身長くらいはある青草が生い茂っている。
２チームは上半身だけはもう飛び出ているので遠くからでも互いが分かりすいようになった。
のび太としずかはこの『戦闘シミュレーター』の凄さにもはや呆れ果てている。

「あはっ、ちょっと僕もあの中に入ってみようかなぁ」

「のび太さんっ！？」

そう言うとのび太は即座に立ち上がった。しかし、

「やめろっ！」

出ていこうとしたのび太にレクシーが叱咤する。

「お前、今から訓練始まるってのに何もつけずにいくつもりか？死ににいくようなもんだぜ。
しかも訓練の邪魔をすんな。もし無断に入ってリーダーに見つかってみろ、あの人はマジギレすんぞ」

その言葉にのび太はさすがに空気を読まなかったと思ったのか、静かに椅子に座る。

「カンベンしてくれよ。ここで何かやらかしたら怒られるのはお前だけじゃなく俺もなんだからな？

くだらねぇことで人を巻き込むのはくれぐれもやめてくれ」

「うん……」

のび太は深く反省する。

ここで自分の身に何かあったら自身ともかく、しずかにもレクシーにも迷惑がかかると痛烈に感じたのだった。

「のび太さん……」

シュンとなっているのび太を心配するしずか。

そんな中ついに、

“なら戦闘訓練実施する。制限時間はさっきと同じだ。スタートっ！”

訓練開始の合図と共にチームは行動を始める。

それぞれのチームはガサガサと草を分け入り、向こうへ移動したチームはそれぞれ四手の組みに別れ、挟み撃ちをしようとしているのか四方向から相手チームへ忍びよる。

一方、片方のチームはその場から動かず各員、それぞれ向かってくる組の方向へ向いて迎え撃とうとしている。

《ガキィィッ！！》

ーーさきほどのように合戦へと発展する。

しかし今回は銃器は使わず、ナイフや格闘などの近接攻撃が主体で進んでいく。

その頃、ラクリーマはそんな彼らを腕組みをしながら険しい表情で見ている。

「……やべえなぁ」

「えっ？」

レクシーが突然、こう口にする。その時の彼の表情も非常に険しい。一体何があったのか……？

……訓練も中盤に差し掛かろうとしたその時、

「てめえらそのまま止まりやがれっ！！」

《！　？》

ラクリーマの馬鹿でかい声が辺りに響き渡り、それと同時に全員の動きが止まる。

すると彼はすぐに戦闘員の元へ向かう。しかしその顔は怒りに満ちた表情であった。

戦闘員全員が息を切らしながらラクリーマへ視線を集中して到着を待つ。

……のび太達もその光景に目をギョッとして映像を見つめていた。。

「いきなりどうしたんだろ？レクシーさん、なにかあったんですか？」

「……」

のび太は質問するが、レクシーは珍しく何も説明せずにただ映像を見つめている。

二人はそんな彼を見て、ただ事ではないと感じたのか深刻な表情へ変えて、再び映像に注視する。

そしてラクリーマが到着するなり戦闘員達をぐっと睨み付ける。腕組みをして右手の人差し指をトントンと叩きながらしばらくした後、口を開いた。

「……訓練中、少しでも手ぇ抜いた奴は正直に手を挙げな！」

ラクリーマの問いに、手を恐る恐る挙げていく人物が一人二人と段々増えていき、最終的にはほぼ半数近くが手を挙げていた。

ということは約半数の戦闘員が手を弛めていたことになる。

「……分かった。手を下げろ」

それを見たラクリーマは目を瞑り、沈黙し始める。

ー数十秒後、再び目を開けると彼らにこう言った。

「手を抜いた者はさらに訓練続行、それ以外はのび太達のいる見学室で休憩及び、見学してろ！わかったか？」

「……」

また黙り込む彼らにラクリーマはそれを見過ごすわけにはいかなかった。

「てめえらまた返事なしか！？そんなにやる気ねえんだったらさっさとこっから出ていきやがれっ！！」

なんと彼はとっさに手を挙げた一人の戦闘員の首元をぐっと掴むと引っ張り出してそのまま地面へ叩きつけたのだった。

「ううっ！！」

戦闘員は体を震わせて立とうとする。その震えはくやしい思いからなのか、疲れはてて動けないという意味なのかはわからない。

「お前のような腰抜けはここにはいらねえよっ！戦闘員なんかやめて雑用係でもすりゃあいい。

てめぇらもそうだ、俺のやり方が気に入らねえ野郎はこいつと仲良く雑用してやがれっ！」

彼ら含めて、その場にいる全員に罵言を吐きまくる。

その異様な一連のやり取りにのび太達も信じられないかのように顔を青ざめて見ていた。

「ヒドすぎる……っ！」

「ああっ……」

さすがにここまでするのはやりすぎではないのかと二人の考えは一致していた。

するとのび太はまた立ち上がり、そこからすぐに走り出した。

「ちょっ、のび太待て！！」

「のび太さんっ！！」しずかとレクシーも立ち上がり、すぐにのび太の後を追いかける。

「……」

のび太の怒りは頂点に達していた。こんなやり方はあまりにも可哀想すぎる、彼の優しさがラクリーマの乱暴なやり方に黙っていられなかったのだった。

「ラクリーマ！！」

「のび太？」

ラクリーマ達はこちらに走ってくるのび太に目を向ける。

彼自身もそこに辿り着くと、さくほどラクリーマによって倒された戦闘員の前に立って庇いはじめた。

「ラクリーマ、なんでこんなヒドイことをするの！？

この人だって頑張ってたじゃないか！？」

その姿を見た全員が沈黙する。健気に思う者、立場を弁えろと心の

中ではあたふたしている者、皆別々に考えていた。

「「のび太(さん)っ!!」」

レクシー達ものび太の元に辿り着くとすぐさま彼を抑え着けた。

「リーダー、話の邪魔させてすいません!!あとでこいつにみっちり言い聞かせるんで許して下さい!」

彼はのび太に代わり、ラクリーマに必死で謝りはじめたが当の本人は抑えこまれながらも必死で訴えた。

「悪口言って投げ飛ばして、そんなのただのイジメだよっ!!しかも休ませないでみんな疲れきってるのにあんまりだぁ!!」

「のび太ぁ!!まじでやめねえとお前ただじゃすまなくなっぞ!!」

「のび太さんやめて!!」

しずかさえものび太を止めようと介入しはじめ、辺りは異様に思い空気に包まれた。

すると

「レクシー、のび太を放せ!」

「へっ?」

怒っているどころか冷静に話すラクリーマに唖然とするレクシー。

「ちいとのび太に話をしたい。放してやれ」

彼の命令に戸惑いながらもコクッと頷き、すぐにのび太から手を離した。

「……」

「……」

互いに向き合ったまま何も話さない両者。そしてそんな二人を心配そうに見守る全員。

一体ここからどんな事態へと発展していくのであろうか……誰も予測できなかった。

◇ＰＡＲＴ．１８　戦闘訓練（中編）（前書き）

中編です。

◇ＰＡＲＴ．１８　戦闘訓練（中編）

「のび太？」

静寂な雰囲気の中、先に口を開いたのはラクリーマだった。

彼はなぜかのび太に手を差し出している。握手のつもりなのか……？

「……？」

のび太もその不可解な行動に全く理解できないが、とりあえずこちらも手を差し出してみた。

互いの手がもう数センチでふれ合おうとした所まで来た、その時、

《スパァン！》

「えっ！？」

ラクリーマは突然、彼に瞬時に足払いをかけた。

のび太の視点が真正面から横にずれてそのまま下へ落ちていき、

《ドサッ！》

床に倒れる。しかし次の瞬間、

《ガシャっ！》

ラクリーマはブラティストームの内蔵武装の一つ、鉤爪を突出させ、すかさず右手で倒れた彼の口をグッと押さえこみ……。

《！　？》

その場にいた全員に緊張が走る。彼の放った鉤爪がのび太の眼孔の前で寸止めされていたのだった。

「ムッムムッ！！？」

のび太は突然過ぎて何が何だか分からなかったが次第に恐怖に駆られて今すぐにでも抜け出したいが、今ジタバタすれば目の前にある４つの鈍い光を放つ鋭利な刃物のエジキになりかねない。

本能的にそう感じたのか、のび太は身動き出来なかった。

「キャアアアッ！？」

しずかはとっさに悲鳴を挙げる。彼女も突然の出来事に何をしたらいいのか分からなくなったのだ。すると、

「心配すんな、別にのび太を殺すわけじゃねえよ！」

「……え……っ？」

ラクリーマは彼女を落ち着かせるかのようにそう伝え、押さえこんでいるのび太の方へ目を向ける。

そのあと彼は、いつも通りの笑みを浮かべてのび太にこう質問た。

「お前、もしこんな状況になったとしたらここから脱け出せることができっか？」

「？」

彼はのび太を離し、鉤爪も引っ込める。
のび太はゆっくり立ち上がるとラクリーマに目を向けた。

「どっ、どうゆう……こと？」
その意味を聞こうする彼に、ラクリーマは分かりやすく説明した。

「ようはさっきみたいに絶体絶命な状況に陥っても気を保っていられるかってことよ！」

「……」

のび太は考え込む。しかし先ほどの事態を想像すれば、どう考えてもまず自分の能力ではどれほど抵抗してもなす術もなく、殺されていただろうという考えに行き着くのであった。

「俺らはどんな状況下にも屈せず、生き残るために訓練してんだ。だがな、訓練ごときで手ぇ抜いて、本番になったら手を抜かないと胸張って言えると思うか？」

彼の言葉が戦闘員全員の心に強く突き刺さる。さらにラクリーマはその場にいる全員にこう説く。

「侵略、特に戦闘時の勝敗は実力もあるが、なにより心理面、つまり強気か弱気か、気ぃ抜くか抜かないかで大きく左右するもんだ。のび太みたいに押し倒されて、刃物が自分に迫っていて、“ああ、もうダメだ”って弱気になればそりゃあオダブツになるのは当たり前よぉ。

ちなみに俺はこれに限らずどんな状況になっても切り抜けられる自

信はある。

俺はやるときは常に全力だからな、自然にいくらでも方法は思いつく」

勉強にしても、スポーツにしても得意ではない、好きではないことにはすぐに手を抜いたり諦めたりするのび太とはまさに正反対の考えだ。

「あとさっき握手だと思って油断してたろ？俺がいきなり手を差し出して不自然だと思わなかったのか？
それともあれは単につられて手を出したのか？」

「あっあれは……」

「……すぐ言えねえとなると……つられたんだろうな。

お前ら地球人のことは知らんが実際そんな手取り足取り親切にしてくれる世の中じゃねえぜ。
お前みたいにお人好しでホイホイ人を信用しているとそれが仇となっていつか自滅すんぞ」

ラクリーマの言う通りである。世の中はのび太が思っているほど甘くない。
現実はもっと汚く、騙し合いが常の弱肉強食の世界なのである。実際に地球でもそれが日常茶飯事に起こっているのである。

のび太は良いも悪いもお人好しですぐに人を信頼してしまう性質があり、それが元で貧乏くじを引かされるのは度々あり、時には窮地に陥ったことが度々あった。

ラクリーマは短期間でのび太のその性格を見抜いていたのである。

「どうだ、俺は間違ったこと言ってるか？

これもみんなこいつらにそうなってほしくねえから言ってるんだ」

「けっけど、さっきの訓練にしたって頑張って疲れてる人に向かってさ、『雑用でもしてろ』とか言ったり、地面に叩きつけるなんて……いくらなんでもヒドいとは思わないの！？

大体疲れてる時に気が抜けてくるのは当たり前じゃん、僕だってそうだよっ！」

のび太は負けじと反論する。

「それに言うけど、ラクリーマのやり方はこの人達を休憩なしでただ疲れさせてるだけにしか見えないんだけど……」

「ばっバカっ！！」

「……」

次の瞬間、ラクリーマはのび太の胸ぐらをぐっと掴み、憤怒の表情で睨み付けた。

《ケツの青いガキが知ったようなことぬかすんじゃねえ！！》

「ひいっ！！」

のび太はこの男の気迫に圧倒されてしまう。しかし彼はそんなことをお構い無しでぐっと持ち上げ始めた。

「おめえがそんな口をきくとこを見ると、いかに今まで楽して生きてきたか、よおくわかんだよ！

いっぺん血ヘドをはいてみろ、そうすれば同じ言葉が二度と言えなくなるハズだぜ？」

「……」

「気が抜けている奴が一人でもいると訓練の意味がなくなるだけじゃねえ、真剣にやってる奴に対して失礼なんだよ！！邪魔なんだよ！！

訓練てのは疲れてるからこそ気を引き締めたほうがよっぽど効果あるんだよっ！！」

ラクリーマは胸ぐらを離すとのび太はペタンと尻餅をつき、彼の方を見上げた。

「俺らが助けたとはいえお前は部外者だろうが。俺らのやり方に水差すようなことすんじゃねえよ、わかったか？」

「……ううっ……ひっくっ……」

ついにのび太は泣き出してしまった。子供相手に、ましてや泣き虫である彼にそこまで叱咤すれば泣くに決まっている。

そんな彼を見かねたラクリーマはのび太を肩をギュッと掴んだ。

「泣くな、男だろ！！
しずかが横にいんのに恥ずかしいと思わねえのか！！」

「…ラッ……ラクリーマ……」

「俺はすぐ泣くやつは大嫌ぇだ！！そんな奴見てるとマジでぶっ殺したくなんだよ！」

「……」

「のっ……のび太さん……」

彼らのやり取りにつられて今にも泣きそうになるしずかはのび太の方を心配そうに見つめていた。

「ううっ……ラクリーマさん……絶対真面目にやるのでもう一度やらせてくださいっ！！」

「……」

さっき倒された部下が起き上がり、ラクリーマに深くお辞儀をして頼み込む。
しかしのび太は立ち上がると彼の元を行く。

「けっけど……疲れてるんなら……また休めば……」「のび太だっけ……お前みたいな子供に庇われちゃ俺はもうおしめぇよ。けど…

…ありがとな……」

「……」

ラクリーマは腕組みをして部下の方をギロッとした目で彼を睨み付けた。

「次に手を抜いてみやがれ、その時はマジでお前を八つ裂きにするからな。
てめえらもだ、俺がまた気ぃ抜いたと悟ったらどうなるか覚えておけよっ！！」」

“はっはいっ！！”

戦闘員一斉に大きな返事をした。

「レクシー、のび太としずかを見学室に連れ戻してやれ。
訓練参加者は少し休憩をやる。もっかい気を入れ直して訓練を始めるからな！！」

レクシーは頷くとのび太としずかを連れて見学室へ歩き出した。

「のび太さん……大丈夫っ……？」

「うん……しずかちゃんに恥ずかしいとこ見せちゃったね……っ」

「そっそんなことないわ、あたしも少しラクリーマさんの指導はやり過ぎかなと思ってたから……」

「……」

レクシーは二人の会話を黙って聞いている。彼は今、何を思っているのだろうか、全く分からなかった。

三人は見学室に近づくにつれて、何やら人影がうっすらと見えてくる。

それは見たことのある姿であり、意外な人物であった。

「ユノンさんだ！」

見学室では彼女は座席に座らず腕組みをしながら後ろの壁に寄りかかり、映像を見ていた。のび太達が近づいても全く彼らの方を見ようとしない。

「珍しいですね、ユノンさんがこんな所へ来るなんて。座らないんですか？」

「……いいわ。仕事が一段落ついて彼のむさ苦しい姿を見にきただけだから……」

「……そうですかい」

レクシーとユノンは素っ気ない会話して三人は座席に座り込む。

映像にはそれぞれ休憩している戦闘員達の横で、絶え間なくパンチやキックの素振りをしているラクリーマの姿が映っていた。

一発一発に気を練り込んだ素振り、その彼の瞳を見ると、真剣そのものでものすごく集中しているのがよく分かる。

「……」

しずかはもちろんのび太でさえ、その姿に惚れてしまいそうだ。

「……吸ってもよろしいかしら？」

「あっ……はいっ」

「……？」

ユノンはレクシーから承諾をもらい、しずかの横に設置してある円い穴のついたオプジェに前に立つと懐から何やら細く短い棒を取り出すとそれを口に加えた。
それはのび太達も普段見かける物、煙草であった。

“フゥ……っ”

ライターらしき物で火をつけ、上へ向かって煙をゆっくり吐く。

“ドキ……っ”

しずかは、まるで恋をしたかのように胸が急に引き締められるような感覚に襲われる。

（こっこの人、タバコ吸うんだ……。けど……）

その姿を何回もチラ見してしまう。

横から見るユノンの煙草を吸う仕草、ふかす仕草が実にサマになっていて、同じ女性であるにもかからわず、とても美しく且つカッコよく見えてしまう。

元々スレンダーな体格で背も高く、大人の風格を持ち合わせる彼女でこそ見せられる姿だ。

「……何かしら？」

「いっいえっ！なんでも！！」

ジロジロ見てるしずかに気づいたユノンは彼女をじっと見つめる。

しずかは焦り、すぐに目をそらすもやっぱりその姿が焼きついてしまっていて何度もみてしまいそうになる。

「……のび太君だったかしら？いい見物を見せてくれてありがとね」

「えっ？」

レクシー達三人とも驚いて一気に彼女に注目する。

普段はあまり自分から話さないユノンがのび太に声をかけた。組織員でもなかなか話さないのに部外者である彼に話をするということは今までにないことだった。

「彼に口答えするなんて……あなた、底なしのおバカさんのようね」

「なあっ！？」

しかし期待を大きく反して、平然な顔でバカ呼ばわりされたのび太は多大なショックを受けた。

「ちょっと酷くないですか！？のび太さんは勇気を出してラクリーマさんに言ったんですよ！？」

「しずか！？」

「しずかちゃん！？」

のび太を庇うしずかの姿に当の本人とレクシーは驚いた。

しずかからしてみれば、大切な友達である彼に罵言を言われて黙っていられるわけがなかった。しかしユノンはこちらを見るどこら全く顔色を変えないでただ映像を見つめていた。

「まあ、よかったところもあったわ」

「良かったところ？」

ユノンは目をつむり、軽く笑う。

「あなたの泣きっぷり。鼻水まで垂らしててとてもカワイかったわ」

「……」

ほめているのかバカにしているのか全く分からず、のび太の頭の中がモヤモヤする。

彼女は言ったことを気にする様子はなく、残り少なくなった吸いがらを穴の中へいれるとそのまま模擬戦場から去っていった。

「……っ！」

しずかは珍しく苛立ちを募り、体をプルプル奮わせている。
そんな彼女をよそに、レクシーはのび太に励ましの言葉を送っていた。

「のび太気にすんな、きっとあの人なりの誉め方なんだよ。普段あんなに話さないからな」

「そうなんですか？」

「多分な」

二人の会話を聞いていたしずかは多少落ち着くが頭の中は考えが複雑に絡みあってすっきりできない。

優しい性格で労ることを知っている彼女からしたらユノンの発言に悪気があったどうかはともかく、友達であるのび太を明らかに見下すような言い方に気にさわっていた。
それもあるが、なんといっても先ほどの煙草を吸う姿があまりにも印象が残り過ぎて忘れられず、その結果、モヤモヤとなってしまうのだった。

そんな中、画面では休憩が終わり再び訓練が始まろうとしていた。

「よっしゃあっ、なら気を取り直して始めるぜ!!てめえら準備はいいか!!」

“おおっ!!”

さっきの一件で戦闘員も始める前よりも気合いが溢れて全員が大声を出す。

これものび太とラクリーマのおかげであろう。

……そして訓練が始まり、全員が一丸となって励む。その内容や全員の頑張る姿は初めの訓練以上に覇気伝わるものなり、非常に熱き展開へと進んでいく。

そんな姿を端から目視していたラクリーマは心を揺さぶり嬉しくてたまらないのであった。

「やりゃあできるじゃねえか!!これなら俺も死ぬ気で頑張れるもんよぉっ!!」

ラクリーマも満面な笑みを浮かべて自ら訓練に参加していく。

その訓練に参加するラクリーマの顔はなんて楽しそうな顔なんだろう。

それは見学室にいたのび太としずかにも伝わっていた。

「ラクリーマ、本当に楽しそうに訓練してるなぁ……」

「あの人達もさっき以上に活気に溢れているわ。これものび太さんとラクリーマさんのおかげね！」

「しずかちゃん……いやぁ……えへへっ！」

「へっ……」

思い人であるしずかに誉められデレデレしているのび太、そんな二人をチラ見して、軽い笑みを浮かべるレクシー。

「次々行くぞ、ついてこいよ！！」

“はっはいっ！！”

ー訓練が終わるとまた訓練と……休憩なしの連続地獄が始まる。様々な戦闘場所を変えて、彼らは疲労しきり、今にも死にそうな顔をしているが、指導しているラクリーマを失望させまいとただ気合いと根性で乗りきっていく……。

「うわあ……これで何回めだよ……？」

「かっ、数えただけで６回目よ……。ホントにキツそうよね……頑張って……っ！！」

のび太としずかはそんな彼らに同情している。

この訓練一回につき制限時間３０分なため、計６回は約３時間は全

く休みなしでこなしているということになる。
だとしたら彼らの疲労はすでにピークを迎えてると思われるが……。
「言ったろ、マジで死にそうになるって……。俺も前にあれをやらされたときは終わったあとその場で『ドサッ』だったな。あんなのもう意地と体力の張り合いだぜ……っ」
「……」
「……」
二人の血の気は引いて、青ざめる。本当にアマリーリスに所属していなくてよかったと思うのだった。
その最中、しずかは不可解な点を見つける。
それはラクリーマのことに関してだった。
「レクシーさん、ラクリーマさんを見てて思うけど、あの人あんなに動き回ってるのに全く疲れてそうに見えないんですけど……」
彼女の質問にレクシーは半分彼に対して呆れたような表情をし、腕組みをした。
「リーダーは三度の飯より戦うコトが大好きだからな……、あんだけ動いても疲れると感じてねえんだろうぜ。
見てみろよ、あの顔を」

そう言われ、二人は映像を見ると途中参加であるものの、ぶっ続けで訓練している部下達と劣らぬくらいに動き回り、指揮し、闘っている彼の表情は疲労しているどころか逆に楽しんでいるかのように生き生きしている。

「俺がゆうのも何だけど、あそこまでいくとどんな神経してんだよと思うぜ……っ」

「「……」」

ーーそして、その訓練地獄にも終わりが……。

「これでこの訓練は終了する。てめえらよく頑張ったなっ！！」

ラクリーマの終了合図に参加者ほぼ全員がその場にドサッと倒れた。

“やっ……やっと終わった……っ”

皆、心からそう思うのだった。

「おいおい、そのまま倒れんなや、歩きながら深呼吸しろ。でねえと死んじまうぞ」

「……はい……ぜぇ……ぜぇ……っ」

しかしそれを実行したのは少人数だけで、それ以外は疲労しきり、立つことさえもかなわなかった。

「ご苦労さんっ、てめえらやれば出来んじゃねえか！
まあ実際はこれもある意味のび太のおかげかもなっ、あいつに礼言っとくか？」

彼を満面な笑みで部下達を見つめている。

「……すごかったなぁ」

「ええっ、あの人達も本当に頑張ったよねぇ……っ」

のび太達は感動したのか知らず知らずに涙を流していた。
彼らの頑張りは二人の心に大きく印象に残り、良いものを見れたと心からそう思うのだった。

「……何か嫌な予感がするぜ……っ」

「……？」

レクシーは何かに気づいたのか、険しい表情している。
画面を見ると、ラクリーマがまた素振りとさらにフットワークを開始していた。

これはまさか……。

「お前ら、早く呼吸を整えとかねえと次がキツいぜ？」

“……へっ？”

「次は格闘技場で組手やるぜ、あと２０分くらい休憩したら移動しろよ？」

「……こっ……これで終わりじゃないんですかい……？」

「誰が終わると言った？甘ったれたこといってんじゃねえよ」

“……”

彼のその言葉に全員が耳を疑った。これで終わりではないのかと……その場にグニャっと脱力する。

それはのび太達も同じであった。まだやるのかと二人も目を点にして口が開いたまま塞がらないのであった。

「こっ……心に火がついちまったようだな……ハハッ……」

レクシーもただ苦笑いするしかなかった。

◇ＰＡＲＴ．１８　戦闘訓練（中編）（後書き）

ラクリーマは個人的な理想、ユノンは完全に俺得なキャラクターです。

◇ＰＡＲＴ．１９　戦闘訓練（後編）（前書き）

今回はのび太としずかはあまり活躍しません。戦闘メインです。

◇ＰＡＲＴ．１９　戦闘訓練（後編）

格闘技場は先程の模擬戦場の横にあり、広さは４分の一程度である。
その中は沢山の戦闘員に詰め込まれて非常に暑苦しかった。

「うおおおぉっ！！」

《バキっ！！ズサーっ！》

「次ぃっ！」

「ダリャアアッ！」

《ドゴっ！！ズサー……っ》

「次ぃっ！」

ラクリーマ本人が直々に組手を行っているのだが、彼の前には全く歯が立たず、立ち向かっていく戦闘員達は全員返り討ちにあっている。

「頼むレクシー、俺と代わってくれぇ！」

「ふっ、ふざけんじゃねえよっ！？今日俺は非番じゃあ！！」

交代を要望されて首を横に振るレクシーだったが、

「レクシーっ！！」

見ると、彼はニヤニヤしながら「来い」と言わんばかりに指でクイクイ呼んでいる。

「まっ……マジ……っ？」

呼ばれたからには行かないワケにはいかず、

《ドゴォ！！》

「ぎゃあああああっ！」

当然敵うハズもなく、のび太としずかの目の前で倒れながら震えている。

「レクシーさん……大丈夫ですか……」

「……」

そんな状態が続き、格闘訓練が終わった。

参加者ほぼ全員が顔中アザだらけでへばっているのに対し、ラクリーマ自身は全く無傷で相変わらず元気に素振りしている。。

「はあっ……もう終わんねえかなぁ……」

「まじで気持ちワリぃんだが……」

「俺達を殺すつもりなのか……あの人は……っ」

どこからか不満や弱気な声が出始めている。

それをラクリーマは彼らをチラ見するも、黙って素振りを続ける。

……数分後。

「お前ら集合。最後の訓練を始めるっ！」

休憩していた参加者全員を召集させる。

「またキツい訓練やらせれるんだろうな」と彼らはそう思っていた。

しかし、このあとラクリーマの訓練指示は誰もが理解できないことだった。

「……1時間の猶予をやる。休憩及び、今から各人のベストだと思う武装、装備して……もう一度模擬戦場に集合な！」

“……えっ！？”

「リーダー……何の訓練を……っ？」

「それはその時のお楽しみだ。さあ、お前ら準備にかかれ！」

そう言って彼はまた素振りに入る。

部下達は一向に分からず、頭を傾げるのであった。

「リーダー、何をするか教えくれま……」

「うるせえっ、早く準備しねえか！！
ちなみに遅れた奴はマジでどうなるか覚えとけよ？１時間という多大なサービスをしたんだからな！」

「……」

そう言われ、部下達はすぐにそこから去っていく。
ラクリーマは手を止めて、見学しているレクシー達の方へ向かった。

「リーダー、何をするんで？」

ラクリーマはドヤ顔をし、こう告げた。

「俺一人対あいつらの実戦訓練だ」

「！　？」

その無謀すぎる内容にレクシーは唖然とする。

「ちょっと待ってくだせえ！リーダー１人で１００人以上いる戦闘員とやり合うなんて、いくらなんでも無理ありすぎますよ！！」

「今日は俺のワガママに付き合ってもらったからな。あいつらも不満溜まってるみてえだし、俺も多少は痛い目食らおうかなってな……フフっ」

尋常ではない発言をするラクリーマ。一体何を考えてるのか？

「あいつらに本気で攻撃するように言うし、モチロン俺も本気でやる。なんならレクシーも入っていいぜ？」

「きょっ今日はやめときます！！」

ラクリーマは彼の隣にいるのび太としずかを見ると、二人はこれから何が起こるのか理解できずキョトンとしている。

「あいつらにヤル気を出させた礼だ。のび太にしずか、お前らに見せてやるよ。俺の本気ってモンをな！」

そう言い、彼は三人の元から離れて、また素振りの続きを始める。

「本気……？」

「リーダー……マジでやるんですかい……っ」

「……」

レクシー、のび太、しずかはそれぞれの考えは違っていた。

……

一時間後、模擬戦場にはレクシーの言った通り、完全武装した参加戦闘員が１００人以上が集結、訓練内容を聞かされ全員が唖然とした。

「ちょっ……なに考えてるんですかい……っ！？」

「さすがの俺達でもラクリーマさんに本気で手ぇかけるのは無理ですよっ！！リーダーの身に何かあったらどうするんですか？」

あまりにも無茶苦茶な訓練。部下達はすんなり受け入れるワケがない。

「お前らには今日、俺のしごきを耐えた褒美だ。俺を殺すつもりでかかってこい、いいなっ！」

「しっ、しかし……っ！」

「しかしじゃねえっ！！お前ら……いつも俺に不満持ってるヤツも少なからずいんだろ。
どうだ？もし俺を討ち取ったらリーダーの席譲るぜ？うめぇ条件じゃねえか？」

「……ゴクっ」

『席を譲る』という言葉に反応する一人の男がいた。

ーーユーダである。

「なら始めるぜ。お前らは回りに広がって全員で集中砲火するのもよし、全員で突っ込んで俺をボコボコにするのもよし、どんな手ェ使ってでも殺しにこい！」

彼の指示で回りに囲むように配置させる。

「制限時間は３０分。想定場所はなしだ！
お前ら各人の実力を見させてもらうぜ、クックック……っ」

彼は笑っている。明らかに彼が不利な状況なのに。
『まともじゃない……っ』全員がそう思うのだった。

……見学室では。

「今から何を……？」

「……」
レクシーは何も言わず、ただ映像を見ている姿は緊張と焦りを感じさせる。
のび太としずかも彼の表情からただならぬ事態であると感じさせていた。

そして、

「さあて始めるか。俺を楽しませてくれよ、来なぁ！」

“もうやるっきゃねぇぇぇっ！！”

“ウオオオッ！！”

彼の合図と共に一斉に大勢の戦闘員が一気に襲いかかる。

四方八方から攻めてくる彼らを前にしてラクリーマは……。

「きやがれぇっ！！」！

《パァーーン！》

「ギャアッ！」

「グワッ！」

彼は全く臆することなく猛進し、一撃で大人数を吹き飛ばした。

「グアハハハァッッ！！」

彼の雄叫びが辺りにこだまし、全員が畏怖する。

《ドシューッ！ピィ！》

約十数人が手持ちの火器を彼に狙いを定めて砲火する。が、

《バシュウっ！！》

ラクリーマはすかさず義手を前に出して、弾丸や光線をはねのける。

しかし、さすがに全て跳ね返せるハズがなく何発かは彼の体にかする。これはラクリーマの反射神経がよいのか発砲者が彼の身を案じてワザと外してくれたのかはわからない。

「くぅっ！」

かすった所が出血し、彼が怯んだ隙を見逃さず、戦闘員が彼に襲いかかる。

「のぼせるなぁ！」

彼は休む暇もなく高くジャンプし、空中に逃避する。

そのまま密集地帯から離れた場所に着地すると、すぐに右手でブラティストームをグッと掴む。

《ブチっ……ブチブチっ……ブチぃっ！！》

何と上腕部ごと義手を外し始めた。チューブや回線を無理やり引きちぎる嫌な音が辺りに響きわたる。

「てめぇらの相手はこいつだ！！」

引きちぎったブラティストームを全力で投げつける。

その瞬間、

《ガシャアッ！ガシュウっ！！ギュイイイッ！》

それがまるで意思を持っているかのように内蔵している全武装を一気に展開し、彼らに襲いかかり、左手がなくなったラクリーマも続いて突撃する。

《バキッっ！》

《ビッ！ビビっ！！》

ラクリーマとブラティストームの連携攻撃により、彼らの陣形は跡形もなく崩壊する。

「せっ……せぇいっ！」

“カスっ…”

一人がラクリーマの顔面に拳突きをいれようとしたが、あまりにも力が入ってなくスレスレでかすった。

しかし、その行為が彼を苛立たせる要因となった。

「おいっ、もしかして俺だと思って手ぇ抜きやがったなコラァ！」

「ひいぃぃっっ！」

《ガボッっ！！》

逆に彼の顔面に本気で拳を入れるラクリーマ。その場に倒れ、悶絶する。

「『敵はためらわず殺せ』と教えなかったか？

今の俺はおめえらの敵だぁ！」

ラクリーマの勢いはさらに加速を増し、もはや誰にも彼を止められ

ない。
縦横無尽に動き回り、誰たった一人で何十人を蹴散らす彼の実力、例えるなら『戦神』の名にふさわしい。

「ああっ……」

「何てこと……」

のび太としずかはその様にもはや言葉に言い直せないほどの衝撃を受けていた。
無論、レクシーもである。

「いやぁ……こりゃあ驚いた……。ここまでスゲぇなんて……」

彼は今、歓喜している。さっきの訓練とは比べ物にならず、一発攻撃するごとに悦びが一層高まっているのがわかる。
なんて楽しそうに闘っているのだろうか。それは彼は根っからの《戦闘狂》だからである。

ー訓練も中盤に差し掛かり、

「ぐぐっ……」

さすがの彼も次第に疲れが見えてきたのか「ハァ…ハァ…」と息を

切らしているのがわかる。

さらに何の策もなく突撃しているので防御はほとんど考えておらずラクリーマも攻撃、被弾を受け、至るところから出血を起こし、よくここまで動いていたものである。

（くくっ……まぁこんなもんか。けどなぁ、そんなじゃあまだ俺を殺せねえぜ！）

また右手で一撃でなぎ払おうと力を込め、振ろうとした時。

“ズキィ！！”

「ぐう！？」

突然あばら骨に激痛が走り、その場に止まる。

しかし戦闘員達はそれをチャンスと言わんばかりに彼に飛びかかり、

《ドゴォ！！バキッ！グシャ！！》

彼を四方八方から殴り続け、そして彼は力なくその場に倒れる……。

「……」

さすがにやり過ぎたのか、全員が手を止めてラクリーマを見つめる。

「ラクリーマ……さん？」

一人が声をかけるが全く反応しない。まさか……とは思うが。

『リーダーっ！！』

「ちょっと冗談はなしですよ！！」

しかし、返事をするどころか指一つ動こうとしない。

そんな彼を見て、一瞬で全員の表情は青ざめる。

見学室にいる三人もその事態にいても立ってもいられなかった。

「お前らはここでじっとしていろぉ！！」

「レクシーさんっ！？」

「リーダーァァァっ！！」

すぐに彼の元へ向かう。『死なないでくれ』と心の底から思うのだった。

駆けつけたレクシーはすぐに戦闘員達を押しのけて、ラクリーマの元へ辿り着いた。

「……リーダーぁ……」

凄惨であった。身体中打撲傷や銃創らしき痕で血まみれであった。
見るからに生きている可能性は……限りなく低いと誰の目でも分かるのだった。

「オメーらっ!!リーダーをメディカルルームに運ぶのを手伝えっ!!」

レクシーが指示するが、例えラクリーマの命令に従ったにしても誰もが自分たちのしたことに後悔し、茫然自失している。
しかしそんなことをしている暇などない、早くしなければ本当に取り返しのつかないことになる。

そんな中、あのユーダが小笑いしている。

「ケッケッケッ……これで俺がリーダーになれるチャンスができたかもなぁっ!!」
「ユーダっ!?」

空気を読まない発言が彼を逆撫でし、ユーダをグッと睨み付ける。

「このヤロぉ、こんな時にふざけたこと言ってんじゃねえよ……っ」

「もともとリーダーがそう言ったんだろうがぁ、ならいいんじゃねえのかよ?訓練参加してねえ奴がしゃしゃり出てくんなよ?」

「……お前死にてぇのか、あ?」

「それはこっちの台詞じゃボケぇ!」

二人は険悪なムードになり、今にも本当のケンカが勃発しようとしていた。

「二人とも落ち着けよ！！」

「今そんなことしている暇なんかねぇだろうが！」

仲間の一部が二人を仲介しようとするが、そんなものでは止まらなかった。

「放せェェっ！！このクソヤロウを一発でもぶん殴らねえと気がすまねえんだァァァ！」

「オメェのよいこ振りにはもううんざりなんだよ！！」

「なんだとォ！？今すぐ殺してやんよぉっ！！」

「上等だコラぁっ！！」

さらに激化する二人を取り押さえるも精一杯である。
この場はラクリーマそっちのけで一気に修羅場と化しつつあった。

その時、

《ガシッ！！》

レクシーの足首に何かに掴まれたような感覚がする。下を見ると、

「りっ、リーダーっ！！」

意識がなかったはずのラクリーマは彼の足首を掴んでいる。徐々に握り具合が強くなっている。

「おっおい、リーダーはまだ生きてるぞ！」

全員がそれを聞いて、徐々に歓喜の表情を浮かべる。

“よっしゃあっ！！死んでなかったぁ！！”

満面の笑みで大声を張り上げる。全員が一安心し、気が一気に緩んだ。

……だが、

「クックック……」

「リーダー？」

「ククククッ……キヒっ！」

ラクリーマの身体中ぶるぶる震えた後、何事もなかったかのようにすぐ立ち上がった。

その瞬間、全員はその場で静止した。

“リーダーっ……？”

さっきまでの彼とは何が違うとほぼ全員が悟った。

「……さすがは俺の部下だ……めっちゃ楽しいぜ……だがナ……」

《ズドォォォっ！》

「ぐぎゃあっ……」

突然、無関係であったハズのレクシーの腹部に猛烈な蹴りを入れて、彼を吹き飛ばし、前方数メートル辺りで落下した。

《わっちゃあら死にさらせやァァァァァっ！！！》

“ひいいいいいっ！！？”

すぐその場から一目散に逃げ出した。しかし彼は逃亡を逃がすハズがなかった。

《バキィ！！ズバーっ！！》

すぐに彼らに追いつき、これでもかというくらいに殴る、蹴るの暴行を開始する。

「クカカカッ！！ヒャハハハハハァ！！」

《ガシューっ！》

先ほど離れていた義手がなんと何事もなかったかのようにそのまま元の位置に連結、そのまま彼らの方へ親指以外の四指を向けた。

《ギュルルルルッ！！》

指がまるでサボテンのように針山と化し、瞬間、高速回転を始める。

「ゲシゲシにイワシてやるらぁ！！」

《ドガガガっ！！》

なんと回転する四指がまるで少なくとも5～8メートルはあるワイヤーのように伸び、鞭を扱うかのようにそれをブンブン振り回し始めた。

広範囲に渡り、彼らの装甲、地面に直撃し抉りに抉り、火花を散らす。

《ドォリドリドリドリドリっ！！》

「やべえ！！まじで俺達を殺す気だぁ！！」

「誰かリーダーを止めろぉお！！」

しかし誰もラクリーマを止められる者はいない。

狂気に身を任せ暴走する彼はもはや『戦神』ではなく、『悪鬼羅刹』そのものである。

その瞳は『戦闘』を楽しんでいる目ではなく、『殺す』ことを楽しんでいる目である。

「誰か助けてくれぇっ、殺されちまう！！」

「落ち着いてくだせえリーダーっ！！」

部下の懸命な思いも彼には全く届いておらず、ただひたすらに暴走する。ひたすらに……。

……

“緊急事態、緊急事態！！非番時含めた各戦闘員は速やかに武装して模擬戦場に集結せよっ！！繰り返す……”

艦内に一気に放送され、休んでいた非番戦闘員はもちろん、何があったか知りたい無関係者までもが移動する。

一方、オペレーションセンターで部下と雑務をしていたユノンも……。

「模擬戦場で何が起こったの！？」

「それが……総司令の身に何かが！？」

「……分かりました、あなた達はそのまま作業を続けて！！私はそこへ向かいます」

「了解！！」

彼女もすぐにその場をあとにする。走り様の彼女は歯軋りを立てて苛立っていた。

（あいつ……何やらかしたのよ……！？）

……

「ラク……リーマぁ……」

「イヤァァっ！！！！」

のび太としずかも彼の変わり果てた姿にオロオロするくらいしか出来なかった。

部下達は打ちのめされて１００人以上いたハズの参加者はもう半分以下の人数しか立っていない。

誰もが彼を止めようと試みるが、彼の恐るべき戦闘力に暴走が拍車をかけて、接近するのも困難であった。

「あっ、あれがリーダーか……？」

「ウソ……だろっ……？」

駆けつけてきた野次馬も彼の狂乱する姿に驚愕している。

その時、ユノンもすぐに駆けつけて野次馬を押しのける。

「どうしたの！？」

「副司令官っ！！ラクリーマさんがっ！」

暴れている姿を見た彼女の表情は一気に変わった。

「うっ……ウソでしょ……っ！？」

彼女の額から冷や汗が流れ出る。

「……理由はあとで聞きます。まずは彼を……っ」

彼女は冷静になり、耳元の通信機を起動させ、向かう途中の訓練非参加者の戦闘員にこう告げた。

「直ちに遠距離用のトランキライザーを装備し、集結した後、総司令官を包囲して発射せよっ！迅速に行動して！」

“ユノンさんっ！！何が起きているんですか？”

「説明はあとよ。今はただその命令に従って！」

“了解しましたっ！！”

通信を切り、野次馬に向かってこう言い放った。

「今から彼を無人地帯へ誘導します。あなた達を危険な目にあわせたくないけど、あたし一人じゃ無理だから誰か協力お願いします」

「無茶だっ！ユノンさんにまで何かあったら……」

「そうですよっ！やるなら俺達が！」

説得しようとするも、彼女は首を横に振る。

「……副司令官たるものが何もしないわけにはいかないでしょ。……もう一度しか言わないわ、協力してちょうだい……」

彼女の断固な決意に、ぞろぞろとユノンの前に集まってくる。

「わかりやした。ユノンさん、指示をお願いしますっ！」

「みんなこうなったら死ぬ覚悟でリーダーを止めようぜっ！！」

“おおっ！！”

男達は意志を一つに結集し、腕を高らかに手を上げた。

「……ならいくわよっ、あたしについてきなさいっ！！」

彼女率いる、２０人ほどの集団が一斉に行動を開始する。

まず彼女が暴走している彼の注意を引き付けるため、彼の近くに接近するよう指示を出す。

「あたしが行くわ。５人はサポート、残りは誘導地帯で待機してっ！」

“うっすっ！！”

それぞれ別れて各指示の元に行動し始める。

……一方、

「ユノンさん助けてくれぇっ！！」

立っている参加者は２０人以下である。
辺りにはラクリーマにボコボコにされた戦闘員によって埋め尽くされている。
生きているようだが、ほぼ全員が気絶している。

「ダァアアアッ！！」
彼自身はまだ満たされていないのか、悪魔のような恐ろしい顔で獲物を探し求め、さ迷っていた。
「あなたたちはすぐに後ろへ！」

「ありがてぇっ！」

ユノン達が近づき、逃げ続けていた戦闘員はやっと彼らの後方へ移動する。

「ラクリーマっ！！」

「！？」

声をかけると彼は視線はユノンに向いた。

「あたしはここよ……。来るなら来なさい……さあっ！」

「グガアアッ！！」

その瞬間、血に飢えた野獣が彼女へ向かって全速力で向かってくる。
ラクリーマはもう……ユノンだと認識していないのか？

彼のスピードは桁違いであり誘導不可能と察知した彼女はすぐに防御の構えに入り、５人の男がユノンを守るように囲む。

しかし、

「えっ！？」

“！？”

何と彼は彼女達を飛び越えて後方にいる戦闘員に向かって突撃した。

「どっ、どうなってんだコリャア！？」

彼らはすぐに彼の猛攻から逃げ出した。

そんな中、ユノン達でさえ全く理解できず立ち尽くしていた。

「どっどうして！？」

ユノンは振り返り、彼を見ると何かおかしいことに気づいた。

よく見ればラクリーマはまだ立っている戦闘員だけを襲っている。
暴走しているのなら戦闘員を色んな手段を使って惨殺しているはずである。彼の性格上で考えるなら。
しかし、倒れている戦闘員はただ気絶しているだけで死んではいない。

しかも暴走しているのに対し、その攻撃全てがワザと急所を外しているようにも見える。
そして自分達を襲わなかった件……そう考察するとある考えが思い浮かぶのだった。

「あっあいつまさか……っ!?」

「副司令官!?」

ユノンは前に出ると苦虫を噛み潰したような表情で彼をグッと見つめた。

「止まりなさい!!」

「……!?」

彼女の放った一言でなんとその場で制止した。

「あんたっ……ホントは意識あるんでしょっ?答えなさい!!」

「……」

彼は数秒間間を置いた後、彼女の方へ向いた……。

「……ああ、普通にあるぜ」

《！　？》

この模擬戦場にいた全員が驚愕した。

するとラクリーマはフッと軽く笑い、こう呟いた。

「……まあ、もうすこしで理性がなくなりそうだったがな。その前に止めてくれてありがとな……ん？どうしたユノン？」

「……っ！」

彼女は怒りの表情を露にし、彼の方へ向かうとすぐさま、

《バチン！！》

「つっ！」

彼の頬に強烈な平手打ちをかまし、辺りにその打撃音が辺りに響きわたった。

「いい加減にしなさいよぉ！！こんな騒ぎ起こして、彼らをあんなにまで痛みつけて……総司令官失格だわっ！！」

「……」

ユノンの叱咤が彼はもちろん、辺りは一気に静寂と化する。本当に彼女の怒りもごもっともだ。

「……ユノン、どうだったか？」

「……はっ……っ？」

「意識があったとは言え、マジでキレてみた俺は怖かったか？」

「……」

ラクリーマは倒れている戦闘員の方へヨロヨロしながら向かうと運ぼうとしているのか、気を失っているレクシーの手を肩に通している。

「へへっ……いやあ、いっぺんブチギレてみるのもいいもんだ。マジで爽快モンだぜ……っ」

レクシーもやっと目を醒まし、彼へ微笑む。

「りっリーダー……意識が治ったんですかい……よかったぁ……」

「レクシー……本当にすまなかったな。お前が一番関係なかったのに攻撃して……ふがいねえ……」

「へへっ……あんなリーダー見たことなかったですぜ……っ、今だにハラがいてぇや……ハハッ……」

彼らの会話はある種の清々しさと暖かさを感じ、全員が涙を流しそ

うになる。それと同時に彼らは思い知ることとなった。

“彼をキレさせると恐ろしい”ことを。

“もし理性がなくなるとどうなるのか……”と。

「これで……訓練を終わる。全員……こいつらをメディカルルームへ連れていってやれ……っ、急所を外してあるからしん……ぱい……し……」

《ドサッ！！》

“リーダーァァっ！！”

ラクリーマはレクシーと共にその場で倒れた。

すぐに駆けつけるとレクシーはともかく彼は白目を向いて痙攣を起こし、今度こそ意識を失ったようだ。

そりゃあんなにボコボコされて出血多量な状態で馬鹿みたいに動き回れば疲れ知らずのラクリーマでも燃えつきるのだ。

“リーダーァァっっ……ありゃ？”

ようやく到着した武装戦闘員達もその状況を見て、頭を傾げる。中央へ駆けつけるとラクリーマと多数の部下達が気絶している。

「はっ早くリーダーを……っ！」

「全員集合、協力してその場で気絶している彼らをすぐにメディカルルームへ！」

ユノンの指示でその場にいる気絶者を運び出す。

こうして地獄で危険な戦闘訓練が終わりを告げるのであった。

……一方、のび太としずかは……。

「「うえぇぇぇん！！」」

見学室内でふたり、ラクリーマのキレた表情、行動があまりにも怖すぎて大声で泣いているのであった……。

◇ＰＡＲＴ．１９　戦闘訓練（後編）（後書き）

次からは恋愛要素も入ってきます。

◇ＰＡＲＴ．２０　事実（前書き）

今回は核心に迫る（？）話が多いです。

◇PART．20　事実

あれから一時間後、気絶者も復活し、各人休憩を与えられて部屋へ戻っていった。

しかし、メディカルルームではユノンとサイサリスがあまり思わしくない表情でとある映像を見ていた。

その横でラクリーマがベッドで静かに寝ている。

「あんまりいい状態じゃねえな……っ」

「……」

その映像はなにやら人体図を映し出している。地球人と酷似している骨格、筋肉部位、内臓に位置する場所に赤、黄色に点滅している場所が多数確認されている。

「左肋骨数ヵ所、右胸骨数ヵ所……にヒビ。右上腕二頭筋、三角筋が炎症、打撲傷、銃創、切創……っよくこんな状態でまあ……」

「……」

「とりあえず治療したが……さすがにここまでくると完治できねえからしばらくは絶対安静だな。これ以上無理するとただじゃすまねえぜ」

「……バカよ、ラクリーマ。自分の体を大事にしないから……っ。リーダーとしての自覚があるのかしら……っ？」

ユノンは彼を冷めた目で見つめ、ため息をつく。

「だいたい……なんなのあの訓練……？。
彼らに聞いたら自分を殺しにこいやらリーダーの席を譲るやら、身勝手もいいとこだわ。
一体何を考えてるのやら……っ？」

「ーーこれもあいつのせいかもな」

「あいつ？」

「ユノンちゃんは知らねえんだっけ。エルネスっていうアマリーリスの前身、『宇宙海賊』のキャプテンだった奴だよ」

「宇宙海賊……初耳ね？」

「そいつはあたしと同じで科学者でな、ラクリーマの義手『ブラティストーム』の開発やこのエクセレクターを設計、建造に関わった、あたしとは別ベクトルで超天才だ」

ブラティストームはともかくこの巨大宇宙船エクセレクターを開発したなんて……。
ユノンはこう考えた、“よほどの天才なんだろう”と。

「性格はラクリーマと瓜二つだ。つかこいつがそのエルネスから影響を受けてる。

なんせ生まれは違えど無二の親友……兄弟みたいな関係だったからなぁ」

親友……と言われても彼女は全くピンとこない。自分にはそんな親友はおろか友達などいなかったせいなのかもしれない……と思うのであった。

「私とそいつはここからだと……約４０万光年離れたマッドウイングっていう星雲内にある第１惑星『ラグラ』っていう惑星出身なんだがな……。

実はその近くの無人第２惑星『エリゴル』にはニュープラトンの鉱脈があって、それを採取し、初めてＮＰエネルギーが抽出した惑星にして、それを利用し『神の軍団』などとほざいてたが確かに強大な軍事国家だった」

ニュープラトン……まさか、そんな所にあったなんて……。

まあ、このエクセレクターもＮＰエネルギーを動力とし、こんな超兵器ばかりを搭載した巨大宇宙船を建造できる技術を持つのは全宇宙を探しても数えるほどしかいない。
そう考えると無理にでも納得せらざるえなかった。

「わたし達はその『神の軍団』の軍事研究機関で働いていたんだが、ある事情であいつが組織を結成して反乱を起こしてな。
その際エクセレクターを強奪し、その時にあたしと手ぇ組んだってワケよ」

「反乱……強奪……ですか？」

なかなか興味深い話だ。彼女もその話に食いついたのか、目をパッチリ輝かせている。

「聞きたいのか？」

「まあちょっとは……っ」

「副司令官だしな、知らないワケにはいかねえし教えてやるよ。」

サイサリスは彼女の方に向いたあと、目を静かに閉じる。

「エルネスはな、実は技術開発の他に様々な人体実験も担当していたんだよ」

「人体……実験……っ？」

「あたしはあまり知らないんだがな、毎日のように被験者達は悲鳴を挙げてたそうだ。
ーーその被験者達てのは死刑を宣告された極悪人共でな。

だがあいつの性格だ、その悲惨さ、凄惨さ、その非人道的行為にマジギレしたんだ。
『どんなに極悪人を使うとしても、ここまでやるなんてあまりにも酷すぎる』ってな」

「……っ！？」

ユノンはその壮絶な事実に唖然とする。

「まあそれであたしとエルネスは実験体になろうとしていた奴らと手を組んで反旗を翻したわけだ。

元々ここのやり方は気に食わないって言ってたからな。

完成したばかりのエクセレクターを強奪した後、すぐに宇宙圏に飛び出し、リバエス砲を『神の軍団』の本拠地に撃ち込んで惑星ラグラごと消滅させたんだ」

「惑星が消滅したって……リバエス砲は最大出力でも惑星を半壊させるほどですよ……なんでまた……？」

「さあな……。そこまでは調べきれなかったから何とも言えん。

まあその後、この艦初めてのワープを実行して逃亡。それからあたしらは銀河連邦から追われる身になり宇宙海賊が誕生したってわけよ」

「そんなことがあったなんて……同情するわ……っ」

「けっ、同情なぞいらねえよ。わたしだってあいつと組んだ方がさらにスリルで破壊まっしぐらで楽しくできると思っただけだかんな。あたしはマトモな生き方は合わねえからよぉ」

「……」

いかにもサイサリスらしい考えだ。同情して損したと思うユノンであった。

「……そのエルネスって人は……」

「……死んだよ、5年前のとある事故でな。死に間際、当時戦闘員で一番能力が高かったラクリーマに全権と自分の部下達を託したんだ。そこからアマリーリスに至るわけだよ」

「……！？」

「こいつもよくここまできたとあたしでも思うよ。親友とはいえイチ戦闘員からいきなり全てを押し付けられて重圧もハンパではないだろうに。

エルネスも仲間を大事にする奴だったし、あいつと同じように仲間を死なせたくない気持ちで必死で悩んでるんじゃねえかな？」

そのとりとめのない考察にユノンは腕組みし、頭を傾げる。

「そうかしら……彼の普段を見てるとそうは思えないし……」

「まあ、予想の話だがな。
ラクリーマは他に最愛の彼女、ランちゃんも亡くしてるからな。間違いなく多大なショックを受けたのは確かだ。

……こいつ、無意識に自分の死に場所を探しているような気がするんだが。副司令官のお前さんなら思い当たるふしがあるだろ？」

彼女はその【死に場所】という言葉になにかピンとくる。

侵略、戦闘の際は部下達の盾となり、庇ったと度々報告されている。

その証拠に帰艦の際は、ほとんど彼だけが傷だらけである場合が多かった。

最近ではのび太と決闘した時には『自分が死んだら後を引き継げ』と言っていた。

それらの行動と彼女の言葉を照らし合わせると辻褄が合う。死ぬことを考えていない人間がそんな行動をとったり、そんな台詞を吐くとは思えない。

「……ラクリーマ」

彼女は哀しげにうつむく。サイサリスはそんな彼女に軽い笑顔で見る。

「まあ心配しなさんな。ただこいつがバカなだけかもしんねえし、こいつが死ぬ姿なんか想像できねえって！」

「……」

彼女を気遣うような口振りでそんな彼女の肩に手を置いた。

「ユノンちゃん、こいつの支えになってやれ。二人ならこのアマリーリスをさらに繁栄させることができるだろうぜっ！

実際、あんたらの姿を見てたらまるで姉と弟だ、クックック……」

「……なに言ってるんですか……っ」

冗談まじりで喋り、彼女をぼそっと否定するユノン。

「……ちょっと開発エリアに戻る。ちょっとラクリーマを見といてくれなぁ！

あと……二人っきりになったとしてもヘンな行動すんじゃねえぜ？」

「……っ！！」

「ワリィワリィ！なら邪魔者は消えるぜぇ！」

茶々をいれ、サイサリスはメディカルルームから去っていった。

……二人っきりとなった室内、ユノンはラクリーマの横に座り、見つめる。

「……」

彼はまるで子供のような寝顔をし、なんの悩みもないかのようにすやすや寝ている。まるでさっきの考察が的外れだったかのように……考えすぎなのであろうか？

「ふふっ……憎たらしいほどいい寝顔してるわ。さっきまでの様子とは大違い……」

彼女は普段、誰にも見せたことのない穏やかな笑顔をつくる。
誰もいないせいか、安心していつもの自分ではない表情でしていられる。

“俺の本気でキレた姿は怖かったか？”

あの言葉が心に残っている。確かに彼は訓練や仕事中はさすがに厳しく行っているが、それでも彼はへらへらとしている部分があり、それまではキレるという一線を越えた所までは見たことはなかった。
あの時の彼の姿は本当に未曾有な光景だったと言える。

（もしかしたら……溜め込んでたストレスとかを吐き出してたのかもしれないわね……っ）

彼女は彼の右手をギュッと握り、視線を下に向け、目を瞑る。

（……支えるかぁ……そんなことは全く考えてなかったわ。
務まるかしら……こんな無愛想で人付き合いもろくにできないあたしが……）

すると

「ううっ……」

「ラクリーマ？」

彼は額に汗を流しうめき声をあげ、彼女はすぐさま横にあったタオルで彼の汗を拭う。

「ラ……ン……っ」

「……？」

「……ラン……行くな……っ」

どうやら亡き恋人ランの夢を見ているようだ。しかし彼の表情を見るかぎり、あまり良い夢ではなさそうだ。

彼女はどこかもの悲しい表情に変える。

「……あたしのことは……眼中にないってワケね……ってなに考えてんのよっ！？」

顔を真っ赤にして頭をブンブン振るという彼女にして非常に珍しい行動をとっている。

《ギュウゥゥっ！》

「……？」

突然彼が自ら彼女の手ごと強く握りはじめ、寝ているにも関わらず、

穏やかな表情となっていく。

「……ユノン……？」

「……えっ……起きてる……？」

彼女を呼ぶ声に反応にすぐに応える。

だが、彼は続くように

「……好きだ……っ」

「えっ…？」

「……ずっと……俺のそばにいてくれ……っ」

「えぇっ！？」

そう言うとまたすやすや眠りはじめる。どうやら寝言だったようだ。

一体彼はどんな夢を見ているのか不思議だ。

「……」

彼女の顔が真っ赤だ。

熟したリンゴのように真っ赤だ。

彼女の心臓の鼓動が高鳴り続けて今にも破裂しそうだ。

ユノンはすぐに立ち上がり、室外に出ると壁に寄りかかりそのまま座り込む。

「～～～っ！！」

額を押さえ、非常に息づかいが荒い。

（っ……あたし、何取り乱してんのよ……っ。単なる寝言じゃない……）

息を整え、立ち上がる。

しかし鼓動の音は高く、もう一度メディカルルームに入るも、ラクリーマに一歩近づくごとにまた強くなっていく。

「……っ！」

なんとも言えない複雑な心境に立ちくらみを起こし、イスにたどり着くとドサッと座り込む。

「……ん？ユノン？」

「はっ！？」

ラクリーマは目を覚まし、すぐに起き上がる。

起きた直後なのか不思議そうに馬鹿面で彼女に視線を注ぐ。

「お前……風邪ひいたのか？顔がやけに赤いが……っ」

「～～～っ！」

《バチーンっ！》

「どわぉっ！！」

けが人にあるにも関わらず、彼に強力な平手打ちをかます。

いつもは冷静で飄々と接する彼女がまともにラクリーマと目を合わせられない。

「ばっ……バカぁっ！！」

罵るといなや、彼女はまるで犬のような速さでその場から去っていった。

「あのクソアマぁ……起きたなりに何しやがるんだ……。

ほぉ～イテぇ～！」

赤くなった頬がジンジンする、優しく撫でるが一向に痛みが引かない。

「……」

ベッドを出て、立ち上がる。

……横腹と右腕全般が少し痛い。気にするほどでもないが彼はそこを優しく押さえて苦笑いする。

「ちいと無理しすぎちまったな……っ、情けねェぜ」

そう言い残し、誰もいない室内から早々に去っていった。

一方、ユノンはというと自室に戻り、ソファーに座りながら頭を押さえていた。

「……」

いまだに顔を赤くし、溜め息ばかりついている。
ラクリーマの寝言が非常に気になっていたのだ。

（なんなのよ……この感じ……っ？
ああ……モヤモヤして気持ちわるい……っ！！）

そのままソファーに寝そべり、目を瞑る。

胸の鼓動が止まらない。さっきよりは遅くなったが、“ドクっ、ドクっ”と音を立てている。

（寝言でも……あんなこと言われたの……はじめて……。
ラクリーマ……どうゆうつもりなの……？）

“……好きだ……”

“ずっと……俺のそばにいてくれ……”。
何を思ってあんなことを言ったのか彼女は全く理解出来なかった。

「……」

少し経って彼女は立ち上がり、クローゼットへ移動すると中から下着と着替えをとりだし部屋を出ていった。

「ラクリーマ……ユノンちゃん……あいつら……っ」

メディカルルームにサイサリスが戻ってきたが、当の本人とユノンはもういなく、無人と化していた。

徐々に苛立ちが募り、彼の寝ていたベッドをガツンっと蹴る。

「もうどうにでもしやがれっ！！せっかく気ぃ使ってんのにぃ。こうなったら腹いせに……また新兵器を開発して犠牲者をバンバン増やしてやるわぁ、ワハハハハッ！！」

狂気じみた発言を吐いたのち、彼女もメディカルルームから去っていった。

……

「……」

のび太は下をうつむきながら通路を歩いていた。

「ハァ……」とため息をつき、不安そうな表情だった。

（あの時のラクリーマ……ホントに恐かったな……っ。あれで僕たちを襲っていたら……ひいっ、イヤだぁ！！）

身体に寒気が走る。

考えただけでもゾッとする。

しかし、あれでも自覚があったというのは驚きだ。

「……大丈夫だったかなぁ……見たかぎり大ケガみたいだったけど……っ」

それでも彼のことを心配するいかにものび太らしい性格だ。

……そんなテンションで歩いて曲がり角を曲がろうとした時、

「のび太？」

「ラクリーマ？」

偶然にも二人は出くわす。

「ラクリーマ……身体は大丈夫なの？」

「ああっ。ちいと身体を痛めちまったようだが……まあ心配すんなっ」

のび太はその言葉を聞いてホッとする。

「しずかは一緒じゃねえのか？」

「しずかちゃんなら大浴場に行くって」

「大浴場かぁ……ククククっ、そういやぁユノンもそこに行ったってことを聞いたな……こりゃあ面白いことを考えたぜ！」

「？」

突然ラクリーマはのび太の腕を掴み、のび太が歩いてきた方向へ引っ張っていく。

「どこに連れていくんだよぉ！？」

「のび太、お前にいい体験させてやるよ。
名付けて『目の保養及び、女の体について』って奴をな！」

「ええっ！？」

……『明らかに嫌な予感しかしない』……
のび太を無理矢理連れていく彼は一体なにをしでかそうとしているのだろうか……？

◇ＰＡＲＴ．２０　事実（後書き）

次話はお色気たっぷりですのでのお楽しみに。

◇PART．21　乱入

「この宇宙船にもこんな大きなおフロがあるなんて感激だわ……フフっ♪」

地球人に限らず異星人にも入浴という概念があり、艦内にもちゃんとした大浴場があるのだ。
最もここは女性専用であるが。

「はあ……いい匂いのするお湯だわ。気持ちいい～っ」

入浴しているのはしずかとその他、非番の女性員の十数人ほどである。

「どお、気に入ってくれた？」

「はいっ、お風呂大好きですから」

「へぇ、やっぱ異星人でもそこらへんは女なのね、あたしも大好きよ♪」

彼女は女性員達と楽しく会話をしている。
やはり種族や思想が違えど同性ならではの趣味が合えば話が合うものである。

《プシューっ！》

入り口のドアが開くと入ってきたのはユノンであった。

「あれ、ユノンじゃない？」

「ホントだ、ここに来るなんて珍しいね」

その場にいる全員が彼女に注目する。無論、しずかも、

（うわぁ……ユノンさんだ……。なんて美しいのかしら……っ）

彼女の裸体は見る者を魅了する。皮膚はまるで白く、その豊潤な膨らみをもつ乳房、そして程よい肉付きでありつつも、スラッとした体躯。

誰が見ても非の打ち所が全くないプロモーションである。

しかし……。

（キャーーっ！

犬みたいなシッポがあるわ!!しかも横にフリフリ振っているぅ……かっカワイイ……っ）

ユノンの腰下に生えている尾を見て、美しさとギャップがあるのか彼女は笑いそうになり口を押さえる。

彼女は犬の血を引く種族だ。耳と尾は先祖がえりであり別に驚くことはない。

ユノンはサッと体を洗い流してこちらへ近づいてくる。

「ユノン、ここにくるなんて珍しいね？」

「ええっ、久々にここに入りたくなってね」

“チャプン……っ”

お湯に浸かり、なぜかしずかの横へ移動する。

「……」

「……」

全く二人は口を開こうとしない。

目を瞑ってリラックスしているユノンに対し、しずかは非常に気まずくなり今すぐにでもその場を離れたいのだが……。

（何なのこの気まずさ……。なんで色んな所が空いてるわざわざあたしの横に……）

「あなた、模擬戦場の見学室でのび太くんの隣にいた子よね？名前は確か……」

「……えっ、はっはい！源静香（みなもとしずか）です！！」

黙っていたユノンが突然、しずかに質問し、彼女もあたふたするも返事を返す。

「あの時、あたしにたてつくとは……いい度胸してるじゃない？」

「えっ！？」

「忘れたのかしら？のび太くんのことを言ったら反論したことっ？」

「あっ……あれは……っ」

忘れるわけがない、彼女がのび太のことを罵ったことを。

「自分の立場を分かっててあんなことを言ったのかしら……？だとしたらよほどの礼儀知らずね？」

「なっ！？」

「ーーアマリーリスはあなた達が思うほど優しくないの。ラクリーマが手を出すなと言ってるけど本来なら、とっくの間に処刑よ。

わたし達はたとえ女子供でも容赦しないのよ？わかる？」

「……」

しずかは理解できなかった。彼女は一体何を言いたいのか。
しかし、彼女は平然とした態度で一方的に話を続ける。

「生かしてもらっているだけでもありがたく思ってくれなきゃねぇ……。
さらに地球にまで送ってもらえるなんて……なんて幸運なのかしらぁ……フフっ」

次第にしずかも苛立ちを募らせ、体を震わせる。

「……さっきから何が言いたいんですか……っ？
言いたいことがあったら言えばいいじゃないですか！？」

ユノンは彼女の方へ向き、その妖麗の如き笑みを浮かべる。

「なら率直に言わせてもらうわ。
あたしにとって……あなた達はいい迷惑なの」

「なっ……なんですって……」

ショックを受け、お湯に浸かっているにも関わらず、氷づけにされたようにその場で固まった。

「あなた達がここに来たことによって地球侵略がおじゃんになったどころかその他の予定が大幅に狂った。

しかも地球へ送るため【だけに】危険をおかすこととなった。

本来なら懲罰したいところ……それほど罪は大きいわ」

「そこまで言わなくてもいいじゃないですかっ!?わたし達は好きでここに来たわけではないんですよ!!

ちょっとした事故があってーー」

《ガッ!!》

「ひいっ!」

ユノンは瞬時に、しずかの下ろした髪を無理やりグッと掴み、無理やり引きつけると卑下するような笑みに変え、しずかを見下す。

「あらっ……またあたしに逆らって。

これだけ言ってもわからないかしら、自分たちに置かれている状況を。

わたしは優しくないの、馬鹿にされたらたとえ、総司令官のラクリーマにも容赦せず制裁を与える女よ?

あなたごとき、この場で痛みつけることも可能なのよ?

フフっ……やってみる?」

「うっ…ぇ……」

しずかは今にも泣きそうだ。

ユノンというこの女性……外見は相当な美貌の持ち主だが、中身は冷酷そのものだ。

「ゆっ、ユノン、なにも子供相手にそこまで……っ」

「黙ってて。これはあたしとこの子の問題よ」

見かねた女性員が止めようと入るも彼女はそれを否定する。

「あんた達だって、こんなに仲良くして……理由はどうあれ侵入者よ。

こんなに情をかけて、それでもアマリーリスの一員？

……それとも、この子の情が移ったのかしら？」

「……っ！」

言いくるめられ、何も口出せなくなる。

今度は威嚇するかのように、眉間にシワを寄せて、睨み付ける

「あたしはこう見えて副司令官よ。またナメた口したら、両腕へし折ってやるから」

「ひくっ……」

“せっかくのお風呂に入りにきたのに、こんなことされるなんて考えてもなかった……”

しずかの涙が一滴、二滴水面に落ち、波紋が周りに広がる。

そんな彼女をユノンはため息をついた後、髪を離し、元の位置に戻

った。

「――悪かったわ。ちょっと気疲れしてて……」

「……」

「あたしもさっぱりしたくて入りに来たのにあなたを見たらさっきのことを思い出して。あなたみたいな子供相手にムキになるようじゃ、わたしもまだまだだね……」……と謝罪と思われる言葉を口にするも、表情からして本当に悪そびれてなさそうな様子だ。

“苦手な人だ”

心底そう思うのは生まれてはじめてかもしれない。

「……まだなにか言いたそうね？」

「いっ……いえっ！！」

必死で顔を横に振るしずかを見て、お見通しと言わんばかりにクスっと軽く笑う。

「フフっ……気に入ったわ。そんなに言いたいのなら……わたしの部屋にきなさい。

好きなだけ話させてあげるわ」

「ええっ！？」

「逃げようとしてもムダよ。あたしはくだらないことでも、むやむやにするのは大嫌いなの。
ーーとことんさせてあげるからお楽しみに♪
その代わり……」

「その代わり……ですかぁ…？」

何か条件をつけるつもりなのか、たかが話すぐらいで。
しかしそれはあまりにも理不尽なことだった。

「そうねぇ……あたしを納得させるようなことができなかったら……死んでもらおうかしら……」

「ええ～っ！！？」

その場で大声を張り上げてしまう。周りの女性員は全員、しずかの方へ視線を集中させる。

「……なんてね。なら、楽しみにしてるわよ……うふっ♪」

「……」

そう言い、彼女は体が熱たのか湯船から上がり、座り込む。

（やっぱり、この人はホントに苦手だわ……っ）

しずかは口を湯中に入れ、ブクブク泡を立てる。

すると、女性員数人がしずかの周りに集まり、耳元でこう呟いた。

（やるじゃない……あんた……っ）

（どっ…どーゆうことですか？）

（ユノンが自室に招待するなんて……滅多にないことなの。１人でいるのが大好きだからね）

（そうなんですか……？）

（そうだよ。確か、ユノンの部屋に入ったのは総司令官ぐらいじゃないのか……最も、説教かあんなことやこんなこと……っ）

（あんなことやこんなこと……っ？）

（教えてほしいかい？それは……）

「聞こえてないと思ってんの？」

“あっ……”

こそこそ話が気づかれ、彼女らはその場で静止する。

彼女を頭上の犬耳をピクピク動かしているのは本来誰も聞こえないような小さな音などを聞き取るためであり、これは犬の『聴覚』が優れるという特徴を受け継いでる証拠である。

……一方、のび太とラクリーマは、大浴場でいう側面の位置する壁の裏側にいた。

“コンコンコン”

ラクリーマは金属壁を軽く叩き、厚みを調べている。

「このぐれぇなら俺でも開けられるな！」

嬉しそうにしている彼に対し、のび太自身はあまり乗り気ではなく、少し挙動不審となっている。

「やめようよぉ！。いくらなんでもここから風呂場に乗り込むなんて！」

実際、彼も女性の裸、特にしずかの裸を見たいのは同感だが、今から行うのは明らかに背徳行為であり、身が引ける。

そして大好きなしずかに「のび太さんのエッチっ！」と言われてビンタされ、嫌われるのが目に見えている。

「うるせぇっ、あそこで俺に出会ったのがワリィんだ。運命だと思って覚悟するんだな！

逃げたらぶっ殺すからな？」

「けど、どうやってこんな硬そうな壁を開けるんだよーっ！」

「そんなの簡単だ。これで突貫させるのよぉ！」

ラクリーマはブラティストームをのび太の前に差し出した。

「それは確か……ブラッ……」

「『ブラティストーム』だ。こいつの性能ナメんなよ？」

《ギュイイイッ！！》

あの戦闘訓練の時と同じように義手の四指をまるでドリルのように高速回転させ、壁に向かって構えた。

「のび太、下がってろ。俺の今まで培った指テク……じゃなかった、指ドリルで正面からぶち抜いてやらぁ！」

……また大浴場に戻り、

「あれっ、サイサリスさんじゃない？」

「ほぇ～っ、今日はホントに珍しい人ばかり来るね」

今度はサイサリスもやってくる。４０歳いくかいかないかの彼女もユノンに劣らぬプロモーションを持っているが、彼女は何故かピストル型銃器を持ち込んでいる。

護身用のつもりなのか？

「サイサリスさん……銃を風呂場に持ち込んで……なに考えてるんですか……？」

「ああ？あたしゃ、何があってもいいように常備してんだ。あと、この子が大のお気に入りで……クックック……っ」

「……」

全員がドン引きしている。銃をまるで子供のように扱い、優しくスリスリ撫でる様は彼女の異常性を示している。

「……おや、お前さんはもしかして例の地球人の」

彼女はしずかに気づき、興味をもったのかそのまま寄りかかる。

「あなたは？」

「あたしはサイサリス。ここの技術開発や兵器開発を担当してる女だ」

「あっ、あたしはしずかです」

「しずかかぁ。まあ、地球までの短い期間だがゆっくりしていってくれ」

「ありがとうございます」

彼女は笑顔で応える。どうやら『この人は良い人みたいだ』と安心した。

《カチャっ！》

「は？」

サイサリスはニヤニヤしながら持っていた銃をしずかの額に押し当てた。

「ワリィが、これがちゃんと発砲するかどうか的になってくれ。最近使ってなかったからな」

「～～～～～！！」

いきなり銃口を向けられ、しずかはガタガタ震える。

さっきまで良い感じで喋っていたのはなんだったかと思う。

「わははは っ、冗談だよ！！どおだ、あたしのとっておきのジョー

クは？」

「……」

“この人……おかしい……っ”

ユノンと同じく心の底からそう思うのだった。

「……？」

揚がろうとしていたユノンの足は止まり、耳をピクピク動かしている。

“……ギギギギギギギギっ！！”

彼女の耳からは金属が削られているような、嫌な音が聞こえてくる。しかも、段々と……その音が大きくなっている。

「なっなに、この音……？」

「ううっ、なんなのこれぇ？」

浴場内に居るもの全員にも聞こえるようになり、その不快音にほとんどの者が耳を押さえている。

《ズボォ！！》

“　！　？”

壁から小さいドリルが計四本、飛び出し回転が止まる。

そのままゆっくりとそれが引っ込み、約１０秒くらい静かになった時、

《バチ……バチバチバチっ！》

“ひいいいいいっ！！”

その四本の穴が青白く細小の光線が一定の距離を保ったまま、放出され、その穴から徐々に半円を描くように壁に焼き切っていく。

《ガァン！！ドガシャ！！》

半円に焼き切った壁の一部がゆっくり倒れ、大きな空洞が発生、湯気が突き抜ける中、見覚えのあるガタイのいいシルエットが登場！！

「これはこれは入浴中の女性陣の方々。遊びに来たぜ！！」

ついにラクリーマが大浴場に堂々と乗り込む。その顔の表情からは、いかにも『してやってぜ！』的なモノを感じさせる。

“キャアアアアッ！！”

女性員はとっさに自身の秘部や胸を隠し、脱衣場へ逃げようとするが。

「うへへっ、色っぺぇ体しやがって……のび太行くぞ！！」

「いえええっ！！」

彼はのび太をグイグイ引っ張って入っていく。

「……っ！！」

「おいおいのび太、鼻血出すの早すぎんぞ！！」

当たり前だ！

いくらなんでも小学生ののび太にはあまりにも刺激が強すぎる。

……しかし、そのにやけた顔を見るかぎり、まんざらでもなさそうだ。

「よおユノン」

「……っ！！」

ラクリーマはのび太を離し、目的であるユノンを発見し、彼女に近づく。

《パシッ！》

ユノンはとっさにまた平手打ちをかまそうとするが、さすがに手を読まれていたのか、いとも簡単に止められる。
彼女はラクリーマをこれでもかというくらい睨み付ける。

「おう、お前の超絶スタイルの裸を見にきたぜ」

「あんた……ここまで変態だったとは思わなかった……っ。サイテーよ！！」

啖呵を切るが、彼は全く何も思っていないのか笑みを絶やさない。

「まあそんなに怒んなや。せっかくのべっぴん顔が台無しだぞ？」

「それバカにしてんの！？」

「バカにしてねえよ。お前はその『女らしくねえ』とこを何とかすれば素晴らしい女なんだがな……。

まあっ……その怒った顔もかわいいがな♪」

「……っ」

すると彼は右手でユノンの濡れた髪を掻き分けて優しい顔で見つめる。

「ユノン、もし俺の恋人だったら……オマエは俺に全てをさらけだせるか？」

「なあっ！？」

彼女はカァッと顔を赤くする。

寝言で言っていたあの言葉がまたぶり返す。

ラクリーマはもしかして――？

「かっ……からかってんじゃないわよぉ！」

「仮の話だ。どうなんだ？」

「あっ、あたしは……っ」

なんだろう……っ、この質問。どう答えれば良いのだろう。

彼女は聞かれたことのない質問内容に戸惑いを隠せない。

《カチャ！》

「ん！？」

ラクリーマの後頭部に何か突き当たっている。

「ラクリーマ、ぶっ倒れたばっかでよくそんなにはっちゃけれるたぁ大したもんだ」

「サイサリス……っ、いたのかよ……っ？」

後ろでは銃を構えたサイサリスと怖い顔をした女性員達が手をコキコキ鳴らしている。

「いやいや、みなさん……っ。随分と恐い顔でいらっしゃる。で、これからどうするおつもりで？」

サイサリスは眉間にシワを寄せて銃をグイグイ突きつけ、全員でラクリーマを囲む。

「さあて……、全員の入浴を邪魔した挙げ句にあの壁を破壊した多大なツケを払ってもらおうか？」

彼はこんな絶対絶命のピンチにも関わらず、不敵な笑みを浮かべている。

「クックック、どうやらみんな、俺に抱きつきたいらしいな。非常に嬉しいが、抱きついてくるのは一人で十分だあ！」

ラクリーマは高くジャンプし、その場から逃げようとするが、

《ガアン！》

「ギャン！」

サイサリスは逃がすかと持っていた銃をラクリーマにめがけなげ、後頭部に直撃しそのまま落下。

「全員、ラクリーマを捕らえて罰を与えろ！！」

“了解！！”

「ちょっ、何する！？やめっ……っ！」

《ガンっ！ズコっ！！バキッ！！ドグッ！》

その頃、のび太は……。

「のび太さんのエッチ！！ヘンタイ！！もぉ大っキライっ！！」

《バチイっ！！》

「ぶへっ！！」

彼自身は悪くないのに同罪と見なされてしずかからキツい制裁を与えられていた。

「しっ……しずかちゃ～んっ！！」

すぐに脱衣場に去ろうとする彼女に彼は説明しようと呼び止めようとするが、彼女はカンカンなのか全く振り向こうとしない。
のび太は落胆し、落ち込む。

ラクリーマも全員から制裁され、その場でノビている。
女性員は気が済み、そのまま脱衣場に戻っていく。
無論、サイサリスとユノンもである。

「……」

「……」

その場に残された二人をすっかり冷えきった風呂場の冷たい風が彼らを包む。

その後、二人は……壊した壁の修理をするはめになったのは言うまでもなかった……。

◇ＰＡＲＴ．２１　乱入（後書き）

ラクリーマさん、のび太、ごっつぁんです（笑）

◇ＰＡＲＴ．２２　のび太とラクリーマ（前書き）

今回は二人の対話だけです。

◇ＰＡＲＴ．２２　のび太とラクリーマ

壁の修理が終わり、ラクリーマとのび太の二人はプラントルームの中央にあるベンチでたそがれていた。

ラクリーマは傷だらけでまだ制裁された所が痛いらしくスリスリなでている。

「あいつら……っ、ただ風呂場に入ってだけで本気でボコりやがって……手加減てモンを知らねえのか？」

その横ではのび太はため息をついて酷く落ち込んでいた。

「ああっ……、しずかちゃんに嫌われちゃったかも……っ」

ラクリーマはそんなのび太を、まるで悪気がなかったかのようにニカッと笑う。

「いい経験になったじゃねえか。なかなかよかったろ？」

「よかったじゃないよっ！！僕は何にも悪くないのにしずかちゃんにビンタされるし、壁を修理させられるハメになるし、どうしてくれんのさぁっ！？」

「うるせぇ！てめえも何だかんだでハナ血噴き出してニヤついてたクセに言える立場かぁ！」

実に情けない。下らない口論へ発展するが、元はと言えばラクリー

マが言い出したのが原因である。

「こんなしょーもない口喧嘩してても仕方ねえや。これで止めにしようじゃねえか！！」

「ちょっ、それで終わらすつもり！？」

「うるせえなぁ。なら、『俺がワルかった。許してください』。これでどうだ？」

「くぅ……っ」

その謝罪の言葉からは全く誠意が感じられない。のび太は納得できるハズがなかった。

「本当にしつけぇヤロウだな。ならおれがしずかに謝っといてやるよ。それでいいだろ？」

「……わかったよ……っ」

渋々、承諾する。

ラクリーマは溜め息をついてのび太を変な目で見つめる。

「けっ、こっちはお前らを地球に無償で送るってのに、なんだその態度は？」

「なっ！？」

「あ～あっ、ユノンの言う通り、もう地球に送んのやめよっかなぁ？」

彼の約束を放棄する発言に、のび太はその場で慌てふため始める。

「じょっ、冗談はやめてよぉ！その時はどうなるんだよ！？」

「まあ、おめえらはここにいても役立つことしなさそうだし……まあ死ねよ？」

「！　？」

顔色が一瞬で真っ青に。いくらなんでも無茶苦茶だ。

「クカカカッ！！冗談だよっ！」

「……」

高笑いするラクリーマに対して、のび太は顔を膨らまして冷ややかな視線を送った。

「しかしなぁ、ただ送るのもこっちには全く利益ねえし。条件つけようか！」

「条件……？」

そう言うと、ラクリーマは腕組みをして考え込む。
一方、のび太の方はあまりいい気じゃなく、心配そうな顔をしている。

もともと地球侵略を計画していた極悪組織、アマリーリスの頂点に立つ男だ。
とんでもない条件をつけてくる……のび太はそう思っていた。

……一分後、

「よっしゃあっ、決まったぜ!!
お前らに2つの約束を果たしてほしい」

ラクリーマは顔を上げて、のび太の方へ向くと不敵な笑みを浮かべる。

「2つの……約束……なっ、何？」

「まずは第1……っ」

のび太は息を飲む。あからさまに無理なコトを言われたらどうしようか……。

「……俺はともかく、あいつらに地球のうめぇメシ、食わせてやってくんねぇか？」

「え……っ？」

「どうした？無理か？」

「そっ、それでいいの？もっとメチャクチャなコトを言われるかと思った」

「ああっ、地球に興味持ってる奴は沢山いるからな。そんかわり、たらふく食わせてやれよ、あいつら大食いだからなっ」

意外にものび太にでも出来そうなことだった。ただ人数分的には無理があるが、そこはドラえもんの道具を使えばなんとか出来そうだ。

「もうひとつは……俺個人の頼み事だ」

「ん？」

「地球の花や、植物を少し分けてくれ、どうだ？」

「どっ、どうして？」

ラクリーマは周りに元気に生い茂っている花や植物を見渡す。その時の顔は普段の彼からは全く考えられないような穏やかな表情をしていた。

「地球の植物を、ここの仲間に加えてやりてぇんだよ。別に地球の生態系を崩すほど持っていかねえからよ？」

「……」

「この二つを果たすと約束すれば、お前としずかをちゃんと地球へ送りかえす。どうだ？」

のび太はそれを聞いて段々奮いだち、笑顔になり、そして得意満々な表情とラクリーマをグッと見つめた。

「わかったよ！！
それでいいなら僕にまかせて！！

とびきりのおいしい料理食べさせてあげるし、かわいい花を探しだして渡すよ！！」

「ほぉ、それは楽しみだな。期待してんぜ大将！」

ラクリーマはのび太に向かってとびきりの笑顔でガッツポーズをする。

この二人は生まれは違えど、端から見るとまるで仲のいい兄弟だ。それは誰が見ても承認するだろう。

「……ラクリーマを見てると毎日が楽しそうだね」

のび太はそうボソッと口にする。

「本当にそう思うか？」

「うん」

「……それはありがとよ」

するとラクリーマはズボン（というよりタイツ）のポケットに手を

突っ込み、姿勢を正すと上を見上げる。

プラントルームはいつも明るいわけではない。

ちゃんと植物が育つように、朝夕夜になるよう照明が設定されていて地球さながらの朝焼けや、夕暮れが再現できるのである。

今はちょうど夕方あたりで、この室内は夕焼け色に染まっていた。

そうした中、ラクリーマは静かに口を開く。

「けど、それは違うな」

「えっ、違うの？」

「ああ、こんな楽しくできる時間はほんの僅かなだけだ。

俺らは『様々な銀河、星々、たまに他の種族の宇宙船を巡っては侵略、略奪』を繰り返す、いわば海賊行為をやっている。

ほぼ毎日はそれに費やしてるっていっても過言じゃねェぜ？」

「……」

「大体な、今はお前らを地球に送るためだけに動いているからこんなに自由な時間があるが、俺とユノンはいつも徹夜してまで侵略や交戦の作戦を練っているから、寝てねえんだぜ？」

「……徹夜してまで大事なことなの？」

「前に言わなかったか、これは仕事、生活のためだって？
やるからには当然、効率のいい方法を考えねえといけねぇし、低消費、最短、仲間の犠牲を出したくねぇしな？」

「……」

実際、のび太はあまり想像できていなかった。
そういう行為をしたことのないためか、それとも単に理解出来なかったか、あるいは……。

「てかさ、侵略してるってことは住んでいる人達の物を奪ったり殺したりするんでしょ？
なんか……言ってることが矛盾してるような気がする」

「そんなの敵は敵、味方は味方だろうが。
俺ら以外にも同じ性質の奴らは宇宙には、わんさかいるぞ」

「けどさぁ……」

ラクリーマは息を入れ直して、顔を下げているのび太の肩に指で叩

いた。

「あのなぁ……、お前らは侵略はやってはいけないと思っているだろうが一概に全て悪いワケじゃねえよ」

「……どうゆう……コト？」

「教えてやろうか。『移民』だ」

「移民？」

彼に自信げな表情でそう言った。

「……この宇宙にはな、異常気象、天変地異、戦争……何らかの理由で故郷の惑星をなくし、宇宙をさ迷っている種族がゴマンといるんだ。

俺らは惑星を移住する気はない、遊牧組織、簡単でいう海賊みてぇなもんだ。

“俺らが侵略し、根こそぎ取る。しかし惑星自体は無人になり、肥やしとなる。そしてさまよっている移民種族がその惑星を見つけ、移住する”。

――つまり、俺達はそいつらが移住できるよう、一役買ってるってワケだ」

……なるほど、確かに一理ある考えだ。

しかし、それには数々の問題が出てくる。

“そのために狙った惑星に生存している者、全てが犠牲になってもよいのか？”

“引っ越してきた移住種族が住む惑星をもう襲わないと言いきれるか？”

……などなど、挙げるとキリがない。

「異星人が住める星と、住めない星。その惑星環境に適応する種族と適応しない種族。
世の中、そんなのばっかだ。
だが、こんな世界ほど楽しく生きていけるもんだ！」

と、大声でそう解釈する。
なんと独特の考えを持った男なんだ、ラクリーマは。

「……コーヤコーヤ星を思い出しちゃった。
ロップル君やチャミー、あとクレムちゃんやモリーナさんや住む人達は今、元気かなぁ？」

コーヤコーヤ星。以前、のび太達が行ったことのある『ガルタイト』と呼ばれる鉱石が採掘できる開拓途上惑星で、そこに移住した少年、ロップルとそこに住む人々と仲良くなり、友情を育んだ。

そしてそのガルタイトを狙う悪徳企業『ガルタイト鉱業』の悪巧みにより一時、惑星崩壊の危機に遭うも、のび太達の活躍により、その危機は救われたのだった。

そう言えば、ロップルたちも他の惑星から移り住んだ移民種族だ。

「ほぉ、コーヤコーヤ星を知ってるのか？地球から相当離れた惑星だぜ？」

「えっ、ラクリーマ知ってるの？」

「ああっ、ガルタイトが採れる惑星だろ？行ったことはねえが話は聞いてる」

するとのび太はおそるおそる彼にこう質問した。

「……まさか、コーヤコーヤ星を襲うワケないよね？」

「へっ、襲わねえよ。あんなとこ、襲ってもなんの利益になんねえし。ガルタイトなぞ、せいぜい『Ｂランク』のエネルギーしかならねえからな。ニュープラトンさえあれば事足りる」

「ニュー……、なんかよくわからないけど……襲わないんならよかったぁ……」

のび太は安心し、大きなため息をついた。

しかし、

「だがな、今後、俺らに一目置かれるような発展をすれば……侵略するかもな」

その言葉が、のび太の一瞬で顔色を変えた。

「やっやめてよ!!あそこに友達がいるんだよ」

「……友達だと?」

……のび太は彼に教えた。コーヤコーヤ星のことを、ロップルたちのことを、全てうち明かしたのだ。

「……そうか」

「……」

二人の会話は止まり、静かになった。
ただ聞こえるのは、機械によって植物に与える水を振りまいている音だけだった。

「ワリィが……たとえ友達がいようが、そこまでは守れねぇな」

「ええっ!?どうして!?」

「こっちにもやり方ってもんがある。お前にどうこう言われる筋合いはねえ。
所詮、全種族は繁栄したらいつかは必ず没落する。そんなもんだ」

「ーーーーっ!」

のび太は、今にも泣きそうな顔をして彼にこれでもかというくらいに睨み付けた。

「なんだ、文句あるのか?」

「……くくっっ!」

それとは逆に、ラクリーマは平然とした態度をとっている。
のび太はさらに怒りを募らせるのであった。

「……なら、取引すっか？」

「……取引？」

突然、ラクリーマはのび太の右腕を掴み、ベンチに押しつけた。

《ギャン！！》

「！　！」

鈎爪を突出させ、その右腕へ向けた。
銀色の光を放った鋭い爪が照明によってさらに輝きを放っている。

「てめぇの右腕を切り取って俺に差し出せば、コーヤコーヤ星には近づかねぇと約束する。これで手を打とう」

「ええっ！？」

のび太は目が飛び出るほど、驚愕した。

「右腕が嫌なら左腕、それも嫌なら片方の目ん玉か足でもいいぜ。
それでも嫌ならしずかに代わってもらう」

「むっ、むりだよぉ！！」

ラクリーマはまるで鬼のような形相で、彼に悪夢のような選択を押しつけた。

「それでも嫌なら、俺を今すぐ殺すか。ーーある意味そっちのほうが手っ取り早いか。
最も、その場合は俺もお前を容赦なく殺しにかかるけどな！」

「ん……ああっ……」

「俺はこのまま待ってやる。時間はいくらでもあるから好きなだけ考えろ。

ちなみに逃げたらどうなるか……わかってんだろうな？クックック……っ」

ラクリーマはニヤニヤ笑いながら鉤爪を構えている。
一方、のび太はあまりの恐怖でガタガタ震えている。

ーー決められるワケがない。

どっちを転んでも地獄だ。自分が苦痛を食らうか、もしくはしずか

に……いや、これは男として　、いや人間として最低な行為だ。

殺そうにも、その時はラクリーマは本気で襲いかかってくる。
あの訓練で見た通り、この男の戦闘能力は桁違いだ。
射撃を抜いたら能力など軒並み以下であるのび太には天と地が転ばない限り、勝ち目はない。

逃げたら間違いなく……。

もう完全に八方塞がりな状態である。

「お前、そんなに大切ならここまでする覚悟があるんだろうな?
さぁ、どうする?俺はどちらでもかまわんぞ」

彼の眼を見ると、冗談で言ってるようには思えない。

『本気だ』

痛烈に感じさせる。

「へっ、ただ五体のどれかを捧げるだけで、その友達はおろか、コーヤコーヤに住んでいる奴らの存亡の脅威が一つ減るんだ。
そう考えたら安い取引じゃねえか?

もし俺がお前の立場なら、喜んで右腕を差し出すがな」

見せられる度量の違い。

子供だろうが大人だろうが関係ない。

「きっ……決められない……よぉ！」

「……」

のび太泣きべそをかきながらそう回答した。

「……フフッ、こえェだろうなぁ。まだ子供のくせに身体の一部を失うかもしれねぇなんて……考えられねぇだろうな。

エラソウなこと言ったが正直、俺ならこんな馬鹿な取引は降りるぜ」

ラクリーマは取り押さえていたはずの右腕を離し、鈎爪も引っ込ませた。

「あれ……やめるの？」

「こんなんじゃあ全く決まらなそうだ。もういい」

「じゃ……じゃあ……？」

「もちろん、取引不成立だ。何にも変わらねえぜ」

「ううっ……」

彼はまた泣き出してしまう。ラクリーマも彼の泣き顔を見て、とても情けなく感じるのだった。

「ハァ……俺はこんな泣き虫に早撃ち負けたのか。情けねェぜ」

「……」

今度はどんよりとした空気が二人を包む。

しかし、ラクリーマにとって、そんな雰囲気が耐えられないのであった。

「あ〝ーーっ、こんなしみったりぃ話はやめようぜ！！

おっ、そうだ。お前らに聞くの忘れてたが……どうやってエクセレクターに乗り込んだんだ？」

「それは――――っ」

のび太は彼に経緯を全て話したーー。

ラクリーマは非常に興味津々な表情で聞いていた。

もう深紅の瞳がさらに輝きを放っている。

「未来から来たロボットかぁ。そりゃあいい、俺もぜひ会ってみてぇな！

のび太、地球に寄ったらぜひ会わせてくれ！！」

「うっ、うん……」

幾分の年下であるはずののび太が恥ずかしくなるほど、子供のような笑みではしゃぎまくる。

しかし、これこそが本来の彼の姿なのである。

「そのドラえもんてのは、友達なのか？」

「うん。ケンカしちゃうこともあるけど、僕の大切な親友だよ！！」

のび太のはきはきした声からは、嘘ではないことを物語っていた。

ラクリーマはそんなのび太を何か暖かい眼で見つめる。

「……ラクリーマ？」

「……」

……

５年前、こと座Ｍ１２宙域、惑星サミドール。まだ宇宙海賊だった頃、

侵略過程でリバエス砲を惑星に撃ち込んだが、出力を間違えて、惑星の中心核に異常を与えてしまい、惑星崩壊の刻が迫っていた。

しかし宇宙海賊のキャプテン、エルネスは侵略はすれど、惑星崩壊までは望んでいなかった。

彼は考えた答えは、責任をとるべく自らニュープラトンの膨大なエネルギー爆弾を直接、中心核に撃ち込み、安定させることに決めたのだが……。

「エルネス、待て！

なぜ関係のない惑星一つ如きで命を捨てようとするんだ！？」

「何故かって？

……惑星の質量を計算したにも関わらず、リバエス砲の出力を間違えるようじゃあ俺はもう終わりよぉ。なら尻を拭くのは俺だ」

「バカなことを言うな！

お前は宇宙海賊には必要な人間なんだ！

それに他にも方法が……」

「ふふっ、俺の後継者ができたから俺は行くんだ」

「……後継者だと？」

「おうよ。ラクリーマ、お前がやるんだ。部下を……仲間を、ランを大事にしろよ！」

「……」

……

「……ラクリーマ？」

「おっ、おおっ！？どうした？」

のび太の呼びかけに反応し、慌てて返事を返す。

「ぼぉーっとしてたけど、どうしたの？」「いっ、いやなんでも――。そろそろ俺は仕事に戻る。お前はまだ居たいならいろ」

「うん。そうする」

ラクリーマは立ち上がり、のび太に背を向け、歩き始める。

「のび太?」

「え?」

彼は顔を振り返り、歯を剥き出しにして笑みを浮かべながらこう言った。

「取引不成立といったが、終了とは言ってねぇからな。その気になったら俺んとこにこい。
その時はまた取引してやる」

「なっ!?」

「あと、俺を殺しにかかるのもアリだからな。
実弾しか効かねえから部下から銃を借りるなりして……いつでも殺しにこい。

俺は逃げも隠れもしねえからよぉ」

「……」

何をここまでこだわるのか、彼には全く理解できなかった。
本当に真理は全く図りしれない。

しかし、

《ズ　ド　オ　オ　オ　ッ　！　！》

「うわあああああっ！」

「なっ、何事だ！！」

突然、艦内に激震が発生する。

《ヴィーーッ、ヴィーーッ》

“緊急事態、緊急事態。各員戦闘準備！
総司令官は直ちにオペレーションセンターへ集合、繰り返す……っ”

サイレンと共に放送が入り、艦内に緊迫が走る。

ラクリーマはのび太をそこに置いて、すぐに全速力で走り出した。

（敵か……もしくは何かが衝突したか……？）

一体何が起こったのだろうか。しかし、彼はこんな状況にもかからわず笑っていた。

まるで何か楽しみ一つを見つけたかのように。

だが、今はそんな暇などない。

――彼はひたすら目的地へ走っていった。

◇ＰＡＲＴ．２３　アンノウン（前書き）

今回は宇宙戦闘です。今回は戦闘描写は独自の解釈ですに注意しておきます。

◇ＰＡＲＴ．２３　アンノウン

ラクリーマはオペレーションセンターに到着し、すぐに状況を確認する。

「どうした！？」

「敵です。ワープホールから抜け出した瞬間、攻撃されました。……どうやら、ワープを感知して待ち伏せしていたようです！」

モニターには、エクセレクターの前方軌道上から右舷方向にかけて、数千キロ……いや、数万キロ以上ある宙域に、まるでアリの大行列のように、おびただしいほどの赤く蠢く物体が配置されているのが確認できた。

「敵はエクセレクター直線上から右舷方向かけて距離８００００！！

データにないアンノウン。

……どうやら巨大なバクテリア生命体群のようです。

中央に存在する本体と思われるポイントから多大なエネルギー反応確認。

質量は……ランクＡ以上！？」

「……敵さんもなかなかのモンを持ってんな。被害状況は？」

「艦首及び、前右舷部、底に奴らが数千匹へばりついています！！」

「……さっきの衝撃もこいつらがぶつかってきたせいか……。てことは、奴らはエクセレクターの装甲を喰い破る気だな」

ラクリーマはモニターを見ると、全長２０～５０メートルはある、蛭とは似て非なる異形な姿をした赤く身が軟体そうな生物どもがその場所にざわざわ蠢いている。

どうやら持ち前の牙、体内で形成される強力な溶解液を駆使して、艦の頑丈な装甲を破壊しているようだ。

「アンノウン、徐々に艦の甲板を破壊しつつあります！！」

「光子ミサイル、全門発射用意」

エクセレクターの両舷、下方に搭載されている砲門を一気に展開。

《カ　ッ　ッ　ッ　！　！》

計６０発の青白く眩い光を放つ、直径１ｋｍ以上あろう巨大なミサイル…いや、光弾が一斉に発射され、へばりついていた生物体も巻き添えを食らい消滅。

光弾は遥か先にいるアンノウンの大群へ伸びるように行き、

《ボボボ……っ！》

着弾。光弾はまるで球体のように膨張し、それが広範囲を包むように広がった。その生物達と共に。

「……一気に反応が消滅しましたが、数が多すぎてあまり効果がありません！

しかもまだ装甲にへばりついている反応も多数……ああっ！」

「どうした！？」

オペレーター達はモニターとセンサーの反応に驚きふためいている。

「消えたはずの反応がさらに、本体を中心に数万単位で増加しました！」

「なんだと？じゃああの本体が……産み出しているということか！？」

「間違いありません」

「やっぱ光子ミサイルだけじゃ無理か。対艦レーザーは……前方しか狙えねえし範囲も小さい。

こうなったら、リバエス砲発射用意！！直接本体に撃ち込んでやる！」

「了解、ＮＰエネルギーを第一反応炉から主砲内増幅炉に送入。収束開始します！！」

エクセレクターの特徴的である前部の女性の顔が一気に真っ二つに

割れて開門。
その中から一体口径何十Ｋｍあるのかと思うほどの、長方形状の超巨大な砲身がゆっくりと姿を現した。

「セーフティ解除。出力は……」

「最大出力だ。奴らに目にものを見せてやる！」

ラクリーマはとっさに司令塔に移動し、中央部に行くと、淡い青色の光を放つレンズが垂直に出現していた。

そのレンズに手をおいて、巨大な３Ｄモニターを確認する。

「ターゲットロック。目標、アンノウンの本体及び、リバエス砲射線上の大群！」

モニターには、正面から行列のようにこちらに向かってきている。
あと２０キロほどでエクセレクターに到着しそうだ。

「リーダー、アンノウンの大群がこちらに向かってきています！！」

「まかせろ、本体ごと消し飛ばしてやる！」

砲門内にはまるで虹色のような鮮やかな光が収束し、いまにも暴発しそうだ。

「出力、７０、８０、９０、１００％」

ラクリーマは全力でレンズを垂直に下へ押した。

「リバエス砲、行くぜ！！」

“リバエス砲、急遽発射中止”

《だあああああっ！！》

全員がその場でずっこける……。

シリアスな雰囲気が一気に崩壊してしまった。

「誰だぁ、ミスった奴はぁ！？」

「へへっ、すんません。手を滑らせて中止ボタン押しちゃいました……。」

「バカヤロー、こんな時にボケかましてんじゃねえ！！

お前、あとで俺と組手な！」

「ええっ！？」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！！」

気を取り直して。

「出力、１００％」

「リバエス砲、発射ぁ！！」

そして、

《ドギャアアァッッオオッ！！》

砲門から一直線状の微粒子の嵐が、拡散するかの如く宙域を包み、襲う。

それは１光年先からでも肉眼でも捉えられるほど。

例えると地球から見る流星のよう――。

「目標到達まで、あと数十秒――」

射線上のアンノウンもその粒子の前には跡形もなく消滅、このままいけば、敵の本体に直撃だ。

しかし、

「リーダー、本体の前方にまた破格の数の反応が出現。十万はゆうに越えます！！」

「なにぃ！？」

モニターには、まるでサザエのような巻き貝で全長、数百Ｋｍを誇る本体から、一秒間に何千、何万という数の『子』が吐き出され、周辺に集まっていく。

まるで城を防護する砦壁のように。

《……》

直撃した。

確かに一瞬で多大の反応は消滅したが、壁の厚さの方が勝ち、本体の直撃にはならなかった。

「主砲、残念ながら本体には届きませんでした」

「あいつら……とんだ食わせモノだ。惑星の半分以上を持っていっちまうリバエス砲が効かねえなんて。おもしれぇ……っ」

「リーダー、何笑ってるんスか！」

レクシーの恋人ジュネが、通信を通して彼にこう伝えた。

「あと数分後に、へばりついている大量のアンノウンが艦内へ侵入します。

どうします？

戦闘員達は『スレイヴ』、『ツェディック』に搭乗、待機させてい

ますが、出撃させて駆逐させますニャ？」

「……無理だな。
あいつらは最低２０m以上はある。約半分程度しかない大きさの二機では間違いなく捕食されてしまう。

といっても、このままでは――。」

「――副司令官？」

そんな中、ユノンも先ほど到着し、司令塔へ向かう。
こんな危機的状況にも関わらず、全くと平然な態度をしている。

「よう。お前、来てくれて助かったぜ！
困ったことあんだけどな――」

「……」

しかしユノンはラクリーマを全く見ようとせず、モニターを確認する。
いつも同じ態度だが、明らかに様子がおかしい。

「――お前、まさか風呂場の件で怒ってる？」

「……」

しかし、彼女は全く無反応だ。ラクリーマはそんな彼女を見て、ムスッとなった。

「けっ、そうですかぁ？総司令の問いかけにも無反応ですかぁ？勝手にしやがれ！！」

そうやって私情を持ち込まれるほどの余裕はないのに何をやっているのか……。

ともかく、このままではエクセレクターは危険だ。

「……解決策は、直接、本体に攻撃する以外他ないわね……。しかも近距離で……」

「……近距離で本体に……っ」

彼女が発した言葉がラクリーマはある方法を思い浮かぶキーワードとなった。

「……そうか。あれを使えってことだな！！」

彼はレンズに手を置く。

「艦内にいる者につぐ。衝撃体勢をとれ。本艦はこれより――」

内容を聞いた艦内全員が、すぐさま衝撃に備え始める。

オペレーションセンターでは、各員がそれぞれ作戦に対応した行動を始めた。

「リーダー、残りの二人はどうするんですか？」

「本形態は俺が操縦する。第2形態はユノン、第3形態はジュネ、やってみるか？」

ジュネはメロメロとしたような態度をとった。

「ウフ♪リーダーのご指名とあらば、行きますニャァ♪」

「よっしゃあ。久々に大暴れしてやるか！！」

……そして三人はあのレンズの場所に集まる。
今度はラクリーマが使っていたレンズが3枚に増え、それぞれ表面に手を置いた。

「まずはジュネ、お前がへばりついてる奴と向かって来ている奴を全員蹴散らせ。

そのあとユノン、どうするか分かってるだろ？」

「……」

「ちっ……作戦確認までシカトかよ。まあいい、なら作戦開始だ！」

三人は息ピッタリにレンズを同時に押し込んだ。すると、三人の周りがＮＰエネルギーの素粒子の包まれていく――。

「――それぞれ、配置したか？行くぜ！」

「……」

「いつでもいいですニャ♪」

三人はそれぞれ別の場所に移転する。

それぞれ共通しているのは、三人の周りに見えるのは、手前に各一人ずつのレンズのついた台……、操縦幹の役割を果たすデバイスがあるだけで、果てしない宇宙空間が広がり、周りにあのアンノウンの姿が視界の至るところに映っている。

ジュネはさっそくデバイスに手を置き、遊ぶようかのにウキウキした態度でこう叫んだ。

「エクセレクターチェンジ、タイプ3。行くわよぉ♪」

《ズ　ズ　ズ　ズ　ッ　！》

なんと言うことだろう。
エクセレクターの前部、中央部、後部が均等に切り下がれたように三頭分に分離を開始したのだった。
それと同時にくっついていたアンノウンも切り離しと同時に無理矢

理剥がす。

瞬時に、各分離部の先がアニメーションさながらのモーフィングで別形態へ変形、
さらに後部、が一番前に先行し、続いて前部、後部とまた直列に並び、そして！

《ーーーーーーーー！！》

三機合体。くっついていたアンノウンの大半は、サンドイッチのように挟まれ、無惨に潰れまくる。

ホントに……常軌を逸脱したアクションである。

前部と後部がそせぞれ前後にお折り畳み、前頭部に最初と打って変わって、今度は怒りに狂った顔をした男の顔を露呈し、変形と言う過程が終了する。

「ふふっ、ごめんあそばせ……っ」

その姿は例えるなら巨大な亀。どこから攻撃しても死角のない難攻不落な要塞を思い浮かべる。

ここまで至るまでにかかった時間は数分間。
この全長を考えるとあり得ないほどの速さである。

「エクセレクター、全方位空間上のアンノウンをターゲットロック！」

艦の全装甲のありとあらゆる場所から砲門らしきを穴が一気に展開した。

「反撃開始ぃ♪」

《ド　ワ　オ》

全ての砲門からＮＰエネルギーの粒子レーザーを発射。
本艦を取り巻く広範囲の宙域を光線の嵐で埋め尽くした。

「うふ～いい気分ニャァ♪虫けらを一掃するって！」

この一撃で周辺と向かってきていたアンノウンが一気に消滅した。

“よっしゃあ、次はユノン。お前だ！”

“……”

ユノンはあいからわず平然としている。
レンズをぐっと掴み、ゆっくり目を閉じる。
ーーそして重い口を開いた。

「エクセレクター……タイプ２へと移行する。各員衝撃に備えよ」

先ほどと同じように分離、合体へ移行を開始。元形態の後部が最前に移動し、また直列に並んだ。

「……」

合体。瞬間、真空状態である宇宙空間が震えている。それはエクセレクターに秘めている膨大なエネルギーが放散しているのである。

ーーそのエネルギー量は、惑星どころか太陽系を消し飛ばすほどのーー

前方に丸い砲門、両舷には空間をも切断しそうな巨大な羽翼を誇る怪鳥の姿だった。

「ーーこれより、アンノウン本体に突撃する。全エネルギーを　前方に収束ーー」

エクセレクターはついに前方へ　発進す。
その推進力は最初の形態と比べると格段に高かった。

「本体を倒せばもう子供は産み出せない。守っている子供ごと全て潰す……」

前方の砲門からエクセレクターを包むようにエネルギー状の青い幕を展開、さらに加速を増した。

一方、本体の子供は危険を察知し、一気に集まり、自分の周りを取り囲み始める。どうやらあの生物は攻撃本能だけでなく、母を守る『防衛本能』も兼ね備えているようだ。

子供達で構成された壁は、さらに厚みを増し、まさに鉄壁と化していた。

「アンノウン密集地帯に激突するまで、あと２００……このまま突貫する」

両者激突まであとわずか！

言葉に表すなら、《対決！！最強の矛ＶＳ最強の盾》である。

そして、

《ド　ガ　ガ　ガ　ガ　ッ　！　！　！》

ついに激突。

瞬間に子供達はエクセレクターの突撃により、粉々にされていく。

それは土を掘り進むようにドリルのようだ。

あまりの強引さの前に、さすがのアンノウンも驚いたのか、さらに子は前に出すが、勢いに乗ったエクセレクターには歯が立たなかった。

“よっしゃ、ここからは俺の出番だ！！”

奥に潜んでいた本体の姿が表し、前方へ豪快に吹き飛ばす。

やっとお待ちかね、あの男の出番が回ってきた。

《エクセレクタァァァチェェェェンジっっ！！タイプ、ワァン！》

ーーアンノウンどころかその宙域全土を震撼させるその声（ボイス）はまさしく、ラクリーマ・ベイバルグのものだった！！ーー

《ガシュイイイッ！！》

もはや説明不要。

合体し、初期の形態へ移行、すぐさまリバエス砲を発射へーー。

「グワハハハッ、死ねぇぇっ！！」

《ーーーーーーー》

直後に放たれた粒子の塊がついに本体と残りの子供を包み、分子レ

ベルまで分解し始めた。段々姿、形が無くなっていく……。

【かけら一つ残さず、根絶やしにする。我々の邪魔をする者はどんな相手でも】

「アンノウン……、完全に消滅しました」

“よっしゃあ！！”

ついに倒すに成功したアマリーリス。
艦内の者は全員歓喜した。

「ふう……やっと倒したな。ちょっとヤバかったな今回……っ」

“あたいはいけると思ってたよ。なぜなら、副司令とリーダーが一緒なら負ける気がしニャいからねぇ。

……にしても、リーダーの叫び声は惚れ惚れするねぇ♪”

「ありがとよ、ジュネ。
なあ、ユノン。よかったろ？」

“……”

しかし、相変わらずユノンは無反応だった。
モニターを見ても、そっぽ向いている。

「けっ……、ホントに乗らねえ女だぜ……」

“ん？リーダー、大丈夫ですか？”

モニター越しを見ると、ラクリーマが苦しそうに胸を押さえている。

「ああっ…、叫びすぎてキツくなっただけだ。心配すんな」

“……っ”

ラクリーマはそう言うが全員が心配そうに見ている。
ユノンはあいかわずな態度をしていた……。

一方、のび太としずかは……。

「「うへぇ～～、気持ちわるい～～っ」」

のび太はプラントルーム、しずかは自室で目を回しながら倒れていた。

あんなにガッタガタに艦内が動き回れば誰でもキツいのはわかっているのだが、分離、合体、変形すること自体、知らない二人に衝撃体勢など、できるワケがなかったのだった。

◇ＰＡＲＴ．２３　アンノウン（後書き）

次は久々にドラえもん側に移ります。

◇ＰＡＲＴ．２４　心情

その頃、ヴァルミリオンの応接間ではカーマインと一人の男性が対談をしていた。

「……ご協力感謝いたします」

「いえいえ。あのアマリーリスの進路を捕捉したと聞いて、嬉しい限りです」

その男性は白色のカーマインと同じ軍服を着用していた。

「カーマイン殿、私だけでなく、先行部隊の隊員をこの艦内に招待していただき、ありがとうございます」

「めっそうもございません。その隊員達は今どこに？」

「今、本艦の兵士にヴァルミリオン艦内を案内されています。長い道のりでしたので、休憩がてら自由行動を取らせたのでーー」

「そうですか。ゆっくりしていってください」

「ありがとうございます。

私達の後に続いて対アマリーリス編成部隊がもうすぐで到着いたしますので、短い期間中ですがーー」

「ええっ、こちらこそ」

二人は笑顔で握手を交わした。

……

「……」

何もない空間でエミリアは精神統一をしている。

静寂で、暗闇の空間の中心部で神経を研ぎ澄ましている。。

“シュン……”

《カシャ！》

突然、四方八方の空間から丸いモノが総計５０個ほど出現し、瞬時に彼女は腰の両端に装備している二挺の白銀の拳銃を取りだした。

《ピピピピピピ……っ！！》

『スタン、スタン』とタップを踏み、柔軟な足腰の筋肉を駆使した、まるでダンスのような軽やかな身のこなしは見るものを魅了する。

しかし、そこから放たれる光線は丸いモノ、的を的確に捕らえていた。

「ふっ、ふっ、はっ、はっ、はっーー」

息でリズムで刻み、さらにスピードアップ。
こんな美人からは、とても想像できない動きだがとても美しい。

直撃した的はその場で消滅。
それはたった３０秒間の出来事だった。

《ガチャっ！》

彼女は立ち止まると、二挺の銃を直列に連結。
二挺の拳銃が、まるで長身のライフルへ変化した。

「……」

最後の一番離れた的に照準を合わせ、息を潜める。

《ドシュっ！》

発射されたピンポン玉の光弾が徐々に野球ボールほどの大きさに膨張し、的へ向かって駆け抜けた。

ーーそして貫通、光弾はそのまま先の壁に直撃し、そのまま消滅した。

「……」

その場で銃を下ろし、連結を解除。元の二挺に戻る。

“パチパチパチパチ！”

後ろのガラス越しの見学室ではドラえもん、ジャイアン、スネ夫が眼を輝かせて握手をしていた。

「すっすげえっ！！」

「さすがエミリアさん！あんな銃さばき見たことないよ！」

三人の横にいたミルフィはエヘンっと誇りそうな顔をしている。

「これでもエミリアは戦闘訓練ランクＡ＋なのヨ！」

「それってスゴいの？」

「当たり前ジャン。
最大ランクはＳだけど、この艦内でそのランクをもつ兵士は数人ぐらいしかいないハズよ。
ましてやエミリアは女性だから、本艦の全兵士達を比べても上位クラス、女性隊員の中ではダントツトップよ！」

「ーーエミリアさんはやっぱりスゴいやぁ。で、ミルフィは？」

スネ夫の質問に彼女は瞬間、顔を赤くしてそうボソボソとこう言った。

「……Ｄ……」

「で……でぃー？
ぷっくく……っあはははははっ！」

「こんな丸っこい体じゃ何にも出来ないもんな！わははは！」

「二人とも、笑っちゃミルフィちゃんに失礼だよ！」
スネ夫とジャイアンはヒイヒイ笑い出した。

「何よォ！
アタシはオペレーター担当なの！戦闘出来なくても、十分やっていけますゥ！！」

……そんな話をしている矢先、エミリアが戻ってきた。
彼女は顔中に汗をダラダラ流していた。

「ふう、やっぱりこの訓練は疲れるわね……ちょっとバテた」

訓練で動きやすいようにラクリーマのような黒い全身タイツを着用していた。

……胸がぺったんこなのが残念だが、とてもスリムな体格をしている。

「エミリアさんて……全くおっぱい…」

《ポコ！》

瞬間、失礼な発言をしたジャイアンは顔をプンプンした彼女に軽く叩かれた。

「もお！気にしてること言わないで！」

「……」

そんな中、スネ夫がエミリアの二挺拳銃に興味を持ち、今にも欲しそうな顔をしている。

「エミリアさん、その2つの銃、カッコいいですね！」

「えっ？ああっ、これね？」

彼女は銃を三人の前に差し出した。

……2つともグリップ含めて白銀で、違う点は一つは重量感がありそうな大型拳銃で、もう一つも大型だがシャープで銃身が長い。

特撮でヒーローが使う銃器のように機械的で単純にカッコよく、男

子ならすぐ欲しがることだろう。

「フフっ、持ってみる？」

頷くと、彼女はスネ夫の手に直接握らせた。

「かっ……軽い。持ってる感じがしない……」

「すっスネ夫、俺にも貸せ！！

……すげえ、わたあめみたいに軽いぞ！！」

見るかぎり、一挺2～3？ありそうなそれらは、想像できないくらいに軽量であった。

子供で、ましてや腕力の低いスネ夫でさえ手を踊らせながら持っているので察しがつく。

「これね、あたし専用なのよ。わかる通り、軽いから扱いやすいと思いがちかもしれないけど、これがなかなか上手くいかないのよね」

「そうなんですか？」

「ええっ、試しに的に向かって撃ってみる？

ホントは一般人に持たせたらダメなんだけど、あたしがいるし、許可するわ」

「「はっはい！！」」

「なら、誰が撃つの？」

ミルフィを除いた三人は互いの目を見つめ合う。

「……ここはもうジャンケンで決めようか？」

「そうだな、さすがにここで取り合いしたら撃たせてもらえなくなりそうだし……」

「……て、ちょっとまってよ！考えたら僕、グーしか出せないよ！」

「ならドラえもんは抜けだな！！」

「……」

あんまり納得のいかないドラえもん。しかしまあ、手の形に問題があるので何とも言えないが。

しかし、そんなやり取りに見かねた彼女は、

「順番で撃たせてあげるから、早く決めなさい」

その言葉を聞いた三人、特にスネ夫とジャイアンは即座にエミリアの前に出始めた。

「なら僕から先に！」

「いいや、俺が最初だろ！！」

「ジャイアンばかり自分勝手すぎるよぉ！」

「うるセェ！俺が始めに決まってンだろ！」

「「「……」」」

予想通りのことが起きて、エミリア、ミルフィ、ドラえもんの三人は呆れて言葉が出ない。

「取り合いするのなら撃たせてあげないわよ！！」

「「あっ……」」

……とりあえず、順番はスネ夫、ジャイアン、ドラえもんという形になり、最初のスネ夫が彼女に連れられて訓練場に入場した。

「ならスネ夫君。向こうにある的を狙ってみましょう。命中したら

的は消滅するから判定は当てるだけよ」

エミリアの指を指す方向に約５０m離れた先に２つの的が平行に並んでいる。

「ワクワクしてきた……よおし！」

（……）

スネ夫は渡された二挺を的に向かって構えた。

（軽いなぁ。これなら僕も扱えるかも……っ。
……これが扱いにくいなんて）

そう考えながら両手を真っ直ぐ前に固定し、ゆっくり的に照準を定め、

“ピッ！”

発射した。２つの銃口から蒼白く細い光線が瞬く間にはるか奥に到達した。

が、

「あれ？」

とっくの間に着弾したと思われたが的が消滅していない。ということは命中していないのだった。

「……」

「スネ夫、なにやってんだよ。あんなのも当てられないのかよ！！」

戻ってきたスネ夫は首を傾げていた。

「エミリアさん、それ銃口曲がってませんか？」

「そんなことないわ。じゃあ次はタケシ君ね、渡してあげて」

「よっしゃ、まかせとけ。俺が当ててきてやる」

スネ夫は渋々渡すとジャイアン大ハリキリで腕を回していた。

その隣でミルフィは微笑している。

「さあ、あの銃の本質に気づくかしら？」

「……」

ドラえもんはそう呟く彼女を見て、何かを考えていた。

そして……。

「当たらなかった。どうなってんだこりゃあ……」

「ジャイアンも全く命中してないじゃないか！！」

案の定、的に命中せず、やる前とは一転して少し落ち込んだ様子で

戻ってきた彼も首を傾げている。

「なら、最後はドラちゃんね」

ドラえもんはジャイアンから渡される。
見た感じ、そんな指もない丸い手でどうやって撃つのか不思議だが構造上、指があるかの如き動作が出来るのである。

「……」

そしてドラえもんは訓練場に入り、銃を構える。
二人とは違う真剣な顔が集中しているとエミリアにはわかった。

（もしかしたら……ドラちゃんなら）

そして、

“ピッっ！”

発射。

「「ああっ！！」」

ドラえもんは2つの的の右側の的が瞬間、消滅した。

その瞬間をこの目でみたスネ夫とジャイアンは驚きを隠せなかった。

「さすがドラちゃん！！初めての一回で当てるなんて」

「エヘヘ。何となくこの銃の特性がわかったんです。確かに扱いにくいですね」

二人は戻り、その場の三人は駆けつけた。

「ドラえもん、どうやったの！？」

「俺たちに教えてくれ！」

「この銃、フワフワしてて異常に軽いだろ。
だから的を狙っても知らず知らずに腕が上に上に上がっちゃうんだよ」

「「へっ？」」

「つまり、軽いから逆に腕が固定しにくいんだ。
二人はもうすこしそれを考慮して狙わないから当たらないんだよ」

“パチパチ……”

エミリアとミルフィは笑顔で拍手した。

「ドラちゃんは頭がいいわね。大正解よ！」

「未来のロボットはやっぱり敵わないヨ！ステキー！」

「エヘヘ……ゴロニャーん…」

誉められて人目気にせずデレデレしている彼を尻目に、

「ちぇっ、ホントはポンコツロボットのくせに……」

「あんなにデレデレしちゃって……」

二人は嫉妬していた。

「この二挺は特殊な金属素材を使ってるから非常に軽量で丈夫、かつ特殊なのよ。

私はこの二つを『テレサ』、『ユンク』と呼んでるわ」

「銀河連邦では優秀者にその人の象徴として、本人が使いやすいデバイスや武装が開発、受領されるようになってるの。

エミリアは確か…大尉になってすぐにもらったんじゃない？」

ドラえもんら三人は納得し頷いていた。

「エミリアさんはやっぱり優秀なんだな」

「ドラえもん、今度はエミリアさんにひみつ道具を使わせてあげようよ！」

「そうだね。そうだ、タケコプターなんか……」

ドラえもんはポケットからタケコプターをエミリアに差し出した。

「これは……地球であなた達が使った道具ね」

「はい。『タケコプター』って言って、頭に着けて念じると空を飛べるようになるんです」

「へえっ。初めて使うけど大丈夫かしら？」

「どうぞどうぞ。さっきのお礼です」

エミリアは早速、訓練場に入り、頭上に着けてみた。

だが、

《ズサーーッ！》

「きゃあああああっ！」

「「「「うわあああああっ！」」」」

上体を倒しすぎたせいで地面に引きずられるように走っていき、慌てて彼女を止めようと全員が駆けつける。が、

《ガァン！》

頭が壁に激突し、エミリアはそのままピクピク震えている。

「エミリアさん、大丈夫ですか！！」
「ううっ……やっぱり難しいわね……未来の道具は……」
ドラえもん達は心配しつつも、こう思っていた。
“今のは……のび太だ”

（もしかして……エミリアさんて意外と不器用……？）

今、エミリア除く全員が同じことを考えていたのだった。

……

その後、彼女のタケコプターの飛行テストは失敗に終わり、５人はエミリアの顔の傷を治しに治療室へ向かっていた。

「いたたたっ……」
「エミリア、大丈夫？」
「大丈夫よ。まさかあんなことになるとは……っ」

顔の頬が擦りむけて赤くなっている顔を見るかぎり、かなり痛そう

だ。

「いやあ、びっくりしたぁ～。いきなりあんなことになるなんて……」

「しょうがないよ。初めてつかったんだし……」

「ふふっ、けどすごく興味深いわ。もしよかったらまた出してくれないかしら？」

「いいですよ。けど今度は安全な道具を出しますよ」

「こんどはエミリアさんでも扱えるような物を出せよな！」

「でもってどうゆう意味よ！」

“アハハハッ！！”

高い笑い声を出しながら通路を歩いていた。

「お疲れ様です！」

「ご苦労様！」

「「「お疲れ様でーす！！」」」

兵士とすれ違い、全員が互いに敬礼をした。
三人はこれでもかと言うくらいに大きい声で返す。

「おっ、君たちいい声してるね。ここに入る資格あるよ！」

「ホントはですか！」

「ああっ。
ところでエミリア大尉、その顔の傷はどうしたんですか？」

「ちょっ、ちょっとね！」

「早く治してくださいね。あなたのその美人顔が台無しですから」

「台無しって、失礼よ！」

「ああっ、すいません！！
ではこれで失礼しました！」

兵士はそそくさと去っていき、彼女は彼を嫌な目で見つめていた。

「もう！」

すると、

「これはこれは、エミリア・シュナイダー殿ではないか」

振り向くと、二人の男が5人の前に立っていた。

一人はキツネをそのまま人間にしたような男、もう一人はまるでゴリラのような顔つきで肌の黒い、身長2mあるかないかの大男がその男の後ろにいた。

「……」

「……」

エミリアはキツネの男をグッと睨み付け、男は彼女をニヤニヤ見つめていた。

一方、ミルフィとゴリラの男は何か懐かしむような顔で互いを見つめていた。

「こっ、コモドスじゃない？」

「ミルフィか！」

二人は笑いながら、かけより手を繋いだ。

「前期教育以来じゃないか。元気にしてたか？」

「うん！コモドスこそ元気？」

「ああっ」

二人はワイワイ話していると、

「ミルフィ、みんな、行くわよ」

「えっ！？」

エミリアは突然、無愛想となり、男に背を向けた。

「エミリアさん？どうしたんですか？」

「……」

ドラえもんの問いに全く答えず、さっさと行こうとする。さっきまでと違う彼女の表情に４人は突然、恐怖した。

「おいおい、久々に会ったってのにそれはないんじゃないか？」

男がそう聞くと、エミリアは立ち止まった。

「何よサルビエス。あんたに話す言葉なんてなにもないわ」

「ちっ、いつからそんな言葉言えるようになったんだ。しかも……そんな下等生物を率いれて遠足でも行くのか？」

徹底的に彼女含めた５人を軽蔑するサルビエスという男。エミリアと一体どんな関係が――。

「てめぇ、よくも俺たちを馬鹿にしやがってぇ！」

「ジャイアン！！」

黙ってもいられなくなったジャイアンはサルビエスに襲いかかろうとしたが、もの一人の男、コモドスが彼の前に出る。

「離せっ！」

「……」

さすがのジャイアンもコモドスの並外れた怪力の前に歯が立たず、掴まれてしまう。

「ケケケッ、これくらいにしておけコモドス」

「……はい」

《ブン！》

コモドスは彼をまるでドッチボールのように前へ投げつけた。

「ジャイアン！！うわあああっ！」

ドラえもんとスネ夫は彼を受け止めようとしたが、勢いが強すぎて、三人は吹き飛ばされた。

「みんな大丈夫！？」

「いたたっ……っ」

「……」

エミリアは怒りの表情を露になり、拳をギュッと握りしめた。

「俺様に逆らうからこうなるんだよ。
大体、お前みたいな奴がよく大尉になれたもんだな。
なあ、『泣き虫モグラ』ちゃん？」

「……」

「エミリア、『泣き虫モグラ』ってどうゆう……」

サルビエスは突然、高笑いし彼女に指を指し、こう話し出した。

「ヒヒハハハ、教えてやろうか？
こいつはな、俺と入隊、前期教育は同じなんだけどな。
いつもこいつのおかげで連帯責任かけられたんだよ！！」

《！　？》

「エミリアさん……？連帯責任って」

「……」

エミリアの心にその言葉が鋭い刃の如く、奥まで突き刺さった。

「いっつもトロくてドジばっかしてたから俺たち仲間に多大な迷惑をかけてたんだぜ。

挙げ句の果てには訓練中に教官に怒られて、その場でワンワン泣き出して……訓練の進行を邪魔してたな。

だから『泣き虫モグラ』ってな」

“……”

エミリアは入隊時は会話の通りの女性だったのだ。

彼女にとっては決して思い出したくない過去の一つである。

「今回の標的、アマリーリスなぞに故郷を滅ぼされて……モーリアンとはさぞかしノロマで貧弱だったんだろうな、ヒァハハハ！！

そんな種族に比べたら、我が種族『フォクシス』はあらゆる種族の中で最も気高く優れた種族だな」

『レイシスト』。彼を一言を表すならそれである。
しかも非常にタチの悪い方である。

「けけっ、悔しいか？だが所詮、モーリアンとはこんなもんだ。土臭くて、鈍重で、マヌケで……」

しかし、

「ーー何よ。言いたいことはそれだけ？」

「はあっ？」

彼女はサルビエスの前に移動すると、胸ぐらをグッと掴んだ。

「ぐうっ！」

「確かに……私は同期の仲間には多大な迷惑をかけたわ。どうしても上手く行かないし、途中で何度も退職しようかなと考えたりもしたわ……」

さらに顔同士が当たりそうなくらいに引き付けて、彼の目をその怒りを込めた視線を送った。

「けど、周りの人々に支えられて、励まされて私は必死こいて頑張ったわ。人一倍、いや二倍くらい努力したわ。……あたしも努力してここまで辿り着いたのよ。

あんたみたいに……人を馬鹿にすることしか考えない奴に分かるワケがないじゃない」

エミリアは胸ぐらを放し、その場で低い声でこう言い放った。

「ナメんなよ」

「……」

エミリアは彼に背を向けて去っていく。

「行きましょう」

「エミリアさん……」

「みんなに見苦しい所見せて悪かったわね。」

「……」

5人はエミリアの指示通り、行こうとする。

その中でミルフィとコモドスは互いに悲しい目で見つめあっていた。

「コモドス……」

「……」

一方、サルビエスは歯ぎしりを立て、エミリアに対して怒涛の怒りを起こしていた。

「ちぃ、モーリアンふぜいが……生意気にぃ……」

……

その後、仕事でエミリア達と別れ、ドラえもん達三人は休憩所で落ち込んでいた。

もちろん、あの二人とのイザコザについてで。

「あの時のエミリアさん……怖かったね」

「ああっ。けどあんな奴に馬鹿にされたら」

「なんか……ここも色んな人がいるんだね……」

銀河連邦内でも様々な種族や人種がいる。
しかし、それが全て友好的な人物だけでなく、中にはサルビエスみたいな思考の人物もいる。
それを強く思い知らされる三人なのであった。

「あら、あなた達いたの？」

エミリアが三人の元へ現れる。
雰囲気が重い彼らに優しい笑顔で一人ずつ頭を撫でた。

「ごめんなさい。サルビエスの言っていたことは気にしないでね。あいつは元からあんな感じだから」

「けど、あんなに馬鹿にされて悔しくないんですか？」

「……悔しいわ。けどね、気にしてもしょうがないでしょ？あなた達は何も気にしなくてもいいのよ」

「けど……」

そう言う彼女も気にしているか、どこか浮かない表情をしていた。

「……エミリアさんて、どうして銀河連邦に入隊したんですか？」

「入隊動機？」

ドラえもんの問いに、彼女は恥ずかしそうに指をコネコネしながらこう答えた。

「……人の役に立ちたかったから。私、泣き虫でドジだったから、それを鍛え直すってこともあったけど。

あたしでも役立つ仕事は何かなって考えた末、これに決めたわ。幸い、故郷も連邦に加盟していたからすぐに志願できたの。親も彼氏も始めは反対してたけど、行きたいと押し通したら承諾してくれた」

彼女はさらに話を続ける。

「けどね、現実は厳しかったわ。あいつが言ってたことは本当よ。あたしのせいで連帯責任になって罰を与えられた数は多すぎて数えられないわ。

同期生はあたしを冷たい目で見てた時のあった。

あたしは情けなくなって、何度も泣いたこともあったの。

けど、親や彼氏、仲良しの同期に励まされて死にもの狂いで頑張っ

た。自由時間や休日を使って勉強や自主練習した日もあった。
そうじゃないと迷惑がかかるから……」

三人が真面目に話を聞いている。
本当は彼女は元から優秀ではなかったのだ。
下手したらのび太に匹敵するくらいに不器用である。

『大尉』という階級になるのにどれほどの努力をしたのか計り知れない。
彼女は「人の役に立ちたい」という願いを叶えるため、本当に苦労していたんだなと思うと無性に涙が上がってくるのであった。

しかし、次第に彼女は体をブルブル震わせていた。

「許せない……。人の全てを虫けらのように踏み潰し、奪うアマリーリスを……わたしは絶対許さない！！」

その怒りようは尋常ではなかった。
あんな悲劇が起きれば誰でも憎悪するは無理もなかったのだが。

「ところでミルフィちゃんはどうしたんですか？」

「あっ……ミルフィは今、オペレーターとしての作業をしているわ」

……その頃、ミルフィは中央デッキのコンピューターの前で、本業であるオペレーターの仕事をしていた。

「はあ……っ」

「ミルフィ中尉どうしたのですか？」

「いやっ、なんでもないヨ。引き続きアマリーリスの進路を追跡及び、この宙域に到着する時間を確定させるわ」

「了解しました」

後輩オペレーターと連携を取り、真面目に仕事をする彼女は何かギャップがあり、いい意味で違和感がある。

（コモドス……どうしてあんな人の付き添いをしてるの？）

彼女も浮かない顔をしていた。

◇ＰＡＲＴ．２４　心情（後書き）

またアマリーリス、及びのび太編に移ります。

次話からは鬱展開になっていくので注意。

◇PART．25　ユノン

“あたしは……なんのために生まれてきたんだろう”

「ちきしょっ！！また男に逃げられたぁ……ひっくっ！」

とあるスラム街の片隅のアパート。
壁にはラクガキやシミだらけで、もはや『綺麗』という言葉は合わないような建物の一室内では。

「酒がなくなった……。あんた、今すぐ買ってきな」

家の中は酒の瓶やゴミに溢れ返り、足の踏み場もないほどであった。非常に酒のニオイや生ゴミのニオイが混ざり、今すぐにでも気絶しそうな……。

そんな部屋の一室から一人の薄汚れた少女が涙を浮かべて酒に溺れている女性を見つめていた。

「まっ……ママッ……」

彼女の身体はアザだらけであった。強く殴られた痕や煙草の火を押し付けられたヤケド、刃物か何かに中途半端に切りつけられた痕……汚れた衣服で隠れていない部位を見ても、数えるとキリがない。何をしたらこんなになるのかと思うくらいであった。

《ガシャーン！！》

「ひいっ！！」

少女の母親と思われる女性は空き瓶を奥に投げつけた。直接は当たらなかったものの、割れて飛散したガラスの破片が辺りに散乱し、彼女にまた恐怖という思念が込み上げる要因ともなった。

「さっさと買ってきなさいよぉ！！」

母親は彼女の元に行くと、酔っているか、躊躇せず彼女を蹴る、殴

るの暴行を与え始める。

「ごめんなさいぃぃぃっ！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい――」

少女はただそれだけを発しながらひたすら暴行に耐えている。しかし、母親は彼女に向かって唾を吐き、頭上に付着した。
なんという親なのだろうか。

「怯えやがって……。そんなにあたしのことが怖い？
――誰のおかげで生活できるとおもってんだ！？」

母親は彼女の長い緑の髪をグッと掴み、無理矢理顔を合わせる。

「あんたがいると男は作れないし、作っても逃げられるし、とんだ疫病神だよ！」

母親をぐっと睨み付ける。少女は涙と鼻水でもう顔がグシャグシャな状態だった。
「なんでこんな手間のかかる子を産んだんだ……っ？

こいつの父親は逃げちまったし、たくっ……、育てるあたしの身にもなってよ」

すると少女は震えるような声で母親にこう言った。

「おサケ……かってきますから……もうヒドいことしないで……おねがい……っ」

その言葉を聞いて母親は掴んだ髪を離し、少女はそのままうずくまった。

「ふん……、さっさと買ってきな。お金はないからいつも通りツケておくようにいいなさいよ?」

「……ひくっ…」

彼女は、母親から下僕のように扱われていた。
こんな母親でも、他に身寄りがいないため、いなければ生きていけない。
従う以外、道はなかった。

ある日のこと、母親は男を捕まえたらしく、キレイに部屋を掃除して連れ込んだ。
母親は珍しく上機嫌で満面の笑みを浮かべていた。
少女はそれを見るたびにこう思っていた。
“この笑顔が……もう消えないでほしい”と。

母親にニコニコしながら、外に買い物に行った。
どうせ、男からもらった金だろうに。

部屋の中には一人で静かにしているその少女と男が二人、何か嫌な雰囲気だ。

「いいものあげるからこっちにおいで……」

「……？」

男が少女を呼び、トコトコ彼の所へ向かう。非常に気のよさそうな笑顔で信用したのだろう。
なんの疑いなしで出向いていった。
しかし、

《ガシッ！》

「！？」

突如、男は彼女の口元を押さえて、押し倒す。その優しい笑顔は徐々に悪魔のような凶悪な笑みと化した。

「へへっ、あのバカ女に金を貸した代わりだ。
……よく見ると可愛い顔してんなぁ、こいつは楽しみがいがあるってもんだ！」

“こわいっ……こわい！！こわい！！”

少女の表情は青ざめ、ぶるぶる震えている。
助けをよぼうにも、力ずくで口を押さえていて声が出せない。
それ以前に、助けを乞おう人さえもいなかった。

男は……彼女の服の中にその汚ならしい手を突っ込んで、耳元でこう呟いた。

“緑色の長い髪、かわいいよ……。名前は確か……っ”

（や……め……て……っ）

その発達しきれてない幼稚な身体中を否応なしに触られ、全身をナメクジがはい回ったような強烈な嫌悪感、そして吐き気が襲い、大粒の涙を浮かべて……そして。

“ユノンちゃん♪”

（やめてえぇぇぇぇぇっっ！！）

……

《ガバッ！！》

ユノンは自室のベッドからすぐに起き上がる。
身体中が汗でびしょびしょであった。

「……がっ……はっ……」

異常な嫌悪感に自分が押しつぶされそうとなり、息が出来なくなり、喉元をグッと押さえる。彼女はすぐに立ち上がり、デスクに向かうと、引き出しを開いてあるものを取り出した。

「～～～～～っ！！」

……あるものとは、ナイフであった。
それを左手首にグッと押し当てる。だが、

「あ……ああっ……っ」

彼女はまるで地震を受けているように激しく震え、顔をひきつった。
自分の今やろうとしていることの過ちを認識したのだ。

「あ〝あ〝ーーーっ！！」

《ガシャン！》

ナイフを床に叩きつけ、彼女のその場で座りこみ、震える両手で顔を押さえた。

「あたし……なにまたやろうとしてんのよ。
……やめると決めたじゃない……」

ゆっくり立ち上がり、ふらつくようにソファーへ移動。
ドサッと座り、体育座りをして静かにうずくまった。

「……」

ノースリーブ状のインナーを着ている彼女は露出している両腕全体を確認する。
その綺麗な素肌をよく見ると、何やら刃物か何かで傷つけた痕らしきモノが所々ある。それは他人から見ても気にならないほどではあるが。

「……」

その切創は明らかに不自然だ。
まるで×のような形もあれば、平行でしかも一定の間でできているものもあった。
これは他人から切りつけられた傷ではない。

「なんでまたあの夢を……」
普段以上に暗い顔をしている。彼女の目が揺れている。
そんな状態が数分間続いた。

「……」

ふとユノンは立ち上がり、隣の青い壁へ向かうと、静かに触れた。
すると、壁がまるで自動ドアのようにゆっくり開き、中から冷風が一気に彼女を包む。
開ききったそれは、何段もの棚に――『酒』と思われる液体の詰まった瓶や壺が何種類にも綺麗に統制されて並べられていた。
彼女は上から二段目の右端にある瓶を取ると、それをもってソファーの前にあるデスクに静かに置いた。
“トクトク……っ”

持ってきたグラスに静かに注ぐ。液体の色はまるで鮮血のように明るい赤色で、地球で言う、赤ワインのようである。ある程度コップに入れ、それを時間をかけて口の中に含む。

「……ふう」

安心し、妖艶な声と共に息を漏らすと、今度は勢いよくグビグビ飲み始める。

――彼女は組織内でも有数の酒飲みである。強さはラクリーマより劣るが、組織員と引けを取らない程で、酒に対するこだわりは他の追随を許さない。

彼女の唯一の楽しみである酒は、各惑星の侵略時に入手しているのである（ラクリーマや部下に頼んでいる）。

その日の気分で酒の味を変えているあたり、多種類持っていることが伺える。

「……」

段々、彼女の顔が赤くなってくる。
彼女はこの時、いわゆるほろ酔い時が至福の時なのである。

さすがに毎日は仕事に支障をきたすため、非番な日に好きなだけ呑むようにして、それ以外の日は呑まないようにしている。
性格上、宴会を嫌い、一人晩酌を好むユノン。
邪魔されたくないため、この時に人が部屋、いわゆるテリトリー内に入ってくることを極端に嫌うのである。
それが例え総司令のラクリーマであろうと絶対に許さない。

なので、組織員は彼女の非番時には部屋に近付こうとしないのである。
（最も、ラクリーマはそんなのお構い無しに部屋へ入り、彼女からこっぴどく制裁されて、放り出されるのはもはや名物である）

ゆっくり、ゆっくりと時間をかけて飲んでいるのだが、「ハァ……っ」と幸せな一時なはずなのに、不安らしげにまたため息を吐く。

（情けない……。あんなクソ親と同じく、酒でしか満たせないなんて……）

コップの残りを飲み干すと立ち上がり、クローゼットからいつも着ている青い着物のような上着を取り出した。

すぐに着用し、そのまま部屋から出ていった。

……

現在、あのアンノウン達がエクセレクターの装甲をボロボロにし、修理をするため約2日間だけ、その場で停滞していた。

無論、のび太としずかにそのことを話し、二人はしょうがないと納得してくれたのだった。

そんなに問題こそはないのだが……先で待ち構えているであろう銀河連邦艦隊を考慮しての決断だった。

「……」

ここは艦内の喫煙所。ユノンただ一人がゆっくり煙草を吸っている。

実は、意外にも喫煙者はユノンを含めて、十数人くらいしかいなかった。

『煙草は俺たちみたいに肉体労働者には毒すぎる』というラクリーマ本人の指示によるものであった。

証拠に、喫煙者はオペレーターなどの頭脳と神経を使う者たちで限られている。

「フゥ……」

彼女の口から吐き出される煙はたちまち天井の換気扇に吸い込まれていく。

それを見ながら彼女はぼーっとしていた。

（そういえば喫煙するようになって何年経ったかしら……。確か、大学に入る前から吸ってたから……7年くらい？）

彼女は短くなった吸いがらを灰皿に捨て、喫煙所を出た。

ポケットに手を入れて、長い通路をひたすら歩いていく。

……しばらく歩いていると前方から仲の良い部下が歩いてきた。二人で通路内に響き渡るような笑い声で話をしている。

「「あっ、お疲れ様です！」」

「……」

互いに軽く挨拶し、すれ違う。その時――。

「……そいつさぁ、配線の修理中に手を滑って、手首切っちゃったんだとよ！！」

（！！？）

その会話が耳に入り、その場で立ち止まった。

「うわぁ……バカだなオイ。どう間違ったらそうなるんだ？」

「でさ、めっちゃ血が流れて大変だったんだぜ！」

二人はそのまま去っていった。しかし、彼女はそのまま立ち止まり、何故かブルブル震えている。

「てっ……手首を……切った……っ」

“ドクン……ドクン！ドクン！”

心臓の鼓動が強くなるにつれて、彼女の顔も青ざめていきーー。

「ーーーーっ！！」

彼女はなりふり構わず一目散にその場から走り、急いで自分の部屋に入った。

「……っ！！」

彼女はドアに寄りかかり、頭を押さえてその場でうずくまった。
その時の彼女の表情は、いつもの冷静さを完全に失い、何かに恐がっているようにも見えた。

（ヤバい……また切りたく……ダメよ、ダメ！！
またやったらあの頃のあたしに――！！）

抑えきれない危険な欲望が彼女の脳内を駆けめぐり、もう何がなんだかわからない状態だ。

「ううっ……！！」

そしてあの壁に手を当てて、あの酒の貯蔵庫を開けると手当たり次第に酒をかき集め――。

「うぐ……うぐ……はぁ！！」

なんと瓶ごとそのまま飲み干していくではないか。
あの冷静の彼女の姿はどこにいったのであろうか……。

“まだ……まだ忘れられない！！飲まないとぉ！！”

それから一升、二升とただの空き瓶を作っていくユノン。
一体どうしたのだろうか？

……

その頃、ラクリーマはというと、彼女の部屋へ向かっていた。
何か言いたそうな顔をしているが――。

「ラクリーマさん、どこいくんですか？」

そこにいた部下に話しかけられて足を止める。

「おう、ユノンの部屋にな」

「……ユノンさんの部屋はやめた方がいいんじゃないですかぁ？
あの人非番だから、酒飲んでるんじゃ？」

「いいじゃねえか。俺が行くのは勝手だろ？」

「けどですね……あなた、毎回ユノンさんの部屋に行っては追い出
されてるじゃないですか」

「けっ、こっちは用事があるんだ。それなのに追い返すあいつがお
かしいんだよ」

「そうですけどね……。まあ、気をつけて下さいな」

「ああ、それじゃな」

そう言い、彼は手を去って行く。

「けど、ラクリーマさんらしいや」

部下はそんな彼に呆れつつも、暖かい目で見つめていた。

一方、ラクリーマは考えごとをしているのか、うつ向いて通路を歩いていく。

（……あいつを怒らせとくと色々めんどくせーから謝っとくか……、元々俺がワリィし）

そう考えながら、彼は彼女の部屋へたどり着く。

《プシュー！》

「ユノン、いるか……うっ！」

部屋の中は酒の匂いで充満している。酒に強い彼でさえ、思わず鼻が押さえてしまうほどであった。

「さっ、酒くせえ……。あいつなにやって……おわあ！！」

彼は目を疑った。デスクには酒が入っていたと思われる空き瓶が何本も倒れていて、ソファーには彼女が顔を真っ赤にして、泥酔状態となっていた。

「おい、大丈夫か！！」

暑いのか、下着だけになっていて、あまりにもはしたない姿になっている彼女にすぐに駆け寄った。

すると彼女は目を開けて、虚ろな瞳でラクリーマを見つめた。

「あ～ら来たの～っ♪ウレシイわぁ～♪」

「……お前、なんだこれは……？」

さすがの彼も、この部屋の惨状と彼女のへべれけ状態にはもはや、呆れて言葉が出なくなり、手を額に押さえていた。

「ウフフ……いいじゃないのぉ♪ラクちゃん、まさかあたしを襲いにきたのぉ？」

「らっ…、ラクちゃんだとぉ？

お前なぁ……っ、いくら非番だからって量を考えろよなぁ」

「いいでしょ～～！あたしの楽しみはこれしかないんだからぁ！それを否定されちゃあ、あたし泣いちゃいますよ～っ」

「……」

もうらちがあかない。ラクリーマは寝かそうと彼女を持ち上げようした。

「んふ～～♪いい気分……♪」

「へいへい、そりゃよくござんした！」

彼はお姫様のように抱き抱えて、ベッドへ運ぼうとする。ご機嫌なのか、パンツからはみ出ているシッポをフリフリ振って彼の腕に当たっている。

「エヘヘ……ラクちゃんて、意外と可愛い顔してんのねぇ。お姉ちゃんがヨシヨシしてあげまちょ～か？」

「うえっ、お前が姉貴とか、気持ち悪くなってきた……っ」

そして彼女をベッドの上に下ろし、寝かそうとする。

その時！

「なぁ！！」

彼女はラクリーマをグッと引き込み、彼を倒した瞬間、寝返って彼を下にし、彼女がのし掛かった状態になった。

「お前……本気なのか？」

「フフっ、今日はあたしを好きにしてわよ……ウヘヘッ……っ」

「……それは非常にウレシイが、俺はそんな酔っぱらいとヤる気になれないんでね、お前の酔いが醒めたらな！」

「へえっ、たらしでヤリ○ンのラクリーマが拒否るなんて……あたしの処女奪ったのもあんたなのに……」

「だっ、誰がヤ○チンじゃあ！？」

いい加減うざくなり、彼女をどかそうとするが、完全に足や手を絡みつかせて離そうとしない。

「おい、離せ！もう寝やがれ！！」

「フフっ、せっかく来たんだし、楽しもうよ～～っ♪ん～～……」

「まじかよ……っ」

彼女は唇をラクリーマに顔に近づけ、そして……、

“ペロッ…”

「へっ？」

“ペロペロペロペロ……”

「うわあああっ、くすぐってえ！！」

突然、ユノンは彼の顔中を舐め始めたのだった。
その様はまるで犬のよう……考えたら、彼女は犬だ。
普段の彼女から考えたら絶対に想像できない姿だ。

「ちょっ、酒くせえし、きたねえし、いい加減にぃ――」

しかし彼女は止めようとしない。次第に彼の顔は唾液まみれに――。

「どっ、どうしたんですかリー……ダァァァッ！」

偶然、そこを通りかかり声を聞きつけたレクシーはすぐに駆けつけてきたが、二人の状況の前に、顔が真っ赤で大声を出してしまった。

「しっ、失礼しやした！！」

「おっ、おいレクシーまて、こいつを止めてくれぇ！！」

「最中」だと勘違いし、彼は急いで部屋から飛び出していった。

外では、

「レクシーさんどうしたんですか？」

「そんなに顔を赤くして……中で何が……」

「いっいや、今すぐこの場から去ろう！！」

彼はのび太としずかと一緒で、二人を引っ張って猛スピードで去っていった。

数分後。

「……」

彼女はやっと彼を離し、満足したのかポワポワしていた。が、彼の顔は彼女の唾液だらけでふやけていた。

彼は完全に不機嫌となり、タイツで唾液を拭う。。

「ちぃ、こんなことなら来なけりゃよかったぜ！！」

「えっ、もう行っちゃうの？」

彼は今にもキレそうな顔で起き上がり、ベッドから降りた。

彼女もそれに反応して起き上がる。

「晩酌の邪魔して悪かったなぁ！！今すぐにでも去ってやらぁ！」

《グイッ！》

突然、彼女は彼の腕を掴み、引っ張り始める。

「おい、またか！！そろそろ俺もキレ……ん？」

彼は振り向くと、彼女はさっきの陽気な表情とは一転して、瞳が震え、非常に悲しそうな表情になっていた。

「……そんなさみしいこと言わないでくだちゃい……」

「おっ、おい？」

「…ラクちゃんは……あたしから去るなんてユルさないでちゅよ～……っ」

彼女はラクリーマを見つめる。しかし彼女はまるで寂しそうに暗い雰囲気で見つめていた。

まるで……捨てられて、拾ってくれるご主人を探す子犬のように――

「いなくならないで……」

「……ユノンっ？」

彼女はそのままうずくまり、ブルブル震えている。

「だいっ、丈夫か……？」

しかし、

「うっ……うえっ……今にも吐きそう……」

「なぁ！？」

彼女は両手で口を押さえている。
ヤバい！！このままでは！！

「ちょっとまてぇ、その場で吐くなぁ！」

彼はすぐに彼女を抱き抱えるとすぐに部屋のトイレへ向かった。

「うげえええええっ！！」

トイレから聞きたくもない汚ならしい声と音が響きわたった。
――どうやら間に合ったようだ。

やっと終わりを告げ、ユノンはそのまま爆睡。
彼女をベッドに寝かせ、周りの瓶をせっせと片付け始めるラクリーマ。

あんな目に遭いながらも、彼女を放っておけないのは彼の優しさか……。

全てが終わり、部屋を出る彼の顔は腑に落ちない顔をしていた。

「ユノン……」

しかし、彼は前の壁に移るとその場でうずくまった。彼の額から脂汗が流れ、身体を抱えて震えている。

（くう……っ、あの訓練以来、まじでキツくなってきやがったぁ……、これしきのことでぇ……）

彼は必死で立ち上がり、息を整えて歩き出した。

しかし、その一歩一歩がぎこちない歩き方であったーー。

◇PART．26　本音

「お、どうした？」

「……お前なぁ……っ」

ラクリーマはサイサリスの部屋に訪れていた。
しかし、彼女はさきほどのユノンと同じく上と下も下着だけの状態であり、あまりにだらしのないさに頭を押さえる。

「お前、何しにきた？
……言っとくが、わたしに性欲求めても無駄だからな。そんなものはとっくの昔に捨ててるんでね」

「……テメエらは俺がそれしか考えてねぇとしか思ってねえのか……。
俺はただ昔からの馴染み同士、話をしてえだけだ……っ」

「話だと？まあ入れよ」

部屋を入り、辺りを見回す。
研究資料や訳のわからない物が辺りに散乱していて、汚い部屋だ。
身の回りが整頓されて、清潔感溢れるユノンの部屋とは大違いである。

「お前、無理してるだろ？顔色悪いが大丈夫か？」

「ああっ？お前自身が俺を心配とか、寒気がするぜ」

「……けっ、なんだその言い方は？
まあいい、座れや」

ラクリーマはソファーに座り、ゆっくり息を吐く。
すると、彼女はどこから持ってきたのか、酒の入ったボトルとコップを彼の前に差し出した。

「飲むか？」

「ああっ、ありがとよ」

二人は置かれたコップに酒を注ぎ込む。
その無色透明色でまるで清酒のようだった。

「で……話とはなんだ？」

ラクリーマは酒を少量、口に含み、ゆっくり飲み込む。
コップを持ちながら下へうつむき、やっとこさ口を開いた。

「なあ、ユノンについて何か知ってるか？例えば過去とか」

「……ユノンちゃんの？さあな、興味ねえし」

「そうか。お前らは仲良さそうだから何か知ってるんじゃねえかなってな」

「……あの子は自分から話すような娘じゃねえのはお前でも知ってるだろ？
しかし、どうしたんだ？」

「いや…そのことで聞きたかっただけだ」

彼女はグイッと一気飲みをして、到底、女とは思えないほどに豪快に息を吐いた。

「……ラクリーマ、もしかしてユノンちゃんのことが……っ」

「……ああっ。隠す気はさらさらねえぜ」

サイサリスはまたコップに酒を注ぎ、手に持ちながら彼を見て、軽く笑った。

「ククッ、お前はたらしだが、ランちゃんにだけは愛情注いでいたから何だかんだで一途かと思ってたが、やはりたらしだったか」

「うるせえ。まあ、たらしは否定できねえがな。
それに……」

コップを起き、視線を下げて一呼吸置く彼からは何か哀しそうな雰囲気を出していた。

「ランなら……今頃、あの世でエルネスと幸せにしているだろうぜ」

「……それはどうゆうことだ？」

彼女はピクッと手を止めて、ラクリーマをちら見した。
そして彼から驚くべき言葉を口にした。
「ーーあいつも、ランのことが好きだったんじゃねぇかな」

「なんだと……っ？」

サイサリスはすぐにコップを置き、彼もさらに話を続ける。

「エルネス、俺と違ってすぐに顔に出るタイプだからな。
あいつ、俺とランが一緒にいた時、どこか淋しそうな眼をしていたよ」

「……」

「最も、あいつはランが好きとも言ってなかったし、俺がそう感じただけだが。

しかしあいつと俺はほとんど一緒につるんだ仲だしな、何か分かるんだよなーー」

「……お前らまさかとは思ってたが、そうゆう関係だったのか……。キモチワリィーー！」

「ーー何か勘違いしてねえか？」

あのサイサリスが気味悪がるほどに引いている。

しかし、彼はホ〇でもなんでもない。

「あとな、死に間際、ランを気にかけたことを言ってたし、『エルネスもランのことが……』ってな。

俺は……それからランに手を出していいのか分からなくなってな。

実際、アマリーリスになってからはあいつには口づけはしたが、それ以上はしてねぇよ」

「……呆れたぜ。お前、そんなに心の複雑な奴だったのか。獣みたいにヤりたいときはヤる、本能に忠実の男だと思っていたがな」

まるで見損なったかのような冷ややかな眼を送る彼女を、ラクリーマは気分を損ねる。

「へっ、ならサイサリスはどうなんだ？お前、まともに恋をしたことがあんのかよ？」

「あたし？おうよ、あたしも２０代の頃は本気で人を好きになったこともあったぜ。まあ、全部外したがな」

その意外なことを聞いた彼は、驚きを隠せなかった。

「おい、なんでそんなに驚いた顔をしているんだ？」

「……殺戮兵器にしか愛情を注がねえ男同然のお前にもそんなことがあったなんて……っ、想像できねえ」

「ちっ、あたしだって女なんでな。軒並みの女らしい感情はあるん

だよ。

ならな、『うふ♪あたし、あなたのことが好きよ。付き合ってくれない？』」

「……」

彼女の猫なで声にラクリーマは血の気が引き、青ざめて、口を押さえた。

「……うぷ、キモチ悪くなってきた……。女みてえな言い方して、お前から付き合ってくれだなんて……」

「ん　だ　と　コ　ラ　ァ　ァ　！　！」

サイサリスは憤怒の表情で立ち上がった。

まあ更年期でしかも、こんな性格の彼女からその言葉が出たら、１００人中、１００人は気持ち悪いと思うだろう。

気を取り直し、二人は話を続ける。

「……まあランも死んで、俺はもう恋なんぞしたくねえと思ってた矢先にユノンと出会った。

あいつはいい女だよ。幼児体型のランと違って超絶美人でスタイル抜群だし、仕事はできるし……ただ性格はランとは正反対で難があるがな、俺はベタ惚れしたってわけだ」

「……ならユノンちゃんに告白しねえのか？お前なら普通にできるだろ？」

ラクリーマは腕組みをして、眼を閉じた。背もたれして数秒間沈黙した後、

「……あいつは俺のことをどう思ってるか知りてぇし、それまではー。

ランはストレートで素直だったからよかった。しかし、あいつは一匹狼だし、プライド高いしな。

あいつには色々イタズラしてきたから俺のことを好きじゃねえのかもしれねえし……」

「けど言わねえ限りは進展しねえぞ。ユノンちゃんから言うなんて考えられねえし、結局、お前が思いを伝えないといけねえんだよ」

「……だよな。わかったよ、けどまだだ……」

彼女は溜め息をついて呆れ果てている。
“こんな奴だったんだ”と。

「大変でございますね。ラクリーマさんは！」

「けっ。ところで話は変わるが、『ログハート』と『セルグラード』の開発状況はどうだ？」

「『ログハート』はもう９８％完成してるよ。『セルグラード』は……せいぜい６８％くらいかな。

ククク……あれはお前専用の決戦兵器だ、早く完成させて真っ先に使わしてやるから楽しみにしてな」

「そうか。楽しみにしてるぜ」

彼はコップの残りを飲み干し、大きく息を吐いた。

数秒後、彼女にこう質問した。

「……なあ、現状況で銀河連邦と対立したら勝てると思うか？」

その質問にサイサリスはソファーの肘掛けに寄りかかり、考えてる

のか沈黙し、段々顔を歪ませていった。

「……連邦は全宇宙でも相当の戦力を持つしな。エクセレクター級戦艦を何隻を持ち、さらにあいつらは宇宙の至るところに配置しているし、これ一隻であいつらとまともにやりあうとか正気も沙汰じゃないだろ」

「……だよなぁ。しかし、この2つが完成したとしたら……どうなる？」

「……まだ何とも言えないが。一個大隊規模ならまともにやりあえるだろう。

……だが、さっきも言ったように、それでも奴らとの戦力差は激しすぎる。

やるとしても短期決戦だな。長期戦に持ち込まれると不利になる」

「……そうか。さすがは連邦だな。だがな、やってみなけりゃわかんねえからよ。

部下の為ならこの身をボロボロにしても守ってやる」

「……ラクリーマ、お前本気でそう思ってるのか？」

「ああっ、あいつらを守れるのなら俺の命など、安いもんだ」

「……ふふっ、ふはははっ！！」

彼女は馬鹿デカイ声で笑い声を上げた。

が、次の瞬間、彼の胸ぐらを掴み、これでもかというくらいに恐ろしい形相で睨み付けた。

《キサマぁ、ふざけたこと抜かしてんじゃねえぞ！！》

「……サイサリス？」

「おい、何が俺の命など安いだ。
そんな自分の命を軽く見る奴がアマリーリスのアタマ務まると思ってんのか？ああっ！？」

「てめぇ、何が言いてえんだオイ」

「あいつらはお前を頼りにしてんの知らねえのか？
お前の身に何かあったら……あいつらはどうするんだ！？」

「そんなもん、ユノンがいる。あいつの能力なら俺がいなくても十分やってけるさ。

テメェは俺を心配する暇あるんなら銀河連邦ぐらい、一撃でブッ飛ばす兵器を作れってんだ！」

サイサリスはさらに苛立ち、空いてる左拳を上に掲げた。
これは明らかに彼を殴ろうとしている動作だ。

「てめぇの頭イカれてんじゃねえのか？
お前をボコってその思考変えてやろうか。

お前はエルネスの親友だから優しくしてるだけであって、ホントならお前の命など知ったこっちゃねえんだぜ？」

「ならそれでいいじゃねえか。余計な心配すんなって何度もいってんじゃねえか！」

「……お前、ユノンちゃんが好きなんだろ？
あの娘が好きなのに、なんでそんなに死に急ぎたがるんだ！？」

「……」

さすがのこればかりは、ラクリーマもなにも言えなくなってしまった。

しかし、ラクリーマは体をぶるぶる震わせている。

「……るせえよ。俺の……何が分かるんだよ！！」

「！　？」

ラクリーマもついに怒りをぶちまけた。驚異的な握力、腕力でサイサリスの首元をグッと掴み、引き上げた。

「ぐぐっ……っ」

「俺は死ぬ気で毎日を生きとんのじゃあ！！ガキんときからずっとな！！

それをお前に言われる筋合いはねえんだコラぁ！」

ついに圧倒され、今度は彼女が窒息しかかり苦しがっている。

「それになあ、こうでもしねえとエルネスやラン、いや今まで死んでいった仲間に対して申し訳たたねえんだ！！

あいつらを死に追いやった原因は……俺にあるんだからよぉ！！」

《ズキィ！！》

「うぐうっ！！」

突然、患部にまた激痛が走り、その場でうずくまった。

彼女もやっと手を放されてドサッと座り込む。

「がは……はぁはぁ……見ろ……。てめぇ、無理がたたりすぎて身体中にガタがきてんだよ……。

一番、体を大事にしねぇといけねえ立場のお前が、そんなんで総司令をやっていけるんか……？」

「……」

サイサリスは痛みで震える彼の肩に手を置いて、なだめるような口調でこう言った。

「なあラクリーマ。理由がどうあれ、自分自身をいたわれ。

部下のことは気にしなくていいんだから、自分の思う通りに考えて行動すればいいんだ。

あたしらはどう転んでも、自分たちの意思でお前についていくし…
…それほどの信頼と器がお前にあるんだぜ」

助言を受け、ラクリーマはフッと鼻息を出し、笑う。

「……心配すんな。別に今すぐ死にてぇわけじゃねえよ。ユノンに告るのもあるが、俺にはまだしねぇといけねえことがあるんでな。ランのーー」

「ランちゃんの……？」

ラクリーマはゆっくり立ち上がり、ふらふらと部屋のドアに移動した。

「せっかく話を来たのに喧嘩沙汰にしてすまなかった。お前も非番だろ？ゆっくり休んで、そして早くあの２つを完成させてくれよな！」

そう言い、ラクリーマは部屋から出ていった。

彼女は立ち上がり、ソファーに座ると、またコップに酒を入れる。

コップを持ち、ちひちび啜るように飲んでいく。

（ラクリーマ……。あいつもすっかり変わったもんだ。昔はウザいほどに暑苦しくて可愛いげのある奴だったのに……これも総司令としての責任を感じて……。

エルネス、アイツにどう責任とるつもりだ。あいつ、このままじゃあ取り返しのつかねえことになるぞ）

彼女はコップをテーブルに静かに置くと、横にある設計図を見ながら溜め息をついた。

「はあっ……これじゃあ、あの２つの能力を１００％引き出すのは無理だな。
現状のあいつにゃ、使いこなせねぇ代物だ。
治す気なさそうだし……どうするんやら……」

……

数時間後……。

「う……ん……」

ユノンは目を覚まし、起きあがった。

……全く記憶にない。何をしていたのだろうか……、全く思い出せなかった。

「……？」

キョロキョロ辺りを見渡す。いつも通りに周りは整頓されている。

……酒を飲んで、そして煙草を吸いに行った所までは覚えている。しかし、そこから何をしたか全く思い出せない。

「……そう言えば、あの子を呼ばないと……」

立ち上がり、ふらふらとデスクに向かうと丸い球体の形をした通信機に触れた。

しばらくして……。

“地球人のしずか、副司令官がお呼びです。直ちに部屋に移動してください。繰り返す……”

艦内にこのような放送が流れ、ほぼ全員がビクッと体をひきつった。

“なにやらかしたんだ……？”

それしか思い浮かばなかった。

しかし、その呼ばれた理由はしずかはよく知っていた。

「……」

しずかは急いでユノンの部屋に向かっていた。

しかし、彼女は非常に不安な顔をしていた。

なんせ、あの大浴場の一件でユノンに恐怖を抱いていたからである。

“慎重に行動しないとタダではすまない”と考えていた。

そして、しずかは彼女の部屋の前に立ち、大きく息を吸って心を落ち着かせた。

（こうなったら……行くしかないわ……）

「失礼します！」

ドアが開き、背筋を伸ばしてキチキチとぎこちない歩き方で入った。

前を見ると、ソファーに肘を持たれて座る彼女が飄々とした態度で

しずかを見つめていた。

「こんにちわ、しずか。あの約束を果たしてもらおうかしら……？」

「……」

ユノンは威圧をかけてくる。そのせいでしずかは恐怖からか身震いし、血の気が引いていた。

「ふふっ、ここに座りなさい」

「……」

しかし、緊張で何もしゃべらないしずかに対し、ユノンは彼女を威嚇するかのように睨み付けた。

「返事ぐらいしなさい！！」

「はぁっ、はいっ！！」

びっくりし、慌てて大声を上げ、ユノンは呆れて溜め息をついた。

「……緊張してるからと言って、目上の人が話をして、返事を返さ

ないのは失礼極まりないことよ。覚えておきなさい」

「……はい……」

とアドバイスしてしずかを前のソファーに座らせた。

「緊張しなくていいわ。ただ、あなたと女同士の話をしたいだけよ。何か飲む？」

「いっ……いえ……」

「そう。遠慮しなくてもいいのに」

そして彼女らは対面した。

「……」

「……」

全く二人とも喋ろうとしない。時間だけが何秒、何十秒と流れていく。

しかし、しずかからしたら一秒一秒が長く感じるのだった。

……二人の誰かから話さないのは話題がないからなのか、それとも……。

「……あなた、あの時何か言いたかったのでしょ？喋らないの？」

「……そっ、それは……」

しずかは何を言おうとしていたか忘れていた。

今思えば、どうでもよかったかもしれない事だと思えてきた。

……それにしてもなんだろう、この空気、雰囲気。

もし、相手がラクリーマやレクシーなら自分から進んで話をできるのに、彼女だけは……。

それはそうだ、彼女は彼らとは正反対の雰囲気を持つ女性だ。

悪く言えば、このような組織では絶対に浮いてしまうような存在なのだ。

そして、しずかをあることに疑問を抱いていた。

「……もういいわ。ならしずか、あたしに聞きたいことがあったら質問して。
答えられる範囲内なら答えてアゲル……」

それを聞いたしずかは待ってましたと言わんばかりに彼女にその疑問を話した。

「……ユノンさんは、どうしてこの組織に入ろうとしたんですか。
自分から進んで加入したんですか？」

「……」

ユノンは黙り込んだ。
もしかしてあまり教えたくないのか、徐々に顔を歪ませる。

「……その質問の理由は？」

「理由……ですか……。
何か……あなたはここの人達からしたら違う雰囲気ですから、失礼な話ですけど……いやっ、そうゆうわけではないんですけど……なんかですね……」

完全にテンパっている彼女を可愛く思えたのか、ユノンはクスッと笑った。

「……いいわ。その質問でいいなら教えてあげる。

あたしはね、まだ故郷惑星にいた時、侵略されたのよ。このアマリーリスにね」

「！　？」

しずかは信じられないような顔をした。

“侵略……なら、彼女も被害者…？

けどそれならその時に殺されているのでは……”

ユノンはさらに話を続ける。

「その時、惑星一の名門大学を首席で卒業したばかりでね……。

確か……あれは、３年も前になるわね……」

ユノンはあの頃を思い出す。

しかしそれは同時に、彼女からしたらとても苦い過去であった。

◇ＰＡＲＴ．２６　本音（後書き）

こんな恋話や相談をする敵役がいても面白いと思います。

次はユノンの過去編に移ります。

◇ＰＡＲＴ．２７　ユノンの過去（前編）

「今日、いっしょに飲みに行かない？」

「……」

街中でチャラチャラした男に声をかけられる一人の女性。

緑色の髪に頭上に生える尖った耳、そしてこの上ないほどの美形の顔、背が高く、スラッとした理想の体格、どんな男性からでも狙われそうなモノを持つ女性。

そう……ユノンである。

「……」

彼女は返事すらせず男から去ろうとする。

「ちょっと待ちなって。キミみたいな美人と仲良くなれたらなって……」

「……！！」

《ドゴっ！！》

「ブハッ！！」

見るもの痛々しいほどに、彼女は男の局部を蹴りあげた。
男はその場でのたうち回り、脂汗を流した。

「……」

ユノンは男を睨み付けて、その場から去っていった。

「ちくしょ……覚えてやがれぇ！」

周りの通行人はそんな彼を見てクスクス笑っていたのだった。
よく見ると、全員の頭にはユノンと同じく犬の耳を生やしていた。

……セクターα内の2号星、『惑星ドグリス』

ここは主に犬の血を引く知的種族『ドグリス人』が存在している惑星である。

彼らの特徴は共通して聴覚、嗅覚が優れて、なんらかの一能力が高いことである。

例えば、瞬発力が優れるとか、知能が優れる、腕力が優れるなど、これだけなら地球人とかわりないが、違うところはその一能力が地球人を遥かに上回るほどである。

実は発達した科学技術を除けば、地球を真似したとしか思えないほどの類似している。

簡単に説明を入れれば、環境はもとい、政治、思想、宗教、貧富、人種……等が種族独特ではあるが、根本的には地球での内事情と変わりない。

それに伴い、人間環境も地球人と同一性を持ち、建前と本音は当たり前、差別やいじめ、そして自殺など、心に潜む闇もまた存在するのであった……。

ちなみに地球よりはおろか、惑星モーリスよりも遥かに凌ぐ科学技術を持つが、銀河連邦には加盟せず、警察、軍隊で惑星を治安しているのである。

ここは、その惑星のアメリカと同じ座標に位置する巨大体陸『リューベン』の真ん中から西側にある大都市『ユマ』。

彼女は自分の通う大学の寮に帰って自室に入る。
鍵をかけて、きちんと整頓されたデスクでまた勉強を始める。

……彼女の年代なら可愛いぬいぐるみやオシャレな家具など置きたくなるハズだが、彼女の部屋には全くない。

あるのは、来たばかりに配置してあるベッドとテーブル、そして勉強に使うデスクだけだった。そして見ただけで狂いそうになるほどの教本とテキスト、大学レポートの山のみである。

いくら勉強好きでも、ここまでくるとさすがに異常だ。

「……」

飄々とした態度で勉強に励む彼女。休日と言うのに遊びにいかないでせっせと頑張っている。

……実は、友達がひとりもいないのであった。
大学に通うなら普通に友達一人や二人はできるハズであるが、全く輪に入ろうとしなかったのであった。

彼女にとっては、友達ということに興味を持つこと、いや、人と馴れ合う自体、この上ウザく思っていた。

彼女が大学に入った理由も、『勉強するため』。
決して、楽しいキャンバスライフを送るためではなかったのだ。

ゆえ、同級生たちからは敬遠されて、変な噂までつけられる始末。

しかし、彼女は全く気にしなかったのでどうでもいいことなのであるが。

「……ふう」

数時間経ち、彼女は立ち上がると、自室の冷蔵庫から飲み物の入った缶を取り出した。

ー酒である。中央のテーブルに持っていき座ると、開けてグビク

ビ飲み始める。

彼女を癒してくれるのはこれぐらいである。

しかし、段々飲んでくると妙な虚しさや淋しさがやってくるのであった。

そんな時に彼女を癒す……いや、安心させてくれるのが……。

“プツ……プツ……っ”

彼女は手首をナイフで軽く切り、切り口から少量の血液がにじみ出た。

（こうでもしないと安心できないわたしは……やっぱり気持ち悪い女だ……）

なにもしていないのに罪悪感でいっぱいになり、うずくまり涙を流し始めるのであった。

しかし、彼女はこうすることで幾分、救われるような気がするのであった。

ーーこれがユノンの日常である。今でこんな状態なのだから、それまでどんな生活をしてきたのか大体、察しがつく。

ー彼女は幼年期から心を閉ざしたまま、成長してしまったのだから……。

大学内でも。

「君、僕らの研究会に入らない？」

同年代の学生から、こういう誘いを受けても、

「……」

一言も喋らず、『関わらないで』と言っているかのような嫌そうな表情で見た後、学生から離れていく。

「……あの子やめた方がいいよ」

「どうして？」

「だって無口だし、暗いし、勉強にしか興味なさそうだし。あと、なんか人を見下してるような表情するしムカつくんだよ。自分が美人だからって調子に乗ってるんじゃね？」

「うんうん。話しても喋らないし、喋っても授業中で必要最低限の

ことしか言わないから気味が悪いんだよね。まあ、この上ウザいのは間違いなし！」

「……あぁ…あ、死ねばいいのに……」

言われ放題だ。
日本の学校でもありそうな人間関係だ。

しかも様々な土地の優秀者で集まったこの大学でそう言われるということはタダゴトではない。

周りの人からの印象は『頭は申し分なく素晴らしいが、社交性、協調性が壊滅的』、『勉強にしか興味がない引きこもり女』、『一生独身』……等々、ひどい有り様だ。

それでよくこの大学に入れたと言われることがあるが、彼女の学力は非常に高い。
推薦が通り、入学することができ、学費は特待生なので学費を免除してもらうことができたのだ。

「……」

喫煙所で一人でタバコを吸っていっても、

“あんな美人が汚ならしい煙吐いてさぁ、みっともないね……”

“ほんとほんと、幻滅だな…”

ひそひそ話で悪口で言われるのだから、堪ったものではない。

「……！！」

“ビクッ！！”

しっかり聞こえていたので、その二人をグッと睨み付ける。

「……」

二人はそそくさと去っていった。

彼女はまた何食わぬ顔で吸い続ける。

“自分に居場所がない。この惑星一の大学に来たってのに全くこれまでと変わらない。

みんな、あたしを嫌うんだ、あたしを不気味と思ってるんだ。

だって……”

……と、またこんなことを考えてしまうんだから、また部屋に戻り、

“プツ……プツ……っ”

また切ってしまった。
死にたいわけでもないのに。
しかし、こうでもしないと安心できない、落ち着かない。

自分の血を見ないと安心できない暗い女、あの母親と同じ、タバコと酒でないと満たせないうす汚い女……。

彼女の思念はこんな感じであった。

……そして、大学を卒業。しかも首席で、というとても輝かしい栄光であるが、彼女は全く嬉しがることもなかった。

それは、この先どうするかで悩んでいたからだ。

彼女はこれといったやりたいことがない。

学者になりたいわけでもなく、就職にしてもこんな性格ではどこも雇ってくれないだろう。

現にバイトでさえ、ことごとく落とされてるのに就職など不可能に近い。

そんなわけで、彼女は近くの公園のベンチで黄昏ていた。

これからどうしようかと……。自分の育った施設に……いや、大人になって、また戻るなんて……、いや、そんなこといってる場合ではない。

彼女の貯金はないため、このままではホームレス……しかし、それだけは避けたい。

しかし金がない、行き場所すらない彼女はどうすればいいのかわからなかった。

（……あたしって情けないなぁ。一体なんのために大学に行ったんだろう……？

考えてみれば、必死に勉強してきたのもただ虚しさを埋めるためだったからなぁ……。

こんなくだらない人生になるんだったら、なんであの時生き残っちゃったんだろ……死ねればよかったのに）

夢も希望もない彼女とは無関係にただ時間だけが過ぎていく。

しかし、そんな彼女を遠くから謎の男3人が彼女を見つめていた。

「……見つけたぜ。あの時のお返しをたっぷりさせてやる。お前ら、ショータイムだ！」

“待ってましたぁ！”

男達を仕切る一人はどこかで見たことのある顔であった。

……その夜、彼女は街を歩いていた。

しかし、目的地など何もない。　ただ、無意識にフラフラとさ迷っていた。

「……」

同期生は皆、夢があり、それぞれの道を歩み始めた。しかし、彼女はそれがない。

卒業してしまったため、もう寮には戻れない。

と、いっても行くあても帰る場所もない。

イルミネーションが輝き、夜であるにも関わらずまるで昼間のように明るい。

町中には様々な人や車が行き通り、恋人達や会社員、いまから遊びに行こうとしているのか、若者達がワイワイ騒いでいる。

……彼女にとって非常に苦痛である。

彼らを疎ましく思えてくるのであった。

“……バカにしてるのか?”

普段の光景も、今の彼女からしたら腹立たしくなるのであった。

しかし彼女が怒ろうと何だろうと、何の意味の示さない。

そうして段々、自分が情けなくなっていくのである。

……彼女は人気のない街の河川沿いを歩いていた。

今日は月が出ていないが、街灯があるため幾分明るい。

(生きてても何の希望も夢もない……けど、死ぬ勇気もない……どうすれば……)

そんなネガティブなことを考えていた。

突然、

「!?」

何者かが彼女の背後を取り押さえ、口から鼻にかけて白い布を押し当てた。

「……!!」

彼女は必死に抵抗するが、次第に強烈な睡魔が襲い、そして――。

「……動かなくなったぜ。ならこいつを運ぶか……」

あとから数人の男が眠りについた彼女へ駆けつけて、持ち上げた。

近くにある車のトランクに入れてその車は走り去っていった。

……

「！？」

彼女は目を覚ました。
しかし、何も見えない、体が動かない。
何か手錠みたいなもので束縛されているかのようだった。

「～～～！！」

口に何かを入れられて、声も発することも許されない。

徐々に彼女を恐怖感が襲いかかる。必死で抜け出そうとするが、彼女の力ではそれは敵わなかった。

「……やっとお目覚めか」

男の声が聞こえ、真っ暗だった視界に光が入った。

「！！」

「ようこそ」

彼女の目の前には、４～６人の男がニヤニヤと笑いながら彼女を見つめている。

目の前の男は以前見たことのある顔だ。

「……あの時はよくも俺の大事なトコロを蹴りあげてくれたな。その礼はたっぷりとさせてもらうぜ」

その男は1、2年前に彼女のキツい攻撃を喰らったあのチャラい男であった。

彼女はハッと思い出したのだった。

……部屋全体がコンクリートに覆われ、周りは何もなくどんよりとした空気が立ち込める空間だった。

後ろには廃材と化した金属製のベッドがあり、彼女はフットボードに手錠を巻き付けられて、動けなくさせられていた。

「ああっ……」

無口だった彼女も恐怖からか、ついに声を出してしまう。

「へえっ、なかなか可愛い声してんじゃん？楽しみがいがあるなぁ」

「……いやっ……イヤっ！！」

これから起こるであろう最悪の事態に察知し、震える彼女を男達は

興奮し、追いつめていく。

「……あとで、飢えた奴らがいっぱいくるから楽しみにしてな……。まず俺らで楽しもうか……」

「ああっ……ああっ……」

男はナイフをとりだし、彼女の顔にちらつかせた。

「へへっ、ションベンでも漏れそうなのか？」

「だっ……誰か……助けてーっ！！」

彼女は叫ぶが、全く意味を介さず辺りにこだまするだけであった。

「今さら叫んでも誰もここにこねぇーつーの！」

「こんな気持ち悪いところになぁ！！ギャハハハハハっ！」

「ここはナァ、何年も前につぶれた病院なんだ。しかも街から離れた場所にあるから誰もいねェんだよ」

「……」

それを聞いた彼女は絶望のドン底に突き落とされ、無気力となってしまった。

「……諦めたか。ならおっ始めるか……」

「へへっ、かわいいからさぞかしヤりがいがあるだろうな！」
男の一人が彼女の口元を押さえて、こう呟いた。

「緑色の長い髪……かわいいよ……」

「……！！」

その言葉が、彼女の顔色を徐々に青ざめた表情に変貌していく。
ー一強烈な嫌悪感と吐き気に襲われて……。

「ぐ……ぅ、げえええっ！！」

「うわあああっ！！こいつゲロ吐きやがったぁぁ！」

「汚ねぇっ！！」

そこで粗暴してしまい、物凄い臭いと状況にこの部屋内は大混乱と化した。

「……っ」

ユノンは気を失った。
しかし、男達の怒りは頂点に達していた。

「このアマ……こんなトコで吐きやがって……許せねえ！」

その男はナイフを彼女の方へ向けて、中にいる全員にこう叫んだ。

「こんなゲロ女にはもう萎えた、殺せ！！」

“オオッ！！”

全員が一斉に襲いかかる。
しかし彼女は全く起きる気配がない。
男達の振り上げた拳やナイフが彼女の頭上に振り下ろされようとしていた。

突如、

《ズオォオオっ！！！》

“うわあああああっ！！”

聞いたことのない爆音がこの部屋へ響き渡り、男達は驚き、部屋を出ていった。

近くの窓から顔を出して街の方を見ると……。

「うそだろっ……？」

なんとさっきまで何ともなかった街が一瞬で火の海と化している。

これは一体……？。

全員は彼女をそっちのけで去っていき、彼女は取り残されたのだった。

しかし、彼女は気を失ったままで動こうとしなかった。

……

「う……ん……」

気がつき、彼女は目をゆっくり開けた。
だが、

「え……っ？」

目を疑った。
賑やかだったあの街が跡形もなく廃墟と化して所々建物に火炎が上がっている。よく見ると、辺りには無惨な死体の山が散乱し、まるで地獄のような光景であった。

そして、周りにいるのがあの男達ではなく。全員が様々なタイツのような服に身を包んだ謎の男達だった。
しかも、みるからにドグリス人ではない、異星人だ。

（なっ、なによこいつら！？）

謎の男達に取り押さえられて振りほどこうとしても圧倒的にこいつらの方が力は上で動けない。

「ほお、目覚めたか。大人しくしときな」

それより全くワケが分からない。何が起こったのかさっぱりだ。

「へへっ……。こりゃあリーダーは喜ぶだろうなぁ。」

「ああっ。もうこの惑星全土を焼きつくしたからもうこっちに戻ってくるだろう」

惑星を焼きつくした？
こいつらは一体何を言っているのか。

「けど早くしねえと銀河連邦がやってくるぜ。いくら加入してねえ惑星だからってエネルギー量で感知されるからな」

「ああっ、俺達アマリーリスがここで捕まるわけにはいかねえ」

“アマリーリス？”
聞いたことのない名前だ。まさか街がこんなことになってしまったのもこの男たちの仕業か。

すると、

「おっ、リーダーが帰ってきた」

向こうから男の群れがこちらにやってくる。
合流すると笑顔で彼らを迎えた

「お帰りなさいっス。どおっスか、そっちは？」

「もう生存者はいねえよ。軌道上からあれだけぶっぱなせばただじゃすまねえな」

ユノンはリーダーと呼ばれる男を見た。
ぼさついた銀髪に顔にはおびただしいほどの切り傷。
筋肉隆々の身体が黒いタイツから浮き出ている。

そう……ラクリーマであった。

「ん？どうした、この女？」

「ここからずっと先にある廃墟で束縛されてました。気を失ってたみたいですけど」

彼はしゃがんで彼女を見つめる。

「……」

「……」

これが二人の初めての対面である。
不敵な笑みを浮かべているラクリーマに対し、彼女は……。

（なんて威圧感なの……さっきの奴らとは比じゃない……）

彼から感じるモノ、それは恐ろしいものであった。
笑っているが、その奥からは何か狂気じみた何かを感じる。

「……べっぴんじゃねえか。
束縛されてたってことは、ヤられる前だったってわけか。

なら俺が代わりに……」

すると、

「リーダー、生き残りを発見しました！」

向こうから、彼の部下達がある男一人を連れてきたのだった。部下達は男を地面に叩きつけて、足蹴にしている。

「ちくしょう！！おっ、俺らの仲間を全員殺しやがってぇ！！」

その男は、彼女を襲おうとしていた男達の一人で、ナイフを持っていた中心人物であった。
しかし、彼も部下たちにボコボコにされたのか酷い有り様であった。

ラクリーマはその男に近づき、髪の毛をグッと掴んで睨み付けた。

「かわいそうに、大事な仲間も殺されて。
けど安心しな、俺がお前を仲間の元へ向かわしてやるからな」

「へっ!?」

威圧をかけ、男は徐々に口を震わせている。
こんな恐怖を味わったことは今まで一度もなかった。

「ああっ……助けてくれ……っ」

「助けてくれ……？無理だな」

「ええっ……？」

許しを乞おうもラクリーマは一切拒否し、完全に追い詰めたその男の耳元でこうささやいた。

“なぁ、ドグリス人てのは元々犬なんだろ？噛みつきとかさぞかし強いんだろうな……”

「え……っ、ちっ違います……」

“なら、ちょっと俺の噛みつき……見てくんねえか……？”

「どっどうゆう……こ……」

その意味を聞こうとした時、ラクリーマは大口を開けて牙のような歯を剥き出し、まるで猛獣のような目で男を見ていた。

そして、

「うぎゃあああああっ！！」

辺りに男の断末魔が響きわたる。

男の血が辺りに飛び散り回る。

凄惨の一言でしか言いようがない。

「……」

ユノンもその光景に目を背け、そして最大の恐怖と絶望を経験した。

こいつら……人じゃない、鬼だ、悪魔だ。

それしか形容できない。

次第に、こう思うようになった。

“次は……あたしだ……”

残虐行為が終わり、彼は飛び散った血液を腕でぬぐっている。

「クックック……さすがリーダーだぜ。
やることが一味違うぜ」

「けっ、それはありがとよ。
あ～あっ、口んなかと周りが血だらけだぜ。
さて、まずは……」

《ガシャン！！》

ラクリーマはあの義手からお馴染みのレーザー砲を突出、見るも無惨と化した男【だった物】に狙い定め、そして、

《ピピッ！！》

４本の蒼白いレーザーが直撃し、一瞬で燃え上がった。
ラクリーマと部下はそれを見て不気味と笑っていた。

“命を……クズみたいに扱って……何とも思ってないのか……っ”

さすがの彼女も徐々に恐怖から怒りを募らせる。

しかし、今の自分は何もできないという状況に無力すぎて腹立たしくなるのであった。

周りはユノンを囲み、威圧をかけてくる。
ラクリーマも彼女の髪の毛を掴み、無理やり目を合わせた。

「最後に、お前さんはどうゆう死に方がお望みかな？クックック……」

そう聞く彼に対し、彼女は……。

“ぺっ……”

“！？”

なんと彼女は彼の顔面に唾を吐いたのだった。

「なっ……何よ……。殺したきゃ殺しなさいよ。あたしはビビると思ったら大間違いよ……」

彼女のとった行動と言動は明らかに彼に対する冒涜だ。
部下はそれを許すハズがなかった。

「この……クソアマ……リーダーになんてことを……」

「リーダー、そんな女八つ裂きにしましょう！」

「……」

部下に促されるも彼は黙ったままだ。本当は彼の性格なら怒りに怒り、すぐに行動に移すハズなのだが。

「……どうせもう、誰も生き残っていないんなら、あたし一人いてもしょうがない……。

……殺さないの……ねえ！！」

あの彼女がここまで感情的になるなんて初めてのことだ。

彼女自身もここまで喋るなんて思ってもみなかったことだ。

「……フフ、てめえのその不屈の根性、気に入ったぜ」

「えっ……？何……？」

ラクリーマは彼女を持ち上げて、声高らかにこう叫んだ。

「よっしゃあ、こいつをエクセレクターへ招待する。

お前ら、帰ったら歓迎会だ！！」

部下達と彼女は数秒間、黙り込み、

“えええっ～～っっっ！？”

全員が大声を上げて、驚愕したのだった。

さっきまで殺すと言っていたラクリーマが、突然手のひら反したかのように彼女を招くとは。

「いいじゃねえか。考えればこんな美人を殺すのも勿体ねえし。早く帰ろう。連邦が到着する前にずらかるぜ！」

……やはり誰も、彼の真意は計り知れないのであった。

◇ＰＡＲＴ．２８　ユノンの過去（中編）（前書き）

久々の投稿です。

◇PART．28　ユノンの過去（中編）

“乾杯ぃ！！”

――ユノンを連れ去って、艦内の食堂では大量の酒や食べ物をテーブルに置かれ、騒ぎに騒いでいた。

「…あっ……あ」

ラクリーマの隣の席には彼女は目を点にしながら座っていた。なにがなんだかさっぱりわからない、部下達の騒ぎ声すら気付かずあたふたしているだけだ。

「お前、酒飲めないのか？」

「！　？」

彼の声にやっと我に帰り、振り向く。しかし、あまりにもワケがわからない状況で声を発せれるどころか、気分が悪くなる。

「お前、あの時の威勢はどうした？そんなに固くなっちまって」

「…えっ…あっ……」

当たり前だ。殺されるかと思っていたハズどころか、自分をこんなむさ苦しいに招待されて歓迎されるなぞ思ってもみなかったことだ。

「へへっ、ネエチャン。楽しんでるかぁ！？」

「ひっ……」

酔っ払った部下の一人が彼女に絡んで来たが、当の本人は見るからに嫌そうな顔をしている。

「おいおい、嫌がってるじゃねえか！
お前はあいつらと楽しくしてな！」

「へへっ、すんません」

一体、なんだこの空気は。
一人の方が楽である彼女にとっては精神的に辛い。
次第にその疑問が徐々に怒りに変わり、拳をグッと握りしめた。

「な……何なのよ……いったい……っ！！」

そのいらだちが募り、ついに

《バン！！》

「いい加減にしてよ！！」

“！？”

彼女は両手を強く叩きつけて全員に睨み付けた。
周りは一瞬で静まりかえる。

「……意味がわからないわ……どうして……あたしを助けたの！？
あの時は殺る気満々だったのに……！！」

「……あの小娘、言わせておけば……」

部下達も徐々に殺意を湧きはじめ、一触即発な雰囲気となりつつあった。

が、ラクリーマは部下に向かって手を前に出し、彼女を目を細めて見つめる。

「まあ、お前ら落ち着け。

……おい、娘。名前は？」

「……」

彼女は答えようとしない。しかし彼にはそれで納得するハズがなかった。

《人の質問に答えられねぇのか！！》

「……！！」

彼の怒鳴り声は、その場にいる全員を震撼させた。

「お前、名前を忘れたワケじゃねえだろ？
なあに、聞いたからって何もしねえよ」

「……」

彼女は震える唇を少しずつ開けて、動かし始めた。

「……ノン」

「何だって？聞こえねえな」

「……ユノン」

「そうか。なら、ユノン。お前に聞きたいことがある。助けて悪かったか？」

「なぜ……」

「なぜだと？もう、てめえの故郷と生物は全滅して、てめえ一人生き残ってなんの意味がある？」

「……」

そんなこと言ったって、あんたらが自分の星を壊滅させたのにその質問はおかしくないか？

「もう一つ聞きたいことがある。お前、夢とかやりたいことがあるか？」

「…夢…？」

彼女の答えはＮＯだ。でなければ、今頃こんな人生になってはいなかった。

「……」

「……答えられねえか。まあいい。
そういえば俺の名前を、教えてなかったな。
名はラクリーマ・ベイバルグ。
このアマリーリスのリーダー兼この宇宙船エクセレクターの艦長を務めてる」

ラクリーマ・ベイバルグ……。
なんだこの名前、珍しすぎるのもほどがある。
そんな名をつける親も恥ずかしくなかったのか。

「俺達はいままで数多くの星を侵略してきたんだ。

何故かわかるか？」

「……さあ……」

「……生活のためだ。俺はともかくこいつらが生きていくにはこれしかねえからだ。

こいつらは荒くれ者や重罪を犯してきたからマトモには生きられねえ奴らよ」

この組織は荒くれ者、犯罪者の集まり……にしては、仲が良すぎるような気がするが、どうしてだろうか。

「こいつらには夢や希望がねえ。だがな、生きたいという意思はあるんだ。
だからこいつらにはここがお似合いというわけだ。

ちなみに俺は……戦闘や殺戮、そして性欲を満たせればそれでいい。
だからこの組織は居心地がいいぜ」

こいつ、一体何を言っているのか。頭がおかしいんじゃないか。

「話は変わるが……お前、どうする？ここに連れ込んだのも、雑用、性欲を満たす係が足りねえからさせようかなと思っていたが、嫌か？」

「……！！」

彼女は拳を握り、睨み付ける。完全に自分を汚れ役として扱おうとしていたからだ。

「嫌だろうな。けど、そうしないとここでは生きていけねえぞ。最も、戦闘やオペレーションが得意ってんなら話は別だかな」

「なんて……男なの……っ？」

「ここは誰かを招待できるほど余裕がねえ、全員が生きるのに必死なんだよ。

お前、生きる意志がないんなら殺す価値もねえ、進行中の近くにある小惑星でおろしてやるよ」

「……」

「クックック、今日は俺が連れ込んだから義理で1日くらいは休ませてやる、明日になったらどうするか考えろ」

「……」

ラクリーマは笑っていた。彼女にとっては屈辱であるが、同時に今の自分では、まさに無力だと嫌というほど分かるのであった。

……その後、彼女は個室に案内された。
しかし、案内のされ方も丁寧ではなく『連れてきてやった』みたいな扱い方だった。

（あたし……どうなるんだろ？）

部屋はきれいに整頓されている。こんなむさ苦しい所でもここだけは別世界のように思えてくる。

とりあえずソファーにゆっくり座り、背もたれして目をつぶった。

……フカフカしていて座り心地は最高だ。

空き部屋のハズなのに、目のいきどおる先まで綺麗にされているのは明らかに不自然だ。

「はあ……っ」

しかし、彼女はそんなことを思っている暇などない。
あの男から課せられた選択肢を選ばないといけなかった。

食べ物や水はおろか、空気すらない小惑星におろされるのは分かっ

ていたからすわなち死を意味していた。

……汚れてでも生きるか、それが嫌でおろされて死を選ぶか。

確かに死ねれば、もうくだらなかった自分の人生に終止符が打てる。

だが、本当にそれでいいのか、それでは何のために生まれてきたのかわからない。

でも、ここでやらされることは苦痛以外に何事でもないことだ。

何度も悩む、二つに一つ、選ぶしかない。

そんな中、

《プシューっ》

「よお、お気分はいかがかな?」

「!!」

ラクリーマが突然、押し入る。彼女は怯え、体を丸めて震えはじめる。

「おいおい、そんなにおびえなくてもいいだろ!

……明日、もうひとつの惑星を侵略するんだが見に来るか?」

「…えっ……？」

突然の誘いに耳を疑う。

「俺らがどんなことをするのか見ておくのもいいと思ってな。最も、お前がここで生きていくのならな？」

……侵略という悪の行為を見に行くに気が引ける。

すなわち、彼女の目の前で自分の故郷と同じ目に遭わされるのをただ黙って見させられるということなのだ。

「……まあいい。戸惑ってるんなら強制見学だ。それでいこう！」

「……はっ？」

「明日は早いからよく寝とけよ？じゃあな！」

「ちょっ――」

彼は部屋から出ていった、しかも満面の笑みを浮かべて。

彼女は納得できるはずがなかった。

――あたしの意見ぐらい聞けぇっ！！っと……。

ますますわけのわからない展開に進み、頭を押さえて溜め息をついた。

……数十秒後、ふと彼女は立ち上がり、部屋から出る。

左右には果てしなく長い通路があるだけだ。同じような部屋へのドアもいくつかあるが、密集しているとはいえない。

簡単に言えば、孤立しているようなものだ。

（これを見ると、ここは相当広いのね……。宇宙船のようだけど初めてだわ……）

惑星ドグリスの技術力は普通に宇宙旅行を海外旅行と同じ感覚……とまではいかないがそれに近似するほどで、様々な宇宙船が建造され、一般人でも用意に近くの宇宙に進出できていた。

彼女の場合、それとは無縁だったために乗ることがなく、この宇宙船エクセレクターが人生初めての宇宙進出であった。

かといって、今に置かれている状況上、嬉しいわけがなく、本当に形容しがたい複雑な気持ちである。

「あんたかい、リーダーに連れてこられたって女は？」

振り向くと、そこには一人の男が立っていた。

顔中に爬虫類のようなウロコを持ち、ラクリーマのように筋肉の浮き出た赤いタイツが目立っている。

――若りし頃のレクシーである。

「へえっ、確かに美人だな。これならリーダーも気に入るのも分かるな」

「……」

「俺はレクシーってんだ。明日、侵略する際にあんたと一緒に行動させるってリーダーに言われたから挨拶に来たんだ。

名前は……ユノンだっけ？」

彼女は数秒後、コクっと頷いた。

すると、彼は何を思ったのか微笑し、こう言った。

「――あんた、人と話すのが苦手だろ？」

「！」

ズバリ的中することを言われた彼女は驚き、顔をひきつった。

「雰囲気からして分かるぜ。別に悪く言うつもりはない、ただそう思っただけだ」

彼は彼女を通り過ぎ、振り向き様でまた口を開いた。

「明日は早いぞ。今の内にいっぱい寝とけ。

――あと、この部屋は自由に使っていいが……あんまり汚すなよ、そこはリーダーの元カノの部屋だからな」

「えっ……？」

彼はそう言い残し、まっすぐ通路へ去っていった。

（……あいつに彼女がいたんだ。あんな男にも……）

意外に感じつつも、悔しい気分となっていた。

あの男が宴会で話していた通り……ここは犯罪者や荒くれ者、いわゆる各種族の人間社会からのけ者にされた奴らで構成された組織だ。

夢も希望もないのに……自分とは違い、明らかに楽しそうだ。まあ、悪事が仕事だからそうかもしれないが。

――自分とは違う。

“ゴソゴソ……”

ポケットに手を偲ばせ、中からカミソリを取り出す。

それは普段、彼女を『安心させる』ために使うものだった。

（……あたしはこれがないと……。

気持ち悪いのはわかっている……けど……）

彼女はおもむろに手首に当てて……。

気付いたら左手首にはもう新たな切り傷が出来ていた。

ドロッとした赤い血液が皮膚を伝って下へ雫のように落ち始めた。

彼女はその様子を魅了されたかのように見続けていた。

（……あたしがこんなことしてるって知られたらどう思われるんだろ……）

多分、全員が気味悪がるか『馬鹿』や『気持ち悪い』と一蹴されるに違いない。

今まで誰にも見せたり教えなかった彼女からしたら知られたくない。

もしも知られたら……。そう考えた矢先……。

“ドクン！！”

「うっ……うえっ……！」

口を押さえて、すぐに部屋に入り込んだ。
切羽詰まった表情で辺りを見回し、ある場所へ直行した。
彼女はまた気持ち悪くなり、吐いてしまったのだった。

「うえええっ！！えっえっ……」
ある場所とは当然、トイレである。

「はあ……っ、はあ……っ」

彼女の瞳から一筋の涙が流れ落ちた。
悔しさと自負の念が込み上げて唇をギュッと噛みしめ、うずくまった。

“あたしは気持ち悪い、異常だ。死ぬ勇気もない、こんなことしかできない。
けど、こうでもしないと生きていけない。
どうすればいいのよ……”

その思いは誰にも伝わるハズがなく、伝えることもできず、ただ虚しさと哀しさに染まるだけだった。

◇ＰＡＲＴ．２９　ユノンの過去（後編）（前書き）

お久しぶりです。
久々の投稿です。

◇ＰＡＲＴ．２９　ユノンの過去（後編）

……やめて！

彼女は耳を塞いでいる。何故なら、

（気持ち悪いんだよ、そんなに自分の血を見るのが好き？）

（趣味ワリィなぁ～～っ）

（死ねばいいのに！！）

“ううっ……。あたしだって好きでしてるワケじゃない！！
こうでもしないと――！！”

周りには今まで彼女を馬鹿にした奴らの顔が浮き出て、高笑いしながら視線を彼女に注目する。

（へへっ、美人がそんなことして……知られたらさぞかし変な目で見られるだろうな……）

（おいおいっ、やめろよ♪可哀想だろ……ってか、止めれないくせ

に♪）

（俺達が手伝ってあげましょうかぁ～♪気持ちよくなるために……）

彼女の顔は一気に歪み、このままで本当に心が病んでしまいそうだった。

“チクショォォっ！！どいつもこいつもあたしをバカにしやがってぇぇっ！！

全員死ねっ！死ねぇっ、死ねぇぇぇぇぇ！！”

……。

「！！」

目を覚ますと、部屋のベッドの上だった。

「～～～～っ！！」

休むために寝たはずが返って夢のせいで精神的に異常をきたしていた。

「ううっ！！」

反射的にまたカミソリで手首に当てて切ろうとするが……。

「ああっ……あ！？」

いつもならもう切っているのだが、今の彼女には色々な思念が混ざり合い、思いを遂げるのを遮っていた。

《ガァン！！》

「ハァ……ハァ……っ」

カミソリを床に叩きつけ、腕に歯形がつくほど噛みついた。

“気持ち悪い、そんなのわかってる！！”

また涙を流してしまった。

彼女は自分が一体何がしたいのかわからなくなってしまっていた。

「よお、起きてるかぁ！？」

「！　！」

レクシーが起こしに部屋へ入る。彼女は汗だくで青ざめた顔をしていた。

「おっおい、どうした？大丈夫か？」

彼の気遣いに反して、彼女は挙動不審そうな視線をしながら頷いた。

「……ならいい。もう作戦開始だからいくぞ！」

そういえば別の惑星を侵略するってラクリーマが言っていた。
彼女は今思い出した。

「起きたなりで悪いがついてこい。格納庫に案内する」

今日の彼の声は恐ろしいほどに怖かった。
昨日のような優しそうな柔らかい声ではない。
それは目標惑星の住民にとっては惨劇となることを物語っていた。

彼女は言われるままにレクシーについていく。
彼は全く喋ろうとしない、それは今から始まる仕事に集中している証拠であった。

「……」

彼女は歩きながら、左腕をギュっと握っていた――。

――長い通路を抜け、二人がやって来た場所は、

（うわぁ……）

彼女の口は空いたまま塞がらなかった。
無限と思えるような無機質の空間には横にズラっと統制されて配置している、全長１０m以上はあろう全身機械の巨人が何十、いや百は越える数が並び、その前には、全体が赤色のさまざま兵器が搭載してそうなフォルムを有する戦闘機がやはり、それらと平行になるよう並んでいる。

（すごい……初めて見たわ……）

驚きを隠せないユノンに対し、レクシーは自慢そうな表情で彼女を横目で見た。

「すげえだろ?あの巨大なメカは『スレイヴ』ってんだ。けど、今回は惑星侵略だからこの『ツェディック』を使用する、早く乗るぞ」

レクシーに連れられて、『ツェディック』と呼ばれる例の赤い戦闘機に乗り込んだ。

“パチっ……ウィーン……”

不思議なほどに広く感じる操縦席に座り込むとセンサーが反応して自動的に起動した。

しかし、レクシーは目の前の操縦幹を握ろうとせず、モニターに目を通していた。

“戦闘員、配置は完了したか?”

モニターに映るのはラクリーマであった。どうやら彼も別の同機体に乗り込んでるようだ。

「12号機レクシー、配置完了しました」

その旨を伝えると、突然ラクリーマはニヤっと笑った。

“レクシー、ユノンはいるか？”

「へい、隣に着座させてます」

“そうか、ちょっと変わってくんねえか？”

「了解。おい、リーダーがあんたに話があるそうだ」

レクシーが前のボタンを押すと、彼女の前にあるモニターが起動した。

彼女はそのモニターを見ると、ラクリーマはいかにも楽しそうな目をしながら彼女を見ていた。

“よお、ここでの朝のお目覚めはどうだ？”

「……」

悪いに決まってる。こんな状況且つ、あんな夢を見たのなら。

“……あんまり良さそうじゃねえな。

まあ、それもあと一時間後にはキレイさっぱり吹っ飛ばしてやる”

もしかしたら新たな快感味わえるかもよ、破壊や殺戮によ？”

「……」

この言葉が彼女をゾッとさせる。
この男は自分よりはるかに異常だ。

「よし、あと３０分後に目標惑星に到着するぞ、それまでは待機だ。ユノン、それまでレクシーに聞きたいことがあったら好きなだけ聞いとけ、こいつは真面目だからちゃんと受け答えしてくれる」

そう言い、彼は通信を切ってしまった。

「……」

「……」

……案の定、全く喋ろうとしない二人には非常に気まずい空気に包まれていた。

（喋った方がいいのかな……。けど……何を聞けば……）

質問内容を見つけようとして考えようとモジモジしている彼女を彼は急にため息を突きだした。

「そんなに気を使わなくてもいいさ。

まあ、あんたのその性格だとしょうがねぇのかもしれんが、そんなんじゃあここではやっていけねえぞ。

全員のノリはハンパじゃねえからな」

――てか、もう自分をここに入れる方向に進んでいる。

彼女の意思とは無関係に前に行くのは何か腹立たしかった。

ついに、

「……ねぇ……？」

「おっ、ついに喋ったか。どうした？」

声は小さかったがユノン本人から話しかけたのだった。

これは自分でも驚いている。

「……確か……アマリーリスって名前よね……。

凄い技術……使ってるようだけど……どっ…どんなエネルギーを使用してるの……？」

「いきなりエネルギーの話か？あんたはそれ関連のことに詳しいのか？」

「ええ……まあ……」

「なら話は早い。アマリーリスの技術を支えているのはＮＰエネルギーってもんだ」

「ＮＰ……ですって……」

彼女は驚愕した。

「知ってるのか？」

大学の授業で聞いたことがあるとてつもない産物。
けど確かあれは銀河連邦が独占していて他の種族には使えないハズでは……。

「――くくっ、美人で且つ頭がいいなんて恵まれてんな。羨ましいぜ。あんたがここに入ってくれればもしかしたら――」

「えっ……どうゆう……」

「――もうそろそろ始まるぞ。まず惑星に主砲撃ち込むから、揺れに気を付けろよ」

「主砲……」

そしてまた、モニターが入り、彼が画面に現れた。

「目標惑星に到着した、すぐさまリバエス砲を撃ち込む。各員、衝撃態勢をとれ」

「了解！」

レクシーはすぐさまベルトを締め始める。

「あんたも早くベルトを締めろ。もう行くぞ！」

「えっ……ああっ……」

言われた通りにすぐに締め、身体を固定する。

次の瞬間、

《ズオオオっ！！》

格納庫が地震の直撃を喰らったかのように震え出した――。

無論、戦闘機内部である。

「きゃああっ！！」

揺れに翻弄されて彼女に対し、彼は全く動揺せず、落ち着いていた。

これは彼、いやここにいる全員にとって日常茶飯事であることを物語っていた。

……数十秒後、揺れが治まり、全体が落ち着き出した頃、

「～～～～っ！！」

「……初めてなら無理もないか。だが何回も味わえば、じきに慣れるもんさ」

ユノンはまるで二日酔いにあったかのように頭を押さえてうずくまっていた。
生まれてきてからこれほどの震動は味わったことがなかった。

しかし、その横でピンピンしている彼の姿に唖然とした。
“やっぱりこいつらはおかしい”と心底思うのだった。

“よおし、惑星に主砲を撃ち込んでほぼ壊滅状態だ。
俺がいつも通りに先頭に出る。順番に発進だ！”

「了解、よし出るぞ！」

慣れた手つきでパネルを操作した後、操縦幹を握りしめた。

前方を見ると、格納庫の出入口が全部閉まり、ターンテーブルのように全機体が回転、壁の方に向く。

すると壁が上下に開き、一機分が通過できるほどの空洞が現れた。

「１２号機、発進！」

そして、

《ドンっっ！》

「っ……っ！」

急発進し、物凄いスピードで空洞を駆け抜ける。
その内部衝撃も、ベルトや気を緩めたらたちまち体ごと吹っ飛ばされそうだ。

そして、宇宙空間に突入。速度も安定し、広大な光景を前にしているにもかからわず、彼女はそれを見る余裕はなかった。

「ううっ……気持ち悪い……」

「おいおい、ここで吐くのはホントにカンベンしろよ。深呼吸して外でも見てろ」

言われた通りに大きく息を吐き、横のウィンドウを眺める。

……まともに見る宇宙空間はどんな心境だったんだろうか。

彼女はまるで心を奪われたかのように見つめている。

「ユノン、逆を見なよ。俺らの母艦だ」

「……えっ？」

次の瞬間、彼女は息を飲むことになる。

一面の白銀がどこまでも続いている。前を見ても船首か船尾か分からないが、とにかく終わりが全く見えないのだった。――その方面の上を見ても下を見ても宇宙空間らしきものが全く見えない。

――この宇宙船……とてつもなく巨大だ。彼女は確信した。

「デケェだろ？」

「……」

頷くしたできなかった。表現のしようがない。「デカイ」しか思い浮かばなかった。

「なら、惑星に向かうぞ。大気圏突入するから、また衝撃に備えろよ」

またか……。さっきの気持ち悪さがまたぶり返ると思うと気が引けてくるのであった。

……そして、やっと船首を突き抜け、惑星が見えかかった時、

（……ああっ……なんてこと……）

彼女は惑星の凄惨さに思わず口を押さえた。

上の丸い表面の3分の1がなくなっている。
どういう風に？そのままの意味である。

巨大な丸い石をハンマーで叩きしたらその上の部分が割れたように例えるのが分かりやすい。そんな感じだ。

この有り様では直撃を外れた惑星内の土地は壊滅的な被害を受けているに違いない。

“よし、惑星に降りるぞ。作戦の通り、今回はチームに分けないで固まって行動だ。
着陸したら各員は俺を中心に周りを散策だ。
降りる場所は一都市だが、そんなに大きくはない。すぐに終わらして別の場所に移動するぞ！
ちなみにレクシー、ユノンがいることだしお前は俺と一緒に行動な。保護しながら俺をサポートしてくれ”

「うっす！
……つうワケだ。俺らから、はぐれんじゃねえぞ？いいな？」

「……」

今から何が起こるのかは分からない。しかし、絶対地獄の見るのは確かだ。

元々、強制的に連れてこられた彼女からしたらもしかしたトラウマを植え付けられるかもしれない……喉が乾く、唇も乾く、まだ二十歳もいかない女性がなぜこんな目に遭うのかと思いたくなる。

――思えば生まれてきてから全くいいことがない、常に空虚な人生だ。今に始まったことではない。

彼女はもう、泣きたい思いである。

――そして、ラクリーマ率いる戦闘員の搭乗する各機はその惑星に突入していった。

……

激震する惑星内、主砲の一撃でどれだけの命を奪ったか計り知れない。

しかし、直撃圏内でない土地も多大な被害を受けていた。
地形が大幅に変わったことにより、
地震は起こり、津波も起こるなどの自然災害も発生し、平和な世界が一瞬で終わりを告げたのだった。

惑星内のとある土地の上空、黄緑色をした空をしたなんとも奇妙な光景である。
しかし、雲がないことからこの周辺は快晴であることをしめしていた。

“ここに降りるぞ、降りたら俺の合図で出てこい、そこから作戦開始だ！”

「ユノン、聞いたか……って」

彼女は完全にへばっていた。体を鍛えてない彼女には度重なる衝撃の前にはいくらなんでもきつすぎたのだった。

しかし、彼はもういい加減見飽きたのか、歯ぎしりを立てだし……。

「シャキッとしねえか！！」

突然の渇に彼女はビクッと起き、ひきつった顔でレクシーを見た。その時の彼の表情は威嚇しているような恐ろしい顔だった。

「いい加減にしてくれ！あんたがそんなんじゃオレのやる気も失せる。
守られる側ならまだしも、俺はお前を守りながら行動しねえといけねんだぜ？」

「～～～～っ！」

……あんたらが私を勝手に連れてきたくせにその言い方はなんだ。

反論したい、一発殴ってやりたい……ところだが、見ての通り、こ

こは上空だ。事故を起こしたら墜落して完全にあの世行きだ。

しかも、彼は武装をしている。興奮させてケンカ沙汰になれば、丸腰の自分では明らかに勝ち目はない。

よって、選択肢は『従う』しかない。

彼女は震える手をギュッと握りしめて何とかこらえたのだった――。

……降り立った場所は、この星にとっては『都市』と言える場所であった。

が、地震のあったせいか、見るも無惨に倒壊した建物があちらこちらにたたずんでいる。

――全機を着陸させる広大な場所が見当たらないため、彼らは上空を飛び回っていた。

“各機へ、今からＸＫ方位の５０メルト先の所に光子ミサイルを撃ち込む。

退避しとけ！」

彼の命令に、各機はラクリーマの乗る機体から散開する。

“ターゲットロック、ハデにぶちかましてやる”

そして、

《ドシュっ！！》

赤い機体から巨大な黄金色の光弾が放たれ、５０メートル先にある、郊外と思われるあまり建物の密集していない土地に向かって弧を描きながら飛んでいく――。

《ボボーッ！！》

着弾し、半球体に膨張、回りにある物質全てを包んでいく。

――光子ミサイルは、ＮＰエネルギーを高密度に凝縮し、発射する光学兵器で、威力は使用する機体に内蔵する炉心のエネルギー出力

に比例するが、威力だけなら地球に置ける核兵器かそれ以上の破壊力を持つ。

恐ろしいことに、それが銀河連邦、アマリーリスなどのＮＰエネルギーを使う組織には標準装備なのである。

ちなみにＮＰエネルギーが産出される前にも存在したが、そこまでの威力は生み出せず、射程距離が短く、エネルギー出力の関係上、使用する機体も限られていたため難航をきわめた兵器であった。

つくづく、ＮＰエネルギーとは本当に素晴らしいと再認識できる。

――数十秒後、光の膨張が今度はしぼみはじめ、眩しくて見えなかった着弾地点がやっと直視できるようになった。

そこにあった建造物や森林、道路などの「元々あった」物が全て消滅していた。あるのは最低１平方キロメートルはあう広大な何もない平地であった。

“よっしゃ、あそこに着陸するぞ”

そして全機がそこに向かい、次々と着陸する。

全機が各配置し終えた時、ラクリーマは待ちわびた今から始まるであろう「自分たちの仕事」に対しての笑みを浮かべて……。

“全員、行くぞ！！作戦開始！！”

《オオーッッ！！》

一斉に戦闘員達が降り出し、レクシーも彼女を引っ張るように降りた。

各人、身の回りに固めた重武装を展開すると一斉に密集地帯に突入していく――。

「ユノン、人生でいい経験になるぜ。俺らの仕事内容を高見の見物で見とけよ！」

「……」

――ラクリーマがそういうが嫌だ。そんなの経験どころか悪影響だ。しかし、ラクリーマとレクシーの二人はそんなのはお構い無しで彼女を強引に引っ張っていった。

……その都市では倒壊した建物があちらこちらにあり、まるで廃墟だ。火災も上がり、逃げ遅れた、この不運なる惑星の住民のさまざまな原因の死体、死体、死体――の海だ。

「……」

「やっと治まった……？」

運よく助かった人達は避難していたあまり崩れていない建物から這い出し、辺りを見渡す。

がそこには……。

《！　？》

謎の男たちが悪魔のような笑みを浮かべて、所持していた重火器をこちらに向けていた。

「死ね！」

「なっ……」

《ゴオーーっ！！》

銃口から放たれる巨大な灼熱の火炎が一瞬で彼らの身体を呑み込んで、消し炭となり、その業火は次第に建物さえも呑み込んでしまった――。

別の場所では、

「たたっ……助けて……」

「こわいよぉぉ！！」

他の戦闘員が生存者達を発見し、すぐさま追いかけまわした末、逃げ場のない路地裏に連れ込んだのだった。

「……」

「来るなぁぁ！！さもないとぉ！！」

生存者の一人の男がそこにあった鉄パイプを持って立ち向かおうとする一方、その戦闘員は臆することなく――ただ無言で追い詰めていく。

「ひい……ひい……」

恐怖からか、止まらない震えを押さえてパイプを振り上げた。

が、戦闘員は瞬時に男の頭をグッと掴み込み、容赦なく壁に顔から叩きつけた。

グシャっと生々しい音と共に血や体液が辺りに飛散し――男はそのまま地面に倒れて動かなくなった。

「まずは一人め。次は……」

戦闘員は残りの生存者達に所持していたの巨大ライフルを向け――。

“いやあああっ!!”

女性の断末魔を響き上がったが最後、もう何も発することはなかった。

そして、ラクリーマとレクシー、ユノンは堂々と都市の中止部を歩き回っていた。どうやら戦利品を集めに探索をしていたらしい。

「あのビルに誰か居そうじゃねえか？なあレクシー？」

「同感っスね。どうします、調べてみますか？」

「いや、もう別の場所に移動する。あいつらもそろそろ戻ってくるだろう。

まあ、ここまでしたからにはキレイに片付けるとするか」

彼は、前方にある巨大な建物、ビルらしき物をを見つめた後、左腕を折り曲げて肘をそれに向けた。

《ガシューっ！》

折り曲げた肘の先が何と、野球ボール一つ入りそうな穴を展開、半身の姿勢で空いた右手で左腕を掴んで固定した。

「二人とも今すぐ離れな。あのビルを一撃でぶっ飛ばす！」

「えっ！？」

するとレクシーはとっさに彼女を連れて、ラクリーマは遠ざかって

いった。

“シュウウウッ”

穴に青白い光が収束し――、それを建物に向けて放出したのだった。

肉眼では捉えられない速さで突き抜けて、直撃した。

閃光と共に、建物は一瞬にして崩壊、ガラガラと破片落ちはじめて、
衝撃と砂ぼこりが広範囲に広がった。

「……」

撃った瞬間、すかさずその場から離れた近くの建物に身を潜めていたラクリーマは見事、崩れさった建物を見てニヤッと笑った。
あの中に人がいたのならもはや生きていないだろうと確信する。

「……なら戻るか」

ラクリーマは通信を使ってレクシー達を呼び、合流した。

「さすがはリーダーだ。一撃で破壊するとは」

「だが、これ使うとすぐにオーバーヒートするし、まだるっこしいんだよなぁ」

そんな会話をする中、彼女はあることに気づいた。

（左手が義手だったの……）

ラクリーマの機械化された左手、義手だと今気づいたのであった。

しかし、本当の手みたいに動作することから、その義手はかなり精巧で作られている。

自分の故郷、ドグリスの技術にしてもここまで再現することはできない。

超技術で造られた金属義手だ――。

彼女は息をのんだ。

……

全員、各機に戻り、集まった。その横で、襲撃した都市から集められた戦利品が集められていた。

使えそうな機械やなにか金属素材、そして食物など、様々だった。

「よくやった。怪我人はいねえか？」

全員が横に首を振っている。――どうやらいないみたいだ。

「よしっ。ならここから違う場所に移動するぞ！」

“おおっ！！”

彼らの雄叫びが誰もいなくなった土地に響きわたる。
そして――戦利品を積み、次なる場所へ移動を開始した。

……

そして、　行く土地の町、村、都市を全て地獄へと変えていった。
そしてそこに生きとし生ける者全てを根絶やしにした。

しかし、彼らは何も思っちゃいない。これが彼らの唯一の生きる道なのだから。

しかし、これでは警察や軍隊などの治安組織が黙っちゃいないのは当たり前だ。

だが、最初の主砲でそんなものは消しとんでいる。これも彼らの戦略なのである。

――そして最後の場所、制圧していない場所へ向かった。データを見る限り、どうやら小さな町のようだ。

“ここで最後だ。全員、早く終わらせるぞ。これが終わったらしばらくは休みだ、辛抱してくれ！！」

“よっしゃああっ！！”

さすがの連戦で疲れがたまっている彼らにとっては嬉しい知らせだ。

最後の制圧場所に着陸し、気合いを入れて、一斉に飛び出した。

「最後の制圧場所だし、俺も動こうかな！」

そう言い、ラクリーマは指をパキパキ鳴らして腕を振り回している。

そういえば、今日は彼は探索ばかりで本業の戦闘はしていなかった。

なので、身体が鈍っていたのである。

彼も戦闘員と混ざり、街へ進行していった。

――こんな小さな町が耐えられるハズがなく、完全に奴らの思うつぼであった。建物は破壊され、そこの住む人々や家畜は全て惨殺。

必要なものは好きなだけ略奪など、もはや、やりたい放題であった。

それらをここにきてから直視していたユノンはもはや言葉を失った。

こんな酷いことを少しでも気にするどころか、悪そびれてないような笑みを浮かべて行使する彼らが理解できなかった。

そんな中、一人の部下がここの住民であろう、一人の子供をここに捕まえて連れてきた。

その子は酷く怯えている。暴れる気配は全くない。

「こいつ、俺の指に噛みつきやがったんですぜ！？」

ラクリーマはその子供を、無言で見つめ――。

「うっ……うっ……」

子供の瞳から涙がこぼれだした。普通の人ならそこで憐れに思って助けるかもしれない。

ユノン、彼女自身もそこまでは……と思っていた。が、残念ながら彼は『普通』ではない。

《ギュイイイッ！》

義手の四指が高速回転、いわゆる『ドリル』と化し、子供の方に向けた……。

まさか……そんな……。

そして悲劇は起こった。

彼の指は子供の顔面を貫いた。血と体液、脳髄が、彼はもちろんのこと、近くにいた部下、ユノンのところまで飛沫した。

そして、無惨に転がる子供だったもの見下ろす彼は血塗れの中、狂気とも言える笑みを浮かべた。

「うう……う……う」

一部始終を見てしまったユノンの脳裏にその光景が焼き付いてしまった。。

《うわあああああっ！！》

「ユノン！？」

限界に達した彼女は逃げ出してしまった。
無我夢中で先もわからぬ道へ逃走する彼女に対し、

「お前ら、ここで待機だ。レクシーもそこにいろ！！」

“リーダー！！”

ラクリーマも、彼女を追って全速力で走っていった。

一方、彼女は襲いかかる気持ち悪さを必死に堪えながら、彼らから少しでも離れようとする。

（あ……あんな奴らと一緒にいたら本当に気が狂いそうだ……！！戻るのは嫌だ！！）

身を隠せる場所につくとそこにうずくまり、身を隠す。

“はあ……はあ……”

タバコが吸いたい……気を落ち着かせたい……。そういえばあれから全く吸っていない。

思い出すと余計に吸いたくなった。

ポケットに手を突っ込み、漁る。が、

（なっ……ない……落とした……）

来る前に入れておいたハズが落としたのか、無くなっている。最後の手段である腕を切ろうにも、カミソリは艦内のあの部屋の中であった。

完全に絶望した。頭を押さえてぶるぶる震える。

（……こわいよぉ……こわいよぉ……）

まるで子供のように怯える彼女の姿は今まで見たことがない。
しかし、今の彼女には手取り足取り手を貸してくれる者などいなかった。

“ザッ……”

どこからか音がし、彼女はそれに反応する。随分、遠いところから聞こえたようだが、聴覚が優れる彼女はすぐに聞き取れた。

聞こえたところはどうやら奴らから離れた場所にいる。

もしかして……生存者……？

彼女はそれを救いの手と思い、その場から走り出した。
聴覚に加え、優れる嗅覚、鼻をクンクン動かして、必死で音のした場所へ向かう。

近づくにつれて奴らとは違うニオイがする。

――生きた人のニオイだ。

彼女はそれを頼りにそこに向かった。

「……」

ついた場所は瓦礫に埋もれた所だ。しかし、辺りには人らしい姿はどこにもいない。

間違いだったのか？いや、確かに人のニオイはした。それを辿った場所がここだ。実際、ニオイがここから強く発している。

キョロキョロ辺りを見回していた。

突然、

《ガシャーー！》

「！！」

なんと瓦礫がぶっ飛び、中から人が飛び出した。鍛えられた全身の筋肉と顔から、男性のようだ。

「あっ……あの！！」

気が緩み、すぐに男性の元へ向かうが、それに反して男性は彼女をグッと睨み付けた。

「あいつらの仲間だな……！！覚悟しろ！！」

「えっ！！」

彼は持っていた刃物を掲げて彼女に襲いかかった。

「ひいいっ！！」

驚いた彼女はその場所でへたり込み、男が振った刃物が空を切る。

「ああっ……うあ」

「この町を……俺らの全てを奪いやがって……絶対許さねえ！！」

「ちっ……ちが……」

勘違いされている。私じゃない、そう言いたいが喉が引っ掛かり、上手く発音できなかった。

男はまた刃物を振り上げて、足がすくんで動けないユノンに狙いを定めた。

《死ねぇぇ！！》

「いやあああああっ！」

彼女は目を閉じて、覚悟を決めた。
もう終わりだ――何もかも――。

（あれ……痛くない……どうして……）
彼女に痛みが伝わってこない。というより刺された感触すらない。
恐る恐る目を上げた。すると……そこには、

《！　！　？》

目の前にあの男、ラクリーマがこちら向き手を広げて立っていた。
しかし笑顔ではあるが、大量の汗を流している。

「だい……じょうぶ……か？」

「ああっ……あんた……」

その光景はあまりにも異様だった。まさか彼女の盾になった……信じられない……。

しかし、彼の後ろにはまだあの男が！！

「おのれえっ！！これでくたばりやがれ！」

振り上げられた刃物には赤い血がべっとりぬれているのがわかった。
――それはラクリーマの血だ。

「う……うしろ！！」

彼女の言葉に察知し、とっさに振り向き、左手を突きだした。
《ピっ！》

手首から突出した銃口から放たれた光が男の頭を貫通、男はその場でドサッと倒れた。

――死んだことを確認すると、彼は彼女に手を差し出した。

「ユノン、ケガはないか……？」

呆然としていた彼女は、彼は声に我に返った。

「あっ……あれ……？」

「あの男ならもう始末した。勝手に行動すんじゃねえよ、何かあったらどうすんだ……っ」

彼を見ると酷く息づかいが粗い。そう言えば、刃物におびただしい血液が付着していたってことは……。

「もしかして……刺された……」

「いや、背中を切られただけだ、心配すんな。大したことねえよ！！」

「たっ……大したことって……！！
つかどうして助けたの！？逃げだしたんだよ、あたし……！？」

その問いに彼の声は穏やかな声だった。

「お前がまだここにいる間は殺させるわけにはいかねんだよ。俺がここに連れてきたんだからな……俺の唯一の礼儀だ」

「……」

「死ななくてよかった。お前を助けられて俺は嬉しいぜ！」
『死ななくてよかった』、最も彼からは微塵も似合わないその言葉を言われて、彼女は……。

“つぅーーー”

「ユノン……？」

涙を流していた。しかしいつもの嫌な気持ちではない。今まで感じたことのない、『嬉しい』とも言える感情から流れた涙だ。

「……なんなのこれ、止まってよ……なんで止まらないのよ……」

否定しようとするも、ラクリーマはそんな彼女の可愛く思い、金属の指で涙をすくった。

「お前……可愛いな……ふふ」

「……あんたにだけはそう言われたくないけど……」

「……それよりどうする？。このまま、また逃げるか、俺についてくるか……お前が決めろ」

「……」

彼女は立ち上がり、傷ついた彼を支えるように腕を肩に通した。

「答えはそれでいいのか！？」

「……助けてもらったし……恩を返さないと……」

「ふふっ……そうか……なら行くか……」

そう言い、彼らはフラフラと帰りを待つ部下の元へ去っていった。

……

仕事が終わり、大量の戦利品と共に彼らはエクセレクターへ帰艦した。

すぐさま宴会が行われ、部下たちはワイワイ騒いでいる最中、ユノンは通路をさまよっていた。

（……あいつ、どこいったんだろ？）

いつもなら参加するはずの彼は場所に宴会場にいなかった。彼を探しに歩き回っていた。

……彼女は礼が言いたかったのだった。宴会どころではない。

すると、

「あんた、見かけねえツラだな。誰だ？」

「……？」

彼女は一人の女性と出会う。白衣を見に纏い、メガネをかけて、ポニーテールの美人である。しかし、ポケットに手を突っ込んで歩き方がガに股に近いなど女性の品ではなかった。。歳は自分より幾分年上に見える。

――サイサリスである。

「……あの……ラクリーマは……」

「ああ？宴会にいなかったか？なら司令室で寝てんじゃないのか？」

「司令室？」

「知らねえのか？なら私が連れていってやるよ。ついてきな？」

彼女の手招きに応じ、ついていく――。

長い通路を二人は並んで歩いていく。

「あんた、ここに来て何日目だ？」

「……昨日……」

そう彼女はボソッと口にした。

「昨日!?わはははっ、そりゃあわかんねえよなぁ!!」

「……」

バカ笑いするサイサリスに対し、眉をひそめるユノン。

「ワリィワリィ。だが昨日きたあんたがあいつになんの用があるんだ?大事なことか?」

「……」

「言えねえか。もしかして、あいつの恋人になりてぇのか?」

「なあ……!」

藪から棒にそんなことを言われて首をブンブン振る。

「……しかしまあ、美人のあんたが彼女になってくれれば、あいつの心の傷も癒せるんじゃねえのかなってな」

「え……心の傷……?」

「……実はな、あいつ、つい最近最愛の彼女を交戦で亡くしてんだ」

「なっ……なんですって……」

「その子、敗退したこの艦を守るために敵の母艦に特攻したんだ。いわゆる名誉死ってやつだ。
それ以来、あいつも以前と違い、元気を無くしていてな」

そんなことがあったなんて……。てこはレクシーの言っていた元カノの部屋ってまさかその女性の……。

しかし、じゃあなんであの部屋をあたしに使わせたんだろう。
最愛の人のなら使わせたくないハズだが。

「こんな暗い話はもうやめとこう。
そうだ、言っておくぜ。あいつ、かなりの女たらしでイタズラ好きだから気をつけな……クックック」

それを聞き、彼のイメージが一瞬で崩れ去った。

――そして司令室につき、サイサリスと別れた。

彼女は一呼吸置いて、ドアへ足を踏み出した。

《プシューっ！》

中に入ると広く感じるが、ついているのがコンピューターの光位で

暗く、あまり見えない。

「……ラクリーマ……いる？」

……。

呼びかけるが、全く返事がない。奥に進み、周りを見る。

ニオイ的は強いことから彼はここにいる。

そして、奥に唯一明かりが発している所が見えて、そこに向かう彼女。

しかし、すぐに目を疑うものを見ることになる。

「ひいっ！！」

「おわああっ！」

そこにいたラクリーマと、二人とも大きな声を上げた。

「どっ……どうした、お前……」

「ああっ……その傷だらけ……」

彼はベッドに座っていたが、上半身裸を見て、絶句する。

――至るところに傷で埋め尽くされている。おぞましいってものではない、見てて気持ち悪くなりそうなほど直視できないほどであった。

「これか？ああっ、今までの戦いの証って奴かな。なんならよく見てみるか？」

「……」

本当なら見たくないものなのだが、今の彼女は自ら進んで見に行った。

全体が機械化された左腕もさることながら、その傷は自分の傷以上だ。さすがにここまではつけない、つけたくない。
それは彼がどれほど死線を潜り抜けてきたのかわかる証拠だ。

「へへっ、情けねえだろ。こんなに傷がついちまって……まだまだ俺は未熟ってこった。

まあ……守るべきものが守れねえで俺はいつまでたっても未熟なのかもな……」

「……」

守るべきもの……それが彼女が聞いた話と重なりあった。

「で……何しに来た。宴会やってんだろ？」

「……宴会は嫌い。あたしは今日の礼を……」

「礼……ね。助けたヤツか」

「……ええっ……」

突然、

「きゃあっ！」

彼女を両手で掴んで、お姫様のように抱き抱えた。

「……」

「……ふふっ……」

二人は近い距離で互いに見つめ合う。

彼女は初めてなのか、ただすでに体がカチコチに強ばっている。

「なあユノン、お前も夢や希望がないんだったらここで働いてみないか？

俺らはそういう奴らを歓迎している。ここにいたら新たな生き甲斐が見つかるかもしんねえからよ、強制はしないがどうだ？」

「……」

「1ヶ月間、ここの全てを覚えてもらう。それからはお前の能力次第でお前のやりたい役割をやらせてやる。メシあり、酒あり、部屋ありと優遇だ。どうだ？」

彼女は数秒後、決意したのかコクっと頷いた。

「……いいわよ。もう戻るとこないんだし、拒否れば死ぬしかないし、やってやるわよ……悪になりきってやる……」

「……決まったな。ならよろしくな、ユノン」

彼は何を思ったか、彼女に顔を近づけるが、当然、彼女は。

「いやっ！」

両手で顔をはねのける。

「へっ……なぜだ。口づけぐらいいいだろ？」

「……」

彼女は少し怯えている。恥ずかしさからではなく、恐怖だ。
証拠に、顔が少し蒼白だ。

彼はあることに気づいた。

「お前……まさか……処女……？」

「……」

そのまんざらではない顔に、彼の開いた口が閉じなかった。

「嘘だろ……そんなべっぴんが……っ」

すると、ラクリーマも一呼吸置き、彼女にこう問いた。

「なあ、お前。初めての男になってやろうか？」

「はあ！？なっ……なにいってんのよ……っ」

「だから強制はしない。どうだ？」

「……こわい……」

彼女がぼそっとそう言う。
しかし、誰もが認める女たらし、ラクリーマ。それで納得出来るワケがない。

「……優しくしてやんよ。お前もここままじゃいけねえだろ？俺の女にならなくてもいい、ただお前が美人すぎて欲情してな……」

彼もある意味犬である。そっちに関しては。
すると彼女は顔を赤めらせて……。

「……いいわ。この際どうなっても……」

「ホントにいいのか？」

「……早くしないとやめるわよ……」

「……ふふっ、最高だぜ！」

そして二人は楽しい楽しい（？）時間を過ごしたのであった。

――長い一夜が明けた。

次の日から、ユノンはラクリーマや部下達によってここのノウハウを教えられた。

しかし、部下達は驚いた。彼女の物覚えが早すぎたのである。

約一週間くらいでほぼエクセレクターのノウハウを全部覚えてしまった。

さすが名門大学を首席で卒業しただけのことはあった。

それに、ラクリーマと部下数人が作戦作成に頭を悩ませている最中、

「……」

「ユノン？」

急に割り込んで、コンピューターの作成データを覗いた。

すると眉を潜めて――。「……これじゃあ効率悪すぎだわ……」

彼女は瞬時にコンピューターを動かし、新しい戦略をデータに叩き込んだ。その内容にラクリーマ含めた部下は驚愕する。

「うわあ、すげえ……こんなやり方あったなんて……」

終わると、彼女はその場から退いた。

「……これなら低消費、時間の短縮、そしてリスクを少なくできるわ……」

「ユノン、すげえ。サイサリスと違う意味で天才だ……」

ユノンはなにも言わず、去っていったが、ラクリーマは何か閃いたかのように手をポンと叩いた。

――数日後、司令室。ユノンはラクリーマに呼ばれていた。

「お前、副司令官にならないか？」

「副……司令官……？」

「ああっ、俺の秘書みたいな役目だ。お前の能力は俺らが予想した域より遥かに上だ。お前の頭脳は多分、ここにいる組織員断トツだ。俺や部下を全面サポートしてくれないか？」

「……」

彼女はどうするか悩んでいるが、彼は肩に手を置いて真面目な顔ぶりで見つめた。

「かなり優遇だぞ。ちいと忙しいが、主導権は俺と同じだぜ。俺が惑星侵略している最中、このエクセレクターの艦長を努めて欲しいんだ、お前みたいに冷静で頭もいい奴にはうってつけだ。ちなみに部下達にそれを聞いたら満員一致でお前を指した。どうだ、自分の能力をフル活用してみたくないか？」

「……」

彼女はそして――コクっと頷いた。

「よっしゃ、なら頼むぜ！ユノン」

――そして、全員集められて、彼女を中心に取り囲んだ。

「今日からアマリーリスの副司令官を努めるユノンだ！お前ら、よろしく頼むぞ！」

“オオーーっ!!よろしくな副司令官っ!!”

なんと言うノリの良さだろうか、打ってかわって彼女は恥ずかしそうに顔を俯いている。

「……よろしく……お願いします……」

もぞもぞしている彼女をラクリーマは――。

「なあに恥ずかしがってんだよ!ほれっ!」

《ズルッ!!》

“ブーーっっ”

部下達の鼻から一斉に鼻血が吹き出る。

あの男は彼女の履いていたスカートを引きずり下ろしたのだった。

しかもスカートどころか、勢い余って下着までずり下げた。

そう、今の彼女は下半身丸出しである。

「～～～～～っ!!」

「ぎゃはははは!」

必死で下着を上げている最中、ラクリーマはバカ笑いしている。

しかし、その時、

「ああっ……ああっ……」

「うわあ……」

全員の顔が恐怖にひきつっている。それ理由は……。

「ラクリーマ……」

「へっ？」

《バキっ、ボキっ！！》

そこには、今まで見たことのないような恐ろしい形相をした彼女が指をバキバキ鳴らして睨み付けている……。

さすがの彼も、危険を感じたのか一気に血の気が引いた。

「……ユノン……まて……俺が悪かった……っ」

しかし、彼女の怒りはそれで治まるハズがない。

「問　答　無　用　！　！」

その日、その場にいた全員は、我らがリーダー、ラクリーマがユノンという、一人の女性に完封なきまで叩きのめされる『あくむ』を見ることになった。

そして部下達はこの日に誓った。彼女をユノン「さん」と呼ぶことを……。

……

ユノンはそれを思い出しながらしずかにこう告げた。

「……まあ色々とあったけど、私はここで生きていくことに決めたわ。
少なくともあたしは感謝してる。こうやって、あたしの能力を生かせるとこがあって……」

「……そうなんですか……」

しずかはうんうん頷きながら聞いていた。

「あなたもラクリーマに気をつけなさい。あいつ、仲間やあなたたちみたいに気に入った人間には優しいけど、基本的に悪の塊みたい

なもんだから。

それに女たらしでバカで単細胞で……」

そんな悪口を言うユノンだが、しずかはふとこんなことを言った。

「……ユノンさんはラクリーマさんのことになると熱く語りますね……」

“ギロッ！”

「ひいっ！」

しずかに鋭い目付きで睨む。がすぐに解除し、軽く笑った。

「ふふっ、そうかもしれないわね。あいつと一緒に仕事してて飽きないもの。ネタが尽きないし」

「そうですね、実際あの人と一緒にいたら楽しい気分になれますから」

すると、今度はユノンがしずかに対して質問した。

「ならあたしから聞きたいけど、あなたとのび太くんって一緒にいるけど……もしかして好きなの？」

その問いに、しずかは顔を真っ赤にして手をブンブン横に振った。

「ち、違います。あたしはそんな関係ないです！！」

「あら、顔を赤くしちゃって……。図星……？」

「……」

黙り込む彼女にユノンは口を押さえて笑いだした。

「フフフ……かわいいわね。ますます気に入ったわ」

「もう……酷い……」

しかしながら何だかんだで、もう打ち解けあっている。最初の緊迫した空気は一体どこにいったのか。

しかし、あのユノンとこうやって話はできるのはある意味、ここで

は快挙である。

さらに話はヒートアップし、

「――それで、その地球にいったらその温泉に連れていってくれないかしら？」

「いいですよ。一緒に温泉巡りしませんか？」

「いい酒が飲めそうで楽しみね……フフッ」

話を聞いていると彼女の意外な一面が見えてきた。

自分と同じくお風呂が大好きなこと、好物が肉類であること、特に骨付き肉が大好きなことなど、ラクリーマでも知らないことをしずかは聞けたのである。

さすがは誰でも打ち解けられる一面を持つ彼女である。

そんな中、突然、

《ヴィーーッ！ヴィーーッ！》

緊急のサイレンが艦内に鳴り響き、二人とも立ち上がった。

「どうしたのかしら！？」

《総司令、すぐに訓練エリアのトレーニングルームに急行してください！繰り返す！》

彼を呼ぶ放送が入り、さらにサイレンがうるさいほどに響く。

一体、そこで何が起こったのだろうか……？

◇ＰＡＲＴ．３０　異変

訓練エリアのトレーニングルームでは、なにやら騒ぎが起こっていた。

《ガシャアアン！！》

「てめぇ、いい加減にしやがれっ！！」

「うるせぇっ！！てめぇが言い出したのがワリイんだよ！」

どうやらユーダと戦闘員の一人、シースがケンカをしているようだ。その他の者は二人を取り押さえたり、仲介しているのだが一向に終わる気配はなかった。

「どうした、お前ら！？」

そして、ラクリーマもやっとここに駆けつけ、全員が彼に注目した。

「リーダー、こいつらが急にケンカし出して、暴れまくってたんですよ！」

「ケンカだぁ？」

情けなくなり、彼は頭を押さえて落胆した。
溜め息を吐いて、二人を見つめる。

「で、何が原因なんだ？」

「こいつが俺のこと、バカにしたんですよ。「弱ええ」だの「カス」だのほざきやがったですぜ？」

「俺はホントのことを言ったまでだ、何が悪い？」

「なんだとコラぁ！？」

ユーダの言葉が彼の怒りを買うことになり、ラクリーマはそんな二人をなだめるように割り込んだ。

「だからちょっと待て、俺が聞きてえのはなんでそんな話になったかだ。落ち着いて話してくれ」

二人から事情を聞いた。

それは前の戦闘訓練にて、この二人が対戦した時のことで、その時はユーダが優勢で、結果、彼が勝利した。
それで、今のトレーニング中にその事をユーダが持ち出したために

起きた揉め事だと言うのだった。

……ラクリーマはさらに情けなく感じる。まあ、本人達にしたら大事なのかもしれないが、彼からしたらくだらないことだった。実際、彼はトレーニング中に誰かが大ケガしたとか、倒れたとしか思っていなかった。

……とまあ、ケンカはケンカ、止めないことには解決しないのである。

「……しょうがねえな。実際悪いのはユーダ、お前だ」

その言葉に彼はムスッとした態度をとった。

「こんなケンカしたのも、お前がそんなこと持ち出したのが原因だろ？

弱ええとか言ってても、また再戦したら次はお前がやられるかもしれねえぞ。

実際、俺から見たらお前らの実力は大差ねえんだよ」

そう言われ、いらだちからか、ユーダは拳を握る。

逆に、シースは笑顔でガッツポーズをとり、喜んでいた。

しかし、ラクリーマはシースの方を向くと、睨み付けるような細い眼で彼を見た。

「シース、そんな挑発にのったお前も問題があるぞ。弱いとか言われたなら、また再戦してこいつを負かせばいいじゃねえか？」

「へ……っへい。言われてみればそうですね……気をつけます……」

指摘されて彼はガクッと落ち込んだ。

「たくぅ……。そんなことで俺を呼ぶんじゃねえよ。ケンカするのは勝手だが、仲間に迷惑をかけるようなことすんな」

そう言い、ラクリーマは去ろうとした時、

“ちっ……、偉そうなこと言いやがって……っ”

“ピクッ！”

誰かの囁きにラクリーマは聞き逃すはずはなかった。

次の瞬間、振り向き、ある男へ向かうと胸ぐらを掴んだ。

「オイ、今なんて言った……答えろ！」

「……」

その男はユーダである。

“リーダー！！”

全員が驚愕し、止めようとするが、彼はそれを振り払った。

「ユーダ、俺に不満あるんなら素直に言ったらどうだ？」

「……」

しかし、彼はふてくされているのか、視線を反らしている。

しかし、ラクリーマにしたらこの上ない嫌悪感を抱くのであった。

「てめぇ、俺をナメるのはかまわんが、そんな小声で言わねえで直接言えばいいじゃねえか。

俺に不満をぶつけりゃあ、改善する努力をするぞ。……俺がキレる前に素直に話せ」

「……別にありゃしませんよ……」

「……」

返事はするが、言い方から全く改めていないユーダ。
そんなナメ腐った態度の彼を、ラクリーマは――。

《ギュイイイっ！！》

指をドリルへと変えて、それをユーダの目の前に押しやった。

「最後のチャンスだ。これ以上しらを切るなら、本当にお前を殺るぞ」

「……」

まさに一発触発の状況。その場にいる全員が息を飲んだ。

「だいたいお前、侵略ん時に仲間が危険な目に合ってるって時にわざと見捨てたって情報がいくつかあるんだが……お前、ここの掟知ってんだろ？
そんな奴はどうなるか……知っててやってんのか……どうなんだ！？」

しかし、ユーダはこんな状況にも関わらず、笑みを浮かべていた。

「……冗談はよしてくださいよ。
第一、証拠はあるんですかい？」

「……証拠だと？」

「こん中の誰から聞いたか知らないですけどそんな情報を信じるんですかァ？
もしかしたらそう見えただけかもしれないですぜ？
それにリーダー自身が見てないのにそうやって決めつけるのはおかしくないですか？

……クックッ、俺の言ってることは間違ってますか？」

――数秒後、ラクリーマはユーダから手を放し、ドリルの回転を止めた。

どうやら、彼から手を引いたようだがその苦渋の表情からは納得していないようである。

「ああ、確かにお前の言う通りだ……。本当かどうかもわからないことを、疑ってすまなかった……」

素直に謝るなど、ラクリーマらしくないのだが、信憑性がない以上、

一番立場が上である彼からしたらこれ以上、手出しはできないのであった。

「そりゃあウレシい限りで……」

しかし、ユーダから全く反省の色を示さないままで、表情はさっきと同じであった。

しかし、彼の顔は次第に憤怒の表情へと変えて、ユーダに警告とも言える発言をした。

「だが、そういう情報がある以上はお前の疑いが晴れたワケではねえからな。

今はなかったことにしといてやるが……もし、次の侵略時にお前のそういう所を目撃した暁には……」

《八つ裂きどころじゃすまないと思えよ！！》

「……」

ここにいる全員はもちろん、さすがのユーダも彼の殺気に恐ろしい寒気が走った。

「ここにいる全員もそういう情報はあったらドンドン教えてくれ！……そんなことをする奴に情けをかけて隠ぺいするとかなしだ。むしろ、そんなことする奴も即反逆者扱いするからな、覚とけ！！」

そう言い、彼はトレーニングルームから去っていった。

“……”

黙り込む戦闘員達。しかし、全員の視線はユーダに向けられる。それも冷たい視線で。

「なんだよ、その目は……？」

「ユーダ、いい加減、調子にのってるとまじでリーダーにやられるぜ？」

「へっ、余計なお世話だ」

「なんだと！？心配してんのによォ！」

戦闘員の一人がユーダに突っ掛かるが、本人は軽くあしらった。

「てめえらの『おままごと』みてぇなお付き合いには飽々なんだよ！」

《！？》

その発言が彼らの気にさわることになった。

「オイ、ユーダ。それはここにいる全員にケンカ売ってんのか！？」

「売ってるも何も俺は本心を打ち明けたまでだ。
ならお前らに聞くが、なんでアマリーリスに加入したんだ？
こうやって友達作りするために入ったのかよ？」

「なっ……！？」

その言葉が全員に心に突き刺さった。
そして更に彼は話を続ける。

「殺して、奪って、ここに入る前はここにいる全員はそうやって生きてきたんだろうが。

俺からしてみりゃあ『友達？仲間？なんじゃそりゃ？』だなぜかって？当たり前じゃねえか」

《本来なら、ここにいなけりゃ全員、敵同士だからな》

“……”

彼らに返す言葉が見当たらなかった。確かにその通りだ。

アマリーリスの掟の上で仲良くしているだけであって、元から仲がよいわけではない。

むしろ、普通は互いを敵と思うべき存在だ。

全員犯罪者であり、改心する気もない彼らが同じ時間、同じ部屋に集まっても、そりゃあ気が合う人間がいるかもしれないが、やはり合わない人間もいるわけだ。

全員が仲良くなるのはまずありえないのだ。

普通の人間でもそうなのだから、彼らならなおさらだ。

このアマリーリスという組織はそういう観点からみたら、かなり異質だと言えるだろう。

「へっ、わかったか。俺は元々、こんな素晴らしい仕事ができるか

ら加入しただけだ。

好きなだけ殺して、好きなだけ奪って、これ以上の幸せがあるものか、お前らもそろそろ考えを改めた方がいいぜ」

そう言い、彼もトレーニングルームから去ろうと歩き出した。

しかし、その戦闘員の中の一人が突然、前に飛び出した。

「ユーダ、一つ言っておくぞ。お前の言うその素晴らしい仕事ができるのもこのアマリーリスのおかげだと思えよ。

お前だって、元々死刑囚で刑務所から脱獄して、捕まる寸前でリーダーに助けられたんだから、少なくともあの人の恩を忘れるなよ？わかったな？」

「……」

彼は何も言わず、そのまま去っていく。

しかし、彼の後ろ姿から感じるのは『孤独』、それだけだった。

……そして、ユーダの姿は見えなくなると、気が緩み、何人かはため息を吐き出した。

「あいつ、ホントにわからねえ男だ……」

その言葉はほぼ全員に考えに当てはまっていた。

無論、ラクリーマもである。

一方、彼も休憩広場のソファーに腰掛けていた。
どこか物悲しい目でウインドウ越しの宇宙を眺めていた。

すると、

「ラクリーマ！」

「……お前ら？」

偶然、のび太としずかが彼を見つけて駆けつけてきた。
二人から見たラクリーマはいつもみたいに陽気ではなく、落ち込んだ様子に感じられた。

「……サイレンがなってたけど何かあったの？」

「……なんでもねえよ」

「けど、今のラクリーマさん、なんか落ち込んでるみた――」

《なんでもねえっていってんだよっ！！」

「「ひいっ！！」」

つい怒鳴ってしまい、完全に萎縮している二人。

「あっ……ワリィ……っ、ちょっと考え事していてな」

「考え事？」

「まあいい、二人とも横に座れや」

二人は言う通りに、彼の横に腰掛ける。
ラクリーマは二人を見ようとせず、ただ前を見ている。

（なんか……今日のラクリーマは変じゃない……）

（ええっ……。考え事をしてるって言ってたけど……らしくないっていうか……）

二人はこそこそと話をしていた矢先、

「なあ、二人とも。ちいと質問があるんだが、いいか？」

「えっ！？」

二人とも、びっくりしてすぐに振り返った。
すると、彼は依然と前を見たままこう口にした。

「わかりあえない奴と心を通わすにはどうすればいいんだ……？」

「……？」

その意味深しげな質問に一瞬、戸惑う二人。

「ラクリーマ、どうしたの一体……？」

「いや、わからなければいいんだ。ただそれを聞きたくてな」

「……」

互いに沈黙し合う。
……なんか、いつもの彼ではない。いつも明るくて熱苦しい彼しか見たことのない二人からしたら、不気味だ。
いや、不安という感情さえもあった。

しばらく、誰も声を発しない状況が続き、気まずくなりかけた時、

「……正解かどうかわからないけど、いっぱい接してあげたらどうかしら……？」

「「しずか（ちゃん）……？」」

しずかが沈黙を破り、彼女なりの意見を伝えた。

「わたしならわかりあえるまでその人と接し続けるわ。

……前にそういうことがあったの――」

そう、しずかは思い出していた。

鏡面世界にて、瀕死の傷を負ったメカトピア星のスパイロボット、リルルのことを。

初めは、愛国心が強いゆえに地球人を下等生物扱いし、しずかとの対話もほぼ拒絶するという絶望的な状況だったが、彼女のあきらめない心と労りがやがて、リルルの心を突き動かすことになった。

その結果、ついに攻めてきたメカトピア星の軍隊、鉄人兵団の目的『全地球人奴隷化』を食い止める突破口となり、地球を守ることに成功したのだが……。

「――その人のことを理解することが一番、大事だと思う。その上で、めげずにあきらめずに優しさを持って接すれば、いつかはその人も……」

「……」

ラクリーマは静かに目を閉じている。
腕組みをして、考え込んでるようだ。

「……そうか。いい助言聞かせてもらったぜ。礼を言うぜ、しずか！」

「ラクリーマさん……」

お礼と共に微笑みを見せるラクリーマに、彼女は嬉しくなり、もじもじする。

「そういえば、お前らはずっと一緒だな。まさか、互いに好きなんじゃあ……」

「「なあっっ！！？」」

二人は顔を共に顔を赤くした。これで言われるのは何回目なのか。のび太はともかく、しずかは同じことをついさきほどユノンにも言われていた。

「だ　か　ら違います！！あたし達はそんな関係じゃないですっっ！！」

「ちょっ……そこまで否定しなくてもいいのに……」

「ククククッ……ワハハハハッ！！

だがよ、お前らほどお似合いなカップルはいねえぜ！！」

ホントはどうなんだ？」

豪快に笑う彼の問いに二人とも互いにチラ見し、すぐに下にうつ向いた。

「……まんざらでもない顔しやがって。

それじゃあ俺もお前らに教えてやろうか！」

一呼吸置き、恥ずかしがることなく二人にこう告げた。

「俺は、ユノンのことが好きだ」

「「ええっっ!?」」

「もう一度言ってやろうか?ユノンのことが好きで好きでたまらねえんだよ」

「「……」」

のび太としずかはさっき以上に頬を真っ赤に染めていた。
こうやって恥ずかしがらずに公言するのは、あのジュネと同じだ。

「けどなぁ、あいつ、あんな性格だろ?なかなか伝えづらくてよ。困ってんだけど、どうすればいい?教えてくれないか?」

「えっ……いやっ、ちょっと!」

一方的に質問してくるラクリーマに困惑ぎみののび太達。
告白なんてしたことがないのにわかるわけがない。

「なあんてな、けどまあそういうこった。

俺はあいつのモノに出来ればマジで最高だぜ！」

二人は分かった。彼は本当にユノンが好きだと言うことを。
その屈託のない笑顔をみたら嘘ではないことがわかった。

次第、二人は目を輝かせて……。

「ラクリーマ、僕たち応援してるから！」

「ユノンさんに思いが伝わることを！」

それを聞いたラクリーマは、嬉しくなり二人に向かってガッツポーズをとった。

「お前らはホントに最高だ。殺さずに助けてよかったと切実に思うぞ！！」

そうやって素直に喜べるのは彼の良い部分の一つである。

最初の重苦しい雰囲気が一転したのは、この二人（特にしずか）のおかげとも言えるだろう。

……

1時間後、ユノンはタバコを吸いに通路を歩いていた。

すると、曲がり角辺りで、

「ユノン？」

「……！！」

彼女はラクリーマと出くわす。しかし、彼女は無言のまま通り過ぎようとする。

……まだ怒っているようである。

「ユノン待てよ、まだ怒ってるのかよ！？」

全く無反応な彼女についにしびれを切らしたラクリーマはとっさに彼女の左腕を掴んだ。

「なっ……」

「なあユノン、俺が悪かった。あんなイタズラはもうしねえからよぉ……許してくれねえか？」

「……あんた、またそんなこと言って、やるくせに……信用できないわ」

「なあ、マジで悪かったって！だからな……ん？」

彼女の腕を目をやると何かに気づいた。

「お前……どうしたこの切り傷？」

《！　？》

突然、彼女の顔色が一変し、青ざめた。次第に体もぶるぶる震えはじめ――。

（まさか……見られた……？）

しかし、ラクリーマは不思議そうにその腕を見続けた。

「一つだけじゃねえな……２つ、３つ……なんか不自然な傷痕だな……」

《バシッ！》

彼女は強引に振り払い、壁に寄りかかった。

「おっ、おい……。どうした？」

彼から見た彼女は顔をひきつって、異常なほどに身体全体が激震していた。
まるで何かに怯えているかのように。

「いや……いやぁ、いやぁぁっっ！！」

「まっ、待てユノン！！」

彼女はなりふり構わずその場から走り去っていった。

「あいつ、何なんだ一体……」
彼は全く理解出来ず、目を点にしていた。

一方、ユノンも部屋につくなり、何かにとり憑かれたのように頭を押さえてへたり込んだ。

（見られた……傷を見られた、見られた、見られた、見られた見られた見られタ見らレタ！！）

震えが止まらない、冷や汗が流れ、一気に嫌悪感の塊に押し潰されそうになり、錯乱したかのように自ら頭をベッドに叩きつけた。

「うう……っ、あああ……っ」

彼女はまた引き出しに手を出し、中からあのナイフを取り出した。

そして、

《グッ！！》

ついにやってしまった。封印していたハズのあの行為を。

左手首の真ん中に新たな切り傷と共に、赤い血液が一筋の流れを作った。

（まだだ……まだ足りない！！もっと、もっと、もっとぉっ！！）

勢いに任せてさらに一つ、２つと新たな傷を作っていく彼女はもはや、いつもの冷静さを失っていた。

ついには、

《ブシューッ！！》

「ああっっ！！」

勢いが強すぎて静脈付近を深く切りつけてしまい、激痛と共に夥しいほどの血液が流れ出してしまった。
段々、床や服にも垂れた血液で染めはじめる。

（いっ痛っ！！ヤバい……このままじゃあ！！）

彼女は何を思ったのか、部屋のシャワー室内に向かい、ありったけの水を出してその傷を洗いはじめた。
しかし、一向に出血が止まる気配がない。

（なんで……なんで止まらないのぉ！？）

逆効果である。水はともかくお湯では一向に傷口は塞がらないのである。

頭の良い彼女ならそんなことは認知しているが、それはいつもの「冷静」の時である。今の彼女は完全に「錯乱」している。

次第に彼女の意識が遠のき……朦朧していた――。

「ああっ……あっあ…だっ……誰……か……っ」

……

十数分後、ユノンが気になって仕方がないラクリーマは彼女を探し回っていた。

「あいつ、どこいったんだ!?こうなったらあいつの部屋へ言ってみるか」

すぐさま彼女の部屋に向かい、中へ入ったが、ソファーにもベッドにもいなかった。

だか、

《!　?》

床を見ると、血痕と思われるあとがある。ほぼ全体が凝固していることがわかることから結構時間がたっていることがわかる。

「これは……まさかあいつの……!?」

彼にとてつもなく不安感が襲い、辺りを見渡した。すると、床には血の痕が部屋のシャワー室まで連れて付着していることに気づいた。

ラクリーマに寒気が襲い、すぐにシャワー室の扉を開けた。

そこには。

《！　！　？》

蛇口からお湯を出したままユノンがぐったりと倒れている。
周りには血と水が混ざりあった赤い池が彼女を浮かばせているようにみえた。

「ユノンっっ！！しっかりしろっ！！」

彼女を抱き抱えるが、意識がない。顔面蒼白で、そしてお湯を浴びているにも関わらずやけに身体が冷たい。

胸に耳を当ててみると、微かに鼓動はあるが、とてつもなく早い。

――出血性ショックを起こしている。

彼はすぐさま、所持していた通信機を取りだし、焦り口調で喋り出す。

「きっ、緊急事態だ!!大至急、ユノンの部屋にボードを持ってこい!!あと、サイサリスにメディカルルームに行くよう伝えてくれ!!」

“どっ、どうしたんですかリーダー!!?”

「ユノンが大量出血して危篤状態だ、迅速に行動してくれ!!」

“ええっっ!!?
わかりました、艦内放送で伝えます!!”

「頼む!!」

通信を切り、見たところ、出血が弱まっているのでいち早く、彼女へシャワー室から出そうと持ち上げた時、

《ズキィ!!》

「あがあああっっ!!」

持ち上げた拍子で彼のあばら骨にまた激痛が走り、ガクッと膝をつ

いてしまった。

「はあああっ！！かはっ！！」

彼は苦痛を交えた表情をしているが、それをこらえてまた彼女をぐっと持ち上げた。

《ズキっ！ズキィ！》

「うぐ……ぐぐぐっ！！」

歩くごとに激痛が走るが、歯を食い縛り、また一歩、また一歩と歩く。

相当な苦痛を味わっているはずなのだが、今の彼には休む余裕などなかった。

――部屋へやっと飛び出した所、ようやく部下達があの移動用円盤に乗り、駆けつけた。

しかし、ラクリーマの腕に抱えられてぐったりとした彼女の変わり果てた姿に表情が一瞬で真っ青となり、言葉を失った。

「おっ……お前ら……早く……ユノンを」

よくみるとラクリーマの様子もおかしい。

大量の汗を流し、今にも彼女を落としそうなくらいに震えていた。

すぐさま、彼女を円盤の上に乗せた瞬間、

《ドサッ！！》

彼もその場で倒れ込んだ。わき腹を押さえて悶絶している。

「リーダー、大丈夫ですかぁ！！？」

「俺は大丈夫だ……。それよりユノンを早くメディカルルームにぃ……急げ……っ」

「……っ」

心が引き裂かれる思いで、彼の言う通りにユノンを乗せた円盤は猛スピードで通路をかけていく。

果たして、彼女は助かるのであろうか……。

◇ＰＡＲＴ．３１　忌まわしき真実

ユノンは運ばれてすぐさま、彼女を心配する部下達が見守る中、サイサリスの元、即座に輸血、傷の治療が始められた。

失血死が心配されたが幸いにも、発見した時間が比較的早かったため、懸命な治療の末、なんとか一命をとりとめることに成功した。

その後、部下達を安心し、解散した。

しかし、そのメディカルルームには痛みがやっと収まり、駆けつけたラクリーマとサイサリス、そして心配して駆けつけてきたレクシーとのび太としずかが、静かに眠るユノンを見つめていた。

「ユノンさん……」

「……っ」

「くそっ、ユノンに何があったんだ……。いきなり手首を切るなんて……そんなふざけたことを……」

一方、何か気づいたのか、サイサリスは彼女の左手首を見続けている。

「……」

「どうしたサイサリス？」

「ユノンちゃんはもしかして……。
ラクリーマ、最近ユノンちゃんに異変が見られなかったか？」

「いや、特には……どうした？」

サイサリスは彼女の腕を持ち、皮膚を見えるように着替えさせた服の袖をめくり、全員に見えるように注目させた。

「これを見なよ」

その場にいる全員がユノンを腕を近づいて見ると……。

「なんだこの無数の傷は……？」

ラクリーマ達は目を疑った。それは無数の切り傷の痕が至る所に浮き出ていた。近づいてみるとよくわかる。
ついさっき作った新しい傷とは違い、古い年季のはいった傷が圧倒的に多い。しかも、明らかに自分がつけたとしか言い様のない不自然な切り方だ。

「リストカットだよ」

「リストカット？なんだそれ……」

「確かにお前には無縁なものだな。まさかこんなことをしてるなんて……」

……リストカット症候群（シンドローム）……。

文字通り、『手首を切ること』で、自傷行為の一つである。派生として腕を切ることを『アームカット』、脚を切ることを『レッグカット』とも言うことがある。

特に精神的に不安定な女性や物、場所、人などに不満や本音をぶつけにくい内向的な人などにその傾向が多い。

動機については三種類あり、

一つ目は何かしら愛情に飢えていて、それをして、注目されて誰かに愛されたい、かまってほしいという欲求から。

二つ目は、それにより生きているという存在意義（アイデンティティー）を作るため、または快楽、安心感を持たせるため。

3つ目は現実を逃避する人格（解離した別人格）が作用していることから始まる行為などがある（リストカットした記憶がない、気づいたらできていたなどがある）。

それらの原因が、子供の時に親から愛情を受けずに成長した、虐待を受けた、トラウマになるような出来事があったなど、過去に受けた精神的な傷から来ることが多い。

ユノンの場合はどちらかと言えば、2つ目の動機に分類される。

……

サイサリスは『ハァ……』とため息を吐いた。

「……厄介だな。はっきり言ってユノンちゃんは心の病気だ。
ウイルスとか病原菌などから来る肉体的な病気なら、薬治療や栄養補給、安静にしてればほぼ絶対に完治するが、精神的な病気だと、下手したら一生治らねえかもしんねえぜ」

全員が絶句した。
リストカットは言った通り、精神的な面から来る立派な病気だ。
例え治ったとしても、また精神が不安定になれば再発する可能性が非常に高い。

この場合、これに限らず精神病系統には薬物治療、カウンセリング治療を施すのが一般的に効果的なのだが、結局は患者本人が乗り越えなければ意味がないのである。

「ちぃ!!ユノンとて悩みか何かあったんなら、なんで俺に打ち明けてくれなかったんだ!?

……だがそれ以上に俺が情けねえ!!
こいつがこんなになるまで気づかなかった俺が一番情けねえぜ!!」

「ラクリーマ……」

「リーダー……」

ラクリーマは責任を感じていた。ほぼ一緒に行動していながら彼女の心情を察知してやれなかったことを。
そして彼女のことが好きである彼からしたらなおさらである。

「お前のせいじゃねえよ。この子は元々、あたしらと違って意思創通が苦手だ。

それに羞恥心ってもんがあるだろ。

『リストカットしています』なんて、たとえあたしでも人前で言えねえよ」

「くっ、せめて原因がわかれば何らかの対処ができるのによ……っ」

「サイサリスさん……。ユノンさんを救う方法はないんですか？」

サイサリスは目を閉じて、数秒間、また目を開けて顔をラクリーマに向けた。

「こうなったら最終手段だ。アレを使おう」

「アレってなんだ……？」

「ちょっと待っててくれ。開発エリアからあるものを持ってくる」

サイサリスは立ち上がると、メディカルルームから去っていった。

……数分後、戻ってきた彼女の手に球体のような水色の機械が２つ、ひとつは野球ボールほどの大きさで、もうひとつはドッチボールほどの大きさを持っている。

「なんだこれは？」

「これは人の精神を映像として具現化する機械だ。これで彼女の心の闇を引っ張り出せる」

「本当にできるのかそれ……？」

「ああ」

サイサリスはユノンにその野球ボールほどの機械を両手で持たせる。

「これからユノンちゃんの精神を読み取り、もう片方のこれからその内容を空間モニターで映写してくれる。その内容から適切な治療法を考えよう」

「お前、すげぇな……っ」

「へっ、作成にはホントに苦労したよ。まあ、こんなデバイスがあっても面白いと思ってな」

苦労したとはいえ、こんな超テクノロジーの産物を作り出すとは、サイサリス恐るべし……。

「……ラクリーマ、これを使う前に一つ忠告しておくぞ

これを使うとここにいる全員がユノンちゃんの全てを知ることになる。

……お前、その意味がわかるか？」

「……どういうことだ？」

「つまりな、彼女の人に見られたくない部分まで映像化されるんだぞ。

見ている間はユノンちゃん自身には影響はないが……あたしらはともかくお前、どんなに絶望するような内容でも彼女の全てを受け入れられるか？」

ラクリーマは何の迷いなく頷いた。

「ああっ！全てを受け入れる覚悟はとっくの間に出来てるぜ！大事な仲間だからな！」

「……フフフっ、さすがはラクリーマだ。あとお前ら三人にも約束してほしい。どんな内容だろうと、決してユノンちゃんに失望したり、軽蔑するなよ。守れねえのなら今すぐここから出ていけ」

レクシー、のび太、しずかも状況を受けて止めて、約束すると言う意味で首を縦に降った。

「……よし。なら、読み込むぞ。

……ラクリーマ、この事はあまりユノンちゃんに言わないほうがいいかもしんねえぜ。

ここからは彼女のプライバシーの領域だ。もし知られたら」

「……」

――そして、読み取り終了の合図と思わせる『ピピピッ……』と小さくかわいい機械音が聞こえ、サイサリスはそのデバイスをユノンの手から取り上げた。

彼女は次に、もう一つのデバイスの頂点に触れると、一気に花の蕾が咲いたかのように動作、変形。

先ほどの読み込んだデバイスをその中に入れるとまた、閉じて丸型に戻った。

「よし、見るぞ！これで動機がわかる」

“……”

全員に不安と緊張感が走る。

そして、サイサリスはデバイスの横にあるボタンを押した――。

《シュウウウ……》

デバイスの頭上に膨大な黄色の粒子が拡散し、しばらくすると何かが映り見えてきた。

――が、

「二人とも見るな！！耳をふさげ！」

すかさずレクシーがのび太としずかを体で覆い、映像を遮った。

ラクリーマとサイサリスも瞳を震わせながらその内容に唖然と見ていた。

そこに映し出された内容とは……。

……

《ガシャアアアッ！！》

そこはどこかのアパートである。その一室では、一人の女性と男が壮絶なケンカをしていた。

「～～～～～～～っ！」

「～～～～～～～っ！」

次第に家具や食器を投げ合い、、辺りは凄惨な状況でもはや殺し合いともいうべき域まで発展していた。

その隅っこの部屋で必死に耳を塞ぎながら耐え忍んでいる少女の姿があった。

小さい頃のユノンである。

痩せ細ったその身体を見るからに、まともな生活をしていないとも思える。

そして身体中の至る所の皮膚から見える異常なまでに生々しく、痛々しい傷やアザ、切傷、そして火傷……。彼女は誰かに暴力を受けているのがよく分かった。

……これらが日常茶飯事であった。ケンカをしていた一人の女性が

ユノンの母親である。

母親に男運がないらしく、いつも男に寄り添っては最終的に逃げられる、または喧嘩の末に暴力を振るわれるといったことが度々であった。

その度に酒に溺れ、悲しみや怒り、ストレスの捌け口に向けられたのが――。

「ママいたい、いたいィっ、おねがいやめてェェェッ！！」

いつも聞こえてくるのはユノンの苦痛を伴う悲鳴であった。

「ふえっ……ふえええっ……」

「まだ泣くかこのぉ！！」

彼女が泣くたびに一発、一発と本気に近いビンタが飛び乾いた音が響き渡った、次第に彼女の柔らかい両頬には赤いアザができた――。

それでも泣くのを止まらないユノンに対し、

《ジュッ！》

「ギャアッッ！」

タバコの火をユノンの顔に押し付けた。いわゆる『根性焼き』である。
タバコの火はついていてると言うが実際は燃えているのである。
実際、その温度はライターを着火し、そのまま保っているように非常に熱く、いわば火を直接皮膚に押し当てていることになる。
だとしたら相当な痛みと苦痛なのである。

「ひく……ひっ……っ」

『泣いたらまた叩かれる、殴られる』、必死でこらえている彼女を突然、母親は優しく抱き抱えた。

「ユノンごめんね……。またあんたにこんな酷いことを……あたし最低だね……ううっ……」

震える声と鼻をすする音が母親から聴こえる。彼女は泣いていた。
ユノンは母親の服にギュッと握りしめ、また瞳に涙を浮かべ――。

「マ……マ……っ、ごめんなさい……ママは……わるくないの……」

悪くないはずのユノンが謝ってしまった。
また暴力を振るわれるのを恐れているのもあるが、それ以上にこんな母親でもやはり『愛されたい、見捨てられたくない』と思う子供の心境なのであろう――。
しかし、その願いとは裏腹に、これがほぼ毎日繰り返されるために、結局は負の連鎖は止まらないのであった――。

そして……この日。

「ユノン！！こっちおいで！！」

ある日、母親はユノンを呼び出す。

彼女の前には見知らぬ男性がいた。また、何処からか引っかけて来たのだろう。

「こんにちわ……」

「……」

笑顔が似合い、柔らかな口調で喋る辺りは、見る限り優男のように思える。

しかし、ユノンは怯えたように身震いし、素早く部屋の奥へ隠れた。

「ご……ごめんね！！あの子は人見知りだから！！」

「いいんだよ。まだあんなに小さいんだから……」

二人は笑い話になるが、ユノンからしてみれば男を連れてくる……恐怖そのものであった。

何故なら今までにも沢山の男性を連れ込んでいた。

そのあとのやりとりは、大体二人が酒を呑み、酔い始めて男が母親の身体をイヤらしく触り、そんな母親もまんざら嫌でもなく、寧ろ喜んでいる。

直接な行為はしてなくても、奥から覗き見るユノンからしてみればあまりにも刺激が強すぎた。

そして結局は、何かトラブルで大喧嘩、果てに苦痛が苦痛を呼ぶ虐待シナリオへ行き着くのであったから――。

――ついにこの日、彼女の絶望はここから始まった。

「長い緑色の髪……かわいいよ……」

（や……め……て……っ）

連れ込んだ男に押し倒されて、その汚い手で身体中を触られ、弄ばれて、彼女の大事な所まで触られようとした時――。

「ぐっ……ゲェェェッ！！」

彼女は男が一瞬、口を押えてた手を放したと同時に、嘔吐物が吹き出し、男の手に付着した。

「うわあああっ、汚ねぇっっ！！吐きやがった！！」

男はすぐに立ち上がると、手を洗うために水道へ向かった。

その時、ご機嫌だった母親も帰宅し、異臭と男の慌てように目の色を変えた。

「どうしたの！？」

「おっ、お前んとこのクソガキが俺の手にゲロ吐きやがったんだよ！！」

「！　！」

「せっかく、寂しそうだから遊んでやろうとしたのに……もうこんなとこいられるかぁ！」

「ああっ、ちょっと待ってよぉっっ！！」

男はドアを乱暴に吹き飛ばして颯爽と出ていってしまった――。

「……」

震えたまま立ちすくむ彼女は数秒後、怒りに満ちた顔である方向に見つめた。

無論、自分の娘である。

「……ぶぇっ……きもちわるいよぉ……ママ……たすけてぇ……っ」

嘔吐物で上着と床を汚し、口を押さえてうずくまってるユノンの姿が見えた。

可哀想に涙を浮かべて、震える声で自分に助けを求めている。

が、

「ユノン……吐いちゃったの？　なら……キレイにしないとねえっ！！」

母親は乱暴にユノンの首もとを掴むと引きずって行く。

……ついた場所はどうやら風呂場のようだ。

しかし浴槽に張る水を見ると透明どころか酷く黒ずんでいて、ぬめりや髪の毛などのゴミや汚れが所々浮かび上がっていて清掃していないと思われる有り様だ。

――最後の入浴から一体、どれだけの日にちが立っているのだろうか。

そんな状態の浴槽に、なんと母親はユノンを服を着たままその汚水に体を浸かせた――。

ヌルヌルする浴槽の底、冷たく臭いが酷い汚れた水の感触がユノンにさらなる不快感と嫌悪感が一気に襲った。

「うえっ……げぇっっ！！ゲホっ！ゲホっっ！」

その場にまた嘔吐してしまった。
しかし、母親はそれを見過ごすハズがなかった。

《ジャバァ！！》

“ゴボァ！！？”

彼女の頭を掴むと、母親は顔を水の中に押し込んだ。
ユノンの目、耳、鼻、口、顔の穴という穴全てに汚水が入っていく。
“息が出来ない、このままでは本当に死んでしまう”

「どお、キレイになった？
あたしに感謝しなさいよ！」

顔を引き揚げると、ユノンの顔は見る影もなく汚れて、鼻水や涙とも言える液、さっきの汚水が混じって顔から流れている。
また、窒息しかかり本当に苦しい表情をしていた。

「感謝しなさいよ。ほら、“ありがとう、ママ”は？」

しかし、その返答に返ってきた返事は……。

「……くるしい……よ、もうやめて……ママ……」

その言葉が母親の癪に触り、さらなる怒りを呼んだ。

「あんたホントにムカつくガキねぇ！！誰のせいでこうなったんだぁ！！」

ユノンを浴槽から出すと、床に押し倒し、そして！！

「あんたみたいな親不孝のガキなんかもういらない……。殺してやるわ！！」

「ぐ……ぇっ」

最悪の事態がおこる。母親自らが自分の娘の首を締め始めた。その腕に伝わる強さは完全に殺気を込めている。

（ころ……され……る……なんで……あたしが……わるい……から……？）

泡を吹き始め、窒息し意識のなくなりかけた時に、母親が放った一言……それは。

《あんたなんか産まなきゃよかった！！》

そして彼女の意識は闇の中へ沈んでいった――。

目覚めた時にはとある白い壁に包まれた部屋のベッドの上で寝ていた。ここは病院のようである。

彼女は奇跡的に生きていた。

どうやらあの後、運よく気づいた人が警察に通報してくれたみたいだ。

――母親は逮捕されて、事情聴取を受けているらしい。

しかし、『あの子のせいで人生を狂わされた』、『産みたくなかった』などと供述した末、もうユノンとは会いたくないと――。

それを聞かされたユノンの心にトドメを刺された。

どれほどの絶望と悲しみを味わったのか計り知れない。

あんな人間でも、たった一人の親であり、愛されたかった彼女にとってはもう親に捨てられたと感じてしまったのだ。

そう、彼女は小さい時から知ってしまったのだ。

――『孤独』になるということを……。

（あたし……もう……ひとりぼっちなんだ……ママにすてられたんだ……）

……そして彼女は、その日から心を閉ざしてしまった。

退院後は施設へ入った。

前の生活と比べたら段違いに良くなったが、それだけでは彼女の心までも良くなることはない。

彼女の同年代の子どころか誰とも接しようとしなかった。

片隅でずっとうずくまっていて、その様子を見ていた人々の証言では『いつも、今にも泣きそうな悲しい顔をしていた』、『接しようとすると怯えて逃げていく』など。

しかし、彼女も自分なりに頑張って友達と接し、遊ぼうとしたことはあった。

だが、彼女は一人になることを拒み、仲良くなった子だけに執拗に付きまとうために次第にうざがられて結局相手から離れていく……。

その度に彼女の心をさらに傷つける要因ともなった。

（みんな……あたしがきらいなんだ……だからみんなあたしからはなれていくんだ）

それからはもう彼女は誰とも自ら関わることをしなくなった。
そんな彼女も大人になるに連れて心情も複雑になりさまざまな葛藤に伴い、更なる闇も広がっていた。
その過程で生んだ行動の一つがそう、『リストカット』である。

“プッ……プツ……”

彼女はもはや自分を傷つけないと『存在意義』を生み出せないほどに心が病んでいた――。

“おしえて……あたしはなんのためにうまれてきたの……？

……くるしい……くるしいよ……こうでもしないといまにもきえてしまいそうだよ……。
だれかぁ……たすけてよぉ……”

……

映像はここで終わっている。

“……”

その悲惨な内容に誰も声を発することなど出来なかった。

「こりゃあひでえや……っ」

先に沈黙を破ったのはサイサリスであった。

「これじゃあ……心が病んでもおかしくねえな……っ」

「……」

……ユノンが普段人と関わらない、関わろうとしないのは、『孤独を嫌い、本当は誰かにかまってもらいたい、一緒にいたい心情を裏返した形』なのでは……。

あるいは、誰かと一緒にいても、突然捨てられてまた孤独になるのを恐れているのでは……。

“いなくならないで……”

彼女が酔っていたあの時に放った言葉と合わせると辻褄が合う。

あれが彼女の本音だとすれば……。

ラクリーマは何かを決意したかのようにコクっとうなづいた。

「……ふふっ、めんどくせえ女だな、こいつは……」

“！？”

突然、彼女を罵るような言い方をし出すラクリーマに全員が疑うような目をして彼に注目した。

「こうやって自分から閉じこもって……挙げ句の果てには自分自身を傷つけることしか生きる意味を見いだせなくて……俺ら戦闘員なんか生きるために嫌でもケガしてんのに……バカな女だ」

「……キサマぁ、わたしの忠告を忘れたのか！？
罵るなんてやめろって言ったハズだが……どおゆう了見だ！！」

「……」

しかし、その顔から反省するどころかむしろ当然な表情をしている。

「ひっ、ひどいよラクリーマ！！」

「そうよ、いくらなんでユノンさんにあんまりよぉ！！」

のび太としずかもラクリーマに非難の声を浴びせた。

「ラクリーマ、今すぐここから出ていけ……今すぐだ！！てめえみてぇな約束破りはもう――」

「だが！！」

突然、彼の大きい声がサイサリスの声を掻き消した。

「そんな女に恋をした俺は……こいつ以上のバカだ」

「おっ……お前……」

「言っただろ、とっくに受け入れる覚悟は出来てるって。

さっきの内容を見て、俺はもっとこいつのことが好きになった。……決めたぜ。一生、こいつの重いもん背負う勢いで愛してやる！！」

怒りを露にしていたサイサリスや非難をしたのび太達は彼の決意にまた沈黙した。

だが、サイサリスは徐々に笑い始め……。

「ふふ……カッコつけやがって……。

だが……さすがはラクリーマだ、お前の男気を再認識したぜ！！」

「けっ。
それでみんな、ちょっと二人っきりになりたい。出ていってくれないか？」

「……わかった。みんな、ここから出ていこう、あとはこいつに任せる」

彼女の言葉に従って、のび太達はメディカルルームから出ていった……。

◇ＰＡＲＴ．３２　拒絶、そして……（前書き）

※ここの話は非常に泥沼化しています。
危ない描写もあるので読む際は気をつけてください。

◇ＰＡＲＴ．３２　拒絶、そして……

「ユノン……」

ラクリーマはいまだ目を覚まさない彼女の隣に座り、見つめていた。

“なんで自分の『誘い』にあまり乗り気ではなかったのか……性欲もとい、何にしてもあんなに消極的だったのか……”

彼は分かった気がした。

幼い頃にあんなことをされれば誰だって……。

「う……うう……っ」

「ユノン……？起きたか！？」

彼女から呻き声を発し、すぐに寄りかかる。

少しずつその重たい目を開けて、虚ろな瞳が現れた。

「……ここは……ラク……リーマ……？」

「ここはメディカルルームだ。

心配したんだぞ！死んだらどうすんだぁ！？」

「……」

やつれたような表情で、パチパチまばたきしているが顔を動かさず、ラクリーマしか見ていない。
どうやら状況を把握できていないようだ。

「あ……たしは……」

「……」

身体を起こす仕草を見せた彼女を彼が手伝おうと手を差しのべ、支えた。

「起きれるか？」

「……」

起こすと彼はユノンの右手を優しく握り、口を開いた。
しかしこの彼の発言が後に大波乱を巻き起こすことになろうとは――。

「ユノン、お前がこれからまた切りたくなったら俺に言え。俺の相棒なんだからな」

「……え……っ」

「お前は親に捨てられても……俺はお前を捨てたりしないから安心しろよ」

《！　！　？》

その発言がユノンの顔色を蒼白へと変わった。

「なっ……なんで……あんたがそんなこと……知ってんのよ……っ？」

「……」

黙り込むラクリーマに彼女が納得いくはずがなかった。

「……答えなさいよ！！なんであたしが……親に捨てられたってことをあんたが知ってんのよ！？」

「……」

ラクリーマは重大なミスを犯してしまった。
……サイサリスが注意した『プライバシーの侵害、及び暴露』である。

彼は映像で見た彼女の過去のことをあっさりと口にしてしまったのであった。

果たしてそれはうっかりなのか、はたまたなにか考えの上なのかは分からない。
「……実はな――」

ラクリーマはこれまでの経緯を全てを打ち明けた。
しかし、段々彼女の顔が険しくなっていった……。

「……あんたたちは……勝手にあたしの全てを……」

「ああ。だがな、お前を救うためにこうするしか――」

彼女の顔は唖然としていた表情から徐々に憤怒の表情へ変貌し、

「……今すぐ出ていけ」

「……ユノン？」

《こ　こ　か　ら　で　て　け　ぇ　ぇ　っ　っ　！　！》

「ゆっ、ユノン！？」

彼女らしかぬ怒号の声が部屋どころか通路にまで響き渡り、ラクリーマも呆気をとられている。

「おっ、おい！？」

「出てけって言ってんのがわからないのかぁ！！

二度とあんたの顔など見たくない！！」

歯ぎしりを立てて、眉間に深いしわをよせている彼女は今までに見せたことのない表情だ。

「ユノン、落ち着けよ！！そんなに怒らなくてもいいじゃねえか！！」

「……見られたんだよ？

あんたたちの思い勝手でわたしの全てを、見せたくないコトまで……あたしを踏みにじったんだぁ！！」

ごもっともである。
救うためとは言え、彼女からしたら屈辱と羞恥以外の何事にもない。
今思えば、サイサリスもこの方法を快く思っていなかった。

「どっ、どいつもこいつも……あたしを汚しやがってぇ……っ」

ブツブツ一人事を言い出す彼女から危険な雰囲気が漂った。

「ユノン、だから落ち着……」

《バシッ！》

心配する彼が彼女に手を差し伸べたが彼女が振り払い、拒絶した。

「触るな！！汚らわしい！！

早く出ていかないと本気で張り倒すわよぉ！！」

「……っ！！」

《ガシッ！》

とっさに彼女の腕を掴み、冷静な態度で見つめた。

「ユノン、そんなに気にしているんなら俺が謝る。殴りたいのなら好きにすればいい！」

「……！」

「なら俺も本当のことを教えてやる。今までお前にイタズラや破廉恥ばかりしてきた理由を」

「……なっ、なによ！？」

「それはな……確かにお前が美人すぎてつい手が出てしまったのもある。

だが本当はお前を明るくさせようとして行ったことだ」

「……どっ、どういうことよ！？」

「お前は加入して以来、このアマリーリスには場違いなくらいに暗い雰囲気を持っていた。

いつも冷たい態度で誰ともつるまないし、つるもうとしない、ずっと一人のお前を俺なりにお前を楽しませようとした」

……実は彼が行ってきた彼女に対するイタズラは全て、彼女のためであり、少しでも彼女の雰囲気を明るくさせようと彼なりの気遣いが生んだ行動であった。

なので、彼女からどんなに制裁されようが説教されようが、懲りずに行ってきたのはそのためである。

「～～～～っ」

「俺はお前のことを思ってやってきた。そのことだけはわかってく……」

《余計なお世話よっ！！》

「なあ！」

彼女は彼を否定した。

「ラクリーマは人の気持ち考えたことあんの！？

あんたにとっちゃあ親切かもしんないけど、わたしからしたら不快

極まりないのよ！

そうやって自分勝手な思い込みで人に迷惑をかけるなんて愚の骨頂だわ。

そんな人間がリーダーをしているなんて笑い話にもならない！！」

「……っ！」

彼女に一方的に責められる彼は拳をぐっと握りしめた。

しかし、彼女の罵言は止まらない、それは今までにうっぷんを晴らすかのように。

「ホントにラクリーマはつくづくムカつく奴ね、はっきり言ってやるわよ！！」

《神経逆撫ですんのよ！！あんたって男は！！》

「～～～～っっ！！」

ここまで言われたら普通の人ならへこむかキレるかのどちらかだ、ラクリーマはどちらにも属してない。

……表情と震えかたを見ればキレる方へ傾いているが、何とか感情を押し殺し、一線を越えずにいた。

「あ……あっ……っ」

「ユノンさん……っ」

心配になってまた戻ってきたのび太としずかはその一部始終を聞いており、その異様な光景に絶大な恐怖を抱いていた。

見たことないユノンの表情、必死に感情を抑えているラクリーマ、こんな二人は見たことがない。

そして、二人ものび太達の存在に気づき、注目した。

「お前ら来るな。早く出ていけっっ！」

ユノンは二人をまるで『敵』を前にしているかのように瞳を細くして睨み付け、歯ぎしりを立てて威嚇する。

「……あたしをバカにしにきたのか……？

きさまら今すぐに出ていかないとホントにぃ！！」

言葉使いも悪くなり、あの美人だった顔も、今はひとかけらもなく

なり今の彼女は例えるなら……『狂犬』。

「ユノン落ち着けっていってんだよ！！
お前、おかしくなってんぞぉ！！」

「もおきさまら全員死ねぇ、今すぐあたしから消えてしまえぇぇぇっっ！！」

完全に狂乱し、暴れる彼女はラクリーマに捕まれながらもデスクにあったコップを握るしめ、のび太の方へ本気で投げつけた！

《ガシャアアッ！》

「「ひいいぃっっ！」」

狙いが甘かったのか、二人に直撃せずに壁に激突したが、粉々に粉砕し破片が辺りに散乱した。

「……このぉ、クソアマぁぁっ！！」

《ガっっ！》

「！！」

耐えていたラクリーマもついに怒りに怒り、彼女の首根っこを本気で掴み、引き付けた。

「オイ、ワレ何ガキみてぇにギャアギャアわめいとんのじゃ？」

その言い回し、ドスの利いた脅し方はまるで日本のヤクザのように思える。

「俺はてめぇのために行ってきた、別に恨もうが何しようがお前の勝手だ。

俺が許せねえのは、そうやって自分の殻に閉じこもろうとするお前がムカつくんだよ。

見てるとヘドが出そうなほどによぉ！！」

ユノンは彼の手を首から強引に引き離し、まるで見下すような態度をとった。

「……私の何がわかるのよ……。

あんただって……あんただっていつまでも死んだ女に未練がましいくせに！！」

「！？」

その瞬間、ラクリーマは氷漬けにされたように硬直した。

「どんなに好きだったかわかんないけど、もうこの世にいない女よ！！いい加減忘れたらどうなの？

そういうあんたを見ているとあたしもムカついてくんのよ！」

《パァン！》

彼はついにビンタをかました。彼女は頬を押さえてうずくまる。

「思いあがるな！！
てめぇは……一体何を知ってるんだぁ！！」

「……ぶたれるのは平気よ！
子供の頃、死ぬほど殴られたんだからァ！！」

《パァン！！》

今度は彼女がラクリーマに返しのビンタをくらわした。
頬を押さえて、これでもかと言うくらいに睨み付けた。

「……っ！このぉ！！」

「……ふふっ、ただ一発殴ったぐらいで私が屈するとは大間違いだわ！

あんたみたいな男はランって死んだ女のことを死ぬまでウジウジ未練たらしてればいい！！」

“……ブチっ……”

その瞬間、ラクリーマの頭の中の何かが切れた音がした――。

そして……。

《！　！　？》

横で怯えていたのび太としずかはさらにその光景に目を疑った。

「……！」

ユノンは口元を押さえられて、ラクリーマにのしかかられている。

脱け出そうとするが、彼の異常に力を入れているのか全く動けない。

「ラ……クリーマ……なにを……」

のび太の問いに彼は平然とした態度で二人の方へ向いた。

「二人とも、よく見とけ。これが……男と女の行き着く先だ！」

まだ無知なのび太達が見ているにも関係なく彼の空いた手で彼女の下半身に手を忍ばせ、彼女の耳元でこう呟いた。

“お前のその……緑色の長い髪……かわいいな……”

「！　？」

ユノンは一瞬で顔色が真っ青となり身体中が震えて、大粒の涙が浮かび上がった。

……そう、彼女にとってのトラウマが今ここに再現されようとしていた。

（あ……あ……や……め……てよ……おねがい……だから……っ！）

ラクリーマの指先は彼女の下着に潜り、ついに秘部に到達し……。
「準備はいいか？のび太達が見てる中でヤるのはそそられてさぞかし最高だろうな！！」
彼は完全にキレている。本当に行為を実行するつもりだ。
（……ああっ……ああっ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだァァァっ！！）
「イヤだぁぁぁぁっっ！！」
彼女の悲痛な叫びが、それはまたこの室内どころか通路までも響き渡った。
「……」
途中で中止し立ち上がると、今度は彼が彼女を見下すような態度をとった。
……彼女はガチガチに震えている。誰の目から見ても非常に怯えているのが一目瞭然だ。
「……ユノン、本気で失望したぜ。

てめえが……そこまで根暗な女だったとはよぉっ！！」

ラクリーマは背を向けて、メディカルルームの出入り口に移動した。

そこで止まり、彼女にまるで『敵』とみなしたようなギラッとした瞳を向けた。

「ユノン、お前みてぇな奴はもうアマリーリスには不要だ。一緒にいると俺ら全員の士気が下がっちまう。

……2時間後だ。それまでにお祈りでもしときな」

「えっ……？」

「ラクリーマ……さん？」

そこで放たれた彼の言葉とは。

「2時間後にオペレーションセンターで俺の手でお前を殺してやる。全員が見ている前でなぁ！！」

《！　！　？》

のび太としずか、ユノンの三人が固まった。
彼女を……彼が好きだった彼女を自らの手で処刑すると言うのだった。

「俺は本気だ。部下を通じて連行させる。
のび太にしずか、ユノンに最後のお別れでもしてな。
処刑を見たいのなら好きにすればいい！！」

しかし、ユノンはともかくそれでのび太としずかは『分かった』とうなづけるハズがなかった。

「あんまりだ！！ユノンさんを殺すなんていくらなんでも酷すぎるよ！！」

「そうよぉ！！ユノンさんともっと話あえば絶対にわかってくれるわ！！
お願いだから処刑なんて惨いことやめてぇぇ！！」

二人の懸命な訴えも彼の堅い決意が揺らぐハズがなく、

「……酷いだと？こいつはもはや仲間でも味方でもねえ『反逆者』だ。

俺は反逆者とみなしたら即処刑だ。

本来なら今すぐにでも無理矢理引きづって宇宙空間に放り出したいところだが、こいつは今まで俺らに尽くしてくれた。

せめてもの礼に俺が自ら手を下すんだ。逆に感謝してほしいとこだな。

……よかったなユノン。お前、最期は孤独を味わうことなく死ねるんだからな」

そう言い残し、ラクリーマはメディカルルームから去っていった……。

「ああっ……ラクリーマぁ！！」

のび太はラクリーマを追って、ルームから飛び出した。

すぐさま離れていく彼の元へ向かった。

「ラクリーマ……ホントにユノンさんを……」

彼は振り向きもせずに歩くのをやめた。

「ああ……。俺は初志貫徹する男なんでね」

「けど……ラクリーマはユノンさんのこと……」

その言葉に彼は黙り込んだが、長くは続かずにすぐに口を開いた。

「のび太、見ただろ。あいつは……多分一生あのままだ。お前らと一緒に地球に降そうと考えたが……あんなに心を閉ざしてたら、どこにいてもやっていけないだろう。あいつは死ぬまで本当に惨めに生きるハメになる。そんなことになるくらいなら……今ここで死なせてやったほうが幸せなんだよ」

「ラクリーマ……」

そう言い、ラクリーマは長い通路を寂しく歩いていった。
そういう冷たい言葉を放つ彼もまた、両手の拳をこれでもかというくらいに握りしめて震えていた。

まるでいつぞやのレクシーが言っていたランという最愛の恋人が死んだ時のように……。

◇ＰＡＲＴ．３３　告白

ユノンを処刑するという事実は艦内に瞬く間に広まった。

「ええっ！？本気ですかリーダーっっ！？」

「ああっ。場所はオペレーションセンターだ」

彼の周りには部下達が一斉に集まっている。しかもそれを疑っているよう顔で。

「ユノンさんはさっき重症を負ったばかりなんですよ！？いくらなんでもあんまりじゃないですか？」

「あいつはもうダメだ。戦力外どころか俺らの士気まで低下させかねん奴だ。

そんな女をいつまでもここに置いとくわけにいかねえ。くせぇやつは元から断たないといけねえんだよ」

と、彼は平然と断言する。

「一体、ユノンさんと何があったんですかぁ……？」

「……」

「なら……代わりは誰がするんで……」

「……候補はレクシーだ。頭もいいし、統率力もある。なによりあいつなら俺と相性がいい。上手くやってけるだろう。

……以上だ。もしユノンに別れを言いたい奴がいるなら好きにしろ。それ以外は各人、時間まで持ち場に戻れ！！」

「……」

誰も反論できなかった。アマリーリスの総司令官である彼の宣言は絶対であるからだ。

命令を無視または逆らうことはすなわち反逆を意味する。

説得しようとも、彼は決めたことには断固として曲げない性格なのは全員がわかっていた。

もはや誰にも止めることはできなかった。

「……俺はちょっと疲れた。少しだけ、部屋で仮眠してくる。

誰も起こしにこなくていいからな」

そう言い、ラクリーマは無言のまま、部下達から去っていった。

「はあっ……はぁ……っ、ユノンさんを処刑するって本当かぁ！？」

「レクシー？あとのび太も！」

ちょうどレクシーも彼らの元へ駆けつけてきた。
その後ろにはのび太も一緒で息を切らしているのを見ると急いできたのがよく分かる。

「のび太に聞いたらリーダーがこっちに向かったと聞いてな！」

「あの……ラクリーマは……」

「……部屋に戻った。時間まで仮眠を取るって……」

「次の副司令官はレクシー、お前だそうだ……」

レクシーは頭を押さえて苦渋の表情へと変わった。

「まさかこんなことになるなんて……」

「レクシーさん……」

のび太は事の重大さを前にしても何も出来なかった。

自分には関係ないであるけれど、今日さっきまでいた、しかもラクリーマという悪党であるが自分たちを地球まで送ってくれる云わば、恩人が思いを寄せる女性が2時間後には……。

そう思うとあまりの無力さに胸が締め付けられるような気持ちになる。

「僕に……何かできないかな……？」

……

一方、メディカルルームでは取り残されたしずかとユノンは無言のまま、ただ来るべき時間まで身を任せているだけであった。

ユノンはベッドでしずかとは反対方向に寝そべっていた。
まるで顔すら合わせたくないかのように。

「ユノンさん……いいんですか……？
このままじゃ……あなたは本当に……っ」

「……」

ユノンは何も喋ろうとしない。
そんな彼女をしずかは。

「ラクリーマさんは……あなたのことを心配しているんですよ？
だから少しだけでも理解して…っ」

「うるさい！！」

「！　？」

「あたしはもう終わりなのよ！！もう最期まで誰とも会いたくない
！！」

「ユノンさん！！」

「出ていきなさいよォ……。もう同じ空気を吸っていると思うだけ
でも吐き気がする……」

あまりにも自暴自棄な発言にしずかにもついに……。

「どうして……どうしてそんなに拒むんですか……？あなた、あの人に殺されるかもしれないんですよ！？なんで許してもらえる方法を考えないんですか！？」

「……ムダよ」

「どうして！？」

「あいつは決めたことには一歩を退かない頑固者なのよ。もう、誰にも止められない……。

それに……あたしはもう人生に疲れてね。いっそのこと、一思いに殺してくれれば……」

しずかは拳を震わせて、目頭を熱くさせていた。もちろん、興奮などしていない。

今の彼女はあまりにもだらしなさすぎての苛立ちである。

「ユノンさん、あなたは前から逃げてるだけだわ。

このままじゃ……あなたは本当に死ぬまで孤独のままよ！！それで

いいの！？」

「……っ！！」

「それにあなたが処刑されるなんて、あたしやのび太さんはもちろん……ここの人たち全員は絶対望んでないわ！！

ラクリーマさんだってあなたを本当は処刑なんてしたくないハズよ！」

「……黙れぇ……」

「お願いだから心を開いて！！
あなたの気持ちはわかるわ！けどあなたが変わらないことには……」

《黙れって言ってんでしょ！！クソガキ！！》

「いいっ！！」
ユノンはベッドから降りて、殺気を込めた瞳でしずかに睨み付けた。

「……前に言わなかったかしら……あたしにナメた口きくとどうなるかって……。

……どうやら本当に痛い目に遭いたいようね！」

「ああっ……あ」

「わたしはねぇ、あんたみたいにのうのうと気楽に生きてきたような奴を見ると腹が立つのよ……。

……何が気持ちがわかるだ。自分がそういう経験をしてないのにいかにも分かったようなツラしやがって……」

「ユノンさん……？」

ユノンの様子は明らかにおかしかった。心の奥底に溜まった黒い部分を全面に押し出しているように、今の彼女は醜く見えた。

「何が孤独よ。ならあんたも一緒に来てくれるかしら……っ。あたしと地獄にねぇぇっ！！」

ユノンはしずかに飛びかかり、首根っこを両手で本気で握り掴み、そのまま床に押し倒した。

「あ……がぁあ……っ」

「どうせあたしはもう死ぬんだ。ならあんたも道連れにしてやる……っ！！」

ユノンはしずかを殺す気だ。
その握力、殺気、全てが物語っている。

……幼い頃、母親が自分に手をかけた同じ方法で……。

「やめ……てぇ……、ユノン……さ……ん……」

「あんただけは許さない……。絶対に……」

しずかは悲しかった。彼女は本気だ、そこまで自分を……。

“わからない。わたしはユノンという女性がわからない”

しずかが見た彼女の顔はどす黒く汚いモノが顔中に目や鼻、口が見えないほどにべっとりつき、どんな表情をしているのかもわからな

かった。

「～～～～っ」

ユノンの力はさらに増して、このままではしずかの命は危ない。

（……ふざけ……る……な。なんで……あたしがァァ……っ）

《ガブッ！！》

「ギ　ャ　ア　ァ　ッ　っ！　！」

なんとしずかは渾身の力で彼女の腕に掴み、首を起き上げた同時に右腕に噛みついた。

ユノンはあまりの激痛に噛まれた部位を押さえている。

見ると歯形が出来ているほどの威力であった。

「このガキィ……よくもあたしの腕をォォ！！」

「ゲホっ……ゲホゲホっ！！はぁ……はぁ……。

なっ……何よぉ……。人がせっかく親切にしてるのに……あなたみたいな分からず屋はホントにはじめてだわ……っ」

しずかは咳き込みながらゆっくり立ち上がり、涙まじりの目でユノンをグッと睨み付けた。

「もうあなたなんて知らない！殺したきゃ殺せばいいじゃない！！やりなさいよぉ！！」

「このぉ……言わせておけば！！」

「けどそんなんじゃ……あなたは死ぬまでラクリーマさんの気持ちがわからないわ！！」

「はあ！？あいつの気持ち？意味が分からないわ！？」

「この際だから言うけどラクリーマさんはねぇ、ユノンさん、あなたのことが好きなのよぉ！！」

《！！》

次の瞬間、ユノンの険の表情がなくなった。

「いっ、今……なんて……っ」

「聞こえなかったの!?ラクリーマさんはあなたが好きなのよぉ!!」

「ええっ……ウソ……でしょ」

「嘘なんかじゃない!
あたしとのび太さんはこの耳でしっかり聞いたわ!!
ラクリーマさんはあなたのことが好きで好きでたまらないそうよ!」

「……!!」

「けどあなたが……あなたがそんなんだから……あの人はいつまで経ってもあなたに好きって言えないのよ!!」

「あ……ああ……っ」

「ラクリーマさんはあなたを救おうとして、元気にさせようとして必死で悩んでたのよ!

それなのにあなたは……あなたって人はァァ!!」

しずかは泣きながらユノンにその事実を伝えた。
すると、彼女は真っ青となり、ぶるぶる震えて両手で顔を押さえ、ついに!!

《あ〝あ〝ー　ー　ー　っ　っ　！　！》

今まで聞いたことのない悲しく痛みが混じった叫び声が辺りに響きわたった。
その場で顔を押さえながらへたりこんだ。

「ユノンさん!?」

「……ひくっ……もう……何がなんだかわからないの……」

彼女は泣いていた。それも悲しみのドン底に叩き落とされたかのようだった。

「……苦しいよぉ……誰か……助けてよぉ……もういやなのよぉ……うくっ……」

今のユノンは本当に哀れだ。
まるで彼女が映像内で泣いていた幼い頃の姿と重なってる。
そう感じたしずかは少し後悔まじりの表情でユノンに近づき、肩に優しく手を置いた。

「……ユノンさん、言い過ぎてごめんなさい。
けど、あなたが変わらないと何も変わらないと思う。
あなたはラクリーマさんのこと……どう思うの?」

ユノンはやっと冷静さを取り戻し、今まで記憶や思い出を振り返った。
考えてみれば……ラクリーマがいたからこそ、今までなかった自分の生きる場所、能力の活用できる、いわば『居場所』をもらえた。
さらに誰とも心を開かなかった自分が、彼のおかげで少しずつだが明るい感情を引き出してくれた。

証拠に、今は昔と比べて喋るようになったし、本音を言えたり、尚且つ色んなことをさらけ出すことができた。

そしてしずかが教えてくれた事実。
そう考えれば、彼は自分のために本当に頑張ってくれていたのだと今、初めて実感した。
そこから出された答えは……。

「……ラクリーマの……こと……自分の気持ち……わからないケド……わたしも好きよ……好きぃ……」

「ユノンさん!!」

しずかは今すぐにでも飛び上がりたいほどに嬉しく感じた。
あのユノンが初めて……彼に対する本心を今ここで打ち明けてくれたのだった。

「けど……どうすればいいの……このままじゃ……あたしは……っ」

「ユノンさん、あたしも恋なんてしたことないからよくわからない

わ。

けど……あなたもあの人のことが好きなら……その思いを自分から伝えたみたらどうかしら……？」

しずかはユノンの手をギュッと握り、コクッと頷いた。

「しずか……あなた……ホントにいい子ね……。

……ごめんなさい……ヒドイことしちゃって……」

ユノンが涙を浮かべて謝っている。

……本当にしずかというこの女の子は素晴らしい人格の持ち主である。

「ユノンさん、今ならまだ間に合うわ。

ラクリーマさんにちゃんと自分の気持ちを打ち明けて謝れば絶対に許してもらえるわ。

わたし、思うの。あの人はそこまで酷い人じゃない……」

「……ええっ……わたし、行ってくるわ！！」

しずかからの励ましをもらうとすぐに立ち上がり、急いでメディカルルームから去っていった。

「ユノンさん、頑張って……っ」

しずかはユノンの後ろ姿を暖かい目で見守った。

……

「はぁ……はぁ……っ」

ユノンはラクリーマを探して艦内をさ迷っていた。
もう時間など関係ない、今はもう彼に本当の気持ちを伝えることしか考えていなかった。

すると、

「「ユノンさん!?」」
途中でのび太とレクシーに出会い、足を止めた。

「はぁ、はぁ……らっ……ラクリーマはどこ……教えてっ!!」

わけがわからず焦り出す二人。

「リ……リーダーは……」

「ラクリーマは……司令室で少し休むって！！」

「……ありがとう。助かったわ」

彼女は休む暇なく、また走り去っていった。

「どうなってんだ一体……！」

「レクシーさん！！ユノンさんを追いかけよう！！」

「あっあああっ！！」

二人も彼女を追って全速力で走り出した。

……そして彼女は司令室にたどり着き、ユラユラ歩きながら中へ入っていった。

「ラクリーマ……あたし……っ」

彼はベッドで寝ていた。疲れがたまっているのか、ぐったりしているようにも見える。

ユノンは彼にたどり着くと瞳を震わせて見つめる。

「ラク……リーマ……」

起こそうと彼に触れようとしたその時、

「……ラン……っ」

「！　？」

突然、あの名前が彼の口から飛び出した。

「……ラン……俺を一人にするな……」

多分、寝言だろう。だが、ユノンにとってはまるで絶望の渕に立たされたような気分であった。

「……まだ死んだ女のことを……ううっ……」

彼女はまた涙を流し、彼から離れた。

……女の嫉妬である。例え寝言でも好きな彼氏から昔の彼女の名前を出されたら不快極まりないのである。

それはいまだに忘れていない証拠。

そう……ユノンもそういう心境でだった。

「……ううっ……うあああああっ！！」

彼女は泣きながらそこから後にした。部屋から出ると、なりふり構わず駆け出した。

もう泣くことしかできなかったのである。

「「ユノンさんっ！！」」

ちょうど駆けつけたのび太とレクシーは泣きながら走り去っていく彼女とすれ違った。

「……」

「どうしたんだろ……っ？」

すると、

「お前ら、どうした？」

当の本人もさっき目覚め、眠たそうな顔をしてのび太達の元にいた。

「さっきユノンさ……」

「ラクリーマさん！！」

「「「しずか（ちゃん）！！？」」」

今度はしずかが三人と合流を果たした。
彼女も走ってきたのかえらく息切れしていた。

「はぁ……はぁ……ラクリーマさん、ユノンさんがこっちに来なかったですか！？」

「えっっ……来てないが。あいつがどうしたんだ！？」

「あの人、ついに本心を打ち明けてくれたわ。ユノンさん、あなたのことが好きだって！
今、思いを伝えに行くって！！」

それを聞いた三人、特にラクリーマに強い衝撃は通った。

「なん……だとぉ！？
……それでユノンはどこに！？」

「それが……っ」

「ユノンさんなら向こうへ泣きながら走り去っていきましたぜ！！」

レクシーが指を差し、ラクリーマは状況をゆっくり受け止めて、三人の方を見た。

「……わかった。あいつを追う。お前らも手伝ってくれないか！？」

「……リーダー、処刑は……」

「なしにきまってんだろぉっ！！俺もあいつの気持ちを聞きたい！！頼む、力を貸してくれ！！」

三人は互いに見つめあい、同時に頷いた。

「わかりやした！」

「僕たちも手伝うよ！！ねぇしずかちゃん！？」

「ええっ！！」

「……恩にきるぜ。レクシー、二人を連れて向こうを探してくれ。俺は反対側から探す！

多分、テレポーターを使うからどこに行くかわかんねえ。あいつを見つけたら通信機で伝えてくれ！俺も見つけたらお前に連絡をとる」

「了解しやした。仲間を総勢させますか？」

「いや、全員はちいとマズい。あいつ感づいて隠れちまったら非常に面倒だ。

キツいがお前らと最小限の人数だけで探してくれないか？」

「わかりました。なら、二人とも行くぞ！！」

「「はいっ！」」

のび太達はラクリーマの反対方向へ去っていった。

「ありがとよ……お前ら」

ラクリーマも彼女を走り去ろうと走る態勢を取った時、

《ズキィ！！》

「つ……うっ！」

また激痛が走った。しかしこれまでとは比べものにならないほどの痛みであった。

「くそっ！！こんな痛みなんぞ……あいつの心の傷と比べたらぁ！！」

ラクリーマはわき腹を押さえて走っていった。

……

４人はユノンが行きそうな所へ向かった。

自室、休憩広場、オペレーションセンター、開発エリア、ｅｔｃ…

…しかし、どこにも彼女の姿はなかった。

部下たちに聞いても証言が定かではなく、まさに五里霧中であった。

「ちぃ、ユノンの奴……どこに行ったんだ……」
ラクリーマは未だに見つからない彼女を探して艦内の至る所を走り回っていた。
休みなしで走っていたためか、顔じゅう汗だらけである。
しかし、それだけでないようである。

「はあっ……はあっ……っ！！」

息を切らし、わき腹と胸を押さえて立ち止まった。
……どうやら傷が悪化しているようである。

「……ぐくぅ……っ、はあ……はあ……っ。
……ワリィな、無理させちまって……だが、耐えてくれよ！！」

一呼吸おいて、また走り出そうとした時、

“リーダー……リーダーっ！！聞こえますか！？”

通信機からレクシーの声が聞こえた。

「レクシーか！？どうだ！？」

“聞いた話によるとユノンさんはどうやらプラントルームにいるようですぜ！！”

「プラントルームだと？わかった、今すぐそっちに向かう！！お前らもそこで合流だ」

――そして、多目的エリアのプラントルームで４人は再開した。
オペレーションセンターに連絡を取り、オペレーターがモニターで確認すると彼女らしき人物がベンチに座っているのが確認され、未だ出ていない模様だ。

「……あとは俺の出番だ。お前には本当に感謝しねえとな」

「いやいや、これもリーダーのためですから。
それに……」

のび太、特にしずかは何かを期待しているように輝かしい目をしている。

「ラクリーマ……ユノンさんに上手く伝わるといいね」

「わたし、信じてるわ。二人の思いが伝わることを……ガンバってください……」

「お前ら……っ。ククッ、照れるじゃねえか。
なら行ってくる、三人はもう解散してくれ」

そう言い残し、彼はプラントルームのドアをまたいでいった。

……

ユノンはプラントルームの中心のベンチで一人、黄昏ていた。

“やはり、自分より死んだ女のほうがいいのだろうか……。
確かにあたしみたいにこんな根暗で心の病んでいる女より、はるかにいいかもしれない。

その女が生きていたら諦めるかもしれないけど、今はもういない。
なら自分の気持ちはどうなるの……？

やっぱり、あの時なにも知らずに死んでいれば……っ”

これではしずかの言ったことが嘘だと感じ、彼女はため息をついた。

「ユノン、ここにいたか！」

「！　？」

ついに本人のラクリーマが駆けつけ、対面した。

「探したぜ。お前、まだ病み上がりのクセに無茶すんじゃねえよ！」

ユノンは顔を真っ赤にして、立ち上がると彼に背を向けた。

「おいおい、待てよ。こんな機会なかったから二人で話さねえか？」

「……」

ラクリーマはユノンを無理やり座らせて、彼も隣に座った。

今の室内は夕焼けがかかり、オレンジ色の光が二人を包んでいた――。

「ここの花や植物すごくねえか？これは昔の恋人が咲かせたもんなんだぜ。

まあ、ここまでは俺が大事に育てたがな」

「……」

しかし、彼女は手を握り震えている……。

「俺はな、死ぬまでこいつらを育てるつもりだ。

もし万が一、俺が早く死んだらお前がここを引き継――」

「――何よ。あんたはあたしにその死んだ女の話をしてどうしたいのよ!!」

「ユノン……っ!?」

「そんなにその女が好きなら早く死んであの世へ行けばいいじゃない!!

……けど、あたしにどう責任とるつもりよぉ!?」

彼女は大粒の涙を浮かべた。そして唖然としているラクリーマに対して、ついに――

《あたし……あたし、あんたが好きなのよ!!

好きで好きでたまらなくなってしまったじゃないのぉ!!

どうしてくれんのよ!?》

「……ユノン……お前」

「けど……あんたはそのランって女が好きなんでしょ！！忘れられないんでしょ！！

あたしのこの気持ち……どこに向けたらいいの！？」

「……っ！！」

あのラクリーマが顔面蒼白となっていた。

そう……ユノンも好きだがランのことがどうしても忘れられない。

これが仇になった瞬間だった。

「おっ、俺はぁ……っ」

「無理しなくていいわよ。

どうせあたしみたいに……性格悪くて無愛想で……根暗で……リストカットするような女が人を愛する資格なんてないのよォォ！！」

「ユノン！！」

彼女から涙が溢れだし、立ち上がるとすぐさま走り出した。

彼も慌てて彼女に追い付き、腕を掴んだ。

「だから待てよ！！俺の話を聞けよ！！」

「離してよォ！！もうあんたと顔も合わせられないのよ！！
もう今すぐにでも自ら死んでやる！！」

ラクリーマは泣きじゃくり暴れる彼女の両肩を掴んで無理矢理焦点を合わせ、互いが見つめ合うような状態になった。

「なら俺も今ここで伝えてやんよぉ！
ユノン、俺はお前が好きだ！！
お前のその容姿、体格、声、行動全てが愛しくてしょうがねえんだよぉ！！」

「……」

彼女はその場で静かになった。ただ、「ハァ、ハァ」と息を小刻みに吐いている。

「キャア！」

「ユノン、今だけ俺の前で女らしくなってくれ」

彼女をまたお姫様抱っこをして、そのままベンチに座った。

……数十秒ほど経って、互いに顔も見ず、静かだった周りの空気が彼の声で途切れた。

「ああ、確かに俺はそのランって女が好きだった。

情けねぇことに未だに夢の中に出てきては俺から離れていくんだよ」

彼の目はいつになく淋しさを伴っていた。

「前任のボスもランが好きだったらしくてな、そいつの気持ちを考慮して、俺はあいつを死ぬ直前まで、十分愛してやれなかったからかもしんねえ……」

「……あんたって悪人だけどそこは人間くさいわよね……」

「だから頼みがある。

……さっきも言ったが俺はどうしてもランのことから離れられなくて本当に困っている。

だから……お前の力を貸してくれないか？

俺の中にユノン……お前という女しか見れねぇようにしてくれ」

「あたしは……そんなことできる自信がない。第一恋愛したことが……」

「そんなの関係ねえよ、好きになったモン同士がな。俺はお前を幸せにできるように頑張る、毎日好きなだけ愛してやる！」

ラクリーマに優しい笑みを浮かべて近い彼女の顔を見つめた。

「もう一度言うぜユノン。お前が好きだ。俺と付き合ってくれないか？」

「……ほんとにあたしなんかでいいの……？」

「当たりめえじゃねえか。俺にはお前みたいなしっかり者が必要なんだよ」

彼女も笑みを浮かべていた。それも今まで見たことのない優しい笑顔で。

それは美人である彼女をさらに引き立てることになった。

「……ふふっ、あんたってまるで甘えん坊で子供みたいね……」

「そうかもしんねぇ、だから頼むぜ。俺の……お姉ちゃんよぉ」

「……うん」

……そして室内は夜のように暗くなり、特殊なスポットで再現した月明かりの下で静かに濃厚な口づけを交わす二人の男女の姿があった。

やっと二人の思いは重なり、至福の時を迎えた。

“嬉しい……っ、嬉しい……っ”

彼女はもう孤独ではない。このアマリーリスの……いや、この愛する男がいる限りはもう寂しい思いはしない。

そして彼もまた、やっとユノンと一緒になれて死ぬほど嬉しかった。彼女はタバコを吸っているためか、口づけは苦さもあったがこれもまた味になっていい。

そう……二人は今ここで誓いあったのだ。

……一方、オペレーションセンターでは。

“やったあああっ！！”

その様子を見ていた大勢の組織員は一斉に歓喜と祝福を上げた。
中には涙するものもいた。ここまで綺麗にいくとは思いもしなかった。

その中で、のび太、しずかも二人の姿に嬉しさと喜びが溢れかえっていた。

「二人とも似合ってるね……よかった」

「ええっ。ラクリーマさんとユノンさん……ホントにきれい……」

「僕らもああいうふうになりたいね」

「ええっ……って!?
どういう意味よのび太さん!?」

「どっ、どういう意味ってしずかちゃん……」

――ラクリーマは口づけを止め、彼女にこう言った。

「どうする?もしかしたら奴らがこの中見てるかもしんねえぜ?

……続きは司令室でするか？」

その問いに彼女はクスッと笑った。

「……バカっ……」

――そして、モニターを眺める組織員達は何かを期待しているようにニヤついていた……。

「もしかしたらここで……うししししっ……」

「そりゃあたまんねえや！！」

「こうなったら全員で一部始終を観ようぜ！！」

“オオーーっ！！”

「やっ、やめろお前らーーっ！！
いくらなんでも二人に失礼だろ！！
それにここにのび太としずかがいるんだぞ！！」

大勢の息が合うなか、レクシーだけが顔を真っ赤に染めて慌てふためいていた。

「いいじゃねえか。それにのび太達にも勉強ということで！」

「だから二人にはまだ早すぎるっていってんだよ！！

俺は絶対許さねえぞ！！」

なんやかんやもめ事を言ってるうちに突然、プラントルームのモニタリングが切れ、映らなくなった。

オペレーターがパネル操作しても全く反応がない。

原因は……すぐに全員気づいた。

「あ～あっ……。リーダーの仕業だ」

「よく見たらドアもロックされてるみたいだな……。

これじゃあ観れねえぜ……」

「ちぇっ……」

落胆の言葉とため息が辺りに飛び交う。

まあ、これで二人のプライベートは守られたわけで一件落着である。
当然、のび太達は一体中でどんなことが行われているのか想像できなかった。

……

次の日、エクセレクターの修理を終えて発進した。

ラクリーマによると、あと1日で地球のある銀河系の手前の宙域に行けるという。
のび太達二人にとってはとても待ち遠しいことだ。

しずかとのび太は通路を歩いていると前方から女性の姿がこちらに近づいてくる。

「ユノンさんだ」

「あっ！」

「……」

彼女はいつも通りの仕事に戻り、いつもと同じく飄々と歩いている。

「「お疲れ……さまです」」

「……」

何も言わず、軽くお辞儀しただけで互いの横を通る。

そこから数歩歩いた後、

「しずか？」

「はっ……はい！？」

「……ありがとう。心の底から礼を言うわ。また……あたしの話し相手になってくれないかしら……？」

なんと彼女から感謝と誘いの言葉を言われて、二人はすぐに振り向いた。そしてしずかは嬉しさのあまり、顔をにんまりさせた

「ユノンさん……はい喜んで！！」

「フフ……っ、楽しみにしてるわ」

彼女も笑い、歩き出した。

今度はしずかが彼女に、

「それからユノンさん？」

「……？」

「ラクリーマさんとお幸せにぃ！！」

満面な笑みで彼女に祝福の言葉を浴びせた。

「……」

ユノンは二人の方へ振り向き、とびっきりの満面の笑みを返した。
美しく、可憐な印象を伺わせるほどで、それは彼女が心を開き始めたことを顕す出来事であった。

それを見た二人はどれほど嬉しい出来事だろうか。多分、言葉にできないほどであろう。

……長かったのび太達の旅もようやく終わりを迎えようとしていた。

しかし、向こうには宇宙屈指の強大組織『銀河連邦』が待ち構えていることを、二人は知るよしもなかった。

◇ＰＡＲＴ．３３　告白（後書き）

ここでやっと長かった中盤が終わり、次の話から後半部へ移ります。

戦闘メインになると思います。

◇解説３（前書き）

登場メカニック系全般は解説４で説明したいと思います。

◇解説3

●登場人物紹介●

●アマリーリス勢

・ジュネ・サルナ

アマリーリスの女性オペレーターでレクシーの恋人。年齢は実は20歳である

ピンク色の全身タイツに紅いベストを着用する。

猫を祖先とした異星人『キャルト人』であり、組織員のなかで最も祖先の猫に近い姿をしている。

アマリーリスの一員らしく、気が強い姉御肌な性格。色気があり、のび太としずかを自分の部屋へ誘惑しようとしたことがある。

語尾に『〜だニャ』をつける。キス魔で男、女だれであろうと頬にキスをする。

過去は故郷惑星で水商売などで働いていた模様。

ユノンより年下で後に加入したので彼女には基本敬語である。

レクシー同様、のび太達を気に入ってる模様。

設定上、キャルト人は『のび太のワンニャン時空伝』に登場したあの進化したネコ達の子孫である。

モデルイメージは同じく『ワンニャン時空伝』で登場した女性歌手『シャミー』

身長＝１７２ｃｍ

体重＝４６ｋｇ

・シース

ユーダと喧嘩した戦闘員の一人。
彼はどの種族にも該当しない知的生命体であり、男口調だが実は中性である。

身長＝１８１ｃｍ
体重＝５２ｃｍ

●銀河連邦勢

・サルビエス

銀河連邦、総本司令部所属の第１７攻撃部隊の隊長でエミリアの同期。階級は大尉。
キツネが祖先の異星人『フォクシス』で、その特徴が耳と鼻に受け継がれている。

非常にエリート意識が強く、エミリアをよく馬鹿にする（本人は全く無視している）ので二人の折り合いは悪い。出生が貴族で努力で今の地位にいるエミリアとは違い、本当はコネで今の地位を獲得したはったり者である。なので部下からの信頼は非常に低い。常に部下のコモドスを付けている。

身長＝１７６ｃｍ

体重＝５９ｋｇ

・コモドス

サルビエスの部下で階級は中尉。ミルフィの同期。エミリアとサル

ビエスとは違い、二人の仲は良い。
ゴリラ系霊長類を祖先とした異星人『コンガース』で、その特徴が体全体に表れている。怪力で、大人しく優しい心の持ち主。ある事情で常にサルビエスの下について共に行動する。
身長＝１９６ｃｍ
体重＝９５ｋｇ

●その他

・エルネス
本編には登場しないが、ラクリーマの回想に登場する、ラクリーマのかつての悪友であり親友。
ラクリーマのような黒い全身タイツの上に白衣を着用している。
マッドウイングと呼ばれる宇宙の惑星ラグラ出身。
歳は地球人年齢で換算するとラクリーマより５歳年上。サイサリスとは同じ惑星出身で仕事仲間。
アマリーリスの前身である宇宙海賊のキャプテンであり、天才科学者で『エクセレクター』、『ブラティストーム』の開発者。豪胆で自由奔放と到底科学者とは思えない性格をしている。
そしてラクリーマと同じでスケベで女たらし。

どれだけの女性に手を出したかわからない。
敵や裏切り者には容赦ないが仲間に対しては人情味溢れる一本気気質で、ラクリーマの性格は彼から影響を受けている。
キレ者で性格もあり、部下達からは非常に慕われていた。
ブラティストームをよほど気に入っていたらしく、ラクリーマの体に移植する際には、『親友（ダチ）の証』と賞した。
ラグラでは若き天才科学者としてその名を馳せたが、実は人体実験なども請け負っており、その悲惨さを知った彼は反乱を起こし、完

成間近であったエクセレクターを強奪する。
それからはこのような経験から同じような境遇で育った者、底辺扱いされた者、さらに複雑な過去を持つ者を受け入れ、『今度は俺達が楽園を掴む番だ！』と言う願いを掲げて宇宙海賊を結成した。

彼もまた、ランのことに好意を抱いていたのだが……。

彼の死がアマリーリス結成に繋がることとなる。

・ユノンの母親

ユノンの実母で彼女を狂わせた張本人。飲んだくれでネグレストという母親失格。
実は様々な男と遊び、身籠った子供がユノンであり、その父親からも逃げられた。
それからは男ができない腹いせに彼女を幾度なく虐待していた。
しかし、それが悪化して最終的には実の娘を自らの手で殺害しようとしたとんでもない人物。
逮捕後は、アルコール中毒と精神不安定と判明し、精神病棟へ入院した。

その後は不明だが、アマリーリスが惑星ドグリスに襲来した際に死亡したと思われる。

余談だが、虐待をする親は自身も子供の時にも同じ行為を受けた影響から来ることもあるので、この母親も幼年期には親から虐待を受けていた可能性が高い。

●登場メカニック●

●合体変形

エクセレクターは分離、合体における変形を持ち、いかなる状況にも対応できるあまりにも特殊な機構を持つ。３形態あり、三人の各操作が必要となる。

◆主な形態

・エクセレクター・タイプ１

エクセレクターの第１形態。普段はこの形態で維持している。推進力、装甲、火力、全ての性能が安定している汎用形態。

対艦レーザー砲、リバエス砲、光子ミサイル等、長射程攻撃特化である。

なお、リバエス砲へ移行できる唯一の形態である。

・エクセレクター・タイプ２

エクセレクターの第２形態。超巨大な怪鳥の姿をした強襲用形態。

推進力は大幅に向上し、加速、最高速度は全形態中最高。

それを利用し前方にエネルギーを収束し、膜状に展開しての突撃が強力。（ビーム・ラムのようなもの）

ただし、エネルギーを前方に全て回すためにバリアが展開できず、左右の攻撃に弱くかつ装甲が弱い。

・エクセレクター・タイプ３

エクセレクターの第３形態。亀のような姿をした重装甲および広範囲殲滅型形態。

推進力を犠牲にした代わりにいかなる攻撃を防ぎ、さらに全方位を一気に攻撃できるエネルギー粒子砲を搭載し、範囲内なら無類の強さを誇る。

・ブラティストーム

親友エルネスが開発したラクリーマの左腕の代わりである超高性能義手型自律兵器。

エネルギー動力は小型ＮＰ炉心で、左肩内に搭載している。

様々な兵器を内蔵し、ラクリーマの神経に直結しているため、思い通りに武装を変更、出し入れができる。

切り離すことができ、その際は内蔵されている自律回路が自動で起動し、単独での行動、攻撃が可能となる。さらにリフレクターという付属品は左胸部に埋め込まれ、いかなるエネルギー兵器を全て跳ね返すという機能がある。ただし実弾兵器や爆風、熱は防ぐことは出来ない。

通常時はラクリーマの左義手として使用する。

◆内蔵武装一覧

・小型レーザー砲×４

手首付近から展開される計４門のレーザー砲。非常に使い勝手がよいため、頻繁に使用される。

出力を変えることができ、対人用から対大型戦闘ユニット用まで上

げることができるが、収束する時間が必要でさらに炉心の臨界点を突破するため、一度最大出力で発射すると、再使用に時間がかかるという欠点がある。
レーザービームを一点に集中放射することにより、それを利用した斬撃も可能である。

・収束型ミサイル発射装置×2
上腕部に内蔵した計2発の小型ミサイル。

このミサイルの中にはより小型のミサイルが無数に収納されており、元の弾頭が発射された数秒後に中の弾頭が発射される仕組みで広範囲に攻撃、弾幕を張ることが可能で対人戦及び、対戦闘ユニット戦において真価を発揮する。
ただし補充はエクセレクター艦内で行われるため、戦闘時の使用は一回に限られる。

・ドリル
いかにもラクリーマらしい、もはや説明不要の男のロマン武装。親指以外の四指を回転させることができる。
弱そうに見えて、実はエクセレクター艦内の金属壁に穴を開けるほどの強力な威力である。

・鉤爪
手の甲の先に突出する計4本の長い金属爪。切れ味が鋭く、相手の首元を容易に切断するほどである。特に白兵戦が得意のラクリーマには非常に顕著な強さが表れる武装である。

・ドリル（鞭）

ドリルとして機能する指は実は鞭のように伸縮自在であり、さらに回転させることができ、これに直撃したものはズタズタにするというかなりの鬼畜な兵器。対集団戦で使用する。切り離した際は使用出来ない。
元ネタは西川秀明の作品で今も連載中である漫画『偽書ゲッターロボダークネス』に登場するゲッター?の武装『ドリルワーム』から。

・高出力ＮＰエネルギー砲
肘に搭載された大型レーザー砲。折り曲げて展開し、大型戦闘ユニットくらいなら一撃で消し飛ばすほどの威力はあるが、連射不能でチャージに時間がかかる。なお切り離した際は使用出来ない。

◇ＰＡＲＴ．３４　決戦前夜（前書き）

今回は久々にドラえもん達へ移ります。

時間系列的に、ＰＡＲＴ．２４～ＰＡＲＴ．３３過ぎまでの話となっています。

◇ＰＡＲＴ．３４　決戦前夜

「うわああっ！！凄い！！」

「これが……エミリアさんの……」

「専用機かぁ！！カッコいい～～っ！」

エミリアはドラえもん達に艦内の隔離された格納庫の上空にて、とある戦闘機を見せていた。

それは彼女達が乗っていた偵察機とは違い、全体が綺麗なサファイア色のカラーが施され、左右に展開された特徴的な両羽翼とスラスター。まるで無駄な部分を省いたすっきりした胴体。

こんな形は地球では到底考えつかないフォルムだ。全長は、見る限り１５ｍ前後はありそうだ。

「これはあたしの専用機『イクスウェス』よ。

あたし達はこれに乗って作戦に参加するわ」

三人はこの『イクスウェス』の勇姿に見とれていた。

「ふえっ～～。これはどのくらい速いんですか？」

スネ夫の質問に、何故か彼女は苦笑いしていた。

「これね……はっきり言って最高速は不明なのよ……っ」

「ええっ！！どうしてですか！？」

「……実はね、あたし半分の出力しか上げたことないの……。この子、機内にとてつもない衝撃がかかってね、テストした際にあたし……半分だけの出力でもあまりの衝撃で血を吐いちゃって……気絶しちゃった」

「「「……」」」

その事実に三人の顔は生気を失ったように白くなった。

血を吐く……傷から血が出るとかそんなもんじゃない。文字通りの意味で口から血を吐き、それは内臓に傷つけてしまい、下手をしたら潰れてしまう危険性が高いということである。

そんなことを引き起こす代物に自分達が乗り込むなんて……エミリア本人も耐えられないのにいくらなんでも無茶苦茶だ。

命を捨てるようなモノである。

「けどね、今作戦にはこれを使う必要があるの。

確実に激戦は避けられないから、こちらもより強力な機体を使わないといけないのよ」

ジャイアンとスネ夫はその場でへたりこんだ。

「あっ～あ……。これで俺たちの短い人生も終わりかぁ……」

「最後に……最後にママの手料理たべたかったなぁ～～」

「だ　か　ら、ここでドラちゃんの道具を使うのよ。ねえ、何かないかしら？」

「何か道具は……そうだ、『テキオー灯』を使おう。

これなら多分、衝撃に耐えられると思うよ」

ドラえもんはポケットから『テキオー灯』を取り出した瞬間、さっきまで落ち込んでいた二人は急に立ち上がり、キラキラした瞳をした。

「おおっ、あるじゃねえか！！」

「さすがはドラえもん！！」

落ち込んだり立ち直ったりと全く……、忙しい奴らである。

「ただ問題は……あなた達の友達の生存が心配だわ。最悪の場合も充分考えられるし……」

そう言えば忘れていた。のび太としずかの生存状況を。
二人のいるところは幾多の惑星の全てを奪う、凶暴で残虐性を特化した極悪の組織の本拠地である。

「そっそう言えばのび太としずかちゃんは……。ドラえもん、『タイムテレビ』は！」

「ちょっと待って……ええと、ええっと……ん？ああっ！！」

ドラえもんはポケットの中に手を入れたが、数秒後に大声を上げたがこれは……。

「どうした？」

「ああっ、ない、ない！！タイムテレビがどこにも見当たらない！！裏山に出しっぱなしだったぁーーっ！」

「「ええ～～っっ！！？」」

これでは二人の安否を確認しようにもできないではないか！
ジャイアンとスネ夫は怒りを炎のように燃え上がらせてドラえもんに突っかかった。

「このポンコツタヌキロボット～～っ！！」

「こんな時に役に立たないんだからぁ！！」

「うるさぁい！！なんで僕ばかり責任を押し付けるのさぁ！」

「……」

モメ合いとなったとドラえもん達を尻目にエミリアは呆れるように

「はあ～～っ」とため息をつき、

「いい加減にしなさいっっ！！」

「「「！　？」」」

彼女の一喝にシーンと静まりかえった。

「ここに来る前に言わなかったかしら？「もしもの時は覚悟してね」と。

あなた達はそれを理解した上でここに来たんでしょう！？」

「けど……のび太達に何かあったら……っ」

心配し、うつむくジャイアンにエミリアは。

「……はっきり言って、その友達が生きている確率は非常に低いと思う。

奴らは命を奪うことを、まるで作った積み木を崩すかのように何とも思っていない極悪集団よ。

あの時『タイムテレビ』を見る限り……その子達は侵入者扱いされてると推測できるわ。

……あんな状況で助かるってよほどの運か勝算がない限り無理よ」

“……”

彼女から無情な現実を突きつけられて三人は多大なショックを受ける。

最もな正論である。だがまだ幼いジャイアン、スネ夫にとっては精神的にキツい言葉であった。

「……だけど、『確率が非常に低い』だけで『全くない』わけじゃないからね。

もしかしたら人質にされてるかもしれないし、または捕らわれているかもしれない……ということもあるから」

「エミリアさん……」

「とにかく希望は絶対捨てないこと。あきらめたらそこで終わりよ。一緒にその友達が無事であることを祈りましょう」

彼女から諭され、励まされ、落ち込んでいた三人は次第に表情が明るくなっていく。

「……そうだね、エミリアさんの言う通りだ。少ない可能性でも信じてみよう、二人とも！！」

「だな！！」

「エミリアさんはいいこと言うなぁ！」

「フフっ♪そうよ、元気を出して前を見ましょう。私もあなた達を全力で守るつもりだから安心して」

ようやく活気が出始めて、雰囲気がよくなった三人はエミリアと共に希望を見いだした。のび太達が生きていることを信じて……。

「……」

しかし、エミリアはどこか浮かない表情をしていた……。

（とは言うものの……、現状況で作戦が上手くいくかしら……。あまりにも戦力的にキツいし……）

……

時間は遡り……ドラえもん達がヴァルミリオンに到着した日、何故かこちらに向かっているアマリーリスの銀河系進行阻止作戦の会議が開かれた。

――作戦室。本艦の各部隊の隊長と特殊任務を付与されたエミリアは、艦長カーマインを中心に中央部に配置されている作戦モニターを見ていた。

「うむ……っ。アマリーリスがこちらに向かっていると言うことで我々が対処しなくてはならなくなったのだが……」

「本隊に連絡したところ、こちらに『ヴァールダイト級』５隻、『グラナティキ級』１２隻を援護に向かわせたとの報告が……」

隣にいた副艦長の報告にカーマインはなんとも渋い表情をとり、顎をつまんだ――。

「一体……本隊は何を考えているのだろう……。それだけの数でアマリーリスの侵攻を食い止められると思っているのか……」

援護支援にくる宇宙戦闘艦『ヴァールダイト級』はランクＡ級、『グラナティキ級』はランクＢ級のエネルギー質量しかもっていない。

S級の質量を持つエクセレクターに真っ向から挑むには明らかに戦力不足であった。

「本隊の連絡によると、別の作戦によりランクS級宇宙艦は全て使用中ということで、これだけで対処してくれ……と。

提督、これをどう考えます？」

「嘘も混じっているな。上層部はあまり、危機感を持っていないんだろう。“まあなんとかだろう”と」

「それではまるで……」

「我々は当て馬だな、我々にどれだけ被害が出ようが代わりはいくらでもいると思っている」

“……”

全員が沈黙したままだった。これでは多大な被害と犠牲は避けられない。

アマリーリスは連邦にとってあまりにも未知数な勢力であり、どういう兵器、武装を装備し、どういう戦術で攻めてくるのかわからない。

ただわかっているのは……奴らの本拠地である宇宙艦が本艦と同等のエネルギー量と火力を有することだけであった。

「……というわけだ。あまりにも理不尽かもしれないが任務は任務だ。現状況で作戦を遂行しなければならない。

それでみんなの意見を聞きたい、何かいい案がないか？」

「はい。こちらの戦力が少ない以上、短期決戦に挑むのが望ましいと思います。
相手の艦に集中砲火して撃沈させるのは……」

一人の隊員が提案するが、カーマインは納得いかない顔をしている。

「うむ……短期決戦は私も同意だが、聞いた話によるとなんでも地球から来たあの子たちの友達が手違いがあって、そこに乗り込んだらしい。

安否が不明な以上、むやみに手を出せない」

“……”

それから色々な意見が飛び交うが、どれも決定に至らず、難航をきわめていた。

そんな中、一人の隊員が恐る恐る手を上げた――。

「案ではないのですが……その宇宙艦のエネルギー質量がＳ級ならば現時点でＮＰエネルギーしか考えられないと思うので超新星爆発に耐えうるほどの強力なバリアを展開すると推測できます。艦に配備されている機体で近づこうものならバリアに衝突し、一撃で消滅してしまうと思われるんですが……」

「うむ……っ。そのことなんだが、本司令部直属の科学部隊の実験があったのだが……どうやら同質量のＮＰエネルギー同士が衝突すると中和されると結果が出ている。

なので、本艦の主砲を使用すればバリアを一撃で消滅させることができる」

「しかし、消滅させたとしてもＮＰエネルギーは半永久的に増加します。またバリアが復活するのは時間の問題です！」

「うむ……っ。副長、バリアが解除された場合、再展開される時間は分かるか？」

「……本艦の科学部隊長によりますと、本艦と同性能であるならば、無から艦全体を覆うまで約５分かかります」

「ということは……主砲が直撃した瞬間から５分以内でアマリーリスの本拠地に突入しなければならないわけだ。

……そう考えると『ホルス』では役不足すぎる。

エミリア、『イクスウェス』の調整は？」

「はっ……はい。故障している箇所は見られないのですが、テスト以来全く使用していません。

あたしには到底使いこなせない代物でして……」

「そこでだ、あの子たちの道具を使用する。脱走で見せた、あの摩訶不思議な現象を起こせるのなら、必ず役立てるだろう」

「……そうですね。ドラちゃん達の力を借りれば……何とかなりそうですわ」

カーマインは両手を後ろに組み、コクッと頷いた。

「……なら、作戦はこうだな。こちらが警告し、降伏、投降に応じなければ今作戦を決行する。

……まずは主砲の発射準備に移る。そのエネルギー収束中はこちらが無防備になるので、攻めてくるアマリーリスには支援する艦と戦闘ユニットで壁になってもらい時間を稼ぐ。

そして主砲発射し、アマリーリス艦のバリアを消滅させ、そこからエミリアとミルフィ、そしてあの子達の特別隊が5分以内でアマリーリス艦に突入し、生きていれば友達を救出、保護。そして奴らの行動阻止及び、機能停止させる。

そこから我々が次々と突入し、組織員を逮捕する――。

この作戦が賛成ならば拍手をしてくれ」

“パチパチっ……”

瞬間、大勢の隊員の手を叩く音が聞こえた。

「よし。なら作戦はこの内容で可決する。
なお、細部詳しい内容や情報はまた後ほど伝達する。
以上だ。各自解散し、各隊に戻ってくれ」

全員はカーマインに一斉に敬礼した後、ずらずらと去っていく。
エミリアもそれに乗って作戦室を出ようとした時、

「エミリア？」

カーマインはエミリアを呼び止め、彼女はすぐに彼の方へ振り向いた。

「さっきも言ったがお前にはアマリーリス艦に侵入してもらう。
自分とあの子達の分のシールドと予備のカートリッジを所持して参加してくれ」

「了解です」

「それに、あの子達の力を借りるといったが、あくまで保護対象の子供達だ。

お前ばかり無理な事を押し付けて本当にすまないがあの子達を守ってやれ、いいな！」

「はい！！命に変えてもあの子達を守ってみせます！！」

ぱっちりとした瞳とハキハキした口調からやる気は十分感じられる。

だが、彼の方は何か心配そうな表情をしていた。

「……そしてお前も絶対に無理をするな。もしも万が一、何かあったら私は……」

「提督？」

「いや、なんでない。早くあの子達の所へいってやれ」

「はっ……はい」

彼女は首を傾げて作戦室を後にした。

……

エミリアとドラえもん達は武器倉庫に向かっていた。

その理由は。

「今からあなた達にシールドの使い方を教えるわ。これで大概の対人用エネルギー兵器、実弾兵器を防げるようになるの」

「シールド？」

「詳しくは武器倉庫内で教えるわ。私とあなた達は奴らの本拠地に直接乗り込むことになったから、死なないためにも身を守る物を持ちましょう」

「乗り込む？そのアマリーリスの艦にですか？」

「ええ。詳しい内容はあとでみんなに伝えるわ。危険だけど力を合わせて頑張りましょ！！」

「「「……」」」

急な不安と恐怖に駆られる三人。

死なないためと聞かれたら、やっぱり下手したら死ぬんだ……。

危険てのはわかってたけどいざそう言われたら平然といれなくなる。

「と、ところでミルフィちゃんはどこに？」

「さあ……そういえば見かけてないわね」

四人がそう話ながら前方の幅広い十字路に差し掛かった時、

「ちょっ……どうゆうことヨ！！」

四人の耳に聞き覚えのある女の子の声が入ってくる。
左側の通路にそっと覗き見るとそこにはミルフィとあの男、コモドスの二人が会話をしていた。
しかし二人の様子を見るかぎり、どうやら楽しい会話ではなさそうだった。

「コモドス……あなた……っ」

「……」

コモドスは顔色一つ変えないで黙っている。

「コモドスそれでいいの！？
あなたはあんな人の言いなりになる必要なんかないヨ！！
自由になりたくないの？」

「……しょうがないんだ。でないと……」

二人の会話は意味深しげなことばかり聞こえてくる。

「すまない、ミルフィ……」

「ああっ、待ってヨ！！」

去っていく彼にミルフィはその場で立ち尽くしていた。

「ミルフィちゃん……どうしたんだろ？」

「さあっ……」

「……今は話かけられる状態じゃないわね。行きましょう」

四人はミルフィとは反対方向へ曲がり、その途中でエミリアは彼女の方へチラッと振り向いた。

（ミルフィ……）

その後、宙に浮きフラフラ漂いながら去っていく彼女の後ろ姿は、どこか悲しさがにじみ出ていた……。

……武器倉庫。艦内の全隊員の装備一色が保管されている場所である。

拳銃やライフル銃、光学兵器や重兵器などの武器系統は勿論、、ガスマスクや弾装、弾薬やエミリアの言っていたシールドといった装備品なども保管されている。

彼女の専用武装『テレサ』、『ユンク』も普段はここに保管している。

ドラえもん達が彼女に連れてこられた場所は、何やら高さ、幅……はわからない位に広くそびえ立つ金属の箱だ。

よく見ると、『とって』がないが引き出しのような四角い区切りがあるのが分かる。

彼女はリフトを使い、約４ｍ程の高さに上り、その『引き出し』部分に手を当てた。

『ウィィーン……』と静かに引き出しが開き、中にはまるで昔のレコードみたいに分厚く幅広い円盤と四角い電池みたいな金属物質が納められていた。

それらを取りだし、引き出しを閉めて、三人の側に移動した。。

「これがシールドよ」

その２つを三人に見えるように掲げた。

「これがシールド……ね」

「どうやって使うんですか？」

「使い方はいたって簡単よ。まずこれをお腹の部分につける。そして、真ん中のボタンを押すだけ」

彼女がいった通りに動作するととその円盤の四方からそんなに強くないほどの蒼白い光が放出し、彼女を取り巻いた。

「これでシールドは展開されたわ。試しにタケシくん、あたしにパンチしてみて？」

「いいんですかホントに……」

「ええっ、本気でもかまわないわ」

「なら……うおりゃあ！！」

彼は本気で彼女に拳を振り込んだ。が、

《バシュっ！》

エミリアの周りにエネルギーの膜が展開されて、拳が膜に衝動した瞬間に弾け飛んだ。

「うわあっ！！バチバチしたぁ～～っ」

「すごぉい！！」

三人はシールドの効果に目を奪われた。

「これで大体の武器は防げるわ。けど、あまりにも威力が高い攻撃や連続で攻撃を受け続けるとエネルギー切れでシールドが破壊されて効果がなくなるから注意が必要よ。

もしエネルギーがなくなったらこのカートリッジで回復させることが可能よ」

突然、ドラえもんは急に大きく息をはいた。

「よかったぁ～。『バリヤーポイント』は点検でドラミに預けてたからどうしようかと思ったよ～～」

「たくぅ。こういう時に限っていい道具を持ってきてないんだから……」

そうスネ夫は本人に気付かない声で愚痴っていた……。

「それであなた達も何か武器を持った方がいいわ。けどあなた達には人殺しをさせたくないから、なんか気絶させる程の武装があれば……」

「それなら……えっと……っ。『ショックガン』、『空気砲』、『時限バカ弾』、『ひらりマント』……『マイク』……『こしょう』……？」

ドラえもんはポケットから色々な道具を引き出したが中には変な物も混じっている……。

「二人とも、好きな道具を選んで！これで気絶か一時しのぎぐらいならなんとかなるはずだ」

「サンキュー、ドラえもん！」

ジャイアンとスネ夫はそれぞれの道具を選び持った。が、

「おお、マイクがあるじゃねえか。何か歌いたくなってきたなぁ……。

ならここは景気づけに一曲……」

「「うわあああっ！！」」

ジャイアンがマイクを手に取った瞬間、ドラえもんとスネ夫は急に慌てふため始めた。

「ジャイアン！！今は抑えて！！ねっ！？」

「ここじゃなくてもっと良いとこで歌いなよ！！」

「そうか……」

二人に説得され、彼は手を下ろす。

止めたことで二人は内心ほっとしていた。

それもそのハズである。ジャイアンは歌うのが好きなのだが、肝心の歌のほうは壊滅的に音痴であった。

たまに空き地でリサイタルを行うが、そのたびに呼んだ人を恐怖と絶望のどん底に叩き落す。

中には『これだけで人を殺せる』と言った人がいるほどであり、二人が止めたのは正解である。

「……？」

そのやりとりを事情の知らないエミリアはただポカーンと見ていた。

……

一時、探知していたアマリーリスの動きが止まり、勘づいて進路変更するかもと騒がれたが、それもなく2日後にはこちらの方へ動きだしたのを確認され、一応の作戦が狂わずに済んだのであった。

……そして、奴らがあと1日でこちらの宙域に到着するとミルフィ達オペレーターによって確定され、それぞれ迎え撃つ準備に取りかかった。

中央デッキでは、カーマイン以下、直属の兵士達がモニターに映る、この宙域周辺の映像を見ていた。

「各艦、配置完了しました」

「うむ。あとは待つだけだな。だが作戦が成功するまで決して油断はするな。

もしかしたら今も、進路変更する可能性は十分考えられるからな」

モニターを見ると、ヴァルミリオンを中心に左右にヴァールダイト級5隻、両端側にはグラナティキ級12隻の計18隻がお互いが衝

突しないように距離を空けながら弧を描くように並んでいた。

A級、B級クラスであるヴァールダイト、グラナティキの全長はヴァルミリオンよりも半分程であるがやはり超巨大である。

日本列島の半分ほどあるのだからだから、普通の人間からしたらとても想像できるわけがない。

銀河連邦はそれらを無数に保持しているため、全宇宙でも屈指の戦力を持つのである。

「本艦の各兵器、戦闘ユニットの方は？」

「ほぼ全機、整備完了とのことです」

「そうか。このあと艦内で簡単な壮行パーティーを開こうと思ってる。どうかな？」

「いいと思います。隊員達の気晴らしになると思いますよ」

「わかった。これない者も何か差し入れでもしよう」

その場にいる隊員達はそれを聞いて大いに喜んでいる。

……しかし、微笑ましい話の最中、彼は目を瞑り、こう言った。

「私の予想だが……犠牲は避けられないな……今作戦を決行すれば……」

「……」

明るい声が聞こえる中、彼と副長は静かになった。

本当なら犠牲者を出したくないが……絶対でないのは無理に近い。ましてやS級の攻撃を受けたらこちらもただでは済まないのはわかっていた。

今作戦の総司令を務めるカーマインからすれば、所属隊、種族は違えど仲間である隊員たちの命をここで散らせたくないのである。

「……大丈夫ですよ。どんな結果になろうとあなたについていきます。

少なくとも私や本艦全員は善を尽くせれば本望ですよ」

「副長……」

副長の励ましに彼は目を開いて小さく頷いた。

「頼むぞ、副長。私に力を貸してくれ」

「はい！」

二人は心を一つにして心に決めた。必ずやアマリーリスを逮捕、壊滅させることを――。

……

その頃、アマリーリスはワープホール空間へ移動していた。

……訓練エリア、座学室内。

「……お前、本気か？」

「ああっ」

中でレクシーとユーダがなにやら話をしていた。

「なんで脱走なんか……？」

「ここの奴らが気に食わん。気持ちワリィぐらいに馴れ合いなぞしやがって……リーダーからしてあんなんだ。
ここは俺の居るべき場所じゃない」

ユーダはどうやら脱走を企てているらしい。

「……けどお前、今まで生きてこれたのもアマリーリスのおかげだぞ！？

お前、脱走がバレたら今度こそリーダーに抹殺されるぞ！！」

「へっ、隙を見てバレねぇようにすんだよ。レクシー、誰にもいうじゃねえよ。

もし言ったら真っ先にお前を殺してやるからな」

「……外に行ってもお前に居場所なんかねえよ。

俺らみたいに大罪を犯しまくった奴はどこにいっても、仲間外れにされて惨めな思いになって……最終的に捕まって死刑になるのがオチだよ

……悪い事は言わねえ、脱走なんかやめとけ！」

レクシーが必死で説得するが、ユーダは全く聞いていない。

「もういい。お前と話しても意味がない、俺は行くぜ。

誰にもいうんじゃねえぞ、分かったな？」

脅し口調で言った後、ユーダは去っていった。

「あのバカが……。なんで分からねえんだ……」

レクシーはすっかり落胆して深くため息をついていた。

……

数時間後、ヴァルミリオン内では艦内の者だけで即席の壮行パーティーが開かれた。

酒は一杯くらいしか飲めなかったが、今まで作戦準備で気を張り続けていた隊員達にとって、幸せの一時であった。

もちろん、エミリア、ドラえもん達も参加し、色んな隊員達と話したりと大いに楽しんでいた。

……そしてパーティーも終わり、なにもない隊員達は明日に向けた休眠をとりはじめていた頃――。

……艦内の中央フロア。エクセレクターの休憩広場みたいに広く、天井一面に張り巡らせたウィンドウから見る宇宙はなんとも壮大で幻想的である。

その中のソファーではエミリアが何か思い詰めた表情しながら座っている。

そこはあまり明るくないため、彼女はサングラスを外していた。

「……エミリア？」

「あっ、提督……？」

偶然、カーマインが姿を現し互いに目を向き合う。

「眠れないのか……」

「ええっ……」

彼女の声に元気がないことを彼は感じ取っていた。

「となりに座っていいか？」

「どうぞ……」

彼は彼女の横に座るとゆっくり息を吐いた。

……沈黙の時間がただ流れる。二人ともなぜか口を開こうとしなかった。

が、

「提督……」

「どうした？」

エミリアは悲しそうな表情で彼の方へ向いた。

「私……自信がないんです。あの子達をちゃんと守りきれるどうか……それに……」

「それに？」

「私は奴らを、アマリーリスをものすごく憎んでいます……。レイドを……同胞を……わたしの全てを奪ったあの悪魔達を……わたし、絶対に憎しみに負けて殺してしまうかもしれないです……。提督はそれを望んでいないでしょう……？わたし、どうしたら……」

彼女はそう打ち明けた。

口に出さなかったが彼女は今までそれを悩んでいた。

気持ちは非常に分かる。彼女からしたら犠牲になった人達、そして殺された恋人の敵討ちをしたくてたまらない。

だが、彼女は軍人であり、警察の役目を持つ役職でその考えはあまりにも個人的な報復行為である。

言ってみれば彼女の仕事上においてモラルも誇りもへったくれもないのである。

「……実はな、わたしもお前をこの任務につかせるのを身が引けている」

「……どういうことですか？」

「この任務は一番危険だ。命を失う危険性が非常に高い。

……まして、あの子達の命までも危険にさらさせるなんて……私は提督失格だな。

現に私はこの作戦が終われば全ての責任を背負って辞表を出そうと思っている、万が一お前達にもしものことがあれば、私も一緒にお前のあとを追うつもりだ」

「えっ……そんな……っ」

「実際はそれではすまないぐらいだ。

私はそれほどまでに覚悟を決めている。だからエミリア達を信じてこの任務をつかせたのだ」

「提督……」

彼はエミリアの肩に手を触れて、優しい笑顔をとった。

「奴らを殺すか殺さないかはお前の判断だ。
私はもう何も言わない、自分で決めろ。
私の願いはただひとつ、絶対に死ぬな、そしてあの子達を守りぬいてくれ
あの子達と心を一つにして協力すれば絶対にお前達を導いてくれるハズだ」

「提督……ううっ……」

彼の優しい言葉に彼女は涙を流していた。

「エミリア……頼んだぞ」

「はっ……はい！！」

その返事は十分に気合いのこもった発音であった。

彼女は気持ちを入れ直し、来るべき明日へ心を決めたのであった――。

◇ＰＡＲＴ．３４　決戦前夜（後書き）

次からやっと両陣営のご対面です。

◇PART．35　再会

ワープホール空間。エクセレクター艦内、オペレーションセンター。

部下達と共にラクリーマ、隣にのび太があとわずかに迫った地球を心待ちしていた。

「お前らには世話になった。これはアマリーリスのリーダーとして礼を言う。
といってもしてやれることは地球に帰すことぐらいだけだが……」

「いやぁ～～それほどでもないよ」

のび太は見るも恥ずかしいくらいにデレデレしている。

「もう少しで地球に到着する。のび太との約束事を果たして、連邦がこないうちにずらかるか」

のび太は突然、こう言い出した。

「また……会えるよね？」

「……のび太？」

「ぼっ、僕……またラクリーマやここの人達と一緒に宇宙や色んな惑星へ旅をしたい！！
今度はしずかちゃんの他に友達を連れてさぁ！
ねえ、いいでしょ！？また地球に立ち寄ってよ！！」

どうやらここにいる間にのび太はアマリーリスを気に入ってしまったようだ。
彼はそうせがんでいるが、ラクリーマはまるでまともに受け取ってないかのようにクスッと笑う。

「はっきり言って無理だ」

即答であった。

「ええっ！どうしてなの……？」

「理由？あたりめえじゃねえか」

「……」

「俺は地球に襲わないと約束したが、それはもう二度と訪れないと言う意味も含めて言った。

また来ると地球を侵略したくなるかもしれんからな」

「けど……」

「それに前に言わなかったか？俺らとお前らは根本的に考えが違うとな」

そういえば、ここに来た時に彼がその「互いは根本的に違う」を言っていたのを思い出した。
しかし、のび太はあまり意味は深くないと気にしてなかった。

「元々お前らは侵入者で対面した時に殺すはずだったが、勝負でお前が勝ったから義理で助けて地球に送っている。
本当なら俺達から見ればお前ら二人は敵対関係で、絶対に相容れない存在だ」

「けど……僕らはここの人達に優しくしてもらったよ！？
敵だなんて……思いたくない……」

「甘いなのび太。一応言っとくが万が一、またお前と出会ったらその時は俺はお前に容赦しない。約束を果たしたらもう今までのことはなかったことになるからな、これは特例と思え」

「そんなぁ……」

「それになぁ、あんまり行きたくねえんだよ。地球周辺にはな」

「……えっ？」

「多分……今に分かるぜ」

その時の彼は、何処か思い詰めているようにも見えた。

「総司令、ワープホール空間からです」

オペレーターの指示があり、彼はモニターを見上げた。

「艦内に告ぐ。いつでも戦闘に移行できるよう、素早く準備しろ。各戦闘員は格納庫で待機、それ以外の者はそれぞれ持ち場につけ！」

突然、戦闘準備を命令するラクリーマ。一体何が起きたのだろう……。

甲高いサイレンまで鳴り響き始め、辺りは騒然となっている。

「ユノン、仕事を切り上げて早くセンターにこい。本命のおでまし

だ！」

彼の言う本命とはモチロン……。

……この巨大な宇宙船はワープ空間という次元の裂け目からまるで王者がお出ましたようにゆっくりと勇ましく抜け出した。

が、それはスグに終わりを迎えた。

「ラクリーマさん、前方１２０００ギャロの左右に計１８隻の宇宙艦が展開しています！

エネルギー質量『ランクＢ級』１２隻、『ランクＡ級』５隻、そして『ランクＳ級』が一隻……もしかしてコイツらが！！」

「ああっ、俺達の最大の敵『銀河連邦』だっ！！」

ついにかち合う両勢力、今まで対立どころか対面さえなかったこの時を、特に銀河連邦は待ちわびていた。

「これがアマリ―リス艦……」

連邦側から見たエクセレクターの印象は女性の顔を呈した艦首は、妖しさもあり、そして不気味さを感じさせた。

そしてさることながら、ヴァルミリオンと同等といっていいほどに巨大と思わせるほどの存在感と威圧感を放ち、兵士たちを畏怖させていた。

無論、アマリ―リスもその自分達より戦力が圧倒的に上である銀河連邦に対面してしまったことにより、戸惑いを隠せずにいた。

モニターには１８隻の銀河連邦艦が自分達を睨み付けているようにこちらの方へ向いている。

逃げ道などない、背を向けて逃げようにも無理がありすぎるし、そうしようものならたちまち集中放火を受けて、完全に宇宙のチリと化してしまうだろう。

「完全に逃げ場がありません。ワープしようにも空間を形成するには敵艦よりさらに向こうでないといけません！！」

「……さすがは連邦だな。

まさかとは思ってたが俺達のワープ到着地点をピンポイントで計算して待ち伏せだなんて……恐れ入ったぜ」

「リーダー、これじゃあ袋小路ですよ！！」

オペレーター含む、周りの部下たちは徐々に焦りはじめている。

しかしそんな中、ラクリーマただ一人だけがいつもと似合わず冷静さを保っていた。

「とりあえず策はある……連邦にこちらの映像を送れるか？」

「……なんとかやってみます！」

オペレーター達はパネルとキーをカタカタ動かし始めた――。

……一方、連邦もこちらからアマリ―リスに警告を出す作業に取りかかっていた。

ヴァルミリオン艦内の中央デッキではカーマイン筆頭にドラえもん達、エミリアとミルフィ含む、各主要人物が宇宙空間で静止しているエクセレクターを捉えたモニターを見ていた。

「あの中に……のび太としずかちゃんが」

「……僕、なんか怖くなってきた……」

「……」

ドラえもん達三人は不安であった。

のび太達はちゃんと生きているのか、もし生きているとしても見事、救い出せるのかが心配でたまらなかった。

「エミリア……大丈夫？」

「えっ、何を……」

「……」

また、ミルフィも憎い敵を前にして顔を深くしわを寄せているエミリアを心配していた。

「提督、急にモニターが！」

「どうしたことだ！？」

……突然、モニターがザーザーと言う音と共に歪みだし、モニターを見ていた全員が驚愕する。

オペレーターは必死で直そうと試みるが。

「一体原因は……アアッ、何かがモニターに割り込んできます！！」

「何だと！？」

乱れていたモニターから何か人間の顔のようなシルエットが浮かび

上がり、徐々にその姿が明白に表れ――。

“ご機嫌よう、銀河連邦の方々。これは初のご対面かな?”

浮かび上がったその顔はボサボサした銀髪、真紅に燃えた螺旋の瞳、顔の至る所にたどたどしく浮かび上がっている傷、まるで状況をわかってないのか、それとも何か絶大な自信があるのか理解し難いほどに不敵な笑みをとる男の顔がモニターに映り込んでいた。

“俺はこのアマリ―リスの総司令、ラクリーマ、ラクリーマ・ベイバルグだ”

彼の堂々とした名乗りに見ている者全員が驚きを隠せなかった。この男は若い。自分達が想像していたのと比べて遥かに若く見えた。張りのある肌に、傷だらけであるが若者特有のはち切れんばかりの精気が感じさせる。

……10代後半から20代前半ぐらいの歳と思われる。そんな地球人なら成人して間もない青年がこの極悪組織をまとめていると考えたら……恐ろしい以外に何事でもなかった。

カーマインはその彼の通信映像を冷静に見つめ、静かに口を開いた。

「自ら名乗り出るとはなかなかの度胸を持っているではないか」

“別に隠す気はないんでね。むしろ宇宙屈指の銀河連邦『さん』に俺の名を覚えてもらうこと自体が光栄だ”

「ふっ、大丈夫だ。今に連邦全体にお前達の名が全域に知れるようになる」

“……”

「大人しく投降しなさい。
我々は無益な武力行使は行いたくない。素直にこの要求に応じればお前らの罪は絶対軽くなるぞ。

……応じない場合はどうなるか……わかるだろう…？」

彼の要求にラクリーマは一旦、沈黙する。
しかし、次第に閉じていた唇が開くとそこに並んだ真っ白い歯が閉じており、壁のようにその奥を遮っていた。

唇は左方向に向かって斜め上に引き上っていた。

……彼は笑っていた。

“実はな、こちらには二人の地球人が入り込んでいてなあ？”

《！　？》

その発言にドラえもん達、エミリアとミルフィが敏感に反応した。

「……のび太達だ！！」

「間違いないよ！！」

「やっぱり乗ってたんだ……」

三人は確信した。

そしてアマリーリスでは、ついさっき到着したユノンの隣に一緒だったしずかはすぐにのび太達の方へ向かう。

ユノンは相変わらず焦る素振りを見せず、冷静に歩いてくる。

「のび太さん、ラクリーマさん、これは一体……」

「僕もよくわかんないんだよ……」

状況が全く掴めていない二人にラクリーマが手招きする。

「二人共、ちょっとこい」

「「？」」

二人はラクリーマの指示で彼の前に立たされた。

「のび太君としずかちゃんだ！！」

「アアッ、ホントだ！！」

モニター越しであるがドラえもん達の目の前でついに姿を見せるのび太達。

これで連邦全員にとって、一つの不安はなくなった。

「いっ、生きてたんだ……よかったぁ～～っ！」

ドラえもん、ジャイアン、スネ夫の三人はどれほど嬉しいことか……。

しかも二人には傷ひとつ見あたらないのはこちらからは正に奇跡としか言い様がなかった。

“コイツらには傷一つもつけてねえぜ。　そこで交渉しねえか？　”

「交渉だと？」

“……別に難しいことじゃない、俺らもこんなとこで御用になりたくないんでね。

今回、俺達を見逃してくれればそれでいい”

「……」

“この要求を飲んでくれれば今すぐにでもこの二人を連邦に明け渡そう。
約束は必ず守るつもりだ”

「もしその要求に応じれなければ……」

“その時は……こいつらがどうなるか……そっちもわかるだろう……ククク……”

警告を与えるつもりが逆にあちらから交渉という予想だにしなかった出来事である。

“まあ、俺達は別に急いでなければ焦ってもねえし、どれだけでも待ってやる。せいぜい悩んで決めな。
俺はどちらでもかまわないぜ。

それじゃ取りあえず一時間後にまた聞きにくるから楽しみにしてるぜ”

そしてラクリーマの顔は消えて、普通のモニター映像へ戻った。

辺りは静かであるがどこからかひそひそ話も聞こえてくる。

「提督、奴らの要求を受けますか？」

「……」

はっきり言ってカーマインは悩みに悩んでいる。

要求を無視してアマリ―リス逮捕を実行しようものならそれこそ、ドラえもん達の友達を見殺しにすることになる。それではこの子達の約束を破ることになり、憎まれるかもしれないし提督としての信頼を一切失うことになるかもしれない。

しかしここで捕まえなければ、さらなる惑星、生物が危険にさらされることになる。

今回はかなり奇跡に近い、あちらから出向いてくると言う絶好の機会を逃せばいつまた対面するか分からない。

宇宙中の至る宙域には様々の部隊が駐屯しているにもかかわらず、一回も出くわさなかったのだから、次にまた見つけるのは至難だ。

それにこちらの信頼や誇りにも関わる問題など、考えたらキリがない。

……心を鬼にして仕事を優先するか、その場の情を選ぶか……。

本来なら情より任務を優先させるのが正しい。それは彼でも分かる。しかし後ろに振り返るとあの子達が友達を何とか助けてほしいと言いたそうな瞳で自分を見ている。

それが彼を戸惑わせる要因になった。

「提督、奴らの要求に応じなければこの子達の友達は……」

「しっ、しかし奴らを見逃せばますます被害と犠牲者が増えるぞ！

！」

「じゃあ何かいい案でもあるのか！？」

「今考えてるんだよ！っ！」

中央デッキ内ではあれでもないこれでもない討論が巻き起こり、ピリピリと緊迫感が充満する空気が蔓延した。

《静まらんかぁっっ！！》

シビレを切らした提督の力強い渇がこの中を一瞬で鎮まりかえらせた。

「時間をくれ。ここにいる全員と各艦長と相談した上で最終的に私が決める。これは私一人の独断ではいけない……」

“……”

今の彼は平然とした態度でいるが、内心は切羽つまっていると考えられる。

ここにいるほとんどの者がそう思えるのであった。

「君達、少し待っててくれ。私もあの二人を助けたいのは山々だ…
…わかってくれ」

ドラえもん達にそう尋ねるカーマイン。
本人達も彼からただならぬ真剣で苦しい思いが伝わり感じている。
スネ夫、ジャイアン、そしてドラえもんの三人は互いに見向き合い、うんと頷くと彼に目を向けた。

「分かりました。僕たちもあなたの考えに全てを委ねます。こんな時にワガママを言うつもりはありません！！」

「けど、出来ればのび太達を助ける方向で……」

「そこは俺もスネ夫の考えに賛成だ。

けどドラえもんの言うとおり、俺達はここの人たちと協力するつもりでここに来たんだ、自分勝手なことは言わないぜ。
それに……あんな悪党どもを逃すほど許せるわけないからな！！
カーマイン提督、頼みます」

三人の意見に彼も少しであるが表情が和らいだ。

「……ありがとう君達。

もう一度言う。全員に悪いと思うがどうか時間をくれ。
考えて考え抜きたい、そして最良の決断を下したい」

……誰も否せず全員は一斉に賛成の意を込めて首を縦に降った。

◇ＰＡＲＴ．３６　激突（前書き）

ここから専門用語、及び、勢いが増します。
ちなみに後書きに衝撃的な事実あり。

◇ＰＡＲＴ．３６　激突

「……やっぱり連邦だったの？」

「ああ。お前の言うとおり、奴らとの接触は避けられなかったよ」

オペレーションセンターの空間モニター前で、ラクリーマとユノン、そしてのび太としずかが遥か前方で待ち構える連邦艦隊を凝視している。

取りあえず、こちらからは交渉を出し、考えさせる時間を与えている間はこちらももしも時の策を考えねばならなかった。

あちらも絶対に自分の要求を飲むとは言えないからである。

「すまねえな。お前の忠告をちゃんと聞いてれば……」

彼は空いていたイスに腰かけてフウっとゆっくり息を吐く。

「過ぎたことはもうしょうがないわ。
……それよりアレ、連邦に通じた？」

「今、その返答を待っているトコだ。

とりあえず一時間後に返答を聞きにまた連邦と通信するつもりだ」

ユノンは腕組みし、横目で彼を見ると目を積むって鎮座している。

「連邦が要求を飲むか飲まないかでこちらの命運が変わるな……。万が一、ここで戦闘になれば最悪の場合……アマリ―リスはここで終わりになるやもしれん」

ラクリーマらしかぬ弱気な発言を吐く。
今の彼はとても苦悩しているに違いない。

「フフっ……いつもなら前向きに事を見据えるラクリーマが弱腰とはね。

あんたらしくないわ」

「ユノン？」

顔を見上げると彼女は目を閉じて微笑している。

「私達全員はあんたを頼りにしているからついていってるの。

別にあんたのせいだなんて思ってないわ。
むしろこうなる運命だったのかもしれないかもね」

「だが……」

「……ラクリーマ、あんたは自分の思った通りにやればいいの。総司令なんだから。

今後悔するよりこれからどう切り抜けるか考えるのが妥当であって？」

「ユノン……クックッ、確かにお前の言い通りだな」

あのユノンから励ましの言葉を貰う彼は不思議と嬉しい気分になった。

「お前、ホントに変わったな。嬉しいぜ！！」

「……フフっ。礼ならあの子らに言ってくれない？」

ラクリーマは、これから何が起こるのか分からず、心配しているのか浮かない表情でモニターを見ているのび太としずかの二人に目を向けた。

「なあ二人とも」

彼のかけ声にビクッと反応した。

「ラクリーマ……？」

「はっ、はいっ……？」

そんな二人を彼に頭の後ろに両手を回し、普段しているようなニヤっとした笑みをとる。

「何をそんなに心配してんだ？」

「これから……一体何が……」

「……起こるんですか？」

質問する二人をまるで心配するなと言わんばかりな態度でこう告げた。

「俺達はどんなカタチになろうが、お前らを絶対地球に帰してやるから安心しろ！」

「……」

「そうだ。交渉成立した時にこいつらを明け渡す準備でもしておくか。

たしか二人乗り用の脱出ポッドがあったハズだ」

オペレーターはすぐにコンピューターで艦内を検索する。

「……第１５格納庫に配置してあります。
ならもう起動させておきますか？」

「頼む。あと格納庫にいる戦闘員にしばらく待機するよう言っといてくれ」

「了解」

「あとはあちらが素直に応じてくれるのを待つか」

そして彼は深くイスに持たれかけた。

「ラクリーマ……聞きたいことがあるんだけど」

「どうしたのび太？」

「前にいるずらりと並んでるのって一体……」

「あれか？そういやあお前らに教えてなかったな。あいつらは『銀河連邦』ってな？」

「銀河……連邦……」

「ようは宇宙の至る所にアミを張ってる軍隊警察だよ。俺らワルの天敵だ」

「じゃあ……もしかして」

「……ああっ、運悪くそいつらとご対面しちまったワケだ。お前らにしちゃあ味方だがな」

のび太は何か悪いことをしたような気分に陥った。その理由とは……。

「もしかして……あたしたちを地球に送ろうとしたばかりに……」

申し訳ない気持ちを込めてそう尋ねるしずかに、彼は、

「だから心配すんなと言っただろ？

ここまできたのは俺たちの意思だ。だからお前らが気にするのは無事に帰れることだけにしろ、わかったな！」

「ラクリーマさん……」

気にする二人にとってはとてもありがたい言葉である。

彼が言うのだからそう甘えたいが、やはり自分たちのせいでこんなことになってしまったのでないだろうかと心底思えてしまうのであった。

「まあ、あなた達の気持ちは分からないでもないわ。

けどね、ここは子供は大人の親切を素直に受け取ること。わかった？」

ユノンはしずかの頭を優しく撫でた。

「ユノンさん……」

しずかの頬はポッと赤くなった。

……そして一時間後。

“どうだ？素直に応じるか？”

再び、モニター映像で彼らの前に現れるラクリーマ。
相変わらず、憎いくらいに余裕のある表情だ。

一方、うってかわりカーマインは非常に真剣そのものの眼で映像を凝視していた。

「確かにそこにいる地球人の子ども達の命は大事だ。
……しかし、ここでお前たちを逃せば、他の惑星そのものやそこに住む生物達にさらなる惨劇が起こるのは確かだ！」

“……”

「私たちはお前達アマリーリスがこれ以上悪事を働くことを断じて許すわけにいかないのだ！！」

彼の張り上げた勢いのある決意。それは奴らの交渉を受け入れないということだった。

“……答えはそれでいいんだな！？連邦さんよぉ！！”

「……悪いがそういうことになる」

“……”

映像はブツリとすぐに消えた。
その瞬間、アマリ―リス、銀河連邦全員の各道は一つに搾られた。

カーマインは全員に振り向いて、拳をギュッと握りしめた。

《今作戦を決行する。各員配置につけぇ！！》

“了解！！”

全員が一気に敬礼し、すぐさま一斉に行動を開始した――。

そしてアマリ―リスでは、

「連邦は俺達の交渉を破棄した！
今すぐ戦闘準備だ。各戦闘員を『スレイヴ』、『ツェディック』に搭乗させて発進準備させよ！！」

「りょっ、了解！！」

ラクリーマの命令により、こちらも来る激戦に備えて艦内は慌ただしなり始める――。

「オペレーター、今すぐサイサリスを呼んでくれ」

オペレーターはすぐに開発エリアの映像に移し、サイサリスを画面に呼び込んだ。
彼女も全く焦る気もなく、落ち着いているように見受けられる。
“ついに来たな。連邦と対決とは……勝算はあるのか？”

「さすがに真っ向から挑んだらこちらが不利だ。
ワープホール空間に逃げ込むための強行突破を実行する」

“で、あたしになんの用だ？”

「激戦になるのは必須だ。
そこで『ログハート』と『セルグラード』の起動及び、実戦テストを行う。
サイサリス、二つを準備しろ」

しかしサイサリスは何か重い表情をしている。
彼女なら喜んですぐに取りかかるハズなのだが……。

“……ダメだ。認めることはできない”

「何故だ？」

“『ログハート』はともかく『セルグラード』はまだ完全に調整さ

れてないぞ。そんな状態で使ったら……〟

「『一発』ぐらいなら使用できるだろう。これで戦況を覆せるのなら出し惜しみはしない。
壊れたらまた造り直せばいい！！お前ならできるハズだろ？」

〝わたしは心配してるのはそれじゃない！！お前自身だ！！〟

「俺自身だと……？」

〝聞いてやろうか？お前、今なにもしてなくても身体中に痛みが走ってるだろ？〟

「……」

彼は言い返せなかった。
彼女の指摘はズバリ的中していた。
ラクリーマは右肋骨を押さえている。

〝お前は本来、絶対安静にしなければならない怪我人だ、そんな体で何が出来る？
あの二つはラクリーマが体調万全であることを前提に開発したもんだ。
それを今の身体状態で使用したらどうなる……貴様、完全に体がイ

カれちまうよ”

「今はそんなことを言っている場合じゃねえだろ！！

『殺るか殺られるか』だ

……それに、その点はちゃんと考えてるよ」

“その点……だと？”

「……『ＢＥ－５８』を投与する」

彼の発言は、その場にいる全員を動きを止め、凍りつかせた。

“『ＢＥ－５８』……だとォ！？

バカヤロォ、あんな危険なモン使って死ぬ気かァ！？”

「けっ。痛みなんぞ、ガキん時からもうイヤになるほど慣れてるんでね。

耐えてみせるぜ！！』

『ＢＥ－５８』とは軍事用に開発された即効性の麻酔薬である。これは全身麻酔ではあるが、打ち込んだ人間が例えどれだけ負傷していようと今すぐ行動できるよう、特別な方法で開発してある。

これにより、身体中の痛みは一瞬で無くなり、どれだけ攻撃を受けようと全く痛みを感じなくなる。

が、個人差があるが大体2～3時間立てば一瞬で効果がなくなり、さらに蓄積された痛みが数倍となって一気に襲いかかるという、まさに『諸刃の剣』と言っても差し支えのない劇薬である。

効能が切れれば……並の人間はそのあまりの苦痛に耐えきれずに発狂するか最悪の場合、ショックで即死に至るのどちらかである。

効果中は痛みや感覚すら感じなくなるため、出血していることすら気づかずにそのまま失血死することも充分考えられる。

……など、デメリットがあまりにも多すぎるのであった。

「こうなった以上、使うしかねえよ。

俺はアマリ―リスをこんなとこで壊滅させたくねえんだ！！」

“お前、今度こそ命の保障はできねえぞ！？お前は……”

「俺は死なねえよ、まだまだ人生長いし。

それに……俺が死ぬと哀しむ奴らがいるしな」

ラクリーマは顔を後ろへ向けた。

その視線の先には沢山の部下やのび太としずか、そしてユノンがいた。

「頼むサイサリス。あの二つを起動させてくれ。これは総司令の命令だぜ？」

“……”

（考えたら……こいつは言い出したらもう一歩も引かない奴だった）

サイサリスはついに諦めた風な深いため息をついた

“……わかった。そこまで言うならお前のその心意気を尊重しよう。今すぐ開発エリアにこいよ！！この二つの封印を解いてやる！！”

「よっしゃーっ！！」

歓喜を上げ、ただちに走り出した。が、

「ラクリーマ！！」

「ユノン！？」

突如、向かおうとしていたラクリーマを彼女が引き止める。振り向くと、ニィっと彼女らしくない笑みを浮かべ、こう言った。

「あたし、今回『デストサイキック・システム』を使用するわ。始動キーを貸して」

「ユノン、それを使ったら……」

「フフッ、最近体が鈍っててね、久々に体を動かしたくなったのよ。それに……」

「それに……？」

「あの子達を地球に送り帰すんでしょ？
なら……あたしも頑張らないとね？」

「ユノン……。分かった。だが絶対無理すんじゃねえよ？」

そして彼はポケットからアクアブルー色の玉子の形をした物質……オーブを取り出し、彼女へ投げ渡した。

「ユノン、もし生きてこの宙域から脱出できたら……二人だけでゆっくり酒でも飲まねえか？
……もっとお前のことを知りてぇしよォ」

クスっと軽い笑うユノン。

「……死ぬかもしれないようなこと言って……何弱気なこといってんのよ？
言ったでしょ、ラクリーマらしくないって……。

……けどまあ、その時はとびっきりの上酒を用意しておくわ」

それを聞いたラクリーマはついに吹っ切れたのか、表情が本来の不敵な笑みへと変貌した。

「これで思い残すことはねえや。今は互いに尽くそうぜ」

「……ええ」

《パンっ！！》

二人は軽く手をタッチし、互いの健闘を祈った――。
これから始まるであろう大激戦に向けて。

――互いに交差し、彼は開発エリアへ向かおうとした否や、近くにいた部下の持っていた拳銃を取り上げ、のび太の方へ向かう。

「ほらよ、のび太！！」

「えっ！？」

なんとそれをのび太に投げ渡したのだった。

「ラクリーマ……これは……」

「もしものときのためだ。これでしずかを守ってやれ、いいな」
ラクリーマは親指を上に突き上げてのび太に向けた。
それに対し、のび太は、

「ラクリーマ……気をつけて……絶対に死なないで！！」
「ああっ！！お前との約束を果たすまでは死ねねえよ！！」

自信満々な返答をし、彼はすぐに走り去っていった。

一方、ユノンは既に真剣に表情となっており、高らかに右手を上げた。

「艦内にいる者全員に告ぐ。私はこれより『デストサイキック・システム』を発動させる!!

本艦の全ては私に任して、各オペレーター、その他の員は戦闘員のサポートに尽力せよ!!」

「頼みましたよユノンさん!!」

「決して無理しないで下さい!!」

熱い励ましを受けて、彼女は一気に中央の司令塔に登り詰めた。

その中、しずかは恐る恐る近くにいたジュネにこう聞いた。

「あの……一体何が始まるんですか?」

「すばらしいことだニャン♪」

ユノンはあのレンズが置かれた台座に到着すると、ラクリーマから渡されたあのオーブをレンズの中央に静かで置いた。すると、レンズがまるで水のように波紋が発生、オーブを飲み込んでいく。

瞬間、その台座の左右の床から二つのバスケットボール程の無透明の水晶が置かれた台座が出現。

手が置ける高さに到達し、彼女は腕を交差し天を突き刺すように高くあげて、そして！！

「いくわよぉっ！！」

渾身の力で両腕を左右に降り下ろし、その二つの水晶を握り込んだ両拳で豪快に叩き割った。

次の瞬間、

《ガシュイイイッ！！グシャグチャグチャギチッ――――》

見たことのことのない者は必ずや、目を疑うような現象が発現した。

「うわぁアアッ！？ユノンさんが……！！」

「何がどうなってるんですか！？」

破壊された水晶の台座の中から数十、数百、いや、数千という怒涛の数の機械やまるでウネウネと生きているかのような金属で形成された触手が彼女に絡み、そして体の中に入り込んでいく――。

着ていた衣服が全て剥ぎ取られ、その露呈された彼女の素肌全体に

容赦なく機械やその触手が入り、取り込み、そう……ユノンは今、機械とナノレベルで融合を遂げ、次第にこのオペレーションセンターを覆い尽くす程の巨大な核を完成させていく。

その中央部では完全に半身生身、半身金属機械と化し、その核に組み込まれたユノンは閉じていた青い瞳をパッチリと開けた。

《シンクロ率１００％……本艦の全制御掌握……ＮＰエネルギー全反応炉心、循環開始……》

彼女の声と聞いたことのない男性の声の二重の声へと変貌し、その重々しい異様な姿と化したユノンは例えるなら……まるで『機械化した女神』とも受け取れる神々しい姿であった。

その姿に恐怖感を抱き、ガチガチに震えながら立ち尽くすのび太としずか。

そんな二人をジュネが安心させるためか柔らかい口調と表情で二人に接した。

「このエクセレクターには『デストサイキック・システム』てのがあってね。

アレを発動することで本艦の全制御……つまり攻撃や防御、行動全て副司令官の思いのままとなるのニャ。……簡単にいったら名実共に副司令官はこの艦と一心同体化したことになるのさ」

「一心同体ですか……？」

「ここにいる全員が副司令官の体内にいるってことになるの。あたし達が踏んでる床でさえ、今ではあの人の内臓だよ？」

「「うえええっ～～！？」」

もうワケがわからなさすぎて理解のしようがない。

……いや、ここにいる者でなければ絶対理解できないと思う。

「それにね、本艦の分離、合体変形が全て単独で行えるようになるの。
まさにこの艦の奥の手って感じね。
けど……使用するに至って気をつけなければならないことがあってね……」

「気をつけなければならないこと？」

「一心同体化したってことはつまり、この艦の被弾は全てあの人の痛みとして伝わるんだよ。

まあ強力なバリアがあるから大丈夫だけど、もし艦の装甲に穴が空くようなことがあれば、それこそ彼女の体に穴が空いたと同じ苦痛が襲うのニャ……もしそうなったら……」

二人はたちまちゾッとなり身震いする。

「それじゃ、これ……非常に危険じゃないですかぁ！？」

「ヘタをすればユノンさんは……死んでしまうってことですよ！！」

「……このシステムを使うのは本当にどうしようもない時の最終手段なのニャア。

……相手が連邦だから実際にウチラがあまりにも不利……つまり、あたし達は窮地に立たされているの。

まさに生き残れるか死ぬかの頂上決戦ってワケね……」

「「……」」

その通りである。連邦相手には中途半端な攻撃は利くはずがない。

こちらも命をかけて挑まなければならないのであった……。

……

一方、連邦も攻撃準備に急いでいた。

ヴァルミリオン内の中央デッキでは。

「本艦の主砲『ユピテルス砲』のエネルギーチャージを開始しました。

そして本艦全員、それぞれ配置完了とのこと。各機『ホルス』、『クイスト』、『ゼウシウス』は全て発進準備完了!!」

副長が頭上の巨大モニターの方へ向いているカーマインにその旨を報告。

「……ついに来るとこまで来たな。
生存者の証言を元に名前と首謀者以外が全く不明であったあの組織……。
私達、銀河連邦の誇りにかけて全宇宙で生きる惑星や人々の幸福のために長年追い続けた悪の組織アマリーリス……。
ここで決着をつけてやる!!」

「ええっ!!」

「我々も全力で戦いますよ!!あんな悪人達をこれ以上野放しに出来ません!!」

部下やオペレーターの決意を胸に振り向き、その曇りなき眼で真っ直ぐ見極めた。

「諸君、時は来た。今作戦は全宇宙の平和のためであると私は信じている。
これまで諸君は我々連邦の誇りとこの宇宙の秩序のために大変よく貢献してくれた。
我々は雌雄を決する戦場の中にいる。
そして、私は誓う。必ずや、あのアマリーリスを壊滅させんことを

！！

全隊員の健闘をいのる！！」

“了解！！”

《よし、全機、発進せよ！！作戦開始だぁ！！》

彼の命令は本艦、そして各艦に伝達された。

……一方、ヴァールダイト級3番艦内、戦闘ユニット用格納庫では……。

「……なんですって……嘘ですよね大尉……」

「ああ。もしそうなった場合は実行しろ、コモドス」

格納庫ではサルビエスとコモドスがこんな時にかかわらず何かコソコソ話をしていた……。

「上司に危険が迫ったら体を張って守るのが部下達の役目だろ？違うか？」

「……」

コモドスはブルブル震えている。何か恐ろしいことを聞いたような恐怖感に駆られていた。

「……無理です。こればかりは自分ではあまりにも……」

「上司の命令に逆らうのかぁコモドスっっ!?」

コモドスの胸ぐらを掴み、グッと睨みつけるサルビエスは彼を罵るような下品な笑みを浮かべていた。

「おい……キサマ……この俺に逆らえるような身分か?」

「いっ、いや……しかし……」

「俺がやれっていったらやれ!!

さもないと……お前の家族全員がどうなるか……分かるだろうな……」

「……っっ」

「ケッケッケ……憐れよのォ。

だがお前ら『コンガース』が我らにたてつこうなんぞ到底構わねえんだよ!!

奴隷は奴隷らしく素直に主人の言うことを聞いてればいいんだ！」

サルビエスは彼を離すとすぐさま何事もなかったかのように自分の機体に搭乗した。

しかしコモドスはギュッと握りしめて機体へと戻っていった……。

……

エクセレクター艦内、開発エリアにて。

ラクリーマは例の『ＢＥ－５８』を右胸部に打ち込んでいた。

「くくっ……っ」

上半身裸で太い針を直接打ち込んでいるのでかなりの激痛が走る。

見るほうもかなり痛々しい

「どうだ、効いたか？」

「……ああっ。今までの痛みが嘘みてぇに感じなくなった。あといつものアーマーはどこだ？」

「持ってきたぜ。ホラよ！」

サイサリスは彼に袖のない鎧のような装着物を投げ渡した。

見るからに金属質であるが彼女でも普通に持てることは相当軽いことが伺える。

すぐにそれを上半身に装着し、体に合わせてフィットさせる。

「こい。『セルグラード』はもう少し調整させてからあとで部下の誰かに届けさせる。

それまでは『ログハート』で頑張ってくれ」

彼女についていくと、巨大なガラスに閉じ込められたあの禍々しいほど爪と熊のように巨大で装甲と出くわした。

彼女はその真下にあるパネルキーを叩くと、張っていたガラスが上に向かって開放する。

「ラクリーマ、右腕を出せ。『ログハート』を装着させる」

彼女の言う通りに右腕をそれに近づけた。

《ギチギチッ！！》

まるで意思があるかのようにログハートが虫のように動き出し、ラクリーマの右腕に方向を指したその時、彼の右腕に飛びかかった。

装甲が平らに展開し、右腕に噛みつくように合体した。

「グっっ……右腕が熱くなるような感覚だ……」

「今、ログハートの全回路がお前の神経を蝕んで同調している。じきに済むから安心しな」

「だが……なんて重さだ！！？」

よく見るとラクリーマの右側が下に傾いていた。

「実はコイツが完成していない理由がまだ、軽量化していないんだ。まあ外に出れば無重力でそれもなくなるだろうがな」

あまりの重さに顔を歪めている。
力をグッと入れてバランスを平行にするが、彼の力でさえやっとである。

……その姿は左が機械的で無機質を感じさせる形をした腕、右がまるで悪魔のように鋭く鈍い光を放つ爪と拳。
それを支えるようにブラティストームより二周り大きい巨大な腕。
肩から横へ突き出る無数の翼のような突起物も禍々しい。
金属であるが有機質を漂わせる右腕の左右非対称だ。

だがそこ感じるのは『凶悪』、それだけであり、まるで彼が神話に登場する邪神の姿に酷似していた。
彼女はラクリーマの肩に手を置いた。

「ラクリーマよく聞け。初起動ってこともあるが、お前の身体を考えてリミッター制限をかけてある。
もしいけそうなら私が遠隔操作で解除する。
各内蔵武器、機能は……ん？」

よく見るとラクリーマの身体が震えている。

「どうしたラクリーマ！？震えているがまさか痙攣か……」

「はあ？何いってんだよ。
なんかよぉ、こんなヤベぇ時になってるのにも関わらずワクワクしてんだよ」

「何だと？」

「身体中に溶岩が煮えくりまわるようでな。全然負ける気がしねぇ……クックック……」

「……」

彼は笑っている。それも気味悪いほどに静かだが止まろうとせずに。
ソワソワして落ち着きがなくなってきているが、まさか……。

「落ち着けよ。いきなり敵の密集地帯に突っ込むような無茶なこと

だけはするな？
いつものお前ならやりそうだからな」

「わかってるわかってる。よし、いってくるぜ！！」

やはり重いのか、ヨロヨロふらつきながら彼女から離れていく。

しかし、数メートル歩いた地点で彼は立ち止まる。

「そういえばサイサリス、前に言ってたよな？
サンプルが欲しいからこれで破壊した、殺した奴、機械を持ってこいと」

「あっ……ああっ！！」

するといきなり顔をサイサリスに向けて……こういった。

「とってきてやんよォ。
何がいい？機械なら装甲か回路か？
人間なら脳ミソか…それとも敵のチ〇ポでもむしりとってこようか
…クカカっ！」

その時の彼の顔と発言は狂ったサイコ同然であった。まともではな

い。

さすがのサイサリスもこれには背筋がゾッと寒くなったのであった。

「なんてな。なら行ってくる。早くセルグラードの調整を終わらせてくれよ！」

彼は去っていった。しかし、サイサリスはまるで恐怖感とも思える感情を抱いていた。

もちろん、彼に対してである。

「あいつ、ヤバいぞ……。一体これから何が起こるんだ……？」

……

そして、彼はすぐにオペレーションセンターに戻ってきた。

彼の異様な右腕にその場にいる全ての者が唖然となった。

「これが……サイサリスさんの開発した例の……」

「そうだ。ユノンもついに発動完了したみたいだな。

こりゃあ面白くなってきやがったぜ……一世一代の大勝負か！！」

自分達が生きるか死ぬかの瀬戸際で面白いなどというが、一体どうしたらそんな楽観的な発言ができるのか。

「オペレーター、艦内にいるもの全員に通信を繋げろ。作戦内容と話がある」

「はいっ！！」

中央モニターにはエリアの員、格納庫の各機体に乗っている戦闘員の顔が一斉に映り込み、その者たちも各モニターで本人を真剣な眼差しで見ていた。

そしてオペレーションセンターにいるユノン以外の者全員が起立し、ラクリーマを注目した。

「ついにきちまったな……。
ここでアマリーリスの全員に謝りたい。
こんなことになっちまったのも俺の責任だ。
俺の意思でのび太達を助けて、こいつらを地球へ送ると約束し、行動した結果、銀河連邦とかち合ってしまった。

絶対に戦死者は出る。いや、アマリーリス存亡に関わることだ……。
俺に恨み事がある奴は今ここで言え！！
俺はそれを受け入れる、そして……お前たち全てを俺が背負ってやる！！お前たちが生き残れるように俺が命をかけて戦う！！」

彼の熱演は全員に響き渡った。

さらに彼は話を止めず。左拳を握りしめて全員に見えるように掲げた。

《頼む。全員の力を貸してくれ！！

こんな絶望的な状況になっても生きたいと思う奴、あんな奴らに捕まりたくない奴、まだ悪さをしたい奴、そして……のび太達を無事地球に送れることを願う奴は……俺についてこい！！

その気持ちを敵にぶつけたいやつは武器をとれ！！》

その力強い発言を言い切ったその時、モニターに映るレクシーが笑いはじめ……。

“ククククッ……リーダー、何カッコよく決めちゃってんですか？俺らは全てアマリ―リスの、リーダーの為に働いてんですから！！”

“レクシーのいう通りだ！！あいつらに一筋縄ではいかないってことを教えてやりやしょう！！”

戦闘員や各員も次第に彼を持ち上げる発言をしはじめ、

“それにのび太達が来たことで嬉しいことがあった！！

全員、のび太達を無事に地球に帰れるように命をかけて、そして力を合わせようぜ！！いいな！！”

《ウ　オ　オ　ッ　ッ　ー　ー　！　！》

一気に艦内が盛り上がり、鼓膜が破れるくらいの歓声と気合いが響き渡った。

「みんな！」

「のび太さん！！ここの人たち……最高ね」

のび太としずかはこれを聞いて嬉しくないワケがなかった。しずかに至っては嬉し涙をするほどであった。

一方、ラクリーマもブルブルと震えて拳をあげてギュッと握りしめた。

《よっしゃあああっ！！
天下の連邦さんに俺らの底力を見せてやろうじゃねえか！！》

……そして、戦闘員とラクリーマは素早く作戦内容を確認を開始した。

「全員に伝える。連邦はモニターで見る限り、各艦と無数の戦闘ユニットで総攻撃を仕掛けてくると思われる。

だが、俺らのやることはエクセレクターをワープホール空間を形成し、逃げ込む為の強行突破させることだ。

全機を相手にするな、前方、左右から向かってくる敵だけを迎い撃て！！

そして段々前方へ押し上げ、エクセレクターの突破口を作るだけでいい！！

なお、各機は絶対孤立するな。その瞬間、死ぬと思え！」

全戦闘員が一斉に頷いた。

「俺の合図で全機発進せよ！

いつも通り俺が先頭に出る、俺の後に続け！！いいな」

“了解！！”

ラクリーマは上を見上げてユノンを見た。もはや無表情で何も言わぬ彼女は既に戦闘に集中している証拠だ。

「ユノン、俺を外に出してくれ！！

それじゃあ全員、健闘を祈る！！」

彼の真下に光輝く円陣が発生、一瞬でラクリーマの姿が消えた。

オペレーターはすぐに、モニターに宇宙空間の前部甲板を映し出した。

そこには彼が巨大な甲板上に仁王立ちしているなど、かなり勇ましかったのだが……。

「総司令、宇宙空間へ移動しました」

のび太達もそのモニターに注目した。

「ラクリーマが宇宙空間に……て……」

「「え　え　っ　っ　ー　ー　！　！　？」」

それはあまりにも信じられない出来事であった。

なんとラクリーマが生身で宇宙空間に出ているのである。

宇宙服や何もつけずに、真空状態下の中でも窒息している様子も見

られない。
むしろ平然としていた。
無重力にも関わらず、自分の力場を保持し、浮いているワケでもなくちゃんと甲板に足をついて立っていたのであった。
「うっ……うわぁ！！」
「どうしてラクリーマさんは宇宙空間へ出られるの！！？」
全く理解できない二人にジュネがこう説いた。
「驚いた？リーダーの種族の特徴でね。あの人は宇宙空間を生身で維持できる特殊体質で、実際にあの人、無呼吸でも生きていけるんだよ。
……あの人の種族はある意味では生物の概念を超越した存在なんだニャ」
「「……」」
「そういえばあんた達地球人はヒューマノイド……つまり人類なのよね？」
「はっ、はい。けどそれが何か……」

するとジュネは何かを考察しているように沈黙した後、口を開いた。

「……もしかしたらあんた達、地球人類の行き着く未来のひとつなのかもね……」

「えっ？」

……

ラクリーマは立ったまま遥か先の無数に蠢く光……銀河連邦艦隊、及び、数千、いや数万という圧倒的数の連邦製戦闘ユニットと戦闘機が既に一斉に発進、まわりに配置され、ついに幕をあける超決戦の開始を『ゴング』が鳴るのを待ちわびていた。

そんな中、彼は歯を剥き出しにして、笑っていた。
あたかもこの時を待ち望んでいたかのように……。

「ゆくぞ！！
銀河連邦艦隊の包囲網を突破し、エクセレクターの突破口を開く！！」

《ガシャァッ！！》

前に突き出したログハートが装着した時よりもさらに肥大化し、その狂気な笑みと共に高らかに名乗りを上げた！！

「俺たちは！！」

《２００００００光年よりこの宇宙へやってきたアマリーリスだ！！》

“ラクリーマ率いるアマリ―リス、アマリ―リス撲滅編成銀河連邦艦隊と激突す！！》

◇ＰＡＲＴ．３６　激突（後書き）

《第　１　部　完　！　！》

なのは嘘です。しかしまあ石川賢先生ならここで未完となるでしょう（笑）。

しかし、これは終わらせるつもりなのでまだまだ続きます。

次話からはやっと本メインの戦闘へ入ります。

◇ＰＡＲＴ．３７　大攻防戦　鬼神ラクリーマ（前編）（前書き）

……かつて、偉大なる漫画家、冷奴先生（ＧＯ－ｃｈａｎ）が親友であり、戦友であったＫＥＮ－ｃｈａｎがある漫画について悩んでいる時、こう言われた。

「マンガだよマンガ、マンガはもっと自由な発想で描かなきゃ面白くなんないよ」

これは小説でも言えるのではないかと思い、とにかく勢いと発想を書いてきた。

つまり、二次創作小説だろうがオリジナル小説だろうが、元ネタあって使おうが発想次第で面白くなる。

実にダイナミック……う～ん、渋い！！

というわけでこの話は終始バトルです。

◇ＰＡＲＴ．３７　大攻防戦　鬼神ラクリーマ（前編）

翼のような突起物から青白い粒子が後ろに放出、瞬間！！

《シュイイィッッ！！》

「行くぜ！！」

《ド　　ン　　！　　！》

ついに満を喫しラクリーマは発進。しかし肉眼で捕らえたのはスタートの一瞬でそれ以降はまるで消えたような錯覚に襲われる。

そのスピードはなんと音速（マッハ）にゆうに超えるという破格な速度を叩き出していた。

その後に続いて、アマリーリスの戦闘ユニット『スレイヴ』、戦闘機『ツェディック』も発進、彼の後を必死に追いかける。が、戦闘ユニットのブースターをもってしても、その異常の速さについてこれない。

“総司令、前方距離２０００ギャロから連邦の戦闘ユニット部隊と思われる多数の反応確認、数は１２０機！！”

超高速の中、オペレーターから敵の位置に関する通信が入った。

彼の前方から『スレイブ』と同サイズの人型の機械の巨人、それよりさらには１０m以上大きく、さらに分厚い装甲、両肩部、両手首に搭載された砲身等、多数装備した重量級の巨人……混合した連邦の戦闘ユニットの大群がこちらに向かって来ている。

右拳に全神経と力が結集して、殴りかかるような姿勢をとった。

「サイサリス、お前が宇宙最強の兵器開発の天才ってことを奴らに証明させてやるぜェ！！」

そして両者が激突まであとわずかにせまった。
ラクリーマは前方の一機に狙いをつけた。
彼とその機体のサイズ差はまさに虫と人であまりにも彼が不利な状況であったが臆するはなくついに！！

「くらえェェェっっ！！」

《ドワオ》

ラクリーマの放った全力の右パンチがその機体の腹部に直撃した。

《ベキゴキゴキギギッーー！！

なんということだろう。機体がその右拳の直撃による衝撃で腹部から始まり、やがて機体全ての装甲がまるで空き缶を潰したように見るも無惨に潰れ、そしてちぎれとんだのであった。無論、コックピットも完全に潰れてパイロットはもはや生きていないだろう。

ラクリーマはその威力に一瞬、驚愕したがすぐに快楽な笑みへと変わった。

「こりゃ面白れぇや……ヒヒッ」

アマリ―リスにとってはさい先の良いスタートであった。

……連邦側のこの部隊はやられた見るも無惨な機体の姿に、動きが止まり、焦り、恐怖などが全員に広がった。

『一機やられただとォ！！』

『バカな！！誰にやられてたんだ？
別に敵から攻撃されたように見えなかっ……』

《グシャっ！！グシャグチャ！！》

刹那、周りの機体は全て、さっきの機体と同じように潰れて、粉々になってゆく……。

そして、アマリーリスの戦闘ユニット達も駆けつけ、その光景に歓喜と高揚の声を上げた。

『ヒュ～～。スゲーやラクリーマさん！！俺らも後に続けェェっ！！』

“おうっ！！”

そして彼らも介入し、その宙域は激戦と化した。

『スレイブ』に搭載された両肩部から突き出した二連装の砲門から放たれる蒼白の光線、同サイズである連邦の戦闘ユニット『クイスト』の装備されたライフル銃からの緑色の光線が無数に飛び交い、その周辺を色鮮やかに染めているがそんな美しいワケではなく、両者の装甲を抉っていく――。両機の性能はほぼ互角であった。

しかし、連邦にはもう一つの機体が侮れなかった。

連邦が誇る重装甲戦闘ユニット『ゼウシウス』であった。

この機体はその二機より約二倍近い全長を持ち、さらに多武装を施された機体だ。

さらにそれに加えて全身に張りめぐされた追加装甲が、こちらの攻撃を一切遮断するように思える。

『くそっ、硬てぇぜこいつ！！』

案の定、スレイヴがまともに攻撃してもその装甲の前には歯が立たない。

そんな中、ゼウシウスは装備している手首に装備している砲身を天に掲げた。

《ブゥン！！》

その丸い砲門から８～１０メートルはある光を直線を放出しその長さを維持、まるで刀身であった。

それを前方で自分に一瞬背を向けて他機の相手をしていた一機のスレイヴに向けて……、

『後ろ来るぞっっ！！』

『何いっ！？』

《ズバァアアア！！》

その光の刀身がその機体の脳天から完全に叩き割った……。

完全に二つに分断されて爆発はしていないがコックピットさえも見事に直撃、焼ききれ溶けた金属がを全てを物語っていた。

『応答しろ！！応答しろ……くそっやられたぁ！！』

通信をかけたが全くの無反応。

さっきの一閃で乗ってた戦闘員は完全に蒸発していた。

『くそっ、あの機体はヤバいぜ！！

オペレーター、前方の機体のデータ分析してくれ！！

あいつの弱点を知りたい！！』

“了解！！”

分析している間、戦闘員達はゼウシウスの攻撃を避けるのに精一杯であった。

なんせ両肩、両腰、両手首に計6門の大型エネルギー砲による多角方向の砲撃に加えて、近づくものなら、並の攻撃全てを受け付けない重装甲、先ほどの斬撃の前には歯が立たない。

後方にいる『ツェディック』が光子ミサイルで支援しようにも敵どころか味方機にまで巻き添えを受けてしまう。

奴の欠点で今のところ判明したのは、その全身に張り巡らせた多装備のお陰で旋回力、制動力……つまり機動力を犠牲にしていることだ。

“分かりました!!この機体の全方向には特殊装甲で覆われていて並大抵の武装では効き目がありません。

しかし、背中部には動力炉と思われるジェネレーターボックスが存在します。

そこをスレイヴの高出力のエネルギーソードで貫けば、エネルギーが暴走し内部から誘爆します!!

そこだけは特殊装甲で守られておらず、剥き出しになっているのでなんとか貫通可能です!!”

『わかった、俺がやる!!お前らは俺を援護してくれ!!』

『レクシー、頼んだぜ!!』

レクシーは卓越した操縦能力でゼウシウスの攻撃範囲を回避し、見事後ろへ周り込んだ。

オペレーターの言っていた通り、背中には剥き出した真四角の箱型の出っ張りを見つけた。

《バシュイイゥー！！》

右手首部の砲門からゼウシウスのような5メートル程の蒼白の光輝く刀身を形勢し、右腕を引き、狙いを定めた。

《おんどりゃァァっ！！》

刀身はその出っ張りを軽々と貫通、深々と突き刺した。

瞬間、『バチバチっ』とスパークが機体全体にほどばしり、その機体のガチガチと小刻みに挙動した。

レクシーと他の戦闘員はすぐにその場から退避した。

予想通り、エネルギーが暴走し内部からＮＰエネルギーと思われる蒼白光が漏れ始め、次第に機体さえも呑み込んだ。

『うわあああああっ――――！！』

《ボボボッ！！》

ついに機体がエネルギー質量に耐えきれずに崩壊、爆散。

戦闘員はこれに勝どきを上げた！！

『よっしゃーっ！あいつの弱点は装備し過ぎによるノロマなのと背中だ！！
お前ら、このまま流れに乗って一気にここの集団をブッ潰すぞ！！』
“おうよ！！”

……そして、エクセレクターでも、

《対艦レーザー砲、光子ミサイル、全砲門発射用意……》

ユノンのまるで人形のように感情のこもってない声がオペレーションセンター内に響いた。

“全機、副司令官が一斉砲撃を行います。
射線上にいる各機は速やかに退避せよ”

その射線方向で交戦している戦闘員達はすぐにその場から退避した。

そして、

《――――――――――！！

計６０門の光子ミサイルに加えて、エクセレクターの両舷にある人間の手の形をした部位の先の指から一直線の光線が計１０門、射線軌道上に取り残された連邦の部隊に直撃、これを一瞬で殲滅。

しかし多数の光子ミサイルはその部隊だけにとどまらずに前方方向に無差別に降り注ぎ、辺り一面を破滅の光と光で埋め尽くす地獄の宙域と化した。

この一撃でこちらに到着、交戦していた連邦のユニット部隊の大半を粉砕、消滅せり。

戦闘員達は発射前に急遽左右に展開、難を逃れたがやはり光子ミサイルの巻き添えを受けて消し飛んだ機体も少なからずいた――。

「先ほどの敵艦の集中砲撃で、第２、５、１８、４、……の多数の戦闘ユニット小隊が一瞬で壊滅……」

「うぬぅ……」

それをモニターで見ていたカーマインはさらなる苦渋の表情を浮かべる……。

「グラナティキ級、ヴァールダイト級艦、主砲準備。前方のアマリ―リスの戦闘ユニットがいる宙域に集中砲撃！！」

「はいっ！！各艦長に告ぐ。これより前方５８００ギャロ、ＸＸ８８方向へ一斉に主砲を発射する。直ちに発射準備にかかれ！！」

そして……ラクリーマはというと。

「だありゃあああっ！！」

《グシャグチャベキッゴキギュ！ーーー！

ただ一人、別の敵部隊でその猛威を奮っていた。

《ベリベキベキっーーっ！！》

ログハートのＮＰエネルギーでコーティングされた爪はあのゼウシウスの屈強な特殊装甲すら薄い紙のように引き破り、

《グシャァ！！》

一撃の殴打だけで機体ごとぺちゃんこに潰している。一体サイサリスはどんな恐るべき技術をこのログハートに使ったのだろう。もはや物理法則もあったものではなかった。

『うわぁ！！どこから攻撃してるんだぁぁ！！』

『まるで……透明人間と闘っているよう……ぐわああっ！！……』

元々、戦闘ユニットからみれば小さな虫程度しかない生身であり、そしてログハートに搭載されたスラスターを駆使したあまりの速さにラクリーマの姿を捕らえきれない連邦隊員達は次々に撃破されていく。

レーダーにも反応されていないため攻撃される側からしたらこれ以上の恐怖はない。

ラクリーマはその場に急停止、両腕を顔の高さまで上げてクロスした。

「くらえ！！ミサイル全弾発射ぁ！！」

《ドシュドシュドシュドシュドシュドシュドシュドシュっーーー！！》

身につけていたアーマーの前後左右に無数の穴が出現した一瞬、彼の叫び声を合図に一斉に爆炎が上がり、無数の小型ミサイルが全方向にむけて放たれた！！

《ボボボボボッッ――――――！！》

おびただしい程のミサイルが彼を中心に広範囲に拡散、そして着弾した。

辺りは眩しいほどの光と衝撃、熱を放ち全くその周辺が見えない。

『くっ、ミサイル攻撃か！！』

『しかし機体自体は全くと言ってほど損傷していない……牽制か……？

しかし、どこからこんなに放たれたんだ……？』

戦闘ユニットのモニターはその爆発による光により視界不能であった。

次の瞬間、

『なあっっ!!?』

《ズバァアア!!》

その機体のモニターには光の中から突然、高笑いしている若い男の顔がモニター一面に映し出されその刹那、モニターが割れ、コックピット内がバチバチと放電し、内部の温度が急激に上昇……。

『にっ、人間だとぉぉぉっっーー!?』

『なら……さっきの無差別攻撃も……無数のミサイル攻撃も……まさか……っ』

……爆発の光が弱まり周りがやっと見え始めた時、歯を剥き出していて笑っているラクリーマが背にした機体全ては一気に粉砕、または爆散するというあまりにも異常な光景であった。

“どうだ?新型NP炉心を搭載したログハートの使い心地は?”

突然、サイサリスから通信で評価を聞かれる。

「サイサリス、お前は天才だよ。こんな楽しい遊びができるオモチャを作れるなんて……これでまだリミッター解除してねえんだろ？凄まじすぎて評価のしようがねえぜ！！」

“ククク……、まだそれにあたしの『とっておき』が結構あるんだ。

……ん？右斜め方向約１２０ギャロ距離から敵部隊が来るぜ。その数、戦闘機含めて５００機以上だとよ？”

「次から次へと……さすがは数でモノを言わせる連邦か……さすがにさっきみたいに暴れるとくたびれそうだぜ？」

“そうか。なら取っておきの一つを使えや。
ログハートの側面にグリップがあるだろ？
それを左手で握って右手を前に突きだしな！！”

彼女の言われた通り、右腕の横に突き出た『グリップ』を左手で握り、相手の来る方向へ、右手を向けた。

《ガシャン！！》

ログハートの手首部から、ブラティストームの小型レーザー砲のような四つのギミックが出現。
しかし、その形状は銃口のように円筒ではなく、ドリルのように尖っていた。

“まだ遠い。あたしの合図があるまで敵を引き付けろ！！”

向ける先には、先ほどのクイスト、ゼウシウスに加えて、あのエミリアの機体『イクスウェス』とは瓜二つで全体銀色のペイントを施された戦闘機も無数に混じり、混合した怒涛の大軍団がひしめき合い、ラクリーマを囲むように移動、配置に追い詰めるように向かってきていた。

そして、その全体が徐々に近づいた時、

“今だ、グッと握れ！！そうすれば『放てる！！』”

グッと握り込んだ瞬間、

《ドルルルル――――ッッ！！》

ギミックが時計回りに高速回転、先に青い光が収束した。

《――――――――――――――――》

……それは地球上における重兵器『機関砲』のようであった。目にも見えぬ高速に回転している四つの尖ったギミック先に収束した光が巨大な光弾となって一斉に発射！！

数十、数百の数えきれないほどの光弾が無差別に前方に飛来、そしてそれらがその近づいた大軍団に直撃した！！

その爆発、球状に膨張する輝く光、直撃した機体をその光に次々に

消滅させるその威力……そう、あの兵器であった。

「すげぇ……光子ミサイルの連射砲かよ……」

“すげえだろ？弾数無制限でかつ敵に当たるまで永遠に追尾してくれるオマケつきだぁ！！”

「サイサリス、やっぱオメェの武器開発の技術は全宇宙最強だぜ！！」

なんという武装であろう……。

最低でも戦術核兵器級の威力を持つ光子ミサイルを連射する機構なんて……。

言うなればある意味『核ミサイルのガトリング砲』であった。

「よっしゃあ！！これは天下無敵やぞぉーーっっ！！」

ラクリーマは連射しながら自分もコマのようにグルングルン　回り始めた。

――それは連邦のその部隊からすれば悪夢同然である。一分間に１０００発前後の光子ミサイルが中央の一点から一気に全方向へばらまかれたのだから。

しかもサイサリスの言う通り、その光弾が意思を持っているかのように機体が光弾の軌道から回避しても、自ら旋回、狙った獲物を当たるまで追尾した。

そして直撃し、その機体は消滅、しかし膨張した光は近くにいた機体や戦闘機を巻き添えにして粉砕。
戦艦級が装備しているクラスの威力であり、『大量破壊兵器』の名にふさわしい代物であった。

しかし、大量に撃ちまくっているにも関わらず彼が何の被害もないのは、サイサリスがそれを考慮して、ログハートから発しているＮＰエネルギーが膜を作り、常にラクリーマの身体中を包むバリア発生装置を組み込んでいるためであった。

――この攻撃でその大軍団が一分たらずで全て宇宙のチリと化したのであった。
ラクリーマはその素晴らしさを前に満足げに大きく息を吐いた。

「サイサリス、お前が敵だったらこれほど恐ろしいことはないぜ……」

“照れるじゃねえか。まあ……ありがとよ！！”

「よっしゃーっ！！次行くかぁーっ！！」

もはやまるでいいオモチャを見つけて遊んでいるかのように見える彼の姿をサイサリスは彼が映るモニターを眺め、声を出さず、笑っていた。

（ラクリーマ、あたしは最高にして最強の殺戮武器を作るのが仕事だ。
だがな、そのポテンシャルをフルに引き出すのは使う奴の仕事だ。
……お前のために作ったあの子は今、最高に喜んでいるぜ！！
……いけえっっ、ラクリーマ！！あたしをもっと興奮させろ、もっと感じさせやがれぇ！！）

……

「第９戦闘ユニット中隊が一瞬で消滅……なんで……？」

「レーダーには何も反応無し……モニターにも映らないところから突然の攻撃……」
連邦はその不可解な現象を前に、たじろぎつつあった。

その正体がさっきまでモニターでしゃべっていた男だとは未だに気づいていない。
「全艦、いつでも主砲を撃てる体勢へ移行しました」

「よし、射線上の部隊全員に退避させて全艦、主砲発射！！」

「了解、各部隊に告ぐ！！これより全艦の総攻撃を開始する。速やかに射程範囲から退避せよ！！」

――アマリーリスと交戦していた連邦部隊が突然、戦闘をやめて一斉にその宙域から離れていった。
戦闘員達は辺りをキョロキョロ見渡し、呆然としていた。

『どうしたんだあいつら……いきなり戦闘をやめて……』

『もしかして俺達の力の前にビビって……なんてな』

『なんか嫌な予感がするぜ……』

そんな中、オペレーターから各員に通信が入った。その内容は……。

“各員、敵艦隊の位置から膨大なエネルギー反応を多数確認。それぞれ、B級大12、A級大5……敵艦隊の主砲です!!”

《!　!　?》

その内容は戦闘員全員の心を一気に凍りつかせた。

そして、

「各艦、主砲放てぇーーっっ!!」

《――――――――――――!!》

カーマインのかけ声を合図にヴァルミリオンを除く、全艦に前部に搭載された巨大な砲門から想像を絶するエネルギー量、粒子の嵐が

一直線と同一方向へ向けて、一斉に放たれた。

そのあまりにも膨大なエネルギーの余波で周辺の空間が歪んでいるほどであった。

……グラナティキ級の主砲はＮＰエネルギーではなく第５世代エネルギーに相当するプラズマ反応炉から発生するエネルギー……つまり旧式の反応システムからのエネルギーであるため、威力はやはり劣るがそれでも戦闘ユニット相手なら余りある破壊力を持っている。

――多数の膨大なエネルギーを拡散した嵐が空間を喰らいながら急接近し、戦闘員に焦りと緊張が焦り……。

『うわあああああっ！！避けきれねえよっ！！』

『エクセレクターの後ろへ回るんだ！！』

『無理だぁ！！距離が離れすぎだ、もう間に合わん！！』

気付いたのが遅く、もはや逃げ切れない状況へ追い込まれた。

全員がもうだめかと目を瞑り、覚悟を決めた。

しかし、その時！！

「全員、俺の後ろへ下がりな！！」

“リーダーっっ！！？”

彼等の目の前にラクリーマが現れた。焦りの表情は見られないどころか、明らかに楽しそうに笑っている……。

『ラクリーマさん！！来るのは敵艦隊の主砲ですぜ！！どうする気ですかい！？』

「決まってんじゃねえか！！俺が全部受け止めてやるぜ！！」

『いくらなんでも無茶だぁ！！俺ら戦闘ユニットでも一撃ですぜ！？ましてや生身のラクリーマさんが……』

こんな状況にも関わらず彼は全くビビっていない。寧ろ、出来て当たり前のようにも感じさせている。

「まあ見てな！！防げなければ俺らの負けだ……だが防げたら俺らはチャンスだ……俺に賭けろ！！」

“リーダー……”

心配しつつも、彼の言う通りに後ろへ退避する戦闘員達。

「サイサリス、言った通りでいいんだな！！」

“おうよぅ！！ログハートに搭載されてるシンクロシステムはお前の気合いの込め具合で炉心の出力が左右されるが出せば出すほどその限界点はない。
それはこのＮＰフィールド発生装置にも比例するぜ！！」

「よっしゃああっ！！うおおおっ！！」

彼の気合いがログハートの機械音を高速させて、右腕を前に突き出した。

すると、ラクリーマを中心に薄透明の青を含んだ球状のエネルギーの力場が発生し、最初はラクリーマを包むぐらいの大きさがたった１秒で一気に膨張、そして味方の全戦闘ユニットを包み込むほどに膨張！！

《来いやァァァーー！！》

瞬間！！

《――――――――――――――――》

ついに全主砲が多角方向からラクリーマが展開したバリアに直撃！！
超エネルギー同士の衝突の余波が周辺の空間をグニャリと歪めるほ

どであった。
しかし、ラクリーマの高ぶる感情が爆発、それが拍車を掛けて、炉心に組み込まれたシステムも活性化、さらなるバリアの範囲を増大させた!!

《グオオオォァァァっっっ！！！》

その時の彼は完全に野獣そのもの。顔中の血管がおぞましいほどに浮き出て、その鋭い牙を剥き出しに自分の持つ原始的本能を全面に押し出していた――。

その時、ヴァルミリオンの中央デッキでは……。

「全主砲……到達地点で突然、膨大なエネルギーから発生した力場と衝突、相殺されました!!」

「何だとぉっ!?その地点をモニターに出せ!!」

問題の地点を確認する。そこにはアマリ―リスの戦闘ユニット全機が何の損傷もなく密集している以外は特に変わったことは確認できない。

しかし、よく見ると何やらそれらの前方に豆粒ほどであるが小さい何かが映っていた。

「オペレーター、拡大しろ!!何かいる!!」

モニターの倍率を上げて、カーマイン含む、その場にいる全員が目を凝らした。　そこに映り込んだのは……。

「こっ…これはぁ……」

「アマリ―リスの……あの男なのか……」

見た者全てはその光景に驚愕し、そして畏怖した。

アマリ―リスの総司令と名乗った若い男、ラクリーマが右手を突きだして立っていたのであった。それも圧倒的威圧感を放ちながら。

生身で宇宙空間に存在し、さらにその右腕、左腕はあまりにも人間のものとはかなり異質であった。ほぼ全員から見た男の第一印象はこれである。

「生身で宇宙に……しかもあの禍々しい両腕は……まるで……」

「『化け物』じゃないか……っ」

幾多の戦闘経験を積んだカーマインでさえ、その姿に寒気を漂わせるほどであり、他の者からすれば精神的恐怖であった――。

一方、アマリ―リスでも戦闘員達も彼の異常な強さを目の当たりにし、呆れて開いた口がふさがらなかった。

『すごいっ……スゴすぎる……ああっ……』

『戦艦級の……しかも多数の主砲を全部消し飛ばしやがった……』

驚いて操縦レバーを動かすことが出来なかった。

その時、ラクリーマは彼らの方へ向き、笑顔でこう言った。

「いっただろ?受け止めてやるって。

このまま一気に押し上げるぜ、今は俺達の方が優勢だ!!ついてきやがれ!!」

彼の宣言に彼等はブルブル震えて歓喜した。

『……いける。これはイケるぜぇ!!!』

『何だか負ける気がしねえっ!!リーダーがいるからか!!』

『全員、ラクリーマさんに負けねえよう、今以上に奮闘しよう、そしてエクセレクターを突破させるんだぁ!!』

“うおおっ!!“

彼らの気合いのかけ声がこの宇宙空間に響き渡った。そしてラクリーマは味方の戦闘ユニット、そしてエクセレクターを背にして連邦に対して啖呵を切った。

「きやがれぇぇっ！！てめえらなんぞにエクセレクターにひとつたりとも触れさせねえぜ！！」

◇ＰＡＲＴ．３７　大攻防戦　鬼神ラクリーマ（前編）（後書き）

勝手な妄想ですが、もしもこの登場人物に声優入れるとしたらどんな構成になるかなとふと思い、書いてみました。

ラクリーマ・ベイバルグ＝石川英郎

ユノン＝篠原恵美

エミリア・シュナイダー＝平野綾ｏｒ水樹奈々

ミルフィ＝佐久間レイ

レクシー＝関俊彦

ユーダ＝速水奨

ジュネ・サルナ＝松岡洋子

サイサリス＝高山みなみ

カーマイン・エルゴンド＝玄田哲章

サルビエス＝千葉繁

コモドス＝小西克幸

ラン＝桑島法子

エルネス＝松本保典ｏｒ山寺宏一

レイド・サバテクス＝保志総一朗

う～～ん……豪華すぎる……。

ただの自分の妄想なんですいません。

次も終始バトルになるのでお楽しみに。

◇ＰＡＲＴ．３８　大攻防戦　鬼神ラクリーマ（中編）

「「……」」

のび太としずかは目の前に映る壮絶な戦闘に瞳を震わせていた。
……楽しいわけがない、目の前で沢山の人の命がいとも簡単に散っていくのだから……。

それは……ドラえもん達も同じであった。

エミリアとミルフィ、そしてドラえもん、スネ夫、ジャイアンの特別編成隊は『イクスウェス』専用格納庫にある格納庫のモニターでその一部始終を見ていたのであった。そこには各機の通信も聴けるため、搭乗者が喋る内容……そして断末魔も……。

「ああ……あっ……」

「ホントに人が……」

「ぼっボク……気持ち悪くなってきた……」

同じ光景を見ている５人にはあまりにも現実であり、残酷であった。
これは本当の戦争であり、テレビ番組やアニメではない。

『人は死ぬ時は簡単に死ぬ』。嫌でも思い知らさせるであった。

一方、エミリアやミルフィも身体中を震わせている。

――そして二人とも涙を流していた。

「私達の同胞が……仲間が……次々と死んでいく……っ」

「……っ」

――この宙域の全てを巻き込む両陣営の総力戦は苛烈をきわめていた。

戦火が渦巻き、光と光、実弾兵器が隙間なく飛び交う地獄と化した宇宙、至る所に漂っている互いの機体の残骸に無重力で水玉になって浮遊する潤滑油、搭乗者の無惨な死体、果てには体が吹き飛び、飛び出した内臓なども回収されずに漂っていた。

連邦では救護部隊や整備部隊の後方支援部隊も駆り出され、大破した機体から隊員の救出、機体の応急措置や武器交換などの任務に尽力するが全く追いつくはずもなく、戦いに巻き込まれてなすすべなく全滅した支援部隊もあった――。

「これで味方の約5分の1が壊滅……」

「……」

ヴァルミリオン艦内の中央デッキにいるは兵士のほとんどが顔が真っ青であった。

ここまで戦死者が出るとは思いもしなかったのだ。

しかもである、その大半の要因が……アマリ―リスの大将、ラクリーマによってもたらせたのだから……。

そして全員が痛感した。アマリ―リスは……あの組織、そして……あの男は危険だ。

ここで止めなければ本当に全宇宙の平和が、秩序が一気に崩壊すると悟る。

「本艦主砲のエネルギーチャージ率は!?」

「現在６８％!!」

「……全艦に命令せよ。『一斉射撃を開始する、各艦の全砲門開けぇ!!』」

再び射程範囲から味方部隊を退避、確認した後、さらに対広範囲宇宙機雷を前方へ射出、散布せよ!!」

表にでは冷静に指揮を取るカーマインだが内心は非常に焦っていた。

（このままでは……だがやらねば、さらなる犠牲が、そしてここで死んでいった者の苦労が浮かばれんのだぁ!!）

……さらに戦闘、激しさを増し、ついに停滞していたエクセレクタ

ーが前進。

《エクセレクター・タイプ３へ移行する。各員、衝撃体勢……》

ユノンの発言と共に、艦がアンノウン戦のように三機に分離、後部、前部、中部　の順で一直線に並んだ。その速さは……なんと一分足らず。あの時の過程よりさらに早い。これも『デストサイキック・システム』により彼女の神経にトレースしているためである。

《ガシュイイイッーーーっ！！》

合体。あの亀の姿に模した形態を完成させた。

そこから全く動こうとしない。あたかも敵の攻撃に備えているかのように――。

《防御体勢……各戦闘員は本艦の後方へ退避せよ……》

“各員、今すぐエクセレクターの後方へ退避せよ！！”

そして戦闘員達は次々とエクセレクターの真下を通り抜けていく。全長が日本列島よりも長いエクセレクターだが、幸い少しずつだが前進しているため、さほどの時間がかからずに後方付近へ到着することができた。

「アマリ―リス艦、別形態に変形。さらに敵ユニットが艦の後方へと後退しました！！」

彼等が見るアマリ―リス艦は、先ほどの女性の顔をした船首ではなく、怒り狂っている憤怒の男性の顔となっている。

さらに全体的に丸みを帯びた装甲、前方の腕のような左右の巨大な砲身、後方には脚、尾のような丸い装甲から突き出た推進機関……その姿、まさに『亀』である。

そして……船首や砲身、推進機関を『甲羅』と化した装甲にしまい、防御態勢に入った。

「……全艦隊、一斉射撃開始せよ！！撃てェェ！！」

――そして二度目の集中砲撃。各主砲に加え、今度はヴォールダイト級、ヴァルミリオンから凄まじい数の巨大な光子ミサイルがエクセレクターに向けて、雨のように降り注ぐ。

軌道上の宙域は光線と光弾に埋め尽くされ、あまりの眩しさに直視すれば絶対に失明は免れないだろう。

《艦内、敵艦隊の集中砲火に備えよ……》

ユノンの命令に艦内のいる者全員は気を入れた。

前方からはまたもや主砲、上方からは無数の光子ミサイルが弧を描くように飛来、そして直撃。艦内はその衝撃でグラグラ揺れる。

「くあっ！！」

「きぎっ！！」

オペレーションセンター内でもその揺れに翻弄される者が多数いた。

《うろたえるな……我が体は、そう簡単に墜ちはしない……》

彼女の言う通りである。

……実は全くバリアを張っていなく直撃したにも関わらず、できたのは焦げあとぐらいであまり損傷がない。

この丸みのある装甲が角などの死角がないために破壊できる箇所が非常に少ないのである。さらに実弾兵器、光学兵器なども直撃せず受け流せる等、防御に関しては合理的な形をした装甲である。

これでバリアを展開するエネルギーを消費しないため、節約できる等の長所もあり、まさにこの形態は『難攻不落の要塞』であった。

ただ難点は防御を重視したために推進力、旋回性が三形態中最低であること。

そして、バリア無しではさすがにＳ級質量の攻撃（ヴァルミリオン

級の主砲）には耐えられないことだ。

――程なくして砲撃の光が弱まり、二度目の集中砲火はエクセレクターになんの決定打を出せずに終わった――。

「攻撃、失敗に終わりました。次に各艦が攻撃に移れるのは各炉心の冷却合わせて２１分後です」

カーマインは何か疑問があるのか全く口を動かさない。

（おかしい……なぜ敵艦はあれ以来攻撃を仕掛けようとしない？まるでコチラの様子を伺っているようだ……）

カーマイン含め、全員がアマリ―リスの作戦をまだ気づいていなかった。

一方、エクセレクターは先ほどの態勢を維持したまま、動こうとしなかった。

《本艦……この形態を維持し、状況を判断して次の行動を開始する……》

共に、戦闘員達はすぐさま行動を開始し、左右に展開しながらまた前方へ戻っていく――。

「敵ユニット部隊……また前方へ上がって行きます！！」

「宇宙機雷を広範囲に散布開始せよ！！こちらに近づけさせるな！！」

ヴァルミリオンの前方両舷にある巨大な発射口から、約数千発……いや一万以上を超える直径３ｍ程の黒色の球状機械が一斉に発射され、それが連邦の前方の四方八方を中心に拡散された。

「へへっ、このまま前に押し上げるぜ！！行くぜ！！」

戦闘員達はそのまま勇敢に前進。狙いは約３０ｋｍ先の連邦ユニット部隊。

しかし、あちらもこちらの動きを掴んでいるに違いないのだが、連邦隊員は全く動こうとしない。自分達を待ち伏せをしているみたいだ。

『俺らを迎え撃つつもりか……面白れぇ、ならそのケンカ……買ってやんよぉ！！』

血の気の多い一人が興奮し、操縦レバーを一気に前に倒し、それに連動してユニットもフルスピードで突撃！！

しかし、彼のモニターに映る直線上数十メートル先には丸い球が……。

『ん？』

気付かずにその機械に衝突した。しかし、その瞬間！！

《カ　っ　っ　！　！》

『きゃあっ……！？』

《ド　ワ　っ　っ　！　！》

強烈な光と共に大爆発、彼の乗っていたスレイヴはその光の中に消えていった……。

『おいっっ！！応答しろ！！応答しろォ……』

『やられた……しかし、一体……っ』

その後ろについて来ていた仲間はその事態にすぐに急停止した。

“どうした！？”

『仲間一機が前方で突然爆発した。レーダーにもセンサーにも反応しないんだが!!』

“少し待て……その前方を調べてみる!!”

オペレーターがすぐにその宙域をスキャンし、モニターを見ると驚くべき事実が……。

“……トラップだ。前方宙域に無数の丸い物体が浮遊している。機雷に違いない!”

『なにぃ!!しかしモニターには何も見えんぜ!?』

“完全に宇宙空間と同化していて分かりにくいんだ。しかもこちらのレーダーやセンサーには反応しない特殊機雷だ”

『どうする!!攻撃して誘爆させるか?』

『やってみよう。各機集合、前方宙域に一斉掃射だ!!』

次々と仲間が集まり、約５００機ほどが密集。そして前方に向かって各機全砲門を展開!!

『いくぞ!!ぶちかませぇ!!』

――全機の砲門が火を吹き、集約された無数の光線が前方の範囲、射程距離を許す限り、駆け巡った。

これほどの集中砲火なら連邦の一個中隊規模なら一太刀浴びせれるだろう。

……が、狙いの『機雷』に直撃していると言われたらそうではなかった。

何故なら光線そのものを弾いているからであった。威力関係なくである。

“どうやら機雷は光学兵器が効かないようにコーティングされている”

『なにぃ！！さっきの攻撃は無意味だってことか……』

『ということは……連邦からしてみれば機雷はトラップにもなるし、俺らの攻撃を防ぐ盾にもなってくれるワケだ……。

これじゃあむやみに前方に進めねえぜ！！』

アマリ―リスの弱点を露呈してしまった。実はスレイヴ、ツェディック共、実弾兵器は装備されていなかったのである。

ＮＰエネルギーに頼り過ぎたことにより、各武装の威力は高いが臨機応変な攻撃が出来なくなったことであった。

これも銀河連邦の光学兵器を逆手にとった戦術の一つである。

その様子を開発エリアの巨大モニターで観察していたサイサリスは頭をポリポリ掻いて『ちっ……』と舌打ちする。

「あちゃ……これはミスったな。全機に普通のミサイルポッドを外さんときゃあよかったぜ。

まぁ、今さら後悔すんのもしゃあない。ラクリーマ、聞こえるか？」

全く焦った様子もなく彼を呼び出した。

“どした!?”

「今どこにいる?」

“今、部下のとこに駆けつけたとこだ。どうやら前に厄介なトラップがあるらしいな”

「そのことだが、お前、突っ込んで破壊しろ」

“はあ!?俺に死ねとでも言いたいのか!?”

あまりにも無茶苦茶すぎる発言であった。

「大丈夫だ。そのための内蔵武装とバリアだ。とっておきその2を使え。

まあ……万が一なんかあったら死に水はあたしがとってやるから安心しろ♪」

“他人事みたいに言いやがって……。まあいい、わあったよ!!なら、なんかあったらホントに俺の骨、拾っといてくれ”

そして彼は右腕を突き出して突進する体勢になり、

「全員につぐ、今から俺が前方のトラップを破壊して、敵をかき回

してくる。合図と共に前進しろ」
『……分かりました。お願いしますぜリーダー！！』

通信でそう伝えるとラクリーマは発進。その速度はゆっくりであった。

……確かに彼より一回り大きい球状の物体があちこちに浮いている。

ラクリーマは目を凝らしながら周りを見渡し、慎重にゆっくり推進する。

「近くにいかねえとわかんねえくらいに黒いな……。サイサリス、とっておきはどうすれば発動する？」

“右手の爪を前に突き出せ。ブラティストームのドリルと同じ感覚だ”

言われた通りに爪を真っ直ぐ伸ばすと……。

《ギュイイイッーー！！》

長く真っ直ぐ尖った5本の爪が左手の指ドリルのように高速回転を始めた。

《ドシュっっ！！》

爪が5本全部が一斉にログハートから放たれた。

それらがまるで意思を持ってるかのように自由自在に動き回り、駆け巡り、そして機雷に狙い定め、突撃。

完全にドリルと化した爪が次々に浮遊している機雷を軽々と貫通し、爆破させていく……。

「なるほど……そういう機能か……。
なかなかあいつもいい趣味してんじゃねえか！！」

ラクリーマは右腕をブンブン振り回して自ら機雷へ突撃した。

「うらあっ！！」

爪がなくなった右手を握りこんで機雷を殴打する。そしてすぐにそこから離脱し、すぐに次の機雷へ向かう。

……殴られた機雷はセンサー反応を起こし、爆破。まるで大量の花火が炸裂しているように機雷の散布された宙域を光で染める。

――連邦のモニターにはその光景が堂々と映し出され、見ている者全員が呆気をとられている。

「なっ……なんてやつだ……」

「各部隊、アマリ―リスの総司令、ラクリーマという男を全力で止

めろ!!そのデータを一斉に送信する、本艦に近づけさせるなァ!」

全部隊に一斉に命令。それほどまでにあの男は危険であり、恐怖の象徴であった。

……その宙域の機雷もものの数分間で多数爆破され、戦闘員達も奮いだった。

“各員、いいぞ!!前進しろ!!”

彼から連絡が入り、全員が一斉に操縦レバーをグッと握った。

『よっしゃーっ!!これで俺らも前進できるぜ!!ラクリーマさんを援護だ!!』

“おうっ!!”

そして次々に戦闘員は前方へ進撃を開始。急いで戻ってきた多数の連邦部隊と真っ向からぶつかった。

――宇宙を自由自在に翔け、敵戦闘ユニット部隊の猛攻さえもことごとく回避するラクリーマの姿はまさ韋駄天であった。

『うわあああっ!!あの男を止めるんだ!!やられるぞ!!』

“連邦主力中型戦闘ユニット『クイスト』。

連邦初にしてＮＰ炉心を搭載した機体であり、機動性と汎用性に優

れ、さまざまな武装、オプションを換装できる量産機”

その数十機の両腰部に装備された多連装の発射管から無数の実弾ミサイルが一斉に発射され、それがラクリーマに向けて飛んでいく。

しかし、ラクリーマ右手を開いて追ってくるミサイルに向けた。

《ボボボボボッッ――！》

なんと手の平にそのミサイルが直撃、爆発。

「クカカッ！！いいぞ、もっと来いや！！」

……全く効いていない。ミサイル一つ一つの全長がラクリーマと同サイズでそれが無数で襲いかかっているにも関わらず、右腕全体がもげるどころか、焦げ、傷ひとつもついてない。彼自身もバリアのおかげで爆風が全く届いておらず、無傷だ。

『やったか……！？』

連邦は爆煙を弱まり、その望みをかけてモニターを凝視した。

が……、その願いが叶うハズもなかった。

多数のミサイルが命中し、爆発した中心部からそう、あの男が何の

影響もなく存在していたのだから……。それも今度は狙いをつけているように睨み付けながら……。

《ばっ……化け物だぁァ――――！！》

完全に畏れをなしている連邦兵士達。

――当たり前であった。なんの装備もしていない生身の人間が宇宙空間にいることでさえ異常であるが、連邦の戦闘ユニット……いわゆる巨大な機動兵器の武装を持ってしても全く通用していないのは考えられない。

夢を見ているのかと疑いたくなるほどであった。

そんな中、

《ズバァアアア！！》

横から割り込んだスレイヴの集団が、絶望したのか動こうとしないクイストの胴体をあのエネルギーの刀身で斜め上から次々と一刀両断し、すぐにその場から離脱。

クイストの金属の胴体が焼ききれて半分に分断され……強烈な光を内部から発し、そして『ボボボッ！』と鈍い音を放ちながら爆発。

そんな光景をラクリーマは皮肉まじりな笑みを浮かべる。

「おいおい、それは俺の獲物だぜ？」

“ククク、すんません。まあいい的だったんで許してくだせえ”

“たまには俺らにも勝ち星くださいよ、リーダー♪”

「まっいいさ。お前達は向こうを頼む。
なんかあったらスグに駆けつけるからな、あんまり離れすぎんなよ！！」

“了解！！”

仲間がまた次なる戦場へ赴くところを見届けるラクリーマ。
しかし、彼をよく見るとわき腹を左手で優しく撫でている。

（ククク……どうやら耐えられなくなっちまってる……。痛みは感じねえが……かなり軋んでるのがよくわかるぜ……だが勝つためにやるしかねえんだ！！）

渋い表情をして彼も旅立っていく。

……そしてまた分散し、それぞれまた別部隊と介入、または仲間と合流した。

……実はラクリーマはこんなことを考えていた。

（もし、ブラティストームとログハートの炉心を直結したらどうな

るんだろ……？やってみっか！）

ブラティストームの炉心を積んでいる肩の側面と上部の金属穴から細長いチューブがニュルニュルと5～6本飛び出し、それがログハートの炉心を積んでいる翼のような突起物へと伸ばして、着くとそのまま直結した。

「よし、試しに……ちょうど敵部隊が……」

彼の前方からはまた別部隊がこちらへ向かってきている。どうやら……戦闘機だけで構成されているみたいであるが。

《ガシャン！！》

ブラティストームの小型レーザー砲の全銃口をその戦闘機に向けてゆっくり狙いを定め――。

《ズワ！！》

通常の出力とはワケが違い、発射された極太の光線が目にも見えぬ超スピードで一直線に駆けて、戦闘機は避ける暇もなくまともに直撃！！

しかし、その光線はその機体どころか後ろにいた機体さえも貫通、さらに貫通と遥か彼方まで伸びていった――。

『うわああっ！！何があった……』

爆発、その四面にいた戦闘機さえも巻き込んで誘爆した。

――ラクリーマは閃いた。『これは使えると』とうんうん頷いた。

「……やっぱりな。どうやら二つの炉心を連結させるとどちらか炉心出力が上乗せされるようだ……こりゃあいいことを見つけたぜ！！」

ニィと笑う否や、ブラティストームを天に突き上げて、４門の銃口も真上に向いた。

《ヴィィィィッッっ！！》

各銃口から光線がどんどん伸びていき……長いってもんじゃない、一体何Ｋｍあるのかと思うほどの先が見えないくらいに細長い４つの光線を放ったままそれを維持し……まるであのスレイヴやゼウシウスのような……いやいや、そんなものとは比べ物にならないほどの全長を誇る光の刀身であった。

《直接ぶったぎってやらぁ！！》

もはや説明の仕様がなかった。

４つの長いＮＰエネルギーの光で輝く刀身を形成し銃口を、左から右へ、その銀河連邦製戦闘機『ホルス』の密集地帯へ豪快に薙ぎ払った。

直撃したホルスは全機、切れ目と共に上と下に分断されたのであっ

た――。

“ほ～～う、ラクリーマ～～やるじゃんか♪
これぱかりはあたしも考えてなかったよぅ♪”

「へっ、変な声を出すんじゃねえよ！！」

サイサリスから猫なで声で賞賛され、気味悪がる彼だが。

“ラクリーマは戦闘に関したら素晴らしいねぇ～～、センスいいねぇ～～♪憎いねぇ～～っ、このこのぉ♪
オマエだけでなくあたしにもやらせろぉん♪”

「やらせろってオマエ……」

“ククククッ……ここでとっておきその3だ！！まあ見てな！！”

……開発エリア。サイサリスはどこから持ってきたのか謎のゴーグルを装着し、右手には拳銃のグリップとトリガーしかない形のデバイスを持っていた。

彼女が右手を前に伸ばすとそれに連動して、ラクリーマの意思とは無関係に右腕も同じ行動を取った。

“さっ、サイサリス？右腕が勝手に動いてんぞ！？”

「心配すんなラクリーマ。今だけログハートはあたしの掌握下だ」

サイサリスに映るゴーグルの画面にはラクリーマと同じ視点で、先ほどの斬撃で倒せなかったホルスの残機を何やら赤く丸で囲み……標準を合わせている。

「くくっ……ロックオン……目標、画面全体の敵軍団……ＮＰエネルギー収束開始、死ねやイカレチ〇カスどもぉ！！」

持っていたデバイスのトリガーを力強く引いた――。

。ログハートの機械や回路が一気に活性化した時、その瞬間であった。

ホルス全機が突然、一斉に爆散。一瞬で回りにバラバラになった胴体の破片や内部の機械が飛散しまくり、よくみるとパイロットの肉片や内臓も見るかげすらなく浮かんでいる。

ラクリーマは一体何が起こったか瞬きもせずにただ茫然と見ていた。

“どうだ！？この威力は！！”

彼女の声にやっと我に変え、ハッと大声を上げた。

「お前、一体何をした！？」

“ククク、ワープホールの応用さ。高出力のレーザーをターゲットロックした対象物の内部へ空間移動させて直接撃ち込むっつう機構だ。つまり相手からこちらの手を全く予想出来ずに直接に攻撃できる優れもんだ！！
最も、試験的に取り入れた機構だからさっきの一発しかもう使えねえが、もし生き残ったらそれが実用化できるように改良してやるよ。お前自身でも使えるようにな！！”

「……」

さすがのラクリーマも彼女のあまりの凄さに口が震えていた。

「……ホントに敵に回したくねえ奴だなオメェはよ……こんなの連邦でも考えつかねえぜ……」

“けっ、このぐらい用意させてもらわねえと同じ土俵に立てねえぜ。なんせ相手は連邦だからよ”

……確かにその通りである。もしログハートがなかったら確実に大苦戦を強いれていただろう。

ブラティストームだけではさすがに相手にならず、たとえ戦闘ユニットに乗っていても、無数の数で攻めてくる連邦相手には分が悪すぎる。
実際にログハートを装着しても、苦戦するとラクリーマは考えていたのだから、ここまで殲滅できるとは……サイサリスの頭脳とセンスが生んだ奇跡の産物なのである。

……次第に彼は身震いし始め、右腕をぎゅっと握った。

「サイサリス……？」

“どうしたラクリーマ……？”

「俺、楽しすぎて今までにない快感を味わってる……こんなに破壊できて……こんなに敵を殺して……なんだろう……理性のタガが外れそうなんだが……」

“お、おい！？落ち着けよ！！”

「ああっ……分かってる……だが」

……何かがおかしい。彼女は悟った。

元々ラクリーマには、こう言うのもなんだが先天的に持って生まれた常人を遥かに超える身体能力、戦闘的センスもさることながら、戦闘訓練で垣間見せた凶暴な本能も兼ね揃えている、いわば『生まれながらの闘犬』と言える。

……彼には理性がある。たまにくだらないイタズラ等もやらかすが決して頭は悪くない。

しかし、ログハートを装着した際、旅立つ際に彼女へ放った言葉は何か危ない言葉を放っていた。それは普通の思考ではまず口にしない言葉である。

つまりである。彼は本性を隠している。

今までに誰も見せたことのない本当の姿が……。

“ラクリーマ……お前のアリのままが見てえぜ。
私も自分が作った武器で敵を殺戮する光景を見るのが大好きだ。
だから……全力でいけ！！奴らをブっ殺してやれ！！そのログハートで……私を濡れさせやがれ！！”

……彼女もかなり逸脱した発言をしているが。まあ二人とも思考がよく似てる。

「ククククッ……お前に今まで男が寄り付かん理由がよぉくわかったぜ。テメェは真性の殺キチじゃねえか！！」

“うるせぇ、まだセルグラードが残ってるんだぜ。
あと見る限り、リミッターを解除してもイケそうだな……どうする？」

「ああっ、俺がその時言うからその時頼む！！」

“分かった！！”

……

その頃、戦闘員達は度重なる宇宙戦闘に段々と疲労していた。

破壊しても破壊しても次々とやってくる連邦部隊を前にして、もはや底なし地獄である。

『くっ……さすがに頭が痛くなってきた……』

レクシーもなんとか生き残っているが、いつ終わるやも分からない迎撃に頭痛を発していた。

彼の乗っている機体も装甲がすり減っていつやられるかも知れない状況にあった。もちろん、他の戦闘員達の機体も同じである。

もう現時点で１０００機近くあった機体の数がもう６５０機前後である。

機体が破損し、戦線を離脱し帰艦した者はもちろん、敵の攻撃で大破し、命を落とした者も。

仲間意識の高い彼等からすればその光景を見るのはあまりにも辛いことであった。

――そして、今彼らと交戦している銀河連邦、第１７攻撃部隊……あの二人がいる部隊であった。

『ケッケッケ、よくもここまで好き勝手に暴れてくれたな！！俺様のアデリーンで貴様らを制裁してくれる！！』

迎え撃つはサルビエス。彼の搭乗するこの機体は不気味である。

全長は大型クラスであり、さらに狐の顔を模した頭部、限界まで装

甲を削り、スマートすぎる胴体、そして後腰部には金属でありながらまるで尾のようにユラユラ揺れる柔軟性をもった物体が計9本……。

それ姿はまるで中国の妖怪である『九尾狐』の姿と酷似していた。

『……他の戦闘ユニットと違って嫌な感じがするぜ……全員、あの戦闘ユニットに気をつけろ！』

レクシーのかけ声に仲間は分散し、サルビエスの駆る『アデリーン』を四方八方取り囲んだ。

『全員、一斉攻撃だ！！』

彼の合図と共に、両肩から長く突き出た砲身から放たれる一点集中型の光線をアデリーンに撃ち込んだ。しかし、光線が突如アデリーンの全身から緑色の粒子が放出、エネルギーの力場が発生され、全方向からの光線がいとも簡単に弾かれた。

『クックック……お前らの攻撃なんぞ利くわけねえだろうが！！』

コックピットで余裕こいて高笑いしているサルビエス。

『ならこちらからも行くか……全機、俺様を援護しろ！』

“了解……”

周りの部下の返事が何か元気がない。それはコモドスも同じであっ

た。

『あいつ、バリア持ちか……これはヤバイなぁ……』

レクシーは歯ぎしりを立てている。
こんな独特のフォルムはどうみてもクイスト、ゼウシウスのような量産機ではなく専用機だ。
後方にはもう一機、他の機体とは形状が違うまるでゴリラをそのまま機体にしたような重量感ある戦闘ユニット。全長はスレイヴと同等である

そして彼等の前に立ちはだかるサルビエス率いる攻撃部隊、果たしてレクシー達の運命やいかに……。

◇ＰＡＲＴ．３９　大攻防戦　鬼神ラクリーマ（後編）

『お前らみたいな社会のゴミはこの世から抹殺してやるぜ！！』

アデリーンが上方へ飛翔。２０ｍ程に到達すると急停止し、後部にある９つの尾を模した金属筒を前方まで伸ばし、展開。
それら全てがガシャっとまるで銃口のような丸い穴を展開し――。

――緑色の光線を一斉放射。それは撃った瞬間、光ったとしか見えないほどの、肉眼では認識仕切れないほどの速度で一気に前方のスレイヴ数機を撃ち抜き、行動不能にさせていった。

“お……俺……撃たれたのか……ああ……っ”

「おいっ、しっかりしろ！！早く脱出しろっ！！」

撃たれた戦闘員はワケが分からず震えながら自分自身に問いかけていた。

しかしその時、

《グ　シ　ャ　ァ　っ　！　！》

アデリーンの後方にいたゴリラのフォルムを有する機体がその戦闘不能と化したスレイヴのコックピットに向かって、その握り込んだ剛拳で殴り潰した。

『……』

返答がなくなった。それにレクシー含む、全員がその場に立ち尽くす。

『ケッケッケ、無様だなぁ。
コモドスよくやった』

“……”

その機体の乗っているのは彼であった。

“コモドス専用中型戦闘ユニット『エンリケ』。
白兵戦、近接近戦に特化した機体。アデリーンの護衛を目的に開発された兄弟機”

『行くぞ全機!!奴らを皆殺しにするぞ!!』

“……”

そして襲いかかる第17攻撃部隊。

すぐにそこから退避するが、

『こいつ速ええっ！！大型のクセにスレイヴと同等だと！？』

アデリーンの機動力、運動力はレクシー達の想像より上であった。

機動性が売りであるスレイヴと互角であったのだ。同じ速度、同じ制動、同じ旋回能力でこちらに動きについてきている。

……こんな一回り大きいのに全く劣ってない。

寧ろ、あちらのほうが全てにおいて性能が上であった。

『お前らにいいものを食わせてやる！！』

サルビエスは右操縦レバーの横についていたボタンを押した瞬間、後ろの『尾』が一斉に宇宙空間に放たれた。

……有線式。エネルギーを供給する線が伸びる限り九つの尾が各敵機へ追いかけ回し、的確に狙いを定め、機体を撃ち抜いていく。

『ちい、隙がねえ……』

レクシーは敵の猛攻を必死に避けていた。

彼は戦闘員の中でも操縦能力、判断力が特に優れているが、それでも厳しい状態であった。

一方、コモドスと部下も第一線で戦っていた。それもアデリーンを護衛する家来のように。

『サルビエス大尉の所に行かせん！！』

エンリケはまるでボクシングのように両手を構えて、敵機に密接して拳を人間で言う脇腹、頭部、そしてコックピットのある胸の部分をその強力な金属拳で素早く強打。

一撃で装甲が凹み、コックピットに直撃した戦闘員はものの見事に押し潰されて……。

スレイヴの一機が離れた場所からエンリケの真後ろから右手首から突き出ている砲門を向けて、発射。

光線が突き抜けエンリケに直撃しようとするも緑色の光の膜が機体全体に覆い、光線をいとも容易く吸収、消滅した。

『なにぃっ！アイツもバリアを』

するとコモドスもその機体に気づき、振り向くと右拳を先ほどのスレイヴに向けて、

《ドン！》

なんと拳をそのまま発射。内部のブースターがうなりを上げて飛んでいく。

『拳がこっちに飛んでく……ぐわああっ！！』

避けられずに直撃。貫通はしてないが胸部を当たり陥没、機内はグラグラ揺れた。
コックピットは……何とか無事みたいだ。

『……ただ殴るだけが取り柄じゃねえってか……』

飛んだ拳はちゃんと元の場所へ戻り、連結。

それはまさにアニメに登場するロボットが装備している定番の武器『ロケットパンチ』を再現しているようであった。

『一旦ここから抜け出す！！』

仲間が敵の密集地帯から離れようと上方へ退避したその時、

《――――――》

一瞬だった。コックピット部分が大穴が空き、機体は完全に動かなくなった……。

これが戦闘員達をさらに混乱させることとなる。

『おい、どうしてやられたぁ！！』

『分からない！！ヤバイぜこれは……』

そんな中、

“レクシー、聞こえる！？”

『ジュネか！！』

レクシーの通信から最愛の恋人ジュネの声が受信された。

“気をつけて！！奴らの後方に約５０機の狙撃手がいるニャ！！”

サルビエス達の後方８０ｋｍ地点では長銃身の銀色で施された全長１０．５ｍ、口径２００ｍｍ程の巨大ライフル、取り付けられた専用の照準スコープに目を傾けて息を潜めるクイストの姿が……。

。ライフルの銃底から繋がる線が背中に搭載されているランドセルのようなジェネレータへと繋がっている。

『早く出てこい、早く出てこい』と言わんばかりに銃を構えたまま不動であった。

“上方や下方に逃れるのは危険だニャ！
その瞬間に的にされるよ！！”

『クソ、ならホントに逃げ場なしかよ……』

……次第に追い詰められる戦闘員。

立て続けに連邦は次々とホルスを投入していく。

ホルスの動力源はＮＰエネルギーではなくグラナティキ級と同じ、プラズマ反応エネルギーで動いている旧式の汎用戦闘機である。だが性能面、操縦性が優れ、どの隊員でも扱いやすいためクイストやゼウシウスと同じく第一線を張る機体である。

そのホルスが左右に散開、各敵機に攻撃を仕掛け始めた。

『くうっ、ちょろまかと動きやがって……』

優れた機動力、両主翼に装備された実弾ではなく、エネルギーを弾丸として撃つ機関砲、胴体の真下に装備された口径１６０ｍｍのエネルギー速射砲を駆使した一撃離脱戦法を得意とする、ツェディックとはまた違った戦術だ。
エネルギー上、戦闘ユニットと比べたら少し頼りない気がするが、すでに疲労しきったアマリ―リス勢相手には数押しで有効な手段である。

……その戦力を前にアマリーリスの機体は次々に撃破され、もはや数十機……百機に近くなるほどの機体が破壊された。その搭乗者の半数が戦死、助かっても無事な戦闘員は2割ほどである。

警察の役目を果たす銀河連邦がそこまでやっていいのか疑問であるが、奴らは殺そうと襲いかかってくる。

つまり、自分自身を守るための最終手段……いわゆる正当防衛である（という理由付けであるが）。

『……もうだめかもしれん……』

レクシーもあきらめかけて気が緩み、機体の動きが鈍くなった。

それをサルビエスは見逃すはずもなく、狙いをレクシーへ向けた。

『へへっ、諦めたか。それにしても貴様達の機体には華がないな。これじゃあ標準装備のクイストと同レベルじゃねえか……クックック……全く拍子抜けだぜ！！』

サルビエスは不気味な笑みと共に勝利を確信。

『俺がトドメを指してやらぁ！！』

ついに突撃し、九つの尾全てをレクシーの機体に向けた。

『南無三……』

万事休す、レクシーは向かってくる巨大な狐の前に瞳を震わせていた。

《ド　ワ　オ　！　！》

突如、アデリーンの前方が爆発、機体の動きが止まった。

『くっ、なんだ！！どうした！！』

サルビエスがモニターを前方を確認すると、狙いを定めていた機体の後方には紅い戦闘機の群が。

アマリーリスのもうひとつの機体である『ツェディック』のお出ましである。

“おいレクシー！！腐ってんじゃねえよ！！”

彼の通信から聞こえてくるのはあの問題男、ユーダであった。

『ユーダ！！助けに来てくれたのか！！』

“勘違いすんじゃねえよ！！お前らがあまりにも不甲斐なさ過ぎるから腹が立ったんだ！！

あんな奴ら、今すぐぶっ飛ばせねえのかよ！！”

『……できたらとっくの間にやってるよ！』

“……まあいい。レクシー、仕方なくだ。『アレ』するぞ！！”

『アレってまさか……』

“……早くこい。俺だってあんましたくねえんだが……やらねえと倒せねえんだろ？”

『……』

二人の言う『アレ』とは一体……。

『ちい、よくも邪魔しやがったな！！俺がまとめて相手してやらぁ！』

サルビエスは待ってくれるはずもなく、すぐにまた尾をレクシーと今度はそのツェディック達の方へ向けた。

“レクシー、来るぞ！！”

『おうっ！』

そして九つの光線が一気に放たれたが、軌道上にいたレクシーとユーダはすぐに退避、そして二人の乗せた二機は合流した。

『行くぞレクシー！！』

『……わかった。こうなったらどこまでイケるかやってやる！！』

《合　体　だ　あ　っ　！　！》

……スレイヴとツェディックの真価はここである。

それは連邦からしてみれば信じがたいであった。

ツェディックの二分割りした胴体の前部から半分までが分離し、それぞれがスレイヴの両手首に装備されているエネルギー砲の砲身と連結。

そしてさらに残った後部、即ちコックピットと主翼、そして動力炉がある胴体がまるで金属の分子が増殖して別形態へ変形、スレイヴの背中にあるハサミ型の推進スラスターに合うように下から合体、残った二つの尾翼は角のように頭部の真ん中に連結……。コックピット内では、レクシーの座席が上に上昇し、その下からユーダが潜り込んだ形で設置。

単座式から複座式へと変わり、スレイヴとツェディックの本領の姿が今ここに出くわした。

『……あの二機が……合体しただと…！？」

前に立っていたのは両腕部に突き出た全長１０ｍの紅の長砲身、背中にはツェディックから受け継いだ巨大な羽翼とスラスター、そして頭部は天を刺すよう突き出た様はまるでおとぎ話に登場する『鬼』のようであった。

スレイヴの白色の胴体、ツェディックの紅いパーツ、その姿は目立つくらいの存在感を放っていた。

『久々だなこれ……上手く扱えっかな？』

『そんな心配はいいから早く操縦しろ。俺は早くあいつらを殺したくてしょうがねえんだ』

『へいへい、ユーダさんは怖いでっせ。なら行くぜ【シルバリオン】！！』

レクシーが勢いよく操縦レバーを前に押した時であった。

《スバァアアっ！！》

瞬き一回する間に連邦のクイスト一機がすでに真っ二つに胴体が分断されて、その後方には、『シルバリオン』の姿があった。

『何だとォ――――!!』

先ほどの動きとは全く違う。その機体は疾風の如く、モニターやレーダーが捕らえきれないほどの超高速で駆け巡り、翻弄し、連邦の機体を一機、また一機とバタバタ薙ぎ倒していった――。

“見せてやるぜ、音速を超えた闘いって奴をな!!”

NP炉心を二つ搭載したシルバリオンの性能たるや、先ほどの苦戦が嘘のようであった。

『このアデリーンが……捕らえきれないだと!!? コモドス、あいつをどうにかしろォ!!』

“……っ”

不可能である。シルバリオンの機動力はスレイヴと比べて桁が違うほどで、この速さはまるで最初のラクリーマの動きを再現しているようであった。

接近しなければまともに攻撃できないエンリケからすれば、非常に相性の悪い相手である。

――突然、シルバリオンは立ち止まるとある方向へ向き、長砲身を装備した両手を前方へ向けた。

「ユーダ、頼むぜ！！」

「てめえに言われるワケもねえ！！」

ユーダの嬉々と攻撃用レバーを握りしめ、モニターを確認する。

その方向とはあのスナイパー機の確認された方向であった。

「行くぜ、高出力光子ミサイル発射！！」

両砲門内から直径８メートルの光弾が同時に発射、弧を描きながら遥か前方へ飛んでいった。

一方、狙撃部隊も上方からこちらに何か光る物体が二つ確認され……。

『あれは……光子ミサイル！？』

『いかん！！すぐに退避するんだ！！』

時すでに遅し、その光子ミサイルの弾道速度はもはや電磁砲級であ

り、振り向く間もなくこちらの域に到達した。

『避けきれません！！』

爆発し、一気に膨張。その範囲は各ミサイルに直径数ｋｍメートルに及び、そこに存在した機体、小型隕石郡とは膨張した光に巻き込まれ、消滅した。

それはレクシー達からの距離からでも十分確認できるほどであった。

『よっしゃ、もう狙われる脅威はなくなった。あとは……』

二人はニィと笑いながら振り向き、残ったサルビエスの部隊を睨み付ける。

“レクシー、ユーダ、あのユニットの弱点が分かったニャ！！”

再びジュネから通信が入り、耳を傾ける。

“あいつの弱点はあの九つの尾だよ。
あれ以外の武装はないから、つまりあれさえ破壊すればもはやバリアだけが取り柄のウドの大木だニャ！！”

『そうか、なら……』

『あのしっぽをなんとかすりゃあいいってわけだな！！』

先ほどの両砲門のからスレイヴよりも１０m長く幅も増量した刀身……まるで太刀な長さを誇る光を放ち、攻撃態勢に移る。

「早くしっぽを伸ばしてこい……ククク……」

対するサルビエスはと言うと自分の部隊を先ほどの攻撃を受けて怒りに満ちていた。勿論、仲間を倒されたことによるワケでなく、自身の持つ崇高なプライドを汚されたという意味である。

『このぉ、調子に乗んじゃねーーっ！！』

“たっ……大尉！！”

頭に血が上り、単機で突進。実に愚かだ、二人の策など知るよしもなく、九つの尾を伸ばしてシルバリオンに狙いをつけ、射出した。

それらは古事記に登場する大蛇の化物『ヤマタノオロチ』のようで、そして生物のようで醜態な金属達の怒涛の勢いであった。

しかし、レクシー達はそれらを目の前にしても、臆するどころか逆に嬉しそうな表情であり、グッとレバーを前に押した――――。

「なん……だとっ……」

それは閃光のようであった。
一瞬でその九つの尾に繋がっていた供給線全てが狙った敵の前で切断されていた。

さすがのサルビエスもこればかりは血の気が引き、操縦レバーを持っていた手を離してしまった。

「なら……トドメと行きますか！！
先ほどのツケを倍に返してやんぜぇ！！」

シルバリオンは後ろへ下がると両手を組み、アデリーン率いる部隊のいる前方へ腕を伸ばした。
その瞬間、両肩の砲身も敵のいる前方へ自動的に調整。

そして、あの両手首の紅い長砲身同士が平行に重なった時、『バチバチ』とスパークのようなものが砲身にほとばしった。

『ヤバイ、おいコモドス！！今だ、あれを使え！！』

焦りに焦っている彼は、コモドスに何か命令を出すが、本人は何かを畏れているのか急に顔色が悪くなった。

“大尉……っ、やはり自分には無理です……”

『キサマァ！！ならホントにお前、絶望のドン底に叩き落とされたいみたいだな！！』

“……っ”

コモドスはガタガタ震える手で、コンピュータパネルの右手前にある『ツマミ』を触り、グッとつまんだ。

『やれぇぇーっ、コモドス！！』

……そしてツマミの方向は真下から真上へ変わった。

『なっ、なんだぁ！？』

『制御が効かない！！ナゼだぁぁ！！』

近くにいたクイスト達が突如、ガチガチに固まったと思いきや、とっさに移動を開始。

アデリーンの目の前に行くと、一機、また一機とまるで盾になるかのように多数の機体が覆い被さっていった。これはまさか……。

「ユーダ！！奴らの動きはおかしいぞ！」

「構うこたあねえ、あんなに固まってもらえりゃかえってやりやすいぜ！！
行くぞ！！全砲門一斉発射！！」

《ズ　ワ　オ　ォ　ォ　ー　ー　！　！》

シルバリオンの展開した両肩、そして平行にした両腕部の砲門から莫大なエネルギー質量を持つ極太の蒼白の光線が前方に向けて解き放たれた。

それが拡散しはじめ、広範囲を包み、喰らいながら、ついにはあの謎の固まったクイストの大群までも……。

《ぎゃあああ……》

まともに直撃し、外側にいた機体は全て完全に粉々に……それが段々内側にも襲いかかり、装甲が消し飛ばされ、粉々になり、コックピットまでも剥き出しにされ、それさえも侵していった……。

……出力が弱まり、段々前方の視界が見えるようになった時、残っていたのはかろうじて残ったクイストの残骸、あの二機、エンリケとアデリーンと何とか射程範囲から逃れたクイスト数機のみであった。しかし、この二機はバリアを張っていたにも関わらず、破られてエンリケは左腕部全体、右足を失い、アデリーンに至ってはコ

ックピットギリギリに行くか行かないかぐらいまでの下胴体と両前腕部がなくなっていたのであった。
もはやどちらも戦闘できる状態ではない。

『くくぅ……、本部隊は戦線離脱する。各機、帰艦せよ！！
コモドス、俺を引っ張ってくれ……おい、コモドス！！聞いてんのか！！』

……しかし本人はそんなところではなかった。

眼から涙をポタポタ落ち、これでもかと言うくらいに手を握り込んでいた。彼は自分のしたことを悔やみに悔やんでいる……。

「俺は……最低で残忍な男だ……っ」
しかし、もはや取り返しのつかないことであった。
自分の上官の命令とはいえ、あまりにも非人道的で非道な行為。

……そして残った機体は急いで後退していく。かろうじてまだ推進装置が無事であったエンリケはアデリーンを身体で押すように去っていった。

「ちい、逃げやがった！！追いかけろレクシー！！」

「いや、単機で追いかけるのはやめよう。リーダーが言ってた通り、孤立はホントに危険だ」

「けっ、これを好機を逃すってんだよ。

このまま逃してまた態勢立て直されたらどうすんだ？」

「あんなボロボロにさせてやりゃあしばらくは出撃無理だ。それに俺らの目的は全機を相手にすることじゃねえんだぞ、あくまでエクセレクターを突破させることだ」

「ちっ……」

周りを見渡すと、味方の数が少ない。先ほどの強襲でこちらも大打撃を受けた証拠だ。
レクシーは額の汗を腕で拭い、安心の息を吐いた。

「ありがとよ、お前が来てくれなかったら全滅だったぜ……」

「へっ、だからお前がしょうもなさすぎたから見てられなかったんだよ」

「……にしても今回、合体してよくここまでいけたよなぁ。いつもなら絶対噛み合わないでわやくちゃになるのによォ」

シルバリオンになるにはスレイヴとツェディックの二機が揃えば合体でき、寧ろこの二機の本領であり、ポテンシャルが凄まじい。
ではなぜ全機がこの形態にならないかと言うと、能力云々よりその操縦システムである。

シルバリオンは見た通り複座式であり、スレイヴの搭乗者は機体の行動制御、ツェディックの搭乗者は火器制御を担当するため、二人

の技量と同調で性能が左右される機体なのである。

つまり乗る二人によっては全く使いこなせないというアンバランスな性能であるため、戦闘員はあまり使いたがらないのであった。ちなみにこの機体を開発したのはあのサイサリスであり、いかにもパイロットより性能面を重視したがる彼女らしい発想である。

「もう合体なぞ二度とやりたくねえぜ。人に力を貸すってのがあんま好きではないんでな」

「ふふっ、ユーダらしいぜ。まあ、こんな長話してもしゃあねえや。不利な仲間のどこに助太刀に行く。分離するか？」

「けっ、とかいって分離してまた危なくなったらどうすんだ？俺はもうゴメンだぜ」

「キヒヒ、だな。『近くにいる全員、今から圧されている仲間の援護にいくぞ』」

“わかった！！”

レクシー達は次の戦場へ向かっていった――。

一方、あのラクリーマは相変わらず一人でドンパチやらかしていた。

「……敵さんに挨拶してくっか？」

目の前のクイストのコックピットの前に立ち。力ずくでハッチをバリバリ剥がし始め――。

「よう、ご機嫌ですかなァ？」

「ヒィィィィっっ！！」

ついにコックピットに侵入してパイロットとご対面。
分厚い宇宙服とヘルメットを着用していてどんな顔をしているのか分からないが相手は混乱し、挙動不審となっている。

「挨拶してやんよ、ホレ」

《ギュイイイッ！！》

……コックピット内は肉がグチャグチャに掻き回される生々しさ、骨がすりつぶされるような鈍い不協和音と共にパイロットの血液と思われる青い液体の海と化した。
それをまるで待ち望んでいたかのように歪んだ笑みを繰り出すラクリーマ。
段々、やり方さえも歪んできていた。

瞬時にコックピットから離れ、通信機に手を当ててこう叫んだ。

「各機全員集合、フォーメーション攻撃を開始する！！」

“了解！！”

合図と共に、各機体は彼のいる方向へ一気に集合。早急にスレイヴは全方向に向くように４機で輪を作り、腕部で組み合う。その状態を一段、また一段と縦一列に重なり合っていく。

ツェディックはその最上、最下に移動し、こちらも全方向にむくように輪を形成していった。

「なっ……なんだこれは……」

その光景を目にした連邦のパイロット達は度肝を抜かれた。アマリ―リスの機体が果てしなく縦一列に重なりあって……まるで巨大な塔を思わせるフォーメーションをとっていたのであった。

最上部にラクリーマが到着し、真上にブラティストームを自動で切り離し、その場で制止。瞬時に内蔵された自律回路が発動、レーザー砲を突出し、四方に向けた。

これで準備が整った。その孕んだ狂気と熱さをもった笑みと共に！！

「行くぞ！！全機、全方位一斉発射ァァっ！！」

《――――――――――――》

命令から数秒後にはこの宙域全土は蒼白光によって支配された。

全長一キロ以上はある縦一列、そして全方向に配置された全機体の全砲門、ブラティストームのレーザー砲から放たれた光線がこの周辺の連邦ユニットへ無差別に襲いかかる。

「ウオォォォオオ！！アアアアアアアっっ！！」

感情が高ぶったラクリーマが叫びに叫ぶ。怒涛の勢い、そして……。

“……”

ヴァルミリオンの中央デッキ内ではもはや言葉を発する者はいなく、誰もが唖然としている。

奴らの戦法がやりたい放題過ぎて、こちらのペースが掻き回されているように見受けられた。

「くぅ……ユピテルス砲はまだか！！」

「今９５％です。もう少しでチャージ完了します！！」

「早くしろ！！何か嫌な予感がする、その前に本作戦を実行しなければ……」

「提督……？」

彼は感ずいていた。敵艦の主砲らしき攻撃がないし、まだ奴らは何か隠していると。
その考えは的中していた。

「全機、解散。また集団行動をとれ！！」

先ほどの一斉攻撃が終わり、フォーメーションを解除。
あれだけの光線を無差別に放射したら、さすがに敵もただでは済んでいるワケがない。相当な被害を受けていた。

「サイサリス！！いいぞ、リミッター解除だ！！”

“……いいんだな本当に！？”

「ああっ、これはもはや俺らのペースだ。さらに奴らを一網打尽にしてやらぁ！！」

“よし！！なら頑張ってこい、行くぞ！！”

サイサリスは持っていた画面パネルを素早く動かして、真ん中を力強くタッチした。

「リミッター解除！！」

ログハートの突起物から膨大の蒼白い粒子が吹き出し、内部の機械がさらに活性化した。

「行くぜ！！」

……瞬間、彼は消えた。そのままの意味でその場所から姿を消したのであった。
一体彼はどこに……。

同時刻、ここから艦隊方向、約２８０ｋｍ離れた宙域にとどまっていた敵部隊。その数は６００機。
中隊クラスだと思われる。

前方では仲間が圧されて今度は自分達の番であると感じ、移動開始の命令を待っていた。

だがその時、

《ドワオォォ！！》

この部隊の中から複数の機体が爆発を起こし、全機が警戒態勢へ移るが、さらに何機、何十機と一瞬で大破されていく。
まるで導火線に火がつけられたかのような光景であった。

センサーには反応しない、姿が見えない。敵がいるとは思えないの

に一秒一秒で機体が破壊されていくのだから、対処のしようがなかった。

「ん……!?これは!!」

この部隊の隊長がふとモニターを確認したら小さい何かが映っている。拡大するとそこにいたのは……あのラクリーマであった。

「ああっ!!いつの間にいたんだ!!
全機、あの男がそこにいるぞ!!」

《!　!　?》

部隊全員がモニターを一斉に確認した。
あの要注意人物が自ら、部隊の中心部で仁王立ちしていたのを確認した。

「全機、攻撃開始だ。なんとしてもここで食い止めよ!!」

すぐにラクリーマへ狙い定めて攻撃を開始。周りを気にせず光線を彼一人だけに撃ち込んだ。

しかし、彼はまたその場から消えて多数は光線はすれ違って飛んでいき、その軌道上にいた機体に直撃する。

「なあ！？」

彼のいた場所から前方１２０m地点のホルス、クイストの計5機が数秒で胴体が縦と横に真っ二つとなり、その端っこで右手の手刀で振り切っている姿のラクリーマが。

そこから彼はなんと遥か上方へ急発進し、普通の人間には……いや、あまりにもムチャクチャな機動力で宇宙を駆け巡り、隊員全員を目を奪った。

それはあの『ＵＦＯ』を彷彿させる慣性の法則を無視した急制動、急旋回の幾科学的運動であった――。

敵を翻弄、掻き回し、部隊全員が見える位置に一瞬で移動、そこでピタッと立ち止まりログハートを後ろへグッと引き込んで殴る体勢へ持ち込んだ。

「ヌオオっ！！」

全力で拳を部隊にいる方向を突きだした――。

《ズ　ギ　ャ　オ　オ　ォ　ォ　ォ　―　―　―　―　！！！》

拳から放たれた強大なエネルギーの衝撃波が拡散しながら前に広がり。

“ウワアアッ……！！”

中隊規模の大軍を一気に直撃、一瞬で消し炭に変えた。
しかしそれだけに留まらず、さらに範囲を拡大し、その先にあるのは左側から二番目に駐留していたグラナティキ級５番艦……。
「艦長、凄まじいエネルギーの波動がこちらに向かってきます！！質量は……『ランクＡ大』！？」

「何だとォォーー！？艦内の総員を退避させよ！！」

「間に合わなませ……うぎゃああっ！！」

そのエネルギー波動はついにグラナティキ級本艦さえも覆い喰らいブリッジから後ろへ向かって爆破、艦内にいる何万という数の乗務員が逃げることも出来ないどころか、それを察知すらしていない者もいたが、非情にも全部爆発に飲み込まれていく――。

装甲が原子レベルまで分解、艦自体が粉砕されて形がなくなっていき、そしてそのエネルギーと共に全てが消し飛ばされた――。

「グ……グラナティキ級５番艦……Ｙ３５１方向、１２００ギャロ方向から発生した強大なエネルギー波によって反応が消滅……しました……」

《！　！　？》

その事実が矢のようにヴァルミリオン艦内に突き抜け、激震と絶望

を与えさせた。

「いっ、今すぐそこのモニターを映せ！！」

焦り口調で命令、オペレーターも急いでモニター視点を変えた。
そこにドヤ顔でガッツポーズを決めるラクリーマの姿があった。

「ああ……まさかあの男がぁ……」

見る者、知る者全てを震撼させた。しかしそれは連邦側であり、アマリ―リス側にしてみれば相当の吉報である

『おい、リーダーが戦闘艦一隻を一人で破壊したとよ！！』

『なんて人だ！！やっぱラクリーマさんには敵わねえや♪』

グラナティキ級という超巨大な戦艦をたった一人の男によって消滅させられたという前人未到の事実が各組織に伝わった。

連邦からしてみればまさに絶望、アマリ―リスからしてみれば、希望であった。

エクセレクターのオペレーションセンター内のモニターにはそのラクリーマの勇姿を追っており、のび太としずかは彼に恐怖心さえ抱いていた。

「ラクリーマ……あんなに強いなんて……」

「宇宙にこんな人がいるなんて……なんて恐ろしいこと……」

近くにいたオペレーターの一人が二人の横に立ち、モニターを見上げながら腕を組んだ。

「二人とも、なんであの人がこのアマリーリスのリーダーをしているか分かるか？」

という質問をし、二人を悩ませる。

「えっ……もの凄く強いからじゃないですか？」

「まあそれもあるな。だがな、実際あの人より身体能力が優れる奴なら実は戦闘員の中でもいるぞ」

「えっ……なら生身で宇宙に出られることですか？」

「う～ん……それも間違っちゃいねえがな。それよりも大事なことがあるんだよ」

「大事なこと？」

「なっ……何ですか？」

モニターには暴れに暴れまくっているラクリーマの姿があった。

「実際あの人、自分で立てた作戦自体守らねえからな。とぉにかく一人で先陣に突っ込んで孤立するタイプだからよ。これはリーダーとして見れば完全に失格だよ。

だけどな、ラクリーマさんを見てて分かるんだよな、『負ける気が

しねえて』な」

確かに今はログハートを装着しているから強いからであって、装着していなければただのものすごく強い人間止まりである。それで先ほどの宇宙戦闘に出ていれば間違いなく戦闘ユニットに握り潰されてしまうであろう。

それに敵を見つけるとすぐさま襲いかかる獣のような本能である。もし敵側に頭のいい人間がいて、罠を仕掛けていたら絶対に引っ掛かるタイプであり、これは組織のボスとしてはあまりにも相応しくない。しかし彼にはそれを補えて余りあるのはまさにオペレーターの言ったことであった。

「銀河連邦という俺らより明らかに強い組織を前にしても全く屈しない、臆しないその屈強な心。

そして相手がどんなに強かろうと力ずくでねじ伏せる無茶苦茶さ。

だからあの人見てるとどうにかなるってな。

あの人にはそういうモノを持ってる。俺ら頭の悪い奴らにとってのカリスマ的存在さ」

「「……」」

――もはや誰も彼を止められる者はいなかった。目に見えた機体を片っ端から攻撃し、無惨に沈めている。目に見えた機体を片っ端から攻撃し、無惨に沈めている。しかし、彼の顔には人間性など全く感じられないほどに酷く歪んでいた。

「グアァァっ!!」

あの戦闘訓練に見せた凶暴さがさらに磨きを掛かったようである。
これがラクリーマの真実の顔……即ち仮面を脱ぎ捨て本性を露にした『狂暴にして狂悪』であった。
《ケアァァーーーハハハハハっ！！！
ギャアアアアアッーー！！！》

叫ぶ、声が渇れるくらいに叫ぶ。食欲に餓えた野獣がさらに牙を向ける。なんて本当に楽しそうだろうか……こんなラクリーマは戦闘員でさえみたことのない表情だ。

そして開発エリアではセルグラードの調整を任せて必死で働く助手達を反対にただそのモニターを見て眺めたまま動かないサイサリス。もはや我慢できず助手の一人が彼女の方へ向かった。

「サイサリスさん！少しはあなたも手伝ってくれませんか……え？」

彼女は震えている。何か彼女の様子がおかしいことに気づき、もっと近づいてみると何か独り言を喋っていた。

「スゴい……これだよォ……あたしが求めてきたのは……。
ラクリーマが持っている原始的な破壊欲求、殺戮欲求、身を凍りつかせるほどの孕んだ狂気……ああっ……見ただけでゾクゾクする……。

快感すぎて……マジでアソコが濡れてきたぜ……」

「……」

見てはいけないものを見てしまった。

アブない発言を繰り出しながら彼女は絶頂を迎えて完全に表情が昇天してしまっている。

次第に右手の指を自分の股間に持っていき、偲ばせて『ジュクっ』と何やら変な音を立てている……。

それを目撃してしまった助手は寒気と同時に気持ち悪さを覚えてしまう。

“こういう人なんだ……”

今、そう考えていた。

「ん？」

サイサリスは横にいる助手に気づくと、これでもかと言うくらい睨み付けて、

「オメエ、何サボってやがる！！一刻も早くセルグラードを調整しろゴラァアアア！！」

「ヒイイイイッ！！」

彼女はビビって逃げる彼を追いかけていく。一体こんなときに何をやっているのだろうか……。

……

そしてついに。

「ユピテルス砲、エネルギーチャージ完了しました！！」

「……よし、直ちに主砲発射に移れ！！」

“了解！！”

ヴァルミリオンのエネルギーチャージがついに完了。すぐさま主砲展開へ移行しはじめる。

艦首が上下に割れて、その内部から口径がエクセレクターのリバエス砲と同等の丸型の砲門が姿を顕した。

「目標、前方７２００ギャロに位置するアマリ―リス艦。射程範囲内にいる全部隊に退避命令！！」

「了解！！『全部隊に命令する、これよりヴァルミリオンは主砲発射へ移行する……」

カーマインは耳に付けている通信機にスイッチを入れた。

「エミリア、聞こえるか！？」

“はい提督！！”

「まもなく主砲を発射する。お前たちも直ちに準備だ！！」

“了解しました!!直ちにイクスウェスを起動させます!!”

「頼んだぞ、全てがお前達にかかっている。だが絶対に無理をするな!!」

彼女との通信を切る。息を飲んでモニターを静かに見守っていた。

（頼む、成功してくれ……。もはや多大な被害を受けた私達の一番の賭けだ。エミリア、あの子達……頼んだぞ、そして友達を絶対に救ってやれ……）

彼、いや全隊員の望む考えは全て一致していた。

これで戦況を覆してほしい、これで全てを終わらせるきっかけとなってほしいと。

誰もがそう願っていた。

◇ＰＡＲＴ．４０　発進、５人の勇者達！！

そしてイクスウェスの格納庫内。エミリア、ミルフィ、ドラえもん、ジャイアン、スネ夫の５人は互いに向き合っていた。

「いよいよ執念場ね。みんな準備は良いかしら？」

“……”

エミリアがそう言うが４人は沈黙していた。

「ホントに……助けられるのかなぁ……」

スネ夫がいつものように弱気である。彼ならまだわかる。

「……あんな無茶苦茶すぎる奴の前を通っていかなくちゃダメだし、もし追ってきたら……」

ドラえもんまで不安の声が。

しかし、目の前でラクリーマのあんな強さを見せられて何も思わないが寧ろおかしかった。

「みんなしっかりしろよ！！のび太達を助けたくないのかよ！？」

「じゃ……ジャイアンだってそんなこと言うわりに手が震えているじゃないか！？」

強気で励まそうとするジャイアンもやっぱり怖いのであろう。

「大丈夫。このイクスウェスの最大速度なら振りきれるハズよ」

「けど……エミリアさんは怖くないの？もしかしたら死ぬかもしれないんですよ！？」

スネ夫の問いにエミリアは口を塞いでしまう。

「……スネ夫君の言う通り、確かに怖いわ。正直な話こんな悲惨なことになって……わたしも逃げ出したいくらいよ。

けどね、あたし達の任務が出来るだけ成功しやすいように沢山の隊員達が犠牲になったの……。

いかなければ死んでいった仲間達の苦労が水の泡よ」

「エミリアさん……」

「あなたたちだってやっと友達二人が無事だってことがわかった。ならあとは救い出すだけよ、そのために今まで頑張って来たのならここでやらなければいけないのよ。チャンスを棒に振ることだけはやめて、いい？」

“……”

「ミルフィ、アマリ―リス艦内に侵入の際、サポートをお願いね」

「うん……」

ミルフィまであまり元気ではなさそうだ。そんな四人に見かねたエミリアはついに……。

《いつまでもウジウジしてんじゃないわよォ！！》

“！　！　？”

キレて怒鳴り声を張り上げる彼女に全員がビクッと応えた。

「……シールド持った？ちゃんと各装備を所持した？

ちゃんと自分で確認してから搭乗してね！！」

ぶっきらぼうに口調で言うさま、すぐにイクスウェスの方へ向おうとするエミリア。

しかし彼女は背を向けたままサングラスを外し、腕で目をゴシゴシ擦る仕草をする。

それを見た四人は感ずいた。泣いているということを。

考えたら彼女は一番苦労している。

自分達の面倒、そして護衛と、この特別編成隊の責任者を受け持つ彼女は今、どれだけの重圧、責任感を感じているのか計り知れない。

さらに先ほども隊員達の最期を前にしながら涙する姿もあった。

……彼女はもう精神的に限界なのかもしれない。しかし、それを無理矢理押し潰して任務を遂行しようとしている。

彼女でさえ辛いのに自分達が不安ばかり言っていれば一番立場が上である彼女からすれば怒りたくなるのも当たり前だ。

（なんか……酷いことしちゃった……）

四人とも反省している。

……そんな気まずい雰囲気のまま、全員がイクスウェスに搭乗し、各座席についた。

「各人、ベルトを固定！！ミルフィ、今すぐ安全なルートを検索して！！」

「了解」

あの偵察機より空間が広く感じる操縦室では操縦席にエミリア、助手席にミルフィ、後ろの各席には当然、あの三人が着席する。

「ツインハイブリッド機関、正常に起動……。各機能、各武装……問題なし……」

とてつもなく険しい目付きで各ボタンとパネルを作動させるエミリアとその横で必死でコンピュータを動かすミルフィ。

とてもじゃなく声が駆けられない。

ついに機体が起動。室内がライトアップし、中央の四角い操縦レバーをグッと握り込み。息を大きく吸った。

「あとは主砲発射を待つだけ……。それまで待機……」

……

《本艦前方より膨大なエネルギー反応確認……。ランクＳ級攻撃と予想。直ちにエクセレクター・タイプ２へと移行する》

ユノンはすぐさまヴァルミリオンの主砲攻撃を感知、すぐさま分離、合体変形へ移行を開始。

甲羅状態を解除して、元の形態に戻すと三等分に分離を始め、今度は一番後ろの部分が最前列へ移動、そのまま合体へ。

最前列に移動した部位の側面がまるで液体化したかのように左右へドロドロ伸びて、あたかも両方とも１００ｋｍ以上はある巨大な主翼のような形状へ変化させて硬直。

後部も同じように巨大な尾翼に変化させ、その異様な姿を連邦に見せつけた。

《前方にエネルギーを収束、Ｓ級攻撃の防御態勢に移る。

速やかに敵攻撃射線上から味方を退避させよ。もう一度繰り返す、これは敵艦のＳ級攻撃である》

「りょっ、了解！！」

オペレーターはすぐに戦闘員達に退避命令をかける。

『Ｓ級攻撃だと！？なら早く離れねえと！！』

『全機、出来るだけ遠くまで離れるんだ！！でないと通過時の余波だけでも消滅するぞ！！』

戦闘員が迅速に八方へ散開し、離れていく。

「敵艦、また別形態へと変形！！さらにエネルギー質量がさらに増加！！

全敵部隊が次々と射線上から四散して離れていきます」

「……気付いたか。しかし、こちらにとっては好都合だ。

よし、ユピテルス砲発射用意！！」

「了解！ユピテルス砲発射態勢！！

ＮＰエネルギー、出力１００％、セーフティ解除！！」

ヴァルミリオンの前部から展開された巨大な砲身内からリバエス砲

のように、エネルギーの粒子が少しずつ前へと押し出されている。

エクセレクターでも来るべき連邦最大の主砲撃に備えて、各員が衝撃体勢に移る、それはのび太としずかもまたしかり。

しかし鼻から上すべてが金属機械と化し、あの特徴的な緑色の長い髪さえも完全に機械に組み込まれてもはや、異形と化しているユノンは歯を剥き出して不気味と笑止していた。

《クックックっ……さあこい。我が策に落ちていることも知らずに……》

エクセレクターの艦首……いや、巨大な円クレーター状の砲門から高密度のエネルギーの粒子を放出、壁の形に展開した。

連邦の予測通り、バリアを展開し、こちらの主砲を待ち構えいる模様だ。

「……敵艦、ＮＰエネルギー障壁を前方に展開。予測通りです！！」

カーマインは一呼吸置き、指をエクセレクターに鋭く指して高らかに叫んだ。

《行くぞ！！ユピテルス砲発射！！》

彼が叫びと同時にその封印が今、解かれ……。

《〜〜〜〜〜〜！！》

砲身から放たれた、グラナティキ級、ヴァールダイト級をも遥かに上回る莫大な質量のエネルギー粒子が全て放出された。

マスカットのような薄い緑色の、あたかも大津波が押し寄せる如く、直線的に怒涛の勢いで突き抜ける粒子がエクセレクターに迫っていた。

《敵艦Ｓ級主砲接近。なおバリアを展開しているが各員、衝撃体勢及び、失明を恐れにより直視を避けよ》

気の利いた彼女の指令にモニターを見ている全員が目を瞑り、身体を固定させ。ついに！！

――エクセレクターの展開したバリアにＳ級エネルギーの塊が直撃。同質量の同エネルギー同士にぶつかり合いが空間自体を深く歪み、そしてその余波で周辺に漂流する何キロと言う巨大な隕石郡が次々に粉砕されていく。

“くっあああーーっ！！”

生じた強烈な衝撃波が艦内全てに襲いかかり、左右に大きく揺れ、翻弄されるも彼らは必死で耐えしのぐ。

「きゃああっ！！」

「うわああっ！！」

のび太としずかは揺れに耐えきれずに共に倒れこんだ。しかし、瞬間！！

「キャア！！エッチィ！！」

「ぶはっ！！」

彼の手はなんとしすがの胸に押し当てていた。
ワザとではないのだが、取りあえずビンタをかまされた。

――互いの膨大なエネルギーは相殺され、ヴァルミリオンから放たれたエネルギーは消え、エクセレクターに何の決定打をつれれなかったが、同時にバリアも相殺されて完全に消滅した。

《……バリア相殺……エクセレクター……タイプ1へと……移行する……ううっ……》

ユノンの様子がおかしい。
今にも倒れそうなほどに疲労しきって表情が歪んでいた。

のび太達を異変に気づき、彼女の真下へ向かった。

「ああ……ユノンさんが……キツそうな表情だ……」

「どうしたのかしら……」

すると何人かが二人のいるところへやってきて心配そうな顔で上を見上げた。

「ユノンさん！大丈夫ですか！！」

「ここは解除した方が……」

しかし、ユノンは歯ぎしりを立てて彼らをぐっと睨み付けた。

《黙れ……そんな心配は無用だ。オマエ達こそ何をしている……？すぐに自分の持ち場に戻れ！！》

怒りを込めた声が辺りに響きわたり、彼らに体に突き抜けた。

「ああ……」

彼らは彼女の言われた通りにすぐに自分の席に戻っていく――。

「ユノンさん、一体どうしたんですか！？」

しずかが近くにいた女性オペレーターに尋ねると、重い口を開きこう解いた。

「デストサイキック・システムはね、使うだけでもユノン自身に大きな負担がかかるんだよ……。」

「ええっ！！」

「あのシステムはかなり危険でね。
少しでも精神が乱れるとあの機械が容赦なくさらにユノンを取り込んで二度と元の姿に戻れなくなってしまうんだ。
そして……精神崩壊まで起こしかねないという『いわくつき』で……」

その言葉がしずかの体に電撃が走ったような衝撃が襲い、一瞬、寒気がおそった。

「……だからこのシステムは事実上、アマリ―リス全員の中で扱えるのはユノンただ一人だけなの。冷静で……作戦時はまるで人形のように無感情で、何事にも動じない彼女ならこそのなせることよ」

彼女はため息をつき、目を瞑る。

「前ね、ユノンが使ったことあるんだけど、初めてってこともあったしあまりにも負担がかかりすぎて解除したらその後、丸2日寝込んじゃって……。
今回は……助かっても一週間ぐらいはいきそうね……」

「いっ……一週間っっ！！？」

これではもし地球へ帰れても彼女と別れの挨拶すらできない。
――しずかは悲しくなった。やっと仲良くなれたのに……。

落ち込みかけたしずかに彼女は気を察して、静かに肩を置いた。

「あんた達、リーダーとユノンに感謝しなさいね。
あの人ら、身体を張ってまで二人を地球に帰そうとしてるんだから
落ち込んでちゃ失礼よ」

しずかはモニターを見つめる。ラクリーマはもちろん、戦闘員達はただそれだけのために、自分達を地球に送り帰すだけに命をかけて戦ってくれている光景を。

――はっきり言って馬鹿な話だ。あらゆる悪の限りを尽くす組織がそんな善行をすること自体あり得ない。

しかし、現実に彼らがこうしてくれているのだ。もしかしたら、彼らの唯一の良心が生んだ行動なのかもしれない。

しずかはコクッと頷いて決心した――。

エクセレクターは休む間もなく分離を開始。
各部位が繰り上げる形でがまた直列へ並び、合体態勢へ。

《エクセレクター、タイプ1へと移行する。すぐさまエネルギーチャージへ移行する……》

すぐさま合体。最前部がモーフィングで美しき女性な顔へ変形、両舷からレーザー砲の役目を担う手の形をした砲門へと変化させた。

……

同時系列。ラクリーマは主砲で離脱した敵機を追いかけ回し、撃墜するという無茶ぶりをしていた。

しかし連邦はもはや敵わないと察知し、ラクリーマを振り切り、エクセレクターへ突貫を開始。。

バリアが解除された以上、あとはまたバリアを再展開されるまえに近づくだけであった。

しかし、目にした獲物は絶対に逃がさない思考の彼はすぐに追い抜くクイストの大軍を超機動で追跡し始めた。

「いかせるかァーーっ！！」

クイストの大群は従来の推進力より大きく上回っている。

脚部が無く、代わりに巨大な推進ブースターが取り付けられていて、背中にも戦闘で見られなかった大型の推進機関が取り付けられている。

これはクイストのバリエーションの一つ、『長距離航続兼、高機動型』であり、戦闘よりも戦線突破を目的とした形態だ。

その機動力だけならシルバリオンに匹敵するかもしれない程だが、リミッター解除したログハートの機動力には勝てるハズもなく数秒で追い抜かれてしまった。

そのスピードのまま彼はクイストの方へ向き、ブラティストーム、ログハートの各握り拳を縦に重ねて神経を集中させた。

「ムオン！！」

重ねた両手に膨大なエネルギーが収束、次第に球状の光が両拳に纏った。

「蒸　発　さ　せ　て　や　ら　ァ　！　！」

《ド　ワ　オ　！　！》

両拳から球状の光が放たれ、前方の軍団を無惨にも薙ぎ払いながら飛んでいく。一見、光子ミサイルに似ているが、これは弾道が直線型である。
光子ミサイルは曲線型であるため分類できない。
言えるなら『エネルギー弾』であった。

しかし、そのエネルギー弾は消える事なく超高速で突き抜けていき、

「前方から巨大なエネルギーの塊が飛んできます！！」

「なに！！？」

……軌道上にあったのは先ほど消滅した５番艦より右側に駐留していたグラナティキ級の上位艦、『ヴァールダイト級４番艦』……。

「すぐにバリアを展開！！急げ！！」

艦全体にＮＰエネルギー粒子で構成させた障壁が覆う。
どうやら連邦で使用されるＮＰエネルギーの粒子は全て緑系統色で発生するみたいだ。
これも使用する装甲材、金属とエネルギーの反応で生じることなのである。

――エネルギー弾は一定の大きさに保ったまま、超高速で飛来し、艦のバリアに衝突。

《カッ――――！！》

瞬間、金色の閃光と共にエネルギー弾が炸裂、強烈の光と衝撃波が艦と周辺に拡散した。

“目が……見えない！！”

ブリッジにいた艦長含む、その他の乗員はその光を直視してしまったために目を押さえてうずくまった。

そして周辺に艦の護衛していた各戦闘ユニットの部隊も衝撃と閃光が襲い始め――。

『何も……見えない……』

ヘルメットをかぶっているが役立たず、パイロットの目を容赦なく

襲い、開けられなくした瞬間、

『ひゃあっっ……』

二次被害として衝撃が襲い、機体が次々と爆発、大破されていった。

――バリアの方は質量がエネルギー弾と同程度であったため、徐々に相殺されていく。しかし、エネルギー弾もそれに伴い縮小していき――。

消滅。バリア諸々相殺しただけでさすがに艦には何の影響がなかった。が、実はそれよりブリッジにいた全員が異常をきたしていた。

「ぷっ……うげえっっ！！」

「助けて……何も見えない……」

ブリッジ内は悲惨であった。あの閃光にもたらされたのは未だ、目を開けられずその場にひれ伏せる者、強烈な吐き気を催し、その場で嘔吐する者、頭痛を発しうなだれる者……ほぼ全員が異常を訴えていた――。

そんなことが今、起こっているのは張本人が知るよしもなかった。

いや、知ってもこちらにはかなりの好都合である。

ラクリーマは次第に苦渋の表情となっていく。その理由とは。

「ちぃ……そろそろ右腕がやべぇ気がする……」

いくら無重力だからといってもログハートを酷使し続けた彼の右腕が限界に近づいていた。

（多分……肋骨何本かはもういっちまってる……身体中が変な感覚だ）

『ＢＥ－５８』を打ち込んでいるので痛みや感覚などないが、本当なら彼はもはや闘うどころか動くことさえも危険な状態であった。常軌を逸脱した高速戦闘が初めから彼の傷ついた体に負担を掛けすぎていた当然の結果である。

しかし、ついに待ちに待った連絡が通信機から受信された。

“ラクリーマ、セルグラードの調整が終わったぞ！！今、クイストに積んで持って行かせている！！”

「やっとかぁ！！遅いぜ！！」

“待ってな！！奴らにもっと絶望を与えてやれぇ！！”

――そして、一機のスレイヴが彼に近づき、軽く握りこんでいた巨大な手から、コンテナを取り出しラクリーマへ差し出した。

『リーダー、持ってきやしたぜ！！』

「おう！！ありがとよ！！」

クイストは去っていく。

コンテナが自動的に開き、中から姿を現したのは開発エリアでログハートの隣で同じく巨大なガラス菅で封印されていた巨大な大砲であった。

全長３．６ｍ、口径３００ｍｍの何ともバカでかく、とても人間では扱えなさそうな代物であった。

「でっ……でけえ……こんなのを俺が扱えってか……」

ラクリーマでさえ困惑している。そんな中、サイサリスから通信が……。

“届いたようだな。早速使い方を教えるぜ！！
まずセルグラード本体の後部に回って密着させな。砲身の両側面にグリップがちゃんと握って身体と砲身を固定しろ！！”

ラクリーマは言われた通りにセルグラードの後部へつくなり、身体を密着させ、腕を真っ直ぐ伸ばし、左右の『とって』を同時にグッと握り込んだ。

すると両グリップの少し後ろの部分からあのブラティストームから発生した触手のようなチューブが出現、右側はログハートの炉心部

に、左側はブラティストームの炉心部へと伸び、連結した。

“この武器はブラティストーム、ログハートの炉心、そして本体の増幅炉を連結することにより初めて使える。

チャージに少し時間がかかるが我慢しろ”

各炉心が一気に活性化、全エネルギーをセルグラードへ送りこんでいく――。

……

そして、ついに作戦を決行する時がきたエミリア一行。

モニターには全てを託すような眼差しを送るカーマインの姿があった。

“エミリア、アマリーリス艦のバリアが消滅した。奴らがまたバリアを展開する前に今すぐ発進だ!!”

「了解、これよりエミリア・シュナイダー大尉以下、5名の者はアマリーリス艦の侵入任務を開始します!!」

“……よし。全員、作戦前に私の話を聞いてくれ!!”

ミルフィとドラえもん、ジャイアン、スネ夫はすぐにモニターを注目した。

「……まず、地球からきた君たちに謝りたい。
こんなことに巻き込んでしまった私を許してくれ……いや許されるハズなどない。
……これは命がけの任務である。下手をすれば君たちまでもが……」

彼の暗い表情を見る限り、かなり責任を感じている様子だ。

「しかし……どうかエミリア達に力を貸してやってくれ。
これは私の、いやここにいる全員の頼みだ」

「「「カーマイン提督……っ」」」

「これは今作戦最大の任務だ、失敗は即ち今作戦全ての失敗を意味する。
だがドラえもん君、
君の未来の道具があれば……必ずや任務遂行できると信じている。
そしてその使い方を一番よく知っているタケシ君、スネ夫君、君達の力も必要なのだ!!」

とてつもなく信頼を置かれ、段々自分達の心が奮い起こされていく。

「……分かりました!!僕達に任せて下さい、必ずエミリアさんの役立てるように頑張ります!」

「ここまで来た以上、やるしかないぜ!!
のび太達を救って、あの悪党を懲らしめてやろう、なあスネ夫!!」

「うん！！」

三人の力強い声が決意を固くまとめる証拠となった。

「……頼んだぞ君達、それにエミリアとミルフィ、これは直属の上官としての話だ。

しつこいかもしれないが……絶対に無理をするな！！そしてこの子達をカバーしてやってくれ、いいな！！」

「「了！！」」

「なら……健闘を祈る。生きて……また会おう！！」

その言葉を最後にモニターは途切れた。

「……発進するわ。各人用意……」

「エミリアさん！！」

突然ドラえもんが彼女を呼び止め、すぐに振り向く。

「エミリアさん……さっきはごめんなさい。あんなに不安な声ばかり洩らしたり、ショボンとしたり……。だけどもう泣き言なんか言いません！！」

彼は深く謝罪し、それにつられてジャイアン、スネ夫も、

「俺たち、絶対にエミリアさん達を守ってみせる！！

そしてエミリアさんの辛い思いから救ってあげたいんだ！！」

「ジャイアンの言うとおりだよ。ドラえもんの道具があればどんな奴でもイチコロさぁ！！」

エミリアは軽く頷き、いつものような優しい笑みで三人を見つめた。

「……あたしこそごめんなさい。あなた達は本当なら関係ないのに無理矢理付き合わちゃった上にあんなに怒鳴って……。

大丈夫、あたしもあなた達を全力で守ってみせるわ、私からすればあなた達は守るに値する大切な人達よ」

「アタシも突入したらこの機内から全力でサポートするヨ！！

これ以上、奴らの好き勝手にさせないんだから！！」

……これで5人の意思は再びまとまり、頑なに強い決意をモノとする――。

「発進するわよ！！各人ベルト固定しっかりできてる！？」

“大丈夫です！！”

「ミルフィ、安全な進路を算出した！？」

「ＯＫヨ！！もう既にイクスウェスにインプットしてあるわ！！」

「了解！！」

エミリアはモニターを開くと画面上にはヴァルミリオンからエクセレクターまでの確定された進路を詳しく表示されている。

それを確認したのに、自動的に前方がハッチが開放、目の前に宇宙空間が広がった。

「ＮＰエネルギーチャージ完了、プラズマ反応エネルギーチャージ完了、ツイン炉心オールグリーン――！！

エミリア・シュナイダー大尉以下５名の特別編成隊、及びイクスウェス、発進します！！」

《ド　ン　ッ　ッ　！　！》

ついにカタパルトから射出され、宇宙空間に飛び出したイクスウェス。

「対衝撃保護用ＮＰエネルギーフィールド展開。

目標……７８００ギャロ、ＸＸ８８方向のアマリ―リス艦！！」

急旋回で方向を確定させ、機体全体に緑色のエネルギー膜が発生、包みこんでいく――。

「イクスウェス、ただ今発進しました」
「うむ……」
カーマインにその旨を伝え、モニターに移る彼女らの乗るイクスウェスをまるで我が子供のように温かい目で見守っていた。
（頼んだぞ。５人の勇者たちよ……）

◇ＰＡＲＴ．４１　逆転

……

時間は遡り、ラクリーマの要求を応じるか応じないか決断を迫られていた時のことである。

中央デッキでは、選択に迫られつつも疑問視されていることがあった。

「……これはどうもおかしい。彼らの友達があんなに元気だなんて……」

「しかも……表情を見る限り怯えているどころか恐怖のひとかけらさえ見受けられなかったようですが……」

怖がってなく、むしろあの表情は状況を全く理解していない様であった。

そしてあの三人もその話題についてコソコソ話をしている。

（ドラえもん、どう思う？）

（う～ん。エミリアさんの言うことが本当ならとてものび太君達に何の危害を及んでいないとは考えられないけど……）

（あの男の話だと手を出していないっていってたよ。

何か裏がありそうだね……）

一方、大人組も色々と考察している最中であった。

「もしかしたら……奴らはあの二人を殺す気ないんじゃ……」

「……ならなんでわざわざこちらに出向いてきたんだ。

あの二人を人質として捕らえたんじゃないか？」

「そもそもアマリーリスは何のためにここにきたのかが分からん。

地球侵略などと予測したがそれはあくまで我々の予想の範囲だ。それに奴らも我々の存在を感知していただろう。なのになぜ危険を冒してまで……？」「……ますますワケ分からない」

……憶測ばかりが飛び交うデッキ内。

――全員の言うとおり、確かに不自然で不気味である。

「全員、静まれ！！」

またもやカーマインの一声で一蹴された。

「我々はそんなあてのない考察を追求する暇などない。

考えることはアマリーリスの要求を飲むか飲まないかだ！」

“……”

またもや全員が沈黙する。判断が難しいトコだ。

“カーマイン殿、いかがなさいましたか？”

通信を通して別艦の艦長たちまでが現れる。
彼らにその先ほどのやり取りを詳しく説明した。

“……奴らも考えましたな。人質を使うとは……”

“しかし最終的には決めなければならない。
私自身はその地球人の子供達を見殺しにしたくない……”

“だが、奴らをみすみす見逃せばそれこそ大変なことになるぞ！！”

他の艦長もここにいる隊員達と同じ意見を述べている。

「皆さん、落ち着いてください。
時間があるわけですから全員で最良の選択を考えましょう」

……そんな中、意外にもスネ夫がこんなことを言い出した。

「……カーマイン提督、ふと思ったことがあるですが……」

「……スネ夫君？言ってくれ」

「もしかしたらなんですが……あの悪の組織を捕まえることになるんだったら、のび太達はすぐ殺されると思いますか……？」

その意味深しげな発言に全員がスネ夫に注目した。

「どっ……どういうことかね？」

「つまりその……そうなったら奴らは焦って殺すどころじゃなくなるんじゃないかなぁ……って思いました。捕まりたくないって言ってたから……」

“……”

根拠のない発言である。ほとんどが『そんなこと、あるわけが……』と思いかけていた時、

「……いや、そのスネ夫君の言うとおりかもしれませんよ提督」

一人の女性隊員が彼に賛同する。ウサギのような長い耳が目立ち、赤い短髪のボーイッシュ。その赤い瞳からは鋭い眼光を放っている。

……彼女は本艦所属の第２６実特科（実弾の砲兵器のみを扱う部隊）攻撃中隊長、メレウル少佐である。

「アマリーリスは我々、銀河連邦を恐れている。
今まで遭遇しなかったのも我々と対立したくなかったため……と私は思います。

そしてついに対面してしまい、奴らも内心焦っていることでしょう」

彼女はさらに腕組をして、まるでほくそ笑むような表情をとった。

「だとすれば、彼らのその友達の殺害は後回しにして、我々の対処に最優先する可能性もあります。

最も、仮の話ですが。まあ下手をすれば奴らの要求を拒否した瞬間、即抹殺されるかもしれませんね……フフッ」

その場の全員が唖然となる。
ドラえもん達がいるにも関わらず、不安めいた発言を繰り出す。
現に本人達も落胆とも受け取れる複雑な表情をしていた。

「メレウル少佐、やめないか。この子達も聞いておるのだぞ！」

カーマインの注意に耳を貸さず、さらに話を続ける。

「ちなみに私は要求を飲まない方に賛成です。
情を優先して奴らを逃してしまっては元も子もありません。
ですが、賭けてみる価値はあります。
最悪、アマリーリスを逮捕すればこちらの勝利ですから」

まさに仕事人の思考だ。

「助け出すのならまさに時間が勝負。作戦である通り、エミリア大尉、ミルフィ中尉、そしてこの子達がアマリ―リス艦に突入成功し、いかに早く友達を発見できるかにかかってきます。

そのために彼女らの突破口を開くために我々も精力せな、いけませんが」

彼女の意見は聞く者ほとんどを同感させた。

「ドラえもん、どうする？」

「確かにこの人の言うとおりかもしれない。どの道、時間勝負になると思うから」

……次々に彼女を賛同する声が聞こえてくる。カーマインは回りの様子を確認し、うんと頷いた。

「……なら全員に聞く。アマリ―リスの要求を受け入れないことに賛成の者は賛同の拍手を叩いてくれ」

《パチパチパチパチ――っっ》

何百との手を叩く音が響き渡った。そしてカーマインは心を据えて、

深く頷いた。

「よし。我々は奴らの要求に応じないことに決定する。なお、戦闘への移行が必須であると思われる。

あの男がまた現れる前に各部隊の隊長は各部下に連絡、準備をさせよ！！」

“了解！！”

すぐに彼の命令に取りかかる各部隊長。エミリア達も作戦について何やら話をしている。

「私達は作戦開始次第、すぐに各装備品を携行した後、すぐにイクスウェスの格納庫に移動。指示があるまで待機よ」

「ドラえもん、今の内に『テキオー灯』をかけておこうよ」

「そうだね、忘れない内にと……」

ポケットから『テキオー灯』を取り出して、まずジャイアンとスネ夫にその光を浴びせた。

「次にエミリアさんとミルフィちゃん、テキオー灯を浴びせます」

ドラえもんはそれを二人に向ける。エミリアは少しビクビクしてようにに見える。

考えたら彼女は光に弱い。恐れるの当たり前か……。

しかし彼はお構い無しで放射し、明るい光が彼女らを包む。

……そして彼自身も光を浴びて、テキオー灯をポケットにしまった。

「エミリア！」

突然、あのメレウルから声をかけられ5人は彼女へ顔を向けた。

「メレウル少佐？」

「おや、いつもみたいに班長って呼ばないのか？」

「いや……今は仕事中ですから……」

エミリアが少しタジタジしている。

――メレウルは艦内において彼女ら女性隊員の内務全般をまとめる班長も務めている。

「お前、この作戦がとても重要と自覚しているか？」

「はい……」

「……班長として私はお前に選ばれて光栄に思っている。

決して奴らに臆したら敗けだぞ、今から十分気合いを入れてけ、いいな！！」

「はい！」

「あとミルフィ、この子達含めて全員が要領よく行動できるように導くのはお前の仕事だ。
集中してサポートしな！！」

「了解です！！」

そんな彼女は突然エミリアの両頬を優しく掴み、顔を近づけ……。

“う……うわわあっ！！”

思わず、ドラえもん達は驚愕と羞恥の混ざった表情と、頬を赤くし、大きな声を上げた。
二人は女性同士であるにも関わらず、熱い口づけを交わしていたのだから……。しかも舌まで入れている。

「むむっ！！」

エミリアは顔を真っ赤にしてジタバタし、ミルフィもその光景が恥ずかしいのか顔を真下に伏せている。

「エミリア、絶対に死ぬなよ。あたしはお前のことが『好き』なんだからな。お前がいなくなっちゃ寂しくて死んでしまうよ」

「……」

「なんてな。なら私は行く。みんな準備を怠るなよ！」

そういうとメレウルは歩きながら去っていった。

当然、５人は呆気に取られている。ただ言えることはドラえもんとジャイアン、スネ夫からすればとても刺激的な光景であった。

「な……なんだあの人は……」

「初めて見た……きっ……キスするとこなんて……しかも女の人同士が……」

一方、口づけをされた本人も我を振り返り顔をブンブン横に振った。

「……班長……考えたらあんな人だった……（キャーーっ！！）」

顔を頬を両手で押さえて絶叫する。

「なあミルフィ……あの人って一体……」

ジャイアンの問いに彼女は恥ずかしそうにこう答えた。

「……メレウル少佐はね、ちょっと変わった趣味を持ってるの……」

……彼女はバイセクシャルであり、男性、女性どっちでもイケるのであった。

特にエミリアを気に入ってるらしく、いつか二人で……と常に狙われていたりするのであった。

……

そして現時刻、エミリア達が発進する数分前。

連邦艦隊から前方１００ｋｍ離れた宙域で駐留していた多数の部隊。

中央に専用機と思われる戦闘ユニットの姿が。――サイズは大型クラス、マッシブな体躯に両肩、両手首、両腰部に長方形のコンテナが装備されている。

一見、ゼウシウスのようにも見えるが、どちらも砲門から丸い弾頭らしき物が見える……ミサイルだ。その左右全体に上下と前、後列に分かれたクイストが全長２６．６ｍの砲身、口径１４６０ｍｍの砲口というあまりにも巨大な砲台を操っている。

その数なんと……６２０機で砲台も合わせると１２４０体も及ぶ無数の機体が遥か前方宙域に目を見据えていた。

「前列、後列の順に後方支援攻撃を開始する。全機、前方ＸＸＹＹ方向、４５００ギャロ、高度１５８に砲台を調整！！
メイガニウム榴弾発射用意！！」

その大型戦闘ユニットから命令を下すはあのメレウル少佐であった。

――ここは銀河連邦艦隊、最終防衛ライン。第２６実特科攻撃中隊が務める最後の砦であった。

そして彼女の乗る機体、『エルファイスマーガリー』は上方へ移動、左右の肩から突き出た巨大なミサイルコンテナを同じ方向へ向け、ミサイル弾頭が前に浮き出てくる。

「今中隊はこれよりメイガニウム榴弾、グラストラ核殲滅ミサイルの順に発射する！！
前方部隊は後退し敵を引き付けよ、そして発射同時に退避だ！！」

特殊なインカムを通じて一斉に放送、指定された前方の宙域にいる連邦ユニット達は再び一斉後退を始めた。

『また奴ら下がりはめたぞ！？』

『構わねえ！！今がチャンスだ！！』

逃がすまいと戦闘員達も追いかける。
連邦は後退しながら攻撃してくる。彼らは掻い潜り、どうにかして奴らに接近しようと必死だ。

……しかし、気づいていなかった。これが作戦であることを……。

それに気付いたのその数分後、エクセレクターのオペレーターであった。

“全機、今すぐ緊急退避!!奴らの後方には約６００体以上の巨大砲台がこちらを狙ってるぞ!!”

《なにぃ!!?》

瞬間、スレイヴの動きはピタッと止まった。

しかし、気づくのは遅かったのである。

「前列砲台、メイガニウム榴弾発射!!」

彼女の掛け声と共に３１０体の角度調整されたその砲台からその数、３１０発の巨大弾丸が目にも見えぬ速度で一斉に発射され、グングン彼らの宙域に向かっていった。その瞬間、連邦ユニットも全力で離脱し戦闘員達だけが取り残され――。

『まさか奴らが後退したのは……』

『んなこと言ってる場合じゃねえ、早く逃げ――』

逃げる隙もなかった。その超高速で飛来したソレは彼の肉眼で捕らえきれなかったのである。

《～～～～～～》

直撃。機体の大部分を削るほどに貫通または弾頭が破裂。内部にある特殊な液体火薬が爆発した衝撃で、外の包む装甲が無数の破片となって拡散。

『榴弾か！！』

周囲にいるスレイヴに容赦なく突き刺さった。

しかし、これで終わりではなく後列の砲台も砲撃準備を整えて、待機していた。

『後列砲台、一斉発射！！』

メレウルの装置している特殊なゴーグルは遥かに前の敵機を完全に捕らえていた。

――二度目の砲撃。数十秒後に再び、彼らにその弾丸が休む間もなく襲いかかる。しかし今度は例のミサイルが起動していた。

『グラストラ核殲滅ミサイルを発射する！！爆発範囲にいる機体は迅速で退避せよ！！』

その2体の細長いミサイルはついに発射された。弾道速度はそこまで速くなく、一定速度で前方へ進んでいく。

一方、直撃した機体に大穴が空き、ズタズタに装甲を突き破る。そして破裂した金属の破片も深々と突き刺さり、次々に機体の不調、戦闘不能へ陥らせた。

『マズイ、奴らの策にハマったか！！』

『一旦、退避しよう』

動ける機体は動けないが無事の仲間を助けて撤退しようとするが、ここに一本の通信が。

“各機要注意。今度は2体のミサイルがこちらへ接近中！！”

『ミサイルだと？』

モニターを拡大すると確かにこちらに向かってくる二つの何かを捕らえていた。

『榴弾よりは遅くてまるわかりじゃねえか。撃ち落としてくれる！！』

一機のスレイヴが両手をその『ミサイル』へ砲口を向け、狙いを定めて発射。

しかしその瞬間、またオペレーターから通信が……。

“撃つな！！それは……”

『なに！？』

しかし撃ってしまい取り返しがつかない。二本の光線はミサイル二体に見事に直撃した。

だが、

《カッ――――――！！》

ミサイルからこの宙域全てを覆うほどの白銀の光が発生、そして瞬間、超高熱、超衝撃波が数十キロに渡って一気に襲った。

《ぐわあああああっ――――――！！！》

それらはそのスレイヴ全機までも覆い、逃げるどころか、何もすることすらできず全てを光の中に飲み込み、跡形もなく焼きつくし、粉々に――。

それはまるで地球におけるあの最悪の兵器“核兵器”のようであった。

その光景を見ていたオペレーターセンター内の全員は驚愕と唖然、そして息を飲んだ。

「そっ……その宙域にいた２２８人の戦闘員の生体反応……一瞬で消えました……。」

「……その宙域周辺から高密度の放射能を検出。連邦の戦略核兵器攻撃と思われます……」

彼らからすれば絶望的な報告である。

「キャアアアッ！！」

「しずかちゃん!?」

しずかは光によって真っ白に映るモニターを見て、悲鳴を上げていた。
もはや耐えられるものではない。

「ひっ、ひどい……どうしてこんな……ううっ……」

悲しみにくれているしずかに対してジュネは憐れに思えたのか、優しく手を差しのべてこう述べた。

「……あんた、こんな光景見るの初めてなんだね。
やっぱり、あたしたちとあんたたちでは住む世界が違い過ぎるんだよ」

「……」

のび太はラクリーマの言っていたあの言葉が脳に浮ぶ。

“お前と俺らは根本的に考えは違う、相容れない存在だ”

少しその意味が分かったような気がした――。

……開発エリアでもサイサリスはその光景をキツイ目付きで凝視していた。

「……グラストラ……核エネルギーだと……？

連邦の野郎、あんな危険なモン使ってやがったか……」

――先ほど放たれたグラストラ核殲滅ミサイルとは地球に置ける正真正銘の戦略核弾頭ミサイルであり、その威力、攻撃範囲は戦艦クラスの光子ミサイルに匹敵する。しかし当然、放射能まで発生し、二次、三次被害も凄まじく、使用が限られる武装であり、この『エルファイスマーガリー』に積んでいる両肩のミサイルはまさにこれであった。

グラストラ核エネルギーは『グラストリウム』と呼ばれる放射性元素から取り出される核エネルギーであり、ウランやローレンシウムのようなアクチノイドと同じような物である。

核分裂で地球産の同物質以上の膨大なエネルギーが発生し、瞬間的な増量率はＮＰエネルギーをも上回るが、当然放射能も発生する。

しかしこの放射能は特殊でほとんどの金属（厚さ、性質関係なく）を貫通するため、動力としての使用は確実に被爆し自殺行為であり、利用不可能である。

なので連邦最大の実弾核兵器として使われているが、やはり扱いに

くく、その危険な性質からか連邦会議でも『もはや平和や秩序すら破壊しかねない』と使用禁止を訴える声も多数上がっている代物である。
そんな悪魔のようなミサイルが先程、現実で使われた瞬間であった――。

「……あたしらでさえ扱えきれなかったものを……連邦ごときが……」

苦虫を噛み潰した表情を取る彼女。

サイサリス、エルネスの故郷であった惑星ラグラ……『神の軍団』はＮＰエネルギーと共同で研究が進められていたのだが、その放射能があまりにも毒性が強く、どれだけ多くの人間を被爆、犠牲にしたか分からない。

そして、エルネスの行なっていた人体実験の一つにこれを被験者に直撃照射するという余りにも非道な実験を行っていた。
当然、良い結果が出るハズもなく被験者全員が重度の放射線障害により即死に至った。

――彼女らでさえ扱える代物ではなかったのだ。
本来ならＮＰエネルギーと共に新世代エネルギーを担うハズであったが――。

そして未だ誰も知らない真実を言おう。惑星ラグラを消滅させた元凶の一つであることを。

……

「敵全機消滅。すぐに弾薬補充急げ！！」

被爆の危険性で一時退避していた実特科中隊は再び隊列を編成する様、弾薬の補充、装填を行う。

「ムーリア曹長、私の機体も補充だ」

彼女の機体の後方から一機の戦闘機が向かってくる。

ホルスとは違い、無骨なフォルムで至る所に数々のミサイルが取り付けられている……あの核弾頭も一緒であった。

“サーペイザー、ムーリア曹長到着しました”

「ムーリア、グラストラ核弾頭だけ補充を頼む！！いつまた来るやも分からん」

“……”

しかし、その戦闘機『サーペイザー』の搭乗者ムーリアはどこかおどおどした表情であった。

「少佐……あの……」

“どうした？早く補給を開始しろ！”

「我々は……あの核弾頭を使用してしまって……よかったでしょうか……。

……あれは間違いなく必要以上の大量破壊兵器ですよ……？」

その問いにメレウルは……。

《ムーリア、甘ったれたこと言うな！！》

彼女のドスの聞いた怒号が中隊の全通信機から響き渡った。

「ここは戦場だ！！今は殺るか殺られるかしかない。連邦とて綺麗事ばかり言ってるワケにはいかないんだよ！！」

“しかし……”

「よく聞け。世の中には必要悪って言葉があってな。平和を守るためにも時には悪魔にならねえといけねえんだよ」

……まさに『毒を以て毒を制す』とよく言ったものである。

『たく、なんて弱々しい男だ。ホントに提督と同じ惑星出身なのか疑わしいな……』

“……そこまで言わなくても……”

『……なにか言ったかァ？』

“いっ、いえ！！”

……二人でそんなやり取りしているなか、

“エミリア大尉がたった今、出撃した模様です！！”

その情報を耳にした彼女の目の色が変わった。

『よし、エミリア大尉の突破を邪魔する障害物や敵を排除する！！弾薬を装填した砲台から再び砲撃準備を開始しろ。ムーリア曹長は本機の後方で待機』

力がこもった声が張り上がり、部下も急いで準備を始めた。

しかしその直後……。

“メレウル少佐、レーダー上に１２０機程の敵戦闘ユニットが左右から旋回しながら急接近！！……中にあの男も混じっています！！”

モニターを見ると、右側からレクシー、ユーダが駆るシルバリオン他、スレイヴ、ツェディック含めて６０機、左側からはあのセルグラードを持ったラクリーマ、後ろについてくるように残り６０機が最終防衛ラインへ突進していた。

『装填はまだか！！』

“ま……間に合いません！！”

『全機、今すぐ戦闘準備。一機たりともラインから艦隊へ行かすな！！』

命令と共にクイストは砲台をその場に放棄し、両腰部分にマウントされたライフルと、擲弾頭発射装置付きの長身バレルを合体させ、即座に各左右に銃口を向けてた。

――一方、ラクリーマ達は先程の核攻撃に対して報復しようと突撃していた。

「核なんぞ使いやがって！！各員、死んでいった仲間の弔い合戦だぁ！！

それ以上の破壊力をてめえらに味あわせてやる！！

レクシー、ユーダ、俺は突破してセルグラードで連邦艦隊を攻撃する。お前らで全員を指揮して近くの敵部隊の相手を頼む！！」

『『了解！！』』

徐々に近づきつつあるアマリ―リス勢についにメレウルの機体『エルファイスマーガリー』も動き出し、両手首の１４５ｍｍの口径を持つ砲身を各左右に向けた。

『ライフルは一点射撃から連射撃モードへ切り替え、十分引き寄せよ！！』

銀色のロングレンジバレル、銃口。その真下に取り付けられた擲弾発射器。そして鈍い光を放つ刃の銀色の銃剣。クイストの標準装備であるレーザー機銃とは全く異なったデザイン、構造だ。

“敵部隊、射程圏内に入りました！！”

『クイスト全機、一斉射撃！！撃てぇ！！』

――無数の弾丸が高速で飛び交う。エネルギーではなくこちらも実弾であった。

そしてエルファイスマーガリーから放たれるはライフルのような弾丸ではない、小型の実弾ミサイルがまるで機関砲のように連射されながら左右の敵機を次々と追っていく。

戦闘員はすぐに散開。だがライフルも連射機能となっていたので一分間に１２０発ほとの弾丸、さらにそれが６４０機＋無数のミサイル同時に攻撃しているため、この宙域は弾丸で埋め尽くす銃撃戦の応酬と化した。

さすがの戦闘員も避けきれず圧倒的数の弾丸、そして『エルファイスマーガリー』から放たれる無数の小型ミサイルが直撃を繰り返し、装甲が陥没、または爆発により強度の弱い部分を破壊された。

特に小型ミサイルはなんと敵機を追尾してくるため避けることは困難であり、スレイヴやツェディックの全武装をもってして撃ち落とそうとするがその数が余りにも多すぎために追いつかない。誘爆させようにも他機のライフル攻撃で邪魔される。

何十機かのクイストはライフルを横に傾け、グリップ部分を縦から掴んだ。

トリガーを引くと銃口の下に設置された擲弾発射口から拳二個分の弾体が発射。先が何とドリル状となっており、発射と同時に回転を始めた。

遅めの弾道でヒュルヒュル飛び、一機のスレイヴの胸部に直撃。ドリルにより金属を削りながら内部へ入り込み――。

「!?」

コックピット内に到着した同時に動きは停止、彼の膝の上にポトッと落ちた。

「まさかこれは……」

その戦闘員は息を飲んだ。そのまさかである……。

《ドワっっ!!》

コックピット内が突然爆発を起こし、その機体は静止したまま二度動かなかった……。

「くう……直撃すれば死んじまう……」ラクリーマは向かってくる弾丸の嵐の中、決死の思いで前進する。セルグラードにログハートのエネルギーをほとんど供給に回しているためにあの超高速機動ではなく、的にされてもおかしくないほどのスピードであった。

『リーダーを守れ、何としても突破させるんだぁ！！』

４機が即座に彼の回りに配置し、盾のように防衛に入った。

『全機、まずあの中心部にいるデカブツを真っ先に破壊しろ。あれがおそらく隊長機で倒せば部隊はバラバラになる！！』

レクシーはメレウルに狙いを定めて、速攻で全機を向かわせた

そして彼女も自分が標的になっていることが分かると攻撃用レバーを全力で手前に引いた。

『図にのるな！！全機、エルファイスマーガリーからすぐに退避せよ！！』

エルファイスマーガリーの手足含む全装甲から直径１ｍの丸い孔が大量に出現。

両手、両足全てを広げて大の字のような形になるや、部下達は攻撃を止めて彼女の周辺から離れていく。

『ミサイル、全方位全弾発射――――っ！！』

――展開された穴からおびただしい数のミサイルがマシンガンのように爆炎と共に全方位に向けて一斉に飛び出した。

あのラクリーマが身につけていたアーマーのミサイルより遥かに多く、大きい。次々とスレイヴに直撃するミサイル。みるみる内に大破されていく機体。

『これで終わりと思うなよ！！』

今度は両腰に装備されたミサイルコンテナが起動、メレウルはすぐに近くにいた敵機４機に照準を定めて発射。

発射された４体のミサイルは先程の無数のミサイルより遥かに巨大だ。

『撃ち落とせ！！』

すぐにレーザー砲でミサイルに狙いを定め、撃ち込むが何とミサイルがまるで意思を持っているかのように自ら光線を避けたのであった。

『くくくっ！！そのミサイルは狙った相手は絶対当たるまでは破壊

できないぞ！！』

彼女の言うとおり、こちらがどれだけ攻撃しても軌道、位置、全てを読み取って素早く避けで追っていった。

『なんちゅうミサイルだ！！』

もはや、避けるのに必死であった。そして退避していた多数のクイストも駆けつけてくる。

『このミサイルは大型クラスでも一撃だ。さあどうするアマリーリスさんよぉ！！』

彼女は人格が変わったかのように高圧的になっていた。それも憎たらしい程に……。

だが、

『おい、ちいとオイタしすぎるんじゃねえか！？』

『！？』

エルファイスマーガリーの背後に回り込んだ機体がいた。
レクシー、ユーダの駆るシルバリオンであった。

《スバァ――っ！！》

両手首のエネルギー長刀が真上からエルファイスマーガリーの両肩へ降り下ろされ、両手、両腕が胴体から離れた。

『何い！！』

もはや二人にとってここまでコケにされて我慢の限界であった。

『ダルマにしてやる！！』

瞬間、シルバリオンは下へ移動、今度は両脚まとめて横の一閃を浴びせ、切断。言葉通り、ダルマの姿そっくりとなった。

『～～～～～～っっ！！』

すっかり顔色を一気に変えてもはや余裕の顔がなくなった彼女、そのモニター前には彼らの機体が現れ――。

『ユーダ、とどめだ！！』

『言われるまでもねえよ！！』

刀身を形成したまま右腕を引く。コックピットを貫こうとしていた。

『ちいっ！！』

メレウルは素早く操作レバーを引き付け、連動て後部スラスターが点火。後退して避けようとした。

が、

《ガシ！！ガシ！！ガシ！！》

3機のスレイヴに逃げれないように取り押さえた。

『このぉ離せぇーー！！』

メレウルはレバーを前後へ乱暴に動かすが降りきることはできない。

『往生際がワリィんだよ』

『レクシー、ユーダ！！やれえ！！』

仲間の呼びかけに応じて、シルバリオンは突進。右腕を突き出しーー。

『うあああーーーーっ！！』

《ズキャアアアーーーー！！》

高熱を帯びた長刀は装甲を溶かして胸部を見事に貫いた……。

“中隊長――――っ!!”

部隊員全員が叫ぶが彼女の返事はなかった……。

エルファイスマーガリーからイナズマがほどばしるとすぐにレクシー達はその場から離れ――。

《ズ　ワ　オ　ッ　ッ　――　――　！　！》

大爆発。中の残っていたミサイルも誘爆して、凄まじくそしてキレイさっぱりバラバラとなってしまった。

『よし、隊長機を倒した。あとは部下達だ。全機、焦るな。一機ずつ確実に破壊しろ!!』

そして彼らはメレウルの部下に狙いを定め、手をバキバキ鳴らす。先程の仕返しをしようとしていた。

一方、彼女の部下は……指揮官がいなくなったことにより混乱に陥

っていた。

『メレウル少佐が死んだ……』

『嘘だろォ……あの人が……』

もはや士気が著しく低下していた。しかし、アマリ―リスはそれを好機として逃すはずがなかった。

『全員、チャンスだ！！かかれ！！』

レクシーの合図に襲いかかるアマリ―リス軍団。

逃げ惑う機体、彼女の仇を討とうと特攻する機体……どうすればいいか分からずあわふたしている内に攻撃、巻き添えを食らって吹っ飛ぶ機体……もはや部隊として成り立たなくなってしまった。

『う……うわあああああっ――――っ！！』

後方で待機していたあの戦闘機『サーペイザー』が突然、自分の部隊を置いてきぼりにして艦隊へ戻っていった。

そう……サーペイザーの搭乗者でメレウルのパートナーである彼、ムーリアはすでに情緒不安定と化していた。

――そして中央デッキでも……。

「……メレウル中隊長の生体反応消滅……。第２６実特科部隊はも

はや壊滅するのも時間の問題です……」

“……”

メレウルの死は誰も信じがたいことであり、誰もなんと言えばいいかも分からなかった。

しかし、さらにそれだけでは終わらなかった。

「て……提督！！」

「どうした！！」

震える声、体。オペレーター、副長の様子を見る限り、ただごとではないことが感じられた。

「あの男……アマリ―リスの総司令を名乗る男が艦隊へ突っ込んできます。

それも正体不明の巨大な砲兵器を携行しながら！！」

《！　！　？》

ラクリーマがついにこちらへ迫ってきていた。

サイサリスのもうひとつの作品『セルグラード』を携えながら。

カーマイン含む、全隊員を震撼させた。まだ隠しだまを持っていたのかと――。

――そして、セルグラードへ繋いでいた供給チューブが自動的に解離した。

“ラクリーマ、ついにセルグラードのエネルギーが満タンになったぞ！！
これでぶっ放せるぜェ！！
”

それを聞いた彼はこの時を待ちわび、本当の意味で熱く、そして狂気を帯びた満面な笑みを繰り出した。

「行くぜ銀河連邦！！いっぱい味わってくれよ、サイサリスのもうひとつの傑作をよぉ！！」

……

その時、エミリア達は発射してヴァルミリオンから前に出ようした瞬間、メレウルの戦死したという事実が通信機から流れていた。

「そんな……メレウル班長が……」

「……っっ！！」

5人は想像を絶するほどの衝撃が稲妻のように身体中を一気に突き抜けた。

しかしエミリアは歯を食い縛り、操縦桿をさらに強く握りこんだ。

『……行くわよみんな！！ツインエネルギー最大、エンジンフルスロットル！！』

操縦桿を力の限り前へ押し倒した――。

《ズ　ド　オ　ォ　ォ　――　――　っ　っ　！　！》

“ムギィィアァ――――っっっ！！！”

エクセレクターへ向けて発進したイクスウェス。

しかしその加速力、速度、全てが異常であった。あのログハートでもこのスピードは追いつけないほどで地球上の小さな街ひとつなら、通りすぎただけの余波で確実に消し飛ぶ程であり、限りなく『亜光速』に近づいていた。

テキオー灯を浴びていたため、何とか体は無事であるが余りの速度で今、自分達がどこにいるのか窓からでは何がもう分からない。全てはエミリアの前にあるモニターが頼りであった――。

「ん？」

その時である。ラクリーマは何かが横を通りすぎたような気がした。

それがエミリア達であることを彼は知るよしもなかったが――。

だがそんなことに気を取られて暇などない。

何故かヴァルミリオンにセルグラードを向けず、右側の下位戦闘艦隊へ向けるラクリーマ。

“ラクリーマ、両手のグリップを同時に引けぇぇ――！！”

そして――。

《いんぺんあの世から出直してこいやァァ――――っっ！！》

セルグラードから放たれたのは一直線上のＮＰエネルギーの竜巻。

だがそれだけではない。それが通りすぎただけで膨大なエネルギーの波動、空間すらねじ曲げる程の超重力エネルギーが放射状に拡散。

それが何百キロ……いや何千キロという桁違いの範囲内全てを焼きつくし、消し飛ばしていった。

（ぐおおーーーっっ！！）

宇宙空間であるにも関わらず、発射による凄まじいという言葉が可愛く思えるほどの反動がラクリーマの身体に襲いかかった。

……体の骨が全て粉砕される感覚だ。こんなバカらしい超衝撃は生まれて初めてであった――。

“ミキ……ベキ……”

ログハートも悲鳴を上げている。装甲が段々削られて剥がされていき、まさかこれほどまでとは……。

そして射線、影響範囲内にいた全ての艦隊は……。

“エネルギーの波動がこちらへ向かってきます！！質量は……計測不能！！？”

“なんだと！！？”

《――――――――》

一瞬の時であった。右側全ての艦隊がそのエネルギーに飲み込まれていったのは……。

もはや破壊という言葉では収まらない。本当の意味で消滅していった。跡形もなく……。

その一撃のどれほどの数を命を消し飛ばしたであろう。

数十万……いや数百万は裕に超えていると思われる――。

そしてその直線の竜巻が消えたのは何と……数光年先でだったという。

「……ヴァ……ヴァールダイト級2隻、グラナティキ級6隻、反応消滅……」

ヴァルミリオンの右側全ての艦隊全てはもう宇宙に存在していない。
本艦もスレスレで直撃は免れていたがその影響も色々出ていた。
「……先程のエネルギー衝撃波が本艦のバリアを一切無視し、かすめていった左側全ての外装甲が消滅した模様……。
被害は不明です……。
戦闘はとりあえず継続可能ですが、こちらのバリア展開が一切不可能となっています……それから――」

次々に叩き出される被害報告。見たことのない光景、そしてそれがもたらされた現実により、ほぼ全員が茫然自失に陥っている。
カーマインだけが何とか自意識を保っていたが本人でさえこう思っていた。

“さ……最悪の事態だ……”

――アマリーリスがここまで強大だとは誰も考えつかなかった。
今作戦に参加した隊員誰もが次第にこのような考えに陥らせた。

『本当にこんな化け物相手を捕まえられるのか……』

……と。

しかし一番可哀想なのは先程の攻撃で自艦を無くし、帰る場所を失った隊員達である。

問いかけても何の返事もない、返ってこない。

“……”

その隊員から涙が溢れている者、放心している者、激しい怒りが沸き上がる者。

もはや笑い話にならない状況であった。

――だが、

「提督、アマリ―リス艦から膨大なエネルギー反応確認、S級質量を観測!!」

「しかしバリアを再展開せず、さらにエネルギーだけ上々しています!!」

「……どういうことだ!?」

予期せぬ出来事である。これは一体……。

……

一方、ラクリーマは……。

「……」

宇宙空間に力なく漂っていた。先程のセルグラードによる攻撃の凄まじさは連邦に与えただけではなかった。

「……くくっ……サイサリスの野郎……俺を殺す気か……」

その超衝撃が彼自身に甚大な被害を与えていた。
セルグラード本体は衝撃に耐えきれず大破、あのログハートも酷似し、さらに先程の一撃が決定打となりもはや使えるのが疑わしいほどにボロボロと化していた。
ブラティストームは……何とか無事そうだが。

“リーダー、大丈夫ですか!!?”

レクシーから通信が入り、彼はその乾いた唇を静かに動かした。

「……ああ……ちいと無理しちまったが……迎えにきてくんねえか？どうやら少し休まねえと動けそうにねえ……はは……」

“了解!!今すぐ向かいます!!”

通信が終わり、ラクリーマはこんな状態にも関わらず『ニィ……』と笑う。

「……ユノン、手柄はお前にやるぜ……」

そしてエクセレクターのユノンも同じく笑っていた。

《リバエス砲発射用意……目標、敵Ｓ級艦……》

連邦側でも副長から放った一言がさらなる恐怖を絶望を与えた。

「アマリ―リス艦、主砲きます……」

――全てはこの時のために。ユノンの狙いはこれであった。
主砲展開に移るエクセレクター。ＮＰエネルギーの粒子が砲門へと収束されていく。

「なぜだ!?なぜバリアを消滅したのにこんなに早くエネルギー上昇率が高いんだ!?」

――ヴァルミリオンの主砲を放つ前にエクセレクターは形態を変えていた、あの『タイプ2』に。
あの形態では前方にしかバリアを展開しないため、その分炉心に負担がかからずエネルギーを節約でき、その分リバエス砲のエネルギーに回せる。

これも変形を利用した応用技である。
連邦はまんまとそれに引っかかったのであった。

そしてイクスウェス。その事実が5人にも……。

“エミリア、アマリ―リス艦の主砲攻撃が来るぞ！！”

「なっ……何ですって！！？」

「聞いてないヨ――！！？」

パニックに陥る機内。しかしそれだけではなさそうだ。

「第1動力炉出火！！これ以上の……スピードでは……」

「くあああああっ！！」

本人でさえ上げたことのない最大速度が本機全てを軋ませていた。

「ドラえもん、どうするんだよぉ！！？」

「どっ、どうするって言ったって――っ！！」

「このままじゃ――」

イクスウェスの今の位置では確実にリバエス砲の射程範囲内にいた。

発射させれれば確実に消滅は避けられない。

「バリアを展開できないのか！？」

「無理です。機能しません！！」

「残った艦隊の主砲攻撃は！！」

「間に合いません！！ただいま冷却が終わったばかりです！！」

「たっ、直ちに艦内全員に退避命令！！早くしろ！！」

「どこに逃げるんですかぁ！！
それに退避している間に主砲が直撃しますよ！！」

追い詰められた連邦。もはやカーマインも平常心を保っていられなかった。

「負けるのか……我々は……善が負けるというのか……」

その間にもリバエス砲内のエネルギーの塊がさらに巨大になっていく。それがヴァルミリオンからでもよく見え、破滅への道が一歩一歩迫っていた。

《リバエス砲……発射まであと３０秒……本艦、衝撃態勢をとれ》

もはやヴァルミリオン、すなわち司令艦破壊は今作戦の基盤を失い、連邦の大敗を意味していた。

イクスウェスもでエクセレクターまであと少しという距離に近づいていたが、これでは間に合いそうにない。

……機体ももはやバラバラになりそうなほどにまで軋んでいる。証拠にエンジンルームから火災が発生していた。
止まろうとも今さら止まることなど出来なかった。

「……せめて時間が止まってくれればぁ――！！」
エミリアの現実であり得ないほどの願いがスネ夫に頭に何かを閃きかせた。

「そうだドラえもん！！『タンマウオッチ』だよ！！」

彼の発案にドラえもんはすぐに目を輝かせて、すぐにポケットにいれた。

「サンキュースネ夫君！！えっと……今回『タンマウオッチ』はドラミに預けてあるから……これで……」

「早く出してよ！！」

急かせるスネ夫とジャイアン。
そしてポケットから取り出すは丸い形をしたストップウォッチのよ

うな物であった。

「『ウルトラストップウオッチ』！！
僕、外に出てくる！！」

“ドラえもん！！？
”

なんと高速航続中のイクスウェスの上部ハッチを開けて宇宙空間に飛び出したドラえもん。

外装甲にへばりつきながら前部に行こうと少しずつ前に前進する。
吹き飛ばされそうになるが何とか自力で耐えしのぐ。

目を凝らして前をよく見るともう目の前にはエクセレクターの砲門から蒼い光の塊は放たれようとしていた――。

「チャンスは今しかない！！時間よ止まれ～～っ！」

“カチっ！！
”

ドラえもんはストップウオッチの上にあるボタンを押した。

“……
”

ドラえもんを中心に機体含む少しの範囲外は全て動きは止まっていた。

人は全く動こうとしない、硬直したままだ。宇宙から全く何も伝わってこない……。声も何も通信機から聞こえてこない……

戦火も光っている途中で止まっている。

……そして主砲が全く発射されていない。光の輝きすら放っていない。

――そう、機体以外の全ての時間は全て止まっていた。

しかし、ドラえもんはそれだけでは終わらず直ぐ様ポケットからあの地球で使った『通り抜けフープ』と赤い懐中電灯を取り出した。

「一か八かだ。だけどやるしかない。『ビッグライト』、『通り抜けフープ』！　！』

ドラえもんは即座に立ち上がり、迫るエクセレクターの装甲に向かって走り、通り抜けフープをかざしながらビッグライトをそれに照らした。

《グググーっ！！》

通り抜けフープは一気に巨大化し、イクスウェスが入り込める大きさに拡大。

「うあああああっーー！！」

そして……。

《ズガァァァーーっっ》

見事に通り抜けフープはエクセレクターの装甲へくっつき、空間の入り口が発生、イクスウェスはついにエクセレクターへ突入した。

しかし、その速度で突っ込んだせいで機体は大破しながら長い直線通路をずり走っていった。

その時にドラえもんの持っていたあの『ウルトラストップウオッチ』が壁にぶつかり、頭上のボタンがもう一度カチリ、そしてこれも大破。

また時間が動き出したのだが……。

《ぎゃあああああぁぁ――――――っっっ！！！》

オペレーターセンター内。ユノンから巨大な悲鳴が響き渡った。

「ユノンさん!?どうしました!?」

「くっ……苦しんでる……」

そう、恐れていたことが起こった。イクスウェスが内部に突入した時の直撃で、それらの損傷が全て彼女に一気に襲いかかった。

《あがががぐげえぇぇ……ぎきぃ……!?》

聞いたことのない叫び共に彼女の顔は醜いほどに歪み切っていた。

「一体何があった!!」

「……艦内、第一エリア近くの通路に謎の物体が……」

検索し、その場所を映すとそこには見たことのない戦闘機『だった』ものが大破し、煙を上げて朽ち果てている。

「なんだこれは……?」

明らかにこちらの技術で造られた物ではない、だがのび太達以外の全員がすぐに気付いた。

それが『銀河連邦製』であることを……。

「ああ……ユノンさん……！？」

その光景をのび太、特にしずかは口を押さえて瞳を震わせていた。

今にも泣きそうなほどに――。

《ぐえぇ……ぐぼおゲェっっっ！！！》

ユノンの口から血の混じった嘔吐物が吹き出し、下へ垂れ流された。

『ビチャビチャ！』と汚い水しぶき音が響き渡り、それを見た全員の顔色が蒼白となる。

彼女は今危険な状態だ、早く助け出さないとあのシステムの副作用が……そして死んでしまうことを……。

「うっ……！！」

「すぐにユノンさんを助けるんだ！！」

すぐに彼女の元に駆けつけようと行動する艦内員、そこにオペレーションそっちのけで行く者、中にはジュネも混じっていた。

しかし、彼女を取り込んでいた機械や金属が不安定となった精神をすがさず感知、またもやおびただしい程の数で彼女の体を取り込み、蝕んでいく――。

◇解説４（前書き）

今まで登場したオリジナルメカニック中心の解説です。

◇解説４

■登場人物■

●銀河連邦勢

・メレウル

銀河連邦、ヴァルミリオン所属の第２６実特科攻撃中隊長でエミリアの先輩。階級は少佐。女性であり歳はエミリアより４歳年上。

ウサギを祖先とした異星人『ラビフィア』であり頭上に突き出たウサギのような長い耳が特徴的。赤髪のショートが似合うボーイッシュ。

性格は良いも悪くも現実的で合理主義者。空気を（あえて）読まない発言や相手が傷つく言葉も平気で言ってのけ、任務のためなら大量破壊兵器を使うことに躊躇しない。しかしそれは相手に現実を見させる意味があるとのこと。

女性にして隊長ということもあり、指揮能力が高く戦闘ユニットの操縦技術も非常に高い。

バイセクシャルであり、エミリアのことに好意を持っているが彼女はそんな趣味がなく、困惑させるが彼女の今部隊配属時の班長であり、その点に関しては尊敬の意を示している。

因みに彼女の種族は習性的に祖先から受け継いでいるモノもあり、その中の一つに……栄養源、摂取として『自分のう○こ』を食べる習性も引き継がれている。ということは彼女も……。

身長＝１６０ｃｍ
体重＝４２ｋｇ

・ムーリア・マルクケス

銀河連邦、ヴァルミリオン第２６特科攻撃中隊所属隊員であり、階級は曹長。
メレウルのパートナーである。

地球人と酷似した知的生命体『メイガス』であり、実はカーマインも同種族である。男性。年齢は２０歳。

性格は気弱で控え目。
いつも上司でかつパートナーであるメレウルから散々な事を言われるが、彼女からは彼に立派になって欲しい気持ちから現れる言葉である。
銀河連邦に入隊した理由は、親が勝手に勧めて気がついたら……というほど状況に流されやすいタイプ。

意外にも手先が器用で武器の扱いが上手く、彼女の機体の支援に一役買っている。
元々、戦闘が嫌で補給科に行きたかったのだがその能力を買われて実特科に入らされた過去を持つ（なので彼が部隊で補給支援機に乗るのはそのためである）。
身長＝１６９ｃｍ
体重＝５９ｋｇ

●登場メカニック●

・ユニット

アマリ―リスや銀河連邦などの先進組織が所有する機動ロボットの総称。

有人機は小型から大型、無人機は小型のみに分類される。

本作品は中型から大型しか出ていないが、小型は主に作業用や戦闘に関しては惑星内の地上用や空戦用に使用されるため、今回は使用されない。

使用される装甲材はそれぞれの勢力に異なり、アマリ―リス側はＮＰエネルギーを抽出するニュープラトンと高い柔軟性と光学攻撃を多少なら緩和する効果を持つ形状記憶金属『エボニクス』の複合材であり、防御力よりも各機体の合体変形を前提に使用。

銀河連邦ではニュープラトンと並大抵の攻撃を吸収する硬金属『メイガニウム』の複合材であり、防御面に秀でている。

エネルギー動力はアマリ―リス勢は全てＮＰエネルギー駆動であるが銀河連邦ではホルスのみ、一世代前のエネルギーであるプラズマ反応エネルギーを使用している。

ちなみに原子力エネルギーは第四世代エネルギー。扱いにくさもあり、両勢力ではあまり使用されなくなった。但しグラストラ核エネルギーだけは第五世代以上の産物である。（ガルタイトから抽出できる反重力エネルギーはプラズマ反応エネルギーと同じく第五世代に相当するが、銀河連邦ではこのエネルギーを使った技術が沢山あ

る。エミリアの専用武器テレサ、ユンクもガルタイトとメイガニウムの合金を使用している）。

一応、脱出装置がついているものの、使い勝手が非常に悪い。

●戦艦●

・ヴァールダイト級

銀河連邦のランクＡ級戦闘艦。全長はヴァルミリオンの半分ほどであり、こちらは大量に建造されている。

動力はＮＰエネルギー反応炉でバリアを展開できる。

武装は大型可粒子ビーム砲、光子ミサイル５０門がある。

・グラナティキ級

銀河連邦のランクＢ級戦闘艦。こちらも大量に建造されており、一世代前の主力艦。全長はヴァールダイトと大差ないが出力、エネルギー質量はやはり劣る。エネルギーの関係上、バリアを展開できない。動力はプラズマ反応エネルギー。武装は対艦プラズマビーム砲のみである

●各使用ユニット●

●アマリ―リス勢●

・スレイヴ

アマリーリスの人型宇宙戦闘用中型主力戦闘ユニット。

動力はＮＰ炉心。大量に量産され宇宙戦闘の際、戦闘員がこれに乗り込む。武装があまり少ないのはツェディックとの合体時にベースとなる前提であるため。

全長＝１５．３ｍ

重量＝２４．２ｔ

・武装

対中型ユニット戦用エネルギーソード兼２連装腕部レーザー砲

両手首に装備された武装。エネルギー供給は機体内のＮＰ炉心に依存するため、出力の上げ具合で威力が左右される。レーザー砲と一定距離に放射を維持し、刀身として斬撃もできる。

２連装エネルギー収束砲

両肩部に搭載された２連装のエネルギー砲。各砲身は角度を調整でき、スレイヴの武装の中で最も威力の高い武装である。

両腰部多連装ミサイルポッド（取り外してあり、作中はでてこない）

スレイヴ唯一の実弾兵器。銀河連邦製のクイストの武装と同程度。

・ツェディック

アマリ―リス製汎用戦闘機。光子ミサイル、大型ＮＰエネルギー砲が装備されていて射程距離、一撃の破壊力はスレイヴをも上回る。

しかし、その武装ゆえに後方支援攻撃向き。

スレイヴとの合体で真価を発揮する。

全長＝１５．６ｍ

重量＝３４．２ｔ

・武装

エネルギー機関砲

両主翼に搭載されたのエネルギーを弾丸として撃つ武装。ぶっちゃけ牽制用。

２連装光子ミサイル発射管

２分割された前部に搭載された武装。威力、範囲諸々非常に強力であるが、その膨張範囲によっては味方を巻き込むために使用勝手が良いとはいえない。

大出力ＮＰエネルギー収束砲

先ほどの二分割した胴体から放たれる強力なエネルギー砲。その威力はゼウシウスの装甲ですら一撃で貫けるほど。

・シルバリオン

スレイヴとツェディックが合体することで完成する、単機で戦況を覆す目的で開発された中型戦闘ユニット。両者の武装をそれぞれ引き継ぎ、さらにＮＰ炉心が二つになったことにより、桁外れの機動性と各武装の威力を持つ。

コックピットが複座式となり、スレイヴに乗っていた者が機体の全制御、ツェディックに乗っていた者が火器の制御を務めることになる。

それゆえ、各パイロットの技量で性能が左右されるため非常に癖のある機体である。

全長＝１５．２ｍ

重量＝５８．４ｍ

武装

（二機の武装全部）
炉心を二つ合わせたことにより、出力が数倍上がるようになった。

全砲門一斉発射

■銀河連邦勢■

・ホルス

銀河連邦の汎用戦闘機。プラズマ反応炉搭載により、爆発的な推進力を有する。ただしワープホールは形成出来ない。ＮＰエネルギーが抽出されてからは、すでに旧式の機体であるが、生産性が高く、性能的にもバランスがよいため今なおも使用され、グラナティキ級、ヴァールダイト級、ヴァルミリオン艦に配属されている。

全長＝１４．８ｍ
総重量＝１８ｔ

・武装

エネルギー機関砲２門

ツェディックの武装と同等だが、使用するエネルギーの関係上、こちらは威力がさらに下。

大口径プラズマ速射レーザー砲

胴体の底部に搭載された武装。出力の増減で高出力、連射に変えることができる。

・クイスト

連邦初のＮＰエネルギーを動力とした宇宙戦闘専用中型戦闘ユニット。性能はスレイヴと互角であり、各武装の威力は高いが突出した能力はない。

だが、様々なオプションや武装が換装でき、バリエーションが豊富である。

グラナティキ級、ヴァールダイト級及び、ヴァルミリオンに配備されている。

全長＝１５．１ｍ
重量＝２５．５ｔ

・武装

ＮＰレーザー機銃×１

連邦製ユニット唯一のエネルギー銃。こちらも威力は機体の炉心の出力で左右され、マガジン部分はエネルギー供給線で背中部まで繋がれている

腕部エネルギーソード×２

スレイヴと同等。

両腰部搭載多連装ミサイルポッド

両腰部に搭載された実弾兵器。

・クイスト（狙撃用）
・武装
大型スナイパーライフル
専用の狙撃武装。長射程、高出力により、敵の射程圏外から攻撃できる。

・クイスト（高機動型）
・武装
ＮＰレーザー機銃
腕部エネルギーソード×２

・クイスト（第２６実特科中隊仕様）
・武装
４５ｍｍソリッド・メイガニウムライフル
装甲として用いられる硬金属『メイガニウム』を弾丸として発射するライフル銃であり電磁加速機構。一点射撃、三点射撃、連射撃モードに変えることが出来る。
ドリルミサイル擲弾×１

メイガニウムライフルに取り付けられた擲弾頭。弾頭がドリル状で発射と同時に回転する。対象物に直撃するとドリルで内部に突入、停止してミサイルが起爆する仕組みとなっている。

メイガニウム・コンバットナイフ×１

第２６実特科仕様クイストの唯一の接近武装。そのまま使用、及びライフルのバレル先に取り付けることも可能。

・ゼウシウス

銀河連邦の大型宇宙戦闘用ユニット。銀河連邦が誇る火力と装甲に特化した機体。反面、機動力は非常に劣る。

グラナティキ級、ヴァールダイト級及び、ヴァルミリオンに配属されている。

全長＝３１．９ｍ
総重量＝１１０．５ｔ

・武装

両肩搭載長射程ＮＰエネルギー砲×２

スレイヴが装備している武装と同じだが、出力の関係でこちらの方が上である。
大型エネルギーソード兼腕部高出力レーザー砲×２

スレイヴと同様。威力がこちらが上。

両腰部搭載速射レーザー砲×２

両腰部の装備された２連装のレーザー砲。威力も高いが何より発射速度が高く、すぐに連射できる点で強力。

頭部搭載エネルギー機関砲４門

ツェディックやホルスと同様。砲門が４つに増えた以外は大して変わらない。

・イクスウェス

エミリア専用超機動型汎用戦闘機。ホルスをチェーンナップされたカスタム機。

ＮＰ炉心とプラズマ反応炉のツインハイブリッド駆動により、ホルスを遥かに上回る加速力、最大速度、推進力を誇り、その際機体のかかる衝撃を緩和するようにＮＰエネルギーによる力場を発生させることができ、さらにそれがバリアとしての役目を持つ。ワープホールの形成が可能。しかし半分のパワーでさえ、あまりにもＧがかかるためエミリア本人さえも最大まで上げたことは一度もない。

全長＝１５．５ｍ
総重量＝６４．８ｔ

・武装

２連装エネルギー機関砲

ツェディックとホルスと同様。

光子ミサイル発射管×１

こちらはツェディックと違い、一門しかないのが大きな違い。

大口径プラズマ収束レーザー砲×１

ホルスの武装と同じだがプラズマ増幅装置搭載により、威力は遥かにこちらが上である。突撃（理論上）

・アデリーン

サルビエス専用宇宙専用大型戦闘ユニットで第１７攻撃部隊長機。妖怪の九尾狐のようなフォルムを有する。同じ大型機であるゼウシウスとは違い、装甲を薄くしているために機動性に優れ、尚且つそれを補うためのＮＰエネルギーによるバリアも装備するため性能は非常に高い。
後腰部にある９つのしなやかな金属物質が武装であり、かつ弱点でもある。本来、連邦では優秀な隊員でなければ専用機など造られないのだが、彼の場合はコネで無理矢理造られせたようなものである。

アデリーンとはサルビエスの種族である『フォクシス』が古代より崇拝する守護神のことである。

全長＝３２．５ｍ
重量＝７８．２ｔ

・武装

高出力レーザー砲×９

九つの尾から展開する計９門のレーザー砲。

こちらは機体を撃ち抜く意味合いが強いため、出力次第で貫通も可能。

有線式レーザー砲×９

このレーザー砲はエネルギー供給線を伸ばすことにより、線の範囲内ならば多角方向のオールレンジ攻撃を行うことができ、多種多様の戦法ができる強力な武装。

ＮＰバリア発生装置

・エンリケ

コモドス専用宇宙戦専用中型戦闘ユニット。アデリーンを護衛に開発された兄弟機。フォルムはゴリラそのままであり、格闘戦用に特化し、拳はブースター推進で放てることでき、自動操縦で自分の所に戻ってくる仕様である。アデリーンと同じくＮＰバリアを装備し、ゼウシウスと同じ特殊装甲を使用しているため、強固な防御力を持つ。

本作品中、唯一ロケットパンチが放てる機体である。

全長＝１３．６ｍ

重量＝２５．８ｔ

・武装

射出式ナックル×２

ブースター推進で発射する拳。いわゆるロケットパンチ。威力は装甲を陥没させることが出来る程度。

ＮＰバリア発生装置

・エルファイスマーガリー

メレウル専用大型戦闘ユニット。

光学兵器や近接近武装を一切装備せず、なんと多種のミサイル兵器だけで固めた実特科部隊を象徴する機体。

それゆえ後方支援攻撃向きであるが、グラストラ核殲滅ミサイルを搭載しているため総合火力だけならゼウシウスどころか戦闘ユニット全般をも遥かに上回る。

しかしバリアは装備されておらず、耐久性もゼウシウス少し劣る。実弾ミサイルのみなので常に補給が必要。

戦闘ユニットと言うより、機動ミサイル砲台の意味合いが強い。

全長＝３０．２ｍ
重量＝１５８．６ｔ

・武装

牽制用小型ミサイル機関砲

頭部に搭載された連射タイプの小型ミサイル砲。爆発で弾幕を張ることができ、対人戦で有効。

２連装グラストラ核殲滅ミサイル発射管

両肩に装備された２体のグラストラ核弾頭ミサイルと発射管で地球と同じ、本物の戦略核弾頭ミサイルである。

本機及び、連邦勢ユニットの武装の中で最強の威力、爆発範囲を持つが、高密度の放射能、その性能ゆえ使用は限られる。

１４５ｍｍミサイル・アームガン×２

両手首部に搭載されたミサイル砲。ターゲットロックした対象物を追尾するホーミング機能付き。連射も可能で対戦闘ユニット戦用。

４連装大型ミサイル発射筒。

両腰部に搭載された大型のミサイル。
ゼウシウスですら一撃で沈めるほどの威力を持つ。無線誘導が可能。

全装甲内部搭載全方位小型ミサイル×２５０

本機の全装甲内に内蔵された大量の小型ミサイル。広範囲殲滅用だが、単発で放つことも可能。

・サーペイザー

ムーリア専用補給兼後方支援戦闘機。

ガルタイトから抽出される反重力エネルギーにより、惑星内ではホバリングなどの無音で超低空飛行が可能。

耐久性はホルスと同程度であるが武装が豊富。常に弾薬補給が必須であるエルファイスマーガリーの支援用として開発された兄弟機。
動力はホルスと同じプラズマ反応エネルギー。

全長＝１４．５ｍ

重量＝５８．２ｔ

・武装

エネルギー機関砲×２
ホルスが装備している物と同等。
２連装大型ミサイル

胴体の両側面に装備されたエルファイスマーガリーと同等の物。補給用だが攻撃も出来る。

小型ミサイル連射砲×１

胴体の底部に装備された連射タイプのミサイル砲。本機の主力武装である。

グラストラ核殲滅ミサイル×１

エルファイスマーガリーの補給用だが攻撃用としても使用可。

■各個人パーツ、武装■

・ログハート

サイサリスが開発したラクリーマの右手に装着する腕部強化パーツ。外見はまるで熊などの野獣のような巨大な金属の腕と鉤爪を有する。

試作品で元々ブラティストームを分離させた際、ラクリーマの戦力不足を補うために開発されたパーツでどちらかと言うと近接近戦を重点に置いているが、射撃武装も内蔵している。

その威力は銀河連邦の戦闘ユニットを一撃でぺちゃんこに潰し、さらに爪でいかなる装甲を引きさくほどの威力、怪力を持ち、ラクリーマの戦闘力も相まって宇宙間戦闘を生身で挑めるほどである。

ＮＰエネルギーを利用したスラスターと搭載し、幾科学的運動はもとい、慣性の法則を無視した移動も可能。

サイサリスが開発した新型ＮＰ炉心に組み込まれたシンクロシステムにより、ラクリーマの気力で出力を無限に引き出すことができる。

さらにリミッターを解除するとそのポテンシャルはランクＳ級宇宙艦の持つエネルギー質量に近づき、瞬間移動、Ｂ級戦闘艦をこれだ

けで撃沈可能等、まさに化け物となる。

しかし相当の重量があるのが欠点であり、それを高速で振り回すラクリーマの右手にかなりの負担がかかるため、使用は限られる。

対人、戦闘ユニットの、果てには戦艦級のあらゆる実弾兵器を防ぎ、さらにＡ級戦闘艦の主砲をも防ぐＮＰバリア発生装置も装備しているため、強固な防御力を持つ。

ジャマーを搭載し、このパーツから発せられるエネルギーのみならず、その周辺さえも感知されない機能も持つ。
サイサリスが開発した新型炉心に加え、ブラティストームの炉心を連結させることで、どれかの性能を上乗せすることが可能。

セルグラードとは兄弟機で使用するときもこのパーツが必要となる。
モデルイメージは同じく石川賢の作品、『虚無戦記』の虎空王編（５０００年の虎の加筆部分）の虎の義手の新バージョン。

◇内蔵武装一覧

・爪

ログハートの爪は特殊合金に加え、常にＮＰエネルギー膜に覆われており、強力な威力を発揮し、さらにこれがバリアとしての役目を持つ。　ドリルとして機能し、自律回路搭載により、射出した際単独での行動が可能となる。別名『ドリルビット』

・エネルギー衝撃波

ログハートに搭載されているシンクロシステムはラクリーマの気合いに出力が左右される仕様で、これが非常に高い場合、パンチ一撃で直線上ならば拡散するようにエネルギーを凝縮した波動を撃てるようになり、広範囲を一気に攻撃できる。

・光子ミサイル連射砲
サイサリスが装備したとっておき武装。
ブラティストームのレーザー砲と同じで手首部分から計４門の銃口を突出させ、ガトリングのように砲身を高速回転しながら光子ミサイルを高速連射するという大量破壊内蔵武器。
しかも追尾機能、弾数無制限という鬼畜っぷり。

モデルイメージはＮ６４用ゲームソフト『パーフェクトダーク』に登場するスケダーというエイリアンが使用する武器『リーパー』。

・エネルギー弾（仮称）
リミッター解除したログハート、ブラティストームのＮＰエネルギーを結集させて放つ技（？）。
ランクＢ級戦闘艦を一撃で消滅させるどころかその余波で周りの戦闘ユニット部隊をも巻き添え蒸発させる。

・ターゲット・マルチロック式瞬間送入レーザー砲
サイサリスの取っておきの内蔵武器その２。
彼女が遠隔操作で使用する。

ワープホールの原理を利用し、彼女のターゲットロックした対象物の内部から、直接レーザーをワープさせ撃ち込んで爆発させるという変態兵器。

相手からしたら攻撃が予想できないため、これほどの驚異はない。
しかし、試験的に取り入れた機構なので一発した使用できない。

・セルグラード
サイサリスが開発したログハートと同じく試作武装で、全長３６０ｃｍ、口径３００ｍｍを誇る巨大なラクリーマ専用超出力ＮＰエネルギー共鳴反応砲。

ブラティストームとログハートに搭載している各ＮＰ炉心と本体の増幅炉と平行連結することで初めて使用できる。

その威力はＡ級宇宙戦闘艦のエネルギーバリアを一切無視し、本艦を原子レベルまで分解させる程の絶大な威力を持ち、一撃でランクＳ級艦までも消滅可能である（観測されてないが最大瞬間出力はリバエス砲を上回った結果になった）が、ログハートと比べてまだ出力調整が行われていない試作段階なため、エネルギー充填に時間がかかり、さらに発射時には普通の人間なら体の全骨格がバラバラになるほどの超反動がかかるため、兄弟機のログハートよりも実用性に欠けている。

実際にその大きさからして、重量もとてつもなくあるため無重力である宇宙空間でしか扱えず、まさに生身で宇宙戦闘が行えるラクリーマの為の武装と言えるだろう。
ちなみに完成予定では、その威力で無尽蔵で且つ無反動、連射できるという破格な性能を持つ戦略兵器となりうるものであった。

・テレサ、ユンク
エミリア専用の対人レーザーガンで二挺ある。ガルタイトを素材として使用しているため、非常に軽い。

ＮＰエネルギーカートリッジを使用しているため、ほぼ無尽蔵で使用できる。二挺とも通常ショットの他に独特の機能を搭載し、テレサは威力は弱まるが弾丸を高速連射できる『バレッドモード』、ユ

ンクは時間がかかるが、エネルギーの出力を収束させて威力を倍増させる『チャージショット』がある。これらはエミリアの任意で変更可能である。
この二挺を直列に連結することにより、長い銃身へ変形し、長距離射撃を行えるようになる『スナイパーモード』へ移行する。
エミリアの射撃能力と相性が言いように開発させた兵器である。

・デストサイキック・システム

エクセレクターに搭載されている一種の同調システムで事実上、ユノンでしか使用することができない。

このシステムを発動すると身体が機械やチューブに取り込まれ、自分の意思通りにエクセレクターを操ることができる。簡単に言えば『名実ともにエクセレクターと一心同体化』することである。

これにより武装発射、バリア展開、行動など全て彼女の思考で発動するため細かな修正なしで正確に行え、合体変形、分離が単独で行えるようになる。さらにオペレーターも艦をことは全てユノンに委ねることができるため戦闘員を全力でサポートできるのが最大の利点である。

しかし逆に言えば艦への被弾は直接、彼女に痛みとして通じ、その被弾すればするほどユノンに伝わる負担も莫大となってしまう。
さらに少しでも精神が乱れると、完全に機械に取り込まれて抜け出すことができず、さらに精神崩壊を起こしてしまうという危険性を秘めている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5060r/

ドラえもん のび太の宇宙大決戦！！

2011年12月13日12時03分発行